神様の暇つぶし

けんしょ～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様の暇つぶし

【Ｎコード】
Ｎ０４４０Ｕ

【作者名】
けんしょ～

【あらすじ】
暇を持て余した神様が、ちょっと面白そうな死者達が異世界に飛ばされるのを止めないで自分に都合の良いように弄っちゃう御話。
見辛かったので章つけました。キャラ紹介はＳｉｄｅが分かり辛いときにどうぞ

キャラ紹介（前書き）

必要かと思って追加しました
基本的にＳｉｄｅのあるキャラだけにしてます

あと神様は除外

Ｓｉｄｅ名、キャラ名
となってます

キャラ紹介

女勇者編

女勇者、結城勇那（ゆうきゆうな）
黒髪黒目でロングヘアーを結っている
腹黒い面が有る。見た目美少女だが口調は男っぽい。とゆうか硬い。
猫が好き。クロはもっと好き。
腹黒系暗黒主人公

変態巫女、エルーダ・サモン・ラーク
髪は赤で目は金。髪は腰まであるのを結っている。
女勇者に惚れているレズであり、女勇者オンリーの痴女でもある。
しかし民からは慕われている。
女勇者を召喚した人

男勇者編

男勇者、正名勇人（ただしなゆうと）
短髪の金髪で金目
かなりの熱血直情型。しかし周りの人のせいで普段はツッコミに負われている。姫巫女曰く美系
勇者系正統派主人公

悪戯巫女改め姫巫女、フレイユ・ユビキタス
金髪碧眼のロングヘアー
サバサバした正確で悪戯が大好き。男勇者を弄る事が最近のマイブ

ーム
国の御姫様で神殿の巫女

女A編

女A、クリス・シュタイン
髪はライトグリーンのポニーテイルで目はスカイブルー
少々天然入っているが転生者の中では1番普通。純情な少年をからかって遊ぶのが楽しいもよう
悪戯系お姉さん主人公

純情少年、シオン・ビルラー
髪は深緑で目は青
エルフの少年で女性に対する免疫が無い。そのせいで女Aに弄られる毎日に。男なのにツンデレ
次期村長候補

女B編

女B、イトハ・ユリ
髪は深い赤、目は黄色のツインテール
ツンデレ美少女で女の子にモテモテ。ただし本人にその気は多分無い。無自覚に女の子を落とす
ツンデレ系ハーレム主人公

魔王、リリー・クロンキスト

銀髪ロングで赤茶の目をしている
子供特有の自分勝手さと、魔王としての威厳ある態度とゆう矛盾した面を併せ持つ。女Ｂを自分の嫁にしたい
あだ名の通り魔界を統べる魔王

男Ａ編

男Ａ、ジル
薄い紫髪に空色の目を持つ
運が悪く、間も悪い。死にそうになること多数。転生のときに見た目を１０歳の美少女みたいな美少年に変えられる
薄幸系のんびり主人公

神祖、ロザリー
黒髪、赤目のロング
実験大好きな魔法少女で少々天然。１人暮しで男Ａを家に住まわせる。結構寂しがり屋で一緒にいてくれる人を求めてる
忌み嫌われる神祖の１人

神様達は暇を解消したい（前書き）

初心者なので読み辛い文が多いと思います
あと不定期更新になりがちです

神様達は暇を解消したい

Ｓｉｄｅ：主神様

「暇だ～何か面白い事ないのかよ～」

「これなんてど～お？」

「…」

「イヤ俺お前と違ってオタクじゃねーし」

「んもう、わがままだな～。せっかく人が「？？おにいちゃん？あいしてる？？」を貸してあげるっていってるのに～」

「…」

「てかそのタイトルと表紙痛々し過ぎて見てらんねぇんだけど…。はぁ～暇だ～人間ども何かスッゲ～ことやらかしてくんねぇかな～」

「何おう！僕のミナたんを侮辱するのは例え主神様でもゆるさないぞ～」

「…」

「お前のミナたんとやらの話はしてねぇよ！暇だっつってんだ！」

「ああ、そうだっお？。でもどうしようも無いっしょ？僕らが暇ってことはどの世界も無茶な事はしてないってことだし」

「…」

「そうなんだけどさぁ～、こうも暇だとむしろ俺が問題起こしてやろうかって気に…」

「馬鹿なこと言ってないで大人しくしていてください、お父様」

「何だよフリッグ～、じゃあお前が何か面白い事見つけてきてくれよ～」

「イヤです。大人しくダルさんのゲームでも借りていれば良いじゃないですか。…主神オーディンともあろう神があれをやっているのを見たら軽蔑しますけど」

「ダメじゃん！娘に軽蔑されたら俺悲しくて死んじゃうよ！？そんな事に成るくらいならダルのゲーム全部けすわっ！！」

「ちょっ！僕のミナたんには指一本触れさせないよ！」
「うるさいですよ二人とも。どうやら地球で同じ時間に死者が出るようですがその者達の魂が他の世界に引っ張られているようです。お父様どういたしますか？」
「へぇ～異世界に飛ぶヤツなんて久しぶりだな～。どれどれ…あん？5人中1人だけそのままって、協調性って言葉を知らんのかねコイツは。…よ～し全員異世界に飛んでもらうとするかね」
「主神様いいの～？本当なら全員止めるとこっしょ？」
「はんっ！知るかよ。俺がルールだ」
「良いわけないでしょう！今すぐ止めっ…何でもう変更不可になってるんですかっ！お父…どちらに行かれるんですか！？」
「はっはっは～ぃ♪久々の人間だ～、どんなバカかこの目で拝んでやるぜ～」
「バカはあなたです！今すぐ止まりなさい！」
「……。こうして神様達の暇つぶしが始まったのだった。なんてね～、自演乙！」

神様達は暇を解消したい（後書き）

プロローグ長いです
気長にお待ちください

神様は女勇者に嫌われる（前書き）

大体毎話の文字数はこれくらいの予定です

神様は女勇者に嫌われる

Ｓｉｄｅ：女勇者

「ん…」

どこだここは？私はさっき死んだはずだ…これが死後の世界とゆうモノなのか？…何もないな。

「ほう、貴様が召喚される勇者か」

「誰だっ！」

目の前には白装束のダンブルドアみたいなコスプレ男がいた。

「…本当に誰だ？」

こいつ頭大丈夫だろうか？もしかしてダンブルドアじゃなくて神様のコスプレのつもりだろうか？だとしたら何て残念なセンスだろう。この度はお悔やみ申し…

「何処が残念なセンスだこらっ！」

？口に出していただろうか？

「そんなことよりさっきの言葉はどうゆう意味だ」

「はっ、口の訊き方のなってないヤツだ。いいぜ、教えてやるよ。お前は一度死んだんだ。そんでこれから違う世界に行く。それだけだ」

「本当に残念な頭の持ち主なんだな。一応の礼儀だ、全く分からない説明ありがとう。ところで私はそれからどうなるのかな？是非ご教授願いたいな」

「良い喋り方じゃないか。育ちが良いと見える。向こうに行っても同じ様な態度でいれば懇切丁寧に説明してくれるだろうよ」

「ほぅ、流石に目の付けどころがちがうな。ではその向こうとやらにはどうやって行けばいいのかな？」

「心配すんな、そこに突っ立ってりゃ俺が送ってやるよ。じゃ、俺を楽しませるために精々踊れ」

？足元に魔法陣？

そこで私、結城勇那（ゆうきゆうな）の意識は途切れた。

Ｓｉｄｅ：女神様

女勇者さんが転送されたのを見計らってようやくお父様に言いたいことが言えます。

「その変な恰好は何なの？」

私の気持ちをダルさんが代弁してくれた…気を効かせ過ぎなんですよ、私が聞くつもりだったのに…キモデブオタ以外に特筆すべき特徴が無い一神でしかないくせに。それは置いといて今問題なのはお父様の恰好。白髪ロングのカツラに長―い同色の付け髭。一昔前の神様ルックを再現したいのでしょうか？

「お父様、何故態々その様な恰好に成られたのですか？カツラや付け髭が丸判りで彼女からしたら気持ちの悪い毛むくじゃら以外の何物にも見えませんよ。気持ち悪い」

「ちょっフリッグそんなにお父さんを責めないで（泣）精神的ダメージでか過ぎるからっ！」

「それに何ですかあの態度は、タダ気持ち悪いだけですよ。最高神である自覚は持っているのですか、気持ち悪い。あのような状況の少女１人を何の準備もさせずに落とすなんて何を考えているのです、近年稀に見る外道ですね。見た目気持ちの悪い毛むくじゃらのくせに脳に蛆でも湧きましたか、気持ち悪い」

「……」

「フリッグたん…そろそろやめてあげないと主神様死んじゃうお？」

おや本当です。お父様の顔色が絶望一色に成ってしまいました。でわ、次の人間にはちゃんと対応してもらうとしましょう。

神様は女勇者に嫌われる（後書き）

フリッグのSキャラは書いてて難しいです…

神様は男勇者に戸惑う（前書き）

異世界に行くのは5人の予定です

神様は男勇者に戸惑う

Ｓｉｄｅ：男勇者

「…え？何ここ？えっ？えええっ！？」

何で俺は死んだと思ってたのに次に目が覚めたら雲の上みたいな所に突っ立っているんだ？わかんねぇよぉ～。誰か～いませんか～。

「うるせーな、こんくらいで一々騒ぐんじゃねぇよ」

「え？うわっ…あの～あなたは？」

金髪ロン毛白人のおにいさんって…ヨーロッパの人か？やけにテンション低いけど大丈夫かな。

「俺は神だ。お前は一度死んだが元の能力が高いんで他の世界で勇者をやってもらうことになったんだよ」

「勇者？って異世界に呼ばれてパーティー組んで世界征服狙う魔王を倒して来いとかのアレですか？」

「そうアレ。お前はある国の召喚魔法で召喚されて、国を守るために聖剣やら魔法やらを使って戦ってもらう。一般の魔法使いと比べれば比べるのも馬鹿らしい魔力量を持ってて、覚醒の湖で勇者特有のスキルと高い身体能力を得るから滅多な事ではかすり傷すら負わねぇ。んじゃ、頼んだぞ」

「ええっ！ちょっと待って…」

「困っているヤツらが大勢いるんだがな」

「えっ…？」

「その国は魔王以外にも問題山積みでよぉ、国民はスゲ～困ってるんだわ。俺が助けてやれりゃぁ良かったんだが俺の力じゃやり過ぎになっちまってかえって傷つけちまうんだ。だから死んじまった力の有るヤツに頼んでんだがなぁ、皆強欲でよぉ、えらいチートな能力を寄こさないなら行かねえって言うんだ。お前そんなヤツらどう思うよ？」

「そんなっ」

困ってる人がいるんだぞっ、それなのに…力が有るのに…人を、
「人を救える力が有るのに…やります！俺がその国を救ってきます！」
「良く言った。そんなお前には最高に相性の良い武器が手に入るようにしといてやるよ。存分に使ってこい！（え～と、何だろうこの熱血男は。人情に訴えかけてみるか～程度のつもりだったんだが…）」
「はい！絶対に誰もが笑える世界にして見せます」
「ふっ、じゃあな。もう会うことはねぇだろうが見守っててやるよ、正名勇人（ただしなゆうと）」
「えっ、俺自己紹…」
言い終わらない内に足元に魔法陣が現れて、俺の記憶はそこで途切れた。

Ｓｉｄｅ：オーディン
「何だったんだあいつは？」
「人間で言う熱血じゃないんですか。ダルさんなら的確な表現が出来そうですが」
「あ～、あれはもはや化石とまで言われる正統派熱血主人公だお。困っている人がいたら絶対助けようとするし、１対多数でも知り合いが絡まれてたら間に割って入るような天然希少動物とみた！」
あ～、そんな感じだったなぁ～。正直途中から付いていけなかったからテキトーなことしか言ってねぇや。それよりも…
「フリッグちゃ～ん。今回はお父さんちゃんと説明したよ～」
「近寄らないでください、虫湧きお父様。途中から説明放り出してテキトーこいてたくせに何血迷ったことを仰ってやがるんですか、気持ち悪い。残り３人もいるのに傷ついてる暇なんてありませんよ早く次の人間を呼んで下さい糞虫お父様」
「娘に暴言吐かれまくる父親乙！」
「うるせーよ！！」

フリッグ～…小さい時は「お父様のお嫁さんになるー」なんていってくれたのに（泣）あと3人頑張ろう…グズッ

神様は男勇者に戸惑う（後書き）

個人的に男勇者苦手です…

神様は女Aと語らう

Ｓｉｄｅ：女Ａ

……

どこだろうここ？

「お目覚めかい」

私より少し歳上で影の有るイケメン！…そうじゃなくてっ

「…どなたでしょうか？」

「簡単に言えば神様だ」

「……そうですか」

イケメンなのに残念、いやイケメンだから残念？どっちでも同じか。

「何かスゲー失礼な事考えてやがるな」

あれ？口に出しちゃってたか～。

「今も出してねぇよ。心を読めるだけだ」

「読めるって、テレパシーとか？」

「まぁその解釈で問題ねぇよ。さくっと現状だけ話すぞ。まずお前は死んだ。んで、消えてまた別の何かになる予定だったんだが異世界への勇者召喚の魔法に巻き込まれてその世界に行く事になっちまったんだよ。ああ、それから正規の召喚じゃなくて巻き込まれてるだけだから見た目が向こうの世界用に最適化されちまうがこれは大した問題じゃねぇか」

「いやいやいや、メッチャ大した問題でしょ！まず異世界って、何の冗談？それに最適化って、そんなのが必要な世界なの？」

「あ～、簡単に言やぁ剣と魔法のファンタジーな世界だよ。お前はまぁ～、エルフか何かに成るんじゃねぇの？多分。あぁ、歳も変わるみてぇだな。これは…１８くらいか」

「エルフって…てか歳変わるの！？てか若返ってる♪学生時代思い出しちゃう♪」

「最初の敬語は何だったんだよ…しっかしお前が行く所は学校なん

てありゃしねぇぞ」
「え……ふっふっふ、無いなら作ればいいのよ！」
「作る側ならお前は教師確定だと思うけどなぁ」
「…っ、そんな、ここまで来てそんな初歩的なトラップに掛かるなんて…」
「最初からトラップなんざねぇだろうが。もう面倒だから送っちまうぞ？んじゃ精々面白くして来いよ」
あ…なんか変な模様が足元に…

Ｓｉｄｅ：１神様
「何か吹っ飛んだ頭の持ち主だったお」
「あ～頭痛ぇ。何か変なのばっかり死んだんだな」
それにしてもアグレッシブな人間だったお。地球にはあんな人間ばっかりなんかね？はぁ～、ミナたん、やっぱり君が一番だよ～。
「顔が気持ち悪いですよキモデブオタのダルさん。さっきの女性にそんなに興奮したのですか、おぞましい」
「美少女になじられるのも悪くない～。フリッグたん今のもう一度お願い～」
「……」
「あぁ！そんなに軽蔑した目で見ないよ。興奮しちゃうでしょっ！」
「ダル…変態と言うより性犯罪者にしか見えねぇからそろそろ止めろ」
「それより、お父様。先ほどの女性に御自分の記憶の事を話しておりませんでしたが」
「…あ」
「主神様それはいくらなんでも最悪だお～。流石にフォローが必要と思われ」
「はぁ～、どうせそんなことだろうと思ってましたよ。お父様の事ですし、たいしてまともな説明も出来ないだろうと思っていましたよ、えぇ。…役立たず。仕方ありません、何らかのフォロー位して

くださいね、能無しお父様」
「ガッ……」
あぁ、主神様が死んだ。まっ、そのうち復活するっしょ。それにしてもやっと残り2人だお。主神様頑張れ～。

神様は女Aと語らう（後書き）

この人が5人の中じゃ1番普通かも

神様は女Bにキレられる

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「ん…どこよココ」

「ん～、やっと起きたか。待ちくたびれたぜ」

「はぁ、アンタ誰よ」

何だこの死にかけのロンゲは。髪で首でも吊ってなさいよ。

「いきなり死ってどんな思考回路してんだよてめぇは」

「っ…何アンタ、何で私の考えてる事がわかったの」

「そりゃ俺が神様で人間の考えが読めるからだ」

「はぁ！何人の頭ん中勝手に見てんのよ！信じらんない！このクソジジイ」

「たかがこれくらいの事でピーピー五月蝿せぇガキだな！そんなことよりも自分のてめぇの名前覚えてるか？」

「何偉そうに…え？私の名前…何だったっけ？えっ、でもどんな生活してかはわかる…何よこれ」

「やっぱりか。喜べクソガキ、てめぇは勇者召喚の魔法に巻き込まれて世界から存在を削られたんだよ。これから違う人間として別の世界で新しい人生歩んで来い」

「はぁ、巻き込まれた？てか削られたってどうゆうことよ！」

「そのまんまだよ。勇者として召喚されたやつは葬式されてるが、てめぇは存在してねぇ。つまり死体もねぇし誰もてめぇの事を知らねぇんだ。簡単に言やぁ存在しなかったって事になんのさ」

「はぁ！何よそれ！ふざけんじゃないわよ！」

「ふざけて何かいねぇよ。それにお前は向こうの世界で見た目が…なんだよ髪と目の色が変わるだけかよ。つまんねぇ」

「何ゴチャゴチャ１人で…」

「じゃ、自分の名前は適当に考えろよ～。なるべくカタカナな名前がお勧めだぜ～」

「ちょっ、だから勝手に…」
って何この魔法陣みたいなの動けなっ…

Ｓｉｄｅ：女神様
「お父様、死んでください」
「ぐはっ！フリッグ急に後ろから蹴るのは…」
「何か言いたい事が御有りですか、外道糞虫お父様。あぁ、そうですか糞虫さんに失礼だからもっと格の低いモノにしてくれと。ですが生憎私はこれ以上低いモノが思いつかないですし…そうですねお父様が御自分で糞虫以下の何かを私に教えて頂ければ問題ないかと」
「糞虫に失礼だなんて1言も言ってねぇよ！てか最近俺に対する風当たり強過ぎない！？」
ギャーギャー五月蝿いお父様ですね。死ねばいいのに。まぁ必要最低限の説明は…
「ちょっ、フリッグ無視は止めて！マジで悲しいから！」
「娘に縋る父親乙！」
「うるせぇよ！」
はぁ～、最後の1人ですね。最悪私が説明しましょう。

神様は男Ａを憐れむ（前書き）

基本的にコイツは少し長いです

神様は男Aを憐れむ

Ｓｉｄｅ：男Ａ

ん…どこだここ。さっきトラックに撥ねられたからお花畑か三途の川に来てるはずなんだが…雲の上か？……寝よう。

「起きて早々寝ないで下さい。現状の説明をさせて頂きます」

「いきなりですね、ふぁ～あ」

本当にいきなり横から声をかけられた。腰まである綺麗な金髪に有り得ないほど整った顔立ちの女性…天使か女神とでも言いたいのだろうか？…眠い。

「その通りです。私は女神フリッグと申します、以後会うことは無いと思われますがよろしくお願いいたします。さて本題です、本来ならこれからの説明は主神様が行うのですが諸事情有りまして私が代理で御説明いたします」

「あぁ、はい、わかりました」

心を読まれた？ファンタジーな匂いがするなぁ。てか欠伸は無視か。しかし、よくわからんが三途の川ではなく閻魔様の謁見上みたいな所にきたのだろうか？まぁ、説明の中に出てこなかったら聞こう。そういえば北欧神話かなんかでフリッグって女神がいた気がするけど…確認できないしイイや。

「懸命な方ですね。先に言っておきますがここは神々が住む神界です。では本題の御説明をいたします。まず貴方は御自分の世界で先程死亡しました。

ですが時同じくして死んだ方々の中に勇者召喚で異世界に渡る方々が２名いらっしゃいました。またその魔法に巻き込まれて他にも２名、合計４名の死者が異世界に渡る事に成りました。貴方は同じ時刻でしたが魔法に巻き込まれる事無く消えて次の何かに成る予定だったのですが…」

言い辛そうな顔をして言葉を選んでる？もしかして…

「何かの手違いで俺も巻き込まれたと？」
「いえ、正確には主神様が1人だけ巻き込まれないのが気に入らないと…」
「…。凄い性格なんですね主神様って」
「申し訳ありません。それから御自分の名前等は覚えていらっしゃいますか？」
……あれ？これは…名前が、てか今までの記憶が…何か靄掛かってる？こうゆう事あったかな？くらいにしか思い出せない…自分の名前もだけど知り合い全員がそうって。
「自分の所か、友達の名前も顔も曖昧で思い出せないんですが…」
「やはりそうですか。今回巻き込まれた貴方を含める3名の方は世界から削り取られ、最初から存在しなかった者と成っています。なので何か心残りがあったとしてもそれは最初から他の誰かが行った事になって、同じ結果に成りますので気にする必要は無いかと」
「それは助かります。学校のグループ課題とかどうしようって感じでしたし」
まぁ、漠然と世界が嫌いで息苦しかったってのもあるけど。あっ、友達と遊ぶのは楽しかったよ？それすら嫌いなんて馬鹿げたことは思わん。
「そうですか。あとお忘れですか？私は貴方の心が読めるのですよ？」
「あぁ～、知られても何か有る訳では無いし別にイイかな、と」
「そうですか…そうですね。では最後にあちらの世界に渡る時…」
「イヤです」
「知りません。あちらの世界に渡る時貴方の体は…」
「異世界なんて行きたくありません」
「駄目です。貴方の体はその世界に…」
「向こうに着いて早々自殺します」
「…それはいささか問題ですね」
おっと、何かノルマでもあるんだろうか？

「いえ、些細な事なのですが…」
「話しちゃいましょうよ。どうせ代理で話してるんですし」
「はぁ～、甘い誘惑をちらつかせるのが得意なんですね。貴方が向こうに着いて直ぐだと、まだ貴方の周りに異世界に渡る魔法が残っていてここに戻ってきてしまうんですよ。それは個人的に2度手間で避けたいんです」
何か不当な評価を受けたような…そんなことより。
「じゃあ、さくっと俺を死後の処理して、異世界に行くのは他の4人だけにしちゃいましょうよ」
「出来ればこんな苦労はしていないのですが…そうですね、こうなったら貴方が中々死ねない様に少々頑丈に作り変えましょう」
「……は？」
「私の力では異世界に渡るのを止められませんから。それにこの私に脅しを掛けた報いも受けて貰いましょう」
「何ウットリした顔で恐ろしい事言ってんですか！」
何やる気だ…報いって何だ？
「そうですね。貴方の生前を見て決めましょうか。…う～ん、根本的に運の無い方なんですね、しかも20歳と夢の有る御歳で…御愁傷様です」
「一番最初に言うべき台詞ですよねっ！」
「はいっ、決まりました。ふふふ、これならちゃんとした罰に成りますね。では先程の説明の続きを。向こうの世界に渡る時貴方の体はその世界に合わせて最適化されて見た目も変わります。ですが今回は私が貴方の見た目を予め決めておきましたし先程御話しした様に少々貴方の体を頑丈に改造致しましたので自殺はほぼ不可能とお考え下さい。向こうに着いたら鏡を見ることをお勧めいたします」
「ちょっ、あんた幾ら女神だからって…」
「では、逝ってらっしゃいませ」
「何かニュアンスが違う…！って何だこの魔法じ…」

Ｓｉｄｅ：オーディン

男Ａ…何て無謀な事を…フリッグにまともな交渉しようとしても意味無いんだよな～。言葉使いが丁寧っぽいから勘違いしがちだが、全部力技で解決（終了）しちまうし。

「主神様、男Ａなんだけどね、かなり面白い事に成りそうだお」

ダルが向こうの様子を見ながらニタニタしてる…正直キメェ。

「神様同氏は心が読めないけどそんな表情してたら考えてる事丸判りだお～」

「判るように表情に出してんだよ」

「御２人とも、顔が気持ち悪いです」

「グハッ」

「ハ～ハ～」

どっちがどの反応か判るはずだ。しっかし、

「フリッグ、あいつどうだった？」

「戦いは口でするタイプですね。まぁ運が無いので最終的には力技に成る事も多い様ですが」

「同じ男でも勇者とは全く別物みたいだね～」

「そうじゃねぇよ。あそこまで手を出して、まして勝手に改造しちまって。そんなに気に入ったのか、くっくっく」

「まさか。何度もここに来られるのは面倒だっただけですよ。しかし、ただせさえ気持ち悪い顔が醜悪な笑い声を上げているのは想像以上に耳が腐りそうですね。何の表情も作らないマネキンにでも成って頂けませんか、ブサイクお父様。あぁブサイクならマネキン化することで少しは見られる御顔に成れるかもしれなせんよ？」

ガハッ…我が娘ながら言葉のナイフが鋭すぎる。てか完全に墓穴だ。こうなる事は判っていたのに…。男Ａは前情報無しっだったのか～…頑張ったな。

「でも主神様。これで５人全員が渡ったけど大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ、ダルさん。３人共それなりに人里近くに到着しますし、勇者の御２人は城の中ですから、どちらも魔獣に襲われる可

能性は低いかと」
「イヤそうでなくて。女Ａ（２５歳ＯＬ）はエルフの隠れ里だし、女Ｂ（１５歳高校生）は魔王と先代魔王の喧嘩のど真ん中だし、男Ａ（２０歳理工系大学生）にいたっては神祖の実験室みたいなんだけど？」
「……あれ？」
「…お父様」
「はいっ！」
フリッグから途方も無い殺気が…
「…御説明を」
「説明も何も今ダルだ言った通りです！」
娘相手に敬語とは…俺も落ちたモノだな、ふぅ。
「哀愁漂わせてハードボイルド気取らないで下さい、気持ち悪い。お父様にハーフボイルドが御似合いですよ、ヘタレ便所虫」
もはや何時もの罵倒に「お父様」すらなくなったか。ヤバいな。
「では説明して貰いますよこの馬鹿げた転送先の事を」
ヒ～、殺気が…ヤバい…。

Ｓｉｄｅ：ダル
とりあえず向こうの２人は放っておいて落ちて行った５人を観察してみますか～。

神様は男Aを憐れむ（後書き）

ようやくプロローグ終わり
5人分は長い…

読み辛いようなら改行とかで工夫してみます

女勇者は変態により覚醒する（前書き）

サブタイトルは各キャラのあだ名です

女勇者は変態により覚醒する

Ｓｉｄｅ：女勇者

「…し…もし、もしもし？」

「ん…」

誰だ、私の安眠を妨害するのは…

「誰だ…？」

かなり不機嫌な声になってしまったがしょうがない。人の眠りを妨げるヤツが悪い。

「すっ、すみません！しかしそろそろ起きて頂きたいのですが…」

面倒な。だいたい私が眠っていてなんの不都合があると言うのだ。

しかし泣きそうな声で言われてはしかたない。そろそろ起きるか。

「まったく。で、あなたは誰だ」

「あっ、はい。私はアダトリノ王国の神殿に務める召喚の巫女、名をエルーダ・サモン・ラークと申しま…」

「長いから巫女、もしくはエルで」

「…はい、グズッ。貴女様には我が国を救って頂きたく魂だけをこの世界に召喚し、その過程で魂に宿る記憶を元に肉体を再現させていただきました。…ヒック」

泣いちゃった。弱いなこの巫女、大丈夫なのか？しかしこの魔法死んだ人を蘇らせてるな…何か気に入らない。

「グズッ、我が国は魔王により凶暴化した魔獣の脅威に…ヒック、曝されており勇者様にはどうにか現状を打破して頂きたいのです…。ここまでで何かご不明な点はございまか？」

「そうだな…この魔法は死んだ人間を蘇生させる魔法なのか？」

しかしグズグズと鬱陶しい巫女だ。その長い赤髪引っ張るぞ。しかし目の色紫って…凄い色だな。

「いえ、この魔法は異世界の強い力に耐えられる魂の持主が自分の体を記憶通りに復元しようとするのを手助けしているだけで、蘇生

ではありません。極端な言い方をすれば転生の1種に分類されています。ですので元の体と多少違う部分が見受けられると前の勇者様達は話していたそうです」

「人事のように話すんだな…」

「ヒッ…何分、前に…召喚魔法、が使用された、のは…１５０年も、前でして」

怯えてしまって何を言ってるのか聞き取り辛い。はぁ～仕方ない。

「そんなに怯えられると傷つくんだが…質問は止めよう。私はこれからどうすればいいかだけ教えてくれ」

私に出来る限り最高の優しげな笑顔を作ってみた。これなら多少は…

ボンッ

え、何だ今の音は…巫女の顔が真っ赤だ。私にレズの気は無いぞ。まぁ人間嫌いだから男も嫌いだが。

「…素敵…っ…はい！これから勇者様には覚醒の泉にて御自身の能力を覚醒して頂きます！それが終わった後、国王と謁見していただきます！」

顔が赤いまま早口でこの後の予定を捲し立ててきたな。

「では覚醒の泉とやらに連れて行ってくれないか？」

「わかりました、では此方へ」

部屋の隅にある扉に案内された。ついでだが部屋を囲むようにして此方を窺っていた偉そうなジジイ共は一緒に部屋に移動しようとして巫女やメイド達に睨まれて慌てた様に下がっていった。…何だ？

「これが覚醒の泉になります。御召し物を脱いで泉の中央まで進んでください。あっ御召し物はこちらで御預かりします！」

どうしようか。かなり鼻息荒くしている…。泉と呼ばれるくらいだから水なのだ。だから服を着ているのはマズい。しかしこの巫女に服を預けるのはもっとマズそうだ…メイドに預けよう。記憶の名残なのかは知らないが私は死んだ時と同様に制服（Ｖｅｒ．夏）姿だった。

「ん、わかった」

女しかいないのだから躊躇なく服を脱ぎ…今か今かと私を凝視している巫女を無視してその隣にいたメイドに服を預けた。
「シクシクシクシク……」
巫女が五月蝿い。
「それで、この水の中に入ればいいんだな？」
「シクシク…っ、はい！あぁ、そうです。泉の中心まで行ってください」
メイドに耳打ちされるまで意識飛んでたな…しかも今は私の事凝視しているし…。巫女じゃなくて変態の間違いだな。
そんなことを考えながらひんやりとした水の中心に着いた。
「では、これより勇者覚醒の儀を始めます。勇者様、体を楽にして心を無にしてください」
……
「始めます」
……
「終わりました。勇者様、お疲れ様でした」
時間にして1分程だったと思う。水が光り、その光が全て私の中に入ってくるように消え水が元の色に戻るまでが儀式だったようだ。
「フフフ…では、体を拭いて御召し物を着たら王の謁見上にまいりましょう…ハァ～ハァ～」
ゴンッ
タオル越しに指をワキワキさせている変態を排除してタオルを奪い服をメイドから受け取った。メイドが着替えるのを手伝おうとしてきたが鬱陶しいし逆に着ずらいだろうと思い手で要らんと合図して下がらせた。
さて。神とやらの話では私は踊る事に成るかもしれない…気を引き締めて王とやらを見てやろうか。
ムギュ～…
ん？何か踏んだか？

Ｓｉｄｅ：巫女…改め変態巫女

あっ…そんな…あんな綺麗な御身足で踏ん…あぁ～…

おっと完全に意識が無くなっていました。何て罪作りな勇・者・様？

それにしても凛々しい御姿です…はぁ～…あの長い黒髪、切れ長で輝くような黒い目…どれを取っても完璧の一言に尽きます。そして何よりあの慈愛に満ちた微笑…ふふふ…まさに理想の私の勇者さ…

ゴンッ

Ｓｉｄｅ：女勇者

とりあえず覚醒したらしいが何が変わったのかわからない。聞こうにも肝心の変態は今の一撃で気絶した。起きるまでここで色々試してみるか。

男勇者は王道を…（前書き）

男勇者は熱血系ですが、周りがそれを許しません！
作者も許しません

男勇者は王道を…

Ｓｉｄｅ：男勇者

「ぷはぁっ！ゴホッゴホッ！」

うえっ、苦しっ。何でいきなり水の中何かに…てか制服って水の中じゃ動き辛い…

「大丈夫ですか？」

えっと、金髪碧眼ってマジでいるんだ…ってそんな場合じゃないだろ俺！

「えぇ、いきなり水の中だったんでびっくりしただけです」

俺を上から覗き込むようにして声を掛けてきた同い年くらいの少女があからさまにほっとしている。髪長いなぁ。腰より少し下くらいまであるぞ。

「そうですか、それは良かった。では泉から上がって頂けますか？」

そう言って彼女は手を伸ばしてきた。ありがとさん。

「どーも」

「いえ。では少々御説明したいことがあるのですがよろしいですか？」

「あ～、その前にその硬い口調どうにかならないかな…堅苦しくって緊張しちゃうんだ」

「そうですか？では出来るだけ軽く…じゃあ説明がありまぁす、聞く準備はイイですかぁ？」

すげぇ…確かにフランクな口調だけど歯が浮いたような舌っ足らずな話し方だ。…さっきと１８０度違うな。

「とりあえず水を拭き取りたいんだけど、タオルか何かないかな？あと出来れば服乾かしたい…」

ちょっと注文多すぎたかな？しかしこれでは風邪を…う～む…悩む。

「あぁ、そうですねぇ。でわでわぁ…メイドさぁん、タオルと御召し物おねがいしまぁす」

「かしこまりました」
「うわっ！」
えぇ！さっきまで俺の後ろ誰も…てかこの部屋に俺とこの子以外誰もいなかったぞ！どっから入ってきて…扉あるけどこの子挟んで俺の前に１つあるだけだぞ！本当にどうやって現れたんだ。
「こちらがタオルと御召し物になります」
なんか無表情…いや無機質？でも感情がないわけじゃなさそう…ちぐはぐな印象を抱く人だな。
「あっ、どーも。…えっと、着替えたいんですけど」
「御気になさらず」
「気にしないで～」
「いや、気にするから！せめてこっち見ないでください」
興味津々でこっち見るな！向こう向いて貰ってサクッと終わらせる。
「残念です」
「つまんなぁいの～」
こっちはつまんないじゃなく辛いだよ！椅子座って足プラプラさせやがって…長袖短丈のワンピースみたいな服でそんなに足フラフラ…って寝転んでバタバタさせんな！
「巫女様、はしたないですよ。そんな風にしていては勇者様に襲われてしまいますよ？」
「襲わねえよ！」
「や～ん、勇者様のスケベ～」
「何このアウェー感！勇者ってこんな扱いなの！？」
「いえ、あまりにもふざけ甲斐があったので、つい」
「勇者様面白～い」
「酷え…あ～、メイドさん。この子って何歳なんです…」
「巫女様は先日２０歳に成られましたね」
「なったね～」
「二十歳でこれなのかよ！」
てか３つも上なのか…こんな年上嫌だな…。

「いや、普段はこんな口調だよ」
「がらっと変わった！さっきまでの舌っ足らずな声も作ってたのかよ！」
何か取っつきやすいお姉さんみたいな声だ。
「うん？あ～、ま～そうだよ。こっちが普通の口調。それにしても勇者様の必死の突っ込みは面白かったよ？再現してみたいな…や～ん、勇者様のケダモノ～」
「変化つけやがった！巫女と言うより悪魔だな！てゆうか…」
「？どうしたのですか勇者様」
「勇者様ぁ、どうしたのぉ？」
まだ続ける気か…いや、今はそれよりさっきから視界の上にちらつく…
「何か俺の髪が金髪に成ってるんだが…生まれてからこれまで染めた事なんてないんだけど」
「それは魔力の色ですね。髪や目は魔力に影響を受けてその色が決まりますから」
「勇者様は光と相性が良いんだね。勇者の典型だ。ちなみに目も金だから本当に光に特化しているんだよ。泉に召喚された直後は確か黒だったし。覚醒の泉で魔力に目覚めた結果かな」
あ～、そうなんだ～。神様と話してなかったら何のドッキリかと勘違いしてパニックに成ってたろうな…危ねぇ～。てか泉の中に直接召喚されたってことか？
「魔力ねぇ～。それで俺はこれからどうなるんだ？」
「とりあえず我がユビキタス公国の公に会うことになってるよ。ついてきて」
そう言って歩き出した巫女…悪戯巫女？…に「あ、自己紹介どっちもしてねえ」とか考えながらついて行った。

Ｓｉｄｅ：巫女…改め悪戯巫女
想像以上に凄い魔力だね。こりゃ昔の人たちが勇者に頼る訳だ。そ

れにしても整った顔してるね。女相手なら魔力よりもこっちのが効くんじゃないか？

なんにしても、あのメイドさんに気に入られたんだから城内で敵はいなくなるだろうね…。敵対するだろうヤツらが可哀相に思えるよ。

まぁ、楽しくなるのは決まったようなモノだけど……ふふふ♪

女Aはエルフ？になった？（前書き）

ちょっとバカな子に見えます…

女Aはエルフ？になった？

Ｓｉｄｅ：女Ａ

……あれ？さっきまで神様？と話してたのに、いったいここは…ジャングル？えぇっ！酷いや神様！こんな所に女の子（２５さ…１８歳でしたね）１人放りだすなんて！あんたなんて神じゃなくて悪魔だ、鬼畜だ～！うえ～ん！

ガサガサ

「ヒッ！」

何かな？うさぎさんかな？たぬきさんかな？くまさんは勘弁してっ！死んだ振りなんてしたって玩具みたいにゴロゴロされたら結局死んじゃうよ！走って逃げようにもスーツにヒールって死んだ時の恰好そのままじゃん！神様手ぇ抜き過ぎだよっ！

「誰だ、お前！」

えっ！ナイフ！？何で、どうして、誰か助けてよ～…

「え～と、私、私…」

…私名前何だっけ…やばい、どうしよう…どうし…

「わっぷ」

顔に何か張り付いた～…何なのよ～。

「何だその紙は、何か書いてあるな。読めるなら読め」

はいはいわかりましたよ～。でもそろそろ手下ろしたかったからちょうどイイ。ナイフ怖くてずっとバンザイしてたのよねぇ～。え～と、何何、「お前名前とかの記憶ないから神様たる俺が直々に付けてやったぞ。喜べ、今日からお前はエレガント・シュピーゲルと…」

グシャッ

「私の名前は…クリス、クリス・シュタインよっ！」

「えっ、あぁ、そうか……ここで何している」

「知らないわよ！何もわからないで急にこんなジャングルみたいなトコにいつの間にかいたんだから！むしろ私が聞きたいくらいよぉ

！何なのよぉ！もぉやだよぉ！お家に帰りたいよぉ～…」
何か悲しくなってきた……何てね！この男の子は女の涙に弱い！何故か私にはその確信がある！理由？何それ美味しいの？しっかしこの男の子…耳がちょっと尖ってる？髪も深緑なんて変な色だし。…泣き真似しながら自分の耳触ってみたら同じ様に尖ってる…結構長い髪は光るような緑…私も大差ないじゃん。神様が言ってたのはコレのことか～。
「は～、わかったからもう泣くな。同族みたいだし村に入れないか聞いてみてやるから、な？」
「ナイフ向けない？」
ちょっとブリっ娘過ぎたかな？
「あ、あぁしまっとくよ。多分村に入るのも平気だろ。でもお前本当にどっから来たんだ？」
あ、効いてる。もしかして私って美少女？鏡ないかな？それにしても単純だなぁ。女の子と話す事自体少なかったのかな？
「わかんないよ、何にも」
「記憶が無いのか？ならジジイ達も追い出したりしないだろ。んじゃ、こっちだ。ついて来い」
「…うん♪」
どうだ！タイミング測っての必殺スマイル！ふふふ…赤くなってる赤くなってる。いや～初々しいわねぇ～。…ちょっとオバサンっぽかったかな…。反省。

Ｓｉｄｅ：エルフの少年改め純情少年
はぁ～、何か変なの拾っちまったな。それにあの黒い服は偉そうな人間がよく着てる服だよな？でも見捨てるわけにもいかないよなぁ、記憶も無いみたいだし。てか俺と同じくらいのエルフ…エルフか？まぁいいや…初めて見たな。里にはどんなに近くても６歳は離れてるし…。遊び相手少なくてよく森に入ったからなぁ。でも大人でも来ないようなこんな奥にどうしてコイツは…。まぁ記憶ないならし

ょうがないよな！そのうち思い出すかもしんねえし。しっかしコイツの髪綺麗な…何考えてんだ俺！今は村でジジイ達を説得することを考える時だ！しっかりついて来てるよな！うし！……大人でも辛いこの道を歩き辛そうな靴で普通に歩いてる？…気にしない様にしよう…。

Ｓｉｄｅ：エルフ？

ん？こっち向いて直ぐ逸らされた。感じ悪いな～、言いたい事あるなら言ってくれた方が楽なのに。…それにしても酷い道だな～。…あれ？ヒールで全然歩けてる？これも最適化ってヤツかな？

女Aはエルフ？になった？（後書き）

短かったらもうちょい文量増やしてみます

女Bは魔王に惚れられる

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

ドッゴーン！！！

「えぇっ！ちょっと何よ！何なのよ！」

あの自称神様が出したっぽい変な魔法陣みたいなのに捕まったと思ったら今度は目の前で爆発って…ついて行けないわ…。

「ちっ、邪魔じゃ！」

「なっ、そんな所で何をやっておるんじゃ！？」

何か向かい合ってたちっちゃい銀髪ロングの女の子とヨボヨボの白髪白髭の御爺さんに怒鳴られた。私がアンタ達に言いたいわよ…

「リリーよ、こうなってはこの場は預けるぞ」

「なっ、逃げるのかジジイ！」

「部外者が居なければ幾らでも相手してやるわい。ではな」

……足元に沈んだ？何それ…

「おい！そこのお前！」

？女の子が偉そうに声を掛けてきた。何よ～、説明でもしてくれるっての～。

「いったいお前は何なのじゃ！お前さえいなければ今日こそあのジジイを殺せたとゆうのに！」

「知らないわよそんなの！だいたい私だっていつの間にかこんな所にいて…こっちが聞きたいくらいよ！」

何かイライラしてきたわ。私って昔から沸点低いってどの先生にも言われるのよね。

「何じゃと、図が高いぞ！わらわは魔王リリー・クロンキストじゃぞ！」

「知るか！アンタが誰だろうがこっちはどうだっていいのよ！」

「なっ、何たる暴言！魔王たるわらわにそのような態度とは…たかが人間のくせに！」

「はんっ！人間舐めんな、チビッ子が！だいたい幾ら凄んだ所でその歳で凄味が出る訳ないでしょうが！２０年後に出直してきなさい！しかも魔王を名乗ってるくせにヨボヨボの御爺さんに噛み付くなんて恥ずかしいと思わないわけ？魔王名乗るならそれなりの器に成ってからにしなさい！」

ん？何も言い返してこないわね。しかしお子ちゃま相手に大人げ無いのは私も同じね。せめて年下相手にこんなに速くキレるのは止めなきゃね。

「……グズッ、ヒック…」

って泣いてる？え、あれ…言い過ぎたかしら…いやでも幾ら子供でも弱過ぎるような…

「わらわだって、もっと…りっ、立派な誰もが…グズッ、恐怖、するようなっ、魔王になりっ、たくって…だっから、せんっ、だいの…魔王たる…ヒック、ジジイにっ…うわ～～～ん！わらわだってぇ、わらわだってぇ！！」

あちゃ～…やり過ぎたみたいね。何かトラウマに触れちゃったみたいだし……あぁ～もうっしょうがないわねっ！

ぼふっ

「うっぷ、何じゃ！？離すのじゃっ！」

「五月蝿い。泣き止むまでこのままよ。収まるまでまでこうしときなさい」

「何をっ、偉そうにっ」

「いいから泣くだけ泣いときなさい。それまで待つから」

「っ！」

その後、かなり長い時間この子は私に抱きしめられたまま泣いていた。制服グチャグチャになっちゃったな…

「やっと落ち着いた？」

「うむ…見苦しい所を見せたのじゃ」

「いいわよ、泣く原因は私が作ったみたいだったし」

流石に今回の私の行動はないわ～。反省しておかないとね…。しっかしこの子かなりの美少女ね～。ロリコンに狙われない様に注意しておこうかしら。

「え～と、その、何だ…お主、名前は？」

「あ～、私自分の名前とか覚えてないのよ。全く迷惑しちゃうわ～」

「そうか…ならわらわがっ…フゴフゴ！」

「却下。そうね～、アンタの名前から取ってイトハ・ユリってのにしましょうか。記憶失くしてから初めてまともに喋った相手だし」

「いきなり苦しくするのは酷いのじゃ、ボタンが引っ掛かって痛かったのじゃ。しかし、そうか。わらわが、初めて…」

「あ、ゴメンね。って何噛締めてんのよ、何か気になることでもあんの？」

「いや、その…いささか照れるのう、と」

乙女みたいに頬を赤らめた顔は可愛いわね～…ん？誰に向かって…

「は……いやいやいやいや、アンタ何言ってんのよ！」

「それに意味は判らなかったがイトハとゆう名はわらわの名前から取っておるのだろう？わらわは…こんなに情熱的な言葉を掛けられた事は無いぞ。じゃから…わらわは…」

「ちょっ、ちょっと落ち着きなさい。アンタは今、大分、ヤバい考えに…」

「イトハ！わらわはお主が好きじゃ、お主が欲しくて欲しくてしょうがない！」

何か凄い事言いだしたー！ヤバい、どこでこんなフラグ…って泣いてるのを仕方なく抱きしめた所から全部じゃない！

「なっ、こら調子に乗るな！」

元々抱きしめていたせいで向こうからも抱きしめやすい状況だったー！しかも体重掛けて押し倒そうとしてるし！

「止めなさい！私はそっちの気は無いのよ！」

「む～よいではないか～、キスくらい問題なかろ～」
「イヤよ！初めてなのよ、私は！」
「ほ～ぅ♪」
しまった！墓穴掘ったー！ヤバいさっきより力が…
「って何でこんな小さい体でこんなに力があるのよ！？」
「ふふふ、人間にしては強い魔力じゃがわらわには到底およばぬっ！」
魔力って…そういえばあの馬鹿神が剣と魔法がどうとか…って押し倒された！近い近い近いっ、あっ！腕が…
「ふっ、唇取ったり」
むぐっ…こいつ本当に取りやがったぁ～…シクシクシク…もうお嫁に行けない…
「ぷはぁ。…癖になりそうじゃの…」
「何馬鹿なこと言ってんのよ～、責任取んなさいよ～、もうお嫁に行けないわよ～…」
あっ、何か前が滲んで良く見えないわ～…視力落ちちゃったのかしら～…
「ん？よし、責任を取ろう、イトハよ！わらわの妻になれ！」
……は？

男Aは美幼児（美幼女）になった！（前書き）

コイツが一番疲れます…
理由は次のコイツのターンで！

男Aは美幼児（美幼女）になった！

Ｓｉｄｅ：男Ａ

ぼんっ

「きゃっ！」

ガシャーン、パリンッ…

「うおぉ…ぐぅ」

こ、腰から落ちた…うぅぅ…この年でギックリ腰デビューは嫌だ。

ガチャガチャ…

ん？何か手元に細かくて硬いものが…ガラスの破片？…何故？

「うわぁ…人型だ…」

ん？女の子の声？

「うわぁ、うわぁ…」

お、やっぱり女の…裸に黒マントって…痴女？いやでも魔女の儀式とかってこんな恰好が普通って前に読んだことあるな…それにしてもこの子１２、３歳かな…将来が心配になる御趣味ですね。

「うわぁ…どうなってるんだろ…」

あれ？この子どんどん近づいてきてる？待て待て待て！マントは首の所で止めてるしパンツも履いてるから致命傷ではないけどこれ以上近づかれたら危険だ。

「髪は…薄い紫、目は…空色？よく見えない…」

ヤベッ、見ない様に目細めてたのが仇になった。仕方ない…

「目見るなら服来てからにしてくれ…」

生憎俺はロリコンじゃないから７、８も下の子に欲情はできん。

「え…あぁ、女の子同士だし別に気にしないよ？」

「…俺は男だ」

「…え、まさか～……いやまさか……っ、きゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！見ないで見ないで見ないで見ないでっ！」

おわっ、がはっ、ぐふっ、ごあっ…。

床に座ってた所「見ないで」の度に蹴りが飛んできました…。1発目は掠めただけだったんだが、あとの3発が全部腹に…息が…。あ、…真後ろの扉から出てった。…どうしよう…。

5分後

この部屋観察してみると怪しげな薬品みたいなのばっかりだな。実験室かなんかなのかね？

俺が落ちたのはガラスの容器だったらしく、俺が落ちた地点からガラス片がバラバラに吹っ飛んでいた。

怪我して無いのは女神様のおかげか？服装は死んだ時のままTシャツ、7分丈、ジーンズだが腕時計が腕の太さに合ってないので調整した…俺の腕細くなったな。でも見た目女にされてるみたいなんだよなぁ～。確認したら男だったけど。鏡は見当たらないから顔はお預け。ガラス半で顔見れないか鋭意実践中。破片小さくて無理そうだけど…

ん？ドタバタ音が近づいて来た。戻ってきたのかな？

バタンッ！

扉壊れそう…

「ハー、ハー…ふー、よし！どこも変じゃないよね！？」

何か魔女っ子みたいな服に着替えて戻ってきた…もしかして俺に聞いてるのか？…とりあえず頷いとくか。てかさっきの事は…向こうが忘れようとしてるみたいだし放置で。

「そう、よかったぁ～。で、君、何？何で人型なの？もしかしてあたしすっごく新しいゴーレム作っちゃった？ねぇ、どうなのどうなのどうなの！？」

めっちゃ興奮していらっしゃる。こっちは座ってるから覆いかぶさるようになるし…てか近いよ…息がくすぐったい。…ん？この子、目が宝石みたいに紅いな。光ってるみたいで目が痛い…光量抑えてくれ。にしてもスゲー綺麗な黒髪だな。ロングだし。これで歳が近ければなぁ～。

「ゴーレム？少なくても俺は生き物のはずだけど？」
そういや女神様が頑丈にしとくって言ってたからゴーレムなら条件に嵌るのか？
「え？ちがうの？いろんな薬混ぜて精製魔術発動したからよくわかんない薬とかができるはずだったんだけど。なのに爆発して出てきたのは君みたいな可愛い子だったし」
「……ん？…さっきから気になってたんだけど…鏡貸してくれない？」
「あぁ、うん、こっち来て。この部屋には鏡置かないようにしてるの」
扉の前で手招きしている。さっきは人の家だから動き回らずにこの部屋でじっとしてるしかなかったのだ。待ってくれてるし速くし、よ…う…
俺の背低くね！？この子１４５センチくらいだから俺１３５センチくらいしかないよっ！？
「どしたの？あ、そうだった。あたしは…ロザリーってゆうんだ。君は？お姉さんに自己紹介してごらん♪」
１人で驚愕の事実に絶望していたら勘違いさせてしまったようだ。てか急にお姉さんぶられても背伸びした子供にしか見えない。名前は…あれでいいか。
「…ジルだよ」
某ゾンビゲームのスターズなお姉さんから。だって好きなんだもん…名前男女関係ないし…
「…ふ～ん、よろしくねっ、ジル♪」
「よろしく」
気付かれたかな…まぁ、お互い名前に隠しごとが有るみたいだし突っ込んでは来ないかな？
「はい、この部屋なら姿見があるよ」
「ありがと」
さぁ～、別人な俺とごたーいめーん♪…虚しくなってきたし普通に

しよう…
「でもどうして鏡何か見たがるの？自分の顔見た事無いの？」
「いや、何か身長低くなってるし女に間違えられてるしでちょっと確認しとこうかな～ってね？」
「え、じゃあ前は普通に男の子の顔だったの？」
「あぁ、そのはず」
女に間違えられるなんて６歳の時以来だよ。
「ふ～ん、じゃ、鏡オープーン♪」
観音扉式！てか２メートルくらいあるんだけどこの鏡！…何でこんな無駄にでかいんだ？
おっと、それ所じゃない！今の俺の姿を確認…
薄紫のちょい長いストレートヘアーに宝石みたいな薄い空色の瞳…１３５センチくらいの細みな体…きめ細かい肌に顎にかけて逆卵型の綺麗な輪郭と各パーツ…口や鼻筋はちょうどバランスの良いサイズ…
人形職人が己の技全てを注ぎ込んで作ったビスクドールならこうなるんだろう美少女がそこにいた。これが今の自分かと思うと…気持ち悪。ロザリーと比べても遜色ない美少女っぷりに全米？が泣いた！
「あれっ、どうしたの～？美少女だよ～？綺麗だよ～？」
困り顔でフォローしようとしているが寧ろ心を抉られた。お願いこれ以上は勘弁して…もうだいぶオーバーキルだからっ！
「え～と…ゴメン…」
グハッ！
もうやだ…シクシクシクシク…

男Aは美幼児（美幼女）になった！（後書き）

ようやく一周した…

神様は暇を潰し始めた（前書き）

神様の回は基本短いです

神様は暇を潰し始めた

Ｓｉｄｅ：主神様

「何か５人ともスゴイ事になってるなぁ～。それにしても美少女２人の絡みシーン、ゴチですっ！」

「ダルさん、気持ち悪いです。他に言いようが無い程に」

お～お～、スゲー効果だな～。

「お父様、あの５人に何かしたんじゃないですか。あまりにも不自然です。それにあの服装…死んだ時そのままじゃないではないですか」

流石我が娘…勘が鋭い。

「あいつら全員に＜堕ちた者＞ってスキルを付けたんだよ。服装は前の勇者がスーツやジーンズを持ち込んで普及させたから問題ねぇしな」

「えぇっ、主神様、それは幾らなんでも楽し過ぎだお」

「２人で納得していないで教えて頂きたいのですが」

「あぁ、フリッグはこの世界、バーティアの事は知らねぇんだったな。スキルの説明はそのうち誰かがやるだろうからしねぇぞ。服文化は中世と昭和が混じってる文化だな。

でだ。＜堕ちた者＞ってのは世界全体には関係ねぇトラブルやらイベントやらに強制的に遭遇する効果があんだよ。

だからあの５人は今後もトラブルに遭遇し続ける。旅先では必ず事件が起きるし、留まってもイベントが舞込んで来る。観賞するには最高の玩具だと思わねぇか？」

「僕が作った中二世界がこんなに面白くなるとは思わなかったお。流石主神様！面白さのためならルールをスルー！そこに痺れる憧れるぅっ！」

「はぁ～、最後の人を丈夫にしたのは正解でしたね…」

くくく…さぁ人間ども、俺を楽しませるために最高の喜劇を演じる

んだなっ！

神様は暇を潰し始めた（後書き）

短過ぎるようなら方法変えてみます

男Aは説明回を担当する（前書き）

お気に入り登録してくれた方がいるようでモチベーション上がりました♪

男Aは説明回を担当する

Ｓｉｄｅ：男Ａ

ロザリーが心配しているのであまり長時間凹んでられない。とりあえずこの世界のこと聞こう。女神様の話だとまず死ねないっぽいし。

「大丈夫？」

しまった、出遅れた。これ以上はマズいな。

「うん、だいぶ落ち着いた。…質問イイ？」

「え？うん、何？」

「この世界のこと教えてくれない？自分の顔と名前以外何も知らないんだ」

「記憶喪失？…辛いことが有ったのね…」

同情されて抱きしめられた。向こうの方が背高いから抱き枕にされた気分だ。

「いいよ、お姉ちゃんが教えてあげるっ」

ロザリーお姉さんの授業はーじまーるよー…ＮＨＫ？

「じゃあ机と椅子と板書板をっと」

あれ？本当に授業みたいだ。てか何でこんなのあるんだ？板書板ってまんまキャスター付の黒板じゃん！地味に便利な物を…

「じゃあ長くなるけどちゃんと聞いてね？

アタシ達の住んでるこの大地はバーティアってゆうんだ。古代の言葉で大地って言うんだって。縦長の大陸が４つ並んでて南北の真ん中をあたし達のいるギグの森が分断してるの。こんな感じにね。

―　―　―　―

―　―　―　―　―

―　―　―　―

真ん中の横棒はギグの森で、ギグの森は各大陸を横に貫いてるの、よく串刺しなんて言われてるんだ。だからギグの森を使えば歩いて世界１周できるよ。ギグの森と大陸の間には黒い霧がいつもあるん

だけど吸って病気になったって人は聞かないよ。…ここまでは大丈夫？」

「うん」

「えっと各大陸は左から第1大陸、第2大陸って数えられてるの。第1大陸は南北とも獣人が、北第2大陸にはエルフとドワーフが多いんだ。北第3大陸には人間の国がいっぱいあって、第4大陸はどっちも魔獣だらけ。第2、第3の南には魔族の国があるんだ。ちなみにここは第2と第3の間くらい。

じゃあ次は国の話にする？でも魔法とかスキルの話の方が面白いかも！」

獣人にドワーフにウンディーネに魔獣に魔族？そんなのいるのか、流石剣と魔法の世界…

さて次は…魔法を話したそうだな。国の話は必要なときにでも聞けばいいよな。

「魔法のがいいな」

「うん♪やっぱりそうだよねっ♪」

超嬉しそう。まぁ国の話とか苦手だし魔法は超興味ある！…スキルって何のことだ？それも説明されるだろうし大人しく聞いてよう

「魔法はね、イメージに魔力を込めてルーンに変えると発動できるようになるんだ♪このイメージってゆうのが面白くて、別に絵でもいいし言葉でもいい。極端に言っちゃえば魔力を込められてその人がイメージできれば何でもいいんだよ。だからイメージさえできれば出来ないことは無いはずだし、魔力の込め方を知ってれば赤ちゃんでも使うことができるんだっ。だけど人によって同じ結果のイメージでも途中のイメージが違うから呪文とかが全然違ったりするの。それに大きな結果や細かくて複雑なコトをイメージしたらその分魔力が必要になるから普通の人は焚火とかにしか使えないんだ…

それにイメージは結構正確じゃないと魔法が発動しなかったり、暴発して自滅しちゃったりするんだよ？この正確なイメージが1番しやすいのが言葉と魔法陣。だから魔法使いさんはちゃんと修行して

自分の魔力ならどこまでの魔法を発動出来るのか、どれだけ正確なイメージができるのか知っておくようにってお師匠様に言われてるんだっ。そうしないと大怪我しちゃから、ね？」

かなり長いが要約すれば正確なイメージに魔力を込めれば魔法になるってことか。

「あとルーンは魔力を通しやすい物に刻んでそこに魔力を通しても発動するんだよ。魔法使いさんは杖のどこかによく使うルーンを刻んでおいて、イメージが曖昧でも発動できるようにしてる人も多いんだ、こんなふうにね♪」

そう言って壁に立掛けてあった杖の腹にある文字を見せてくれた。

…知らないはずの文字なのに普通に「炎よ　全てを焼き尽くせ　フレア」と読めた…最適化の影響？

「魔力を通しやすいのは銀とか玉鋼とかオリハルコンとかだね。ドワーフさんなら鉄とか銀片とかから作れるよ。あとウンディーネさんが浄化した水も魔力を通しやすくて魔法の薬の元になるよ」

オリハルコンかぁ～、ゲームの定番だよなぁ…

「ちなみにジルが出てきた時は「浄化された水」と「玉鋼」と色々な薬の材料を混ぜようとしてたんだ。イメージはフラスコに入った魔法薬だったのに…薬のイメージしないでやったらあんなになっちゃった」

危ねぇ～。もしかしたら爆発のど真ん中に落ちてたかもしれないのかよ…ロザリー、恐ろしい子っ！

「魔法についてはこのくらいかな？あっ、忘れてた。目と髪は得意な魔法の属性によって色が違うんだ。髪の色が1番相性の良い属性なんだ。火なら赤、水なら青、風なら緑、土なら黄、光なら金、闇なら黒。だからアタシの得意な魔法は闇と火。基本はこれなんだけどジルの場合は…紫の電気、空色の氷…が得意な属性のはずだよ。イメージして魔力込められる？電気～ってイメージしてみて」

魔力が何なのかよく判らないんだけど…とりあえず電気、電気っと…

…バチバチ…

お～掌に野球ボールくらいの電気の玉が、意外と出来るもんだな。
「電気出て来いっ！」って念じたら出てきた。
「スゴイスゴイ！魔力ちゃんと込められるんだね♪」
みたいだ。ん？何かちょっと貧血…
「あっ、初めてならその辺で止めた方がイイよ。魔力をずっと大量に流しちゃってスグに魔力切れになっちゃうから」
すでに成ってます。魔力量は少ないのかな？…うぇ、車酔いみたいだ…
「ジルは髪も目も薄いから魔力は多くは…なかったみたいだね」
先に言ってくれ…そうか色の濃さで魔力量も測れるのか…わかりやすくていいな。
「うっぷ…魔力を大量に流しちゃうってのは、制御出来てないとそうゆう事なの？」
「うん♪魔力制御とか魔法使用効率とかって言われてるよ」
なんとも覚えやすい名前で。しかし説明中ずっと嬉しそうだな…説明好きなのか？
「あ、じゃあさ、薬の材料混ぜる魔法って何属性？」
「いい質問です！」
先生役にハマりだしたか？
「薬を混ぜたりするのは合成魔法って言うんだ♪これは属性が関係無いって言われてる魔法で、２つ以上の物を混ぜ事ができるの。イメージは混ぜた後の形と、混ぜる物の情報だけ。できるだけ詳しい情報を思い浮かべると良い薬ができるんだ♪他にも物にルーンを刻んだり、魔法効果を与える付与魔法もあるんだよ♪」
属性関係無いのはイイな。まぁ、俺はどの道魔力足りなさそうだけど…
「長くなっちゃったね。ちょっと休憩しようか？」
そう言って「う～ん」と伸びをしている。本当に可愛い系の子だな。

男Aは説明回を担当する（後書き）

ジルにロリコン疑惑です。
ちなみに前回のジルの回で面倒と言ったのは、コイツの回は基本説明が多いからです

女勇者は好奇心に殺される？（前書き）

今回はタイトルがよく判りません
何でこんなタイトルにしちゃったんでしょう…

女勇者は好奇心に殺される？

Ｓｉｄｅ：女勇者

さっき変態巫女を倒したせいでこの部屋から動けない…気絶する程強く殴ったつもりは無いからきっと覚醒の泉とやらのせいで力が上がっているんだろう。

変態が目を覚ますまでメイド達に魔法の話を聞いてみた所、私はかなり闇魔法に特化しているようだ。髪も目も同じ色なのは少ないらしい。しかし私はこれでも１７歳の少女だ。それが芯まで闇だと言われるのは…かなり、ショックだ…メイド達、尊敬の目でこっち見ない。普通は髪と目の色は違い最低でも２つ属性の魔法に適性があり全ての属性の下級魔法くらいなら使えるらしい。しかし両方同じだと下手をするとその属性しか使えないと言われた。文献を見ると今までの勇者数名がそうだったらしい…

…私だって小さい時は人並みに魔法少女に憧れた！おじゃ魔女ド○ミだって毎週観てた！しかし…しかし闇魔法特化って…それしか使えないかもって…

私だって少しは可愛い魔法を使ってみたい！そうじゃなくてもせめて、せめて火とか水とかあるだろう…何故よりによって闇なんだ！可愛いの対極にあると言ってもいい属性だぞ！…ふふふ…そんなに私が可愛いのは許されないか…だったら私にも考えがある！

「そこのメイド！」

「はっ、はい！」

「魔法はイメージに魔力を込めれば発動するんだったな？」

いきなり読んだら怯えたような反応をされたので少し声を和らげた。やり過ぎて変態が量産されては堪らないので加減が…若干赤くなっている所を見ると失敗だったようだ…この国の男は魅力が足りないのではないか？もう少し女がレズに走らないように頑張ってもらいたいモノだ。私に言い寄ってきたら壊すが。

とりあえず確認することは…
「魔力とはどんな感覚のモノなんだ？」
「あっ、はい！イメージに形を与える意志のような感覚です。イメージが曖昧ならば呪文として言葉を唱えるか頭の中でイメージして魔法が発動するように念じて見るとイイかもしれません」
「呪文、ね。何か練習に成る見本の呪文はないか？」
「え～と…闇ならば「影よ　我が身を包みし盾とならん　シャドウガード」などどうでしょうか？」
「ありがとう。試してみるから離れていてくれ」
暴発で巻き込むのは流石に目覚めが悪くなりそうだからな…ではさっそく、
「影よ　我が身を包みし盾とならん　シャドウガード！」
影が実体化して私の前方に守るように立ち塞がった。…奇妙な光景だな…
「流石です！勇者様っ！」
メイド達が褒めてくれるが私の正直な感想は…あまり良くない、だ。
しかし感覚は掴んだあとは実践あるのみ！…その前に一応聞いておこう。
「聞きたいんだが魔法で動物のようなモノを召喚したり作ったりすることはできるのか？」
「可能ではありますが…出している間はずっと魔力を消費し続けるので正直お勧めしかねます…」
そうか、魔力を消費し続ける…やはり実践で学んでいくしかないな。
メイド達にはもう一度下がってもらい、今考案した呪文を頭の中で反芻しイメージを固める。…大丈夫だろうか…。ここまで来たらやって後悔した方がマシだな。よし、逝こうか。
「闇の賢族よ　作られし力持ち　我が望みの姿と成らん　サモン」
目の前の地面にバスケットボール程の闇が溜まり少しずつ晴れていく。失敗したか？
「にゃ～」

「きゃ～っ可愛い～！」
メイド達が発狂した。とりあえず成功したようだ。私が作ったのは黒猫。可愛さ優先で戦闘能力は殆ど持たないはずだ。どうだ神よ！闇だって可愛い使い方はできるのだ。ちなみに
『作られし力持ち』
のフレーズは戦闘能力ではなく形を維持するだけの魔力を最初から持たせるためのフレーズに成っていて、同時に食事から自分で魔力作れるようにイメージしたのだがこっちは確かめようが無いな。おや？メイド達から猫が逃げてきたな…メイド達の目が血走っていて怖い…猫は…こちらは「フシャー！」と威嚇体制。とりあえず抱き上げて優しく撫でてやる。
「ゴロゴロ、にゃ～…」
凄く気持ち良さそうに私の腕の中で寛いでいる。それを見ているメイド達はクネクネしていて気持ち悪いな。なんだこの対極の状態は。片や愛くるしい猫の可愛らしい鳴き声…片や気色悪くクネクネしているメイド達の荒い鼻息。
…向こうの世界でメイド喫茶とやらが出来た意味が判らん。どう見てもこいつ等に魅力を感じない。やはり男とは不可解な生き物だな。再確認できたことだし良しとしよう。
「にゃー」
ん？猫がこっちをマジマジと見ている。どうかしたのか？…ああ、
「お前、名前が欲しいのか？」
「にゃっ！」
良い返事だ。しかし、名前か…まぁ黒猫だし、
「じゃあ、お前の名前はクロだ」
「にゃー…」
呆れたような、がっかりした様な微妙な鳴き声だった。まぁ、自分でも安直だとは思っていたさ。しかし…可愛い！さっきから我慢していたがもう無理だ！ずっとギューっとしていたい！
「にゃぁー…」

何やら抗議めいた呻き声とメイド達の「勇者様ずるいです！」とゆう声が聞こえた気がするがクロに骨抜きにされていた私にはどうでもいい事だった。

……そういえば私まだ名乗ってないな……クロが可愛いからどうでもいいか。

女勇者は好奇心に殺される？（後書き）

女勇者はクロ相手だとキャラが違いますクロ羨ましい…

女Aは純情少年で戯れる（前書き）

この人の話は視点が変わり易いです

女Aは純情少年で戯れる

Ｓｉｄｅ：女Ａ

「ほら、見えてきたぞ」

「えっ、ホント？…ドコ？」

やっとか～。でも2時間も山道ヒールで歩いて少ししか息切れしてないんだよね。最適化様々だよ～。あっ、純情少年は「シオン・ビラー…俺の名前だよっ！」って教えてくれた。そんなに照れなくてもいいのに♪

「え～と、あそこの岩を超えたら直ぐだよ」

あそこの岩って…ドレ？いいや。ついて行けば着くみたいだしもうちょっとジャングル堪能してよう。

「…お前って説明のし甲斐無いのな…まぁいいか。あっ、村の前まで行ったら少し待っててくれな？ジジイに話つけて来なきゃなんねぇから」

「わかった、待ってるね」

場所分かんなかったのがバレたか。そんなに判り易い顔してたかな～。

「じゃ、ここで待っててくれ。俺が来るまで動くなよ？」

「わかってるよ～、そんなに子供じゃないよ」

何か落ち着きのない子に言い聞かせるように言われっちゃったなぁ。私は元々25歳だから君よりずっとお姉さんなんだけどな～。若く見られたと喜ぶべきか、落ち着きがないと思われたと悲しむべきか…う～ん、悩み所だな～。

「グルルル……」

動物の呻き声…きっと犬さんだよね！遊んで欲しいのかなっ！も～、いっぱい撫でてあげちゃうぞ～…嘘です、無理です、ゴメンナサイ！てゆうか後ろから！？どうしよう？ヒールじゃ流石に走るのは無

理だよ！…とりあえず、そ～っと、そ～っと後ろを確認…逃げよう！
何アレ！？ライオンの頭したクマみたいなのがこっち見てる！シオン君は動くなって言ってたけど動かなきゃ死んじゃうよっ！そ～っと、少しずつ後ろに下がって距離を…ちょっとずつならこの子は追って来ないし…まだ動かないよね…まだ大丈夫…ん？あのクマオン（クマライオン）こっちをスゴイ警戒してる？…何で？…あれ？何で私クマオンは少しずつ下がれば平気って思ったんだろ？
「…がぁうっ！」
えっ！？何何何何？クマオンが急に暴れて…
「ぎゃうっ！っガア…ぐあぁ…」
5分くらい暴れて…死んじゃったのかな？…でもどうして？
「ふ～。危なかったな」
「シオン君？今のってシオン君が？」
「おう。矢を首に当ててから地面に縫いつけるように手足を狙ったんだ。いや～焦ったぜ、まさかガルウビーストに襲われてるなんてな」
ガルウビーストがさっきのクマオンの名前なんだ…それにしても…
「ふえ～んっ！怖かったよ～！」
勢いでシオン君に抱きつく。怖かったよ～、本当に怖かった～…
「わっ！バッカ抱きつくな離れろっ！！もう大丈夫だから離せって！！」
お～、初な反応するな～…ちょっと可愛い。

Ｓｉｄｅ：純情少年
ん？いきなり抱きっ、えぇーーーー！
「怖かったのは分かったから抱きつかないでくれ！」
「え、何で？」
「何でって、そりゃお前…あ～、もう！何でもいいから速く離れてくれ！」
「ブーブー。シオン君の甲斐性無し～」

「うっさい！」
コッイッツ、直ぐ立ち直りやがった！てか本当に怖がってたの最初だけだったんじゃねぇか！？
「それよりも、さっさと行くぞ！ジジイが記憶ねえなら仕方ないって、村に入ってもいい事になったんだよ！」
意外と何も言われなかったな…何かいい事でもあったのか？
「ホントッ？ヤッター♪」
「だぁかぁらぁ！抱きつこうとすんじゃねぇ！」
しつこく抱きつこうとするので本気で回避に専念してやった…心臓に悪いなコイツ…

Ｓｉｄｅ：女Ａ
あはは～、シオン君おもしろーい！でもちょっとからかい過ぎたかな、反省反省。それにしてもあんなに遠くから正確に狙い打ったんだ…スゴイなぁ～。頼んだら教えてくれるかな？私も村に住むことになったら狩とかの技術は必要になるし弓とか使えたら何かと便利そうだよねっ！それにイツか今日とは逆にシオン君を助けられるかもしれないし。村に着いてからどうなるか分かんないけど…まぁ、どうにかなるさ～。
「はぁ～、さっさと村行くぞ」
「はぁ～い♪」
あっ、悔しそうな顔してる♪可愛い～♪なんかさっきの事とかどうでもよくなっちゃった♪シオン君様々だね。
さ、村に入れてもらえるよう頑張らないとねっ！

女Bは魔界の常識を知る（前書き）

今更ですが更新どころかキャラの順番も不定期です

女Bは魔界の常識を知る

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「イトハよ！わらわの妻になれ！」

…どうしよう…言ってる意味が理解できない…あっ、そうか。ここ違う世界だから言葉が違うんだ。そりゃあ言葉が通じなくても当然よね！ふ～

「もう１回言ってもらっていい？よく聞き取れなかったの」

流石に２回も違う意味には聞こえないわよね～。

「ん？う～、恥ずかしいの～／／／…ではもう１度じゃ。イトハよっ！わらわの妻になれっ！！」

……かなり恥ずかしげにモジモジした姿に不覚にもクラッと…はっ！駄目よ私！そりゃ元の世界でも後輩の女の子達から何回かラブレター貰ったけど全部ちゃんと断ってたでしょ！てゆうか私にはそっちの気は全く無いんだから最初から渡されないようにって行動してたじゃない！よしっ！ここはちゃんと…

「あのね、リリー。私は女なのよ？」

「そうじゃな」

「女の子同士で結婚なんて聞いたことも無いわよ？」

「魔界では普通じゃぞ？」

「……マジ？」

「うむ」

「どんな世界よ！ここはっ！？」

「いやな、魔族の中には同姓で子を成す者もおるからの？とくに女同士が多いんじゃが」

「何よそれ…」

女同士で子供って…うわ、想像しちゃった…

「じゃからイトハ！責任持ってわらわがお主をもらうのじゃ！わらわは幸せじゃし、お主も嫁に行ける。全て丸く収まっておろう？」

ドヤ顔ウッザ！はぁ～
「それ以前に私は恋愛は普通に男としたいのよ…」
「好きなヤツおったのか！？」
……いなかった…だってたいして良いのいなかったんだもん…男が悪いのよ、男が。
「その様子ではいなかったようじゃの。ほれ、これで心置きなくわらわと結婚が…」
「しないわよ」
「わらわなら…」
「却下よ」
「…わらわと…」
「イヤよ」
「…イトハが虐めるのじゃ～！」
「え！泣きだす程！？あ～、もう、泣かないでよぉ」
「…結婚してくれる？」
「一生泣いてろ」
「い～や～じゃ～、イトハがいいのじゃ～」
「えぇい、離しなさい！」
この歳で涙腺操れるとは…てかいきなり抱きついてくるなんて、ちょっと調子に乗ってるわねコイツ。まぁずっと凹まれたままよりマシだからいいけど。それにしても…
「これから何しようかしらね…」
「ん？もちろんわらわと…」
「結婚はしないわよ」
「…ぶー。イトハが冷たいのじゃ…」
抱きついたままにしといたげてるだけ感謝しなさい全く。
「私生きていくのにこれからどうしたらいいのかしら？」
あの糞神のせいで異世界に来てもパニックにはならなかったけど、はぁ、肝心なことはアイツ一切話さなかったからどうするか悩むのよね～。

「そうじゃの～。まぁこの魔王城は部屋なら余っておるし、イトハはわらわの客人として不自由無い暮らしをすればいいのではないかの」
「借りを作りっぱなしってのはちょっとね…でも出来ることなんて無いし…暫くはお言葉に甘えておくわ。…そのうち絶対返すけど」
「気にしなくても良いのじゃがな。暇ならば武器を選んで稽古でもつけるか？借りを返すのに使えるかもしれんし、イトハは武器を持ってないようだしの。ちょうど相性の良さそうな武器が宝物庫にあった筈じゃ」
「宝物庫って、そんな簡単にイイの？」
「構わんじゃろ。どうせ昔の魔王がテキトーに突っ込んだ物じゃしの。それに魔王に逆らおうとゆう者も滅多に居らん」
「そうゆうもんなの…魔王って何か…」
「言うな…わらわとて流石にどうかと思っとる…まぁ、よい。宝物庫か部屋か、先にどちらを見るのじゃ？」
「え、あぁ。じゃあ宝物庫で。それとお風呂とかない？武器見たらサッパリして休みたいわ」
「わかった、ついてまいれ。案内するのじゃ。それと風呂じゃが、給仕の者に言って用意させよう」
「頼むわ。もうイロイロあり過ぎてクタクタよ。あぁ～、それと、ね」
「ん？どうしたのじゃ？」
「え～と…その／／／…泊めてくれてありがと／／／…これから…よろしく、ね／／／…うわっ…」
恥ずかし過ぎる！でもここまでされてお礼の１つも言わないなんてそれはそれで気持ち悪いじゃない！何よ！言いたいことあるなら言えばいいじゃないっ！！
「イトハ…もう、我慢の限界じゃ…好きじゃ好きじゃ好きじゃ好きじゃー！後でと言わず今風呂に行こう！さあさあさあさあっ！」
「調子に乗るなっ！」

いきなり脱がせようとしてきたので殴って止めた。私悪くないわよ？

女Bは魔界の常識を知る（後書き）

魔王は皆テキトーなヤツらでした

男勇者は公に会う

Ｓｉｄｅ：男勇者

なんだろう悪戯巫女さんから嫌な感じが…ブルッ…風邪か、いや悪寒だな。何か邪悪なこと考えてそうで嫌だな…

「公に会う前にこの部屋で謁見の作法を教えておくよ。あとこの部屋出たら堅い口調に戻るけど我慢してね。それと自己紹介はしないで。公が聞くまでは誰も勇者の名前を聞かない様にするのがしきたりなんだ」

あのあと部屋から直接階段に出て廊下を少し進んだ所にあった部屋に通されて作法を習った。ちなみに服はさっきの中性ヨーロッパの騎士みたいなのでいいそうだ。

「ん。まぁ作法はこんなもんかな。じゃ、いよいよ謁見だ。失礼のないようにね」

「勇者様、ここから先は城内務めの方にも会うことになりますのでそのつもりで」

気押されない様に覚悟決めろってことか?ま、やるだけやってやるさ。

Ｓｉｄｅ：悪戯巫女

「この扉が開いたらもう謁見は始まっています。準備はよろしいですね」

謁見場の前でメイドさんが最終確認してる。さて勇者様、あんたの力量測らせてもらおうかね。

「ああ、開けてくれ」

「では…」

メイドさんが指示を出した。いよいよだね。

「勇者、入場」

しきたりにより私も続いて勇者の2歩後ろに続く。メイドさんはい

つの間にか謁見場の右端にいた。ほんとに謎な人だね…しっかし経済大臣、いつ聞いても渋い良い声だね。経済大臣なのにこんなことしてるのは不思議だけど。

部屋奥の階段状に少し高くなっている場所の中心で公が椅子に座って勇者を待ち構えている。

「お初にお目に掛かります、公よ」

教えた作法通り公の御膝元まで行き頭を垂れる。お偉いさんに仕えてる給仕の女の子達が見惚れてる所を見るとやっぱりあの顔は武器になるね。

「面を上げよ、勇者よ。私が現ユビキタス公だ。少々事情が有って名は言えぬ。此度は死者に成ったそなたを無理矢理召喚して済まなかったな。フレイヤも大儀であった」

「ありがとうございます」

「うむ。して勇者よ、お主の名前を聞かせてもらえるか？」

「正名勇人（ただしなゆうと）。それが私の名です。勇人、が名前になります」

「そうか。勇者・勇人よ。此度は顔合わせのみでそなたを呼んだのだ。今日は休むがよい。明日、そなたを召喚した訳を話そう」

「わかりました」

…ふむ、何事もなく終わった？お父様があれだけで終わらせるのは些か違和感が…

「では、これにて謁見を終了致します。勇者殿、こちらへ」

おっと考え込むのは後だね。

Ｓｉｄｅ：男勇者

はぁ～…肩こった～。でもイメージしてたよりも偉そうじゃなかったな。いきなり「済まなかったな」って言われた時は驚いた。普通王様は謝らずに魔王倒せって言ってくると思ってたからな～。あっ、ここでは公か。

「こちらが勇者様の御部屋になります」

「メイドさん、勇人でいいよ。なんか勇者って慣れないんだ」

「そうですか。では勇人様」
「様は残るのか…」
口調は頼んだけど「メイドの務めですので」と却下された。まぁそのうち慣れるよな。
「はい。明日の昼食が御済になりましたら、もう1度公と謁見していただきます。それまではご自由にしていて下さい。そのうち巫女様も来るでしょうし」
「了解。フレイヤさんは何しに？」
悪戯巫女改め姫巫女は「今後はフレイヤと呼ぶように」と言っていた。
「暇つぶしだそうです」
「…わかった」
何て言うか…自由だな、姫巫女…

男勇者は公に会う（後書き）

ミスがあったのでちょっと直しました

神様は人間を観察する

Ｓｉｄｅ：女神様

「何だかあんまし話し進まねぇな」

「ホントだお。てか主神様、全部見ないで少したってからイベントだけ見ればいいのでは？と思われ」

「あ…」

何時に成ったらこの馬鹿な会話は終わるのでしょうか。聞いているのも馬鹿らしくなってきました。それにしても本当に進みませんね。欠伸が出そうです。

「ほらほら～。フリッグたんも最初は興味深そうに見てたのに今じゃ愛しの男Ａが見れなくて寝むそうよ？それにしても男Ａのパート長くね？」

「フリッグ～、お父さんはあんなガキ認めないからな！」

とりあえず、速くスキルの説明を誰かして欲しいです。あれが分かればお父様の馬鹿げた行為の対処法も見えてくるかもしれませんし…

「え？フリッグ、無反応はちょっと酷過ぎ…フリッグ、お願い、お父さんに何か反応して～」

「娘に無視されて泣きじゃくる父親乙っ！」

「うるせぇよっ！」

流石に私達のせいであんな不幸になったなんて思われたくないですし。

「でも、この男Ａってスゴイね。＜堕ちた者＞なくても最初から運のパラメータがマイナスになってるよ。なのに悪運だけは人間のステータスじゃ有り得ない程高いみたいだし。こりゃトラブルに巻き込まれるために生まれてきたようなもんだねっ」

「…どうゆうことですか、ダルさん」

「ん？言った通りだけど？主神様が何もしなくても男Ａはトラブルに巻き込まれて、強力な悪運で生き残ってを繰り返す運命みたいよ」

…私が気に病む必要も＜グラップラー＞を与える意味も最初から無いとゆうことですかそうですか…ふふふ…この借りは絶対に返さなければなりませんね…

「フリッグがお父さん無視してダルとだけ…うおっ！…どうしたフリッグ…何か殺気がスゴイぞ？」

「…ふふふ…お父様、１つ頼みが有るのですが」

「な、何だ。言ってみろ…最大限…いや…出来る範囲でなら…かえてやれるかも…しれねぇぞ」

躊躇っていますね…まぁ、別にいいでしょう。

「私が望んだら彼らに連絡が取れるようにして頂きたいのです」

「え～と…いや、神が世界に干渉するのは極力…」

「お父さん、ダメ？フリッグのお願い聞いてくれないの？」

「ＯＫ！もうなんでも言っちゃってくれよ！もう、何でも叶えちゃうからっ！」

「ありがとっ！お父さん大好き！」

こうゆう時のために普段から調教しておいた甲斐がありました。潤んだ瞳で上目遣いしながら頼めば確実に堕ちる、男は神だろうが人だろうが単純ですね。

「では、夢で彼らにコンタクトを取るとしましょう。お父様、その時はお願いしますね」

「おう！任せとけ！……あれ？」

さて、夜になるのが待ち遠しいですね…

神様は人間を観察する（後書き）

女神様はやっぱり主神様の娘だと思います…

男勇者は公に戸惑う

Ｓｉｄｅ：男勇者

「豪華過ぎだろ…」

部屋に入って最初の言葉がこれって…でも仕方ないんだ！俺向こうでは一般家庭で家族５人で自分の部屋あったけど手狭だったし友達にだってこんなでかい部屋のヤツいなかったしてか普通こんな部屋に住んでるヤツ漫画の中くらいだろって俺今まさに漫画体験してんじゃんうわぁ机綺麗だし装飾細かいな幾ら掛かってるんだこんな部屋があと何個あん…

「よう、勇者・勇人君」

…だろうそういや謁見の間の装飾もかなりすごかったよな…

「１国の長を無視とは、流石勇者と言うべきか」

「あれに一体幾ら掛けて…へ？」

「お～、やっと気付いてくれたか」

「なっ！ユビキタス公！何でここに！」

「勇人、邪魔するよ」

ノックもなしにフレイヤ入ってきたし。ノックの文化は無いのか…

「おや、ユビキタス公も来ていたのですか」

「うむ。窓から侵入など久しくしていなかったからな。中々に新鮮な気分を味わっておる」

「お～、それは楽しそうですね。では今度私も…」

「フレイヤよ、１国の姫がする事では無いぞ。はしたない」

「１国の長がすることでもないでしょう、父様」

「そうだったの。これは１本取られた。はっはっは」

「ちょっと待ってくれ！」

流石に耐えきれなくて声を荒げてしまった。

「何かね？」

「勇人、どうかしたの？」

「イヤイヤイヤ！かなり色々聞きたいことがあるけどまずは、親子？」
２人に失礼だけど指交互に指して聞いてみた。
「うむ。なんだフレイヤ、話していなかったのか？」
「はい。その方が面白そうだったので、つい」
「まったく１国の長の娘が、なんて面白そうな事を」
「あんたもそっち側かよ！てかこんなんで大丈夫なのかよこの国！？」
国のトップがこれで娘がこれって…
「ん？公の推薦時の支持率は８７％、今は９０％だね」
「何だそのありえねぇ指示率！逆に支持して無いのはどんなヤツか気になるわ！」
「はっはっは。本当に皆には人を見る目が無くてほとほと困っておるよ。私は戻れるなら直ぐにでも前の職に戻りたいとゆうのに」
「国の長辞めたいって言っちゃったよ！」
「国民全員知っているから問題ないのよ」
「まったく、こんなオッサン１人に国の行く末を任せるなんてどんな神経をしているやら。興味が尽きんよ」
何だこの人…本当にこの人が１国を率いてるのか？てか公に推薦？
「推薦って？」
「この国では公を決めるのは選挙式なの。城内務めの人全員から、この人が次の公に相応しいと思われる人が投票されて公になるの」
「まったく。つまらない方法だ。他国のように子供に次の長が引き継がれれば良いモノを」
自分がトップに成って歯噛みしてる人初めて見た。国のトップって醜い争いして奪い合うんじゃないのか？
「城内全ての人、つまり給仕や騎士にまで公に成る可能性があるし投票者でもあるから賄賂や暗殺は対象多過ぎで無理なのよ。そんなことするくらいなら誠実に働いて周りに認められた方が速いでしょ？」

何で俺の疑問がバレたんだ…ん？フレイヤが俺の顔を指で指してる？ああ、顔に出てるってか…
「そんなに判り易い顔してたか？」
「うむ。ついさっき会ったばかりの私でも勇者の言いたいことはわかったぞ」
「表情に出やす過ぎね」
打ちのめされそうだ…
「それにしても、父様。公に成って１０年も経っているのですからもう少し落ち着きを持ってください。窓から侵入など、子供じゃないんですから」
「フレイヤもさっき面白そうとかいってたよな」
「ふれいや子供だからよくわかんなぁ～いぃ」
「うむ。フレイヤは何歳に成っても私の可愛い娘だからな」
「論点が違うだろうが！てかまたその口調かよ！」
「ふれいや、ちょっと練習してくるねぇ～」
「止めんかい！」
「ふっ、勇人はからかい甲斐がありすぎるな」
「まったくだ。公なんぞやっていると色んな者に会うがここまでの逸材は初めてだ」
もうやだこの人達。…あ。
「そう言えば公は何でここに？」
「ああ、忘れておったな。今のうちに話せることは話してしまおうと思ってな。この世界の事、分かる範囲で全て、な」
そういって公は大陸、ギグの森、魔界、魔法、スキル、俺が呼ばれた訳を話し始めた。

女Bは武器を手に入れる

Ｓｉｄｅ：魔王

「痛いのじゃ…」

「アンタのせいでしょうが」

どこがじゃ、イトハがわらわを誘惑しなければあんな事には成らなかったのじゃ。う～、タンコブが出来てるのじゃ…

「じゃ速く宝物庫に連れて行きなさいよ。その後は空き部屋よ」

「何かふてぶてしいのじゃ！さっき借りは作りたくないみたいなこと言っておったろう！？」

「アンタ相手に遠慮するのは無駄だって気付いたのよ。良かったわね、私アンタを対等に扱うわよ。さっ、行くわよ」

何が良かったのかさっぱりじゃー！そういえばジジイがいっておったの「惚れた方が負けなのだよ」と。つまる所…わらわの完敗なのかの？イトハに完敗…悪くないの…

「何考えてるか知らないけど顔がにやけてて怖いわよ？」

イトハが負けて這い蹲るわらわに…

「グフフフ…イトハ、そんなにされたらわらわは、わらわは…」

「ていっ」

「いたっ！イトハ、いきなり何するのじゃ！」

「デコピンよ。目の前でヤバい妄想されたから被害が出る前に初期消火させてもらったわ」

ぬぅ…イトハの前では迂闊に妄想も出来んのか…寂しいのう…

お、あの階段を降りたら宝物庫じゃの…暗い地下で2人きり…これじゃ！

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

リリー、この年でここまでの変態的なマゾ思考ができるなんて…中身エロオヤジと同じじゃない！ちょっとこの城に居付くのは考えた

方がよさそうね。
「ここじゃ」
階段から直の扉を開けると……どんよりと濁った空気が溜まっていた…宝物庫ってより…地下牢？
「元が地下牢なうえに放り込まれるのは呪いの書や魔剣、曰く付の品ばかりじゃからな。こうなるのはむしろ自然じゃろう」
ホントに地下牢だったよ！そんなトコにあるなら私がこれから貰うのもヤバいの決定じゃない！
「ほれ。これがイトハと相性が良さそうな魔槍ガ・ジャルグじゃ」
うわ～…全部が鈍い赤色って…魔槍って…。片側は刃が長く、反対側は普通サイズの槍でハルバートのような見た目。まず持てるの？
リリーはお手玉でも始めそうな軽さで持ってるけど…呪われないわよね…
「わらわからのプレゼントじゃ」
スゴイ可愛らしくニッコリしてる…断られるなんて微塵も思ってない無邪気な顔…覚悟は決まったわね…ふっ。
ガシッ
躊躇えないように思いっきり掴んでみた…普通だ…何も無い。……拍子抜け過ぎるのよ！はぁ～、ビクビクして損したわ～。
「ありがと。じゃあ私はこれから槍の稽古をつけて貰えるのね」
「うむ。まぁ槍とゆうよりは戦い方自体に重点を置くじゃろうがな。わらわが手取り足取り、じっくりと教えてやるのじゃ。安心して習うのじゃ。いっそ今ここでじっくりと…」
手を怪しくワキワキさせてる！
「ちょっ、今日はいいから！それよりほら！部屋とか見せて頂戴、ね？」
「そう連れない事を言わなくてもいいじゃろう。なに、直ぐに部屋のことなどどうでもよくなろうて…」
ダメだ！完全にスイッチ入ってる！このままじゃさっきの二の舞になる！

「リリー、今日は本気で疲れてるから稽古は明日疲れを取ってから、じっくりゆっくりやっていきましょう？」
こう言えば少しは…
「…ふふふ…イトハに槍の振るい方を教えながら…フフフ…あ、綺麗な体の線が、もう辛抱堪らん！」
辛抱なんてイツしたってのよ！？てかこっち来んな！
「んふふ…逃げようとしても無駄なのじゃ…『バインド』！」
「え？…きゃっ！」
何！下がろうとしたら足が何かに引っ掛かって…ってに光る輪っかが着いてる！しかも動かない！
「フフフ…イトハ～」
あ、ちょっ！来んじゃないわよ！この輪っかの分際で邪魔なのよ！
今手に入ったばかりの槍を輪っかに叩き付ける。
キンッ！
「なっ！わらわのバインドが破壊されたじゃと…面白い！」
へ？何？ってリリーの目がヤバいっ！
「絶対イトハをわらわの物にしてみせる！」
見た目の幼さと身のこなしが全然釣り合ってないのよ！げっ！また手が！
「ふっふっふ…イトハ～、もう1度熱～いキスを…」
「そう何度も！」
上手く体を捻って腕でガード。どうだっ！
「恋とは障害が大きければ大きいほど燃えるモノなのじゃ！」
なっ！手首掴んでたのを少しずつ肘にずらして来た！最終的に顔やる気…
「…バインド」
へ？何呟いて…って手が輪っかに…あ、マズい…
「ふっふっふ…これで邪魔は入らないのじゃ…イトハ…」
潤んだ瞳でこっち見ないで顔近付けてこないで唇突き出すな！
「ちょっと落ち着きなさ、んん！…んん～…っ！」

「んむ、これは…ん～、もっと…」

今までの人生で一番死にたくなるような甘ったるい感触を３０分程味わった…

私、頑張れるかな…グズッ…

女Bは武器を手に入れる（後書き）

魔王が完全に変態です…
少々やり過ぎたきがします。
もう少し普通にするつもりが…

男Aは職業が決まる（前書き）

またしても説明回。
作者泣かせなキャラです…

男Aは職業が決まる

Ｓｉｄｅ：男Ａ

「じゃ、さっきの続き♪スキルについて話すね」

お茶を淹れてくれたので一息入れたらロザリーが説明の続きを促してきた。

スキルって…取得経験値が上がるとか攻撃力が上がるとかのアレか？

「スキルはね、大まかに職業、受動、強化、特殊があるんだ。これがスキルタイプ。それとＡ，Ｂ，Ｃその上にＳってランク付けがされてるんだ。図にするとこんな感じかな」

…黒板に板書中…終了

職業　受動　強化　特殊

Ｓ

Ａ

Ｂ

Ｃ

「これに＜魔法使い＞ってスキルを当て嵌めると、職業スキルのＣランクって表されるの。わかった？」

成程、スキルタイプを見る限り攻撃力が上がるは本当にありそうだ。受動ってのは…パッシブのことかな？まぁ聞けばわかるよな。

「各スキルタイプは職業なら剣士とか魔法使いとか騎士とか盗賊とかで、Ａ～Ｃランクに職業名が変わったりするんだ。スキルは使い込むとランクが上がったり出来ることが増えたりするからジャンジャン使っていくんだよ？一部の職業スキルにはＳランクもあるみたいなんだけどよっぽど極めた人が何か条件を満たして初めてＳランクに成るんだって。

ちなみに私はＢランクの魔法使い＜魔術師＞とＡランクの製作者＜アルケミスト＞だよ」

職業スキルは複数持てるのか。面白いな。

「それと同じ魔法使いのスキルでも＜魔術師＞に成る人もいれば＜魔導師＞、剣使いのスキルと一緒に使って＜魔法剣士＞ってスキルになる人もいるんだよ。だから人によって持ってるスキルはバラバラなんだ。製作者なら錬金術師とか鍛冶師、付与師になるの♪」

何か男としてかなり心躍る話しだったような…これは色々試す価値ありだな！

「次に受動と強化なんだけど、言葉の通り受動は何かされると発動するんだ。例えば魔法を防ぐ効果が本人の意思とは関係無く発動したり、怪我をするとすぐ直ったり、ね。強化は速く動けるようになったり、遠くを見えるようになったり出来るんだよ。意識しないと使えないのが普通かな。人のスキルを見れる＜観察眼＞は強化スキルに入ってるんだ。最後に特殊。これは種族や血筋、あと吸血鬼に眷族にされたり竜の血を飲んだ、とかで身に着くスキルで、このスキルは受動だったり職業だったりどれにも属してなかったりイロイロでわからないことだらけなの。でも大体スゴイ効果を持ってて、Aランク以下はないんじゃないかって言われてるんだ」

凄いな特殊スキル。あまりお目に掛かりたくないな。あ、そうだ。

「ロザリーは＜観察眼＞を持ってるの？」

「うん、魔法使いには必須だからね。無いとスゴク困るんだよ。魔獣の弱点属性を見たりもできるから」

「じゃあさ、俺って今何かスキル持ってる？」

「あ、イイネ♪じゃあさっそく。え～と…特殊Sランク＜悪運＞にAランク＜グラッププラー＞……辛い経験をしてきたのね…」

いきなり同情されて抱きしめられた。しかも若干嬉しそう…人に触れるの好きなのか？

「とりあえず離してくれ…あと＜悪運＞とか嫌な予感しかしないんだけど」

名残惜しそうな顔しない！俺は逆に人に触れるの苦手なんだから。

「ああ、うん…＜悪運＞持ってるってことは、その…運がかなり無いってことなんだ…てへっ♪」

「シクシクシクシク…」
運無い宣言入りました～。もういいや、＜グラップラー＞のこと聞こう。
「もういいです…＜グラップラー＞について説明ください…」
「あぁ、うん。＜喧嘩屋＞ってスキルを上げるとなるんだ。でも生身じゃなきゃいけないから他の職業スキルと比べるとスゴク難しくて、上げてる最中に死んじゃうことが多いスキルなの…それこそ娯楽用の奴隷さんが偶々長生きして手に入れるようなスキルなんちゅう重いスキルにしてくれてんだよ女神様～！」
「あ、でも魔獣と素手で殴り合いしても勝てるくらい体が頑丈になるし足はオオカミより速くなるしイロイロ便利な職業で、え～と…元気出して！ね？」
女神様に恨み辛み吐いてたら勘違いされて慰められた…真正面に来てしゃがんで手を握って上目使い…俺がロリコンなら落ちてるぞ…
…アレ？今の説明だと俺って化物じゃね？
「大丈夫大丈夫。ちょっと考え込んでただけだから。そういえば職業スキルって具体的にどんな効果が有るの？」
「あ、うん。それぞれ別なんだけど、魔法使いなら杖を持ってれば魔力制御が上手くできるようになったり、剣士なら剣を握ってるとちょっと筋力が上がったりするの。それとスキルはよっぽど特殊な効果がない限り併用できるよ」
「＜グラップラー＞は何必要なの？」
「…何も要らない…」
「…完全に化物ですね…」
「そんなことないよ！ああ、ゴメンってば～、謝るから許して、ね？ね？ジル～（泣）」
ヤバい、からかい過ぎた！潤んだ目でこっち見ないで！S心が刺激されちゃうからっ！
「大丈夫だよ、そんなに気にしてないって」
「ホントに？」

「うん！」
安心させるためにもフォローせねば！
「それにこのスキルがあれば怪我なんて滅多にしないからラッキーって感じだし大人に絡まれても魔獣に襲われてもどうにかできるってことでしょ？それにロザリーに迷惑掛けずに1人で何だかんだやっていけるっぽいから平気だし…それから…」
「…1りで…」
何だ！？ロザリーが小さく何か呟いたけど自分の声で聞き逃した。
何かロザリーがメッチャ悲しそうにしてるし…
「…そっかジル、1人で全部頑張っちゃうんだ…」
…マジかよ…そうゆう理由なのかよ……仕方ないよな？
「う～ん、でもまだ記憶も知識も無いから不安だな～。誰か頼れる人が近くにいてくれたら安心なんだけど～」
わざとらし過ぎたかな…
「じゃあじゃあ！ここにいればいいよ♪ね！そうしよう、ね♪」
凄いパァッとした笑顔を向けられて同居を進められた…若過ぎる男女だし問題は…3年も経ったらアウトだよっ！そんなに長いかは不明だけどな…
とりあえずロザリーは1人が嫌みたいだし暫くはココで今度の身の振りを考えようかね…他に出来ることもなさそうだし…

男Aは職業が決まる（後書き）

同居決定しました

女Aはエルフの長に会う

Ｓｉｄｅ：女Ａ

「到着。もう日が暮れるな。日没前に帰って来れてよかった」

「はぁ～…ホントに、里って感じだね～…」

「どこに感心してんだよ…」

だって向こうじゃこんな村、日本じゃ絶対見れないんだもん。こんな見るからに『山奥の隠れ里』って場所、地球じゃもう絶滅危惧種だよ！…動物じゃないや…

「シオン、その子が迷子のエルフか？」

うおっ！横から渋い素敵ボイスが、

「ただいま、ジジイ。そうだよ、コイツがさっき話した変な服着たヤツだよ」

変な服ってなによ～。私だってスーツのままこっちに飛ばされるなんて思わなかったわよ～。それにしてもこのお爺さん…見るからに『エルフの長』って感じで、嵌り過ぎてて、ぷぷっ…笑いこらえるの大変…

「ふむ、人間の貴族が式典などで着るモノに似とるの。それにウンディーネのように澄んだ魔力とは、本当に変なエルフじゃな。まぁ、立ち話もなんじゃて、家で事情を聞こうかの。ついてきなさい」

「いいけど…私本当に何にも分かんないんです？自分がどうしてあそこにいたのかも分かんないくらいだし…あ、私クリス・シュタイン」

「別に気にせんでもエエわい。形式的に村長のワシが確認したっちゅう証拠が欲しいだけじゃて。ワシは村長になって名を捨てたからからの。村長かジジイと呼んどくれ」

「ジジイも人が悪いよな～。村長権限で村に入れるのなんて簡単なのに」

「……今更だけどシオン君って…もしかして村長さんの息子？時期

村長？」
「いや、孫。時期村長ってのは間違ってないけどな。この村は世襲制じゃないんだよ。でも俺は自分の能力で村長候補になったんだ」
「何言っておる。お前の世代で村長候補に成りたがるヤツが居ないからじゃろうが」
「そもそも俺と同年代のヤツがいねえからな～」
「…言うな」
「あはは…何か…大変だね…」
「まぁな。村長候補は俺以外に４人いるんだ。全員歳はバラバラだけどな。まぁ、そのうち会うこともあんだろ」
「２人とも、家に着いたぞい」
皆で話してたら村長さん宅に到着…他の家とサイズ変わんないって、村長としてどうなの？
「ん？村長の家にしては小さいかの？」
「えっ、あぁ…いやその…」
「顔に出てんぞ。この村は誰が村長になるか分かんねえからな。誰が村長を継いでもいいようにどの家も住人＋４人くらいが寝泊まりできるような広さにできてんだよ」
「うむ。まぁこの家は住人＋６人までいけるがの。ほっほ♪」
「単純に人が少ないだけだろうが…」
「どうゆうこと？」
「俺ん家はジジイと俺とお袋の３人暮らしなんだよ。他の家は大体５人か６人だな。爺、婆、親父、お袋、子供が１人か２人って所か」
「ほれ、２人とも突っ立ってないで中に入らんか。ジジイに長い立ち話は辛いんじゃ」
「あ、わりい。ただいま～」
「お、おじゃましま～す」
「カルナ、帰ったぞい。さっそく飯にせんか？」
「おかえり、２人とも。それといらっしゃいお嬢ちゃん。アタシはカルラ、シオンの母親だよ」

「あっ、クリスです。はじめまして…」
「あっははは！緊張しちゃって、可愛い子じゃない。これから家で一緒に過ごすんだ、身構えてないで気楽におし」
ちがうよビックリしてるんだよ！だってカルラさんどう見ても２０代後半にしかみえないんだもんっ！なにこれ！？シオン君のお父さんは犯罪者！？って私ここに住むの！？
「あ、言い忘れてたな」
シオン君…大事なことなのに忘れないでよ…
「さ、ご飯にしよう。歓迎なんて大げさな料理は出せないけど普段よりはマシに作ったからさ。期待してて♪」
「ふ～、今日は結構歩いたからな～。あ、ジジイ今日の獲物に１匹どうしようもないのがいるから明日大人達に頼んでいいか？」
「ああ、構わんぞ。何仕留めたんじゃ？」
「ガルウビースト」
「あぁ、あれは怖かったよ～」
「何をしたらガルウビーストなんぞに遭遇するんじゃ！普段は森の奥の方におるしエルフを襲う事なんぞ滅多にないんじゃぞ！」
村の近くで襲われそうだったんだけどな…
「それを含めてあとで話すよ。クリスもその場にいたしな。まずは飯飯♪」
「私は襲われかけてて死ぬかと思ったのに…」
「こら、シオン！アンタ女の子を怖い目にあわせるなんて…お母さんは情けないよ…」
「いやいやいやいや！ジジイにクリスの事話に行ってる間に遭遇してたんだって！」
「２人とも、せっかくの飯が冷めてしまうぞ～い」
「わぁ、おいしそうですねっ♪」
「わっ、待てクリス！お前からもお袋に説明を…」
「こらっ、シオン！逃げんじゃないよっ！」
良い人達に出会えた、のかな？

女Aはエルフの長に会う（後書き）

『お袋』は肝っ玉母ちゃんにしていきたいです

女勇者はアダトリノ国王を嫌う

Ｓｉｄｅ：女勇者

「では、そろそろ王の元に参りましょう」

クロを愛でていたら急に変態巫女が不機嫌に提案してきた。邪魔だな。

「勇者様の御名前も聞かねばなりませんし」

そういえばいまだに私は名乗って無かったんだな。これは反省すべきか…

「では、勇者様。御名前を」

「結城勇那（ゆうきゆうな）だ。勇那が名前で結城が…ファミリーネームと言って通じるか？」

「はい。先代の勇者様の名前も、家名が先でございましたから大丈夫ですよ。それにしても勇那様…綺麗な御名前ですね！」

変な褒め方だな。

「そうか。では、行くか」

「はい…」

「にゃ～」

変態巫女が気乗りしない表情で、クロがのんびりとした声で賛同した。王に会いに行こうと言ったのは巫女だろうに…何か問題のある王のようだな。

「アダトリノ王が御来場なさいます。勇那様、御無礼の無い様にお願いします」

謁見の間とやらに入り壁際の椅子に座って待つこと5分、ようやくお出ましと言った所か。さて、何が出てくるか…

「来ました」

巫女の声が緊張している。心なしか周りの貴族達も同じような顔だ。あれが王…偉そうに歩いて玉座に向かっている。ただの中年オヤジ

にしか見えん。
「勇者・勇那よ、前へ」
そう呼ばれて王とやらがふんぞり返っている玉座の前で膝をつき王を見据える。こっちを値踏みするような、舐め回すような視線に不快感と嫌悪感を湧きたてられる。
「貴様が勇者か。女が勇者とは…珍しいな…」
異世界から呼びつけておいて貴様呼ばわりとは良い度胸だ。
「俺が２５代アダトリノ王だ。名は無い。さっそくだが貴様には明日から武器を選び、それを使いこなすための訓練に入ってもらう。そこそこ使えるようになったら忌々しい魔王の討伐に出てもらう。…何か質問は？」
こんな中身の無い説明…いや、命令に質問などした所でまともな答えが返ってくるとは思えない。後でメイド達か変態に聞いてみるとしよう。
「いえ、今の所はありません」
ここは無難に流して機会を待つ。いつかコイツは締めるがな。
「ではこれにて謁見を終了する。各人これからも職務に励むように」
そう言ってお付きの兵を引き連れ去って行った。何様のつもりだ、胸糞悪い。

「お疲れ様です、勇那様」
「にゃお～」
王が居なくなってから変態巫女とクロが近寄ってきた。遠巻きに貴族達がクロをゴミでも見るような視線を向けているな。「お前達とは比べるまでもなくクロは優秀だ」と言ってやりたい。…ん？貴族共の顔が青くなっていくな。
クロは言葉こそ話せないが人の言ってることは分かるようで、王が居る間は身動ぎせずに大人しくしていた。やはりクロは可愛いな。
無能な糞ジジイの視線に曝すことが腹立たしい。さっさとこの場を離れるとしよう。これ以上ここにいても気分が悪くなるだけだ。

「巫女、私の部屋があるなら案内してくれ。速くここから離れたい」
「っ！」「…っ、…！」
「はっ、はい！では此方へ」
貴族共がザワザワ騒いでいる。意識したつもりはないが声が大きかったか？どの道知った事ではないが。巫女もこれには焦ったようだな。面白いぐらいに声が上擦っている。
「…にゃ～…」
ん、クロが呆れたように溜息をついている。幸せが逃げるぞ。まぁ、私はあんな迷信どうでもいいので溜息ぐらいつくがな。

謁見の間から出て部屋へ案内してもらっているとき、ふと気が付いた。この世界に照明などの道具はなさそうだ。日没が活動終了の合図になっているだろう。そして、もう日が傾いているのか城内が薄暗くなってきている。「今日はこれ以上何かすることはあるのか？」と変態巫女に聞いた所、
「いえ、今日は御部屋に着いた後は御自由にしてくださって大丈夫です。私は明日は朝食の前に起こしに参りますので、それまでは御部屋にいて頂かないと大変なことになります」
「例えば」
「勇那様の名前を大声で何度も何度も呼ぶことになります」
「…微妙なことをするな」
「正確には『勇者・勇那様、どこですか！』を繰り返す予定です」
「わかった、巫女が来るまでは部屋で大人しくしているとしよう」
「その…私が一緒に御部屋にいれば、勇那様も自由に、」
「却下だ。身の危険を感じる」
「そうですか…グズッ…あ、こちらが勇那様の御部屋になります。浴場は付いておりますし、皆で入れる大浴場もありますよ。大浴場に行くなら呼んでください。あと、何か困った事があったら専属のメイドが待機しておりますので、ベルで御呼び下さい」
「わかった、案内ありがとう。では、また明日、な」

「はい。御休みなさいませ」

やっと休める。ん？クロが労わる様に体を預けてきたな。可愛いヤツだ。よし、今日はクロを抱いて寝よう。

女勇者はアダトリノ国王を嫌う（後書き）

ぶっちゃけ女勇者は皆嫌いです

神様はやりたい放題やる（前書き）

相変わらずの短さです

Ｓｉｄｅ：ダル

お、やっと全員１日目が終わったみたいだね～。いや～長かった長かった。

「おやようやく夜ですか。ではそろそろ彼に会いに行くとしましょう」

フリッグたんはホントに男Ａにゾッコンだお。そんなにカッコいいわけではなかったと思われ。

「フリッグ～、俺はあんな人間は、」

「お父さん、だ～い好き！」

「ぐはっ…」

フリッグたんが壊れてるお…ここは唯一の常識神たる僕の出番かなっ！

「ダルさん、邪魔です。今からジルさんにコンタクトを取りますのでそこをどいてください」

「はい…」

流石は主神様の１人娘、言葉を掛けられなくても視線だけですでにブルッちゃうよ…僕情けね～。

「ふふふ…この私に不要な気遣いをさせたんですから、それ相応の報いは受けて貰いますよ、フフフ…」

…フリッグたんが完全にヤンデレ化しました…男Ａ頑張れ～、僕は草場の影からひっそりと応援してるお。

「フリッグが、俺のフリッグが…ぐふふふふ…」

…ダメだこの親子！速く何とかしないと！…て、無理無理。この２人止めようにも力が足りないし見てるの面白そうだしで止める要素完全になくなったっしょ。ここまでおかしな人間が揃うなんて、主神様の気紛れも捨てたもんじゃなかったなぁ。

さて、フリッグたんは男Ａをどうするつもりなのかな～。

神様はやりたい放題やる（後書き）

あまりに短いので連続投稿にしました

間幕・それぞれの夜（前書き）

文字通りの内容になっております

間幕・それぞれの夜

Ｓｉｄｅ：女勇者

フカフカの天蓋付ベッド…気持ち良さそうだな。

ボフッ

「はぁ～っ…」

変態巫女に大浴場を使うのを少し待ってくれと言われた時は軽く殺意が湧いた。が、聞いてみたらクロ用に小さい区画を用意するためで逆に感謝したくらいだ。何故か異常に怯えられてしまったが…しかし姫がメイド達と一緒に風呂に入ってきたのには驚いた。オープンな国柄なのかと思ったが、実際はクロが目当てだったようで母親やメイド長に止められたらしい。無理に突破してきたと言われた時は笑ってしまった。

現状の国の体制と父親の政治には相当不満があるようで、メイド達に聞いたら変態巫女と姫は国民から慕われているようだ。実際、「姫が王位を継ぐのを良い意味で心待ちにしている者は城の内外問わずに多い」と言っていたな。あの王はかなりの反面教師な訳だ。しかし変態巫女を慕うとは…ここの人間は見る目無いのか？

「…にゃ～…」

ん？クロのヤツ、無理矢理風呂に連れて行ったのをまだ恨んでるのか。意外と根に持つな。

どうやらこの世界に猫はいないらしく皆が珍しがっていた。ついでに私は本格的に闇以外の魔法が使えないようで、属性が関係無いはずの合成魔法や付与魔法もこの分だと使えないかもしれないと、さっき変態巫女に言われた…悲しみに押し潰されそうだ…

「にゃっ！みゃあ～」

あ、自分のせいで私が落ち込んだと思ったのか、クロがかなり可愛く私の手を舐めてる…癒しだな。

明日は忙しい様だし今日はもう寝よう。色々なことが有り過ぎて疲

れた…あぁ、クロがあったかくて気持ち良い…Ｚｚｚ…
「みゃ～…（苦しい、力弱めて…）」

Ｓｉｄｅ：男勇者
「「じゃ、また明日に」」
王族？親子でハモッて出て行った。王族じゃなくて公族？しかし姫巫女が継ぐかは未定なんだよな～。
「ああ、ちなみに浴場は今日は使えないから部屋に備え付けのミスト室で我慢してね」
姫巫女・フレイヤさんはまだ帰ってなかったようで…まぁすぐに引っ込んだが。
公が話そうとした召喚の理由は「明日もまた聞く羽目になるから二度手間」と姫巫女が言ったら、公が「確かに、少々くどいな」と言いだし聞けずじまいになってしまった。公族テキトー過ぎだろ！何であの人が国のトップに選ばれたのかまるで判らん…不思議だ…はぁ…
「お疲れの所申し訳ありませんが」
「うわっ！どっから湧いたんですか！」
「湧いたとは失礼ですね。仮にも女である私をまるで虫のように表現するなんて、勇人様は随分女性に対する態度がなっておられないようですね？」
「…すみません……」
こわっ！てかさっきの２人みたいに不法侵入されたら堪らないから窓も扉も鍵閉めたはずなんだけど…うん、どっちも閉まったままだな…どっから湧いた…
「少々フレイヤ様と公にお話があったのですが…２人とも帰った後ですか。勇人様、存外使えませんね」
「いきなり使えない宣言される覚えは無い！」
「あの御２人だけにお話ししたいことがあったのですが…勇人様が

もう少し引き止めていてくれたらワザワザ2回も同じ話をしなくてもすんだのですが…はぁ…」
「喧嘩売ってんですか！」
「いえ、べつに♪では、また明日に。それとも今日は御一緒に寝て差し上げましょうか？」
「帰れ、ドSメイド！」
「ドS？勇人様の国の言葉ですか？今度意味を教えてください、興味がわきました。では、お休みなさいませ」
やっと出て行った…出る時は普通なんだな…あれだけふざけておいて終始無表情ってのも中々不思議だ…
…もう寝よう、うん…明日から頑張ろう、俺…

Ｓｉｄｅ：女Ａ
「おやすみ、クリス」
「おやすみ、シオン君」
そう言ってカルナさんの部屋の前でシオン君と別れた。村長さんと同じ部屋で寝るのに渋ってたから、
「じゃあ…私と／／／一緒に／／／…寝る？」
と言ってみたらスゴイ慌てて「やめとくっ／／／」って逃げるように村長さんとの相部屋を選んでた。やっぱり反応が可愛い…歳の離れた弟がいたらこんな感じなのかな？
ちなみに部屋とベッドは8人分あったけど普段使わないからと物置きになってて私とカルナさん、シオン君と村長さんの2部屋になった。
「あんたも中々やるねぇ♪」
そう言ったカルナさんに頭撫でられた…子供じゃないよう…
この村では銭湯が一般的らしくて晩御飯を食べた後に連れて行ってもらった。カルナさんのご飯は素朴だけど美味しい、美味しいけど素朴…そんな味だった。きっとお袋の味って言うんだろうな…私は

向こうのお母さんの顔も思い出せないけど…

「…クリス、起きてるかい？どっちでもいいか。そのままお聞き」
何だろう？ベッドに入って少ししたらカルナさんが諭すように話しかけてきた。
「今日、シオンがあんたを連れてきた時から、あんたは私らの家族に成ったんだ。だから明日からはあんたの出来ることで、我が家を支える柱の１つになってもらうよ。なぁに、シオンに狩を教えて貰ってもいいし、私と家のことやってもいい。あんたがやりたいことをやって、私らと一緒にいればいいさ」
どうしよう…私の寂しさ、見透かされてたんだ…シオン君じゃないけど、『お袋』って呼びたくなる…
「じゃあ…お袋？」
「流石に娘からはもう少し可愛く呼ばれたいね」
「ふふっ♪じゃあ、お母さん♪」
「ああ。お休み、クリス」
「うん、おやすみ、お母さん」

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
「痛いのじゃ～…ゴメンなのじゃ～…」
「悪いと思ってんならやんじゃないわよ」
さっきの一件の後、一発殴り、部屋に行き、風呂に行き、襲われかけて、また殴り、今は部屋の中…本当に学習しないわねコイツは、まったく。
「う～、イトハがわらわを誘惑したのが原因じゃろうに…」
「一緒に入ってきたのはそっちでしょうが」
「あんな、あんな瑞々しく綺麗な裸体を見て、興奮するなと…申すのか…イトハよ、生き物には出来ることと出来ん事がじゃな」
「同じ女の裸見て興奮しないは簡単だと思うわよ」

「何を申す！美しい物は性別、種族、年齢、宗教、国柄、土地柄、その他全てを超越して魅了するのじゃ！
イトハのピンと張った大き過ぎず小さ過ぎない絶妙なバランスの胸！細く、しかし健康的に引き締まった腰！流れるように全体の調和を崩さない尻！
これらは全てわらわを魅了してっ」
「アホかーっ！何恥ずかしい事大声で宣言してんのよ！バカじゃないのバカじゃないの！あ～、もうっ信じらんない／／／」
「最後まで言わせてもらえなかったのは残念じゃが、まぁイトハの可愛い照れ姿が見れた事じゃし良しとしようかの」
「こっちは全然よくないわよっ！……はぁ…もういいわ、今日はもう寝る。お休み」
「ふむ、仕方ないの。お休みなのじゃ、イトハ」
疲れる1日だった…でもやっと…やっと…はぁ～…
「離しなさい。てか自分の部屋行きなさいよ！」
「イヤじゃ！イトハの部屋にわらわも住むのじゃ～！」
「アンタ寝てる私になんかする気満々でしょうが！寝てる時くらいゆっくりさせなさいよっ！」
「ちっ……ふっふっふ、イトハよ、そんなこと言って、この城はわらわの物なのじゃぞ？」
「それがどうし、っ…アンタねぇ～」
「ふふん♪追い出されたくなかったらわらわと相部屋するのじゃ！なに、わらわも鬼ではない」
「魔族だけどね」
「茶々入れるでない…妻に成れとは言わん。わらわが、自分の魅力で、イトハをモノにしてみせる！これはそのための布石じゃ！」
……意味分かんない…もういいや…
「あ～、はいはい、お休み。…何かしたらこの城出るから」
「うむ、誓って寝ている間は何もしないのじゃ。おやすみ、イトハ」
…背中に小さい何かがくっ付いて来た…このくらいは許容範囲かし

らね…Ｚｚｚ…

Ｓｉｄｅ：男Ａ

「で、ベッドは１つで２人で寝ると？」

「うん♪」

すっごい穢れの無い笑顔…今時こんな笑顔は超貴重だろう…向こうで１３歳なら人間の汚さとかに一番過敏な時期だろうしな…年齢はさっき飯食いながら聞きました。ちなみに俺は１０歳とゆうことに…元の歳から１０も下がったよ…パジャマはロザリーのお古…水玉模様…

「俺は男なんだけど？」

「うん？」

「裸見られんのはダメで一緒に寝るのはイイって、どんなだよ…」

「う～／／／忘れてたのに思い出させないでよ～」

とりあえず、一緒に寝ない方向で…

「別に俺はソファとかでいいよ」

「ダメッ！そんなの不健康だよっ！」

さっきの木の実と何かの肉だけって晩飯でそれ言うか…不思議な思考回路だ…風呂は普通のがあったから体は綺麗っぽいっけど。

「それに、ジルってアタシの抱き枕にちょどいい大きさなんだもん！」

『だもん』じゃない。まったく、

「俺が何か変なことするかもしれないんだぞ？」

「したら燃やすから大丈夫だよ♪アタシ杖とかなくても魔法全然仕えるし♪」

……この人に逆らうのは止めよう…

「もういい、わかった。好きにしてくれ…」

「うん♪さ、寝よ寝よ～♪」

「寝よ寝よ～…」

子供2人で寝てても全然平気なキングサイズのベッドの上……マジで抱き枕にされてる…はぁ～…Ｚｚｚ…

神様と男Ａの会合（前書き）

ＰＶが５０００！
ユニークが１０００！を超えました～
日頃見に来てくれている方々、ありがとうございます！

と、嬉しい半分、
「この小説視点変わり過ぎで分かり辛い」
とのご意見もあったので、次の章からはある程度同じ人の視点が続くようにします。
ご指摘のコメントがあっただけでも相当嬉しがってるダメ作者なので誤字の指摘、要望、その他なんでも受け付けていま～す

さて、今回は、女神様にツンデレ疑惑！です
性格予想通りだったらスイマセン…

神様と男Ａの会合

Ｓｉｄｅ：女神

「今晩は、ジルさん」

「……今晩は、女神様…」

1日ぶりに会いましたが…少々私の趣味を入れ過ぎましたかね？男に見えません。

「女神相手に不満げな態度を隠しもしませんか…まぁ、私達は人間の考えてることは読めてしまいますから懸命な判断と言えるでしょうね」

「もう会うことも無い、みたいなこと言ってませんでしたっけ？」

そんなに会いたくないと思われていましたか…人間に嫌われるくらいどうということは…

「…その予定だったんですが、少々あなたに言いたいことがありまして」

「はぁ…いったいどんな御用で？（何かテンション下がってる？）」

「あなたは私達神に…いえ。今回の召喚の事は全ての神々の総意だと思われていそうなので、誤解は速い段階で解いておこうかと。そのためにこの世界に干渉する方法として夢を選ばせて頂きました。結論から言いますと、勇者も貴方方も止めねばならなかったのですが止められませんでした。貴方がとばっちりを受けただけなのは前に話した通りですが」

ダルさんがやっていたゲームでは神と人が話すのは夢の中ばかりでしたから採用させていただきました。

相手と2人だけの空間というのも話し易くて良いモノですね。

「はぁ…で、一体何の用で？」

「少しばかり、貴方自身についての説明を。貴方の特殊スキル＜悪運＞についてですが、これは私がやったのではではありません」

「え？まぁ、女神様が言ったのは頑丈ってだけだから変だなとは思

ってましたけど…」
やはりこういったことに疑問を持つタイプですか…今回の騒動の原因も多少は勘付いてるかもしれないですね。
「そうですね。私は自殺できないように＜グラップラー＞で体を強化しただけです。それともう1つ」
「？2つしかスキル持ってなかったハズですが？」
やはり気付いてない。仕方ありませんか…＜堕ちた者＞のことは黙っておきましょう
「いえ、＜悪運＞についてです。これは貴方が最初から持っていたスキルです。元の世界にスキルとゆう法則が無かった為に分からなかっただけで、元々運がマイナスの貴方が生きていく為に生まれた時から身に付けている固有のスキルです」
「ちょっ！マイナスってヤバいんじゃないですか！？」
「そうですね。普通なら生まれたと同時に死亡です。御愁傷様でしたね？」
「まったく感情が籠って無い上に疑問形ですか！」
「ええ。こんな無駄話をするために呼んだ訳ではないので」
「俺の運マイナスは無駄話か…」
「まぁ、貴方の運は置いておいて。本題です。前に話した通り貴方方5人が異世界に落ちたのは1人の神の独断であり、横暴です。ですので私は勇者以外の3人に関してあることをしました」
「もしかして、このスキルって…」
「想像の通りでしょうね。3人の中にある才能がスキルとして顕現しやすくさせていただきました。スキルのことを知らなかったので、正確には才能を伸ばした、と言うべきでしょうね」
「じゃあ、他の2人もちょっと変わったスキルを持ってるってことですか？」
相変わらず鋭い。別に＜グラップラー＞が無くても口だけで生きていけそうでしたね。私のやったことはとんだお節介でしたかね。
「ええ。少々面白いスキルですよ。貴方のが1番使い勝手は悪いで

すが…」
「エエッ！俺のスキル役立たず扱い！？」
「おや、時間ですね。何か用事ができたらまた夢で連絡します。では、向こうの世界でも頑張って生きて下さい」
「ふざけんっ！」
邪魔です。速く起きてあの神祖とイチャイチャしてればいいんですよ。…ふんっ…

神様と男Ａの会合（後書き）

これで１日目終了です
次回から時間の進みがバラバラになってきます
あと予告通り１人の視点が数話続きます

女勇者は修行を始めた（前書き）

ようやく2日目です
そして新章？開始です！

最初はやっぱり女勇者です

女勇者は修行を始めた

Ｓｉｄｅ：女勇者

ペロペロ

ん…何だ？頬がくすぐったい…ああ、クロか。

「ん～…おはよう、クロ」

「にゃ～」

気だるげだな。まぁ猫なら仕方ないか。…もう１眠りしたいな。クロ込みで…

「みゃ～…（苦しいのは勘弁…）」

警戒されてる？昨日抱いて寝たのがまずかったか。

「すまない。苦しかったか？」

「にゃ」

正直だな。今後は気をつけるとしよう。さて、顔でも洗うか…

コンコン

「勇那様、エルーダです」

身嗜み整えてから５分後。…エルーダって誰だ？

「朝食の準備が整っております。御一緒に如何ですか？」

ああ、変態巫女か。完全に名前忘れていたな。

「今行く。クロも平気なのか？」

「はい♪ちゃんと御用意させて頂きました」

「そうか。クロ、行こう」

「にゃん！（ゴハン！）」

「では勇那様、今から勇那様の剣を見に行きませんか？」

朝食後、変態巫女・エルがそう切り出して来た。なんでも午前中に魔法の練習、午後に剣の訓練をする予定らしい。

朝食の途中、クロ見たさにメイド達が食堂に大挙して大変だった…

クロは今、私の肩でグッタリしている…可愛い…
「わかった。どうすればいいかわからないしな、エルに任せる」
「はい♪では参りましょう」

楽しそうに案内されたのは地下の宝物庫のさらに奥、厳重に閉じられた部屋だった。…ジメジメしていて、とても楽しそうに歩ける場所では無いはずなんだが…
「曰く付の武器なのか？」
「いえ、勇者以外の人が触れないようにとの配慮です。この部屋の剣はとても強力な神器ですから、普通の人が持つと暴発する危険があるんです」
そんな危険な武器私だって持ちたくないぞ…
「勇那様なら平気です。莫大な魔力をお持ちですから、暴発しそうになっても抑え込めますよ。では、こちらが勇那様の武器、聖剣カリバーンです」
そういって紹介された剣は白く美しい両刃の刀身、実用性重視の飾り気の無い鍔（つば）、翼のような装飾の施された柄頭。
それは、酷く綺麗なロングソードだった。おおよそ武器とは呼べない、１つの芸術品のような輝きを放つそれを見ていると『日本刀が芸術品扱いされるのも無理無い』と思ってしまう。しかしこの剣は決して飾りでは無い。今までに人の肉を切り、骨を断ち、数多の命を吸ってきた物なのだと思うと不思議と納得してしまう。そんな刀のような残酷さと美しさを同時に感じさせた。
しかし、女の私にはちょっと大きいな。男の騎士等が持てばさぞ絵に成る剣なのだろう…少々勿体ない扱いだな。
「綺麗な花には毒がある、か。…少し違うな…」
「勇那様、どうかしましたか？」
「いや、何でも無い。鞘とかは…隣のあれでいいのか？」
「はい、お持ちしましょうか？」
「いい、自分でやる。わからないことがあったら聞く」

私は本物の剣を見るのも初めてだ。そして、これは私がこの世界で生きていくのに必要な力に成る物…無下に扱いたくは無い。人に任せきりにはしたくない。自分の意志と行動で、この剣は私の物だと示したい。

「では、今日は特別に剣の稽古のみに致しましょう」

変態巫女に逆らう理由は無い。この世界で生きるための力、手に入れさせてもらうぞ。

「にゃ～…」

クロが労わるような鳴き声を発した気がした。

「お、来たか」

剣の稽古で着たいからと運動用のタンクトップみたいな服とダンス用のスパッツみたいなパンツを借りた。何でも騎士が鎧等を着る時に一番下に着る肌着のような物だと言われ不思議がられた。確かにこの格好は少々恥ずかしいが制服や着たこともない鎧を着るよりは動き易いだろうから我慢する。

「んじゃ、始めるか。勇者様、どっからでも♪」

私の稽古は騎士団長直々につけてくれることになった。本人曰く、

「書類仕事よりよっぽど充実した時間が過ごせる」とのことだ。団長とゆう割にお堅い人物ではないようだな…顔はまぁ、微妙に悪人面だが…。変態巫女の話では数少ない良識派の騎士らしい。が、この人を食った様な笑み…悪人面が益々際立つな…

この国には１０の騎士団が有る。各団に専門が決まっていてそれぞれに名前があるようだが、どうでもいいので聞かなかった。

そう、今はそんなことはどうでもイイ…

キンッ！

「ほ～、速い。それに重い。良い打ち込みと言えなくも無い…この分なら副団長くらいになら直ぐなれる…ウチに欲しいな…」

何でそんなに馬鹿デカイ剣を軽々振り回していられる？両手でも振るうのがやっと、片手で何て論外。そんな常識を無視した剣劇で私

の速さ重視の打ち込みを、弾き、流し、カウンターを打ってくる。
私はこれでも護身用に剣道を小学校2年から今まで、計10年程やっている。大会にこそ出なかったが学校の男子剣道部員等、敵ではない実力を持っている。それも全国大会に出るような相手に対して、だ。
師匠にはまだまだ及ばないが、それでも、どんな剣ならどんな風に振るえるかは多少分かる。だからこそ自分の身の丈程もある剣をあんな風に扱えるモノなのか疑問で仕方が無い。
何と言うか…確かバスターソードとか呼ばれる剣があんなサイズだったか？
「ほら、考え事してると足、止まっちまってるぞ♪」
楽しそうに剣を縦に、横に、時にフェイントを交えて拳でまで攻撃してくる。接近戦なら王国最強と巫女は言っていたな…クッ！重い！
「はー、はー、んぐ」
「息は整ったか？じゃあ、続きと行こうかぁ！」
来る！
左、上、流れに乗って一回転した右からの薙ぎ払い。強制的に間合いを開けられた。
くっ！腕が痺れてきた。剣を握っているのも難しい。それを見越して怪我をしないように配慮されている…圧倒的だな。
「よく耐えるじゃねえか。さて、ここらでお開きだ。もういい時間だしな」
言われて気が付いた。太陽がそろそろ昼を指す。
「お疲れさまでした、勇那様。浴場で汗を落としましたらお昼に致しませんか？」
「はー、はー…ああ…そうさせ、てもらう」
「みゃー」
クロの出迎えに嬉しくなる。変態巫女？私の胸が揺れる度に目を血走らせていたヤツの出迎えなんて嬉しくも何とも無い。
とりあえず今後の課題は体力だな。…走り込みでもするか。

女勇者は修行中だ

Ｓｉｄｅ：女勇者

昼を済ませてからもう1度騎士団長に稽古を頼んだ。

「第1騎士団団長をこんなに長い時間拘束するたぁ。勇者ってのはイイ御身分だ♪」

相変わらず人を食った様な斜に構えた態度だ。ちなみにコイツのやるべき仕事は全て副団長が押し付けられたようで、『絶対に、いつか、大量の仕事、押し付けます！』と宣言していた。若い女性だったが苦労性で早死にしそうだな。

「勇那様、無理はなさらないでください…」

変態巫女が普通に労わってくれる…何だか気味が悪いな。クロは抱き抱えられてウンザリしているようだ。可愛い一匹狼め♪

「大丈夫だ。団長、始めよう」

「あいよ。そろそろマジにやって欲しいもんだ」

気付かれてたか。

私の通っていた道場では1部の者は剣道ではなく剣術を習っていた。つまり型や有効打ではなく勝つことのみに特化した剣だ。

まぁ、私が高校に上がった頃には門下生は私だけになってしったが。師匠はどこで金を稼いでいるのか全く分からない人だったが、金に困っている様子は一切なかった。本当に謎の人物としか言いようのない人だったな。

さて、そろそろ集中して始めよう…

「では、」

「おう。始めようぜ。何を教えられるって訳でもねえけどな」

一気に距離を詰める。

さっきの稽古では剣道の型道理に動き、剣道の有効打のみに狙いを絞っていた。しかし、今回は違う。足を切り払い、肩を突き、剣に交えて目を潰しに掛かる。騎士団長なら私の攻撃を捌けない等あり

えない。それは午前中の稽古で確認している。
現に今も足への切り払いを弾かれ、肩への突きは流され、目潰しは仰け反って交わされた。そのままの勢いで大剣を後方の地面に刺し、後ろに宙返りして間合いを開けられた。
下手に追撃したら顎を蹴り上げられていたな。本当に全てを完璧に捌かれる。師匠と比べればまだ戦えるが、勝てるとは到底思えないな…全くちょうど良い実験台がいてくれたモノだ…
「はっ♪こりゃいい！勇者様、こっちの戦い方のがよっぽど良いぜ！」
ふむ、団長はバトルマニアなのか？とても楽しそうだが。
「勇那様！気を付けてくださいっ！」
変態巫女が鋭い声？…っ！
シュンッ…ズバアァァ…
とっさに横に避けたらさっきまで私がいた場所を橙色の閃光が走り、地面が軽く抉れた。ナウシカの巨神兵みたいだな…
「騎士団長！」
変態巫女が抗議の声を上げている。巫女としては真っ当な抗議か？
「エル、黙っていろ。稽古の邪魔だ」
団長と向き合ったまま変態巫女に告げる。
「なっ、勇那様！こんなのは稽古ではありません！死んでしまいますよ！？」
「ちゃんと撃つまでの予備動作が有る。本気で当てに来て無かった。さながら実践訓練なのだろう」
向こうで兄弟子や師匠に付けられた稽古では予備動作無しでの攻撃も多かった。まぁ殺されるような攻撃は無かったし、極力寸止めされてたけど。『相手の思考を読み、よく観察していればどんな攻撃でも察知できる。特にアンタは害意に敏感だからね。アタシより上手くできるさ』とは師匠の自説だが、実際にコレをやると1度見た攻撃は捌ける。初めてでも攻撃される位置は予測できる。
「マジかよ…予備動作まで見抜かれたか…どこで気付いた？」

「剣先を意味も無く上げる者はいない。本当に少しだったが、突きの構えにしようとしていたのだと予測を立てた」
大検を下段で構えている時点で警戒はしていたが。
「バレバレか…よく見てる」
「いや、こちらも切り合いの最中にどう魔法を使おうか悩んでいた所だったからな。見れて良かった」
少しだけ思い付いたな…試すか。
「では、続きだ」
「はっ、上等！」
再び切り合い。今度は互いに剣を振るい、弾き、捌き、突き、拳や蹴りを織り交ぜて魔法を狙う。
剣だけでは私がどうにか凌げるので埒が明かないのだ。団長の方が実戦経験が豊富なのだろう。フェイントや競合いで団長は少しずつ私を追い詰めようとするが、そうなる前に察知し、突きや足狙いで間合いを取る。
次にフェイントで拳が来た時がチャンスだな…
「へっ、戦い方を知ってるなあ！」
来た…次はフェイントを打たせる。
上段切りをかわし、突きを返す。剣の腹で止められたが構わずもう一発。狙うは指。
「甘え！」
盾にしていた剣をバットのように振ってきた。私はボールじゃない。バックステップで避け、即座に前へ出て胴を切り払う。またしても剣に阻まれるが、団長は拳を用意している。
さて、試してみるか。向こうも何かしているようだしな…
（影よ　我が身を包みし盾とならん）
「シャドウガード！」
「ストーン・ブラストッ！」
団長の腕が巨大化して私の影を襲った。魔法名を聞く限りは遠距離魔法な気がしてならないが、まさか自分の腕に土を集めて巨大な塊

にする魔法だとは…他の騎士もこんな風に魔法を使うのか？
両者の接触点から私の方に黒い靄が、団長の方に土塊が放射されている。まるでバトル漫画だな…
ギチッ、ドゴォン！
っく！爆発だとっ……

「よう、立てるか？」
あの爆発であちこち煤けてはいるが、私のように無様に直撃を食らってはいないか…
「生憎と平衡感覚をやられて立てん」
「なんのこっちゃ…」
「勇那様！大丈夫ですか！？」
団長が何かを言う前に変態巫女が駆け寄ってきた。
「平気だ。少し休めば回復する」
「みゃ～（無理しちゃダメ）」
クロに心配掛けたのは何か罪悪感が有るな…明日から気を付けよう。
接近戦での魔法の感覚は分かった。問題は発動スピードと魔力消費による疲労だな。こればっかりは実際に明日から魔法を習ってみないとどうしようも無いな…課題はまだまだ山済みだな…

神様の本音（前書き）

神様の話は極力いっぺんに出していく予定です

神様の本音

Ｓｉｄｅ：主神

「あれ？なんか同じ人間が連続じゃね？」

「本当ですね。どうゆう事なのでしょうか」

ふっふっふ、驚いてる驚いてる。

「お父様、説明してください」

「おうよ！」

く～、これだよコレ！やっぱ父親として娘には頼りにされるってイイぜ～。感動！

「…フリッグたん、何か優しくね？いつもなら『気持ち悪い顔しないでください』くらい言ってるのに。…もしかして、男Ａと何かあったっしょ！」

「失礼ですね。私は何時も暴言を吐いている訳ではありませんよ。少々肩の荷が下りたのと鬱憤晴らしが出来ただけです」

「男Ａで？やっぱり随分と入れ込んでね？ワザワザ夢で会っちゃうくらいだし」

「そうですね。自分が担当している世界くらいの愛着はあるかもしれません。まぁ、母性本能が刺激されたとか、そうゆう類の事でしょう」

「はぁー、はぁー…」

「まぁイイけど。あの主神様どする？ちょっと過去例を見ない程にトリップしちゃってるけど」

「放っておきましょう。じき目を覚ますでしょう」

よし！フリッグのために、パパ頑張っちゃうぞ～♪

「よ～し、皆の衆！俺様がこれからありがた～い説明をしてやる。この状況をパパッと理解できる優れモノだ。心して聞くよーに！」

「あ、起きた」

「永遠に眠っていれば良かったのに」

「えっ、ちょっ、フリッグ？いったいどうしたと…」
なんだ？ナニカシテシマッタノカ…わからん…ナニモワカラン…
「お父様、速く説明を」
「お、おぉ。この見方になった理由、それは」
「それは…」
おお、ダルは食い付いて来てるぞ。フリッグは…
「ふむ、次はあの男ですか…ふぅ…」
「フリッグゥゥゥゥゥーーーーっっっ！お父さんは、お父さんはあんな、あんな男認めないからなぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「ちょっ、フリッグたん、男A見て賢者タイムはちょっとまずいっしょ。主神様暴走しちゃったお」
「はぁ、面倒ですね……フリッグ、お父さんの事、ダ～イスキ？」
「ぐはっ！」
ドサッ
「フリッグたんの幼女声、はぁ、はぁ」
「全く、何故私が汚物変態コンビの相手などしなければならないのか…お父様、起きて下さい」
…うぅ、何だ、何か、スゴク幸せな気分だ…俺の心が満ち足りている…
世界が、世界が輝いている…あはは、世界ってこんなに綺麗だったのか…
「お父様速く起きて下さい。そして説明を」
「あ、ああ。おはようフリッグ。で、説明って何のだ？」
「女勇者の話が続いた理由です」
ん？ああ、そういえばそんなことしたな。
「いやな、単純に覚えてらんなかったからこうしてみた」
前のだと誰が何やってたか覚えてらんなかったからな～。
「本当にそれだけですか？」
「ふっふっふっ、そんなわけねぇだろ？もちろん、別の理由が有る！」

ここまで引っ張ったら食い付いて…
「どうでもいいので速く話して下さい…はぁ…」
「あ、はい、すいません、調子乗りました」
何か本気で相手にされてない…これはキツイぜ…
「はぁ、はぁ、フリッグたんの幼女ボイス」
何かダルがやべぇ…あいつが世界の管理人の1人って、ヤバくないか…
「速く話して下さい。話が進みません」
「お、おう。1人を見る時間を増やした理由、それは…
俺の出番を増やすためだっ！！」
「……死ねばいいのに」
グハァッ！

神様の本音（後書き）

最近神様の変態化が激しいです…

男Aは武器に迷走する（前書き）

バトル難しいです…
バトルものの作者さんスゴイです

男Aは武器に迷走する

Ｓｉｄｅ：神祖

ん…眩しい…朝？

「ふふぁ～あ…あれ？」

抱き枕…ドコ……あ…

「ジル…」

…いない…一緒に寝たのに…一緒にいるって、言ったのに…また…

1人？…私が、神祖だから？神祖じゃなかったら…1人じゃなくなるの？…でも、無理だよ…だって…神祖だってこと…変わらないもん……うぅ、

「ひっく、グズ…じる…やっぱり…」

ガチャ。ギ～…

「あ、おはよ～」

……あれ？

「ん？…嫌な夢でも見た？」

…いた…ちゃんと…ここにいた…

「ふえ～ん、ジル～～～～！」

「え！ちょっと、何？どしたの！？」

よかった～…ちゃんと、一緒だ～…

Ｓｉｄｅ：男Ａ

「な～んだ、そうだったんだ～♪」

朝から何だったんだ？トイレに行って、朝飯何が良いか食材庫で一通り野菜とか見て寝室に戻ってみたら泣いてるし抱き付いてくるしで…ちょっとパニックに成った…何で泣いてんのか聞けなかったし…ロザリーって情緒不安定？年齢的には思春期真っ只中だからあながち否定できなさそうだ。まぁ聞いても何のことか分かってもらえないか。

「ゴメンね…いなくなっちゃったと思って…」
ああ、そういや昨日もあったな、こんな反応。
「別に行く宛てなんて無いし、ロザリーが良いなら『ここに住んじまうか～』くらい図々しい事考えてるよ？」
正直冗談です！…だって昨日どれだけ辛かったか…耳元に吐息掛かるし『う、ん』なんて声出すしで…寝辛い事この上無い…
据え膳食わなかったの後悔してるけど、俺の体って１０歳なんだよな…何もできん…何この生殺し…２０歳には辛いわ～。
「大丈夫！ジルの作ったご飯美味しいし、全然イイよ！！」
思いの外強くＯＫされてしまった。これは…俺の旅してみたい計画は暫く保留だな…ヤレヤレ、断れないからズルズル深みに嵌る。向こうでもこんなこと一杯あったみたいだな。相変わらず詳細やら関係者のプロフィールは靄掛かって思い出せんが…
ちなみに、今は肉野菜サラダと食パン食ってます。ドレッシングはオリーブオイルと塩やら卵やらテキトーに混ぜて作った。
「そういえばロザリーってどうやって食べ物手に入れてるの？手伝える事なら手伝うよ」
流石にヒモの居候は勘弁！プライドとかじゃなくて人として堕落し過ぎてる気がして気持ち悪く成ってくる。他の人がヒモに成ってても何も思わないのに、自分がそうなるかもって思うと異常に嫌な気がする…自分オンリーの潔癖症か？
「えっとね～、合成魔法で作った魔具を人の国に売って、手に入ったお金で野菜買ったり材料買ったりしてるよ。お肉とか毛皮は狩でだけど」
「あ～、魔法は無理そうだから狩を手伝うよ」
俺は魔力低過ぎで魔法は手伝えない…選択肢これしかないな…
それにしても１人でこんな風に生活してるのか…何か寂しいな。どうりでやたら人に触りたがるわけだ…
「ホント！？ヤッター♪あ、いくら＜グラップラー＞でも魔獣を直に殴り続けたら手が…」

「確かに。俺の手どう見てもすぐ痛んで拳が砕けちゃうな…鎧の手の部分とかないかな？」
本当はガントレットとか、最悪メリケンサックでも可。
「じゃあ、グレゴリウスさんの所行ってからにしよう。鍛冶屋さんで色んな武器作ってるから、ジルに合う物がきっとある、ハズ…」
「急に弱気になったね…まぁイイか。食べたら行くの？」
「うん。速い方がいいでしょ？」
ふむ、鍛冶屋のグレゴリウスさん…ゴツそうだな…

「ほう、こんなチビ助が＜グラップラー＞を…本当に男か？」
…ドワーフ？でいいのか？火で焼けた赤い肌、１６０センチくらいの小柄だがガッチリした体型、そして長く立派な髭…俺を女扱いしたことも含め赤ヒゲと命名しよう…
「おい、小僧」
「はい、何か？」
「お前さんどんな武器が欲しい」
ロザリー曰く喧嘩屋系のスキルはCランクとかじゃ役に立たないけど高ランクだと何持ってても発動するから普通、武器を持つらしい…喧嘩で鉄パイプ使ったぐらいしか経験ねえよ…
「あ～、手甲脚甲でお願いします。剣とか弓とか上手く使えなくて…」
嘘は言ってない。喧嘩では専ら蹴りと肘を打撃に、手を防御に使ってた。
「ふん、いいだろう。ちょっとこっち来な。調節すっから手足測るぞ」
サイズ確かに辛いか…

「ね、良い人でしょ♪」
赤ヒゲさんが作業に入ったのでロザリーとお喋り。手足のサイズ測る時やたら揉むように、探る様に触られて気持ち悪かった…人に触

れられるの苦手…
「まだ分かんないよ…さっさと籠っちゃったからまともに話してないし」
「ほう、坊主、ガキのくせに大人をよく見てるじゃねえか。ほらよ」
「え、ああ。ありがとうご、ざい…ます……何持ってんすか？」
俺に渡した指輪と甲に板の金属を仕込んだフィンガーグローブ、同デザインの脚甲、ともう1つ。自分の身長よりもデカイ170センチくらいのハルバートを持っていた。
「今からテメエが俺の武器に相応しいか試す。表出ろ。死ぬ気で来ねえと死ぬぞ」
どの道死んでる！
「ジル頑張って♪」
にこやかに応援だと！このオッサンからは殺伐とした空気しか感じねえぞ！

「ちゃんと着けたな。始めるぞ、用意はいいな」
疑問形に成って無い…強く生きよう、俺！
「じゃあ、始め！」
ロザリーの全然雰囲気の無い気の抜けた掛け声と共に、赤いドワーフが突撃してきた。
初手は槍らしく突きかよ！間合いが判りずらいんだよ、なっ！
右拳で流しながら左足で腹を狙う。一瞬でバックステップされ、また睨み合う…死ぬかと思った…速過ぎだよ！そしてこれに反応できた自分のスペックにビックリだよ！
まぁ、体小さ過ぎてリーチが足んないのが1番の問題なんだけど…
「ほう、スキルは伊達じゃねぇか…だがまだまだこれからだ！」
今ので終わってくれるんじゃないか。そんな淡い少年の希望は打ち砕かれました…
突きも薙ぎ払いも使った連続攻撃が始まった。突いた先から横に振るうとか勘弁だろ！

手で弾き、流し、反撃を織り交ぜブレークポイントを作る。大体５コンボ毎に睨み合いに成る…よし！次に突きから薙ぎ払う時を狙う…

「守りは上々…しかし攻撃が薄い。本気で攻撃して来い。できんなら止めちまいな！」

来た…集中…勝負は一瞬。ここまで決定打が無くても突き、薙ぎ払いだけは防御しきれてない。なら必ずそれを織り交ぜてくるはず！

心臓突き、右半身前に出て避ける。右肩狙い、下から右手の甲で弾く。胴体に突き、左に回避。刃をこっちに向けて薙ぎ払い…来たっ！

前に出ながら左拳を刃に這わせて間合いを詰める！これなら、

「なっ！」

前に避けるとは思わないか、甘い！ハルバートの柄を左手で握り前に出る勢いで一回転。狙うは顔面！くらえ、右後ろ回し蹴り！

「ぶっ！」

ぶっとべ、馬鹿野郎！

「勝者、ジル～」

ロザリーの声って…やっぱこうゆう雰囲気には向いてないな…

男Ａは武器に迷走する（後書き）

バトル短っ！

測ってみたら７００文字無いくらいでした…

神祖についてはまた別の機会に説明はいります

男Aは習うより慣れる（前書き）

前回の続き
男Aは赤ヒゲに勝った

男Aは習うより慣れる

Ｓｉｄｅ：男Ａ

「ジルって強いんだね～。グレゴリウスさんに喧嘩で勝った人初めて見たよ？戦い挑まれた人も始めてみたけど」

何で俺は喧嘩売られたんだ？しっかし踵で蹴っちゃったけど平気かな？鼻折れたとか無いよな……っ！

「ほう、今のも避けたか…」

気絶した振りから不意打ちって…しかも首狙いかよっ！避けて無かったら死んでるぞ…

「良いだろう。坊主、そいつはくれてやる。大きさが合わなくなったら持ってきな。タダで合わせてやる…チッ」

なんか認められた…かなり不本意そうだけど…まぁ確かにこのグローブはメリケンみたいに指輪状になってるから調節必要になってくるし有り難いけど…何かかなり厨二くさい武器だな…嫌いじゃないけど。

「もう１つ」

何か深刻な雰囲気…これは真面目な話か…

「ロザリーに傷一つでも負わせたらブチコロス！」

ロリコン！？しかも後半カタコトじゃね！？

「グレゴリウスさんもそんなに心配しなくても平気だよ～。ジル強いもん♪」

絶対このオッサンが言ってるのはそうゆう事じゃなさそうだけど…

「しかしなぁ…ロザリーをどこの馬の骨ともしれん奴に任すなんて…」

後半は声小さかったけど聞き逃さなかったぞ…もしや…親？

「あ、じゃあ私達グライドとスーナさんのトコ行ってくるね。ジル、行こ♪」

「え、ああ、おわっ」

手引っ張らなくてもついてくよ～…赤ヒゲの視線が怖すぎる…

赤ヒゲの妻子、スーナさん（ヒゲ夫人）とグライド君（若ヒゲ）とやらと顔合わせを済ませてから予定通り森で狩を始めた。
ヒゲ夫人からは赤ヒゲ以上の殺気を、若ヒゲからは『何だコイツ』と不躾な視線を頂いた…超ゲンナリ…
「昨日はジル来たのに何も出来なかったからね、今日は御馳走にしよっ♪」
テンションタケー。別に水差す必要も無いか…どうせ暫くは一緒にいることになりそうだし。
「と、ゆう訳で、今日はアレを狙ってみようと思います！」
そう言って指されたのは……カバ、なのか？でも色緑って、大きさ2メートル程って…何だアレ…まだ２０メートルくらい距離が有って気付かれては無いけど…
ちなみに俺の視力は元から2以上あってこの距離でも余裕で細かく観察できます。まぁテレビとか見ないし、パソコンは大学の課題でしか使わないし…何して遊んでたのって？本読んだり、曲聞いたり、ドラマＣＤとかだよ。まぁゲームも好きだけどそんなに長時間しなかったし…
「この辺では一番美味しいって言われてるカバだよ♪アタシもまだ1回しか食べたことないんだ～」
それ以前に倒せんのか？てか名前カバかよ！何か手抜き感ないか！？
「あれって…倒せるの？」
素朴な、それでいてかなり大事な質問だ。ロザリーに傷一つでも負わせたらヒゲ一家に殺される…完全に前衛決定だな…まぁ後方支援出来るような魔力無いから最初っから前衛は決定してるんだけど…
「うん。アタシだけじゃ無理だけど、ジルが前で殴り合いしてくれてればその間に丸焼きにできるよ♪」
カバと人間の丸焼きでも作る気か…魔法発動前に全力で逃げなきゃな…てか作戦に成って無い気が…イイや、気にしたら負けだ。早く

慣れよう…
「じゃ、始めるよ?イイよね♪」
そういって何か貯め始めた…魔力だろう赤い光がロザリーを包んでいる。火の魔法か?
「じゃ、ジル。とりあえず、カバさん引き付けてね♪」
た~の~し~そ~。腹括るしかないのか…はぁ…
「了解…周り、気を付けてな」
魔法貯めてる時に他から攻撃されるのは避けたいよな…
「うん。心配してくれてアリガト♪」
ふぅ。行きますかね…
カバは左腹をこっちに向けてる。とりあえず狩の基本なんて知らないので左後ろ脚目掛けて突撃。こうゆうときは某死神なGパイロット曰く
「突撃有るのみ!」
音立てないようにしても野生動物相手に隠れきれる訳が無い。俺は所詮素人だ。なら最初から突っ込んで、真正面から対峙してやるつもりでいた。予想通り俺が声を上げる前からこっちに気付いて構え始めた。まぁ構えるといっても猪の『突進準備!』って感じだが。
…正直デカくて怖い…
向こう、約2メートル。俺、約135センチ。
頭2~3個分違うんだけど!?ちょっ、間近で見ると余計に大きく見えるんですけど!目測誤ったかな…
「ぶぎゃぁぁぁぁっ!」
声でけ~。まぁそれくらいじゃ止まらないけどな!勝負だデカバ!
(デカいカバ)
ずどどどどどど!
さっそく突進か…猪相手のモンスターなハンターさんって度胸あるな…しかしここで俺の取るべき行動は、
「ハッ、フッ、と」
身軽さ活かして木の上に退避!いや~、やっぱりね、怖すぎるわ~。

戦うとか無いわ～。悔しそうにこっち見てるな。ここは一つ
「見ろ！カバがゴミのようだ！ふはははは！！」
一度やってみたかったんです、スミマセン…
「ジル！その位置で引き付けてて！」
ロザリー！？この状況でそんな大声出したら！
「ぎぃぃぃぃぃぃ！」
やっぱりか。狙いロザリーにしやがった！
「残念、させねえよ！」
木から飛び降りて死角となる頭上から飛び蹴りを当てる。靴の硬さと体重と速度でそれなりにダメージを…はい、無いですね。俺軽過ぎですね。こっち睨んでる。コエ～…でも、
「じゃ、イックよ～♪」
ロザリーが持っている杖の腹に魔力が集中しているのか、ルーンが刻んであった所から炎のような紅い光が出ている。隠密には向かないな～。とりあえず顎に一発、で即刻退避～！
「バイバイ、特大のフレア、だよ！」
カバの足元から火柱が立ちその全身を飲み込んだ。生きたまま丸焼きにするとは、子供の残酷さには恐れ入る。まぁどっち道食べるんだから俺に何か言う権利は無いな、うん。
「このくらいかな～」
イイ感じに火が通ったっぽいので止めたようだ。なんとなく『上手に焼けました～♪』と聞こえた気がした…いかん、ゲーム脳だろうか。心配だ…
「この肉、どうする？流石に2人じゃ大き過ぎるよ？」
「肉屋さんに切り分けてもえばいいよ♪中々獲れないから高く買ってくれるの♪」
この辺肉屋もあるのか。ロザリーの家とヒゲ一家の家は20メートル程しか離れていないが、見渡す限り他に家は無かったはずだ。
「じゃ、帰ろ～」
カバ引き摺って帰るが今日一番重労働になりそうだな。

男Aは習うより慣れる（後書き）

もう1話あります

男Ａの特徴

Ｓｉｄｅ：男Ａ

「お、重い…運ぶ手段何か考えとくんだった…」

「うん…歓迎会やるので頭一杯だった。失敗失敗♪」

あれ楽しそう。どして？

ただいま丸焼きカバを引き摺って移動中。重過ぎで２人がかりです…汗気持ち悪い…

「そういや肉屋ってこっからどんくらい？」

「あ～、このペースだと２時間くらいかかるかも」

無理だ。家着いたら速攻寝に入る。

「うわ～…ちょっと運び方考えよう……ん～…丸太何本か敷いてその上転がしてくのは？」

「あ、イイかも。でも丸太どうしよう…」

「そこらの木切ろう。風の魔法の練習になりそうだし」

「うん♪じゃあの木なんかどう？」

電気は火と風、氷は水と風の混合魔法。つまり俺が１番得意な基本属性は風だろうと思う。電気や氷を出すのを試してみたら電気は上手くいくんだけど氷はイメージが悪いらしく失敗している。ちょっと風とか他のを練習して頭を切り替えてみることにした。ちなみに火は料理中に試して成功。

とりあえずロザリーが指した２．５メートルくらいの木を狙って…

「風牙！」

シュパパパッ！

振った右手の軌跡に乗って不可視の刃が飛んだ。しまった、狙った木と奥の２本まで切り倒してしまった…う、魔力出し過ぎた。気持ち悪…

「ジル、もう少し抑えなきゃ。ただでさえ魔力少ないんだから」

お姉さんぶった呆れ顔で注意された。中身２０でも見た目は１０だ

からな～。２代目某少年探偵になれるな…薬で成った訳じゃないし、酒で元に戻れる事もないだろうけど。

「う～…フルフル…よし！回復完了」

「速いね～。普通１時間とか掛かるのに」

何が速いのか。実は俺、魔力の自然回復速度が異常に速い。今は少々使い過ぎたので１分くらいだったが、昨日家で料理用に火を使った時は１秒も立たずに回復しきった。メーターとかで見れるわけじゃないから体感なんだけどね。つまり大技は打てないけど小技は連射が効くのである。

「昨日も電気だして『うえ～』ってなってたのすぐに治ってたもんね～。どうなってるんだろう…」

ジ～っと見られてる…気になる。あんまこっち見んな。

「あの回復速度は尋常じゃない。何か見えない特殊スキルでも持ってるのかな…それともこれも＜悪運＞の効果？でも今までそんな話聞いたこともないし…これは１度徹底的に調べる必要があるよね…」

「ブツブツ言ってないで手伝って…」

とりあえずカバのサイズから考えると１０本くらいあればいいかな。１本切れたらそこで止まるくらいに魔力調整して…

「風牙！」

シュパッ！

今度は成功。いっそこの量で使うようにルーン刻もうかな…短いから指輪に書くのも問題ないだろうし。ルーンで刻まれた魔法は魔力量、位置、効果を変更できないので俺にとっては助かる話だ。普通は使い勝手悪いと言われてるらしい。

さて、魔法使ったと同時に回復がスタート。元の魔力量が少ないからか、一瞬で回復終了。

…回復量は多いのだろうか？…その辺はロザリーに任せよう。素人の浅知恵じゃどうしようもなさそうだし。

「魔法使ったと同時に回復が始まってる。回復量は…人よりちょっと多い…これは調べ甲斐があるよ…ジュルリ」

ん?舌舐めずりしてる?カバがそんなに楽しみなのか?じゃあちょっと急ぐかな~。あんま変わらないだろけど。

丸太作戦が上手くいき、３０分くらいで肉屋の前に着いた。
ロザリーが亭主と話しているので空を見上げて時間を潰していた。
空は普通に蒼い。まぁ遠くに黒い霧が帯のように見えてるんだけど。
太陽が高いしあっちは南か。逆を見ると同じように霧がある。ただ東と西は水平線の奥に消えてしまっている。ギグの森デケー。
「あれ…オネエちゃん、だあれ?」
「ん?」
いつの間にか目の前にチビッ子がいた。まぁ7歳くらいか?見た目年齢は俺とそう離れてないと思う。
「ああ、俺はロザリーの…何だろう?まぁイイや。ロザリーの友達のジルだよ。ちなみにオニイちゃんね」
「お姉ちゃんの友達?」
聞かれても困る。俺自身『居候じゃね?』と思ってるくらいだ。てか男って部分はスルー?
しかしこの娘、なんとなく向こうで飼っていた猫を思い出してしまう。何を隠そう猫耳に尻尾付だ。獣人の子供なのかな?
「ジル~、終わったよ~」
「お姉ちゃんっ!」
トサッ
「わっ!も~、危ないよ、リナちゃん♪」
注意してる割に楽しそうだ。やっぱり知り合いだったか。
「ジル、リナちゃんに自己紹介した?」
さっきの緩みきった声聞いた後に年上らしい発言聞くと違和感がスゴイ…
「俺はしたよ。その娘が自己紹介する前にロザリーが来たから、その娘の名前はまだ聞いてないけど」
「そうなんだ。じゃあリナちゃん。向こうのお姉ちゃん…お兄ちゃ

んに自己紹介して」
「今お姉ちゃんって…」
「…リナです…はじめまして…」
完全にロザリーの後ろに隠れてしまっている…ますます猫っぽい。
当り前か？
「リナちゃん、ジルは怖くないよ～」
ロザリーの必死の説得も虚しくリナちゃんが俺と話すことは無かった…ちょっとショック…ロザリーの紹介で肉屋の娘だとゆうことはわかったけど。

「さぁ！これが本日のメインディッシュ、カバ肉のステーキだよ♪」
いつもより多く楽しんでおります。訳判らんな、止めとこう。
「でかいな～。食べきれるかな？」
「大丈夫大丈夫。残っても冷蔵室で保存が効くから♪」
そう言って普通にナイフとフォークで食べ始めた。バランス良くパンとサラダもある。昨日の晩飯のバランスの悪さは一体…
ちなみに冷蔵室とは地下にある氷石と呼ばれる魔法石で冷蔵庫並みの温度になってる部屋の事だ。正直糞寒い。
そんなことは放っておいて、肉肉♪正直結構楽しみでした。ではさっそく、
パクッ
……上手い。ただコレ…普通の牛肉？野生のカバが食用の牛肉と同じ味ってスゴイな！乳牛捌いても食用牛肉には遥かに劣るはずだぞ！どうなってんだカバの生態？
「えへへ♪美味しいね、ジル♪」
すごく無邪気な笑顔…朝、何故か泣いてたのと同じ人の表情とは思えない、綺麗な笑顔…
「うん、美味しい。ありがと、ロザリー♪」
「へ……うん♪」

こうして2日目が過ぎて行った…

男Ａの特徴（後書き）

新キャラいますがあまり出番が…

男Ａの魔法の説明はもうチョイ先になります

神様と男Ａの会合ｐａｒｔ２（前書き）

予想以上のグダグダ回です

アンチ女神様には辛いかもです

神様と男Ａの会合ｐａｒｔ２

Ｓｉｄｅ：女神

「ん…またか…」

「またです」

まるで無反応ですか。詰らないですね。

「すいませんね」

「…何の事でしょう」

「反応薄くてつまらなかったんでしょう？」

神の心を読まないで欲しいですね。

「…わかりやす…」

「小さく呟いても心が読めるのですから意味は無いですよ」

「癖ですよ。人間は心読めませんから、こうゆうのも必要なんです。で、２日連続で何のご用でしょう？」

相変わらず不機嫌を隠す気も無いと…神を舐めているのでしょうか。

「（面倒事に巻き込まれる前にロザリーの所に戻らないと。神様に関わっても碌な事なさそうだし）」

…舐めてるのではなく危険物扱いしているわけですか…

「そのように警戒されるのは少々傷つくのですが」

「いや、神様にされたこと考えたら普通の反応ですよ」

「全く。まぁ良いです。今日は貴方の魔力特性について話そうと思ってこの場を設けさせていただきました」

「回復が異常に速い事についてですか？」

「はい。原因はまぁ、＜悪運＞ですが」

「やっぱりか…（他にありえそうなモノなかったし）」

「実は＜悪運＞はかなり魔力を使うんです」

「…具体的にどれほど…」

「そうですね。＜悪運＞は持ち主の魔力量の…５割を使いますね。ちなみに常人の魔力量は大体１００程と考えて下さい」

「……俺の場合は？（何かオチが見えてきたぞ）」
「貴方の場合は元が６０なので今は３０と成りますね」
「元から少なっ！え～と、それと回復が速いのとどう関係が？（元々才能無いのな）」
「簡単です。魔力量３０では日常生活でさえまともにおくれない。なので、＜悪運＞により貴方の魔力回復量と速度は高く設定された。それだけです」
「便利っすね＜悪運＞（ひゃー、ご都合主義）」
「便利ですね＜悪運＞。さて、いきなり話す事が無くなってしまいました。どうしましょうか？」
「このまま静かに寝させて下さい（今日疲れた）」
「嫌です。私が退屈です」
本音は２人の相手をしたくないからですが。
「知ったこっちゃありません（マジで知るかよ）」
「そんな事言わずに何か話しましょう。私をそれなりに楽しませてくれたら帰してあげますよ」
「横暴ですね（俺の周りこんなんばっか）」
「神ですからね」
「ロザリーが恋しいんです（嘘は言ってない）」
「私は貴方が恋しいんです」
嘘は言ってません。
「自分不器用なんです。小粋なトークとか、できません（てか話題無い）」
「私には関係ありません。さぁ、速く。Ｈｕｒｒｙ　ｕｐ」
「あ、見て下さい。面白い形の雲ですよ」
「興味が有りません」
「じゃあ、テレパシー切ってトランプでもしません？あればですけど」
「生み出せますよ。では何をしましょうか？」
「え、ホントにやるんですか…じゃあ大富豪でも…２人じゃ微妙か

…」

「いえ、やりましょう。なるべく時間を潰しましょう」

「暇なんですね。では、と」

手慣れた様子で私の手からカードを取りシャッフルし始めました。

「ルールは…俺の記憶から見て下さい。出来ますよね？」

「ええ、大丈夫です」

ふふふ。さぁ、ゲームの時間です。

ゲーム開始から約1時間後。ゲームを変えたりして15戦目。ブラックジャックの3戦目。

「……弱」

「っ！…グズッ」

「え！あ、スイマセン」

「いえ、どうせ弱いですよ。ええ、事実ですとも。相手の心が読めなければ神とはいえ所詮この程度ですよ。所詮私なんて心が読めなければ人間相手にカードゲームで1勝もできない駄目な存在なんですよ…ヒック」

「テメー！おいこら人間！！俺の可愛い娘何泣かしてやがるっ！！」

「ええ！誰！？」

「お父様、邪魔です。私はジルさんに己の力のみで勝つと決めたのです。邪魔しないでください」

「あ、父親なんだ…神に父親ってよくよく考えると不思議」

「でもようフリッグ～」

「五月蝿いですよ、駄目お父様。暫くその口縫い付けて声を出せないようにしておいてください。ではジルさん、今日は負け込んでしまいましたが、明日こそは、貴方から勝を頂きます！首を洗って待っていて下さい」

「え、何のはなｓ…」

明日こそ絶対に勝ちます！

「うんーーー！うむーーー！！」

「あ、お父様。私達の出番はもう少し先に成りますから、前回言っていた出番増はありませんよ」
「っ！！！」
さて、ゲームの特訓でもしましょうか。

神様と男Ａの会合ｐａｒｔ２（後書き）

神様の話が珍しく長くて作者がビックリしました

もはや
女神様と男Ａの会合
にするべきな気がします

女Bは自分のスキルに絶望した！（前書き）

タイトルは作者の気紛れです

この作品のネタ入れてみて！

とゆうのが有りましたらじゃんじゃん言って下さい

知らない作品でも見て、取り入れるかもです

女Bは自分のスキルに絶望した！

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「…む～…イトハ～…Ｚｚｚ…」

…寝顔は可愛い子供なのよね。

「むふふ…そんなにてれるな～…よいでは、ないかよいではない、か～」

前言撤回。ただのエロオヤジね。可愛いとか思っちゃった自分が恥ずかしい…

「…ふむ～…やわらか～、あったか～…」

はぁ…寝る時は背中に引っ付いてたくせにいつのまに前から抱き付いたのかしら?私の寝返りに合わせて、とか?

「…うむ～…イイ匂い…」

しかし…さっきから寝言がはっきりし過ぎてる！…変な特技ね…

「はぁ～…ふむ～…ゆ?」

「おはよ、リリー」

「…おはよう?…イトハ！?わっ！見るでナイ見るデナイ見ルデナイ！」

ありゃ?顔隠して後ろ向いちゃった。

「どうしたのよ?」

「その…寝起きの顔は…あまり、見られとうない…」

「いいじゃない。てゆうか同じベットで寝たら見られるに決まってんでしょうが」

「それでもヤなのじゃ～」

反応がイチイチ可愛いわね…ここはお約束として…

「いいから顔見せなさいよ♪」

昨日散々やってくれた『お礼』もしないとね♪

「い～や～じゃ～！」

「観念しなさい！」

よし！腕取った！
「っ！」
あ、絶望してる…やり過ぎたわね…でも何でこんなに嫌がって…ああ。
「涎の痕が付いてる」
「っ！ふぇぇ…」
あ、泣きそう…しょうがないわね…
「別にそれくらいどうってことないでしょ。ほら、拭いてあげるからこっち見なさい」
「…」
まだダメか…まったく…ならこうしてやる！
「…？…アッ、キャハハハハッ！ヤメッ、ワカッ！向く！そっち向くからっ！アハハハハハ…はーはー…酷いのじゃ…」
ふん！勝ったわ♪やっぱり駄々こねてるガキにはお仕置きが1番よね。
「最初から素直にこっち向けばいいのよ」
「ムー…わらわは見られとうなかったのじゃ…」
「はいはい」
とりあえずベッドの脇の机に掛けてあるタオルで拭いて、と。
「まぁ、こんなもんでしょ。あ、そういえば朝ご飯とかあるの？」
「…タオル無しで直に拭いて…ん？ああ、そうじゃな。食堂に行けば朝食があるのじゃ」
何か上の空って感じだったわね。ちょっとやり過ぎたかしら？まぁ、気にしてもしょうがないわよね？
「んじゃ行きましょ。あ、食べ終わったら魔法とか昨日の槍のこととか教えてね」
「うむ。今日の朝食はなんにしようかの♪」
楽しそうね。ここのご飯美味しいのかしら？

「で、ここまでが魔法とスキルについてじゃな」

結論からいうと魔王城の食事は美味しかった。シェフが牛の角が生えた女の人でビックリしたけど…。

『魔王様、朝食はどんなのがイイ？』

『うむ～。さっぱりしたので頼む』

『あいよ。あんたはどんなのがイイ？』

『えっ、ああ、私？…わかんないからお任せするわ』

『そりゃそうか。昨日来たばっかだったね。じゃ、朝だし軽めのにしとくかね～』

初対面なのにこんな感じで話し易い人？だった。夕食は執事が運んできただけだからシェフとは初対面だったのよね。

ちなみに料理は材料が違うだけで向こうと変わらないみたいだった。とりあえずスクランブルエッグみたいなのと緑なトマトの和え物、主食は白いパン。魔界って言う割に食事普通過ぎてビックリしたわ…

「ではイトハのスキルを見てみようかの…＜杭打ち機＞に＜心見の魔眼＞…相手の心を傷つける専用の組み合わせじゃな…」

「何かスゴク嫌な言い方ね…」

「＜心見の魔眼＞はまだいいのじゃがな…＜杭打ち機＞の方が少々問題なのじゃ」

「どうゆうこと？」

「＜杭打ち機＞は、相手のトラウマとか傷つく言葉とかを言った時に相手が感じる精神的な苦痛を増幅させるスキルなのじゃ…このスキルを持っていた者はほとんどが街から離れて暮さねばならなかったらしい…」

「…アンタが泣いたのはこのスキルのせいなのかしらね…」

昨日リリーが泣いた時、泣き虫なのかと思ったけど、そうじゃなかった…多分、このスキルのせいで結構シャレにならないダメージを受けたから、あんなにワンワン泣いたのね…って私のせいじゃない！何かブルーだわ…

「だとしても、泣いたのはわらわが弱かったからじゃ。スキルの有無など些細なことじゃ。…わらわは、そのスキルにも勝たねばなら

ん」

…少しだけ、リリーの強さが羨ましい。こんなに小さいのに、リリーは自分の目標を具体的に持っているように見えた。惰性で日々を生きていた私とは違う、そう感じた。

「ふふ♪じゃあ、アンタはこのスキルに勝つように、私はこのスキルを使わないように、頑張らなきゃね」

不用意に誰かを傷つけるようなこと言ったら危な…

「あ～そのじゃな…言い辛いのじゃが…その、＜杭打ち機＞は常に発動しっぱなしのスキルなんじゃ…」

「…受動スキルがどうとかってヤツ？」

「いや、特殊じゃな…相手を傷つき易くするなんて変則的なスキルじゃし。＜心見の魔眼＞は強化スキルじゃな。どう相手の心を見るかは使い手それぞれらしくての、わらわは知らんのじゃ」

…どっちのスキルも、使われる方はたまったもんじゃないわね…はぁ～…

女Bは自分のスキルに絶望した！（後書き）

3人目は女Bにしてみました

さて次はどっちにしましょうか…

女Bは魔法を練習する？（前書き）

タイトル通り練習そっちのけに

女Bは魔法を練習する?

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

私のスキル説明の後、午後になってから魔力量が高いとかで魔法の練習をすることになった。午前中何してたかって?私を押し倒そうとするバカ娘から逃げ回ってたのよ!何が『まてまて～♪なのじゃ～♪』よ!普通『まつのじゃまつのじゃ～♪』じゃないわけ!?そして私にそっちの趣味は無いって何度言ったらわかるのよふざけんじゃないわよ!!

城内の魔族達誰も見てるだけで助けてくれないし!微笑ましいモノ見る目で見てきたのはまだいいわよ!でも睨んできたヤツっ!そんなに羨ましかったらいっそ変わりなさいよ!!私はイツでも変わるわよ?

「ふむ、順当にいけばイトハは火が得意なはずじゃな。では早速試すとしよう」

魔界の青空の下で魔法の練習…シュールね。あ、今のリリーは真面目に教えてくれてるんだしちゃんと聞いてないと。

「どうやればいいのかわかんないわよ?私、魔法なんて昨日のバインドしか見たことないし」

正直思い出したくない。うえ…思い出しちゃった…

「そうじゃな…まぁ見ておれ」

そういって空に手を向けて何かを唱え始めた…

「火球よ　爆ぜよ　ファイヤーボール」

ごぉう!…ぼぉんっ!

…何アレ…空が燃えた?

「う～む、目一杯魔力落としてアレか…まあよい。イトハ、試してみい。大事なのは想像力じゃ!」

「…本当にやるの?」

「わらわの魔力が大き過ぎるからあの様な事になっただけじゃ。そ

なたも魔力量は中々のもんじゃがあんなことにはならんから安心せい」
正直安心できる要素が無い。でも教えて貰ってるんだしな～…
「わかったわよ、やるわよ。ふ～…火球よ　爆ぜよ　ファイヤーボール」
同じように空に手を向けて唱えてみた…
しゅぅぅぅ…ぽんっ
可愛らしいサイズの火の玉がフラフラ飛んでシャボン玉みたいに消えた…アレ？
「…イトハ…想像力、無いんじゃの」
「残念そうに言うな！…その微笑ましいモノ見るような顔も止めて！」
恥ずかし～／／／何もあんな微妙なの…だったら出ない方が全然マシだったわよ～…
「まぁ、始めてじゃしこんなもんであろう。上手くなるには練習あるのみじゃ！」
励ましの言葉が重かった…

その後5回程イメージを整えて試してみたところ…
「火球よ　爆ぜよ　ファイヤーボール」
ごう！…ぼん！
リリー程じゃないけど使えるようになった。よかった、一時はどうなることかと…槍だけで戦うなんて絶対無理だし…
「ほう、やはり火との相性はいいようじゃの。込められておる魔力もわらわと変わらんようじゃしな」
「ん？同じ込める魔力が同じなのになんで違うの？」
私とリリーじゃ大きさが全然違ったわよ？
「どんな結果を想像したかが違うからじゃな。試しにあれに当ててみようかの」
そう言って指差されたのは壁に描かれた的。本当にただの的。ダー

ツみたいに色々分かれてないただの3重丸だ。
「何、アレ…」
「弓などの練習用に作られた的じゃ。が、もっぱら魔法の精度を試すのにしか使われておらん。ここに立って打つのじゃ」
的から10メートルくらい離れた位置に引かれた線に立って手を構えるリリー。野球のピッチャーみたいだ。そうしてファイヤーボールを放った……って自分の城壊す気なの!?
ごぉん!…どぉぉぉんっ!
「ちょっと、自分のし、ろ…でしょ…」
的の一か所が光ってる…それは別にいいんだけど…
「何で傷一つ付いてないのよ…」
「この城は頑丈でな。これぐらいではビクともせん。この城壁は今まで何人もの人間の侵入を阻んできた、いわば魔界最強の防壁なのじゃよ」
「人間に、攻められた?」
あんまり聞きたくない話だったけど聞かなかった事にもできないわね…
「そうじゃ。わらわが魔王に成ってからは一度も無いがジジイの時はよくあったようじゃしな。何でも異世界の人間を召喚したと言う話じゃったな。全く人間は色々考えるの。それでもこの城壁は無事じゃったが」
よくよく考えれば分かる事だったー!魔界なんて呼ばれてるんだから人間が攻撃しないわけないじゃない!普通に気付きなさいよ私ぃーーー!!
「まぁ人間には魔獣と魔族の区別はつけ辛いじゃろうし仕方ない、とジジイは言っておったの。同じ種族ではないから見分け辛いのは分からんでもないが」
「…どんな違いがあるの?」
「そうじゃな。魔族は魔獣と違い人間と話せるし同じようような生活をしとる、じゃな。通貨も同じじゃしな」

「…なんで人間に攻撃されんのよ…」
「まぁ、中には『魔族は人間より優れているのだから支配するのが当然』等とのたまう輩がいるからの。あとは人間の恐怖心やら権力欲なんかが原因じゃな。全く、皆祭り事が好きなようで」
「何か愚痴入ってるわよ。魔族から見て人間ってどうなのよ」
「うむ…まずエルフと見分けがつけ辛いの。年寄りはドワーフともじゃな。獣人にも幾つかわからんのがおる。大体こんなじゃな」
「…ほとんど全部ってこと？」
「うむ。まぁ、これらの種族は基本的に『神祖』を祖としておるからの。似ていても無理はないじゃろ」
「そうなの？何か結構違うイメージがあったから意外ね」
「まぁ神祖とゆうのはどんな種族とも交わることが出来ると言われておるからの。本当に色々な種族と混じり、獣人やエルフが出来たんじゃろ」
「今はもういないの？」
「いや、絶滅は流石にしとらんはずじゃ。じゃが迫害はされておるじゃろうな」
「どうして？自分達のご先祖様みたいなもんでしょ？」
「そうじゃ。じゃが神祖達は何にでも成れる見た目が自由自在な種族での。それは人族には些か不気味過ぎたようでの。数も少ない神祖達はドンドン避けられ、虐げられ、最終的に戦争に成り、恐怖の対象として人族の社会にはいられなくなったはずなんじゃ」
「…人って…何か…」
「…仕方のない事じゃ。人族は他を排除することで自らの集団を守っておる…
話が逸れたの。魔法の練習は…今日は終いじゃな。イイ時間になってしまった」
リリーの言う通り、日が傾きかけている。
ちょっとしんみりしちゃったわね…

女Bは魔法を練習する？（後書き）

どうやら作者にギャグオンリーは難しいようです

このキャラはギャグだけでいこうかと思ってたんですけどね～

女Aは弓を習う

Ｓｉｄｅ：女Ａ

「ほらよ、俺のお古だけど使えないってことはないはずだ」

「ありがと♪大事にするね」

とりあえずお母さんの言うとおりに家のことを手伝うことにした。

ってことで、森でシオン君に助けられた時から考えてた弓の練習をすることに。先生はシオン君。何でも村一番の狙撃主らしくって「適任じゃない。教えたげなよ」ってお母さんが言ってくれた。シオン君としては家事メインになると思ってたみたいで「本気か？」って戸惑ってた。

ちなみに、朝食作ったり洗濯物洗ったりも手伝わされた…カルラさん容赦ない…

「いいか、まずはこの的だ。近くても最初は当たんないヤツの方が多いし、ちゃんと弓構えてないと反動で怪我することだってあるんだ。気抜くなよ」

そういって木に書いてある４重円を示した。

こうしてちゃんと教えてくれるあたり、やっぱり優しい…う～ん、弟に欲しい…

「構えは…まぁ平気か。よし、打ってみろ」

おっと、お呼びだ。さ～て、よーく狙って～…

「っ！」

…ドンッ！

「なっ！いきなり当てるなんて、どっかでやってたのか？」

「私記憶無いから分かんないよ～」

「それもそうか。まぁ構えは素人だし、ただ狙い付けるのが上手いだけか」

真ん中とまではいかなかったけど１０メートルくらい離れた的の内側から２つ目の円に当てた。私って弓の才能あるのかな？

「よし、この調子で打ってみろよ。狙って真ん中に当てられるようになったら違う練習にするからな？」
「は～い♪」
そうして午前中は弓の練習して過ごした。

Ｓｉｄｅ：純情少年
どうなってんだ？あんな目茶苦茶な構えでいきなり中央付近に…昨日の体力と服装といい、今の弓の構えと精度といい。組み合わせが不思議過ぎる…一番の問題は本人が覚えて無いってのと、それが案外嘘じゃなさそうってトコだよな～。
まぁ、一番ビビったのはお袋を『お母さん』って呼んだことなんだけどな…

Ｓｉｄｅ：女Ａ
「どうなんだい？クリスは」
「素人にしちゃ狙いがイイ。案外俺より上手くなるかもな」
「ほう、それは頼もしいのう。クリスが上手くなってくれればシオンの勉強時間も増やせるしの」
「っ！いや、まだまだだな～！もう暫くは俺が見ててやらないと～」
「え～、さっきは『3日もあれば獲物獲れるな』って言ってくれたのに～」
「なっ！おま、察してくれよっ」
練習も一段落して家でお昼。普段はシオン君は森で狩をしている時間らしい。
ちなみにこの家の収入はシオン君の狩。畑を耕してる家の人から野菜を貰ったりする代わりに肉とか毛皮とかをあげる。物々交換で分かり易い経済を築いてる村で、そうなるとシオン君の狩を邪魔したみたいで頑張らなきゃって思う。
「あ、クリス。午後は森に入るぞ。俺の後ろで出来るだけ物音立て

ないようにしててくれ」
「わかった♪」
く～！ようやく本格的な狩だよ♪昨日はシオン君がどこから撃ったのか全然わからなかったから見てみたかったんだよね～。やっぱりファンタジーな世界に来たんだから、ファンタジーな体験しなきゃねっ。郷に入っては郷に従え？相手の流儀に合わせるのも大切なことなのです！
「ちょっと、大丈夫なのかい？クリスに森はまだ早いんじゃ…」
お母さん優しい！でも私も森で狩とかしてみたいの！
「体力的なこと言ってんなら平気だぜ。昨日、河原の上流辺りから歩いて来たけど全然疲れてなかったしな」
「ほう、また随分と深い場所におったの。しかし、シオン。お前何でそんな所におったのじゃ？」
「え、あっ、いや、それは…」
「まぁ大体想像つくけどね。ほら、速く食べちゃいなさい」
お母さんがちょっと強引に話を打ち切ろうとしてる？あんまり深く聞かない方がいいのかな？そのうち聞けるかもしれないし、今は聞かない！
「ねぇねぇ、狩ってどんなの狙うの？」
会話をさり気なく変えてみた。これくらいの機転は効くのさ♪
「あぁ、う～ん…今日は向かいの双子が誕生日だからピックバードでも狙うかな」
「おお、もうそんな時期じゃったか。よく覚えとったの」
「いや、ガウルビーストの事頼みに行ったら頼まれた。人んちの子供の誕生日なんて覚えらんねえよ…」
「でもシオン君、村長になったらそれくらい覚えててあげた方がいいんじゃない？ね、お母さん」
「クリスの言う通りだね。このバカにもっと言ってやんな」
「お袋とクリスの連携だと！」
「ジジイの援護攻撃もあるぞい」

「黙れジジイ！」
「ふぉっふぉっ。クリスの言う通りじゃ。村長たる者、村の子供達の誕生日くらい覚えてなくてどうする！」
「ジジイは去年忘れてただろうがっ！」
「お前ら村長候補を試しただけじゃ～」
「汚え！言い訳が汚え！！」
「ごちそう様～」
「あいよ～。クリス、食器洗うの手伝っとくれ。シオン、狩の準備しときなよ」
「え、放置！？これだけ貶しといて放置！？」
「ふ～、満腹じゃ♪食後に茶でも淹れるかの～」
さぁ、午後は狩狩♪

女Aは森を探索する

Ｓｉｄｅ：純情少年

酷い目にあった…クリスが来てからこんなんばっかだな…まぁクリスのせいじゃないしイイんだけど。

「じゃ、いってきまーす」

「あいよ。日暮れ前には帰ってきなよ」

「ああ、そうする」

コイツ連れて夜の森は危険過ぎるしな。とりあえず弓だけでも持たしといた。

「ねぇねぇシオン君、ピックバードってどんなの？」

大陸中に生息してるはずなんだが…まぁイイや。

「８０センチくらいの飛ばない鳥だよ。エルフは子供の誕生日会とか結婚式とかで必ず使うんだ。遠くから弓で攻撃するなら簡単に獲れるけど、近づいて剣で獲ろうと思うと嘴が厄介だな」

普通の剣で打ち合いしたら剣が壊れるからな…

「へ～、どんなのか楽しみだね♪」

っ！笑顔が無防備過ぎるんだよ！

昨日ジジイに言われたこと思い出しちまった…

『クリスをどうしたいかはお前次第じゃ。生涯の伴侶とするか、新たに出来た家族とするか。なぁに、まだまだ若いんじゃから焦って答えを出す必要も無いじゃろ。

それにお前にはまだまだ女１人娶る甲斐性などありゃあせんしの～』

何か最後は馬鹿にされただけな気がしたな…

とりあえず、今はピックバードに集中しよう。

Ｓｉｄｅ：女Ａ

お、赤くなった赤くなった♪朝鏡見た時から『あれ？私かなりイケてる？』って感じだっだから確かめたくてしょうがなかったんだよ

ね～。シオン君の反応見る限りダイジョブっぽいし、これはラッキー♪神様、私はアナタのおかげで美少女に成れました…シオン君をからかい易い見た目にしてくれてありがとうございます！
宣誓！私、クリス・シュタインは、正々堂々シオン君をからかい続けることを誓います！
何か体育祭のノリで変なボケしちゃった…口に出してたら恥ずかしさで死ねたよ～。
「ピックバードってどの辺にいるの？」
気分転換にお喋りし～ましょっ♪
「ん、ああ。普段は実の生ってる木の近くにいるな。とりあえずそこまで行って様子を見るつもりだ」
おっ、それっぽい♪速く着かないかな～

「…いたな」
「うん。7羽…かな？」
鶏？でも体も嘴もちょっと大きいかな？茶色くて体と嘴の大きい鶏…ゲームに出てきそう。
「いや、木の裏に1羽いるみたいだ…狙うなら奥のヤツだな」
本当に木の実の成ってる木に集まってる。お昼時でもないのに何で？シオン君に聞いてみよ。
「あの高さじゃ落ちてくるのを待つか、体当たりして落とすかの2択だからな。まだ飯にありつけて無いんだろ」
「何か世知辛い話だね…」
鳥の世界も大変だ。でもごめんね。美味しく食べられちゃって下さい！
「じゃ、良く見てろよ。お前にもやってもらうことになんだろうしな」
「うん。大丈夫…」
「顔が青いぜ。無理なら無理って言っとけよ。そんなんで体調崩されでもしたら逆に面倒だしな」

ふふっ。シオン君は優しいな～。寄り掛かりたくなっちゃうよ…でもそんなことしたら私はず～っと寄り掛かっちゃうしな～

「甘えてるみたいで嫌だってんならお門違いだ。俺らは家族なんだろ。なら遠慮とか、甘えたくないとかで距離を作るな。お袋に怒られるぜ？」

「あはは、バレバレか～」

やっぱりカルラさんそっくりだな～。流石お母さん、ちゃんと教育がいき届いてる。

「当然だろ。俺は一家の大黒柱だぜ？で、どうする」

「うん、やるよ…無理とかじゃなくて、これは私に必要なことだと思うから」

これくらいで逃げるのは…何か悔しかった。流石に自分の目の前で動物が死ぬのは辛い。でも、向こうで私は鶏肉を食べてる。昨日だって、シオン君達と肉料理を食べてる。何の肉かは知らないけど！家族だからこそ、依存するだけなのは嫌だ。だから、私は自分で殺す感覚を掴まなきゃ、その時の覚悟を持たなきゃいけない。これはその第１歩。

「シオン君、見せてよ。これからの私に必要な事を…」

「…わかったよ。全くお袋の手伝いならこんな思いしなくて済んだってのに…」

心配してくれてたんだ。やっさし～…ダメだ、茶化しに覇気が無いや…

「えへへ、守られるだけはヤなの…」

「はいはい。帰ったちゃんと休め。…代わりに、今はしっかり見とけ。これが、何かを殺して、自分が生きるってことだ…」

そう静かに呟いてから、シオン君は木の陰から弓を構えた。怖いくらいの無表情で静かに矢を引絞ってる…これが覚悟した人の顔…

狙ってるのは一番大きいヤツ。多分１メートルくらい。首が弱そう…

「クリス、もう少し屈んでろ…」

「…うん」

邪魔になっちゃったかな?ゴメンね。
「風纏いて　全てを貫く槍と成らん　ゲイル・ボウ…」
シオン君が小さく何かを呟いて矢を放った。目にも留まらない速さで何かが通り過ぎて行ったのはわかった。どうしてか?
「キュオおぉぉぉ…」
シオン君から首を貫かれたピックバードまで、薄い緑色の粒子が続いてるからだ。
「キュア!きゅう!」
他のピックバード達が逃げていく。シオン君は1羽だけでよかったみたいで辺りを警戒しながら悶えてるピックバードに近づいて行く…私も周り警戒してよ…
「ふぅ。これで双子も喜ぶだろ」
シオン君、本当にツンデレだね。男のツンデレもどうかと思うけど…
「クリス、帰ろうぜ。こっからなら日没前に村に着く」
シオン君が戻ってきてそう言った。う〜ん、やっぱり目の前で動物が死ぬのはな〜…
ん?…!
「後ろっ!」
「!…くそっ、またガウルビーストかよ!」
見つからないように死角になる位置から少しずつ距離を詰めてきてたんだ。シオン君がピックバードを私に投げ渡して弓を構えた。
ヒュッ!
「ぐわぁう!」
腕で弾いた!?何それ!!
「クリス、下がれ!この距離じゃヤバい!」
「でもっ!」
この距離が弓にとって辛いのは分かってる。だからシオン君が危ないのに…
「へっ、1人なら逃げ切れるから平気だ。さっさと行け」
ピックバードを囮にしない?…双子のこと考えてるの?今は自分の

事考えてよっ！！
そう思いながらも言われた通り逃げた私は、スゴク、卑怯者でイヤだった…

女Aは立ち向かう

Ｓｉｄｅ：純情少年

「へっ、1人なら逃げ切れるから平気だ。さっさと行け」

って言われても悩むよな。素人じゃ動けなくなっちまうのが普通か…

「う～～～…絶対帰って来てよ！」

…意外と根性あんな…こりゃ簡単には負けらんなくなっちまったな。

「ぐうぅぅぅ…がうっ！」

「ふぅ…そんなに脅かすなって。ビビって足振るえちまうだろ」

距離はせいぜい7メートル…構えて放つまでに詰められて終わりだな…

「ぐるるる…」

ただ突っかかってくるだけなら幾らでもやり様があったんだけどな…確実に仕留めるためにコッチの隙探ってやがる…だからガウルビーストは厄介なんだよな…

このままじゃジリ貧になるだけだな…まずは！

「がうっ」

狙い、適当に足元！これなら距離詰める時間与えねえ！今のうちに…

「がああぁぁぁ！」

牽制で一気に2本放つ！片方が脇腹に刺さって怒り狂ったな…てことは…

「ぐがあぁぁぁ！」

バキバキバキ…

やっぱし突進してきたな！

「これなら！」

どぉん！

木に頭打ち付けて視界がチラついてるな…今のうちに…逃げる！

「ガアぁぁぁ…」

逃げても匂いで追われてんな。まぁこの辺はよく来るからあちこちに匂い付いてて今すぐ見つかることはないだろ。なんたって今、木の上にいんだし。
結構時間稼いだな。
村に戻るか…イヤ、まだだな。もう少し離れねえと気付かれる。
さって、どうすっかな…

Ｓｉｄｅ：女Ａ
「はぁ、はぁ、はぁ…うぅ、私…シオン君、助けなきゃ…なのに…」
何で私には力が無いの…わかってる。向こうの世界ではこんなときに使う力は必要無かった…良い学校を出てて、良い資格を持ってて、実際に良い仕事ができる能力があれば、それが力になった。でもここではなんの役にも立たない。仕方ないよ。価値観も、生き方も、何もかも違い過ぎる…必要な能力が、まるで違い過ぎる…
ガサガサッ…
「っ！…シオン君？…ねえ、シオン君なんでしょっ？」
ありえないとわかっててもそんな声を出してしまった…
ガサガサッ…ピョンッ！
「……そんなわけないよね～…」
出てきたのは耳の小さいウサギみたいな黒い動物だった。可愛い…
「……」
こっちをジーっと観察してる…大丈夫、怖くないよ。そ～っと手を伸ばしてみた…
「っ！」
あっ、逃げちゃった…警戒されてるよね…なんとなく寂しくて逃げてしまった方を見てしまう。
「…そっか。警戒して当然だよね…」
ウサギ？の逃げた先では、子ウサギが巣から出ようとしている所だった。ウサギは必死に子供を巣に隠そうとしている…子供を守るのに必死なのがよく分かる…

「私にも…できるかな…」
このまま何もしないでシオン君が帰ってくるのを待つのは、嫌だ！
なら、やることは1つしかないよね…

「……見つけた…」
太陽が傾き始めている中、さっきとたいして変わらない場所にガウルビーストはいた。シオン君を探してるのかな…っ！
ドォン！
いきなり木に体当たりし始めた？…もしかして！
「ちっ、なっ…うわぁ！」
シオン君！木から落ちた！？
速く起きて逃げて！
「この、くそっ！」
倒れながらも短剣振り回して抵抗してるけど体重が違い過ぎるよ！
何か、何とかして、助けるには…やっぱり、これしかないよね…この弓しか…
外せない、今は、絶対に外せない…静かに、シオン君と同じように、構える…狙うのは、目…
…思い出せ、シオン君があのとき言ってた言葉…
「…風纏いて　全てを貫く槍と成らん　ゲイル・ボウ！」
言い終わるのと同時に矢を放つ…シオン君よりも少ないけど、緑の軌跡を描いてガウルビーストの目に吸い込まれていく…
ドンッ！
当たった！
「がああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
吠えながら、暴れてる。あ、シオン君抜け出した…よかった、怪我とかしてなさそう…あ、シオン君コッチに気付いた。
「こっちだ！もう一発食らわせてやるよ！」
ガウルビーストが私に気付く前に挑発して自分に注意を逸らしてる。
本当に…優し過ぎるよ…でも今は、ありがとう…

もう1度、静かに弓を引く…今なら分かる。シオン君の矢は、魔法の矢だ…

「…風纏いて　全てを貫く槍と成らん　ゲイル・ボウッ！」

さっきよりもズット強い緑の光を纏って矢がガウルビーストのもう一つの目を貫いた。

「がぁぁぁぁぁ……」

ずぅぅぅん！

断末魔の鳴き声を伴って、とうとう倒れた…やっと、終わった…

ドサッ…

Ｓｉｄｅ：純情少年

あいつ、1人でガウルビースト倒しちまった…それにあの魔法…俺が1度見せただけで、俺よりも強い、

ドサッ…

ん？なっ、倒れた！？

「おいっ！クリス、クリス！くそっ、怪我でもしたのか！？」

くそっ！どうする？こんな状態で魔獣にでも会ったら…

「……スー、スー、スー…」

「……寝てる、だと…この状況で、どうやったら寝れんだよ！」

とりあえず、村に戻ろう…

Ｓｉｄｅ：女Ａ

…ん～、あったかい～、この抱き枕、イイ～…あれ？

「…はぁ～、もうちょいか…苦しい、」

「…シ、シオン君？」

「ん、やっと起きたか」

「…何で私オンブされてるの？」

「ガウルビースト倒したら、いきなり倒れて寝やがったからだよ」

あ、私倒せたんだ～。良かった～。

「もうちょいで村に着く。それまで寝てろ」

「え、でも」
「いきなり魔法使って疲れてんだろ。だったら休んでろよ。…それとな」
「？どうしたの？」
「…それと…その……さっきは…ぁり、がとよ…うわぁ…」
……可愛いーっ！何この子！ツンデレ！？ツンデレなの！？最後の『うわぁ』って顔赤らめるトコとか、もうスゴイよっ！！
「うふふ～♪シオンく～ん♪」
「わっ、こら暴れるな！引っ付き過ぎだ歩き辛い！」
ふふふ、実際は胸当たってて恥ずかしいんだろうな。ホント、素直じゃないな～♪

女Aは立ち向かう（後書き）

魔獣と動物の違いは説明担当がやります。

この作品の説明担当と言えばアイツだ！

と読者さんに思ってもらえてれば幸いです。

…実際アイツの役回りは説明がメインのつもりなんですけどね～

ちょっと使い易過ぎるキャラなんですよね…

男勇者の事情（前書き）

やっと登場正統派勇者さん。

正統派として活躍してもらいたいです…

ギャグ担当にしかなってないですから…

男勇者の事情

Ｓｉｄｅ：男勇者

フカフカベットきもちぃ～…Ｚｚｚ…

「勇人様、おはようございます」

……ＨＥＬＰ　ＭＥ――――！

何この人！どうやって密室のはずのこの部屋に入ってきたんだよ！

合鍵使われても開かないようにドア固定したんだぞ！！

「私にはあのような小細工は無い物と同義ですので、少々認識不足でしたね？」

「何か嬉しそうっすね…」

皮肉の一つも言ってやらないと気が済まなかった。

「ええ。私は勇人様のストーカーなので、妨害されるとされるだけ、燃え（萌え）ます」

「…は？」

無表情で何言いだしてんのこの人！イ～ヤ～、く～わ～れ～る～

「勇人様が怯える姿は中々に私の乙女心を引っかきまわしていまして…もう、寝ても覚めても勇人様のことしか考えられないほどです。どう責任を取るおつもりですか？」

「俺一切何もしてないじゃん！てか昨日知り合ったばかりの相手にどんな感情抱いてんですか！？」

「お～い、勇人…おや、メイドさんも来ていたのか。おはよう」

「おはようございます、フレイヤ様。勇人様のお顔を1秒でも速く見るために日の出から御邪魔しておりました」

「お～、恋する乙女は輝くモノだね。そう思わないかい、勇人」

「イヤイヤイヤイヤ！昨日初めて会って今日ストーカーってどんな乙女だよ！」

「何を言う。私だって勇人の顔が見たくてこんなに早くに会いに来てるのに…勇人の意地悪ぅ…」

「勇人様、女性を泣かせる男には最低最悪鬼畜ゴミ虫野郎の称号を差し上げますよ？」
「いらねえ！てかフレイヤさんどう見ても嘘泣きじゃん！？また変な喋り方だし！」
「さて、メイドさん。朝の勇人弄りは中断して朝食に行こう」
「畏まりました。勇人様、参りますよ」
態度が変わり過ぎでついていけん…速く慣れよう…

「勇者様、お入り下さい」
渋くて良い声だ…思わず聞きいってしまう…
2人に朝飯付き合わされて少し経った頃。やっと公に俺が呼ばれた事情を聞くことができる…こうゆうのって普通最初に話すもんなんじゃ…考えるのはよそう…結果は見えてる。
「勇者・勇人よ、面を上げよ」
「はっ！」
「昨日話さなかったことを、この世界の事情、情報、そなたを呼んだ理由。今話せることを全て話そう」
まぁ世界情勢とか魔法の事は昨日聞いたし2度手間になるな。ちなみに…俺は光魔法しか使えなかったとだけ言っておこう。…つまんねぇ～…もっとこう、色んな魔法組み合わせてマンガみたいな技使ってみたかったのに…はぁ～、やる気無くすわ～…
「まぁ、昨日お主の部屋に厄介になった時にほとんど話したから、正直話すことは呼んだ理由くらいだな」
口調がテキトーになったな。あ、周りの家臣たちが騒ぎ始めた…何々…
「公の悪い癖がまた…」「きっとフレイヤ様もじゃろうて…」「勇者様も苦労して…」「私しが慰めて差し上げようかしら…」「昨日公の見張りを増やしておけば…」「そういえば公はどうやって…」「窓から抜け出したようで…」「冒険者時代の血か…」「困ったものじゃ…」「衛兵が気付かんのも無理無い…」「衛兵も不運な…」

国の長に対する評価これ!?なんでこんな評価で支持率９０%なんだよ!!てか1人スゴイ事言ってる御婦人が…
「では勇人よ。そなたにやってもらいたいことは、ズバリ、魔王を止めてきてもらいたい」
「…はぁ?」
首をかしげてしまう。倒せじゃなく、止めろ?どうゆうことだ?
「まぁ、分からんだろうな。正確には凶暴化している魔獣を抑えるよう魔王を説得するか、魔獣を駆除するかのどちらかをしてもらいたい。過去の文献を見る限り魔王を倒した所で魔獣は大人しくならないようでな、はぁ～。面倒だが魔王に魔獣の手綱をしっかり握ってもらうのが1番確実なようでな」
頼みごとしながら溜息って…まぁでも、困ってるんならしょうがないか。あ、その前に、
「それは勇者を呼ばなくても、魔王に直接頼めば良いので?」
「そうしたいのは山々なんだが…まず1つ、ギグの森を抜けるのが難しい。2つ、南側の魔獣は強力で一般兵では歯が立たん。3つ、魔王と戦うことになった時対処できん。そうゆう理由で、我らは勇者を召喚したのだ」
「勇者ならそれができると?」
「うむ。といっても、いきなり行って来いとゆう訳ではない。2ヶ月程剣や魔法の修行をしてもらうし、腕利きの従者もつける。武器も良いのがあるしな」
「わかりました、謹んでお受けします。それで困ってる人を助けられるんなら、喜んで引き受けます!」
「おお、受けてくれるか。すまぬの。そして、ありがとう」
「いえ。修行はいつから?」
「とくに日取りは決めておらんが…」
「では今日の午後から」
「頼んだ手前無理強いはせんぞ?」
「いえ、こうゆうのは少しでも速い方がイイ」

俺が強くならなきゃ、罪も無い人達が傷つくのが増える。そんなの認められるか！

「わかった。では、此度の件、頼んだぞ」

公のこのセリフで謁見は終了した。

男勇者は武器を手に入れて、神様は出番が減る（前書き）

今回は2本だて

男勇者は武器を手に入れて、神様は出番が減る

Ｓｉｄｅ：姫巫女

勇人が大急ぎで演習場に行こうとしてるね。

全く、人を助けるために一刻も早く修行開始とゆうのは見上げた性根だけど…

「剣も無しに何の修行するつもりなのかな、勇人」

とりあえず通せんぼ。

「……あ」

「勇人様、人々を救いたいという思いは分かりましたが、まず救うべきは御自身の頭では…ぷっ」

あのメイドさんが笑顔だと！そ、そんな馬鹿な！子供の時からずっと一緒だったけど始めて見たよ！

「では勇人様、剣を取りに行きましょうか？」

「ああ」

さてさて、勇人はどんな反応するのかね…

Ｓｉｄｅ：男勇者

「これが…俺の剣…」

手にとって、見入ってしまう…

「そうだよ。これがユビキタスに古くから伝わる聖剣だ。まぁ、大事に扱ってね」

「あ、ああ…」

正直、上の空だったと思う。

俺は自分だけの剣を、力を手に入れた事に高揚していたと思う。まぁ、見た目は武骨な幅広の両手剣。唾や柄は金、刀身は両刃、刀身の中央を縦に小さい溝が掘られていて何か文字が彫ってある。何々…

『悪しき者には煉獄を　正しき者には楽園を　汝が想いを此処に示せ』

全然見たこと無い字なのに読める？てかメッチャ恥ずっ！何この一昔前の魔法の呪文みたいなの！絶対言いたくないんだけど！

「あ～、この剣に彫ってある文字はいったい…」

「あぁ。それはこの剣の能力を示すルーンだね」

「勇人様の魔法の修行が始まりましたらお教えする予定ですので、そのうち聞く機会もあると思いますよ？」

この言葉恥ずかしくて辛いとは言えませんでした…

「では始めるかの」

「勇人様、宜しいですか？まぁ、嫌と言われても始めるのですが」

「聞く意味無っ！それよりも…あの、俺の修行の相手って…」

「剣は私が付き合おう」

「魔法に関しては私がお教え致します。またフレイヤ様が公務等で席を外されている時は剣の方も私がお教えします」

「普通、騎士とかが教えるモノなんじゃないのか？」

「フレイヤ様より強い騎士など居りませんので」

「メイドさんはこの国最強の最終防衛線なんだよ。剣も元からメイドさんが教えた方がいいんだろうけど私の鍛錬も兼ねて、ね」

「騎士団ドコ行った！」

「申し訳ない。騎士として不甲斐無い…」

「どちら様！？」

「おや、騎士長殿。どうされましたか」

騎士長！何か苦労人なオーラ出ちゃってるけど…。そういえば姫巫女が敬語に成ってる…何でだ？

「フレイヤ様は仮にも第一公女です。あまり砕けた口調で話すと内外に有らぬ噂が立ってしまうのですよ」

また考えてること読まれた…そんなに分かり易いのか？

「俺の扱いもどうにかならないかな…」

「もし勇人様とフレイヤ様の仲を邪推して行動を起こす者がいた時は私が全力で排除させて頂きます」

「…方法は？」
「本人の目の前で遠い親族から順に拷問に掛け、最後に子供を…これ以上は言わないでおきましょう」
怖っ！何この人？公女の御付がこれでイイのか！？
「仕方のない事でしょう。私は幼少の頃よりメイドさんから手解きを受けているのですから」
「ははは、それもそうですね。では、御報告も済みましたし、私はこれで」
「はい。他の者にも励むよう、また無理をし過ぎぬように」
「伝えておきます。では」

騎士長が去っていくのをポカーンと見送ってしまった。いや、どちらかと言うと姫巫女に驚いていた。
「フレイヤさん…」
「なぁにぃ～、ゆうと様ぁ～」
「あ、恥ずかしいとは思ってるんですね」
無理矢理に口調変えても隠せてないぞ…
「ウルサイ。御堅い口調も公女には必要なの」
「勇人様がフレイヤ様を苛める…案外有りですね」
「メイドさんが1番危険なんじゃ」
「今更だと思うよ…さぁ、バカやってないで始めようか」
「ん、おう！」
「勇人には細かい型なんかは教えないよ。端っから対人戦は想定してないからね。だから…まずはその剣で私に思いっきり打ち込んで」
「え…大丈夫なんですか？」
「ああ、確かに躊躇うか」
「フレイヤ様、勇人様にはまず防御を教えて差し上げるべきかと。身を守れない者は何も守れませんから」
っ！確かに。俺は守りたいんだから攻撃は二の次でいいよな。
「ふふふ、じゃあメイドさんの御言葉もあったことだし始めようか

♪」
そう言ってどこに持っていたのか、身の丈よりも長い棒を構えた。
本当にどこから…
「多少無茶をなされても平気ですよ。回復魔法の準備はできておりますので」
あ、俺今日ここで死んんだ…

姫巫女の攻撃は苛烈を極めた。しかし、俺も男だ！そう簡単にやられる訳にはいかない！とにかく姫巫女の攻撃を防御防御防御！どう見てもあの細腕から繰り出されるとは思えない衝撃が剣を叩く。
「剣の影に隠れるだけじゃ防御とは言わないよ！」
「くっそ！わかってる！」
とにかく間合いを取って息を、
「間合いを取りたいならもう少し慎重に。そんなんじゃ逃げたいって言ってるようなものだよ！」
ダメか！やるならもっと強引に…おりゃっ！
「っと…なんだ、やればできるじゃない」
「少々強引過ぎますが、まぁ悪くはないでしょう」
「ありがと。でも、」
「そう、まだまだ。勇者の身体能力ならこれくらいは初日から出来てくれないと困る。これについてこれない様じゃ幻滅だからね」
「言ってくれる！」
今度はコッチからも行かせて貰う！
「甘過ぎるよ」
うおっ！ダメだ、俺の攻撃じゃカウンター食らうだけだ…何がいけないんだ？殴り合いなんてしたことないし、学校の柔道は型練だけだったし…くそっ、速！
「攻めは考えなくてイイよ。今の勇人じゃ下手すると怪我しかねない。もう少し剣の扱いに慣れてからにしよう」
「了解、っ！」

喋りながらも攻撃の手は緩まない…って、無理無理無理無理！あ、
ドゴッ！
「バカ、集中途切らせたりするから…」
「今日はここまでに致しましょう。勇人様も暫く起きないでしょう
し。初心者にしては頑張った、と言う所でしょう」
「メイドさんもこう言ってるしそうするかね。全く明日はもう少し
保たせて欲しいもんだよ」
俺の意識が途切れた直後の会話だそうな…

Ｓｉｄｅ：ダル
ん？全員終わった？
「…ようやく出番だお」
「どうした、ダル？」
「あ、主神様。ようやく僕達のターンが始まったみたい」
「何っ！そう言う事はもっと速く言えよ！全然準備できてねえっ！
！」
「例えばどんな？」
「もちろん、俺様の熱い勇姿を表す様な衣装とか！」
必要無いと思われ…需要あんの？
「男Ａをブチのめす案とか！」
フリッグたん、ゲームに負けて以来闘志メラメラだもんね…主神様
のコト全然見えてないし。元からだった気がするけど気にしたら負
けだよね。
「何よりも俺様の出番を増やす！」
主神様出ても誰トク？って感じだろうけどな～。
「と、ゆうことで。ダル手っ取り早く出番増やす方法考えろ」
はぁ、また面倒なことになた予感。
「じゃあ、フリッグたんみたいに特定の誰かに関わってみるのは？

男Aと話すからフリッグたんは出番多いわけだし」
でもあんまりこの世界に干渉すると面倒な事になるんだけどな～。
「あ～、それは俺も考えたんだけどよ～。結局出れんのって夜だけじゃね？」
「出番無しより全然マシっしょ」
「いやそうなんだけどよぉ。何かこう、パ～っとしねぇじゃんか、あの出かた」
確かに前回なんか男Aにボロ負けして泣いただけだたしね。
「いっその事俺も男Aのトコに行ってみっかなぁ」
「止めといた方がいいかも。フリッグたん絶対怒るよ？」
僕は主神様の葬式には出たくないお。フリッグたんなら楽しみ邪魔されたら主神様殺す事躊躇わないだろうしな～。
「くっそ。じゃあどうやって出番増やすってんだよ」
「う～ん…あ」
「ん、なんだ。なんか思い付いたか」
「フリッグたん、今勝負に夢中だから僕らが何しても気付かないんじゃ…」
「……うぅわぁ～…」
なんか…もういいよね？

男勇者は武器を手に入れて、神様は出番が減る（後書き）

次回から各キャラが微妙に絡み始めます。

ちなみに騎士長と女勇者の騎士団長とは立場が微妙に違います。

国が違うから制度も違うってのが理由です

男勇者と男Ａの接近（前書き）

やっと他の人との絡みです

あ、

ＰＶが１００００、ユニークが２０００を超えました

次は、目指せＰＶ２００００！

男勇者と男Ａの接近

Ｓｉｄｅ：男勇者

「パレード？」

「パレードです」

「パレードだよ」

剣の練習を始めてから数日経った夜。自室にていきなりフレイヤさんとメイドさんにパレードに出ろと言われた。

ちなみにこの２人、毎日俺の部屋に来て俺をからかっていく……もうヤダこの人達…グズッ…

「一応勇人の事は民には発表してあるけど顔見せはしてないだろ？だから民の間で『本当は勇者なんていないんじゃないか』って噂が広まっちゃってね。だから大々的に勇人の宣伝をしようって話なんだ」

「１ヶ月程かけて、首都付近の主要都市を幾つか廻り、最後に此処、首都・ユビキタスに帰ってくる予定です。ですので明日からはパレードの準備に入って頂きます。御稽古の御時間は多少減る事に成りますね」

「うわ、マジかよ。ようやくフレイヤさんの動き見え始めたのに…」

「そうだね。最近は速さだけじゃ対処される。まだまだ甘いけど」

「剣の割に魔法の方は成果がないようですが…プッ」

ぐはっ！効いたぜ…

そう。剣は上達している。最初は全く見えなかったフレイヤさんの棒術が今ではどうにか追えるようには成った。しかし、魔法の方はメイドさん直伝なのに全然ダメだ。洞窟で使う証明くらいのなら出来るが、攻撃魔法は本当にダメ。接近戦で使うなんて論外、遠距離でも相当発動まで時間がかかる。

これじゃ意味無いな。その変わり魔力の形を変えるのは得意だから、魔法は使わないで魔力刀を剣に纏わせたりを練習してる。

…勇者は普通万能らしい。…俺ってダメ勇者？
「全く、メイドさんに教わっていてその程度とは嘆かわしいね」
「フレイヤ様、勇人様も精一杯なのですよ。それであの程度ですが」
もうホントにこの人達イヤ…
「じゃ、最初は貿易都市・コールスだよ。ユビキタス以外の人も多いからしっかりね」
「わかった」
こうしてパレードの準備が始まった

Ｓｉｄｅ：男Ａ
「雷槍！」
「きぃぃぃぃ……」
ドスン…
「おつかれさま～♪」
この世界に来てから数日。狩にも慣れて来て、今日はラピッドホースと呼ばれる鹿みたいな動物を仕留めた所だ。ちなみに雷槍は電気を打ち出す掌底技。射程は１０センチ無いくらいだが魔力使用量が少なくて使い易い。ルーン刻む候補筆頭だ。
「じゃあ魔獣に見つからないうちに帰ろっか？」
「そうだな。魔獣は…面倒だし…ふあぁ～」
欠伸してしまった。ここの所毎晩女神様に勝負を挑まれてる…もう手加減してワザと負けようかな？気付かれたら大変だし無理だな…
「ふふふ～♪はい、問題です！」
「嫌です」
抜き打ちテストとは卑怯な！
ロザリーにこの世界の説明をしてもらって以来、こうして度々問題を出されるようになっている…もしかして教師志望？
ちなみに、ロザリーは魔法の実験をよくやるのだがしょっちゅう爆発（失敗）する。ついでに飯も忘れるので最近の俺はヘルパーのよ

うに成っている。
「ダメです。魔獣と動物の違いは何？」
あ、意外と簡単なのが来たな。
「魔獣は魔力を貯めておける角を持っていて魔法耐性が高い。動物は魔力を貯めておくモノが無いから魔力体制が低い。だけど魔獣より硬い」
基本はこうだったはず。
「正解～。アタシたちじゃ魔法耐性の強い魔獣の方が大変だからね～♪」
魔獣でも倒せるけど、俺は魔法無し、ロザリーは大火力、で殺らなければいけなく面倒なので動物狙いにしている。カバは魔法使ったら結構楽に倒せた。…しっかし、何か…スゴク嬉しそうだけど何かあったのかな？それともこれからあるのか？
「あ、ジル。明日街に出るから帰ったら準備手伝ってね♪」
「街って…ドコの？」
「森の外だよ。アタシが頼まれてる量が出来たから届けに行くの♪」
街好きなのかな？
「ジルきっとビックリするよ～。場所はユビキタス公国最大の貿易都市・コールス。スッゴク賑やかな街なんだ～♪」
ちょっと嫌な予感を覚えつつ、楽しみな自分がいた。

Ｓｉｄｅ：男勇者
あれからさらに数日、衣装やら立ち振る舞いやらの練習をして、今はパレードの真っ最中で豪華な馬車の上。しかし…

「「「「キャーッ！勇者様～！」」」」

何か黄色い声が…もはや金切り声にしか…
「モテるじゃないか、勇人。流石勇者は女を落とすのが速いね」

「フレイヤ様、人の事は言えないかと」
「何？」

「「「「フレイヤ様――――っ！」」」」
「「バカ野郎っ！声が小さい！！！」」

野太い声援だな～。女の人の声も混じってるみたいだけど。
「ははは。フレイヤさん、モテモテじゃないですか…ぷっ」
「勇人、後で話がある。パレードが終わったら隊舎裏に来な」
「御2人とも、それぞれ同性の方々から睨まれておりますよ？」
「「いや、メイドさんは怯えられてるから」」
そう、何を隠そうメイドさんを睨み付けようとしている人達は例外無く顔を見た瞬間、怯えたように目を逸らすのだ。あんた何したんだよ…
「ジル～、速く速く！」
「そんなに急がなくても…ロザリー前見ないと危ないよ！」
お、中の良い姉妹かな？下の子の方が落ち着いてるみたいだけど。上の子が魔法使いみたいな黒い服と杖、下の子が黒いジャケットにジーパンと何か付いた手袋。この世界では前の勇者の影響でジャケットやジーパンが普通にあるから不思議じゃない。しかしあんな10歳くらいの子が着てるのは変だな。本人の落ち着いた雰囲気のせいで違和感無いけど。
「勇人、まさか…あれくらいの年の娘がいいのかい？いくらなんでも犯罪だよ？」
「フレイヤ様に欲情する素振りが無いのは年齢が対象外だったからですか。想像以上のゲス野郎ですね」
「違ーーーうっ！ただ微笑ましくて見てただけだ！」
「そんなこと言って、あの幼女達を視姦してたんだろう？」
「今ならまだ真人間に戻れますよ？考え直しましょう？」
「だーーーーっ！」

パレード中なのにいつもと同じになってしまった…

男勇者と男Aの接近Ｐｅｒｔ2

Ｓｉｄｅ：男Ａ

貿易都市・コールスは森から馬車で2時間程かかる。荷物はロザリーの魔具と赤ヒゲからギルドへの手紙だけだが魔具がちょっと重い。ちなみに馬車はリナちゃんの親、肉屋の店主がついでに乗せて行ってくれた。

ちなみにこの人は俺を女と間違えるし、リナちゃんが泣いてる所に遭遇しただけの俺を肉切り包丁で追いかけ回す等勘違いの激しい人だ。ロザリーが泣いてた理由を聞いたら転んで膝擦り剥いただけだった。店主、いつか締める。

「ジル、見えてきたよ。あれが、貿易都市・コールスだよ♪」

そういって荷台から乗り出して指差す先には、海に面した位置に城壁の付いた街があった。遠目からでもレンガ作りの重厚な姿が見えるこの都市がコールス。貿易都市だから港街だとは思ってたけど城壁まであるとは。

「スゴイ城壁だな…」

圧倒されてしまう。

「魔獣の被害に遭い易いからね。森近くの大きな都市では普通なんだ」

「2人とも、あんま顔出してっと落ちるぞ」

「「はーい」」

店主の忠告には素直に従っておいた。さて、何が見れるかな…

「とーうちゃーく♪」

あらためて…デカッ！

レンガ作りの重厚な壁、いかにも貿易の街といった風情の露天商では見たことも無いモノが所狭しと売られていて、売り手と買い手が交渉している。スゴイ風景だな…

「じゃ、夕方に成ったらここでな。遅れんなよ」
そう言って店主は自分の用を済ませに行った。
「じゃ、まずは魔具届けよっか♪」
つう訳でついて行く。他にやること無いし道分からないしな。

魔道具を売っているとゆうロザリーの知り合いの店に着いた…看板ピンクってなんかヤダな…
「こんにちは〜。リシルさん、ロザリーですよ〜」
「はぁい。ちょっと待っててねぇん」
何だこの甘ったるい間延びした声…きっつ…
「いらっしゃ〜い、ロザリーちゃん。あらぁ、そっちの女の子は初めてかしらぁ」
出てきたのはやたら露出の高い服着たお姉さんだった。声の通りの容姿でエロい雰囲気が全身から出ている。青髪黄目でウェーブの掛かったロングヘアーもあってホステスにしか見えない…
「リシルさん、ジルは男の子だよ」
「始めまして」
ゲンナリしてて愛想良く挨拶できる気分じゃなかった。一応営業スマイルくらいは作ったが…
「えぇ、嘘ぉ…だってぇ、こんなにぃ可愛いのにぃ？」
「うん、私も最初は勘違いしちゃったよ〜」
もしかしてロザリーの緩い喋り方ってこの人の影響か？
「そうなのぉ〜。おもしろいわぁ〜」
「それより、頼まれてた魔具ですよ〜」
「あらぁ、いつもありがとねぇ〜。はぁ〜い、お財布出してぇ〜」
リシルさんはライターのような物を、ロザリーはマッチ入れみたいな道具をそれぞれ取り出して先端をくっ付けた。
この世界の通貨は硬貨ではなく、魔力の塊のようなモノだ。向こうのカードと同じような物だが、1度所持者が決まると他の人では全く使えないらしい。持ち主の魔力に反応するからと説明された。

ちなみにデザインは割と自由に変えられて俺もロザリーに貰った財布は手の平サイズの銃のマガジンに近い形にしている。
「ねぇ、僕ぅ～。私の所に来ないぃ？お姉ぇさん、君の言う事なら何でも聞いてあげるわよぉ」
何か勧誘された。
「ダメ！」
「あらぁ～、どうしてぇ～？」
「え、えっと…う～…さよならっ！」
「またねぇん♪」
やっと出れた…てかロザリー分かりやす過ぎ…
ん？店の前に人込みが…

「「「「キャーッ！勇者様～！」」」」
「「「「フレイヤ様――――っ！」」」」
「「バカ野郎っ！声が小さい！！！」」

何だ、何の騒ぎだこれ？勇者って言ってたか…
「勇者様？ね、ね、見に行こう♪」
そう言って走り出してしまった。切り替え速いな。
「ジル～、速く速く！」
「そんなに急がなくても…ロザリー前見ないと危ないよ！」
これだけの人込みじゃな～。とりあえずはぐれない様にしよう。
「ジル遅いよ～」
「あ、ゴメン」
「はぐれたら大変だよ。ね？」
そう言って手を出して来た…握れと？まぁ妥当か。周りからは姉妹にしか見えないだろうしイイか。ぶっちゃけ夜に抱き枕にされてるのと比べたらね…
「もうちょっと前に出ないと見れないかな？ジル、行くよ～」

「分かったから引っ張らないで…」
結構人込みに引っ掛かって痛いんだよな～
「ぷはぁっ…やっと出れた」
「ね、ジル。あれが勇者様だって♪」
指された方を見てみると、濃い紫髪のメイドさん、金髪の綺麗なドレス着た美女、こちらも金髪のイケメン騎士さん…大穴でメイドさんが勇者と見た。
「あのカッコいい男の人が勇者何だって♪」
はずれか～。まぁ妥当か。ドレスの人はユビキタス公国の御姫様でメイドはその御付かな？にこやかに話してるけど、聞いてみるか…
何々…

「勇人、まさか…あれくらいの年の娘がいいのかい？いくらなんでも犯罪だよ？」
「フレイヤ様に欲情する素振りが無いのは年齢が対象外だったからですか。想像以上のゲス野郎ですね」
「違ーーーうっ！ただ微笑ましくて見てただけだ！」
「そんなこと言って、あの幼女達を視姦してたんだろう？」
「今ならまだ真人間に戻れますよ？考え直しましょう？」
「だーーーーっ！」

…勇者も大変だな。とゆうか俺達の事見て話してるな。手でも振っておくか…

Ｓｉｄｅ：男勇者
ああ！さっきの姉妹の小さい方が同情した目でこっち見てる。
「勇人様、あまり騒がれると危ないですよ。それと幼女を視姦するのはそろそろ止めた方が良いかと。これ以上は私も庇いきれません」
「だからしてないって！」

「ふっ」

あの子何か失笑してる！上の子はキラキラした純粋な目でこっち見てんのに下の子は捻くれてる！？

「さて、勇人の性癖が分かった所で今日のパレードは終いだよ。明日に備えてちゃんと休まなきゃね」

こうしてコールスでのパレードは昼前に終わった。馬車はゆっくりと俺らの宿泊先、騎士隊舎に向かって行った。これで休める…

男勇者と男Ａの邂逅（前書き）

前振り長かった
ようやく出会います

ミスがあったのでちょっと直しました

男勇者と男Ａの邂逅

Ｓｉｄｅ：男Ａ

「後はグレゴリウスさんの手紙をギルドに届けて終わりだね♪」

スゴイ熱気を伴ったパレードが終わり人が減った大通りで今後の確認。人が減ったと言ってもまだかなりいるけど…

「今行って平気なの？お昼時だけど」

「そうなんだよね～。お昼どっかで食べてから行こうか。どこがイイ？」

「初めてだから分かんないからロザリーに任せるよ」

肩をすくめて戦力外宣言。俺の常識の無さを舐めるな…言ってて悲しくなってきた…

「じゃあ、テキトーに探してみよっか♪」

また手引っ張られる。もう慣れたな。さて何食べようか…

Ｓｉｄｅ：男勇者

「ようやく終わった～」

騎士隊舎で宛がわれた部屋のソファに倒れこんでしまう。フカフカ～

「だらしないよ、勇人。あれくらいで」

素人に３時間のパレードは酷だと思うんだ。とゆうかあんた自分の部屋に帰れ。

「フレイヤ様、勇人様は初めてなのですから。勇者といえ初めてでは所詮この程度ですよ」

「フォローするなら普通にしてくれ～。上げて落とされるのが１番辛い」

「知ってますが？」

「弄りの基本だね」

もうヤダ…

「この後って自由でいいのか？実際に街を見てみたいんだけど」
半分は本音。見たこと無い街って探検したくなる。向こうの世界でもこんな街行った事なかったし。もう半分はこの2人から離れたい、だ。
「いいけど、騒ぎになるよ？せめて変装していきな」
「服と髪の色だけでも意外と分からないモノですから。こちらをどうぞ」
そう言って普通の服と帽子と…短剣を貰った…何故？
「ジュワユースは目立ち過ぎますから、護身用にこちらをお持ち下さい。普通の剣だとその服に合いませんし」
おお、流石メイドさん。普段は俺の事弄ってばかりだけどこうゆう時はちゃんと考えて用意してくれるなんて…俺メイドさんのこと誤解してたよ！

Ｓｉｄｅ：姫巫女

メイドさんが普通に勇人の要望に応えてる…何かあるね。
「じゃ、着替えたら街に行ってくる。飯は街でテキトーに食ってくるよ」
ホクホク顔で部屋の奥に行ってしまったね。もう少し疑う事を覚えて貰わないとね。いい加減、権力欲に取り付かれてるバカを処分するのにも疲れてきたからね。さて、
「メイドさん、何するつもりなんだい？」
「もちろん、尾行です」
無表情で楽しそうとゆう離れ業を演じながら普通の服を2着…良く判ってるじゃないか。
「ふふふ、流石、私の専属なだけは有る」
「恐れ入ります」
さて、どうなるかね…

Ｓｉｄｅ：男Ａ

とりあえず良さげな店を見つけるために街を探索してみる事に成った。この街は人の出入りが激しいだけあって店も良く変わるらしい。なのでロザリーも珍しそうに眺めている。

「お嬢ちゃん達ぃ。どっからきたのぉ」

「お兄ちゃん達と楽しいトコ行かないかい？」

何か…スッゴイ分かり易いチンピラ（デブとガリ）に絡まれた…いや、きっと違う人に声掛けてるんだろう。うん、きっとそうだ。

「綺麗な黒髪だねぇ。ちょっと触らせてよぉ」

「やっ、来ないで！」

はぁ～、やっぱ俺たちか。

「オジサン、俺の連れに触らないでくれない？」

「ジル…」

ウルッた瞳でこっち見ない！ロザリーならコイツら簡単に丸焼きに出来るでしょうが。

「お嬢ちゃん、女の子が『俺』なんて言わない方がいいよ？それはそれで可愛いけど…ジュル」

なんてキモいガリだ…ん？

「あれ、…のトコの…」「誰か止めてやんなよ…」「嫌だよ、自分で…」「…にゃ関わりたくねえ…」「騎士だって黙認してるし…」

「可哀相に…」

成る程、権力者縁のヤツか…面倒臭い…息も臭いが。

「ふひゃひゃ、怯えちゃって。ますます可愛い」

ひそひそ話を聞いてたら勘違いされてしまった。

「さぁ、お兄ちゃん達とぉ来ようねぇ」

「はぁ～」

バシッ！

伸ばして来たデブの腕を払う…だって普通にキモいし。

「って！この、優しくしてりゃ調子こいてんじゃぁねえぇぞぉ！」

ん？こっちに突っ込んで来る人がいるな

「何してやがる！その子達嫌がってんだろうが！！」

「あっ？うるせー！誰だテメー！」

ん？あの顔はさっきの勇者か？

「ジル、…どうしよう？」

怯えた様子で3人を見ている…仕方ないか。

「平気だよ。最悪チンピラ2人は叩きのめすから。ロザリーは心配しなくても平気」

「…うん♪」

森の獣達の方が遥かにやばいし、肉屋とか赤ヒゲとかは化物だしでこれくらいじゃ驚く事もできない。安心したのかロザリーの声もいつもの調子に戻ったみたいだ。

「邪魔すんじゃねぇー！」

デブが勇者に殴り掛かった。その間にガリがこっちに来てる。人質にでもするつもりかな？

「このっ！」

勇者甘いな。なるべく怪我させない様に戦ってる。俺なら、

「雷槍！」

「ぎゃあぁぁぁあぁぁぁああっっ！！」

ガリ撃破。殺してはないよ？周りの人たちが唖然としてる…何か2人変な雰囲気の女の人がいるな…

ドスンっ！

「こんな所か。君達、怪我は無い？」

勇者はデブを倒した。イケメンスマイル発動。女性達は魅了された。男性達は嫉妬している。アホな事言ってないで…

「ありがとうございます。俺達に怪我はありません」

「あ、ありがとうございました～」

ロザリーは照れてるんじゃなくて俺の手見てました…殺してないってば。

「そう、よかった」
本心からそう思っている顔だな。コイツの召喚に巻き込まれたと思うと…特に何も思う事はないな…正直どうでもイイし…
「ロザリー、行こう。いい加減お腹減ったよ」
「うん、そうだね…」
だから殺してないっつの…
「君らもまだなのかい？俺もなんだ。一緒に食べないかい？」
「いいですよ～」
あ、ロザリーが先にＯＫしちゃった…ふぅ、ヤな流れになってきたな～…

男勇者と男Ａの邂逅（後書き）

ありがちなやられキャラの活躍でした

今7後も出番のあるモブキャラにしたいです

…無理ですね。出る予定無いですし…

男勇者と男Aの語らい

Ｓｉｄｅ：姫巫女

勇人、やっぱり見ていて面白いね。普通なら躊躇う所を躊躇無く飛びこんで行くんだから。しかし…

「へぇ、ギグの森に住んでるんだ。どおりで強い訳だ。あそこって騎士でも相当準備してそれなりの規模でようやく入るって聞いたよ」

「そうなんですか？ジル、強いって～」

「あ、うん。…あの森ってそんなに危険だったのか」

「でも、森の動物達は匂いに敏感なんで、知らない匂いを嗅ぐとビックリしちゃうだけじゃないんですか？私達はそんなに襲われませんよ？」

「だから俺は相当襲われてるのか。まぁ余所者だからな仕方ないか…」

「？ジルちゃんは森の出身じゃないのかい？」

「ええ、流れ者です。あと俺は男です」

「あはは～、また間違えられてる～♪」

「えぇ！本当に？」

何か楽しそうだね…どの道、顔がいいから道行く女性が皆振り向いてるし、幼女２人には嫉妬の視線が凄いね。勇人にも男性陣からの視線が凄いけど。さて、

「メイドさん、尾行はここまでだよ。私らは私らの仕事だ」

「私一人でも構いませんが？」

「私は仮にも公女だ。公私混同はしない。なに、速く終わらせればいいだけの事さ」

「畏まりました」

Ｓｉｄｅ：男Ａ

視線が無くなった？まぁ敵意は無かったから放っておいてたけど…

勇者を見てるって感じだったから放っておいたんだけど…何か不気味だ…

「ジル～、どんなの食べたい？」

「え、ああ。う～ん…」

「もう、何考えてたの？」

「勇人さんの事」

「ん？俺のコト？」

正直に言っておこう。その方が平和そうだ。

「何か勇人さんをずっと追いかけてる人がいたみたいなんですけど、急にいなくなったみたいで。何だったんだろうなって」

「うわ～…」

ん？心当たりあるみたいだな。

「あ～、うん。たぶんその２人は大丈夫だよ」

２人って決まってるのかよ…まぁイイや。俺関係無いし。いい加減腹が…

「ロザリー、海鮮系はどう？ここ港街でもあるし」

「あ、そうだった。じゃあ、海鮮系で。いいですか、勇人さん？」

「ああ、俺もそれでいいよ。ジルくんはイイ所突いてくるな」

やっと飯食える。

「ヘイ、いらっしゃい！」

寿司屋か！…ついツッコミいれてしまった。俺はのんびりスルーキャラでツッコミキャラじゃないんだが…

「寿司屋かよ！」

あ、勇者はツッコミだ。

「？ウチは丼屋だぜい。寿司なんて知らん」

「あぁ、すいません。つい。えと３人入れますか？」

「空いてるトコに入りな」

それなりに客はいるようだが４人席が１つ空いてる。ロザリー以外は男しかいない…むさ苦しい…
「はいはーい。ご注文はー？」
厨房の奥から女の人が出てきて…客が色めき立つ。この人目当てか…あ、マズい…
「う～ん、ジルくんとロザリーちゃんは決まってるの？」
「俺は決めました」
「アタシも～」
机に置いてあったメニュー表から２人で別々のモノを示した。
「速いな～。じゃあ、店員さんの御勧めでお願いしてもいいですか」
勇者はイケメンスマイルを使った。効果は抜群だ、店員さんは恋に落ちた。男性客は…訂正、店内の全員は嫉妬している。
「じゃ、じゃあこれなんかどうですか！？」
そう言って俺達とは別のモノを指した。あ、俺が悩んだヤツだ。
「じゃあ、それで。選んでくれてありがとう」
もう止めてあげて！店員さんのライフはもう０だよ！どんだけオーバーキルしたら気が済むんだよ！…まぁどうでもいいんだけど。あーあー、カチカチに成っちゃってるよ。
「せっかくだし奢るよ」
こうゆう事を嫌味無くあっさり言えるからモテるのかな？
男性陣の嫉妬の視線と店員さんの熱い視線とゆう、飯時にはなるべくご遠慮したいコンボを受けながらの食事も終了（普通に海鮮丼だった。美味かったけどさ…）。気にしてんのは俺だけだったさ。てかあの２人鈍感過ぎる…
さて、あとはギルドホームに手紙届けて終わりだな。何か濃い１日だった…勇者はとゆうと
『ここまで来たら最後まで付き合うよ』
とのこと。よく分からん。
って考えてたらギルドって看板のかかった建物に到着。

「じゃ、届けてくるね～」
1人で行っちゃったな～。まぁ大人しく待つとしよう。ベンチベンチっと。
「なあ、君たちは…森に住んでて危ないと思った事はないのか？」
座った矢先にいきなりだな。
「どうしたんです？」
「いや、君の力ならギルドの仕事でもして街で暮した方がイイんじゃないかって思って」
「俺達の安全を考えると街の方がイイんじゃないか、と？」
「え…ああ、そうだ」
「嫌です」
「な、何故だ？街なら凶暴な魔獣や獣に襲われる心配も無いし、何よりロザリーちゃんが危険に曝されることだって無い。今日1日一緒に行動しても分かるほどに彼女は、」
「ついさっき、街中で危険な目にあったばかりですけどね」
「うっ！…でも、君が彼女を守ってやれば、」
「ロザリーは守ってもらいたいなんて考えてるんですかね。それに常に一緒にいるなんて街でも森でも無理な話ですよ」
「だが！」
「そうやって自分の正論で人を救った気になるのは楽しいですか？」
「なっ、俺は純粋に君たちを心配してるんだ！」
「流石は勇者様、普通なら照れくさくて言えないような事も平然と言い切りますね。同じ世界の人間とは思えない」
「俺は真面目に…同じ世界、だと？」
自分が勇者だってバレてる事にも疑問持って欲しいな…はぁ～
「ええ、同じ世界。ビルが建ってて、車が走ってて、この世界と違って魔法が無い世界です」
「何を言ってるんだ…君が、何故ビルや車を知っている…」
「分からないんですか？それとも気が付きたくない？これだけ言えば簡単に分かりそうなモノですが」

「冗談だろう…だって君みたいな子供が…」
「貴方だって向こうの世界では子供ですよ。ふふふ、流石に人を巻き込んだ自覚の無い人は言う事が違いますね」
「たしかに俺だって大人じゃ…巻き込んだ？」
「ええ、そうです。俺含め3人。それが俺が神様に教えて貰った、貴方に巻き込まれてこの世界に落とされた人数です」
「な、」
「貴方と殆ど同じ時間に死んだ。ただそれだけで、なんの目的も無く向こうでの存在を削られてこの世界に落とされた、貴方の被害者ですよ」
正直この人のせいじゃ無いがあんま友好的に関わるのは勘弁だ。厄介事の匂いがするし。少々傷つくだろが俺の知ったこっちゃ無い。
「俺に、巻き込まれて…」
「ジルー、勇人さん。手紙届けてきたよ～」
「お帰り、ロザリー。どうする？まだ時間あるよね？」
「あぁ、ロザリーちゃん、お帰り」
へ～、意外と余裕あるのかな。ロザリーを不安がらせないように笑顔作ってる。
「俺はもうそろそろ戻るよ。明日速くに用事があってね」
「そうなんですか、じゃ、またいつか」
そう言って笑顔で握手を求めてみた…もちろん嫌な笑顔で。
「あ、ああ。またな」
「勇人さんまたね～」
勇者に関わるのはこれで避けられるといいんだけどな…

男勇者と男Ａの語らい（後書き）

男Ａは自分のためなら人を傷つけることを躊躇いません
逆に男勇者は人のために自分が傷つくことを躊躇いません

女勇者と男Ａは似てるかもです

女勇者の状況と女Ｂの受難（前書き）

キャラ邂逅その２
まぁこの話は前振りですが…

女勇者の状況と女Bの受難

Ｓｉｄｅ：女勇者

「最近の父上はあまりにも民に無関心すぎます！」

「姫様…」

変態巫女が痛ましげに姫を見ている。この姫は理想を掲げて何もしない、とゆう事が無く、理想に近い現実的な解決策を何時も実行しようと積極的に動いている。この私が珍しく尊敬しても良いと思った人だ。

事実この姫がいなければ死んだであろう民は多いと聞く。メイド達の情報は常に最新だ。彼女らの情報の速さは向こうの情報の速さに匹敵しかねない。そしてインターネット通信に迫る彼女らからもたらされた最新情報は

王の死期が近い、だ。

正直今の王よりは姫が王位を継いだ方が良いのは誰の目にも明らかだ。王は国内の情勢には目もくれず、外の状況ばかりを見ている。

つまり、戦争を考えている。

メイド達、変態巫女、姫、騎士団長、幾人かの重役から話を聞いても必ず聞く言葉、

人魔大戦

魔王の席には常に最強の魔族が就くと変態巫女から聞いたが詳細は分からない。知る必要も無いのだろう。

魔族は人間の敵

戦う相手の事等、この程度の認識以上は邪魔なだけだ。しかし私にとっての敵は魔族でも魔王でも無い。自分以外の他者、全てだ。この認識は揺らがない。例え尊敬できると思っている姫でさえも、私にとっては邪魔な存在だ。

だから王の死期が近いのではないかと聞いた時、私は良かったと思った。あの王が死に、姫が王位に就いたとしよう。私が国を出ても

姫は実力では止めない。これは性格の問題だ。姫は本当に何かを強制する事は無い。だから私はあんな事を口走った。

「では姫が説得されてはどうか？」

これは無意味だと思った。この姫なら既に説得しようとしたはずだ。

「勇那の言う通りですが…お父様には私の声は届きませんでした…」

やはりか…自分の愚行に溜息をつきたかったが、姫の手前それは避けた。これ以上は姫の精神を無駄に傷つけるだけだ。

本音では王の戦争を見る、とゆう判断は間違っているとは思わない。だが自国の内情が一定水準に達していない状況で戦争ばかりに気を割くのは、王の義務を果たしていない様に見える。国力が貧弱な今のこの国が、人魔大戦終結後にどうなるか。その時の私の立場、全てはこれから変えられる問題なのだろうか…

「勇者様、王がお呼びです」

王直属の近衛兵が伝言…何だ？

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「あなた！リリー様にいつもベタベタと…一体何様のつもり！」

この世界に来てから早2週間。

やっと慣れてきたリリーとの訓練の後、シャワーを浴びたくて部屋に戻ろうとしたら、また絡まれた。いつもは『突然現れてリリー様の公務を邪魔するなんて、見の程を弁えたらどうですの』とか言ってくるのだが今日は違った。全く、五月蝿いヤツね…

「ならリリーに直接言ったらどうなの？私に言ったって何にもなんないわよ？」

キレちゃダメよ、キレちゃダメ…

「なっ！リリー様は幼いながらに魔王とゆう重責に立たされているのですよ！周りの者が配慮して行動するのは当然の事でしょうっ！」

…私我慢しなくていいわよね？＜杭打ち機＞と＜心見の魔眼＞で思いっきり傷つけていいわよね？

「アンタ如きに心配されなくちゃなんない程アイツは弱くないわよ！大体面と向かって『仕事しろ』って言えないアンタはアイツを甘やかしてるって事でしょうが！嫌われたくないからリリーの自主性に任せるなんて逃げ道作って自分の都合の良い様に立場コロコロ変えてるだけのアンタに人に文句言う権利なんて有ると思うなっ！」

＜心見の魔眼＞で途中からコイツの感情が恐怖に移っていくのが見えた。だからそれに合わせて傷つくような言葉を言ってみたら見事に的中。このスキル使えるわね。まぁもう必要ないでしょ。スイッチｏｆｆっと。

ちなみに傷つき始めたのは『アイツは弱くない』辺りから。自分の可愛い人形にでもしておきたかったのかしらね。アホくさ。

「あな、た、に…あなたにそんなこと言われなくても判ってますわ！私はずっと、ズットリリーさまをみてきた、リリーさまだけを…いきなりでてきたあなたに…わたくしとリリーさまのなにがわかるっていうのよっ！！」

後半聞き取り辛っ！何か抑揚が無いっていうか…文章にしたら漢字が無いみたいな感じだったわね…

あ～、そういばコイツってリリーが魔王に成ってから最初に城務めが決まったメンバーで、いきなり御付に任命されたんだっけ…うぅわ、プライド高そ～…

「分かる訳ないでしょ。アンタバカなの？相手の事なんて分かんなくて普通なのよ。自主的な行動して欲しいってのはアリだけど自分勝手な理由でアイツを堕落させるアンタのやり方がアイツのために成る訳ないでしょ！アンタのは思いやりでも気遣いでも何でもない。ただの人形遊びなのよ！！そんなことしかできないアンタがアイツに好かれようだなんて、生まれ変わってからにしなさい！」

勢いで言い過ぎた…なわけないわよね♪ほら、アイツは泣いて…る……またやっちゃった？

「グズッ…まさか、あなたがそんなにもリリーさまの事を考えているなんて…」

…あれ？
「私は…今まで、甘やかしているだけでしたのね…お恥ずかしい限りですわ…」
どうしよう。あの瞳の輝き…つい最近も見たばかりな気がするわ…
「私、目が覚めました！リリー様があなたを選んだのも、このように真剣に向き合ってくれるからなのですね！」
あぁ、ドンドン変な方向にヒートアップしてる…
「イトハ様！」
「は、はい！」
「私と…私と将来を真剣に考えたお付き合いをして下さい！！」
「イヤーーー！またなのーーーーー！！」
「どうしたのじゃ、イトハ！」
「イトハ殿、如何されました！？気分が優れないならば某の部屋で休息を！」
「大丈夫ですか、イトハちゃん！保健室が空いてますからそこで休みましょう！」
不用意に叫ぶんじゃなかった！テキトーに数えても１０人は出てきちゃった。どうしよう…
「あ～、皆、私平気だら、ね…別に休まなきゃいけない程疲れてないし…」
「じゃが悲鳴を上げたのは事実じゃろう？」
「そうですぞ、イトハ殿。あれはただ事では…」
「イトハちゃん、私達の間に隠し事なんて…」
ヤバい…収集がつかない…
「イトハ様…そんなにお疲れでしたら…私が癒して差し上げます」
頬赤らめてんじゃないわよ！えぇーい、しょうがない。
「平気だから…晩御飯まで自分の部屋でゆっくりするから…じゃね！」
「あ、待つのじゃ！えぇ～い、皆の者、追え！追うのじゃ！捕まえた者にはイトハの第２夫人の地位を約束しよう！」

「魔王様、その言葉待っておりました！イトハ殿、御覚悟！」
「流石リリーちゃん、これは頑張らなきゃ！待って～、イトハちゃ～ん」
「本当ですか、リリー様！？イトハ様、今参りますわ！」
……カオスな城だわ。いや、カオスなのはメンバーね…

女勇者の状況と女Ｂの受難（後書き）

女勇者の長ったらしい心情と
女Ｂのラブコメな日常でした

ちなみに
女Ｂの新キャラ達はありがちなハーレムです
まぁ全員女ですが…

魔界は同性の結婚も認めてますが、多夫多妻も認めてます
よくよく考えるとスゴイ話です…

女勇者と女Ｂの冒険

Ｓｉｄｅ：女勇者

さっさとこの国を出たい。それが最近の私の願いだ。

剣は元々の技量と騎士団長との稽古もあって、それなりの腕になった。魔法も実践で使えるだけの速さで展開できる。これならば城を出て自分の力で静かに暮らすのも可能だろう。しかし、騎士たちが追ってくるのは確実だ。倒しても倒してもしつこくやってくるのは目に見えている。やはり、魔王とやらを倒して私の存在理由を無くす必要がある。

この国は病んでいる。貴族は民の糧を絞り取り、王はそれを放置している。弱いのでは無く、民に興味が無いのだ。そして民は誰かに救われるのを待っている。

私の１番嫌いな顔をして、救いを待っている。誰かが助けてくれると考え、『自分には出来ない』からと動かない、そんな顔だ。

民も貴族も王も、全てが気持ち悪い。

そんな周囲にストレスを感じる日々を送っている時、王から国外へ出る事を言い渡された。

『北第４大陸のドラゴンが最近この国に出没するように成った。修行の成果を見るためにも、どうにかしてこい』

こんな事を言われた。正直渡りに船だ。この国から離れられるならちょうどいい。少しは羽を伸ばすとしよう。さっそく旅の準備だ。

「にゃ～」

もちろんクロも連れて行く。不本意だが変態巫女と騎士団長もついてくる…クソッ…

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

ガチャバンッ！

「イトハ！明日はギグの森に行くぞ！！」
いきなり過ぎんのよアンタは…
「ノックぐらいしなさい！」
「うむ！今ならイトハの着替えを見れると思って敢えてしなかったのじゃ。予想通りでなによりじゃな！」
ゴンッ！
「とりあえず、あと1発で済ましといてあげるわ」
「ま、待つのじゃ、これ以上は頭の形が変わってしまうのじゃ…」
本気でビビってるわね…ふぅ…
「で、何よいきなり。ギグの森って人間界と魔界を分けてるあの霧よね？何かあるの？」
「う、うむ。わらわの友がおっての。少々変わり者じゃが魔具職人としては優秀なんじゃ。久々に会いたくての。それにイトハの紹介もしたい」
友達のトコに遊びに行きたいわけね。まぁイイかな。この世界の他の場所を見るチャンスだし。
「わかったわ。どれくらい掛かるの？」
「うむ。車で3時間くらいじゃな」
車ってのは馬車のこと。引いてるのは馬じゃなくてケンタウロスだったけどね。
「朝から行くの？それに急じゃ迷惑じゃない？」
「朝からじゃな。安心せい。変わり者とゆうのはな、その辺の事を気にせん性格も含めてなんじゃ。あ、泊りになるじゃろうから着替えも必要じゃ」
確かに、朝からいきなり来られて気にしないのは変わり者かもね。
さって、何着てこっかな～♪

Ｓｉｄｅ：女勇者
馬車から見ると視界の全てが紫色の霧になる。

「ここから先がギグの森になります。勇那様、準備はよろしいですか？」
「いつでも」
「俺も準備できてるぜ」
ギグの森は危険。その認識が強いのか変態巫女は普通の巫女っぽいし、騎士団長もふざけた態度を取らない。ギグの森恐るべし。
「にゃ…」
クロも緊張しているな。
「クロ、私の傍にいれば安全だぞ」
「にゃん」
肩に乗ったか。これは…良いな…
「……勇那様、私も…」
「お前は自分でどうにかしろ」
「あっはっは。振られてやんの」
「五月蝿いですよ！」
そんな馬鹿な話をしながら森に入った。
小規模の方が森の動物に見つかり辛く動き易いからとゆう理由でこの人選になった。副団長が書類仕事が増えて大変そうだったがまぁ気にする必要は無い。
しかし森を覆う霧に入った瞬間２人が静かになった。ここから先は話す余裕も無いのだろう。
む？霧が薄くなってきた。霧のある区間は１０分程のようだ。やっと抜けるな。
「…普通だな」
ギグの森は思ったより普通の大地だった。特に霧の外との違いは見受けられない…こうゆうのを拍子抜けと言うんだったか…
「第４大陸は向こうですね。ですが今日は人の居る場所に行きましょうか」
予定ではギグの森で１泊する事に成っている。何でも私の経験のために敢えて危険を冒すらしい。いらん配慮だがクロに船の上はきつ

いだろうからちょうど良い。
「その前に、ちょっとした運動することになりそうだぜ」
…どうやらそのようだな。木の合間から狼のような獣が数匹此方を窺っている。
「進みながら倒しても構わないな？」
一々止まっていては進めなくなりそうだ。
「はい。方向は私が示します。援護もお任せ下さい」
「頼んだぜ。俺は森慣れてないし、勇者様は初めてだ」
騎士団長が珍しく皮肉を言わない。いつもそうならいいんだがな。
「さて、始めるぜ。だあぁ！」
獣の群れに突撃していった。
バスターソードの威力を存分に発揮できる様2、3匹まとめて射程に入れる位置を常に取っている。あれなら囲まれても薙ぎ倒せるか。
さて、
「初めての対獣戦だ。加減は出来んぞ」
私に狙いを定めてきたのは2匹。
飛びかかってきた1匹を下から縦に両断。左から突進してきている1匹は頭から尾にかけて貫いた。剣を振って引き抜く。
元々6匹だったようだな。団長が残りの4匹を薙ぎ払って狼の襲撃は終わった。

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
「へぇ～。危険な森って割には普通なのね」
森に入ったらオドロオドロしい風景が広がっているかと思ったら案外だった。遠くに火山みたいなのがあるのは無視。
「まぁ、ここは森と言うても湖は有るわ火山は有るわでの。ギグの森自体が1つの大陸みたいなもんなんじゃよ」
「森じゃないじゃない」
「気にするな。森が1番広いから森と呼ばれとる。ジジイはそう言っておったな」

「まぁ、名前なんてそんなもんよね。魔獣に襲われないことでも祈っとこうかしらね」
「あ、その心配は無用じゃな」
「何でよ？」
「わらわの魔力に当てられて動物達は近づかん。じゃからこの馬車の中は安全じゃ」
「旅の醍醐味が…」
「と、安全が確保できた所で…イトハ…」
ゲッ！このウルッた目は！
「さぁ、今こそ2人の愛を確かめようぞ！」
「い、イヤよ！」
ってココ馬車の中だから逃げ場が…
「ふっふっふ、イトハ～」
イヤーーー！ちょっ、やめっ、んん！ふむっ！なっ、し、舌までなんて！あ、あむ、ふむぅ、んぁ…あ…ダ、メ…たべ、ないで……

女勇者と女Bの出会い

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「先程はお楽しみでしたね♪」

御者台の出たら馬車を引いてるケンタウロスさんに話しかけられた。

何故かこの人？は1本角が生えている

「次にそれ言ったら灰にするわよ」

炎を纏わせた魔槍ガ・ジャルグを突き付けてやった。この槍、契約？すると爪にルーンにが出て、しまっておけて持ち運びに便利だった。同じような物は他にもあるらしい。

ちなみにリリーは馬車の中に転がせておいた。年上舐めんな！そう何度もお子ちゃまにやられてばかりじゃいられないのよ！

「はははははは…もうしません！」

全く、冗談じゃないわよ。

「あ、ロザリー様の所に着いたらブラシ掛けしてくれませんか？イトハ様にしてもらうのスッゴク気持ち良いんですよ♪」

…はぁ…リリーの城で暮すうちに色々な魔族と話したけど1部の女魔族が私のコト好きに成っちゃったみたいなのよね…最初はリリーと話してると睨んでたヤツもちょっと話したら…思い出すのヤメヤメ、疲れるだけだわ…

「リリーの友達ってロザリーって言うの？」

「ええ。見た目はイトハ様より少し年下の可愛い女の子なんですが、実験大好きでよく部屋を爆破してますね。あと実験中はご飯を忘れるみたいです」

「…確かに変人ね」

「でも優しくて良い子なんです。イトハ様もきっと気に入りますよ♪」

ふぅ～ん。まぁ悪い子じゃなんでしょうね。

「あれ？イトハ様、人間の馬車です」

「え…大丈夫かしら。いきなり襲われるなんてことはないわよね？」
「あ、それは平気です。ケンタウロス族は人間の間でも馬車として認知されてますし、イトハ様とリリー様は見た目は人間なのでいきなり襲われるとしたら…相手が賊だった場合ですね」
それが１番ヤバいんじゃ…

Ｓｉｄｅ：女勇者
「あ、ケンタウロスですよ。始めて見ました。勇那様、ケンタウロスです♪」
幾度か魔獣や獣と戦ったが特に問題無く森の中を探索していたら巫女が急に騒ぎ出した。何だと言うんだ…
「勇者様も見といた方が良いぜ。中々拝めねえからな」
騎士団長まで興奮した声に…全く…
「何だと言うんだ？」
「アレですよ、アレ！」
そんなに大声で話さなくても聞こえている。どれどれ…なるほど、確かにスゴイな…
私達と向き合う様に進んできた馬車を引いているのは馬ではなく、下半身は馬でも上半身が人間の生き物だった。確かケンタウロスと呼んでいたな。ファンタジーには度々出てくるが実際に見ると込み上げて来るモノが有る。これは…感動か？
「話してみたいな…」
いかん。つい妙な事を言ってしまった。
「話しかけてみようぜ。俺も興味有る」
「私もです。こんなチャンスもう無いかもしれませんし」
全員ノリ気だな…これでいいのか騎士に巫女…
「じゃさっそく。お～い、ケンタウロスさ～ん！」
巫女が普通に話しかけてる…物怖じしないな…
「わ、声掛けられちゃった」

「イトハ様、リリー様を起こしてもらえませんか。挨拶くらいはして頂きたいですし」
「ん、わかったわ」
御者台にいた少女が中に入ったか。誰か起こすようだったな。
「こんにちは、旅の方。どうされたのですか？」
近くに来て丁寧に対応してくれる。普通の人間とそう変わらないな。
「いえ、その…ケンタウロス見るのが、初めてだったもので…」
「すまねえ。珍しかったからつい声掛けちまったんだ」
「お気になさらず。元気な声でしたね♪」
どうやらこのケンタウロスは気さくな性格のようだ。
「ほら、シャキッとしなさい」
先程中に戻った少女が幼女を連れて戻ってきた。少女の方は赤髪を2つ結っていてベストのみの執事のような服、幼女の方は長い銀髪でお嬢様のような服だった。幼女はいったいどんな属性だ？そして少女はいったいどうゆう趣味だ？
「う～、イトハの舌が～、もう1度あの様に激しく」
「アホなこと言ってると燃やすわよ」
「む、旅の者達か」
「都合良いわね。はぁ…はじめまして、イトハ・ユリよ（魔王だってのは隠しなさいよ）」
「わらわはリリーじゃ（心配するでない。それくらい心得ておる）」
馬車を降りて自己紹介された。こちらも礼儀は尽くさねばな。
しかし、リリーとやらの最初の言葉…変態巫女と同じ匂いがするな…
「私はエルーダです」
「俺は…だ」
「私は勇那だ」
考え事していたら騎士団長の名前を聞きそびれた…まぁ知らなくてもいいだろう。
ん？イトハとやらに注視されているな…
「何か」

少々ぶっきら棒な声に成ってしまった。
「いや、気を悪くしたなら謝るわ。ただちょっと…何て言うか、私と似たような感じがしたから…」
ほう、同じ苦労を持つ者同士、その辺の感覚は似るモノなのかもしれないな。

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
この勇那って人…この名前。コイツが私を巻き込んだ勇者ってヤツみたいね。まぁ勇者って言ったら魔王を倒すためにいるんだしこの人が何かした訳じゃないから正直興味ないのよね。
…まぁ、あのエルーダって人はリリーとか城の女魔族達と同じ人種っぽいけど…勇那ドンマイ！強く生きるのよ。リリーの敵にならない程度に頑張って！
あ、そう言えば、
「貴方達はドコに向かってるの？」
結構重要よ。魔王城だったらシャレにならないわ。
「ああ。第４大陸に行こうと思ってるんだが、この森で１泊したくてね。あっちに人が住んでるとゆうから向かってるんだ」
良かった、魔王関係無かった。しっかしこの人カッコイイわね。普通のアイドルが可哀相に見えてくるわ。
「君たちこそ何処に行くんだ？ケンタウロスは慣れているようだったが」
「リリーの友達の家がこの先にあるからそこに、ね」
一緒に来るとか止めてよ？
「そうか。それはいいのだが…あの幼女は何故さっきから凄い目で私を見ているんだ？」
確かにリリーがスゴイ顔で勇那を睨んでいた。多分嫉妬よね？でも…
「それを言ったらエルーダだっけ。あの人も私の事スゴイ睨んでるわよ？」

正直かなり怖い…
「……すまない。あいつはレズビアンでな。私の事を好きらしい…」
「…ドンマイ！きっと良い出会いが有るわよ！…お互いに…」
「そうだな。どうやら私達は同じ苦労を背負っているようだしな…お互い強く生きよう」
そろそろ潮時かしら…
「ええ、頑張りましょう！じゃ、まずはお互いの身の安全を祈ってきましょうか？」
「そうだな。イトハ、またいつか」
「ええ、またいつかね」
こうして、私達は別れた…勇者、か。できれば敵になって欲しくはないかな…
「イトハ！わらわの妻で有りながら他の女に現を抜かすなど…」
五月蝿いのが残ってた…

Ｓｉｄｅ：女勇者
「勇那様！私のドコが不満ですか？不満があるなら仰ってください！私は勇那様のためなら例え夜の御相手でも…」
さっきから変態が五月蝿いし団長の嫌らしい笑みが鬱陶しい。クロだけだな。私を癒してくれるのは。
しかし、あの幼女の隠してた異常な魔力…アレが魔王、だったのかもしれないな…

女勇者と女Ｂの出会い（後書き）

この２人の出会いはわりとあっさりでした

さて、次回は魔王の友繋がりで女Ｂと男Ａの出会いです

女Bは魔王の友を訪ね、男Aは神祖の友を迎える（前書き）

何か最近分量が増えてる？
と思ってたらやっぱり増えてました
良い事なのかどうか悩み所です

女Bは魔王の友を訪ね、男Aは神祖の友を迎える

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

勇者？達と別れ、お昼過ぎたころ。

「リリー様、イトハ様。そろそろ着きますよ」

ようやく着いたみたい。思ったより勇那と話しこんじゃったのね。

「そうか。お、見えてきたの」

「どれどれ？」

「あれじゃの。あの大木と一体化しとるヤツじゃ」

……本当に一体化してる…人里離れた森にいる魔女ってあんな家に住んでるイメージね…

「うむ。イツ見ても変な家じゃな」

「リリー様、ロザリー様を呼びませんと」

「そうじゃったの。いつものように任せる」

「はい。では、」

ん？まだちょっと距離あるわよ？どうすんのかしら…お～きく息吸って…

「っ、ヒヒーンッ！！」

「ヒッ！」

……声デカ過ぎ…耳が…塞ぐの間にあわなかった…あ、リリーのヤツ自分はちゃっかり塞いでる！

ガチャッ

「リリ～♪久しぶり～！」

ちっ、お説教は後ね。

扉が開いて出てきたのは長い黒髪の少女で…浴衣？え、何アレ？浴衣ってこの世界にあったの？

「ねぇ、リリー。あの子の服って見たコトある？」

「ん？わらわも見たことの無い服じゃな。大方人間の街で見つけてきたんじゃろ」

「ロザリー様、お久しぶりです」
「ひさしぶり～♪」
浴衣に気を取られてるウチに家に着いちゃった…
「ロザリー、誰か来たの？」
家の裏から小さい女の子が…また浴衣？でも2人とも男モノなのよね…て下駄まである！？
「……誰じゃ？」
「……誰ですか？」
「ジルだよ～♪」
ロザリーちゃん、リリー達の疑問に答えてないわよ、それ…
「まぁとりあえず、俺はジル。ロザリーの家に置いて貰ってるんだ。あ、ヒモじゃないよ。あと勘違いしてるだろうけど、男だよ」
「……嘘じゃろ…む、わらわはリリー・クロンキストじゃ」
「一角ケンタウロスのモリッシュです」
「あ、私はイトハ・ユリよ」
リリーの気持ちは分かるわね。あれ男？薄紫のショートヘアー…やっぱり女の子に見える。
ちなみに一角ケンタウロスってのはそのまんまで、ケンタウロスの頭から角が一本生えてる種族だけど、スッゴイ少ないって聞いたわ。
「イトハはわらわの嫁じゃ」
「違う！」
「はぁ、そう…大変だね」
「ウルサイ！」
同情してんじゃないわよ！
「ねぇねぇ、リリー。イトハとドコで出会ったの？」
「そこ！乙女の恋バナ始めようとしない！」
「ロザリー、家に入らない？短い用事じゃなさそうだし」
あ、常識も気遣いもある子だわ。
「そうだね。モリッシュさんも今日は家に来ようよ～♪」
「む、掃除でもしたのか？以前はモリッシュが入れるスペースなど

無かったじゃろ？」
「ジルが掃除してくれたんだ～♪」
「この家は実験道具が散乱し過ぎなんだよ…」
「聞いた通り実験好きなのね…」
「ん？まぁ、実験中は飯も忘れて没頭してるから、家のコトは俺がやってる…」
「大変そうね♪」
「ウルサイ…はぁ、ロザリー、お茶淹れてくるよ」
「は～い。じゃ、皆、どうぞ～♪」
「うむ。苦しゅうない」
「御邪魔しますね」
「お邪魔するわ」
ジルって苦労人な空気がしてるわね…

Ｓｉｄｅ：男Ａ
妙な客だけどロザリーの知り合いなら納得だな。でもあの小さい子、銀髪って。魔力は高そうに見えたけど…属性何だ？何でもいいか。客なのは変わらん、さっさと茶淹れよう。
「発火」
火点けてヤカンを置く。くぁ～、寝む…
「え、じゃあその服ってジルが作ったの？」
「うん♪スッゴイ着やすいよ～。実験用にコレ、白衣っていうのも作ってくれたし♪」
あ、なんか服について話してる。
「イトハ、そんなにその服が気に成るのか？」
「ええ。その服、私の世界の服だから…」
「ほう、あの魔法の無い世界か」
「魔法の無い世界？なにそれ～？」
あ、あの人巻き込まれた人だ。てか隠してないんだな。一応聞かれ

たらとぼけておくかな。面倒だし……お、湯湧いた。
「お茶入ったよ」
４人分テーブルに並べ、床に直座りしてるモリッシュさんに渡して
っと…
「ねぇジル。アンタ、その浴衣、ドコで知ったの？」
「ん？俺が考えたんだよ。名前は付けて無かったけど。着やすいし、
洗濯楽だし。白衣はロザリーが実験で服汚すから」
「何で白なんです？汚れが目立ちますよ？」
お、モリッシュさん良い所突いてくるな。
「薬品付いたって分からないと逆に危険でしょ？速くに気付いたら
速くに対処出来るし」
「おお、色々考えておるの」
「そうでもしないとロザリー危なっかしいんだよ。よく爆発するし」
「大丈夫なの？この家とか」
「酷いよ～。爆発しても平気なように防護魔法で守ってるよ～」
泣きそうな声で言われても同情出来ない…
「いや、最初から爆発させないでよ」
「うぅっ…ジル～、イトハが苛める～」
「イトハさん、年下の子には優しくしないとダメですよ？」
縋りついて来たロザリーの頭撫でながら教師口調で棒読みしてみた。
「じる～」
あれ？感謝されちゃった？
「やっぱりジル優しい～♪」
「あれでいいんですね…」
「イトハだって優しいぞ！」
あ、ガキンチョがヒートアップした
「ジルの方が優しいもん！」
「だってよ♪」
「イトハの方が優しいのじゃ！」
「そっちも同じ様なもんだよ？」

「うっ」
「どっちもどっちですよ♪」
外野が野次飛ばすな。
はい、負け惜しみですね…はぁ…
「別にどっちでもいいだろうに…」
つい呟いてしまった。まぁ小声だったし聞こえて無いだろう。何か別の話題で盛り上がってるし。
「ジルは1人で狩が出来るくらい強いんだよ！」
「イトハはわらわと同程度の魔法を使えるのじゃ！」
「ちょっと、止めなさいよ！」
「ジル様、速めに止めた方がイイですよ？」
「じゃあイトハはリリー止めて」
俺に押し付けられても…自分の担当くらい自分でどうにかしてくれ。
「無理よ。私が話しかけたら余計暴走するわ」
「こっちも似たようなもんだよ」
実際俺が声掛けたら…今から1人で狩してこいって流れになるだけだ…
「なら勝負だよ！」
「望む所じゃ！」
あ、話し聞いてなかったけど、決着着きそう。
「ちょっと、ホントにヤバいわよ！どうにかしなさい！」
？何そんなに慌ててんだ？
「ジル！準備いいよね！」
「イトハ！こっちも良いな！」
どっちも疑問文なのに疑問系じゃない…なんだこの展開…
「ジル、行こう！」
「イトハ、ついてまいれ！」
「はぁ～、遅かったわ…」
「イトハ様、諦めましょう…」
…もしかして、勝負って…俺とイトハでか？

とりあえずついて行くか…

女Bは魔王の友を訪ね、男Aは神祖の友を迎える（後書き）

次回は飛ばされた者同士の戦い

勇者2人はチートですが3人は微妙です

状況によってはチートっぽいくらいのつもりです

女Ｂと男Ａのヤリ合い（前書き）

ちょうど５０話目だったんですね
何か偶々節目の番号見ると嬉しいのは作者だけでしょうか？

女Bと男Aのヤリ合い

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「では、これより決闘を始めるのじゃ！」

やっぱり俺とイトハだったか～…ロザリーも大人気無い…

「はぁ～、もういいわ。ジル、ヤルからには…本気よ」

そう言って掲げた右手の中に、魔力の塊が出来て真っ赤な槍？が出てきた。槍…か？何か片面だけ刃が長くて斧要素の無いハルバートみたいだな。

片手で左右に振って構えた。

「さっさと武器構えなさい。それとも武器無しでヤルつもり？」

イトハの武器は多分、契約出来る武器だ。つまり、しまっとくルーンが体に有り、武器自体が妙な能力を持ってるハズだ。赤ヒゲが前に契約武器を相手にするのは危険だと語ってたから間違いない。つまり、油断は出来ない。

しょうがない。この間赤ヒゲが付けた機能でっと。

両手の中指に付けた指輪がクロスの軌跡にを描くように、魔力を込めながら体の前で腕を振って交差させる。気取った変身シーンに見えなくもない…

指輪が魔力を認識し、俺の手足に新しいグローブと脚甲を装備させた。

あ、ロザリーがヒーローモノ見る子供の目だ…はぁ…

今まではグローブと脚甲を一々付けなきゃならなかったが、それじゃいざとゆう時対応が遅れてロザリーを危険に曝すと言って赤ヒゲが、『ロザリーの為』に指輪にルーンを刻んで付けた機能がコレだ。

厨二っぽさ倍増な、甲に紫色した水晶のレンズが付いたフィンガーグローブ、足には踝に同じ様に水晶レンズの付いた膝までの脚甲。

一応電気の魔法の効率が上がる鉱石だから文句は無いが、何か似たような武器が向こうの漫画に一杯あるんだよな…効率考えるとこの

デザインが安定なのか？
ま、今はデザインよりイトハに集中するかな……

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
へぇ。アイツも契約武器なのかしら？私以外に契約武器持ってる人見たコトなかったから新鮮ね。それにしても…
あの出し方カッコつけ過ぎ！…ぷっ…
「笑いたくなるのは分かるけど、せめて終わってからにしてくれ…」
「あ、自覚あんのね」
「こうしないと出ないんだよ…」
「は？契約武器出すのにモーションなんて…」
「こらー！イトハはわらわの嫁なのじゃぞー！」
最後まで聞けなかったわね…まぁイイわ。
「…始めましょうか？」
「…うん、始めよう」
「全く、イトハにはわらわの嫁だとゆう自覚を持って貰いたいモノじゃ。…では」
リリーが手を上げる。アイツは体の左側を少し前にしてるだけで構えらしい構えを取って無い…まぁ、目は真面目だからアレが構えなんでしょ。
「始めい！」
「爆進」
「っ！」
リリーの手が振りおろされると同時に距離を詰めてきた。何かを呟いた瞬間、元いた地面が爆発してスゴイ速さで距離を詰めてきた。
その体でどうやったらそんなコト出来るのよ！？どう見たって地面蹴る勢いで爆発させたでしょっ！
とにかく！迎撃しなきゃっ！！

Ｓｉｄｅ：魔王

「何じゃあの速さは…」

「あ、あれは『爆進』だね～。ジルが考えた突撃用魔法だって～」

「…呪文は？」

「『爆進』だよ？」

「…魔法名は？」

「『爆進』だよ？」

「ロザリー様、それは…魔法として発動するのですか？」

「するよ～。呪文が短いからわかんないかもしれないけどちゃんと呪文と魔法名の条件満たしてるよ～」

「どうやってじゃ？」

「『爆』が火属性で『爆ぜる』って意味を持ってて、『進』が『足』と『前に進む』って意味。これで呪文と魔法名の両方できてるよ～」

「それ…ありなんですか…」

「目茶苦茶じゃな…」

「呪文が意味と情報で、魔法名が発動のきっかけって教えたら『じゃこれは？』って。最初はビックリしたよ～」

「くっ！調子乗んじゃないわよっ！」

「ちっ！まだだ！」

しまった！ロザリーの解説に夢中で試合見とらんかった…

「この！ちょこまかと！」

「当たるか！雷甲！」

イトハの槍を左手で受け流し、直後に振るった右の掌の軌跡に合わせて電撃の壁が出来てイトハを弾じく。

あのように素早く魔法を出されては接近戦は不利じゃ！

「アンタと接近戦ヤル気は無いのよ！」

「そう。でも、悪いけど付き合ってもらうよ」

「ジル、頑張れ～」
「イトハ様！距離を…」
「分かってるわよ！コノッ！」
「ちっ！」
ようやく間合いが取れたの…勝負はこっからじゃ！
「イトハ！ガ・ジャルグを使うのじゃ！」
「言われなくても使うトコよ！」
怒鳴らんでも…ガ・ジャルグの先端を天に向けたの…
「イトハ様、ようやくですかね？」
「ようやくじゃろうな。さて、ジルはどうするかの…」
「何々？イトハ、何やるの？」
「見ておれば分かる」
槍の先端に魔力が集まっとる…大量の、火の魔力が。離れとるのに熱いの…
「丸焼きに成りたくなかったら防ぎなさい！」
「どうかな！」
通常では有り得ない、呪文も魔法名も必要無い魔法、
「イっけーーーっ！」
ためも殆ど無いから避けるのは至難の技じゃな。
「ッ！！」
「ジルーーーーーっ！」
ごおおぉうぅ！！
ガ・ジャルグの槍先からジルに向け、視界を埋め尽くす巨大な竜を模した炎が放たれた…
まるで火の海みたいになっとる。まぁ、今回は周りに被害が出んよう結界張ったから平気じゃろ。さて、煙が晴れるの待つかの…流石に殺しとらんじゃろ。ロザリーは…いかん！完全に目が死んどる！
「イトハ、ヤリ過ぎじゃ！ここにはロザリーも…」
「黙ってなさい！まだ終わってないわ！」
何を…っ！上じゃと！

トサッ
「ジル！」
「ロザリー、顔洗った方がイイよ？」
「どうやって避けたのかしら？」
そうじゃ！あの様な広範囲攻撃…
「まぁ、＜悪運＞強いからな…空に逃げてどうにか…言葉も無しにあんな事出来るなんてね…」
確かに、無傷では無い。あちこちコゲとる。じゃが…普通は避ける等…
「ジル、後でちょっとオハナシしようか？」
「イヤ、ちょっと遠慮しとこうかな～なんて…さて、イトハ。息は整ったかな？」
「はぁ、はぁ…ングッ。何のことかしら？まだまだこれからよ♪」
流石に魔力の消耗が激しいの…大丈夫じゃろうな…

女Bと男Aのヤリ合い（後書き）

女Bと男Aの微妙チートでした

男Aの魔法が他のキャラと違う理由を明かしてみました

女Bと男Aはヤリ合ってる（前書き）

不定期更新の予定が1日1話に…
忙しくてそのうち不定期になりそうです…

Ｓｉｄｅ：神祖

全くジルは！こんなに心配させるなんて…今日の晩ご飯抜きだよっ！

「さっきから！思って、たんだけど！」

「何？手短に、ね！」

「はあ！その浴衣、戦い！づらく、ないわけ！？」

「これで、狩やって、たから！慣れた」

あ、また距離できちゃった。

「ジル～、離れちゃダメだよ～」

「イトハ！とにかく距離を取って魔法で応戦するのじゃ！」

「魔力切れには注意してください！」

「了解！」

「わかってるわよ！」

でもジルとイトハ、もう３０分も話しながら戦ってるよ～。あ、時計止まりそう、ネジ回さなきゃ。

「火球よ　爆ぜよ　ファイヤーボール！」

「雷甲」

あ、左手で受け流した。

ジルの雷甲は両手足の武器にルーンが刻まれてて、右手が手の平からちょっと広い範囲に、左手が手首から先を覆うように、両足は纏うように展開されるんだったかな？

魔力大丈夫なのって聞いたら『雷槍も雷甲も、俺の魔力３０としたら５しか使ってないから平気だよ』って言ってた。それくらいならジルの魔力全然減らないな～。魔力が回復する速度も量もそれより全然上だし。

「風牙」

「なっ！風も使えるの！？」

「電気の属性には風も含まれてますから、使えなくはないでしょう

ね」
「しかし本当に短い魔法じゃな。あれでちゃんとイメージ込められとるのが信じられん」
「戦ってる、コッチは、たまったもんじゃっ、ないわ、よ！？」
「雷槍」
「きゃあああっ！」
柄を掴まれたら槍じゃ身動きとれないよね～。お腹に掌底入ったけど、決まったかな？
「く、炎よ　大地を撫でる　息吹となれ　ファイヤブレス！」
「うわっ！そんなん当たったら確実に死ぬって！」
イトハの手から吹きすさぶ炎。あれは避けるしかないよね～。
「はぁ、はぁ。ちょこまかと、鬱陶しい」
あ、ジル大丈夫かな？

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
あの雷槍とか言う掌底、体の芯打ち抜いていったわね…これは…キツイわ…
「うぅ、いい加減その炎に炙られるのは辛くなってきた」
まだ冗談言ってる余裕あるなんて…どんだけよ…
「コッチもいい加減、電気浴びるのはイヤなのよ」
地味に雷甲で体力削られるのよね…面倒なヤツね！
「爆進」
っ！またアレ！？舐めんじゃないわ！カンターを…
「追連」
なっ！途中で別方向に加速出来るなんて！
「甘いな！雷甲」
回し蹴り！？くっ！
ガキンッ！
「へぇ、まだガード出来るんだ…コッチは結構限界なんだけど…」

全然元気じゃない！なに？挑発のつもり！？
「のう、ロザリー。ジルのヤツ、さっきから稀に刃を生身で弾いとらんか？」
「あ、ジルの職業スキルは＜グラップラー＞だから、ちょっとなら平気なんだよ♪」
「…そのスキルは普通、剣とかの武器と併用するもんじゃぞ？」
「何故格闘戦だけなのでしょう？剣士系統のスキルを持っていればもっと楽に戦えるでしょうに」
「なんか『剣とか弓とか上手く使えない』って前言ってたよ」
……生身で刃とヤリ合えるスキルなんてあったのね…どおりで異常に固いわけだわ…
「…好き放題言ってくれるな～」
相変わらずの余裕発言！向こうがスキル使って来てんなら、コッチだって使っても平気よね！＜心見の魔眼＞発動！アイツの今の感情は…お、見えてきたわ…
熱い、疲れた、寝たい
……コイツは…戦ってる時に何考えてんのよっ！！

Ｓｉｄｅ：男Ａ
ん？何か急に怒ってるような感じに…どうした？
「アンタ、戦ってる、時に！何考えてんのよっ！」
「うわっ！」
１撃の気合いの入り方が違う！？何があった？
「戦ってる最中に、疲れたとか寝たいとか、舐めてんのっ！」
あれ？口に出てたかな？
「アンタみたいに、ふざけたヤツは、無意識に人を傷つけんのよ！」
叫びながら突撃してきた。さっきまでは距離が出来ると魔法を打ってきたのに。
…イトハの言葉は覚えの有ることだ。俺はよく無意識に人を傷つけ

てた。でも、
「誰にでもあることだろうがっ！」
応戦しながら叫んだ。
『無意識に傷つける』…それは普通だ。相手を気遣っての言葉でも、人は傷つく。
「そんなの、詭弁よ！」
確かにそうだ。
「じゃあ、イトハは！誰も、傷つけ、ずに！これまで生きてきたのかっ！」
そんな事は有り得ない。
「それでも、アンタみた、いに！諦めてないわよっ！」
コイツの言葉はやたらと心に刺さる…そうゆうスキルか？まさかな…
「お前に、決め付け、られる！覚えは無い！」
両手で雷槍を放った。
「そう簡単に！」
ゴウッ！
またガ・ジャルクの炎か。今度は盾の様に出てきて雷槍の勢いを消された。
「はぁ、はぁ、クソッ！」
キッツ、何だコレ？何か心が重いぞ…
「ふん！少しは傷つけられる痛みがわかったかしら！？」
「…俺は人を傷つけるよ」
「何ですって？」
「俺は人を傷つける。どうやったって、どう生きたって、人を傷つける。
だけど、それがどうした！
人を傷つけてでも人に関わる覚悟はとっくに出来てんだよ！
これが俺の道だ！俺が選んだ俺の道だ！それを好き勝手にに突き進んで、何が悪いっ！」
言葉と同時に飛び蹴りを放ったが柄で受け止められた。

「こんのっ！怒るか、蹴るかどっちかにしなさいよっ！」
ちっ、押し返された。やっぱり俺は軽過ぎる…どうにかしてカバーしないと…
「アンタみたいに自分の力だけで自分の道選べるような人ばっかりじゃないのよ！人を傷つけるのが怖くて、でも1人でいるのも怖い。そんな人だって、一杯いるのよ！そんな人達はどうすればイイってのよ！？」
「それこそ自分でどうにかしろっ！部外者が横から口出ししたって何にもなんねえんだよっ！」
「それが出来ないから困ってるヤツだっているのよっ！」
…ふと冷静に戻ってしまう。俺にはよくあることだ。感情が高ぶってる時ほど、急速に頭が冷える。冷めていく。そうして冷めた目で周りを見る。イトハと、ロザリー達を観察する。
……あぁ、完全にロザリーが完全にビビってるな…速く終わらせよう。
ロザリーが安心して見てられる終わらせ方をしよう。
「…イトハ」
「何よ！」
「終わらせよう。これ以上は、不毛だ」
目線だけでロザリー達を指す。
「…そうね、終わらせましょう」
互いに最後の一撃を打つために構える…漫画じゃよくあるけど自分がヤル日が来るとは思って無かったな…
「……勝負だ…」

女Bと男Aはヤリ合ってる（後書き）

次話決着！…予定

戦闘中の掛け合いは作者の好きなアニメを参考にしてたりします。

女Ｂは魔王と神祖と共に男Ａに絡む（前書き）

新技登場です

女Bは魔王と神祖と共に男Aに絡む

Ｓｉｄｅ：神祖

「……勝負だ…」

ジルが怖い…さっきまでの言い合いをしていた時も怖かったけど、今の冷たい目で静かにしてるジルも怖い。まるで全然知らない、別の人みたいで…怖い…

「もう…終わってくれ…」

リリーもイトハが怖いみたい…

2人とも静かに構えてる。イトハは下に、突き刺すための構え。ジルは正面に、直立の構え。

「「はあぁぁぁっ！」」

2人の距離がドンドン縮まっていく。

「爆進っ！」

ジルが前に飛ぶように地面を蹴った。イトハの構えが下だったからかな？

「そう何度もっ！」

イトハは槍を後ろから横薙ぎに振ろうとしてる。槍先に炎の塊が…

「ジルッ！ダメーーーッ！」

「そんくらいでっ！雷甲！」

ジルが空中で雷甲纏った足でイトハに向けて丸を描いてる。

「来なさい！」

「螺旋っ轟脚っ！」

ゴオォン、ギャリギャリギャリ！

イトハの炎の槍とぶつかったのは、電気で出来た回る円錐を纏った飛び蹴りだった…2人の攻撃はお互いに受け止めてる状態だ…

「くうぅぅっ！」

「貫けぇぇぇっ！」
キンッ…ズザァァァ…バタッ…
終わった…の？

「……疲れた…」
「ゴホッ…コッチもよ…もう絶対、アンタとは戦わないわ…」
つばぜり合い？は長くは続かなかった。せいぜい1秒ほど…すぐにジルの飛び蹴りが貫通してイトハの後ろに地面を滑りながら着地した。その後2人とも前のめりに倒れた。
「ロザリー、今日は晩ご飯作れなさそ～。後頼んだ」
へ？ひっくり返っていきなり…
「リリー、私も立つのも無理そう。モリッシュ、負ぶって」
イトハも……さっきまでのスッゴク怖い雰囲気は？まるで憎んでるみたいな殺気立った重い空気は！？
「お～い、ロザリー聞いてる？」
…ちょっと、オハナシしなくちゃ、かな？
「あ、ロザリー。ゴメン、起きれなくって、今日の晩ごは…」
「ジル、ちょっと大事なオハナシがあるんだ♪」
「あ…え～と…ほら、今起き上がれないし後で…」
「ううん♪今ならジルとちゃんとオハナシ出来るでしょ？」
「い、いや、今は立てない程疲れてるから、また…」
「ダ～メ♪炎よ　全てを焼き尽くせ　フレア♪」
「ぎゃあぁぁぁっ！熱っ熱いって！ロザリー！熱い！とめてとめてとめてっ！」
「ヤ～ダ♪」

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
ロザリーちゃん…怖っ…
「ふむ、ロザリーの怒っとるところなぞ久しぶりに見たの」

「笑顔なのに寒気がしますね…ジル様は熱いでしょうが」
「あ、2人ともロザリーちゃんには近づかないのね」
まぁ、火は見えないしお灸をすえてるんでしょ。
「流石に今のロザリーは危険じゃ。人柱はアヤツ1人で充分じゃ。
と、言うより…アヤツ以外見えとらん…」

「ジル、私スッゴクスッゴクスッゴクスッゴク心配したんだよ?それなのに『今日は晩ご飯作れなさそ～』?他に言うコトあるよね?あるよね?速く言ってくれないとホントに怒っちゃうよ?」

…あれは怖いわね…てか言えないんじゃ…
「リリー、私知り合ったのがアンタで良かったわ」
「この状況で言われても嬉しくないのじゃ…」
「イトハ様は乙女心が分かっていませんね～」
「私も乙女よ」
全く、失礼しちゃうわね。

「ゴメン!ゴメンゴメンゴメン!心配掛けて悪かった!スイマセンデシタ!アツイアツイアツイアツイッ!」
「ふぅ、もうこんなコトしないよね?」
「しないしないしない!もう絶対しないっ!」

「あ、ようやく喋った」
「根性有るの～。普通痛みで声も出んじゃろうに」
「中々見所が有りますね」
しっかし…ロザリーちゃんってヤンデレ?イヤそんなまさか…否定できない…
「じゃ、皆家に戻ろ～。リリー達は泊っていくんでしょ?」
「うむ、改めて、世話になるのじゃ」
「うん♪いらっしゃ～い♪」

私遠慮したいわ…

Ｓｉｄｅ：男Ａ

ようやく家で休める。しかし…背中が、背中がヒリヒリする～！

「あ、ジル様。ジッとしていて下さい。今、お薬を」

「モリッシュさん、私がやるよ～♪」

…もう流石にお仕置きは無いよな？…断言出来ない…

「ほら、ジル、服どけて背中向けて」

「はい…」

逆らう度胸は有りません！…威張る事じゃないな…

「お～お～、甲斐甲斐しく世話されちゃってるわね～♪」

「ジル頑張ったもんね♪これくらいしてあげなきゃ♪」

分かった！分かったから、今背中に抱きつかないで！超痛いからっ！

「のぉ、ロザリー。ジル、死にかかっとるぞ」

「あ、ゴメンね～…」

泣きそうな声で謝られたら何も言えません…

「うぅ、イイからそっとお願い…」

これはシャレにならん…

「プッ、照れてんの？」

「…同じ経験してみるか？」

「…止めとくわ」

懸命だな。しかし…背中に薬塗られてると動けない…晩飯の準備始めたかったんだが…

「ジル、どうかしたの？」

あ、気付かれた。俺ってそんなに判り易いかな？

「む？ジルがどうかしたのか？」

「うん。何か考え込んでるみたいだったから」

「そうなの？よかったわね♪良く見て貰えてるわよ？」

からかうように絡んでくるな…ウザ…

「はぁ。いつもは晩飯の用意始める時間だからどうしよっかな～って思ってたんだよ」
「ほう、ジルは料理が出来るのか」
「料理の上手な男性は人気高いですよ？ロザリー様ピンチ」
「うん♪ジルの料理美味しいんだよ♪だからツイ食べすぎちゃって…」
多分モリッシュさんの言いたい事とは違う…
「手ごわいわね」
「ロザリーは中々どうして、かわすのが上手いのじゃ」
確かに上手いな。天然だけど…はぁ、本当に、晩飯どうすっかな～…

女Bは魔王と神祖と共に男Aに絡む（後書き）

螺旋轟脚は仮面ライダー５５５のキックをイメージしいてます

そして神祖がヤンデレに…

こんなキャラにするつもりは…微妙にありました。

女Bと男Aの一晩

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

結局、夕ご飯は家主2人で作ってくれた。ジルがメインでロザリーちゃんがサラダ。

リリーが『これぞ秘蔵の高級肉じゃ！』って馬車に積んでたお土産をジルが『良い肉なら塩胡椒だけでも充分だったか？』ってステーキにしてくれて、お好みでデミグラスソースみたいなのも作ってくれた。

「ジル、1度わらわの城に来ぬか？このソースの製法、ぜひウチのシェフに伝授して欲しいのじゃ。肉と相性抜群の濃厚なトロミと味。これは毎日食してもイイと思える程じゃ！」

「イヤ、そのソースはハンバーグ用だからな？ステーキには実は向かないんだ。それに味付け変えたらライスやパンでも美味いよ？」

「すごいですね～。これはロザリー様が食べ過ぎてしまうのも分かります」

「やっぱりジルの料理美味し～♪」

「こうゆうソースって家で作れたのね」

どう見てもデミグラスソースだけどこの世界に無いわけじゃないらしい。ただ作り方を受け継いでるのが少なすぎて、どの最高級料理店でも食べられない珍味にして美味になってるみたいなのよね。昔の勇者もうちょっと広めなさいよ。

でも…やっぱりコイツ私と同じ世界のヤツなんじゃ…ヤメヤメ！そうだったとしても何の意味もないわ。結局向こうでは死んだんだし、コッチで楽しく暮した方がよっぽどイイわ。

「別にレシピ書いてあげるけど？城のシェフならレシピさえあれば再現できるだろうし……てか、城？」

「うむ、城じゃ。なんせわらわは魔王じゃからな！」

あっ、バカッ、そんな簡単に…

「は？魔王？」
「そうじゃ」
「リリー様は私達魔族の王なのでございます」
「ふ～ん。その歳で集団のトップか…俺なら面倒でやらないだろうな」
「あはは～、ジルはそんな感じだよね♪」
あれ？もうちょっと、こう…『えっ！魔王！？』みたいな反応が普通なんじゃ…
「全く軟弱な。あれだけの力が有るならば人の上に立つ事を目指し、誇ってみんか」
「イヤだよ。人の事にまで責任持てない。あ、そろそろ風呂沸くな」
「あ、じゃあ入りた～い。リリー、一緒に入ろ？」
「うむ、イトハも共に参れ」
「いや3人もいっぺんに入れんの？」
「デカいから大丈夫だよ。5、6人は入れるんじゃないかな」
軽い温泉じゃない…あ、でもモリッシュが…
「私はここで待っていますから、皆さんで行って来てください」
「うん、ゴメンね。ジル、覗かないでよ！」
「はぁ。しないよ」
さ、お風呂お風呂♪

「わぁ～、イトハの肌キレ～」
「うむ、流石わらわの嫁！日々肌の手入れは欠かしておらんな！」
「誰が嫁よ！」
脱衣所でなんてお約束な…と言うか…
「ロザリーちゃんだってかなり肌綺麗じゃない？なんかツヤツヤしてるわよ？」
「う～む。以前共に入った時はあんなに…」
「うふふ～。今日はエネルギー補充が出来たからね～♪」
何か…ジルのコトでいいのかしら…

話しながら扉を開けてみると…
「ここって…銭湯だっけ？」
なんと言うか…ヒノキ風呂だった。旅館のパンフに出てくるようなヒノキ風呂…しかも露天あるっぽいドアが…
「セントウ？」
「お風呂屋さんのコト」
「ちがうよ～」
「ふむ、いつ来てもデカイのう。城の硬質な感じも好きなんじゃが、ここの木張りの柔らかい感じも趣があっていいものじゃ。風呂に入りながら夜空を堪能出来るのも此処だけじゃしの」
本当に露天あるのね…覗かれそうでイヤね…
「速く入ろ～♪」
あ、もう体洗い始めてる。お風呂好きなのかしら？
「ロザリーちゃんって、お風呂好きなの？」
「え？え～とね、お風呂入った後だとジルが抱き付いても何も言わないから楽しみなんだ♪」
スッゴイ良い笑顔。穢れが無さ過ぎて心が痛いっ！
「…アヤツも大変じゃの」
「ええ、これはスゴイ生殺しでしょうね…」
ロザリーちゃんの天然悪女振りに呆れつつお風呂を、いや温泉を堪能した。露天風呂は敷居がしっかりあって覗かれる心配の無い作りになっててビックリしたくらいだ。
さて、そろそろ出ようかしら。あんまり長いとのぼせちゃうわね…

「ふ～、上がったわよ～」
珍しくリリーが大人しかったわ。ロザリーいたからかしら？
「ジル～♪」
「ハイハイ…」
「もはや諦めとるの」
なんと言うか…ラブラブ？いやジルの方は疲れた顔してるから違う

んだけど。
「リリー様、髪はちゃんと拭きませんと痛んでしまいますよ」
「うむ、頼むのじゃ」
何か手持無沙汰ね…
「ジル、モリッシュさんと何してたの？」
「ん？コレ」
どれよ…ああ、トランプか。
「ジル様ったら、全然手加減してくれないんですよ。弱い者苛めして楽しんでるんです」
「ちょっと！男が女泣かしてんじゃないわよっ！」
「いや、勝率大体5分なんだけど…」
「面白そ～。皆でやれるのやろ～♪」
「マイペースじゃな。しかしその体勢で出来るのか？」
「ジル～」
「わかったよ。俺とロザリーはペアでやるよ。いいよね？」
こうして夜は更けていった…
「イトハ！わらわ達も…」
「1人でやるわ」
「酷いのじゃ～」

翌日、帰りを見送ってくれる2人と離れるのを残念に思ってる自分がいたけど、それは今は関係無くて…ジルには言っておかなきゃいけないコトがある。
「ジル、昨日戦ってる時に言ったコトは、私の本心よ。アレだけは、覚えときなさい。アンタの覚悟は、私とは絶対に相容れないわ」
「ああ。俺も昨日言った事は本気だ。俺はこの覚悟を持って人に関わる」
「じゃあイイわ。またね」
「うん、また」
「あ、そうじゃ。わらわもジルに話が有るのじゃ。近う寄れ」

ん？内緒話しかしら？

「ジル、もしロザリーを裏切ったら、その時はわらわがお主を地獄に叩き落とす。そのつもりでおれ。ロザリーが泣いたらお主のせい、ロザリーが傷つくのもお主のせい、ロザリーの顔が苦痛に歪むのは全てお主の責任。ロザリーに仇成すのならば、お主はわらわの敵じゃ。わらわは敵には情けは掛けん」

「…肝に銘じておくよ」

「何話してたの～？」

「ちょっと、城に誘われたんだよ。まだシェフを諦めてくれないみたい」

「リリー、ダメだよ。ジルはココにいるんだから」

「取ったりはせんよ。では、またな」

「うん♪またね～♪」

「新しい料理、考えておくよ」

ふぅ～。楽しかったわね…

帰りの馬車の中、リリーに聞いておきたかったコトがあった。

「魔王だって、教えちゃって良かったの？」

「構わん。ロザリーと共に有るなら、アヤツはいずれ戦わねばならん」

「何とよ？」

「国と、或いは全ての人間と」

「…ロザリーちゃんに原因があるの？」

「うむ。ロザリーは神祖じゃ。人間どころか、その他の種族にも神祖を恨む者は居る。どうやら人間達は戦争を望んで居る様じゃしの。それに乗じて神祖狩が始まるはずじゃ。その時が、アヤツがロザリーと共に有る資格を試す時じゃ」

「…いいのね？ロザリーちゃん、傷つくかもしれないわよ」

「恨まれる覚悟は出来ておる。わらわは王として、友として、ロザリーを守る。どんな手段を使おうとも、どんな風に思われようとも」

覚悟、か……

女Bと男Aの一晩（後書き）

男Aは料理が趣味なのではなく、自分が美味いモノ食べたいから料理しているタイプです。

シリアス展開苦手なのにシリアス展開好きな自分がいます。

シリアス好きでも鬱はイヤですが…

女神様は意地っ張り（前書き）

さぁ、ゲームを始めよう！

女神様は意地っ張り

Ｓｉｄｅ：女神

「今晩は、ジルさん」

「こんばんは…」

相変わらず不機嫌を隠そうともしませんね。まぁ毎日のように呼び出して古今東西の様々なゲームに付き合わせて居るのですから仕方がないでしょうが…

「本日は此れで勝負しましょう」

今日で１５戦目。１日に２０回以上戦う日も有りましたが全て負け越しています。今日こそは一矢報います！

「…何故テレビゲーム？」

「今までは全てアナログでしたので、そろそろデジタルなモノをしてみようかと」

花札、ポーカー、人生ゲーム、将棋、チンチロリンにチェス。本音を言うと２人対戦の勝負もそろそろネタ切れです。テレビゲームはその点は楽ですね。

「はぁ。これはアレですか？小っさいロボットの右手の銃と左手の爆弾と背中のトラップを自分で組み替えてバトるアレですね？」

今一つ納得出来なかった様ですが知ってるゲームで安心している様ですね。

「はい。本当は赤いヒゲの配管工と、弓やブーメランを使う緑の剣士が戦えるゲームにしようかと思ったのですが…」

「ああ、アレはアイテム次第で結構変わりますからね。俺はアイテム多い方が強いって言われてましたし」

「理解が速くて助かります。では始めましょうか」

「パーツは全部出てるんですか？」

「はい。ドクロのパーツはどうしましょうか？」

「アレも含めこのゲームの醍醐味ですよ」

「そうですか。では、使うのは自由とゆう事で。さて、どういった構成で行きましょうか…」
私が１Ｐで彼が２Ｐでゲーム開始です。
「え～と、確かこの銃とこのトラップで…ボムは…今回はコレ使ってみるかな」
「早いですね。元々決めていたのですか？」
「ええ。コレは最新版ですけど、初代からやってましたから。友達の家で、ですけど」
「そうですか。此れは不利ですね…」
「でももう２年もやってませんから、初戦は確認になりそうですよ」
「その言葉、今までのゲームで４回目ですよ」
「…スイマセン」
全く、始めてやるゲームですら、予め練習していた私より強いのですから腹立たしいです。
「決まりました。では、準備はよろしいですね？」
「はい」
さぁ、戦闘開始です。
『ＳＥＴＵＰ，３，２，１，ＳＨＯＯＴ！』
シューターからサイコロが２つ、逆方向に発射。私の目は…頭、あっちは…足ですか。チャンスです！
「げ、運ねえ…」
相変わらず彼は運が無い。ポーカーでも最初の札は大体ブタで偶に１ペアでしたからね。
「この隙に」
「あ！酷えっ！」
ふふふ、いきなり４００ポイント減らしました。このゲームは戦闘開始直後は１０００ですから大分リードしましたね。
「そう簡単には負けませんよ」
カシャンッ
なっ！ガトリングを避けた先にフリーズするトラップだなんて！

「残念♪」
ガガガガガガガガガガガガッ、ガガガガガガガガガガッ
「ああ！酷いのはドッチですか！？そんなに追撃出来るなんて聞いてませんよっ！」
「初期に手に入るしダメージも低いからってガトリングを舐めないでください。これでも使い廻しの良さでは他の追随を許しませんよ」
くっ！無印のパーツのみでドクロパーツで固めてる私のロボットを圧倒するなんて、どれだけ遣り込んでたんですかっ！
「くっ、まだダメージが並んだだけです！今度は此方の…」
「ふっ、次も俺の攻撃です！」
なっ！此方がダウンしている間にトラップを！しかしその程度でっ
「甘いですよ、次も俺の攻撃です！」
ボンッ
「なっ！壁が爆発した！？Ｖ字に飛んで壁に張り付くボムですかっ！」
「次も次も次も次も、俺の攻撃です！」
カシャンッ、ガガガガガガガガッ、ガガガガガガガガッ
「くっ、あぁ！」
「これで終わりです」
ボンッ、カシャンッ、ガガガッ、ガンッ！
２Ｐ　ＷＩＮ
「おっし！」
「…最後に全武装でコンボですか…」
本当に格闘まで入れた全武装コンボを…ガトリングなんてコンボを繋ぐために途中で止めましたし…まさか微妙な主人公機に此処まで圧倒されるなんて…うぅ…
「主人公機は確かに特徴無いですけどダウン寸前に格闘当てやすいんですよ。他にもドリルとかでも同じコト出来ますよ」
「くっ！余裕のつもりですか！まだ一戦目です。まだまだ勝負はこれからでしゅ！」

…あ、
「…でしゅ、ぷっ♪意外と女神様も可愛い女の子なんですね♪」
「くっ！その減らず口、直ぐに利けない様にして上げます！」
絶対に負けません！

3時間後…
「あの～、そろそろ時間が…」
「まだですっ、まだ私はっ、」
「いや、俺そろそろ起きないと…」
「う、う～、」
「ほら、また夜になったら呼べばイイわけですし…」
「次も…此れで勝負です、」
「あ～、はい、分かりました…」
「では、また夜に、」
「はい…」

Ｓｉｄｅ：主神
「主神様、フリッグたん、また負け越したみたいよ？」
ん～、やっと終わったのか。
「またかぁ。しょーがねーなぁ、全く」
アイツ、男Ａ帰った後機嫌悪いぃんだよな…
「でも仕方ないかも。男Ａは搦め手得意みたいだし。フリッグたんはその辺の駆け引きとか知らないから無理っしょ？」
「なんだよなぁ。まぁアイツには良い経験だろ。力押しじゃどうしようもねぇ事だってあんだからよ」
男Ａと勝負するようになってからフリッグは頭を使って何かする事を覚えたから良い傾向だとは思うんだがなぁ…
「ダルさん」
「はいぃっ！」

「ちょっとこのゲーム付き合って貰えますね」
「イエス、マムッ！！」
あのダルがなんて綺麗な敬礼を…
「お父様、このゲームは４人まで出来ますから、参加してください」
「わ、分かった…」
目が…怖すぎる…

Ｓｉｄｅ：男Ａ
「ん…」
「むにゅ～…ふにゅ～…」
相変わらずの抱き枕…最近、抱き締め方が俺との接触面増やそうとするような感じになってる気が…自意識過剰だと思いたい…
それにしても…魔王の来た日ですら遠慮無く呼び出されるとは…。
女神様は気を使って頭はリフレッシュしてくれてる。だから精神的に疲れてるのに、頭はスッキリとゆうバランスの悪さ…どうにかならないもんか。ならんだろうな……

女神様は意地っ張り（後書き）

久々の神様達でした。
次回はもう少し先で出てきます。

ちなみにゲームはＧＣ版のカスタムロボです

女Aはウンディーネと出会う（前書き）

こっからはまた1人ずつです

女Aはウンディーネと出会う

Ｓｉｄｅ：女Ａ

「この村って、外との繋がりあるの？」

狩がお休みな日の昼下がり、ちょっと気になってシオン君に聞いてみたら…何か、シオン君もお母さんも村長さんも止まっちゃってる…何かマズいこと聞いちゃった？

昨日森の泉でエルフ以外の人？に会ったのがキッカケなんだけど…とりあえずもう１度思い出してみよ。

「う～ん、こんな所に泉があるなんて」

今日はシオン君が村長の勉強で狩は無し。慣れるために私１人で森に入ったんだけど…大体２５メートルプールくらいの大きさの泉を見つけてしまった…どうしよう？

それにしても深いなぁ～。底が全然見えないや…

ポチャン

ん？水音だ。魚かな？

「あら？エルフがこんな所に居るなんて…迷子かしら？」

「え…誰？」

「うふ♪私はチュリス、見ての通りウンディーネよ」

そう言って自己紹介してくれたのは、薄い青色の肌に耳にエラみたいなのがの生えた上半身だけ泉から出した女の人だった。

「…あ、私クリス・シュタイン。クリスでいいよ」

「うふふ、よろしくね、クリス」

言いながら近よって来て泉の上に立った？下半身は…魚…人魚？どう見ても水面に立ってる…スゴイ…

「あら？あなたウンディーネを見るのは初めてかしら？」

「うん。ウンディーネって…水の上に立てるんだね」

「そうよ。これを見ると皆ビックリしてくれるから面白いわ～♪」

「チュリスって…」
「うふふ♪誰かをビックリさせるのが好きなの♪」
あんまりイイ趣味じゃないなぁ…
「あらぁ？そんなにダメかしら？」
バレた…
「顔にですぎよ。あなたスッゴク分かり易いのね」
「うぅ…どうせ単純だもん…」
「くす♪いいじゃない。それだけ素直ってコトよ」
何か上手く丸めこまれてるような…
「からかってるんじゃなくて本心よ。誰かを褒めるのに嘘はつかないわ」
「まぁイイけど…そういえばチュリスって1人なの？」
「そうなのよ～。皆この森には来たがらないの。だから静かになりたい時にはちょうどいいのよ」
「あ、ゴメン」
邪魔しちゃったな…
「いいのよ。むしろクリスと会えて良かったわ。何だか楽に話せるもの♪」
「何それ？」
ちょっと気恥ずかしいセリフだったからチャカしてみた。
「何かね、息苦しくないっていうか…気にせずオバカな話し出来るっていうか…」
「普段は出来ないの？」
それはちょっとつまんないな～
「『ウンディーネは高貴な生き物だ』ってイメージが強いのよ。だから他の子達もそれっぽく振る舞おうとしてて…正直、人間の貴族意識みたいで、ね…」
なんかシリアス展開…
「ウンディーネも大変なんだね」
「ふふ。ウンディーネはもっと自由な性格なのにね。今の皆は無理

矢理に清楚な態度とろうとしてて…苦手って言えばイイのかな……
あ、ゴメンね！初めて会ったのにこんな…」
「いいのいいの♪それよりさ、ウンディーネってどんなこと出来るの？何にも知らないから何言われても驚くよ～♪」
これは本当。ついでに湿っぽい空気除湿！
「変な威張り方♪いいわ、教えてあ・げ・る？
ウンディーネは見ての通り、水の中で生活出来るし水の上に立てるの。水の神様に愛されてるのかしらね～。こればっかりは私達にもわからないわ」
「ふむふむ…」
「テキトーね～。まぁ、あとは…人間が私達を頼る理由になるんだけど…」
げ、話題変更できてなかった！
「ウンディーネは水に精製魔法を掛けられるのよ」
……ナンノコッタ…
「わからないって顔ね…そうね、無属性の魔具の属性って、どうなってると思う？」
「それは…何にも無いんじゃないの？」
でなきゃ『無』属性なんて言わないんじゃ…
「ブッブー。勘違いされがちだけど、無属性って言うのは、火水風土の属性値が殆ど同じコトを指すのよ」
「へ？そうなの？」
「まぁ、一番加工しやすいからあんまり気にしないのが普通よ。で、私達ウンディーネは、その４属性の値を０に出来るの。これが精製魔法。浄化なんて呼ばれてて、この魔法を掛けた水で薬を作ると効果の高いモノが出来るのよ。純属性なんて言う人もいるわ」
「へ～。聖水みたいなモノなの？」
「聖水は精製した水に塩を溶かしたモノね。神霊系の魔獣やグールなんかに効くから、死霊使いなんかを相手にするなら持っといた方がいいわ」

「成る程～。そうゆう違いだったんだね～」
よく分かんないってコトがわかったわ♪
「…私の説明分かり辛かったかしら？」
あぁ！チュリスがちょっと残念そうに！
「え、イヤ、あの、あのねっ」
「そうよね。私の説明なんてよく分からないわよね。ええ、わかってたわ、でもね、結構頑張って説明したのに、わかんないや～、は悲しいのよ。いえ、悲しくないわ。だって私の説明が判り辛いのがいけないんだものね。どうせ私の…」
「ストップチュリス！スト～ップ！大丈夫、分かり易かったって！チュリスの説明で全然分かんないトコなんかないって！これだけ難しいことこんなに分かり易く説明出来るなんてチュリス先生向いてるって！」
どうしよう…フォロー出来てるかな…
「そう？私そんなに、先生とか向いてるかな？」
これはもう一押しか！
「うん！絶対そうだって！」
「じゃあ、クリスには簡単に私の説明、要約してもらおうかな！」
「え、あ～…え～っと……」
「……」
うっ、チュリスの目が…
「な～んてね♪いきなりアレだけで分かる人なんていないわよ♪」
…へ？
「もぉう。クリスったら真剣に悩んじゃって♪そんなに気にしてないから平気よ」
…まさか！
「あ、やっと気付いた？ふふっ、楽しかったわよ。クリスをからかうのは♪」
やっぱりっ！
「酷い！私真剣に悩んだのに～」

「ゴメンね♪」
「全然ゴメンって思ってないよ～」
でもホントに湿っぽいよりはコッチの方がいいかな。
「あっはは。はぁ～ぁ、面白かった♪じゃ、私そろそろ自分の池に戻るわね」
「池？」
「池。ウンディーネの巣みたいなモノよ。人間は湖って呼んでるけどね。じゃ、また会いましょう」
ポチャン
「どうやって帰るんだろう…」
水音一つで泉には私1人になった…面白い人だったな～。またそのうち会えるかな？

女Aはエルフの歴史を学ぶ

Ｓｉｄｅ：女Ａ

回想終わりっ。改めてシオン君達に向き合う。

「何で急に村の外の事なんて…」

シオン君が気マズそう…

「うん。ちょっとね…」

上手く説明出来なくてチュリスのコトは話せなかった。

「う〜む…仕方ないのう」

「ジジイ、どうするんだ？」

「この村が外との交流を絶っとる理由を話すしかあるまい」

「お父さん…」

「カルラ、クリスは知らんのじゃから説明してやらんとならんじゃろ？」

何か言いたくなさそう…

「あ、でも無理には…」

「いや、クリス、やっぱりアンタも知っておきな。大事な事だから」

お母さんにああ言われたら聞くしかないか…

「では話すとするかの…あれはワシがシオンより小さかった頃、当時の勇者と会った頃じゃった…」

こうして村長さんの回想が始まっ…え？勇者？…

Ｓｉｄｅ：村長

「あの〜、この辺に村はないですか？」

村近くの平原を散歩していたら同い年くらいの女の子に話しかけられた…スゴイ可愛い人間だ…

「あの〜、私の顔に何か付いてますか？」

「え？あっ、ゴメン！え〜と、村だよね？」

「はいっ。旅の仲間と逸れてしまって、どこかの村にいれば会えるかなって」
言われて気付いたのは少女は軽鎧を着て、腰には細身の剣を携えていた。
「あ～、この辺だと俺のトコ以外の村は聞かないな。こっちだ、ついて来て」
「はい。ありがとうございます♪」
礼儀正しいし笑顔は可愛い…この子モテるだろうな…そんな事考えながら村に向かった。

「凛様！心配しましたよ！」
村に着くなり身なりの良い魔法使いみたいな男が駆け寄ってきた。
「大丈夫ですよ。この人が案内してくれましたから」
「凛様、御側を離れる事になり申し訳ありませんでした」
ショートの濃い紫髪した給仕のお姉さんが近づいてきて一礼した。
「仕方ないですよ、メイドさん。今回は私も油断してましたし…」
「では、今後はお互い気をつけるとゆう事で」
「はい♪」
仲間とも合流出来たみたいだし俺は家に戻るかな…何か今後の話してるし。
「あ、待って下さい。案内してくれてありがとうございました！皆と会えたのもアナタのおかげです！」
手を握ってそう言った。魔法使いの目が親の仇でも見るみたいな目に…あぁ、好きなんだ…
「いや、ただ案内しただけだから…俺はもう帰るよ」
気恥ずかしくてちょっとぶっきら棒な言葉になってしまった。いやこの顔は反則だろ…
「はい♪しばらく私達はこの村に留まる事になってるので、また明日」
マジかよ。あの魔法使い絶対勘違いしてるぞ…

こうして妙な旅人、凛と出会った。

次の日…

「オニイちゃーん、魔法出ないよー！」

「こっちもー！」

「あ～、イメージが足りないんだろ。そうだな、ただ風が吹くだけをイメージしてみろ。呪文とかは唱えなくていいから」

「「は～い」」

俺は村で魔法を教えてる。『村長候補として小さい子達に教えて来い』ってのが村長からの指示…メンドイ…

「あ、いたいた♪」

「オニイちゃん、昨日の旅人さん来たよ～」

え、マジで？

「くすっ♪子供達に魔法教えてるって聞いたけど、本当だったんですね」

メイドさん？引き連れて凛がやってきた。

「オニイちゃんナンパ～？」

「オニイちゃんがナンパした～♪」

子供達が騒ぎ始めた…はぁ…

「ほら、さっさと練習するぞ」

「「は～い♪」」

素直にそれぞれ練習を再開した。

「素直な子達ですね」

「ああ。今日は魔法使いは？」

「ちょっと国に戻って情報収集してます」

「…戦争のか？」

「あ、分かっちゃいますか？」

そりゃそうだ。給仕の人が居る時点で唯の旅人じゃなくて国の騎士とか貴族とかに絞れる。そして、どちらでも今調べる事といったら1つだ。

「まぁな。この所大人達も皆その話で持ち切りだ。魔族との戦争に向けて人間達の国が情報を集めてるってな」
「そうですか。でも、何故、今戦争を起こそうとしているのでしょうね」
メイドさん喋んないな…
「さぁ？この村はどの国の首都からも遠いから、情報は相当遅れて入ってくる。情報集めたいならギグの森に近い所がイイと思うぞ」
この村は北第２大陸の中部東にあるから人間の商人も船使ってコッチに来たりはする。そして、この村は商人が来なけりゃ情報は入らない。
「ええ、そちらは別の人達が調べています。私達は、その…戦争とは直接関係無い事を調べてるんです」
言い辛そうだな…まぁ無理に聞く気も無いな。
「ふ～ん。さて、俺は先生役に戻るから、まぁ自由にやってよ」
「オニイちゃーん！風吹いたー！皆出来たよー！」
「おっ、よく出来たな。じゃあ次は本格的に魔法使ってみるか！」
「「はーい！」」
この時、凛は何か考え込んでたのに俺は放置していた…

Ｓｉｄｅ：女Ａ
「ジジイ、ちょっと待て！」
「なんじゃ。せっかく人が臨場感たっぷりと説明してやっておると言うのに」
「いや、それは割とどうでもよくて、勇者と会ったコト有るって始めて聞いたぞ！てか勇者の話ドコ行った！まさか凛ってのが勇者だってのか！？」
「初めて言ったわい。ふぅ。全く、話のオチを当てるとは…シオンもまだまだじゃ」
堂々と言い切った！

「な・に・がオチだ～っ！」
「シオン君落ち着いて、ね？」
ヒートアップしすぎだよ～…
「くっ！お袋は知ってたのか？」
「いんや、始めて聞いた」
あ、お母さんもビックリして頬が引きつってる…
「まさか勇者と知り合いだなんて思わなかったよ」
普通思いません。
「話続けていいかの？」
「これ以上何があるんだろう？」
「いや、こっからはシオンやカルラも知っておる話じゃよ。それがワシの主観で語られるだけじゃ」
「あ、なら安心して聞けるな」
「そうだね、勇者の話には驚いたけど…」
さ、続き続き！

女Aはエルフの歴史を学ぶ（後書き）

村長の名前は出てきません

女Aは戦争の歴史を学ぶ

Ｓｉｄｅ：村長

凛が来てから暫く立った。村全体が凛に馴染んできた頃、それは起こった。

「皆森に逃げろーっ！」

村の高台に居た見張りの声が響いた。そして、理由は直ぐに分かった。

「奴らは人間に仇成す蛮族だ！１人残らず殲滅せよっ！」

まだかなり距離があるが、遠くからでもよく響く指揮官の声と共に膨大な数の騎馬兵が村に突撃してくるのが見えた。

「何ですかコレはっ！」

凛が驚愕と怒りの混じった声で騎馬隊を睨んでいる。

「凛様、彼らは私達とは違う国の者です。説得には応じないかと」

「そんなのは問題じゃありませんっ！今すぐ止めさせないと…」

「どのように？」

「聞かないのならば、力づくでも止めます！」

「……お供いたします」

なっ！あの２人死ぬ気か！？相手はどう見ても２００超えてるんだぞ！

「バカッ！無謀だ、戻れ！」

人間達の狙いはエルフだけだ。事実あの２人は視界に入っていないようだ。ただし騎馬隊は真っ直ぐこの村を攻撃しようとしている。

「緑髪の奴らだけを狙え！人間２人は無視して構わんっ！」

「私は勇者・無勇凛です！貴方達は何故この村を襲うのですかっ！事と次第に寄っては私が相手になりますっ！」

「しれた事。先に我らの国を攻撃してきたのは緑髪のエルフ達だ！あのように大規模に、滅亡寸前まで攻撃しておいて何を言うっ！」

「なっ！ここの人達は村から大人数で何日も離れた事はありませんっ！何かの間違いですっ！」
「ふんっ、もう遅い。我らは唯、復讐するのみっ！」

何の話だ？エルフが人間の国を攻撃した？俺達は何もしていないんだぞ。それに凛が勇者だと！？
「速く逃げろ！あの数は無理だっ！」
村長の声に固まってた皆が逃げ始めた。でも相手は騎馬だ。このままじゃ追いつかれて本当に滅ぼされる…
「森に入れ！そっからはバラバラに逃げろ！エルフの血を絶やすなっ！」
そうゆう事かよ、クソッ！
「お前ら、ついて来い！絶対に生き延びるぞ！」
いつものように魔法の練習をしてた子供を纏めて逃げる。子供がこんなにいたんじゃ、逃げ切れないかもな…

「村長っ！我らが足止めをする。その間に…」
「…スマン」

ん？村のジイさん達が村長と話してる？速く逃げろよ！今からじゃ絶対助からないぞっ！
「オニイちゃん…」
クソッ！とにかく逃げなきゃ！コイツらだけでも逃がさなきゃっ！
「きやがれぇいっ、人間共！何が何だか分からねぇがっ、村には一歩も入れさせねぇっ！」
この声、先代の肉屋か？
「弓、構えぇ！……てぇぇぇっ！」
「突、撃いぃいぃいぃいっ！！」
羊飼いと服屋の先代達も…まさかっ！
「此処を通すなっ！刺し違えてでも村を守れぇっ！」

クソックソックソッ！追い先短いからって自分の命投げ出す奴があるかよっ！

「怯むなっ！所詮蛮族の使う時代遅れの武器だ。我らに負けは無いっ！前軍、突撃ぃっ！」

「だから何度違うと言えば分かるんですかっ！」

俺は…コイツらを死なせる訳にはいかないんだ…

村のジイさん達の怒号と断末魔に背を向けて、決して振りかえらない様に、俺は走り続けた…

どれだけ逃げただろう…多分3日くらいは西へ西へと逃げた…途中でもう1人の村長候補と大人達に会い、人気の無い森に入って隠れ里として皆で暮そうと決まった。

…あの時のジイさん達の覚悟と行動は…どうしても理解出来なかった…

Ｓｉｄｅ：女Ａ

「これが、この村が外と繋がりを持た無い、隠れ里に成った訳じゃ…」

何て言っていいのか分からない…

「後で騎馬隊の様子を見に行った者の話では、人間達はエルフを捕える事はせずにその場で殺したそうじゃ…」

「…酷い」

「そうじゃな。じゃが、ワシは良かったと思った」

それを聞いた瞬間、私は耐えられなくなって机を叩いた。

「何でっ！全然良くないよっ！皆殺されたんでしょ！？」

「クリスっ！」

「あっ…」

シオン君が鋭い声と手で私を止めた。

「最後まで、聞いてくれ」

「うん…」
これ以上、何を聞けばいいんだろう…
「続きを話すぞ？普通、戦に負けた国の男は過酷な労働に、女は男の慰みのもにされる。じゃが、あの時はそんな事にはならずに、皆辱めを受けずにすんだのじゃ。ワシは…そう考える事で、自分を納得させたんじゃろうな…」
「ゴメンなさい…」
村長さんの考えは、私には分からない…けど、だからと言って否定するのは違うと思った。
「いいのじゃよ。この村に居るのならば、いずれは話さねばならなかった。それが今だったとゆうだけじゃ」
「ジジイ、そろそろ続きを…いや、緑のエルフが襲われた理由も話してやれよ」
え？今の言い方…エルフって緑じゃないのもいるってコト？
「年寄りをそう急かすな。え～と、ワシらが襲われた理由じゃったな」
何か、緑じゃないエルフの方が気になってしょうがない…
「この場所に新しく村を作ると気また時はの、まだ大人達の一部は人間に復讐しようと言っていたんじゃ。そうして村の外の情報を積極的に集めたんじゃが、人間達は緑のエルフに攻撃され続けてると話しておったんじゃ。じゃが緑のエルフにはあの襲撃で戦が出来る程の戦力はどう考えても残っておらん。そんな矢先じゃ、人間を攻撃している真犯人が判ったのは」
何かミステリっぽい雰囲気…
「それは神祖と呼ばれる体を自由に変えられる種族じゃった」
「体を自由に変えられる？」
「うむ。彼らには生まれつき備わっている能力なんじゃと。彼らは人間から迫害、弾圧、差別され虐げられてきた。じゃから変身能力で違う種族に変身して人間の国を疲弊させ、復讐しようとしたらしい。その頃は神祖の活動もあって人間同士での戦も絶えなかったと

聞く」
人間にも変身したのかな？
「でも、これが元で神祖は世界中から憎まれる種族になったって話だしな…」
シオン君が補足説明を入れてくれた。神祖を苛める人達がいなければそうはならなかったんだろうな…
「ふぅ。ジジイに長話は応えるわい……ワシも、今のままで、良いのじゃろうかと思う事は有る…」
村長さんのこの言葉は、ダイニングに静かに、でもハッキリと響いた…

女Aは考える

Ｓｉｄｅ：女Ａ

村長さんの話を聞いた夜。頭の中がグチャグチャで、寝付けなくて…なんとなく家のベランダから月を眺めてた…あ、向こうの月と微妙に模様違う。

「考え事か？」

「シオン君？」

「ほら」

そう言って隣に座って木のコップを渡してくれた。中身は温かいシチューみたいなヤツ。晩ご飯でパンに付けて食べてた残りかな？

「ジジイの話、考えてたんだろ？」

「…うん」

「俺とかは昔からあの話を聞いてるから特にショックも無いけど、お前は違うもんな。聞いてどう思った？」

優しく聞いてくれてる…どう思ったか…

「……分かんない。でも…何か、悲しかったのかもしれない」

「そっか…」

シチューをちょっとすする。この地域は年中長袖が必要な地域みたいで夜は温かいスープがちょうどイイ。

「正直な、俺は村の外を見てみたいと思ってる」

「え？…シオン君村長に成る勉強してるのに？」

「だからだよ。ジジイに昔の村の外の話を聞いてるから、実際に見てみたいって思ってんだ」

「他の人も、そうなの？」

「どうだろうな。まぁこの村に不満が有るってんじゃないんだ。ただ、自分が知らない世界ってのを見てみたい。ただそれだけだ。子供の頃から冒険心強かったんだから、当たり前っちゃあ当たり前だな」

「ふふっ♪シオン君まだ子供じゃない？」
「言ったな。１５超えてんだから大人なんだよ」
そう言えばこの村の成人は１５歳からだった。
「歳は関係ないよ～だ♪」
「くぅっ」
「ふふふっ……昨日ね、ウンディーネに会ったんだ」
今なら、話せる気がした。
「は？ドコで！？」
あ、ビックリしてる。そりゃそうだよね～。
「森の奥に泉があるでしょ？あそこで、ね」
「あ～、あの底の見えねえ泉か」
「うん。話してるうちに仲良くなっちゃって」
「てか…もしかしてあの泉、他に繋がってんのか？」
確かに…
「そうじゃなきゃ雨とかで溢れちゃうんじゃない？川とかに繋がってないし」
「ん？何の話しとるんじゃ？」
あ、村長さんも来た。
「ああ、クリスが昨日、泉でウンディーネに会ったんだってさ」
「…本当か？」
何かマジな顔…
「うん。何かマズかった？」
「いや…ワシも、昔あの場所で会ったんじゃ。ウンディーネに」
「ジジイ…隠し事多すぎなんだよっ！」
「わーっ！シオン君ダメだよっ！」
労わってるような雰囲気かと思ったら怒ってた～
「仕方ないじゃろう。別に隠しとったんじゃなくて話す機会が無かっただけじゃ」
村長さんも火に油注がないで～
「で、それもこの森に入った頃か？」

「うむ。あの泉でな。ただ大人達に教えるのは危険そうじゃったから誰にも言わなかったがの」
「やっぱり皆ピリピリしてた？」
「うむ。おそらくあの頃の大人達は人間でなくてもヤツ当たりのように攻撃したじゃろうな。全く戦とは人を醜くするのう」
「ま、何も信用出来なかったんだろうな」
それは…ちょっと悲しい考えに思えるな…どうしたら、何かあった時皆を守れるのかな…
「…シオン君、どうやったら、強くなれるかな？」
「…まさか人間と戦うなんて言うつもりじゃないよな？」
「違うよ！…ただ、何か、そうゆう時に守れる力が無いのは、嫌かなって…」
やっぱり迫る火の粉は自分の力で振り払うしかないし…
「ふむ…シオン、あれはどうなんじゃ？」
アレ？
「はぁ…分かってるよ。それにクリスになら良いかもとは思ってたし…」
「2人して何の話してるのっ？」
「ああ、悪い。実はクリスに弓を作ってやろうかと思ってたんだ」
「それも、特別な物を、じゃな」
特別な弓？
「その顔は何だか分からんとゆう顔じゃな。よいよい、ちゃんと説明しよう」
「俺がするよ。作るのは俺だしな。
クリス、俺達緑のエルフはある鉱物を魔法で加工する技術を伝えてるんだ」
「ある鉱物？」
「ああ。オリハルコンだ」
……あれ？オリハルコンってゲームとかで伝説の武器の素材とかで使われてるヤツだよね？

「緑のエルフの骨は魔力を大量に込めるとオリハルコンに成るんだよ。知ってるのは同族くらいだけどな」
へ？緑のエルフがオリハルコンの元？
「これを知られてたら緑のエルフはずっと昔に狩られとったじゃろうな」
「だから誰にも話さない様にしてんだろ？オリハルコンは緑のエルフの骨だからな。同じ緑のエルフは魔法で加工することが出来るんだ。で、エルフの骨はオリハルコンのペンダントとかにして持ってるのが普通なんだ」
「…型見ってコト？」
「そんな所だ。ただ加工用の魔法はちょっと特殊で、村長候補しか習ってないんだ。まず才能が必要で、その上でかなり練習しないと成功しないんだ」
この流れはもしやっ！
「え～と、もしかして私の弓に…」
「ああ、オリハルコンを使う」
やっぱり…
「でも…それって、誰の…」
「うむ、婆さんのオリハルコンを使うつもりじゃ」
「まぁ妥当だろ。他の家のって訳にはいかねえんだし」
「でも、だって…村長さんは、お母さんだって…」
「クリスならイイよ」
「お母さんっ！」
「何だ、お袋も聞いてたのか」
「全く。クリス、そんな事気にしちゃダメだよ」
そんなコトって…絶対大事なコトだよ…
「アンタはシオンを守りたいんだろう？」
「お母さんと村長さんも、だよ…」
「そうかい。でも守るためってのは変わらないんだろう。なら寧ろ堂々と使って欲しいね。アタシのお母さんが、シオンやお父さんを

守ってるって思えるから」
…そういう考え方でも、イイのかな…
「まぁお前が嫌だって言っても作るんだけどな」
「シオン、この状況で空気の読めん奴じゃの～」
…どっちもだと思うな…
「ほら、クリス。さっさと決めな。絆で守るか、力で守るかだよ」
何か…ズルイ言い方だと思った…
「…わかった。シオン君、私に…オリハルコンの弓を作って」
「へっ、最高の弓を作ってやるよ。この世に2本と無い、お前だけの弓をな」
こうして、シオン君に私用の弓を作ってもらえるコトになりました♪
「あ、シオンは弓作りに暫く付きっきりだから暫くはクリス1人で狩だよ」
「お母さんそりゃないよっ！」
弓、速く出来ないかな…

女Aは考える（後書き）

勇者・無勇凛についてはほかの所で補完するつもりです

男Ａへの依頼（前書き）

夏休みだからでしょうか
昨日のアクセス数がいつもの３倍に

おかげで一気に２００００ＰＶになりました♪

男Ａへの依頼

Ｓｉｄｅ：男Ａ

リリー達との騒ぎがあってから数日。

「ジル～、グレゴリウスさんのトコ行くよ～」

何かあんのか？

「今日はロザリーの杖の調整？」

一番それっぽい理由を聞いてみた。

「ううん、この前コールスに届けたお手紙についてだよ。１週間以上経ったしそろそろお返事が来るころだから『顔出せ』って言われてたんだ～」

返事ってこの前の貿易都市のギルドに出した手紙のか？何か嫌な予感が…

「速く行くよ～」

しょうがないか…

「おう、来たなガキ共」

相変わらず、怖っ！

顔合わせの時のハルバートが未だに脳裏を掠める…

ちなみに、なんとなく敬語使ってたら『気持ち悪いから止めろ』と言われた。以来時たま使って追求を逃れている。何か俺の正体暴こうとしてくるんだよな…多分ロザリーの傍に得体の知れない男を置いておきたくないんだろうな…

「お手紙のお返事来た～？」

「おう。でだ、お前らにユビキタス公国から依頼だ」

何故国から…

「仕事は公国の荷馬車を色彩国家カラーズの首都まで護衛だ」

「ちょっとイイ？」

気になって質問することにした。

「何だ？」
「ジルどうかしたの？」
「いや、俺もロザリーもまだ子供なんだけど？戦力として見て貰えないんじゃないかと思って。その辺どうなの？それに、何でわざわざ国が依頼を？」
これは重要。報酬渋られるとか面倒臭すぎる。
「その辺は心配要らねえ。ギグの森で自活してるってだけで、並みの騎士なんぞよりよっぽど戦力に成るのは常識だ。んで、この依頼は元々ユビキタスから俺に護衛出来る様なヤツを紹介してくれって用件だったんだよ」
つまり俺達が戦力の要にされるのか…てか勝手に決めやがった。まぁ武器タダにして貰ってるから断れないんだけどさ…
「了解」
「ちゃんと出来たらお金貰えるんだよ♪何買おうかな～♪」
「……大丈夫なのかな？」
「だからテメエも行くんだよ。あとこれが俺からの依頼だ。カラーズに着いたらでいい」
「はい…」
俺は子守役ですか…てか赤ヒゲからも依頼あんのかよっ！

次の日、2週間ぶりくらいに来た貿易都市・コールスは相変わらず賑わっていて人が多かった。…人込み嫌い…ん？

「じゃあ勇者様が退治してくれたのかね？」「きっとそうよ！」「あのデブにガリ、親が偉いからって好き勝手やってたからね」「ザマーないさ♪」

この前の2人組の事か？誰かに殺れたのか？
「じゃあリシルさんのトコに魔具を渡してこなきゃね」

あ、忘れてた。あの人の香水、甘ったるい匂いで苦手なんだよな…
「リシルさ～ん、ロザリーで～す」
「はぁ～い、いらっしゃぁ～い」
何か声が遠いな?あ、奥に居たのか。
パタパタパタ…
「あらぁ～、ジルくんまでぇ。ようやく私のトコに来てくれる気になったのぉ?」
「違います」
ロザリーが庇うように俺の事抱きしめてリシルさん睨んでるし…かなり涙目で小動物っぽいけど…
「はい、コレ。頼まれてたモノです。それからちょっと森から離れるから暫く魔具持って来れないです」
「えぇ～、そうなのぉ～。じゃあジルくん借りていいかしらぁ～」
「ダメッ!」
「俺もロザリーについて行くから無理ですよ」
ロザリー、そんなにムキに成らなくてもこの人はからかってるだけだよ…
「残念だわぁ～。せっかくジルくんの身も心もお姉さん色に染めたかったのにぃ～」
「うぅ～…」
「ロザリー、そろそろ行かないと待ち合わせの時間に成っちゃうよ。行こう」
「あっ、うんっ♪」
「あらあらぁ～。私はお邪魔だったかしらぁ～」
「そうですね。じゃ、また」
やっと開放された…

「こんにちは～」
「あら、ロザリーちゃん♪グレゴリウスさんのお使い?」

「うん♪ユビキタスの騎士さん達と荷馬車の護衛だって」
「ああ、アレね。騎士さん達はあっちに居るよ」
「ありがと～♪」
ギルドの受付のお姉さんに言われた方を見てみると、確かに騎士さん達を見つけた。男2人に女1人か。
「ユビキタス公国の荷馬車護衛の騎士さん達ですか～？」
「ん？そうだが…お嬢ちゃん達は？」
「グレゴリウスさんの紹介で護衛をすることになりました、ロザリーと、」
「ジルです。あと俺は男です」
今回は長旅に成りそうだったから浴衣と下駄ではなくジャケットにジーンズだ。まぁ荷物の中には浴衣も下駄の入ってるんだが。
あ、なんか困惑顔で後ろ向いた。

「隊長、本当に子供ですよ？大丈夫なんですか？」
「あの薄紫髪の子なんて10歳くらいですよ？それに本当に男の子？」
「馬鹿者、ギグの森で2人だけで生きてるんだぞ。見た目なんて当てにならん。それにあの…男の子？は推薦状によるとグレゴリウスさんにサシで勝ってるんだ。俺たちじゃ足元にも及ばんぞ」
内緒話してるトコ悪いんだけど駄々漏れだぞ？てか他の人達が俺に注目してる…ギルド内に血の気の多いのっているのかな…
「よう嬢ちゃ、いやボウズ。グレゴリウスに勝ったって、マジかよ？」
後ろから変なのが絡んできた…筋肉隆々で大剣を背に担いでる。多分腕に覚えの有るギルド登録者かな？歳は30前後とみた。
「ちょいと御手並み見してくれ、よっ！」
言いきる前に剣の柄に手を当てて振り降ろしてきた。森の獣よりは遅いか。

ドゴォン！
「はんっ！反撃も出来ないってか！？こりゃあのジジイの実力もたかが知れるなっ！」
この場に居ない人の悪口…あんまり好きじゃないな…てか目は飾りか？
「オジサン、足元足元」
「は？そんなんで注意引こうってのか？」
「いや、だってオジサンの足凍ってるよ？」
「何ふざけた…冷てぇぇぇぇぇぇぇっ！」
あ、やっと気付いた。最近ようやく氷魔法が使えるようになってきたから試してみた。ただ氷を出しただけだから呪文は『氷（ひょう）』しか言ってないけど。
「あ～、そんなに暴れると怪我するよ？炎魔法で5分くらいかけて溶かせば痕も残らないから、お仲間に頼めば？」
あ～、面倒臭かった。赤ヒゲの名前って…意外と有名なんだな。
「ジル、お疲れ様～♪」
騎士さん達が座ってた6人テーブルでロザリーが迎えてくれた。ちゃっかり座ってジュース飲んでる。
騎士達は…立ち上がろうとした姿勢のままコッチ見て固まってる。
キャーエッチー…なんだろうこのアホらしさ…
「どうかしました？」
とりあえず聞いてみる。
「え、と…君は、無詠唱で魔法が撃てるのか？」
あ～、確かにそう見えるか。実際は違うんだけど…
「ちゃんと呪文唱えましたよ。小声でしたけど」
「それにしては…いつ唱えたんだ？」
「剣が振り降ろされる時に」
「それだけの時間じゃ精々呪文の最初の一言だけじゃないか！どう考えても間に合わないっ！」
この隊長さんウルサイ。

「どんな魔法かは追々見れると思いますよ。それより仕事の話です。どういったルートでカラーズに行くんですか？」
「あ、ああ。カラーズは北第２大陸の中央北部に有る。まずは此処の港から第２大陸に渡り、後はひたすら北上する」
「了解です」
「ジル～、向こうに着いたらちょっと観光しよう？」
「…そうだね♪」
色彩国家ってのがどんなのか想像もつかないけど、第２大陸は獣人が多いんだよな？どっちも楽しみだな……

男Ａへの依頼（後書き）

男Ａの話多くね？と思うかもしれませんがちょっと変則的に登場するようになります

男Ａの使い易さは中々作者泣かせです…

女勇者は竜に会う

Ｓｉｄｅ：女勇者

ギグの森を数日進んでようやく第４大陸に着いた。噂通り森の獣や魔獣は馬鹿みたいに強かったが、まぁ森の外と比べれば強いだけで慣れてしまえばどうとゆう事は無い。

「ようやく着きましたね…」

「あ～、帰りもコレかと思うと気が滅入るな…」

変態巫女と団長がそれぞれ感想を言っている。しかし獣達は森の中から出ようともしないな。私達が森の外に向かう素振りを見せると深追いすらしてこなかった。

「にゃぁ～…」

もはや定位置になった私の肩からクロが疲れたような声を上げた。クロのヤツ、実は戦えるらしく、その上『国一番の魔法使い』の変態巫女より強かった。変態巫女も団長もいなくても良かったんじゃ…

「さて、この先に開拓用の騎士団宿舎が有る筈ですから、まずはそちらで休息を取りましょう」

素直に変態巫女の提案に乗る事にした。疲れているのは私も同じだ。

「…巫女さんよ、騎士団隊舎…無くね？」

「団長、此れは無いのでは無く破壊されているの間違いだと思うが？」

「無いのに変わりはねえだろ？」

目の前にはレンガ造りの２階建ての建物の、残骸。

１階はそれなりに原型を留めているが、此れは隊舎と呼べる状態には見えない。まぁ３人と１匹なら平気そうだ。休めるならば建物の状態等どうでも良い。

変態巫女は完全に固まってるな。まぁ仕方無いだろう。コイツ箱入り娘のようだし。馬車の中で寝るのも抵抗が有る様だったしな。

「しかし、この壊され方は…人間がやるには難しいな」
「そうだろうな。上から何か大きなモノに叩き潰されたって感じだ。それこそ土魔法に特化した魔法使いがかなり頑張ってやっとだろ。そこまでしてこの隊舎壊したいヤツなんて…よっぽどの物好きだな」
私の疑問を団長が補完してくれた。そうか、わざわざ此処まで隊舎を破壊しにくる人間に心当たりは無いか…なら残った答えは1つだな。この場合は予感とも言うが。
「とにかく1階ならば休息を取れそうだ。入るぞ」
あそこの入口らしき残骸から廃墟に侵入するとしよう。
「はいよ」
「あっ、待って下さい～」

廃墟の中は予想通り残骸だらけだったが仮眠室のベットはレンガの瓦礫と埃さえ取ってしまえば使える程度にしか被害を受けていなかった。これは有り難い。隣の部屋は壁が破壊されてるから出るのも容易い。これは好条件だ。
「瓦礫を取り除くぞ。そうすれば多少は休める」
「はい…」
「はいよ。さっさと休もう」
変態巫女がそろそろ限界か。団長はまだ余裕を残しているな。この辺は実践の経験値の差か?私もあの道場に通っていなければ危なかったかもしれん。
「でも、何があったらこんな風に隊舎が…」
「そうなんだよ。な～んか引っ掛かってんだけど…こう、喉まで来てんのに出てこない感じがしてんだ」
あの2人意外と鈍いな。多分答えはアレしかないだろうに。
「ふぅ。2人とも、コッチは終わったぞ」
「あ、私も今終わりました」
「俺もだ。さっさと飯食って今日は休もうぜ」
「にゃん♪」

クロめ、飯に反応したな。可愛いヤツだ。さて、晩飯は何にしようか…

晩飯の材料が無かったのでその辺の動物を獲ってきた。猪鍋みたいだな。さて、そろそろ来るかな…

「勇那様、どうかされたのですか？」

変態巫女が鞘に収まったカリバーンの柄に手を置いたのに気付いたようだ。敵が近くに居る時や周囲を警戒している時に自然とやってしまう私の癖に気付いたか？

「にゃ…」

クロも気付いたか。爪が若干長くなり、尻尾を体と同じくらいの大きさの刃に変化させた。

「巫女さん、隊舎を破壊したヤツとのご対面だぜ。考えてみりゃこんな事出来んのはヤツだけだったな。勇者様の優秀さにゃ脱帽だぜ。いつから気付いてた？」

遠くからバサバサと羽ばたく様な音が聞こえる。

「隊舎の前で団長と話している時だ。人間でも獣人でも魔族でもないなら、それは獣か魔獣。それも相当な大きさの、だ」

「流石勇那様です！そんなに速くに気付いていたなんて！」

「出来れば予め教えておいて欲しかったぜ…」

どんどん近づいてくる…此れは怖いな…

「気付かない方が悪い。来るぞ」

「にゃっ！」

ギャアァァァァッ！

「きゃあっ！」

咆哮と共に月を背負った羽付きの化物が隊舎に向かって降りてくる。

咆哮が衝撃波のようだ…少し怯んだぞ。

「隊舎から出ろ！」

このまま突撃されたら生き埋めだ。

ゴオォンッ！

思った以上に速く突っ込んできたな…お陰で瓦礫に体中を打たれた…
「勇那様、ご無事ですか!?」
「とりあえず、ここで迎撃するぜ」
2人とも無事か。しぶといな。
「魔の性を持つ者よ、何故人間の世に居る」
この声は誰の声でも無い…この化物の声か?まだ煙が晴れていないから細部は分からんが、シルエットはどう見ても西洋のドラゴンだな。
「今一度問う。魔の性を持つ者よ、何故人間の世に居る」
私のみを見てそう聞いてくる…全く、愚問だな。
「私が何所に居ようと、私の勝手だ。貴様にとやかく言われる筋合いは無い」
「然り。しかし、何故貴様は人の世に居られる。魔の性を持つ者は人の世からは排除されるモノだ。しかし貴様からは人の匂いがする」
魔の性?何の話だ?
「いい加減にしなさいっ!いきなり出てきて勇那様に難癖付けるとは、身の程を知りなさいっ!」
む、変態巫女が興奮している。
「む、貴様は魂呼びの巫女か。人の世にまだそのような風習が残っておったとは…嘆かわしい限りだ」
召喚ではなく魂呼びか。召喚された時に巫女に聞いた召喚方法を考える限り、魂呼びの方が的を得ているな。しかしコイツはどうやって私と変態巫女を探っているんだ?
「勇者様も巫女さんも、とりあえずこの状況でどうするかさっさと決めてくれねえか?」
団長の言う通りだな。
「エル、団長、クロ、構えろ!煙が晴れたら戦闘開始だっ!」
剣を抜き放ち、地面に突き立て、煙がはれるのを待つ。
とにかく聞くことだけ聞いて、殺そう……

女勇者の力

Ｓｉｄｅ：女勇者

「戦闘：闘争の事だな。貴様らが望むのならば仕方有るまい。何よりも魔の性を持つ者は危険。此の地で滅ぼす！」

言葉と同時に羽で突風を生み出し煙と瓦礫を全て吹き飛ばした。戦い易い地形には成ったな。

「ほう、黒髪に黒目。魔の性を持つ者相応しい風貌ではないか」

「そう言う貴様もまさに竜と言った風貌じゃないか」

大きさは大体成人男性の３人分。体は深い緑の鱗に覆われ、赤いギョロリとした瞳で私達を睥睨している。ティラノサウルスの様に前足は小さく後ろ脚のみで立っていて、尻尾は地面に垂れている。まるで羽と角の付いたゴジラだな。気紛れに尻尾が振られるだけで地面が軽く抉れている。あれを生身の人が受けたら即死だろうな。

邪魔にならない様に髪を結う。変態巫女が私のうなじに目を爛々とさせているのが気持ち悪いがそうも言ってられない。

「待たせたな」

「ふむ、では始めようぞ！」

「っ！散開っ！」

いきなり中央に突撃してきたか！

竜を私とクロ、団長と変態巫女で挟む形に成ったが、あまり意味があるとも思えない。

「各々の判断でコイツを倒すぞっ！」

「はいっ！」

「おうよっ！」

「にゃっ！」

さて、本当なら飛べない様に地面に拘束してしまいたかったんだが、この際贅沢は言えないな。

「ほう、力の塊が生命の真似事か。興味深く、そして不愉快だ」

クロの事か。
「不愉快なのは貴様の存在だっ！」
カリバーンで足に切り掛かる。竜は口を開け何かしようとしていたが反対側から団長に、此方側からはクロの尻尾に阻まれて易々と私の斬撃を叩きこめた。
ガンッ
「ほう、こうも容易く潜られるとはな。唯の力の塊と侮る事も出来んようだ」
「まさか此処まで硬いなんてな！巫女さんっ！」
「はいっ！業火よ　眼前の障害を焼き払え　ファイア・ボム！」
「ぐぬう…」
竜の頭部で爆発が起こった。鱗に阻まれた私の斬撃よりは効果が有りそうだな。
向こうは団長が前衛、変態巫女が後衛と役割を決めているようだ。まぁ変態巫女に前衛は無理だから必然的にそうするしかなかったんだろう。
「クロ！」
「にゃっ！」
「良い子だ」
私が魔法を貯める時間を稼ぐために竜に突撃していった。おそらく素早く出せる速度重視の魔法では竜の鱗は貫けない。多少の時間稼ぎが必要だ。
「人間と力の塊にしては戦い方を心得ているようだ。それにしても解せん。魂呼びの巫女に＜ナイト＞よ、何故貴様らは魔の性を持つ者と共に居る」
「それが任務だっ！」
「勇那様と共にいるのに理由なんて必要有りませんっ！」
そう言って団長は切り込み、変態巫女は距離を取った。
「この者が人の世に仇成す力を持っていると知ってもか？」
「…何の事だ？」

「興味が有りません！」
変態巫女言い切ったな。団長の反応が普通だと思うが…
「私の心は勇那様に捧げました。勇那様がいる所が私の望む場所ですっ！その場所を壊すと言うなら、人も、魔族も、民ですらも、私の敵です！」
凄いな。あそこまで堂々と言い切られると何も言い返す気に成らない。
「そしていつかこの身も捧げてみせますっ！！」
ゾワッ
何だ今の悪寒は…ああ、変態巫女か。しかし緊張感に欠ける台詞だ。
「無知とは時に罪成り。魔の性は人の世どころか、我らにも害を成しかねん」
「理由を聞こうか…」
魔力を練りながら睨み合う。理由次第では今後の身の振りが決まるからな…
「魔の性は他者に強烈な感情を叩き付ける。そしてそれは集団を操る力と成る」
先導者の才能とゆう事か？
語りながらも団長とクロからの攻撃を弾き、防ぎ、時に攻める。
「貴様が叩き付ける感情は何だ？
悲しみか？哀愁か？快楽か？感動か？恐怖か？殺意か？
どれにしても貴様の中にある＜魔性＞は人の世を壊し世界の姿を変えてきた力。見過ごす訳にはいかん」
他者に感情を叩き付ける力…そう言えば召喚された時巫女が腰を抜かしそうなほど怯えてたな…そうなると殺意や敵意か？ふむ、実戦で使えそうだな。
「なら身をもって私の感情を体験しろっ！」
ヤツにありったけの殺意を向ける。ふむ、多少動きが鈍ったな。
「これが…貴様の殺意…」
「影よ　形無き矛成し　敵を穿て　シャドウ・ツェペシュ！」

月明かりに照らされたヤツ自身の影から無数の槍がヤツを串刺しにした。羽にもダメージが入ったようだししばらくは飛べないだろう。
「グアァ…貴様…此れ程の殺意を、平然と…」
「よそ見している余裕が有るんですか？業火よ　眼前の障害を焼き払え　ファイア・ボム！」
「ガアァッ！魂呼び等に頼る軟弱者の分際でっ！」
む、変態巫女に狙いを絞る気か。
「そう簡単には、通さねえよっ！」
「邪魔だ、人間っ！たかが＜ナイト＞如きが我を阻めると思うなーっ！」
先程から騎士ではなく＜ナイト＞…何か違いが有る様だな。そいつに関しても吐いて貰うとしよう。
「時すら歪める引力よ　その力使い眼前を滅せよ　シュバルツシルド！」
団長によって思うように巫女に近づけなかった竜が地面に平伏す様に叩きつけられた。
闇魔法は影以外にも重力や腐食なんかも起こせるが流石に腐食は使いたくなかった。異常に強烈な悪臭がするのだ…
「貴様、ら…この程、度で…我が屈するとでも思ったかーっ！」
振りきられたか…まぁこの程度で死ぬとも思えなかったが。人間なら原型も残さない程圧縮されるのだがな…
「勇那様！カリバーンの能力をお使い下さいっ！」
剣の能力？ああ、そう言えばこの聖剣は持ち主の魔力を吸うんだったな。
「どうすればいい？」
「魔力を流し込んで、斬って下さいっ！」
なんともありきたりだな。
「やらせんっ！」
単純だなこの竜。脇目も振らずに私に突撃してきた。
「コッチの台詞だっ！」

「ニャッ！」
両側から団長、クロに攻撃され動きが鈍ったな。
「舐めるなーっ！」
咆哮と共にヤツが魔力を貯めるのが分かる。団長もクロも咆哮の衝撃波で怯んで動けないだろうな…
「消し飛べーっ！」
言いながら口から炎を吐いた。渦を巻き此方に向かってくるがあの様に分かり易い初動が有れば簡単に避けられる。
「グウゥ、小癪な」
ちょうど良い。竜を倒すのによく使われるアレを試してみよう…

女勇者の力（後書き）

必殺技って悩みます…

Ｓｉｄｅ：女勇者

「クロ、団長、もう1度挟みこめ！エルは魔法で援護だ！」

全員が了承した。私も動くとしよう。

「人間がどれ程の策を弄そうとも…」

「影よ　形無き矛成し　敵を穿て　シャドウ・ツェペシュ！」

「グアッ！」

今度は地面に縫い付ける様に刺す。これで多少は狙いが付けやすく成った。

「そのまま這い蹲っていなさい！業火よ　眼前の障害を焼き払えファイア・ボム！」

「うわ、巫女さんエグいな…」

まさか私の魔法で地面に縫い付けられて動けない所に追撃を入れるとは…意外と容赦無いな。だが…

「クロ、団長、追撃しろ！止めを刺す！」

さて、ようやくカリバーンの能力を試せるな…

左下に構え魔力を込める。私の黒い魔力が白い剣に吸収され、力を溜めるのがわかる。

……剣の重さが少し変わったか？

む？変態巫女と団長が此方に動揺した視線を向けている。2人にまで殺意を向けてしまったか？

「貴様…何だ、それはっ！」

竜が五月蝿い。一体何だと言うのだ？

「勇那様、カリバーンに、何をされたのですか？」

ただ魔力を込めただけだが？

ふと手元の剣に視線を向けてみると、そこに聖剣は無かった。闇の塊が、剣の様な形を作っていて、私は闇の棒を剣の様に握っているだけだった。

…剣として使えれば問題は無いな。
未だ地面に叩き付けられ呆けている竜に接近する。
「なっ！貴様っ、来るなーっ！」
ブレスを吐こうとしているが、もう遅い。吐く前にその口にこの闇の塊を突き刺す。
ザシュッ！
「弾けろ」
ブシャーッ…
剣を形作っていた闇が竜の体を内側から突き破り、奴の体を破壊していく。
やはり竜には体内からの攻撃が一番効く様だな。
「貴、様…聖剣を、そのように…」
首だけに成っても話せるとは、馬鹿げた生命力だな。…しまった、何故私達の事が分かったのか聞きそびれたな…今聞くとしよう。
「おい、貴様は何故エルや団長の事を魂呼びの巫女や＜ナイト＞と呼んだ」
「…ふっ…人は、変わらず…己の力を、見る事も…出来んのだな…」
聞き取り辛いな…
「勇那様、この者の言っているのは、多分スキルの事だと思われます」
スキル？
「あ～、魔族なんかは普通に認識してんだっけか？」
「はい。その人の職業や特技によって身に着くモノだと言われています」
職業や特技の証の様な物か？私の場合は殺意を他者に叩き付ける、と…誰でもやっている事だと思うが…
「城に戻り鑑定士に聞けば何か分かるかもしれません」
「そうだよな～。あの婆さんなら何か知ってそうだ……で、勇者様。ちょ～っと聞きたいんだけど」
団長が現実逃避を止めた様だ…流石に私の手の中に有る物を無視出

来なく成った様だ。
「それは…カリバーンか？もはや別物にしか見えねえんだが…」
そう。竜の中で闇を払って私の手に残ったのは、刀身の黒い日本刀だった。ついでに鞘まで刀の形に変わっている。至れり尽くせりだな。
「正真正銘カリバーン…の筈だ。手を離れた様な感触は無かった」
「貴様は…」
コイツまだ生きてたのか。
「貴様は、神の剣を…汚した、のだぞ…なんとゆう、事を…」
そろそろ限界か。しかし神と言えば…アレか…汚しても何も言わなさそうだな。寧ろ爆笑していそうなものだが…
「私はこの世に仇成す者だからな。神の作った物を汚して当然だろう？」
嫌味を言っておく。自分で言った事なのだから納得も出来るだろう。
「貴様っ、本当に神にっ……」
興奮し過ぎで出血が激しくなってきたな。首の断面から血が滝の様に流れ出ている。
自ら死を早めるとは…竜とは理解できない生き物だな。
「貴様は…我が……っ…」
完全に死んだか。目は焦点の合わないまま上を向き、舌はだらしなく地べたに垂れ唾液と共に地面を濡らしている。先程までの誇りを持った姿は見る影もない。そうしたのは私だが…
「…勇者様、色々聞きてえ事があんだが」
そう言って団長は私に剣を構えた。何度か竜の尻尾に当たって立っているのもやっとだろうに良くやる。
「団長！何をっ…」
「黙れっ！」
「っ！」
一括で変態巫女を黙らせるか。第1騎士団団長の名は伊達ではないな。

「まずアンタのスキルだ。身に覚えは？」
「有るな。何度かエルやメイド、貴族が私の敵意、いや、殺意に当てられて腰を抜かしかけた事が有る」
「自分に特殊なスキルが有るとは考えなかったか？」
「スキルとゆう言葉自体さっき知ったくらいだからな。考えなかった」
「分かった。この話は城に帰ってから鑑定士の婆さん交えて話そう。本題は次だ！」
いつもの斜に構えた態度は形を潜め、組織のトップらしい責任感と義務感に溢れた顔をしている。
ほう、そうゆう顔も出来るのか。
「アンタは、聖剣に、カリバーンに何をしたっ！？」
あの剣によっぽど思い入れが有ったのか、それとも聖剣を変質させた私への危機感か。
「エルに言われた通り、唯魔力を流し込んで竜を斬ろうとした。本当ならどうなっていたんだ？」
「あっ、はい！本当なら、鍔から勇那様の魔力で出来た斬撃が出るはずでした」
いきなり説明を求められて変態巫女が慌てふためいている。完全に蚊帳の外に居るつもりだったな。
「だが実際には闇の塊を纏った…その片刃の細剣に成った！」
興奮しているな。
「そうだな。この形は私の世界で私が修練していた武道の剣だ。刀と言う」
「それ以上の説明はしなくて良い。問題は、どうして聖剣がそうなったかだ」
普通に考えれば私の魔力に当てられて私の使い易い形に成ったから、とゆう推論をするんだろうな。
「巫女さん、今までにこんな事は有ったか？」
東の空が少々白んできた…長い夜だったな。

「私の知る限り…有りません」
「……城に帰ったら事の顛末を全て報告する。どうゆう決定が出るかは俺にも分からん。それで良いか？」
「構わない」
「分かりました…」
変態巫女は納得がいかない様だな。私に罰が下ると思っているのかもしれない。
どちらにせよ、私の今後の行動は変わらない。さて、手始めに…この刀に名前を付けなければな……

女勇者はレベルアップする（後書き）

人間の国ではスキルはあまり重要視されていません
皆知ってはいます

男Ａの旅、初日（前書き）

ギリギリで書き終わったのでミスが多いかもです…

誤字や、意味のおかしい所があったら教えてくれると助かります

即直します

男Ａの旅、初日

Ｓｉｄｅ：男Ａ

騎士さん達との旅は第２大陸についてからが本番だ。つまり船の上にいる間は暇な訳で…

「ジル～、遊ぼ～」

「カードでもする？」

この世界ではトランプの事をカードと言うらしい。賭けばかりやるギャンブラーってカードって言ってるよな～。

「もう遊びつくしちゃったからヤ～」

ウチのお嬢様は我儘です…見た目は俺より上なんだけどね…

「坊主、女を満足させられない男は将来悔やむ事に成る。今から勉強しとけ」

このニヤニヤ顔でアドバイスしてきたのが騎士達の隊長さん。２３歳。呼び名は隊長。

何故かお互いにあだ名で呼び合う事に成ってしまい名前を覚える前に呼び名を覚えてしまった…この先も覚えなさそうだな…

「隊長、ジル君はまだ１０歳なんですから女性との付き合い方を覚えるには早過ぎです」

今にも『全く、しょうがないんだから』とか言いだしそうにフォローしてくれたのが紅一点だった僧侶さん。２０歳。呼び名は何故か隊長が『シスター』と言い張り決定。何でも本当にシスターやってた時期があるそうだ。

「まぁまぁ、シスター。隊長も坊主と嬢ちゃんの将来を思っての事なんだから」

同じくニヤニヤ顔でこの場を（形だけでも）収めようとしているのは偵察、隠密がメインの弓使いさん。２３歳。呼び名は狩人。

隊長と狩人は騎士養成学校の同期で１０年来の付き合いだと話していた。どうりで息がピッタリなはずだ。

「あれ？ロザリーちゃんは？」
……飽きてどっか行っちゃったよ…
「坊主、とりあえず自分の女くらい自分で捕まえておけよ？」
1人で探せって事ね…

何てアホなやり取りをしているウチに第2大陸に到着。
意外と気さくな騎士さん達との楽しげな旅が始まった…が…
「騎士殿…お願いですじゃ…」
「仕方有りません、私達が何とかしましょう！」
「おおっ、ありがとうございますじゃ～」
色彩国家カラーズの首都、色彩都市カラーズは港から馬車で1週間くらいの所に有り、その間はいくつかの村や町に泊るのが普通だと聞いたんだが…
「やっぱりジルがいるとイベントには困らないね～♪」
まさか一発目で厄介事に引っ掛かるとは思わなかった…orz
この村は獣人の村で長耳族とゆう兎さ耳付きの獣人…村長の垂れた兎さ耳は普通にキモい…オエッ…。ちなみに綺麗なお姉さんの兎さ耳は中々イイ。あれでレオタードとか着たら完全にバニーガールだな。人間みたいな耳は最初から無いそうだ。う～む、不気味
そんな普通の獣人の村は今、近くに住みついた人間の魔術師によって危機に曝されているとの話だ。
なんでも魔術師は攻撃の効かないスライムを使って村の若い娘を誘拐していくんだとか…よし、ブチ殺し確定だな…
何度か村の男達が取り返しに向かったが敢え無く返り討ちに合い重傷じゃないにしても怪我を負い、村の力仕事は滞っている…知らんがな…
だから同じ人間で尚且つ騎士なら素人の村人よりマシだろって事で、魔術師をどうにかしてくれと頼まれた…追加料金取りて～…
とまぁこんな事情で、第2大陸1日目は『悪の魔術師撃退しよう！』の日に成った。チャンチャン♪…流石にチャンチャンは古いな…

「隊長、それっぽいの見つけたぜ」
狩人が魔術師の家を見つけたか…さて、変態誘拐犯とのご対面だな。
狩人の案内に従って着いた先には…ギャグ漫画にそのまま出てきそうなお菓子の家が建っていた…最近疲れ目かな?
「「…美味しそう」」
「ロザリー…」
「シスター…」
女性陣の素直な感想に隊長と揃って疲れた溜息を吐いてしまった…
流石にもうちょっと、ねぇ?
バンッ!
「誰だか知らんがワシの研究所の周りを嗅ぎまわるのは止めにしてもらおうか!」
いきなりお菓子の扉が開いて小太りな『悪い魔法使いです』といった風貌の…小者っぽいオッサンが出てきた…どうしよう、チョロイ気しかしない…
「貴様か!長耳族の娘達を誘拐している魔術師は。大人しく娘達を開放しろっ!」
隊長が啖呵きってる。あれ?狩人がいない…先に救助に向かったかな?
「ワシの偉大な研究の素材になれるのじゃ。娘達も感謝するじゃろうよ!」
お決まり~…てかここまでテンプレって…
「それに下手に抵抗せん方が娘達も安全じゃぞ?この意味わかるじゃろう?」
「くっ、卑怯な…」
いえいえ普通です。
「ジル…どうしよう…」
泣きそうだ…う~ん…あっ!狩人が家の裏から娘達と避難してる。
グッジョブ♪

「まぁ、赤の他人のために命賭ける気は無いよ。だから、抵抗させてもらう」
「貴様っ！それでも人間かっ！くそっ！スライムよ、男は殺し女は捕えよ！」
「ちっ！噂の攻撃の効かないスライムかっ！」
隊長もオッサンも予想通りの反応ありがとう。俺は自分サイドの人達からゴミを見る目を向けられてるけど…
「ジル…そんな子だったなんて、最低だよっ！」
思ったより心に響きました…気を取り直して武器展開、構えて…
「爆進」
「速いっ！スライム、迎撃せいっ！」
…スライム遅くね？一瞬で肉薄して攻撃出来る姿勢まで取れてしまった…もしかしてザコ？
「風牙、雷槍」
真っ二つにしてから元に戻る前に電気で動きを鈍らせてみた。止めは任せるか…
「ロザ…」
「悪い子にはお仕置きだよっ！フレアッ、フレアッ、フレアーッ！」
危なっ！てか俺狙いでスライムが焼却処分されてる。やっぱロザリーの魔法強いな～…うっ、スライム臭い…
「なっ！ワシのスライムが、ワシの最高傑作が～っ！」
哀れだ…何か哀愁漂ってる…
「こうなったら、娘達を人質に…」
「もう俺達の仲間が連れだしたけど？」
「「「……」」」
あれ？隊長もシスターも気付いてない？
「ジル、どういう事かな？」
「いや、隊長さんが『卑怯なっ』って言った辺りで狩人さんが家の裏から…」
「何で気付いてたのに言わなかったのかな？ちょっとオハナシしよ

うか？」
あ、またヤッテしまったか…
「隊長～、娘達は無事救出したぜ」
「よくやった！魔術師、大人しく投降しろっ。これ以上の抵抗は無意味だ！」
「く…ワシは、ワシの研究はっ！」
「五月蝿い」
鳩尾殴って気絶させた。特に動機とか興味無いし。
「…村に戻るか」
「…はい」
シスター影薄かったな～。

「おおー！ありがとうございますじゃっ！」
村に娘達を送り届けたら村長が凄い勢いで飛んできてずっと『ありがとう』を繰り返している。ちなみに俺はロザリーに『オハナシ』とゆう名のお仕置きを喰らい背中が酷い…
「しかしどうやってあのスライムを…」
村の青年が疑問に思ったようだ。
「こう見えても嬢ちゃんと坊主はギグの森に住んでましてね。いやー、お陰で騎士の面目丸潰れですよ。はっはっは♪」
「えっ！スゴーイ、ギグの森で暮してるなんて…」「食べ物とかどうしてるの？」「こんなにチッチャイのに強いのね♪」「あれ？坊主？」「可愛い～！今日私の家に泊らない？」「ちょっと、独り占め！？」「村長の家に泊るんだって」「じゃあ皆で行こうか？」「「サンセー♪」」
さっきまで人質だったよなあの人達…女に人って逞しい…
こうしてお祭り騒ぎの1日目が過ぎていった…イテテ、背中に薬塗らなきゃ……

男勇者はパレードを終える（前書き）

この小説が評価ポイント付けて貰えてる事にさっき気がつきました

とゆうか６０話超えてるくせにこのサイトの使い方をまだ理解してない作者です…もう少し色々見ろよ俺…

男勇者はパレードを終える

Ｓｉｄｅ：姫巫女

パレードの最終日。さっき首都ユビキタスでのパレードが終わった。
これでやっと休めるよ…ベットがフカフカで気持ち良い…
「ふぅーっ…やっと終わった…」
隣では勇人も私と同じように仰向けに倒れこんでる。このベットがキングサイズで良かったよ。３人くらい平気で入れる。
「フレイヤ様、お疲れさまでした」
全く同じことしてたメイドさんは何であんなにいつも通りなんだい。不公平じゃないか…
「勇人様、婚姻もしていない女性とベットを共有するのは殿方としてどうかと思いますが？」
「てかここは俺の部屋だろうがっ！」
「固い事を言うな。私の部屋は他のメイド達が五月蝿いんだよ」
「メイドさん１人に任せりゃいいんじゃ…」
「メイド長の面目を潰す訳にもいきませんから。勇人様の部屋ならメイド達も気にしませんし」
「……何でだ？」
「『勇人様はフレイヤ様のペットだ』とメイド達は認識していますから」
「何でだーっ！？」
「勇人、五月蝿いよ。少しはゆっくり休めないのかい？」
全く、そんな元気があるならメイドさんと稽古でもしてきたらどうだい？
「アンタのせいだよっ！」
最近の勇人は私達に敬語を極力使わなくなっている。私としては話し易いから有り難い。
しかし勇人は行く先々で『街の膿』に遭遇してくれて私とメイドさ

んの仕事が大分はかどった。その都度、街の娘達を乙女に変えていく姿はもはや乙女ホイホイとしか言えなかったけどね…
今回のパレードは勇人の存在をアピールすると共に、私とメイドさんで『街の膿』を炙り出して、可能なら処分する事だった。
勇人があんなに事件起こさなければ半分も見つけられなかったと思う。代わりに後処理に苦労したよ。後任を選定するのに1日使ったしね…
「てかフレイヤさん、俺はペットじゃないんだけど」
「私は勇人をペットだなんて言ったことはないよ？」
「メイド達が勝手に妄想しているだけですからね♪」
「何でだーっ！」
あ、死んだ。しかしパレード初日のお嬢ちゃん達とのデート以来、偶に何か悩んでるようだけど…まさか本当にロリコンの道に走った訳じゃないよね？そうだとしたら…強く生きるんだよ、勇人……

Ｓｉｄｅ：男勇者
フレイヤさんが俺に優しい眼差しを向けてる…何か勘違いされてそうだ…
最近、ジルくんに言われた言葉が頭から離れない。『貴方の被害者ですよ』…俺に巻き込まれた、俺の、被害者…俺が巻き込んだ？俺が…何か償いをしたい…だけど、多分ジルくんは俺からの償いを求めてない…俺に何かしてもらおうと、思ってない…
「フレイヤ様、勇人様、せめて御召し物だけでもゆったりしたモノに着替えませんか？」
…メイドさんの言う通りだな。着替えよう…
「……せめて着替える時くらい自分の部屋で…」
「却下だよ」
「面倒です。折角あらかじめ勇人様の部屋に服を運んでおいたのですから」

そう言って部屋のタンスのおくから女物の服を出してきた…なんで俺の部屋のタンスにフレイヤさんの服があるんだよっ！

「フレイヤ様と勇人様の部屋は意外と離れておりますから、フレイヤ様の服をいくつか勇人様の部屋に」

「ふふふ、流石、私の専属なだけは有る」

「恐れ入ります」

「いやいやいや、褒めるトコッ？主人としては怒るトコだろっ？」

「何を言ってるんだい？主人のために気を利かせて先回りする。メイドの鏡じゃないか」

「恐縮です」

「俺に一切断りが無い辺りは！？」

「フレイヤ様が勇人様をからかうのに最適かと思いまして」

「ここまで私の趣向を理解してくれるなんて、やっぱりメイドさんは最高だね」

「恐れ入ります」

「俺か？俺が間違ってるのかっ？」

「全く、勇人にはもう少し常識を身に付けて欲しいものだね」

「申し訳ありません。近日中に勇人様用に常識教育教材を製作いたします」

「いや、メイドさんがそこまでする必要は無いよ。この世界に来て2ヶ月近くに成るのに常識を身に付けない勇人のせいさ」

「勿体なきお言葉です」

どうしよう…2人だけの世界に入ってしまった…今のうちに着替えてこよう…

「勇人、どこに行くんだい？」

「トイレで着替えてくる…」

ちっ、見つかったか…

「ここで着替えればいいじゃないか。ここは勇人の部屋だろう？」

「2人がいるから嫌なんだよっ！」

「自意識過剰ですね。たかが勇人様の着替え如き、メイド達に自慢

して覗き穴と穴場の時間を格安で教える程度の興味しかありませんよ」

「興味津々な上に商売する気満々じゃねえかっ！！」

「勇人、幾ら自分の部屋だからって五月蝿いよ。隣の迷惑を少しは考えな」

「やはり常識教育教材を作るべきでしょうか？」

「これは…お願いしようかね…」

「俺は2人にこそ必要だと思う…」

この2人もうヤダ…とりあえず満足している内に着替えてこよう…

俺の部屋はトイレと風呂が同じ部屋にある、ホテルみたいな部屋なんだが…

「ふぅ…やっと落ち着ける…」

何で自分の部屋のベットで落ち付けないんだ？とりあえず上着を脱いで…

「フレイヤ様、キツイです」

「メイドさんこそ、もうちょっとそっち行けないのかい？」

「見えなくなってしまいます」

「仕方ないね」

「申し訳ありません」

…おい、変態2人！それでも一国の姫とそのメイドかよっ！これはお仕置きが必要か？

ガチャッ、ガンッ×2

「「痛～っ」」

「2人とも何してんの？」

「いや、なに。メイド達に頼まれてた勇人の着替えの様子を…」

「な・に・してんの？」

「いや、あはは…今日は、この辺で…」

「いやいや、ちょっと話が有るんだ。つきあってよ」

「ほ、ほら、そういうのはメイドさんに…」

「先に帰っちゃったみたいだよ？」
「なっ！置いて行かれたっ？」
「じゃ、２人でゆっくり話そうか？」
コンコンッ
「勇人様、公がお呼びです。一緒に来ていただけますか」
この声は、公の側近メイドの１人か？
「…助かった～」
「今でなければダメか？」
とりあえずフレイヤさんにお仕置きしたい。
「火急、と言う訳でもないでが、お急ぎに成った方がよろしいかと」
仕方ない。
「分かりました」
「それとフレイヤ様にも共に来て下さい。御部屋に来ていますよね？」
バレバレか…
「わかりました、少し待っていて下さい」
とりあえず着替えなおしか……

男勇者はパレードを終える（後書き）

珍しく男勇者が姫巫女に反撃してます
男勇者的お仕置きってどんなんでしょう？

男勇者の初任務

Ｓｉｄｅ：男勇者

「フレイヤ、勇人君、パレードご苦労だった」

久々の公は悩んでいるようだった。

「今日はパレードの苦労を労う為に呼んだ訳ではない。少々厄介な事件が起きた」

流石に家臣たちの前で部屋に来た時みたいな口調では喋らないか。

口調も少し厳かだ。

「実はユビキタス領の北端の村が正体不明のゴーレム使いに攻撃を受けている。近くの街から騎士隊を派遣したが…」

「返り討ちに合った、と？」

「うむ。騎士長との協議の結果、騎士ではこのゴーレムに対処出来ないと判断した。よって勇人君、君にフレイヤ、メイドさんと共にこのゴーレム使いを撃退してもらいたい」

「…フレイヤさんも、ですか？姫なのに…」

「だからこそだ。姫だからこそ、力が有るのならば民の為に動かねばならん。本当ならば私が直接出向きたいところだが…」

「公が直接出向かれてはなりません。それは戦争の時だけにして下さい」

「と、側近たちに許してもらえなくてな…頼めるか？」

トップ不在は確かに危険だよな。パレードの合間に街の人達と話して分かった事だけど、魔族と戦争するぞって色んな国が騒いでるみたいだし…

「分かりました。そのゴーレム、必ず倒してみせます」

待ってろよ、ゴーレム使い。これ以上、好き勝手には暴れさせないからな…

「あれが件の村になります」

ようやく着いた…2日もかけてしまったけど、村は大丈夫か？
「まだ、致命的な被害は無いようだね」
「そのようですが…御2人とも、戦闘の用意を」
メイドさんに言われるまま武器を準備する。魔法の練習を始めてからメイドさんに教えてもらった話だとフレイヤさんの棒は契約武器で普段は爪の魔法陣に入ってるらしい。どうりで普段手ブラな訳だ。
「…いたのか？」
「いえ、普通の村人もありますが…何か嫌な予感がします」
「メイドさんにしては曖昧だね。これは用心しないといけないようだね」
少しずつ村に近づいていくと村が所々破壊されているのが分かる。
「姫様？姫様ですかっ？」
一番大きな家から傷の目立つ騎士が出てきた。
「逗留部隊の者だな。村の現状を報告出来るか？」
「はい…ゴーレム使いは、あと少しで、この村に来ます」
「どう言うことだ？」
「村長の娘を要求しているんです…自分のゴーレムを強化するためには、土属性の強い魔力が必要だから、と」
「その娘は無事なんだな？」
「はい、家の奥に…」
「分かった。良くやったな、後は私達が引き受ける。お前は娘と村人を守れ」
「はっ！御武運を」
カランッ
「誰だっ！」
「あっ、その、私…」
「姫様、彼女が村長の娘です」
長い濃い目の黄色い髪…確かに魔力は強いんだろうけど…それだけで…
「…私が、ゴーレムに抵抗しなければ…」

「抵抗しなきゃダメだっ！」
あっ…勢いで言ってしまった…
「…勇人の言う通りさ。アンタは生きてるんだ。なら生きる為の努力をしなくちゃ。
それに、ゴーレムに魔力に魔力が欲しいなら、ゴーレム使いは確実にアンタを殺して血を抜く。そして他の村人もいずれは同じ目に合う。なら、どの道今倒すしかないのさ」
自己犠牲が時間稼ぎにしかならないと知って彼女も諦めてくれたようだ。
しかし15歳くらいの少女に、こんな決意をさせるなんて…
ズシン、ズシン、ズシンッ
この音、ゴーレム使いか？
「フレイヤ様、勇人様、来ました」
「は～はっはっは♪村長、あなたの娘さんを頂きに参りましたよ♪」
そう言って現れたのは4メートルもの土人形の肩に乗った、劇団俳優のような格好の男だった。
「おや、そちらの3人は騎士の増援ですか？これは失敬、このように美しい方々が騎士になど成るはずもありませんな。そちらの男性はいかにもと言った容姿ですが」
芝居がかったイラつく話し方だ…こんなヤツが…
「お前がゴーレム使いか」
「男に興味は無いんですよ、話しかけないでくれませんか？」
「お前が、こんな…」
「さて、一緒に来て頂きましょうか。これ以上村を壊されたくなかったら」
「こんな少女に、死を決意させたのかっ！」
「…人聞きの悪い事を言いますね。この少女の血肉は我がゴーレムに取り込まれ、強く、美しく、永劫にその存在を維持し続けるのですよ」
「誰がそれを望んだ？」

「何？」
「誰がそれを望んだって聞いたんだよ！そんなのはお前の１人善がりな、お前だけの理想だろうがっ！そんな自分勝手な理想に人を巻き込むなっ！」
っ！俺は、この前ジルくんに同じことをしようとしたのか？俺の理想を押し付けようと…
「ふふふ、はーはっはっは…あなたの様な凡人に、私の崇高な願いを理解できる訳が無い！このゴーレムは１度吸いこんだ魔力を体内で循環させ、魔力消費を極限まで抑え、消費した少量の魔力でさえ大地から自分で吸収する、言わば無限に存在できる永遠の存在なのですよっ！このゴーレムの血肉と成ると言う事は、ゴーレムと共に永遠を生きると言う事なのです！これ以上に素晴らしい事が他に有りますかっ！？」
「永遠の命が素晴らしいですか。全く、凡庸の極みですね」
メイドさん？
「何ですって？」
「『永遠の命がこれ以上無い素晴らしいものだ』等と、凡庸の極みだと申し上げたのです」
…本当に怒ってる？
「ならばあなたの言う素晴らしい物とはなんですっ！それだけの大口を叩くのですからさぞ崇高で素晴らしい物なのでしょう！？」
「そもそも素晴らしい理想とは人に押し付けるものではなく、自分の中で答えを完結させるものです。貴方の様に他者を犠牲にした時点で、どれだけ崇高な事でも低能で愚かなものに成り下がる。理想とはそうゆうものです」
何だか迫力もあって嫌でも頷いてしまいそうになる力が有る。
「くっ…詭弁だっ！そんなのは所詮自分の理想に自信を持てない、心の弱い人間の逃げだっ！」
メイドさんに呑まれてるな。コイツは自分の我儘を力で押し通そうとするだけの唯の馬鹿だ。相手にする価値も無いが、このまま少女

に手を出させる訳にもいかないな…

「ふんっ、貴様の様な輩に我が民が傷つけられたかと思うと虫唾が走る。さっさと私の視界から消え失せろ。貴様の相手をする時間が無駄だ」

「貴様ら…揃いも揃って、私を馬鹿にするなーっ！」

芝居がかった話し方も出来ない程に怒ってゴーレムで突撃してきた。

来るなら手加減はしない。

全力で、倒す！

男勇者の初任務（後書き）

メイドさんの説教回でした～

男勇者の戦い

Ｓｉｄｅ：男勇者

「どいつもこいつもっ！私を馬鹿にしやがって、馬鹿にしやがってーっ！」

くっ、流石に４メートルの土人形は受け止められない…

「大層な口利いてた割には逃げるばかりかっ？情けないなっ！」

くっそ、ゴーレム任せで自分じゃなにもしてないくせに…

「そちらの棒使いはさっき『我が民が～』とか言ってましたね。もしかして姫様でしたか？ユビキタスの双璧の片割れがこの程度とは、騎士の力量も大した事なさそうですなぁ。いや、事実逗留してた騎士達の弱い事弱い事。あの程度で国を守る者だ等と…」

「黙れ」

フレイヤさん、キレたかな？

「ふふっ、図星を突かれて黙っていられなくなりましたか？お優しい…」

「黙れ。その耳は飾りか？お前にはその良く回る舌だけあれば充分だろう？」

「何ですって？」

「お前に人の言葉を聞く必要は無いだろう？自分の理想だけを見て、誰とも意見を交わさないお前には」

「聞き捨てなりませんねえ」

食い付いた。

「図星を突かれて黙っていられなくなったか？」

「くぅっ、この様な屈辱は、始めてです…」

「屈辱、屈辱ねぇ。それはコッチの台詞なんだよ。お前如きに私の守るべき民がたったの１人でも傷つけられたのが、耐え難い程に屈辱だ…」

メイドさんに続いてフレイヤさんもか…正直俺も普段から頑張って

る騎士の人達の悪口には耐えられない…
「だから…メイドさん、勇人、我慢しなくて良いよ」
「徹底的に殺って宜しいのですか？」
「ああ、村に被害を出さなければ何をしても良い」
「了解」
「畏まりました」
「さっきから何訳の分かんないこと言っているんですかっ！」
コイツまだ分からないのか？
「今、貴様らの相手は私でしょうがっ！その私を無視するなっ！」
「そうですね。ではそろそろ始めましょう」
「ああ、そうだよ！さっさと私のゴーレムによる公開劇を始めようっ！」
「ええ、ゴーレムを含めた…貴方の公開処刑を始めましょう」

「この国に、ユビキタスに手を出した事を地獄の釜で後悔なさい」
そう言ってメイドさんはゴーレムに正面から突っ込んで行った。
…いやいやいや、返り討ちにあったらどうすんだよっ！？
「勇人、正面はメイドさんに任せて私達は側面だ」
「って、メイドさんはいいのかよっ？」
「問題無い。この程度の相手なら掠りもしないよ」
そう言われてメイドさんを見てみたら…
「遅いです、遅すぎます、この程度ですか？」
正面からゴーレムを圧倒していた。
拳や蹴りは完璧に避けて、足踏みによる振動はステップで何事も無いように体勢を維持している。何も攻撃出来ないんじゃないかと思っていたら、手がブレた瞬間ゴーレムの体に深くてデカい刃物傷が出来ている…何だアレ？ただゴーレムは土を吸収して傷治してるから決定打が打ち込めないでいる。
「負けてらんねえよなっ！」
俺もジュワユーズで切り掛かったが、

カンッ
岩の塊みたいなゴーレムには意味が無い…
「ははははっ、何だい？まともに戦えるのは正面のメイドだけかい？」
フレイヤさんも同じ様な状態か…
流石に大きさが違い過ぎるのか？ゴーレムからしたら爪楊枝みたいなサイズだし、もっと大きくないとダメなのか？
「なら魔法はどうかな？光成す矛よ　邪を滅せ　ホーリーランス」
フレイヤさんの魔法で上空から無数の光の槍がゴーレムに降り注いだ。致命傷とまではいかなくてもダメージを与えている…そうか、剣が効かないなら違う攻撃をすれば良いんだ！
「いくぜっ、ジュワユーズッ！」
剣に魔力を注ぎ込む。
ジュワユーズの能力は刻まれたルーン、『悪しき者には煉獄を　正しき者には楽園を　汝が想いを此処に示せ』だった。このルーンは使用者の魔力とイメージにより剣の形を変えるとゆうモノだった。
俺は魔法は上手く使えない。スゴイ量の魔力が有るのに、得意なはずの光魔法すら電球１つ分の光を出すのが精一杯。だから魔法は使わない。使えない。だけどジュワユーズに魔法は関係無い！
「ん？なっ、何だっ、それはっ！？」
ゴーレム使いが慌てている。無理もない。俺の手には３メートルもの巨大な剣が握られている。
これが俺の選んだ攻撃。武器が小さくて攻撃が効かないなら、武器を大きくすればいい！
幸い魔力で体を強化する事は出来るからこのサイズの剣でも使えなくはない。流石にそんなに速くは振れないけど相手は動きの遅いゴーレム。当てるだけなら簡単だ。
「行くぜーっ！」
全力で切り掛かる！
「くっ、来るな――っ！」

ゴーレム使いの叫びを聞きながら、俺の手にはゴーレムを叩き斬った、確かな手応えがあった…

Ｓｉｄｅ：姫巫女

……勇人は馬鹿だね。

まさか剣を大きくしてくるとは思わなかった。精々剣を鋭くするとかハンマーみたいな形にしてくると思ってたから呆けてしまったよ。しかもメイドさんの驚愕の表情が見れた。初めて見る程の珍しさだ。

さて、

「勇人、村に戻って村人にゴーレム倒したって教えてあげてきてくれないかい」

戦ってる間に村から随分引き離せた。流石にホーリーランスも勇人の大剣も村が近くに有ったんじゃ使えない。ホーリーランスは全弾命中する訳じゃないし、勇人の大剣は風圧で周りの地形がちょっと変わってる。村で使おうもんなら私達の方がよっぽど危険だ。

「おう。ゴーレム使いは任せた」

そう言ってジュワユーズを元のサイズに戻して鞘に収め村に走っていった。本当に単純な奴だね。

「さて、メイドさん。コイツの罪状は？」

勇人の一撃で完全に戦意を失って抜け殻になってるゴーレム使いを指す。

「はい。村の器物破損、民への暴力行為、誘拐未遂、殺人未遂、傷害、脅迫、魔法の倫理外使用、その他、に成ります」

その他は騎士への傷害等だろうが、それは騎士の実力不足も含まれるからそれほど重要じゃない。だが読み上げられた罪状はもはや魔法を使う者として許されるものではない。特に『魔法の倫理外使用』、これは場合によっては殺人以上の罰が下る。

「普通の身分不詳犯罪者は首都に連行され、そこで裁判により罰を下される。しかし、貴様は違う。私達には罪状が明確ならばその場で刑を執行する事が許されている。そして、貴様の罪状は死刑に値

する」
「っ！くっ、来るな、来るなーっ！」
「もう遅い。貴様はやり過ぎた。私の民に、私の愛すべき者達に、その薄汚い手を向けた事、地獄の釜で後悔しろ」
グチュッ…
「お疲れさまでした」
「ああ。代えの服は有るかい？返り血がどうも、ね」
「此方に。死体は私の方で処理しておきます」
「ああ、ありがとう。さっさと終わらせて勇人の所に行こう」
「はい。ふふっ、また娘達を乙女に変えているのでしょうね♪」
「違いない♪」
速く戻って、からかってやるとしよう……

男勇者の戦い（後書き）

姫巫女とメイドさんの裏事情でした
次回はまた男Ａ、その後誰か、とゆう順番に成ります

今更ですけど誰の話が一番好きなのか
気が向いたら感想とかで教えてください

男Aの旅、3日目（前書き）

1話に収めようとすると文字数が…
とゆう事で今回はちょっと文字数多めです

男Aの旅、3日目

Ｓｉｄｅ：男Ａ

男達の断末魔の様な叫びが小さくなっていき、やがて耳が痛くなるくらいの静寂が訪れた。

「坊主、お前この仕事終わったら御払いしてもらえ」

「ジル君、絶対だよ？お姉さんと約束して」

「このままじゃいつかは嬢ちゃんまで巻き込むぜ？」

心温まるアドバイスを騎士達から頂いた。その『しょうがないなぁ』って顔やめろ。

「まだ俺のせいと決まった訳では…」

「山賊さん達完全にジル狙いだったよね♪」

ぐはっ！まさか味方のはずのロザリーに止めを刺されるとは…

なんかこの山賊達、人身売買用に俺に目を付けたらしく相当しつこく俺狙いだった。

「これで5回目だっけか？」

「7回目ですよ。ジル君がいない時のイベント遭遇率軽く超えてきましたね」

「いつもはどれくらいなの～？」

「賊に襲われるのも含めて4回ね。普通どの村でも街でも『季節限定のお祭りに当たれたらラッキー』くらいで、イベントはないから」

「やっぱり坊主が原因だよな。ありえねえ程簡単にトラブル巻き込まれるし」

もう何も言えん…泣いてなんかないんだからねっ！…うえっ、男のツンデレキモいな…

今日は第2大陸上陸して3日目。昨日の街はカラーズの領土だった。

昨日の街では悪徳領主が街人を不当に虐げててそれをどうにかしてくれと頼まれた。

街の自警団と協力して領主と街の警備隊を撃退。隣町の警備隊に引

き渡して街は平和を取り戻した。
ちなみに、街に入った瞬間『気にいった』とゆう理由で俺とロザリーは領主に連れ去られそうになり警備兵撃退。そのせいでこんなこと頼まれた。やっぱり俺だけじゃないじゃん。
ちなみに女神様はまだあのゲームで挑んできている。何か異常な上達速度を誇っててその内負けそう…それはそれで悔しいな…
「あ～、それよりあれが次の街なんじゃ…」
御者台から見えた妙な塔の有る街の事を聞いて話題を逸らす。隊長の解説タイム。
「おっ、やっとだな。皆、今日の街に着いたぞ。服飾都市クロス、ここで手に入らない服は無いって話だ」
また大きく出たな。そしてシスターとロザリーは女の子な反応してました。なんで女の人はあんなに服好きなんだろう？

Ｓｉｄｅ：神祖
馬車は街の警備隊に預けたし、お買いものお買いもの♪
「あ～れ～…」
…ジルが人混みに流されていくっ！
「隊長さんっ、ジルが、ジルが～…」
「…あいつ本当になんか憑いてんじゃないか？」
そんな事言ってる場合じゃないよう！速く探さないと！
「待ってロザリーちゃん、あなとまで逸れるのはマズいわ。皆で一緒に、ね？」
「そうだぜ。それに坊主なら大の大人相手でも殴り倒せるからそんなに心配するな」
「…はい」
う～、じるぅ～…
「泣いちゃダメよ。ジル君に会えた時笑われちゃうわよ？」
シスターさんに優しく厳しいコト言われちゃった…うん、泣かない！
だから速く探す！

と、探していたら意外と速く見つけた。だって騒がしいトコにいる人にジルのコト聞いたら簡単に『あっちに走って行った』『ついさっき店通しの喧嘩止めた』『あんなに小さいのに強かったな～』ってビックリするくらい見た人が多かったから…ジル何してるの？

「お、あの小っこいの坊主じゃないか？」

ドコドコ？…いたっ！

「おい、嬢ちゃん。お子様は引っ込んでな、俺達はお前には用はねえんだ」

「でもアニキっ、こいつスゲー上玉ですぜっ！」

「あ、貴方っ、下がりなさい！これ以上私に…」

「はぁ…とりあえず」

ゴスッ×2

カッコイイ男の人とデッカイ男の人がお腹殴られて気絶した…

「え、ウソ、だって、貴方まだ１０歳くらい…」

「コイツらが起きる前に離れない？」

「え、あ…そうですわね…」

男の人２人を残してジルが、１５歳くらいの女の子の手を引いてその場を離れていく。

ジル…その女の子は誰かな？

「嬢ちゃん、追うぞっ…て既に追ってる！待て嬢ちゃん、速過ぎるーっ」

ジルが女の子と一緒…ジルが女の子と一緒、ジルが女の子と一緒じるが女の子と一緒！

っ！…何でだろう…涙でそう…

「ここまでくれば平気か？」

「はぁはぁはぁ…そうですわね…」

ジルと女の子は大通りの脇にある路地で止まった。女の子の方はスゴイ息切れしてる。ジル、女の子には優しくしなきゃダメ！

「やっと追いついた…嬢ちゃん、速過ぎ…」

隊長さん達も来た…でも…出れない…今、ジルに会うの、怖い…
「今日は有難う、お礼に我が家で夕食でも如何？」
「ん？ああ、悪い、仲間が探してるだろうから俺はそろそろ戻らないと」
「…私の誘いを断ると？」
「アンタが誰だか知らないしな。成り行きで助けただけだ」
「私は、この街のっ…」
「領主の娘だ、とか？」
「なっ、貴方知ってて…」
「知らないって。ただ育ちも良さそうだし、自分の誘いを断られる事に慣れてない所を見るとそうなんだろって思っただけ」
「…なら尚更断るのは…」
「別にどうでも良いよ。ただの警備兵からなら逃げ切れるし」
「貴方は…」
「覚えておきなよ。アンタの振りかざしてるのは、アンタの力じゃない。そんなんじゃ誰もアンタに従わない」
「っ！…うぅ…」
「はぁ、ゴメン、言い過ぎたよ」
「泣いてませんっ！」
「んな事一言も言ってないけどね」
ああ！ジル女の子を泣かせるなんて最低だよっ！後でちゃんとオハナシしなくちゃだよっ！
「…どうしたら、いいのですか？」
「…何が？」
ジル、察してあげなよ…さっきまでのテレパシーは何だったの？
「どうしたら、私は私に相応しく成れますか？」
…言ってる事が全然わからない！あれっ？隊長さん達はわかってるみたい。何で？
「あ～、統治者の条件は色々だからな。まぁ…なるべく皆が幸せに暮らせるよう考えてみたら？統治者として」

「…皆が幸せに、ですか…理想論にしか聞こえませんわね…」
「理想を実現しようとしない統治者は邪魔なだけだろ？」
ジル、極端過ぎ…あれっ、隊長さん達も女の子も感動しちゃってるっ！？
「では、貴方は誰か幸せにしたい人がいますか？その人に何をして上げたいですかっ？」
「そんなに期待されてもな…俺は、ロザリーが悩んでたり、困ってたりしたら近くにいて、いつでも手伝えるようにしていたい、かな。我儘言われても『しょうがねえなぁ』って、手を貸せる距離に居たい…恥ずかしい／／／」
……何かアタシも恥ずかしい…シスターがキラキラした目でこっち見てるよ～っ／／／
「…そう、ですか…助けて下さって、有難う御座いました…この街に来る事が有りましたら、ぜひ私の家に来てみてください？ロザリーさんと、一緒に…」
そう言って女の子はジルから離れていった…

Ｓｉｄｅ：男Ａ

…行ったか。しかし…恥ずかしかった／／／早く帰ってもらう為にわざわざ女の名前出してまで相当無茶な事言ったからな～。運命感じられちゃっても応えたくないし…
「ジ～ルッ♪」
グハッ！後ろからこのタックル、ロザリーかっ！
「えへへ～♪」
…頬がちょっと赤くて嬉しそう…後ろの隊長達がスッゴイニヤニヤしてる…
「もしかして…聞いてた？」
「えへへ～／／／」
これ以上は聞くまい…俺の精神のために…早く宿で休もう。もう日が暮れる…

結局、宿で相当騒がれた上にロザリーに『抱き枕か？』な抱きしめられ方で就寝した…

男Ａの旅、３日目（後書き）

ギリギリ３０００文字いってないです
いっそ３０００にしてしまえばよかったですかね？

女Bは魔界の法を垣間見る

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「おや、イトハ殿御１人とは珍しい」

「あ、テッタ。私だって１人の時くらいあるわよ」

濃い青髪ショートヘアーの長身の美人、テッタ・エイザン。なんでも勇者の血を引く魔族で、斬り込み隊の女隊長。切り込み隊はこの人以外は皆男らしい。

「左様で。常に魔王様と御一緒にいる印象が強いものですから」

なんと言うか…この人の喋り方は武士っぽい。丁寧と不遜の間とでもいう喋り方だ。

腰に吊るした鞘の形からも分かるけど刀を使う。昔の勇者が刀を広めたらしく、刀は魔界ではちょっと珍しいくらいの印象だ。サシなら剣より使い易いと聞いた。

「アイツが一方的にくっ付いてくるのよ。私はなるべく離れてたいわ」

「そんなに邪険に扱われては魔王様が強行手段に出るやもしれませんよ」

「…もう遅いわ…」

アイツは何回か強行手段に出てきた。キスだけだからまだイイけど…これ以上は考えない方がイイわね…

「左様で…某もいっそ…」

「お願いだからヤメテ。これ以上変態増えられたら私本当に城出るわ…」

実はこの人もリリーと同類。強行手段に出ないだけでアイツと同レベルの危険人物。何で私は女の人にしか好かれないのよっ！？

「それは困ります。それに、その…言いにくいのですが…イトハ殿を追って相当数の者が城を抜けると思います…」

「……城で大人しくしてるわ」

「懸命な判断です」
褒められてもあんまり嬉しくない…
「イトハ様、テッタ様、リリー様がお呼びですわ。至急謁見場まで来て頂けますか」
あ、この前私にイチャモン付けてきた貴族っ子のシフルネ・フレイライン。今では普通にリリーの御付としてアイツに魔王の仕事をさせている。その分私の稽古はテッタに頼んでいる。魔王の仕事が何かは知らないけど。
それにしても…いつ見ても不思議な縦ロールの黄髪だわ…
「シフルネ殿、承知しました」
「久しぶりね。何かあったの？」
「お久しぶりです。イトハ様に会えないのは私にとっては、本当に、本当に寂しい日々で…」
「シフルネ殿、落ち着いて下さい。イトハ殿は今は目の前に居りますよ」
「…そ、そうよ。だから何があったのか教えてくれない？」
どうしよう…この子怖い。テッタのフォローも怖いけど…
「…そうですよね。イトハ様は、今は目の前／／／」
顔赤くする所じゃないでしょうがーっ！
「はっ！見苦しい所を御見せしました…歩きながら話しましょう。本日、一部の大臣達がリリー様の年齢を理由に魔王に相応しくないとの声明を元に、謁見場にてリリー様に詰め寄っているのです。彼らは＜契約の魔印＞を移せと要求してきました」
「＜契約の魔印＞？」
「イトハ殿は知らないでしょうが、魔王の証となるスキルです。このスキルを持つ者が魔王になるのです」
「でもスキルなんて移せるの？」
「一部の特殊スキルで移せるモノも有るそうですが、某は見た事は有りません」
「私もです。ですが＜契約の魔印＞は多分移りません…」

「何でそんな事分かるの？」
「この＜契約の魔印＞が発現するとそれに関する知識が得られるとリリー様に聞いた事が有ります。その時、呪いの様だと呟いていましたから…おそらくそう簡単に移るモノではないかと」
「大臣達は…知らないのかしら？」
「知っていたら、魔王様に詰め寄ってはいないでしょう」
「私も同じ意見です。リリー様には＜契約の魔印＞の発現条件を公開してはと進言したのですが、『おそらく今以上の混乱が起こる』と申しておりました」
「そう…これ以上は本人に直接聞いた方が速そうね。急ぎましょう」
リリー、もう少し待ってなさいよ…

「リリー様、我らとてなにも嫌がらせでこのような事をしているのではありません。ですが、やはり貴方は幼すぎる。城に客人を迎えるのは良いとしましょう。女性達の士気も上がり、城も活気づいています。しかし、それと同時に最近の貴方には緩みが見える。統治者としてとの緩みが！」
謁見場に入った瞬間嫌味な演説に遭遇した。まるで自分の演技に酔っている3流役者みたいで見ていてサムい。
「ほう。全員が同じ思いのようじゃの。して、どうしたいのじゃ？残念ながら＜契約の魔印＞は移せん。移る理由も言う訳にはいかん。この事を踏まえた要求を聞こう」
玉座に座るリリーを１００人以上の魔界貴族（男ばかり）が見ている。コイツらが今回の騒ぎを起こしたメンツね。
「…我らは、現状に満足できぬのです！何故人間を放置するのです？何故奴らが魔族を攻める準備をしているのに何もせぬのです？何故この状況で城を空けたりするのです？貴方は魔王としての自覚が足りないのでは有りませんか！」
『そうだ、そうだーっ』と他の連中が野次を飛ばしてる。明らかに便乗してるだけのヤツらが偉そうに口開いてんじゃないわよ！

「そのような方に、魔王が務まると思っているのですか！？」
…ようするに権力寄こせって言いたい訳ね…
「イトハ殿、ここは暫し抑えて下さい。時期に終わります」
「どうして分かるのよ？」
「ふふふ♪イトハ様、リリー様は決してあのような低能な者達に負ける御方では有りません」
シフルネ、随分楽しそうね。何か知ってるのかしら？
「ふむ。お前達がわらわを魔王に相応しくないと申すならば、法に従い雌雄を決するしか有るまい。それが＜契約の魔印＞を剥奪する、唯一の方法じゃ」
「…剥奪だ、等と物騒な…」
「じゃがわらわが魔王に相応しくないと申すならば、剥奪するしか有るまい。それとも今までの高説は何の意味も無い言掛りとでも申すか？」
「…では、法に従い、王決めの儀を、貴方に申し込みます！」
「よかろう、受けて立つ。明日の正午までにお前達の中から5人、わらわはお前達以外の者を4人。選抜し雌雄を決する。では、解散！」
…何がどうなったのよ…

女Bは魔界の法を垣間見る（後書き）

ちょっと前に出てきた魔王城の人達が登場しました

女Bは決闘を見る（前書き）

前回のあらすじ
決闘することになった！
…誰が？

女Bは決闘を見る

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「とゆう訳で、イトハ、テッタ、シフルネ。明日はわらわと共に奴らを叩き潰すのじゃ」

「承知しました」

「イトハ様、頑張りましょうね♪」

「むう、シフルネめ。最近積極的に攻めて居るの、わらわもそろそろ攻め方を変えるべきかの？」

…はぁ

「まずは説明しなさいよ、説明を！２人は良いかもしれないけど私は何にも知らないのよ！」

グリグリグリグリ…

「痛たっ！痛いのじゃ～っ！わ、わかった！今から説明するから離して欲しいのじゃ～」

まったく、説明くらいちゃんとしなさいよね。

「もうちょっと優しい触れ合いを望むのじゃ…や、うむ、では説明を始めるのじゃ！」

グリグリしようとしたら慌てて説明始めたわね。

「魔王の証は＜契約の魔印＞とゆうスキルなんじゃが、このスキルは遺伝でも、訓練でも手に入らん特殊な発現条件を持って居る。じゃがこのスキルを持っているだけで魔王として君臨してる事に良い顔をせん者も多い。そういった者がこのスキルを剥奪する手段として、王決めの儀とゆう５対５の決闘で魔王に戦いを挑んだ者達が勝ったら、その者達の長が新しい魔王に成れるんじゃ」

「この法は魔王の暴走を止める為に有る、との建前ですが、実際には何故この方法で＜契約の魔印＞が移るのかは分かっていないのです。イトハ殿にはこの決闘で魔王様の側として、挑戦者達と戦って貰いたいのですよ」

「はぁ～、面倒な法なのね…てか1人足りないわよ？」
「酷いイトハちゃん！私がいるじゃないっ！」
「きゃあーっ！」
「イトハちゃん、悲鳴も可愛い♪」
「ヘレシア！胸触るの止めてって言ってるでしょ！」
「だって私1日1回はイトハちゃんの胸に触らないと禁断症状が…」
「知らないわよ！」
いきなり後ろから私に抱き付いてきたこの巨乳変態はヘレシア・ヘルシィ。城の保健室の室長…魔王城に保健室？と思うけど実験室で怪我人がでたりテッタの所とかの軍隊が訓練中に怪我したりするから需要は高いらしい。
「羨ましいのじゃ…」
魔王がこんな事で羨ましいとか言わない！
「はいはーい、私もリリーちゃんの味方として参加するよ♪」
「うむ、これで5人揃ったの。全員明日の為にも今日はしっかり休むのじゃぞ」
「そうですね」
「わかりました」
「はーい♪」
「あ、明日の決闘ってルールとか決まってんの？」
「決闘は1対1の点取り形式じゃな。先に3勝決めてしまえばいいのじゃ。まぁ魔王と向こうの長は必ず戦わなければならんし、その試合で魔王が負けたら今までの試合結果に関わらず挑戦者側の勝ちじゃがな」
結構普通なのね。
「勝った人が次の試合も出れるとなると魔王側に有利過ぎるからこのルールになっていると聞きました」
色々考えて出来てるのね。
「さ、今日はもう解散じゃ。各々体調にだけは気をつけてくれ」
これ以上は聞く事思い付かないわね…

『レディース、アーンド、ジェントルメーンッ！今日はリリー様の魔王就任以来、初の王決めの儀だっ！歴代の魔王達も通った試練、はたしてリリー様はどう乗り越えるっ？はたまた魔王不敗の歴史が覆されるのかっ？両者の対決は見ものだーっ！

なんと言っても今回は、親子対決、隊長対決、余所者対決、白衣対決、等々見応えの有りそうなカードばかりだーっ！

はたして勝つのは、子か親か！切り込み隊か遊撃隊か！リリー様の嫁か大臣の妾か！白衣の天使か白衣の悪魔か！全ての試合が白熱必至の好カード！

てめーらっ！一試合も見逃すんじゃねーぞっ！』

『『『『『うおーーーーーっ！』』』』』

司会も観客もノリノリね…毎回こんななのかしら…

「今回は凄い人数ですね。それだけ魔王様が支持されているとゆう事。この勝負、貰いましたね」

「そうゆうもんなの？」

「はい、これだけ支持されている王に戦いを挑むのは得策ではありません。勝ってもブーイングの嵐ですから」

「なるほど。それにしても今回の対戦カードって…」

「はい。シフルネ殿は御父上と、某は同じ立場の遊撃隊隊長と、ヘレシア殿は魔界病院の院長と戦います。イトハ殿のお相手は大臣の妾ですが彼も魔界の者ではありません」

この決闘、リリーサイドは女しかいないが大臣サイドは男しかいない。妾って男なのね…

「大臣は数少ない子を産む男魔族ですからね。女性と付き合っても生産性が無いのですよ」

男同士…ＢＬ？なんかスッゴイ美少年だし…近づきたくないわね…

「では、行ってまいります…」

「うむ、無理はするな」

「…はい！」

そっか…シフルネは父親と…

『さっそく第一試合だ！しょっぱなから親子対決！子は魔王の元で、父は反魔王の元で、ああ誰にも止められない、悲劇の親子はただその刃で打ち合うのみ！今開くのは舞台の幕、悲劇の舞台の幕開けだーっ！第一試合、始めっ！』

始まった…って、え？

カッ、カカカカカカカカカカカカッ！

シフルネ親子の武器は両方とも細身のレイピア。父親と戦う事になって戸惑うかと思ったら…

「さっさと倒れなさいっ！」

「くっ、シフルネ！何時の間にここまでっ」

速攻で勝負仕掛けてる…それもかなり容赦無い…目とか急所とかガンガン攻撃してる…

『これは速いっ！目にも留まらぬ光速の刺突で父を追い詰める子！一切の容赦が無いっ！』

「シフルネちゃんはお父さんのコト大嫌いだからね～。むしろ喜んで刺しにいってるね」

親子仲悪いんだ…

カンッ…

父親のレイピアが上に弾けた！

「この距離、終わりですっ！大地の流れを組む者よ」

父親がレイピアを急いで戻そうとしてもシフルネの連撃に阻まれてる。

「その力　我が使わん」

強引に上から叩きつけようとしたら右に流されてる…これは終わったわね。

「アースショット！」

刺突が腹を捉えたと思ったら場外まで吹き飛ばされた…あ、白目剥

いてる。
『おーっとこれは完全にダウンだーっ！父と子の悲劇の舞台となるかと思いきや、圧倒的な手数で子が親を叩きのめしたーっ！容赦無い、全く容赦無い攻撃で、リリー様チーム、まずは一勝をもぎ取ったーっ！』
「覚えておいて下さい、お父様。リリー様の敵は、誰であろうと私の敵です！」
聞こえてないわよ…とりあえず1勝…次はテッタね。

女Bは決闘に出る

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「御苦労じゃったな♪」

「はいっ！リリー様の為に、悪漢を蹴散らしてまいりました♪」

自分の親を悪漢扱い…どんだけ嫌いなのよ…

「では、某の番ですな」

「テッタちゃん、頑張ってね♪」

「承知した」

『無駄に長い待ちは俺の趣味じゃないから第二試合さくっと始めるぜーっ！今度は魔界一の女剣士、切り込み隊長と魔界一の力持ち、遊撃隊長の決戦だーっ！技の切り込み隊長か、はたまた力の遊撃隊長か、魔界最高の技と力の根競べ！レディーッ、ゴーッ！』

テンポ速っ！もう始めちゃったわ…

て言っても試合はさっきみたいに速攻じゃない。両方とも相手の隙を探る様に睨み合ってる…テッタは刀を居合いみたいに構えてるし、相手の…ライオン人間はボクシングみたいに構えてる。

そう、テッタの相手はライオン人間だった！

体は普通の人間。ただしかなり筋肉質だし背も高い。２メートルくらいあるわね。そしてなんといってもその顔…何故ライオン？それも可愛らしい遊園地なんかで売ってるような、ヌイグルミチックなライオン顔…笑うトコかしら…ぷぷっ♪

マッチョなヌイグルミライオンがボクシングの構えって…シュールだわ…

「どうした切り込み隊長、何も仕掛けて来ねえのか？隊の名が泣くぜ？」

そして声渋っ！なにこの変なギャップ！不覚にもカッコイイとか思

っちゃったわ…
「そう急かすな、焦らずとも…」
キンッ！
「ちっ！」
「すぐに見せてやる」
…へ？テッタとライオンの立ち位置が変わってる？何したのよ…
『こいつぁー速いっ！流石魔界一の女剣士、司会泣かせの訳分かんねえ実況不可能な切り込みだぁーっ！』
た、確かに実況出来ない司会って可哀そうね…
「ようやくか…くっくっく、やっぱこうでなくっちゃなぁーっ！」
「来い。魔王様への謀反、到底看過出来るものではない。この場ですり身にしてくれる」
そっからは刀と拳のぶつかり合いだった。
刀を拳で弾き、拳を刀で弾く。時に火花が散る程の高速の異種格闘技…これなんてバトルアニメ？
『こいつぁスゲー！互いにただ相手を倒す為だけに、その技を、その力を、ただぶつけ合い、しのぎを削る！熱い決闘の見本のような勝負だーっ！』
「くはははははは！やっぱりだ、やっぱりだぜ見り込み隊！お前が、お前だけが俺を此処まで熱くさせる！お前に比べたらそこいらの腑抜けた奴なんか全てゴミだ！そんな奴らを何人相手にするよりもお前との方が断然良い！だから、もっと、もっとだ！もっと俺を熱くさせろっ！」
あのライオン人間、可愛い顔してバトルマニアだったのね…
「私に命令するな」
「あ？」
「私に命令していいのは魔王様だけだ」
「くはは、こいつぁ失、敬！？」
『おぉーっと！遊撃隊長の鋼の肉体に初めて傷が入ったーっ！流石の＜グラップラー＞も切り込み隊長の刀の前には耐えきれなかった

かーっ！？』
「…アイツも＜グラップラー＞だったわよね？」
「ジルの事か？ロザリーはそう言っておったの。興味無かったから見んかったが」
「遊撃隊長も素手で戦うのは＜グラップラー＞だからかしら？」
「たぶん武器有りだと強過ぎて勝負にならんとかじゃろ」
「…バトルマニアなら有り得るわね…」
「くははははははは！傷を負ったのは久々だ！戦いってのはこうでなくっちゃなーっ！」
「いや、もう終わりだ」
「何を…」
「さらばだ」
キンッ！
「か、はっ…」
ドサッ…
『……おぉっと、俺としたことがあまりの速さに止まっちまったぜ！何が何だか分からねえが遊撃隊長が肩からバッサリと切り傷負ってダウン！これ以上は試合続行不可能により、勝者、切り込み隊長ーっ！』
『何だったんだーっ！』『ちゃんと実況しやがれーっ！』『テッタ様ーっ！こっち向いてーっ！』
何か最後変なの混じってた気が…
「魔王様、ただ今戻りました」
「うむ、よくやったのじゃ。技のキレは流石じゃの」
「お褒めの言葉、有り難く頂戴します。ではイトハ殿、頑張って下さい」
ニコッとコッチにエールを送ってきた。この笑顔は確かにカッコイイわね。テッタが男なら惚れてたかも…
「うぬぅ、皆イトハに積極的に攻めているの」
「アンタが1番積極的でしょうが…じゃ行ってくるわ」

「うむ、気楽にの」

『皆さまお待ちかね、本日の花形試合の始まりだーっ！片やリリー様の嫁と目される美少女、片や公式に大臣の妾と成っている美少年、どちらも魔界じゃ余所者だが、その美貌に偽り無し！舞え、輝け、咲き誇れ！今、魔界一美しい舞踏会の開演だーっ！』

始まったわね。相手は短剣の2刀流…両手使う敵に縁でもあるのかしら…

「お姉さんが魔王様の嫁なんだ…ふふっ、流石に綺麗だね」

どうしよう、普通に嬉しい。てかこの子守ってあげたくなるタイプなんだけどっ！同じ年下でもあの糞生意気な薄紫髪のガキとは正反対！…これは苦戦するわね…

「でもね…僕は女の人が怖いんだよ」

なにか辛いことでもあったのかしら…そうよね、あんな子、周りの人が放っておかないわよね…

「だから…僕の前から消えてよっ！」

速い！けど追えない程じゃないわっ！

カンッ、ギギギギ…

つばぜり合い、体格的には私の方が有利！

「風よ！」

なっ！

とっさに弾いて距離を取る。

剣が風を纏ってる。わたしのガ・ジャルグと同じ魔法の武器かしら…

「へぇ、普通なら気付かれないんだけど…お姉さんこの剣の事知ってるの？」

「まぁね…それに1言で魔法使ってくるヤツと戦ったこともあるし…」

「1言で魔法？ルーン刻んでれば普通、かな？ふふっ、魔王様と結婚するには強さも求められるんだね」

「私リリーと結婚する気無いわよ？」
…あれ？会場中の空気が凍ってる？
「え？だって、さっきから皆…」
「リリーが私に嫁に成れって言ったのは確かだけど私ＯＫしてないわよ？てか恋愛は男としたいんだけど？」
「…うぅ…」
あれ？何か…泣いてる？
「女の人は…女の人はやっぱり嘘つきだーっ！」
…どうしよう、ホントに泣いちゃった…

女Bは決闘を眺める

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「女の人は…女の人はやっぱり嘘つきだーっ！」

『おぉーっと、魔王の嫁が大臣の妾を泣かしているーっ！噂によると魔王の嫁は心理戦が大の得意で切り込み隊長もリリー様も泣かされた事があるって話だーっ！このまま一気に心理戦で決着が着いてしまうのかーっ！』

勝手なコト言ってくれるわね～…あれ？下手に怪我させるわけにもいかないしそうした方がいいかもしれないわね…

「勘違いしたのはアンタでしょ？何でもかんでも人のせいにするのは良くないわよ。だからアンタは騙されんのよ」

とりあえず＜心見の魔眼＞ＯＮっと。

「だ、騙すのはいけない事だよっ！」

「アンタは勝手に勘違いしただけでしょうが」

「で、でも！最初の時からお姉さんは１回も否定しなかったじゃないかっ！」

「いちいち否定してたら決闘が進まないから我慢したのよ。観客にとってはどっちでもイイコトなんだし」

「じゃ、じゃあ何で魔王様の方にいるのさっ？」

「城に住まわせてもらってるし、困ったコトがあったら助けるくらい当り前でしょ？」

あれ？もうちょっと何か言ってくる思ったんだけど…

「…ぉ、な…なん…」

？聞き取れないわね…

「女の人なんて嫌いだーっ！」

あ～、場外に走って行っちゃった…

『…え～、第２試合に続いてあまりの事に俺も実況が出来ねえが…大臣の妾、場外により、魔王の嫁の勝利だぜっ！』

『『『わ～…』』』パチパチパチ…
まぁこうなるわよね…私が観客でも反応に困る試合だったもの…
「おかえり、イトハちゃんっ♪カッコよかったわよ♪」
「どこがよ…」
「リリーちゃんと結婚する気無いって言い切ったトコ。やっと私と結婚してくれる気に成ったのね♪」
「いやお断りだから」
「えぇ～、イトハちゃんにそんなコト言われたら私次の試合勝てなさそ～」
「案ずるな。既に3勝しておるからヘレシアはさっさと負けて来い。その間にわらわはイトハとの式の準備を…」
「さっさと試合始めなさい！リリーは次の試合に備えてなさい！」
全く油断できない連中ね…

『なんとも微妙な空気だが、第四試合を始まりだーっ！お次は因縁の医者対決！魔王城の保健室室長と魔界総合病院の院長、誰もが知ってる魔界一有名な腹黒白衣の天使と、知る人ぞ知る恐怖の権化、白衣の悪魔の戦いだーっ！何が何だか分かんねえ勝負はもう嫌だっ！？しかしこの2人がまともに戦うとも思えねえ！卑怯は褒め言葉に居っておけ！天使と悪魔によるオペの始まりだーっ！』

実況の人ちょっと自棄に成ってるわね…私関係無いわよ？
「ふふふ…ようやくです、ようやく貴女に復讐できる時が来ましたっ！」
ヤバい薬でもやっちゃってそうな程血走った目でヘレシアと向き合ってるのは褐色の肌したオールバックに銀縁眼鏡のインテリ風の…裸白衣の男！
…変質者だーっ！誰か変質者、露出狂が出たわ！警察、いや軍隊呼んでーっ！
『今日も鍛えられた肉体の上から白衣1枚とゆう変態スタイルで颯

爽登場！学会発表で室長に服着ろと言われて以来、まともな学会には呼ばれなくなってしまった自業自得の変態医者！腕は一流でも変態に診られるのは勘弁だーっ！』

さっき言ってた因縁ってそのコト？因縁浅っ！

「全く、そんな恰好していると風邪引いちゃいますよ？病気を治すはずの私達が病気に成りそうな格好でどうするんですか」

ヘレシアがまともなコト言ってるっ？後ろから人の胸揉む変態が普通のコト言ってるっ！

「ふん、私はそうならない為に体を鍛えているのです！」

理由に成ってるのかしら…

「患者さんには分からないんですから意味無いですよ？患者さんを不安がらせては上手くいくものも上手くいきません。よって貴方に患者さんを診る資格はありません！」

そう言えばこの２人動かないわね。

「イトハ殿、もう少し下がって下さい」

テッタ？

「あの２人、メスや注射器を投げ合っています。このままだと破片が…」

ザクッ×１０

「「「…」」」

テッタ以外のメンバーが黙って離れるには充分な量だったわ…

『何だ何だーっ！２人を中心にメスや注射器、体温計までもが散らばっていく！？この２人、見えない速さで静かに戦ってるぞーっ！しかし多い！どこにあんな大量に仕込んでいるのか全く分からないっ！』

「私は治療が出来ればそれで良いのですよ。他の事など知りません」

カカンッ！

あ、メスとメスがぶつかり合った。

「はぁ～、１度イトハちゃんと一緒にお説教しなきゃ」

何で私が巻き込まれるのよっ？

「イトハ？ああ、魔王様の嫁ですか…ふふふ、いいですね。彼女は実に治療のし甲斐が有りそうです」
イ～ヤ～ッ！あんな変態に診られたくないーっ！
「ダメですよ。イトハちゃんの専属医師は私だって決まってるんですから！」
いつ決まったのかしら…
「そうですか、残念です。では貴女の専属医師に成りましょう…ふふふ、彼女程でもないですが貴女も実に治療のし甲斐が有りそうだ」
「いっ、嫌っ！貴方だけは嫌っ！」
「そんなに邪険にしないでください。私の手に掛かればどんな病気も確実に治りますよ？」
「貴方の腕は確かだけど、貴方が嫌なのよっ！」
「ふふふ、こんなに強情な患者さんは初めてです。これは是が非でも治療してみたいですね」
どうしよう、医者に見えない…
「誰が貴方何かに、っ！きゃあぁぁぁーっ！」
『おぉーっと！白衣の悪魔のメスが、試験管が、体温計が、拘束具が、白衣の天使にクリーンヒット！これは動きようが無い！…何々、試験管から漏れてる液体は痺れ薬…おぉっとコイツァ白衣の天使がまるで塗れば様にビチャビチャだーっ！そして動きずらそうに体をくねらせている姿はあまりにも刺激的！良い子の皆は目を潰れっ！』
ヘレシアがなんかキャットファイトみたいな事に…服が体に張り付いててエロい…巨乳だからよけいにスゴイコトに成っちゃってるわね…
「あれは…もうダメじゃの…」
「院長の調合した薬は本人でも治せないと有名ですからね」
「ただ治す薬を作る気が無いだけだと聞きましたわ」
全員諦めムード！
『え～、これ以上は別ジャンルの勝負に成ってしまうので…この試

合、無効として試合を強制終了しますっ！院長は責任を持って室長の治療をして下さい…さぁ、お次はお待ちかね！リリー様の登場だっ！テメエらっ、その勇姿を絶対に見逃すんじゃねえぞっ！』

「ではさっそく私の治療室に行きましょうか。さて今の内に取れるデータを…」

「嫌―っ！貴方だけは嫌――――――――――っ！ちょっ、やめっ触らないで――…」

…ヘレシアが運ばれていくわ…南無…

女Bは魔界の風習に触れる

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

『さぁ、待ちに待ったリリー様の登場だっ！！これで負けたら仲間達の勝ちはパー！ゆえに魔王は引けない、逃げない、負けられない！！自分の意地を、仲間との絆を、魔王の誇りを、守り通す事が出来るのかーっ！！』

『『『『リリー様―っ！！頑張ってくださーいっ！！！』』』』』

実況の人ってよく毎回毎回台詞思いつくわね。私には無理だわ。

てかリリー人気あり過ぎでしょ…なんかアイドルみたいだわ…

『対するはリリー様に勝負を挑んだ最低最悪極悪大臣！！リリー様への批判を引っ提げて、今日も背負うは観客からの大ブーイング！

『誰がなんと言おうとも、俺は魔王を認めねえ』？寝言は寝て言え、死んじまえ！

リリー様にすり潰されたいマゾっ気全開大臣対国中の人気魔王リリー様！祭りの最後の処刑舞台！派手に散れ――――っ！！』

…今までで１番長い前振りだったわね…嫌いじゃないわ。

「リリー様、御覚悟をっ！」

「知らん」

ゴンッ！

…は？

『うわぁーっと、これは速くもリリー様の勝利かっ？お互いに触れてもいないのに大臣が地面に押し付けられている！』

実況説明ありがとう。でもどうやってあんな…

「流石魔王様、無詠唱で闇魔法を使うとは」

「相変わらず恐ろしいですわね。魔力の流れは殆ど感じ取れませんでしたわ…」

「シフルネ殿が殆ど感じ取れぬのなら某が全く分からなかったのも必然ですね…」

「いやいやいや、じゃあテッタは何で闇魔法だって分かったのよ！？」

闇魔法ってもっと黒い霧みたいなの出るわよ？

「リリー様は不可視の闇魔法を使ったのですわ。ですから魔法に詳しい者は風魔法と誤解してしまうでしょうが…」

「風魔法であの様な事をしようとしたらもっと周りに強風が吹きます。それが無いとゆう事は…」

「闇魔法で重力を操った？」

シフルネの説明をテッタが受け継ぎ、最後に私に答えを言わせてくれた。こんな時にまで私を立てようとしなくても良いのに…ちょっと嬉しかったり／／／

「他に無いでしょう…いやはや、某は魔王様側で良かった。あんな魔法、某には対処のしようが無い」

「私もです。あんな些細な魔力の揺らぎでは魔法の属性さえ読めませんもの…」

「魔力の揺らぎで魔法が分かるのはアンタだけよ…」

シフルネの変な特技、と言うか変な強化スキル＜解目＞。このスキルを使うと魔力の流れから発動する魔法が分かるらしい…魔法戦じゃかなり有利じゃない？

「ふむ、もう少し強くやっとくべきだったの」

ゴシャッ！

「これでもう起き上がれんじゃろ」

『これは、これは圧倒的だーっ！勝負にすらなっていない！イロモノだらけの今日の試合を振り返ってもこれほど訳の分からない試合は無かった、そう断言できる程に圧倒的強さで瞬殺してしまったーっ！！』

…酷いわね…大臣にちょっと同情しちゃうわ…

『これで王決めの儀は全試合終了！テメエら、今日は祭りだっ！朝まで飲んで、騒いでリリー様の完全勝利に酔いしれろーっ！』

王決めの儀って…お祭りのコトだったのかしら…

「さて、シフルネ、大臣達を地下室へ。これがそれぞれに課す罰じゃ」
「わかりましたわ。では皆様こちらへ」
沈んだ様子で大臣達がシフルネに連れて行かれた…リリーが渡した封筒の中身…
「罰なんてあったのね…」
「うむ。これが、魔王に挑んだ者の末路…じゃが奴らはそれ相応の覚悟を持ってわらわに挑んだのじゃ。こうなる事は分かり切った事じゃった…」
リリーも…辛いのかしらね…
「魔王様、皆が待っています。そろそろ」
「おぉ、スマンの…」
…仕方ないわね…
「リリー、後で2人でお祭り見に行きましょう」
「…イトハ？…うむ！行ってくるのじゃ♪」
やっぱり、まだ子供ね。あんなに嬉しそうな顔されたらやっぱ無しなんて言えないわよ。
「イトハ殿、有難う御座います」
「いいわよ、これくらい。それに、これはリリーへの御褒美だから、テッタが気にするコトないわよ？」
「それでも、感謝したいのです。某には、魔王様の気を和らげる手が無いですから…」
テッタらしい優しさだと思った…リリーのコトをホントに考えてる、そういう表情…
「後で、魔王様と共に地下室にお越し下さい」
「…イイの？」
リリーにとって、イイコトなのかしら？
「大事な事なのです。魔王様にとって…とても」
「…わかったわ」

ふぅ…今はお祭り楽しみましょう♪

「ふぅ、楽しかったのじゃ。ぐふふ、まさかイトハから誘われるとは思ってもみなかったのじゃ」
「ハイハイ…はぁ」
何か心配したのが馬鹿みたいだったわ…結局お祭りの最中ずっとご機嫌なままだし…心配して損したわ…
「さて、イトハ」
「なによ？」
ちょっと不機嫌な声になっちゃったわ…
「今から、城の地下室に行くのじゃ」
…まさかリリーから言ってくるとは思わなかったわ…
「…分かったわ」
リリーが何やってようと、私は…

「お待ちしておりました、魔王様」
「うむ。中はどうなっておる？」
「手筈通りです」
「そうか。御苦労じゃったな」
地下室前でテッタと何かを確認してる…いよいよ、ね。
それにしても…『うわぁ…』『やめてくれぇ…』『私が悪かったぁ…』…扉越しに聞こえる悲鳴…覚悟なんてトックに出来てるわ！
「では、参りましょう」
ギィィィィ…
鈍い音をたてて扉が開く…悲鳴はハッキリと聞こえだす…
シフルネと…シフルネに似た同じく黄髪縦ロールの大人の女の人が後ろ手に縛られたシフルネの父親の前にいる…
「首尾はどうじゃ？」
「リリー様、わざわざ来て頂かなくても」
「そうもいかん。これはわらわの義務じゃ」

「そうですわね…では私は続きが有りますので」
そう言ってシフルネは父親に向き直り、
「貴方如きがリリー様に楯突こう等と、生まれ直してもまだ分不相応なのよっ！」
「お父様如きに屈する様な方にこの私が仕える等、天地が逆さに成っても有り得ません！！」
「お、お願いだっ！これ以上っ」
「お黙りなさいっ！貴方に発言権は有りません！息をする権利すら勿体無いのですから口を開く等言語道断です！！」
2人で罵倒しまくっている…何コレ？しかも女の人はスッゴイうっとりした顔してる…ドS？
「テッタ、何コレ？」
「敗者への罰です。シフルネ殿の父親には娘と妻から一晩罵倒され続けて貰う事になっています」
…率直な質問に率直に返された…罰ってコレっ！？てか似てると思ったら親子なのね…
「シフルネ殿の御母上は大層サディスティックな方と有名でして…好きな人にはその性癖がより顕著だと」
…好きな子苛めちゃうって、小学生じゃないっ！
「……他の人の罰ってなんなの？」
部屋はカーテンで仕切られていて見えないがシルエットを見ると同じように縛られているみたいなのよね…
「うむ、そうじゃな…」
『『『平和が1番！争いなんてやめようっ！』』』
「や、止めろ―っ！俺にそんな言葉聞かせるな―っ！」
…確かにバトルマニアの遊撃隊長には辛いでしょうね…
「坊や、可愛い顔ねぇ。お姉さんチョットいけない気分に成っちゃうわぁ」
「こっ、来ないでっ！コッチ来ないでっ、触らないでぇっ！」
「うふふ、泣きそうな顔も可愛いわぁ」

「じゃあ、オジ様。私達もそろそろ楽しみましょうか？」
「何の冗談だっ！おいっ、止めろっ！ズボンに手を…何処を触っている！離れろっ！」
…どうしよう…見てないのにどんな状況か簡単に分かるわ…
「……アホクサ」
「はっはっは。これが魔王に歯向かった者の末路じゃ」
「…さっきの暗い表情は何だったのよ？」
「イトハを祭りに誘い易くするためじゃ。皆にも協力して貰った。結局イトハから誘われたし結果オーライじゃ！」
「イトハ殿、王決めの儀は毎回この様な結末ですから、あまりお気になさらず。彼らも三日もしたら仕事に復帰させられます。それまでは少々休息を必要としますが…」
…何か…もうどうでもい～わ～……

2日後、城の廊下にて
「おや、リリー様の嫁…確かイトハとか言いましたか？」
「げっ、アンタは…」
「はい、魔界病院の院長です。お久しぶりですね？」
「2日は久しぶりじゃないと思うわ……アンタは地下室にいたの？」
「はい…目の前に指を切った方が居たのに、縛られて何も出来ず…おっと、いけません。思い出したら悔しくて涙が…」
って血の涙じゃないっ！どんだけ悔しかったのよ！
「もう治療したくて治療したくて、3日と言わずその日から復帰してしまいました。全く、リリー様も残酷な罰を与えて下さる」
「……そう、復帰おめでとう」
「有難うございます。機会があれば、是非治療させて下さい。では、定例報告が有りますので、私はこれで」
……あ、ヘレシアのコト聞き忘れた…まぁ、良いわね。平和だし……

女Bは魔界の風習に触れる（後書き）

文字数約３４００
…異常に多くなってしまった上に内容しょうもなっ！

こんにちは～
勢いだけで書いてる気紛れ作者です。
次回からは新章になる予定です。
これからも暇つぶしに診てやって下さい。

男Aの旅、7日目（前書き）

ちょっとミスって前回の話が重複してました…

混乱した方、ゴメンナサイ

さぁイヨイヨ新章開始

では本編どうぞ～

男Aの旅、7日目

Ｓｉｄｅ：男Ａ

隊長達の護衛に就いて7日目。目的地の色彩国家首都、カラーズに到着…したのは良いんだけど…

『では客人、王の間に入られよ』

何故か色彩王とやらに面会する事になりました…何故？

「おぉ、お前達がユビキタスの使者か。此度はよく来たな。そして、」

玉座に座ってるのは若い金髪黒目のイケメン。ただし犬耳…ただし犬耳！大事な事？なので2回言ってみた。いや凄い違和感あるな～。

「その方が噂の紫髪か…俺の側室に成らないか？」

「うぅ～…」

「謹んでお断りします」

ロザリー、王の前で俺を庇うように抱かないの。はしたないよ？

「ふむ、お前の美貌ならば将来的に妻にと思ったんだが…」

「色彩王、少々分かり辛いですが彼は男子です」

「「…は？」」

隊長ナイスフォロー。色彩王の隣にいる妹？さんも初めて口を開いてくれた。第一声がアレでは大分不憫だが…ちなみに特徴は大体兄と一緒。違いは髪が長いくらい。

「うぅ～…ジルは男の子です！」

「ふ、ふはははははは！この様な顔で、男子とは、中々酔狂な…」

いや酔狂って使い方あってるか？

「気に入った。どうせなら妹の婿に欲しいくらいだが…此れはジルとやらが決める事。俺にはどうしようもないな」

「お兄様っ！」

良かった。問答無用で妹の婿に成れとは言われなかった…妹さん顔

赤いけどドッチノ意味？
「坊主、お前やっぱお祓いしてもらえ。幾らなんでもココまでくると呪いと大差ねえ」
狩人黙れ！
「俺は森に戻りますよ。あそこの空気は落ち着きます」
「確かギグの森出身だったか…その歳で恐ろしいな。流石は紫髪か」
さっきから紫髪に拘るな。一体何だ？
「客人には分からない話だったな。紫髪はこの国では英雄の証として神聖視されているのだ」
「百年前の戦争、ですか？」
「ああ。これは御伽話ではない史実でな。あの戦争の際、我が国は滅亡の危機を紫髪のメイドさんに助けられたのだ」
隊長の相槌に色彩王が答えたが…紫髪の何だって？
「俺も祖父から聞いただけだが、実在するのだよ。英雄紫髪のメイドさんは」
そう言えば港町にもカラーズのどの町にもメイドの像が有ったような…
「第2大陸の現存する国の歴史には、必ずと言っていい程にこのメイドさんが出てくる。それも、国を救った英雄としてだ。だからこの大陸では紫髪は幸福と正義の象徴にも成っている。道中で紫髪について思う所は無かったのか？」
「…そう言えば殆どの屋台で割引された」
ついでにトラブルにも巻き込まれたけど…これは言うまい…
「そうだろう。まぁ、各都市の問題に巻き込まれもしたようだが」
知ってやがる…紫髪だから期待されてたのか…迷惑な。
「お兄様、クロスの領主代理が参ったそうです」
ん？近衛兵みたいなのから妹さんが連絡受けてるな。
「ふむ…良い機会だ、通せ」
どうせ紫髪を見せてやりたいとかなんだろうな…
「お久しぶりです、色彩王。服飾都市クロス領より使者として、」

「ふっ、旧知の仲なのだ。堅苦しのは止せ。それよりも今日は珍しい客がいるのだ」
「珍しい…あっ」
「どうも」
この前助けた領主の娘か～…会いたくなかった…
「…ジル」
げ、ロザリーが不安そうにコッチ見てる。ヤメテ、その視線辛いの！軽く手に触れておく。これで少しは安心すると…思いっきり握られた。嬉しいけど痛い…
「4日ぶりですわね…まさかこんなにすぐ再開するとは…っ！」
あ、俺とロザリーの手に気付いた。あんま暗い表情されると困る…相手はもっと困ってるだろうけど…
「何だ、知り合いだったのか…しかしユビキタスの使者をあまり長時間拘束も出来んな。無理に呼び出してしまって済まなかった。本日の謁見はこれまでとする。明日は特別な客人を招いての祭りが有る。時間に余裕が有るのなら見ていってくれ」
「勿体なき御言葉。では本日はこれにて失礼します」
隊長と色彩王の計らいで謁見は終わった…色彩王気を利かせて俺達を離してくれたみたいだな。空気の読める王って良いな～。
疲れたし明日の祭りに備えて宿行こう…

Ｓｉｄｅ：神祖
やっとベットだ～♪
……さっきの女の子、クロスでジルが助けた子だった…
「ロザリー、着替えた方が良いよ。服に皺付いちゃう」
宿にいる時はジルと同じ部屋にして貰ってる。子供同士だし問題は無いって思われてる。それはそれで悔しいけど…問題有ったら…／／／
「うん…ジル浴衣？」
「？うん。アレが1番楽だしね」

顔赤く成っちゃったの怪しまれてるよ～
「えへへ、じゃあ私も♪」
「はい、帯は新しくいておいたから」
「ありがと～♪」
こんな時、アタシが話すまで待っててくれる…ちょっと物足りないけど、だから一緒にいられる。アタシは自分が神祖だって隠してるけど、ジルも何か隠してる…ちょっと寂しい…でも、話したら、多分一緒にいられない。
「ふぅ、まさか王様に呼ばれるとは思わなかったね？」
後ろ向いて着替えてる。自分が着替え終わってもアタシが終わるまでは向こうを向いたまま。あ、ちょっと背伸びたかな？
「うん…ジル、あの女の子って、」
「あ～、うん。服飾都市で俺が助けた子。まさかこんなに早く再開するとは…」
やっと着替え終わった…ジルはあの子のコト…
「なるべくなら会いたくはなかったな～」
「え？…どうして？」
可愛い子だったのに…
「…秘密」
「何でよ～、教えてよ～」
でも…ちょっと安心したような…
「……だって、運命だと思われても、困る」
珍しく教えてくれた。普段なら、聞いてもはぐらかされちゃうのに…
「あの子が俺に興味を持っても…応える気、無いから…だから会いたくなかった…期待させたくなかった…」
「…ジルは、優しいね」
「どうかな…イトハと戦ってる時に言ったけど、相手を傷つけるのは覚悟してるんだ。だからあの子を傷つけるのはいい…でもそれで自分が傷つきそうなんだよね～」
最後はちょっとふざけたような言い方だった…無理してるのかな…

「あ、グレゴリウスさんからの依頼」
あ、そう言えばお手紙、カラーズに着いたら読めって言われてた。
「…今からでも間に合うかな?」
「とりあえず読んでみよう」
ジルが鞄からお手紙を出して広げた。え~と…
『虹鉱石、純銀を買って来い。量は店主に言えば分かる。
追伸。土産はカラービーンズしか認めん』
……カラービーンズって
「カラービーンズってあの駄菓子?…キャラに合ってねえ…」
そうかも…ぷっ♪ホントは家族用かな?グレゴリウスさん、見た目と違って優しいな~♪
早く、ジルと森に戻ろうっ!

男Ａの旅、７日目（後書き）

ミスが有ったので修正しました
まさか大陸の番号ミスするとは思ってませんでした……

女Ａの隠れ里開放と男Ａの眠気（前書き）

ようやく女Ａが他の人と絡みます

女Ａの隠れ里開放と男Ａの眠気

Ｓｉｄｅ：女Ａ

『では客人、王の間に入られよ』

う～緊張する～…

「ほう、本当に緑のエルフだな。改めて、色彩国家カラーズにようこそ。歓迎しよう」

村長、シオン君、村長候補の２人に続いて入っていく…王様イケメン！

「ほっほっ、有り難い。色彩王の寛大さに感謝しますじゃ」

「いや、我が国の服飾都市は１００年前はお前達に服用の生地を頼んでいた、いわば俺達とお前達は同胞だったのだ。あの戦争が無ければ、今でも…」

「過ぎた事ですじゃ。当時はこの国だって危機に立たされておったのです。今はただ、古き同胞の再開を喜びましょう」

村長さんから村の歴史を聞いた後、村の皆と相談して村の外と交流を行うコトになった。んで、１番近くて昔は交流もあった色彩国家カラーズに鳥を使って手紙を送ったら見事に返事が来た。とにかく会ってみなければどうしようもないので、日取りを決めて王様に会いに来た。

街の中でかなり注目されて恥ずかしかった…

あと、エルフって全部で３種族いるみたい。光のエルフと闇のエルフ、ラルフとダルフって言い方も有るみたい。多分ライトエルフとダークエルフの略かな？

「何はともあれ時代を超えた再開だ。もてなしはさせて貰う。明日から祭りだ。楽しんでいってくれ。金に関してはこちらで有る程度工面しよう。

それと手紙で伝えた通り、お前達の独自の服等を提供してくれると助かる。この国の芸術は少々息詰まっていてな、皆新しい刺激を欲

している」
「芸術にそこまで心血を注げるのは国が豊かな証拠ですじゃ。喜んで提供しましょう」
話は纏まったみたい。それにしても、お祭りかぁ～
「クリス、涎拭け」
これはお見苦しい所を／／／

次の日、お祭り当日。
村長候補2人と村長さんは親睦イベントに出なきゃならないからってお城に行っちゃった。お祭りは私とシオン君の2人で見て来るコトになった。これってデート？
「ジルー、お祭りだよお祭り♪スッゴイよ～♪」
「ロザリー、待って引っ張らないで…」
中の良い姉妹か、な…あの服って…
「お、お嬢ちゃん達！その服ドコで買ったの！？」
あ、服屋の店員さんが詰め寄ってる…
「ジルが作ってくれたんだよ～♪」
「ええ！このチッコイ嬢ちゃんがっ！」
「俺は男だ…ふあぁ～…眠…」
「も～、昨日は早くに寝たのに～」
「（だってロザリー最近胸が…）」
う～ん…
「クリス、別に止めやしねえよ」
「シオン君…うん！」
やっぱりバレちゃったか～♪
「オジサン、お祭りなんだから仕事はお休みしなくっちゃ！この子達もお祭りに参加出来ないよ？」
「えっ、あぁ、だがなぁ～…」
「この服の作り方なら服飾都市で公開してるからそのうち分かるよ。もしくは…はい、このメモがあれば平気でしょ？」

袖からメモ帳出してサラサラ何か書いて渡してる…用意のイイ子だな～

「あ、ありがとよ嬢ちゃん！最近新商品が思い付かなくて困ってたんだよ～！本当にありがとな―っ！」

走っていっちゃった…速いな～

「だから俺は男だって…お姉さん達、ありがと。あのまま質問されてたら祭りが終わっちゃう所だったよ」

「お、礼儀正しい坊主だな。俺はシオンだ」

あ、シオン君何もしてないじゃん！

「私はクリスって言うの、ヨロシクネ～♪」

「俺はジル。何度も言うけど男！」

「アタシはロザリー、この服はジルが作ってくれたんだ～♪」

ジル君の方は面倒臭がりかな？ロザリーちゃんはマイペースな子？

「2人は姉弟なの？」

両方とも美少女なのよね～♪似てないけど…

「違うよ～」

「俺はロザリーに拾われたんだ。今は2人で暮してる」

あれ？

「何か俺達みたいだな。クリスもジルと同じようなもんだ」

「お仲間だ。それにしても…2人が祭りのメインのシルフ？」

「私達がお祭りのメインの種族なのは当たりだけど…シルフって？」

「緑のエルフのコトなんだって～♪グリフって案もあったんだけど…え～と…」

「風の精霊の名前にあやかってシルフって呼び名に成ったみたい」

ロザリーちゃんのうろ覚えの説明をジル君が引き継いだ。ジル君の方が年下っぽいのにシッカリしてるな～

「へぇ、でも一々光のエルフとか面倒だしその方が良いかも♪」

「だな。帰ったら村の皆にも教えてやろう」

「あ、じゃあ今日は一緒にお祭り周ろう♪」

ロザリーちゃんからお誘い。ジル君は特に何の反応もしてなくてロ

ザリーちゃんに全部任せる気みたい…男の子なら女の子のエスコートくらいしなくちゃダメだよ？
「じゃ、そろそろ行くか」
「「おーっ♪」」
しゅっぱーつ♪

Ｓｉｄｅ：男Ａ
まさか祭りの主役と一緒になるなんて…また何かイベントに巻き込まれるのかな？
…それにしても…
「「おいし～♪」」
この２人姉妹なんじゃないの？屋台で買った揚げパンを同じ表情で頬張っている。
「おいジル坊、あの２人…」
「いいんです、あのままで」
下手に絡むと碌な事にならない。極力自分達だけで楽しんでいてもらわないと…シオンは俺の事を『ジル坊』と呼ぶことで落ち着いた。何故アニキキャラ…まぁアニキな年齢差だけど。ちなみに俺とロザリーが２人を呼ぶ時は『シオ兄』『クリ姉』に成った。
「ジルも食べないの？」
「う～ん、じゃあ何か…ロザリー、口の周り…」
「へ？うわ～…」
「ふぅ…動かないで。今拭くから」
「ん～…」
袖に入れてたハンカチで口の周りの油を拭いてやる。１３歳でこれってどうなんだ？
「…シオン君私も～」
「いや自分で拭けよ…」
「え～」
しまった！どう見ても俺達バカップル…って中の良い姉妹にしか見

えてないか…さっきからシオンが1人身男からの嫉妬の視線で居心地悪そうだし。
「ロザリーちゃんはジル君とラブラブだ♪浴衣もお揃いだし」
浴衣って言った…この人もしかして…
「ふえっ！ジル、拭くのもうイイから…」
ふむ…これはこれは♪
「まだ拭けてないよ、ほら暴れないで」
つい苛めたく成っちゃったんです…
「アラアラ～♪」
「ジル坊…」
ふむ、拭けたな。抱くようにガッチリ捕まえたからそれほど抵抗されなかったし、させなかった。ロザリーの顔真っ赤だな～。正直俺のダメージも少なくないけど…眠気であんま気にならない。
「ロザリーちゃんは愛されてるわね♪」
「うぅ～…ジルのせいで～…」
ちょっとヤリ過ぎたかな？まぁ、
「嬢ちゃん達、俺らと遊ばな～い？」
「お兄さん達何でも奢っちゃうよ～」
良くなかった…またかよ…数は5人で全員鱗の有る獣人か、多いな。
「シオン君…」
「下がってろ。悪いな、俺の連れなんだ。他を当たってくれ」
おお、シオン漢だ。クリスも満更でもなさそう。
「ウッセエなぁ、引っ込んでろよ！」
ガシッ！
「なっ！」
殴りかかってきた男の拳をシオンが正面から掴んでる。スゲー、眠気覚めちゃった。
殴ってきたしやり返しても良いよな？さっさと片付けよう……

女Ａの隠れ里開放と男Ａの眠気（後書き）

最近、最初のころと比べると文字数が増えてます…
どの話も２０００文字前後の予定が今じゃ２５００文字が当たり前に！

まぁ、誰も困らないしいいや～

女Aと男Aは食事会に出る

Ｓｉｄｅ：純情少年

たく、外の国はやっぱり危険だったな。祭りだってのにこんなヤツらに…

ゴンッ、ゴスッ、キーン！

「顎、腹、金的。さてあと2人」

…あ？

「ジル、ファイトー♪」

「はいはい」

「…ジル坊、何してんだ？」

「悪漢退治」

「ジル君！危ないから、ロザリーちゃんも止めて！」

「大丈夫だよ～、ジル強いもん♪」

強いからって…

「このガキ、」

ズドン、ガンッ！

「鳩尾、脳天。これで終わりか。さ、祭りの続きだ。ロザリー、何見に行く？」

「あっちのパチンコ♪」

「んじゃそれで」

「ちょっと待って2人とも！」

クリス、よく止めた！

「私もやりたい！」

「そっちかよっ！ここは年上として危ないから止めろって注意する所だろうがっ！」

「あ～、普通ならそうなんだろうけど…俺もロザリーもギグの森で暮してるからあれくらいの相手は…」

…ギグの森、だと？

「ギグの森って、確か大陸の北と南を隔ててる霧の中の森のコトだっけ？」
「あ、知らないのも無理ないか。うん、森の中の魔獣は強いから今のじゃ準備運動くらいにしかならないんだ」
「へ～」
「…お前ら、本当に…ギグの森で暮してるのか？」
「うん♪ジルは住み始めて2ヶ月くらいだけど、1人で狩とかしてるよ♪」
…嘘、だろ…
「シオン君？」
「ギグの森って言ったら、魔神の巣窟、冥府への門、福音の聞こえる森、他にもヤバい呼び名が付きまくってる、御伽話の勇者でも理由も無しに入るのは躊躇うような危険地帯だって聞いたぞ…」
「護衛してる騎士達にもそんな反応されたな…」
「森の中と外は違い過ぎるからね～♪」
「普通の魔獣みたいにドラゴンが闊歩してるような土地だって話も有るし…」
「見た事有る？」
「それは東と西の端っこの話だね～。アタシは見た事ないよ～」
「…一応本当なんだ…」
「ちょっと待て！お前ら2人暮しだって言ってたよな？子供だけで生きていけるような場所じゃないって、」
「まぁ、俺達くらいだよ、子供だけで暮してるのは。他の人達はデカい屋敷みたいなので固まって暮してるし、住人が増える時に増築してるって聞いた」
…マジかよ…そりゃ街のチンピラじゃ相手にならねえ筈だ…
「あ、居た居た、シルフの御2方」
ん？城の兵隊？
「今晩の夕食は少々盛大なモノに成るので、服の採寸等を行いたいので1度城に戻って頂けますか？特別な御客様も呼ぶ予定だと王も

言っておりました」
盛大って、堅苦しいのは苦手なんだよな…
「仕方ないね。ロザリーちゃん、ジル君、またね？シオン君行こっ！」
「またな、どっかで見かけたら声くらい掛けろよ」
「「はーい♪」」
あ？ジル坊が悪戯思い付いた様な顔してんな…

Ｓｉｄｅ：男Ａ
行っちゃったか…笑いこらえるの大変だったな…
「晩ご飯楽しみだね♪」
「俺は厨房に来てくれって言われてるからちょっと面倒…」
「えへへ、ジルがどんなの作るか楽しみにしてるよ♪」
「はいはい。あの２人が驚く様なモノを作ってみるよ」
「うん♪楽しみだねっ♪」
さて、何の話かと言うと、２人が呼ばれた夕食に、俺達ユビキタス組も招待されているのだ。そこで俺はシスターが『ジル君は面白い料理を作るんですよ』って言いふらしたせいでデザートを１品作る事になってしまった…シスターめ、隊長に惚れてるってバラしてやろうか…
まぁ、嫌々ながらＯＫした理由は、
「ジル、どんなの作るのかな～♪」
この涎垂らしに頼まれたからだったりする…俺ってお人好し過ぎる…
まぁ、厨房に呼ばれてる時間までまだ有る。それまではロザリーとのデートでも楽しもう。

「疲れた…」
「お疲れ様～、大変だったね♪」
厨房に行って、俺がどんなの作るつもりかラルフのシェフに伝えた所、よく分からんと言われてしまい自分で作る事に…そして試食し

たシェフ達に捕まりレシピを教え、何故か夕食と言う名のパーティー用の飯作りに付き合わされ、パーティーが始まる直前にようやく解放された…俺客だぞ？ちなみにデミグラスソースを教えてあげたらかなり感謝されて、夕食のメニューに急遽ハンバーグが追加された。

その後、着替えようかと思ったら更衣室に色彩王がやってきて俺の浴衣見るなり『服そのままで頼む』なんて言われた…多分ロザリーも同じだろうと思ったら普通の黒いけど可愛らしいドレス…なにこの格差…ただし服に関しての周りの関心は俺への方が高い。またかよ…

てかパーティーって立食パーティーかよっ！どこのセレブ…王族主催だったな…

「ジルのスーツ姿も見てみたかったな～」

「まあ色彩王に言われたんなら仕方ない。それに坊主はその方が似合うだろうしな」

「でもロザリーちゃんとお揃いのジル君も見てみたかったですね。きっとお似合いです♪」

「でもほら、坊主狙いの女の子、結構居ますぜ。皆坊主見てら」

興味無い人から熱い視線向けられてもウザい…

「ジル様、色彩王がそろそろ来てほしいと」

執事長が直々に伝言とは、ちょっと驚いた。実はこの後のデザート発表用に俺は途中で会場を抜ける事になっている…まぁ、服と食べ物で見世物にするつもりだったんだろうな…

さて、シオン達を驚かせようか…

Ｓｉｄｅ：女Ａ

まさかこの世界でデミグラスソースのかかったハンバーグが食べれるなんて…感動！

「この、ハンバーグだったか？スゲー美味めえな！」

「う～む、レシピ聞けんモノか…」

シオン君も村長さんも村長候補達も食べ物に釘付け…まぁしょうがないよね♪

『では本日のメインディッシュ、デミグラスソースのハンバーグとこれからお出しするデザートを作った3人のシェフを紹介します！』

え、シェフ?後でレシピ聞かなきゃ！やっぱり頑固一徹みたいなオジサンかな?それは話しかけ辛そうでヤダな～…

『ではどうぞ！』

舞台袖から出てきた！お～、1人目はイカツい…2人目は優しそう♪…3人目は、アレ?背低いし…浴衣、って！

『3人目のシェフは偶然我が国に来ていたユビキタスの少年です！もはや料理界では伝説と成ってしまっているデミグラスソースの製法を何の躊躇いも無く伝授してくれました！』

…ジル君！?

「あれって、ジル坊だよな?」

「うん、どうみても、そうだよね…」

「クリ姉～♪」

このマイペースな声って…

「えへへ～♪ジル見てビックリした?」

ロザリーちゃんまで…何で?

女Aと男Aの話題（前書き）

ＰＶが３万突破♪
見に来てくれてる方々、
ありがとうございます

女Aと男Aの話題

Ｓｉｄｅ：男Ａ

ふぅ～、やっと舞台から降りられる。あ～肩凝った…

「お帰り、ジル～♪」

うおっ！横から急に抱きつかれると危ない…

「ただいま、ロザリー」

「全く、見せ付けてくれるな」

「お疲れ様、ジル君。シェフとして出てきた時はビックリしたよ～」

舞台から見てたけど中々驚いてくれたようだった♪

「ジル坊、お前こうなる事最初から知ってたな？」

「あ、バレた？」

「別れ際に悪戯小僧みたいな顔してたからな」

「ジル性格悪～い♪」

ロザリーって俺の事実は嫌いじゃない？

「おう、坊主。大活躍だったな」

「ジル君、ごねんね？まさかこんな事になるなんて思わなくって」

「隊長さんにシスターさん。意外と楽しかったから気にしないで」

「お、この人達が？」

「うん、シルフのシオンさんとクリスさん」

「よろしく、俺はこの子らに護衛されてるユビキタスの使者、その隊長やってる」

「よろしく、街で絡まれてなかったら子供に護衛させてるのかよっ！って怒ってる所だったよ」

「おいおい、坊主。お前また絡まれたのか？」

「これで何回目だったかしら？」

「覚えてねえ…」

「ジル坊、お前トラブルメーカー？」

失礼な！

「どの街に行っても必ずイベントあったよね♪」
「悪徳領主捕まえろなんてのも有ったな」
「ジル君目当ての誘拐も有りましたし…」
どうしよう、外堀が完全に埋まってる…
「ジル坊、悪い事は言わねえ。お祓いして貰え」
「ジル君、流石にもうちょっと静かに暮らそう？」
全部俺は何もしてないから！トラブルが向こうからやって来てるだけだからっ！
「はぁ…そう言えば狩人さんは？」
「誤魔化したな」
「誤魔化しましたね…隊長、アッチでナンパしてます」
「…捕まえるぞ」
「…はい」
いってらっしゃい♪
「お～い、シオン、ちょっとコッチ来い」
「ジジイ、分かった。じゃ、ちょっと行ってくる」
「アタシもハンバーグ取ってこよ～♪」
皆行っちゃったな…
「ねえ、ジル君？」
ん？
「君のその服とかデミグラスソースとかって、ドコで知ったの？」
来たか、これでクリスは『向こうの世界の人』確定だな。
「う～ん、実は俺、ロザリーに拾われるまでの記憶無くて。服は自分で着やすいのを作っただけで、デミグラスソースは思い付きで作ったら周りの人が名前教えてくれただけなんだ」
うわぁ～、苦しい言訳…こりゃ怪しまれ、
「そうだったの…」
…瞳に涙溜めてるよこの人…
「実はね、私シルフじゃないかもしれないの…」
多分神様に最適化とかでシルフにされたのかな？

「村の近くでシオン君に拾われて、偶々シオン君達と同じ特徴だったから村に入ってもイイって言われたの。
シオン君達には『何にも覚えてない』って言ってるんだけど…本当は…」
「別に無理に話さなくても良いんじゃないかな？」
「え？」
何かキョトンとされた…てか俺に何話すつもりだった。記憶喪失同士仲良くしましょとか？
「無理に話して一緒に居られなくなっちゃうより、話さないで一緒にいる方が、皆幸せって事も有るんじゃないかな？」
事実ロザリーは俺に言いたくない事が有りそうだ。種族の話や奴隷の話題は、なるべくしたがらない。歴史の話も嫌ってるからその辺に関係あるんだろう。無理に聞く気もないし、聞いても一緒に居るだろうけど。
「……もしかして…慰めてくれてる？」
「さぁ？ほら、パーティーの主役なんだから動かないと。いざって時はシオ兄が守ってくれるんだしさ」
さっきから男達がクリスに話しかけたくてウズウズしてる。まぁ、クリスとシオンは両想いっぽいから、男達ザマァ♪
「…あ、あのっ、ジル様！」
へ？

Ｓｉｄｅ：神祖
ジルのハンバーグ、ハンバーグ♪あ、野菜もちゃんと持ってかないと。
さっき追加されたジルお手製のジェラートは物珍しさもあってすぐに無くなっちゃった…帰ったら作ってもらおう♪
それにしても…
「ユビキタス兵の護衛をなさってるのですか。若いのにお強い。ぜひ我が家の…」「その歳で魔具を作るとは、どうです？私の…」「

可愛らしいお嬢さん、今夜は僕と…」
…皆しつこい…速くジルのトコ戻りたい…
「ロザリー」
「え？ジル？」
「遅いから心配したよ。それと食べたがってたジェラート。厨房の人達が手伝ってくれたお礼にって」
そう言ってアタシに声を掛けてた人達を遠ざけた。
「ありがと～♪」
ホントはアタシが困ってるから無理矢理話しかけてくれた…ジルの性格なら、やりそう…
「ジル様、そちらの方は…」
「ああ、俺が待ってた人。ロザリーって言って、一緒に暮してるんだ」
「…そうですか」
ジル、誰かな？
「ロザリー、テラスに行かない？…速くココ離れよう」
最後は小声でアタシにしか聞き取れないくらいの声だった…もしかして…
「うん、行こっ♪」
テラスに移動。ジルがお姫様にするようにアタシの手を取ってるから誰も話しかけてこない。ジルと一緒にいた女の子に睨まれてるよ～…何かヒソヒソ話してる？
「上玉ですな…」「しかし紫髪の方は男子とか…」「では1人占め？」「まだ少年ですから社交の場の常識など…」「可憐な少女を1人占めにするのはいくら幼くても…」
…／／／
「せっかくお話しできる機会を…」「しかた有りませんわ、同じユビキタスの者同士…」「女狐…」「あのような田舎者に…」「私だってお話したいのに…」
…これはアタシに向けて、かな？

「ふぅ…息の詰る所だね、上流階級の空間って」
「…うん」
「…ね、ロザリー。2人で抜け出さない？」
え？
「いやこれ以上は息苦しくって息苦しくって。もうシオ兄とクリ姉には会えたしさ…
色彩王には悪いけど…ココはちょっと肌に合わなくって」
「…うん♪アタシも、そろそろ帰ろっかな～って思ってた。王様に挨拶だけして、帰ろっか？」
ジルもさっきの聞こえてたんだ…隊長さんや王様には悪いけど…やっぱりココは、アタシ達には合わない…
ガタンッ！
「お待ちください！ジル様っ！」
へ？

女Aは神祖の決闘を見る

Ｓｉｄｅ：純情少年

ガタンッ！

この音、テラスの方か。

「お待ちください！ジル様っ！」

ん？ジル坊ってことは、またなんか絡まれたのか？

「この後にはダンス等も残っているのです！それに参加もせずに、」

「参加するしないは俺の自由だろう。それに俺はダンスなんて見た事もないんだ。参加してもどうしようもないだろう？」

「なっ、なら私が教えます！」

「いや、正直気分が優れないから休みたいんだけど…んな無理矢理誘われても…」

何かボソッと呟いたな。しっかしアイツには驚かされてばかりだな。今日知り合ったばかりなのに、もうイベント３つ目か。

「で、でしたら、城の休息室で私が、」

「宿の人に今日は戻るって言ってあるしな。明日にはこの街出るから早めに休んでおきたいし」

あ～、帰りも護衛しなきゃなんねえか。アイツ居ない方が平和な旅になるんじゃ…

「くぅ～、その女ですか？」

「…はぁ」

「その女と居たいんですね！？」

おいおい、流石にこの流れは、

「シオン君、どうしよう…」

クリスか…どうするったって…

「貴女、貴女にジル様を賭けて決闘を申し込みますっ！！」

「…受けて立つよ！」

「ロザリー！？」

…マジかよ…

「何で誰も止めないんだよ～」

「お前とロザリー目当てのヤツが多いからだろ。あわよくば自分が誘おうとかって思ってんだろ？」

「はぁ～…もっと早く城出れば良かった」

どんだけ嫌いなんだよ…しかし…ジル坊の姿…ぷっ…

「笑わないで…」

「ジル君、何でラッピングされてるの？」

クリスも笑いこらえてる…何か、ジル坊はリボンで綺麗に飾り付けされて、胸の所に『お好きにど・う・ぞ？』と書かれてる…センスねえ…

「ではこれより、決闘を始める！相手を殺すのは無し、相手を先に気絶させた方が勝ちだ。勝った方がジル少年を自由に出来る。両者、準備はいいか？…では、始めっ！」

色彩王の掛け声で急遽用意された円形舞台の上の両者が動いた。ロザリーに挑んだのはラルフの少女。肩くらいまでの金髪を邪魔にならない様に結って、レイピアでロザリーに突っ込んで行く。対してロザリーは銀の杖でレイピアを弾く。

少女が目を見開いてる。今まで止められた事無かったのか？

「ロザリーちゃん、大丈夫かな？」

「平気だよ。あの程度なら、森の狼の方が全然速いし、重い」

ロザリーの事をよく知ってるジル坊は、むしろ時間無駄だと言わんばかりに面倒臭そうだ。

「おいおい、もしロザリーが負けたらお前あの子の言いなりだぜ？」

「俺はＯＫしてないよ。だからどっちが勝っても宿に戻るだけ」

「…ジル君」

「ジル坊、お前性格悪いな…」

「人の意見を聞かない方が悪い」

…もっともだな。

「それに、俺はむしろ少女の方が不安だけど…」
「は?そりゃギグの森出身に勝てる訳ねえけど…」
ゴンッ！
何か凄い音した…
「ロザリーちゃん、容赦無い…」
「ロザリーって、狩の時とかちょっとやり過ぎるから…」
一応顔には攻撃してないが…少女はあちこちボロボロだ…
「かはっ！」
「まだやるの?」
「あ、当たり前ですっ！」
根性有るな…また正面から突っ込んでる…
「こんにちは」
「…いたの?」
「ええ、面白い事になりましたね?」
「俺は面白くない」
「…ジル君、その人は?」
いきなり後ろから出てきたのは…あ、こいつは、
「私は服飾都市クロスの領主代理です。この場ではクロスと御呼び下さい」
「俺が服飾都市で助けた人」
「…ジル坊、お前どこで何してんだ?」
「気にしないで。それより今は決闘だよ」
気に成るって…まぁ言う通りなんだが…
「ロザリーさん、お強いですわね」
「ギグの森に住んでるからね。問題は…加減してもやり過ぎに成っちゃうって事」
あれで加減してんのかよ…少女の攻撃掠りもしてねえぞ。
「でもこれじゃあ、あの子が…」
「場外にしたら勝ち、とかだったら良かったんだけどね…生憎ダウンしてなければ戻れるし」

ちょっと見てらんねえくらいだ…ロザリー容赦無えな
「よう坊主、嬢ちゃんは…あ～やっぱりか」
隊長にシスターに…ナンパしてた狩人か？
「美しいお嬢さん方、可憐な少女達の舞踏会よりも、綺麗な星空を見に行きませんか？」
クリスとクロスにナンパしてる…あ、無視された。
「ふぅ、しょうがない、かな？」
「あ、皆目細めて」
ん？
「フレアッ！」
ゴウン！
…全然見当違いの位置にロザリーが魔法を使った…けど…
「何だ、あの威力…」
見栄えだけじゃねえ、凄い密度の炎の柱…アレ人に当たったら骨も残さず灰に成るぞ…
「さっさと降伏しろって事でしょ。これ以上向かっていってもあの子が可哀相だし」
「……参りました」
「勝者、ロザリー！」
どっちかって言うとジル坊の言葉が止めじゃなかったか？
「ジル～、勝ったよ～♪」
「おめでとう♪」
「うん♪」
「……2人はホントにお熱いね♪」
あ、クリスのヤツ流したな！周りのヤツらは皆怯えてんのに
「いやー、おめでとうロザリー嬢。そしてジル少年、ちょっと頼みが有るんだ」
色彩王？だけどジル坊はもう帰るって、
「俺と決闘してくれ」
「「「……はぁっ！？」」」

驚いたのは俺、クリス、クロスの3人、と今の話が聞こえてたヤツ全員。ジル坊は何か悟った風な表情で「分かりました」、ロザリーは「も～、早く帰りたい」…お前ら…もうちょっと慌てろ。

「確かに、女性陣はロザリーに何も言わないでしょうけど、男性陣は俺に言いたい事も有るでしょうからね…この決闘、受けます」

あ、確かに、あんだけの魔法見せ付けられたら何も言えねえけど、ジル坊はまだ何にも見せてねえ。髪の濃さから魔力が高くねえのはわかるけど…何でアイツ、一目で分かる程の低魔力なのにギグの森で暮せるんだ？

「察しが良くて助かるよ。ロザリー嬢は武器を預けていたが、君は？」

「ご心配なく」

そう言って手を振って体の前で交差させるとグローブと脚甲が装備された状態で出てきた。お前何者だよ…

「くっくっく、準備は万端と言う事か。では、始めよう。シルフの村長、お願い出来ますか？」

「かっかっか、分かりました。見届けさせてもらいます」

おいおい、マジかよ…

女Aは神祖の決闘を見る（後書き）

女Aと言うより純情少年が決闘を見てました

戦闘時間は大体１０分ないくらい

神祖が向かってくる少女をあしらい続けるだけなので戦闘描写ほぼなしでした…

男Aは決闘を面倒臭がる

Ｓｉｄｅ：男Ａ

会場中の注目を集めながら舞台に上がる。流石に王に怪我されたら困るとの話で、相手は近衛兵長。よし、兵長と呼ぼう。

やっぱ早めに帰っとくべきだったな～、子供っぽく『眠い～』とか言っときゃ良かった。

「始めぃ！」

お、始まった。兵長の武器は片刃の青竜刀？まぁ、幅広な反りの有る剣だ。手入れ面倒だろうな…

「チェェスト――ッ！」

おわっ！声に驚いてしまったが攻撃事態は危なげなく避けた。このくらいは平気だな。

「ほう、我の渾身の一刀を避けるとは、あの少女と言い、貴様と言い、恐ろしい戦闘能力だ。我が国に欲しい」

「いきなり勧誘か、戦争でもするの？」

「否、だが人間が魔族と戦を起こそうとしている昨今、何時我が国に戦火が飛び火するか分からん。故に我は力を望む」

「断る」

「だろうな、我も無理に誘う気は無い。ただし…」

ん？

「この一戦は楽しめそうだっ！」

来た。今度も避ける…

シャクッ！

……舞台に、切り込み？

はぁ！？明らかに刃の長さ超えた傷跡だぞっ！？魔法でもなかったし何だってんだよ！？

「何だ今の…」

「魔法じゃないの？」

「魔力は感じなかったよ～」
「あれはこの国の近衛兵が皆修練する剣技ですわ」
…もしかして、カマイタチとか言わないよな？
「剣速を極限まで速め、風魔法と同じだけの結果を生み出すのです」
言われました…マジかよ、魔力無しで風魔法打ってるって事か。連発は出来ないみたいだけど…条件俺も変わらないな。なぁんだ～
「風牙」
「ぬおっ！」
へぇ、弾いたか。やっぱり強い人には見えるんだな。
「何だ、貴様のソレは！まさか我と同じ、」
「いやいや、ちゃんと魔法だよ？呪文が短いだけ。爆進」
「ふんっ！」
正面から突っ込んでみたら剣を横薙ぎに振ってきた。とりあえずスライディングで足の間を通過。
「くっ、速い！」
「雷甲」
抜けた先で回し蹴り。コッチ向かずに前に飛んで避けられた。以外だ、このパターン見た事有るのか？
「ホビット族と戦った経験があって良かった。ヤツ等の小柄さには手を焼いた」
あ、小さいのと戦った経験ですか。
どうしよう、この人面倒臭い…普通、こんなに背の低いのと戦った経験の有る人は少なから、身軽さ活かすとかなり楽に戦える。でもこの人にそれは効かなさそう…頑張りたくない…
「ジル～、頑張れ～♪」
うわぁ～、俺が負けるとか微塵も思ってないよ、あの目…頑張ろう…
「行くぞっ！」
また飛ぶ斬撃かっ！左に回避で、
「爆進」
「直進しか出来ん魔法に、」

「追連」
剣を振ってる手の真下に爆発を起こし後ろに加速。爆発で兵長にダメージを与える。
爆進は移動以外にもこうゆう使い方も有る。あまり使わないけど。
「ゲホッ、ゲホッ！まさか下がりながら爆風で…」
解説どうも。右手で腹に、
「雷槍」
「くっ、舐めるなーっ！」
革の鞘抜いて弾かれた。かなり強打されて痛いので、下がって仕切り直し。
まさか剣と鞘で2刀流しないよな？
「ふっふっふ、まさかこのような子供に鞘まで使わされるとは…色彩王に感謝せねば」
わ～、バトルマニアだ～…逃げたい…
「行くぞっ！」
来るなっ！
鞘を投げ捨て、突っ込んで来る。しょうが無い、受けて立つ！
カカンッ、カンッ
斬撃を2度弾き、蹴りを1度弾かれた。雷甲使う暇無かった…
「今の見えたか？」「いえ全く」「近衛兵長と同格？」「あの歳で？」「いや、兵長の方が一撃多かったように…」「そうだったのか？」
お～お～、噂してる噂してる。
「重い。重い、重い重い！ふはっはっは、偶には肌に合わぬパーティーに出て良かった！いや、ここは最早戦場、慣れ親しんだ我の居場所っ！」
演説入っちゃった？
「故に、」
突撃してきた。演説は中止か？
右肩から振り降ろしてきた剣を右手を張り付ける様に流し、勢いの

まま回転し横腹に裏拳を放つ。
ドゴゥッ
「ぐはっ！」
あ、肋に当たった。もしかして折った？
「くっ、ふふ！これだ、これなのだ！城内の訓練では満たされぬ、武と武のぶつかり合い！我が望んだ、我の世界！」
…漫画とかで見る薬キマっちゃってる人みたいだ…
「はぁああ！」
正面からの打ち込み、速い！
シャアァァァッ、パカッ
げっ、舞台の一部が斬り落とされた！この調子じゃ足場無くなるな…短期決戦にしなきゃ、か…
「どうしたっ？避けるばかりで、先程までの攻撃は、」
「氷」
「なっ！」
足の爪先だけ凍らせて前のめりに転ばせた。これで終わりだ。蹴り上げて空中コンボスタート！
「強風暴風台風突風、熱風烈風疾風怒涛！」
蹴りと掌底、肘に拳。魔法ではないけど、とりあえず打撃で地面に落ちない様に滅多打ちにする。
「くたばれっ！風刃絶牙！」
ゴッ、ズシャアッ！
腹にしっかりと体重を乗せた掌底を放つ。ただしこれは魔法。指の先1本1本から風牙が体を這って斬り裂く、俺の魔力量にしてはかなり辛い格闘魔法。
「……近衛兵長、戦闘不能。勝者、ジル少年」
はぁ…会場が凄い事に成っちゃってるな。兵長の飛ばした斬撃は会場の壁まで斬ってるみたいだし。
「おかえり～♪」
「ただいま～♪」

真似してみた。いつの間にか浴衣に着替えて帰る準備万端だ。
「ジル少年、付き合ってくれて有難う。しかし…近衛兵長は平気なのか？」
「死んでないよ。本当は魔獣用の技だから酷く見えるけど、傷自体はかなり浅い」
「そうか。しかし困ったな。これではダンスは…」
「外でやればいい。星空の下で踊るなんてのは、意外とロマンチックだと思うけど」
もう敬語面倒…
「行こうロザリー」
「うん♪」
「あ、ジル坊にロザリー、ちょっと」
シオン？なんだろう？

シオンについていった先は城の中庭。今は誰もいない、閑散とした雰囲気。
「ふふっ、ジル君大活躍だったね♪」
クリスに、あっ隊長達も居る。優雅に茶啜ってる。
「そろそろだ」
～♪～♪～♪～♪
あれ？
「お前が言ってたダンス外でやればって話しな、実は俺達も言ってたんだ。だから今頃、向こうの庭では」
ダンス中、か。城の出入り口はあっち側だから下手したら捕まってたな。中庭と庭は城を隔てているから居場所がバレる事はない。最高の穴場って訳だ。
「ここならいいだろ？」
…はぁ、バレバレか…
「ロザリー」
「…うん♪」

差し出した手にロザリーが応えてくれた。顔赤いよ?嬉しそうだけど…

シオンとクリスも同じようにしてる。シスターも顔真っ赤にして隊長の手を取っている。

とりあえず音に合わせてクルクル回る。お互いの赤い顔を見ながら、時に相手の足を踏んじゃったりしながら。

踊り方は知らないからテキトー。それでも経験者の隊長とシスターの見て、皆少しずつ覚えていった。

何となく思った。

意外と、悪くない。誰にも邪魔されない場所なら、踊るのも悪くない…

誰にも邪魔されない、自分達だけの舞踏会。

浴衣の2人

民族衣装の2人

騎士正装の2人

今夜は三日月。

月夜に照らされ、遠巻きに響く音楽に合わせて、夜は更けていった……

ちなみに、狩人は庭でナンパしたご婦人と良い感じに成ってその日は帰って来なかった…

これで良いのか?ユビキタス騎士隊……

男Aは決闘を面倒臭がる（後書き）

最後はちょっと甘い雰囲気出そうとしてみました
上手くいったでしょうか？

まぁ、しょうも無いオチで台無しな気はしてますが…

女Aは神祖と語らう（前書き）

前回はずっと男Aの話だったので
意趣返しも込めてずっと女Aの話です

女Aは神祖と語らう

Ｓｉｄｅ：女Ａ

舞踏会もそろそろ終わる。シオン君上達速いな～。

思い出すのはジル君が舞台の上でジェラートの話をしたり質問に答えてる時、私とロザリーちゃんだけの秘密のお話。

「私はシオン君に隠してるコトあるけど…ロザリーちゃんも、ジル君に隠してるコト、あるんじゃない？」

今思えば、ただのお節介。私の自己満足…

「へ…何で…」

あんなに動揺するとは思わなかった。

「何で知ってるの？」

口調は可愛い女の子だったけど、目は何かを覚悟した大人のソレだった。だから、

「何となくそう思っただけ。女の勘ってヤツだよ♪」

出来るだけ、何でもないようにはぐらかした…

「…うん…」

ジル君は気付いてるのかな、ロザリーちゃんの隠し事。気付いてなかったら、何か大事なトコで失敗しそう…

「大丈夫。私は何を隠してるのか知らないし、言う気も無い。ジル君なら、ロザリーちゃんの秘密を知っても一緒に居てくれるって♪」

自分に都合の良いコト言ってる気がする…でもロザリーちゃんは嬉しそうに笑って、

「いつか言わなきゃって、思ってるの…でも、怖いの…ジルに知られるの、怖いの…」

笑いながら目に涙を溜めた…深刻なんだ。私とは違うね…

私の秘密は、きっとシオン君達は気にしないし迷惑もかけない。私が1人でウジウジしてるだけ。でもロザリーちゃんのはそうじゃな

い…知ったら、ジル君も傷つくんじゃないかって、そんな話なのかな…

「女の子不安がらせるなんて、ジル君もまだまだだなぁ～」

もう少ししっかり支えてあげなきゃ。

「ジル、アタシより年下だもん」

確かに…3歳差だったっけ…

「それでも、男の子は頑張んなきゃダメなんだよ？」

後でそれとなく伝えてみるかな～

「…ジルは、頑張ってるよ」

そう。ロザリーちゃんは優しいね。

「あ、ジルだ♪」

あ、行っちゃった…

ジル君と一緒に居る時、ロザリーちゃんは幸せなのかな？ジル君にロザリーちゃんが悩んでるって伝えようとしたら、逆に私が励まされちゃったし…気付いてるって思おう。

だって、ジル君はちゃんと自分からロザリーちゃんを誘ったもの。

でも彼、記憶無いとか言ってたっけ…大丈夫よね！

～♪～♪

音楽も少しずつ終わりに近づいてる…正面のシオン君に聞いてみよう…

「ロザリーちゃんとジル君、大丈夫だよね」

…あ、何言ってるのか分からないって顔された。そりゃそうだよね～

「ジル坊はロザリーを守るだろ」

え？

「今日見てて思った。あいつは、何だかんだでロザリーの為にしか動いてねえ。だから、何か有ってもロザリーだけは守るだろ」

…ふふっ♪

～♪…

あ、終わっちゃった…あ、ジル君がロザリーちゃんの手引いてコッ

チ来た。
「誘ってくれてありがと、シオ兄、クリ姉。宿に帰るよりずっと楽しかった♪」
…シオン君の言う通り。この子なら平気だと思う。結局私の心配損か～
「ちょっと男の子達アッチ行っててね。女の子の秘密の話が有るから」
ロザリーちゃんを抱き寄せて、2人には離れて貰う。
「なんだってんだ?」
「さぁ?はぁ～、星綺麗だなぁ～…」
「ジル坊…変なヤツ」
男の子は男の子で話し始めたし、私も言う事だけ言っておかないと。
「ジル君って…」
「いっつもあんな感じだよ?」
「もう少し気にしないのかしら?」
「人の秘密は無理に聞かないんだって♪」
…良い子!ってそうじゃなくって、
「ロザリーちゃんは…ジル君と居て、幸せ?」
お祭りで服屋に捕まった時、街でチンピラに絡まれた時、ジル君が舞台から戻ってきた時、少女との決闘に勝った時、ダンスに誘われた時、ロザリーちゃんはジル君だけを見てた。ちょっと盲目的とも言える程に…だからきっと答えは、
「…まだ、分かんない」
意外…『幸せ』って即答されると思ってたのに。
「でも…一緒に居るの、楽しいよ♪だから…もうちょっと…」
…そっか…
声震えちゃってる…
「ジル君、ロザリーちゃん返すよ」
「はいはい…帰ろう」
さりげなくロザリーちゃんの涙拭いてあげてるっ?結構キザッ!シ

オン君には絶対期待出来ないよ。
「おい、ロザリーに何言ったんだ?ジル坊の動き…まさか泣かせたのか?」
シオン君怖い…
「お姉さん的アドバイスしてあげただけだよう…」
「…程々にしとけ」
「は〜い」
な〜んだ、男の子達は皆優しいね♪
あ、ロザリーちゃんと目合った…ウインクでもしーとこっ♪
あ、笑ってくれた♪
「じゃ、俺達はもう帰るね」
「おう、帰り道、気をつけろよ」
「坊主が居る限り何かしら問題は起こるんだろうがな」
「ジル、帰ったらお払いしに行こうね?」
「ジル君、絶対行って下さいね?」
「…はい」
「ふふっ♪じゃ皆、またね?」
「「またね〜♪」」
ジル君はロザリーちゃんの真似だった…似あってない…プルプル…
「まさか最後の最後で…」
シオン君もツボに入っちゃったみたい…ジル君のキャラであんな可愛いの反則…

女神様は成り振り構わない（改）（前書き）

久しぶりの神様登場です

誤字有ったんで修正しました

Ｓｉｄｅ：女神

「今晩は、ジルさん」

「今晩は、女神様。今日もアレですか？」

そう言ってテレビとゲーム機を指差した。

「はい、アレです。しかし今日は少々変化が有ります」

「追加ルールですか？」

「…いえ…その…」

「（言い辛いなら言わなくてもいいですよ？）」

「大丈夫です。お気遣いなさらないで下さい。これは神として私が言うべき事」

そう、今日は、ジルさんに言わねばならない事が有るのです。態々心の声で言ってくれたその気遣いは有り難いですが、これは私の義務！甘ったれた事は言えません！

「今日から、４人対戦にしようと思います」

「はぁ、まぁ良いですけど…」

首を傾げて困っていますね。無理も有りません。

「では、御２人とも、来て下さい」

シュンッ×２

「よ～う、糞ガキィ。久しぶりだなっ！」

「リ、ア、ル、男の娘、キタ――――――――――――――――――――――――っ！！！」

五月蝿いですね。

「（チャラい金髪ロンゲにオタクなキモデブ）」

「おうおうおう、殆ど初対面だってのに言いたい放題言ってくれるじゃねえか！」

「的確な特徴把握です」

「ちょっ、フリッグっ！？」

「（娘に見捨てられる父親…ザマァ）」
「主神様ザマァ♪」
「今っすぐに殺してやるっ！」
「お父様、本題を忘れないで下さい」
ガスッ！
「ぐはぁあぁ…」
「（哀れだ）」
「哀れだね」
「では改めて。そこで転がっているのが私の父にして神界の長、主神です。貴方をこの世界に落とした張本人です」
「はぁ、そうですか（…）」
相変わらず無反応ですね。心を読んでも興味の無い事が分かる。本当にどうでも良いんですね…
「そして、この気持ち悪いデブが、神の1人、ダルさんです」
「はぁ、はぁ…リアル男の娘…」
「特徴は変態です」
「見た目通りですね」
「ではゲームを始めましょうか」

4人対戦、5試合目
「くっ！コッチはドクロパーツでしかも3対1なんだぞ！」
「ああ！主神様ボムはダメだって言ったっしょ！」
「ダルさん、そこは！」
カシャン、ボンッ！
お父様の爆弾に当たる様にダルさんを止めたっ！
「あ、当たらなければどうとゆう事はぐわぁ――っ…」
「1つ」
「ダル――っ！テメエよくもっ！」
「お父様その距離はっ、」
ガガガガガガガガ、ガンッ！

ダッシュで近づきガトリングから格闘のコンボ！お父様の体力では、もう…
「こんなヤツに、くっそ――――っ…」
「２つ」
まだです！彼の体力だってそう多くはっ、
ガガガガガガガガガ、ガガガガガガガガガ！
「きゃあ――――っ…」
「３つ」
２Ｐ　ＷＩＮ

「だ――――っ！３人掛かりで勝てねえってどんなだよっ！」
「それもコッチはドクロ、アッチは無印のガトリングで主人公機」
「銃は撃っても当たらない。ボムは射線に味方を挟む。トラップは敵を使って解除。どうしようも有りませんね」
「（正直１対１より他人数戦の方が強いって言われてた）」
「マジかよ！先に言えよっ！」
「何て特殊スキル」
「通りで立回りが美味い筈です…」
そう言えば私と１対１の時の方が動きが鈍い…馬鹿ですか？
「そう言えば、何で急に４人対戦に成ったんです？」
あ、そう言えば訳は話していませんでした。お父様とダルさんがパーツを決めてる間に話せるだけ話しておきましょう。
「そうですね、簡単に言えば、暇だったんです」
「…（…）」
「あと影が薄くなり過ぎて出番が欲しかったそうです」
「…（えぇ～）」
「お気持ちは分かりますが、事実です」
「いやいやいや、神様だったら自分勝手に出番増やせば良いじゃないですか。俺なんて今日かなり恥ずかしい目に遭ってたんですよ？神様達の出番増えれば俺の出番減って丁度良いじゃないですか！（

本編出ろよ）」
「正直、２０話以上も出てない、毎回１話限りの私達の出番って増やし様が無いんですよ。ですから唯一の繋がりで有る貴方との共演に出ないと忘れ去られてしまいますし」
「じゃあもっと濃いキャラ前面に押し出せば良いんじゃないですか？」
「あの２人はともかく、私はそんなにキャラが濃く在りません」
「話数無理矢理重ねればもしかしたら、」
「そんなにキャラの濃い私が見たいですか？」
「…もちろんですよ！（あんま見たくない）」
「私に嘘がつけるとでも？」
「サーセン（どうしろと？）」
「だからもっと私達が本編に出れるように、貴方の同類に私達の事話して下さい」
「俺みたいに夢で毎日会えば良いのでは？（そうすりゃ出番増えるぞ？）」
「…それなのですが、貴方以外と今更会っても話す事が…」
「…無理矢理にでも話せばいいんですよっ！（あれ？女神様が可愛いモジモジキャラに成ってる！？）」
「かっかわ、可愛っ、」
「お～いフリッグ～、準備出来たぞ～」
「今度こそ負けないからねっ、ジルくん！」
「（良いタイミング）」
「「何が？」」
「何でも。速くテレパシー切って下さい。ゲーム中は無しですよ」
「おう、そうだったな」
「もういっそ有りにしちゃえば…」
可愛いって言われた可愛いって言われた可愛いって言われた可愛いって言われた可愛いって言われた可愛いって言われた可愛いって言われたかわうえあっ！？

「…女神様の動き、可笑しくないですか？」
「って、フリッグ！俺の事撃ってる俺の事撃ってる！」
「チャンスッ！」
「あ――――――っ…」
「主神様――――――っ！」
「（何か知んないけど女神様から攻撃無しで乱戦に成った。本当に俺の勝利の女神様的な感じだ）」
――っ／／／／
「フリッグたん僕を攻撃しなっ、うわ――――――っ…」
「…強っ（キャラ固有のダッシュで銃を無効化して近距離でショットガン、お手本のような撹乱戦だ）」
褒められた褒められた褒められた褒められた褒められた褒められた褒められた褒められたほめれるろっ！？
「このっ！急に動きがっ（銃しか使って来ないけど、この動きはヤバい！）」
どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうちとふっ！？
「（ボムとトラップで追い込んだ！後は正面のみっ！）」
ドンッガガガガッ
ＤＲＡＷ
「うわっ、初めて見た（負けはしなかったけど初めてドローまできた）」
「スゲーダブルノックアウトだったな」
「惜しい、もうちょっとで…ってフリッグたん！？」
ＤＲＡＷ　ＤＲＡＷ　ＤＲＡＷ　ＤＲＡＷ　ＤＲＡＷ
ＤＲＡＷ　ＤＲＡＷ　ＤＲＡＷ
「主神様！フリッグたんの頭から煙がっ！」
「なにいっ！デコは…スゲー熱だっ！」
「神様って熱とかあるのっ！？（嘘だろ？）」
「とにかく、小僧、テメエは今日はもう帰れ！フリッグの事は俺達

でどうにかする！人間にはどうしようもねえ！」
「（確かに、知識も無い俺がいても邪魔なだけだな）」
「じゃ、返すお」
「お大事にって伝えて下さい」
「はいは～い」
「フリッグ～死ぬな～」
負けなかった引き分け褒められた可愛い引き分け可愛いって言われた褒められた負けなかった褒められた可愛いって言われた……

女神様は成り振り構わない（改）（後書き）

前回から２５話ぶりみたいです
題名神様なのに本編で神様って単語すら出てきませんね

しかしこの話が後の前振りに…成らない気がする…

男勇者の新任務と女Bの新イベント

Ｓｉｄｅ：男勇者

ゴーレム事件以来、俺は何回か地方に行って事件を解決している。
今日、ユビキタス公に呼び出されたのも同じような用件だと思っていた。
行き先を聞くまでは…
「では、南第２大陸、氷の館の調査。頼んだぞ」
…南大陸？
「了解しました、必ずや公のご期待に沿える様務めます」
フレイヤさん、何良いお返事しちゃってるの！？
「それと、グレゴリウス殿の知り合いの錬金術師が案内人兼追加戦力として合流する。
ギグの森に入ったらまずはグレゴリウス殿の所に行くように」
「畏まりました」
メイドさんもっ！？
「では、解散っ！」
…マジかよ…てか公の含み笑いが気になる…

「本気でギグの森を抜けるのか？」
謁見場から出てすぐにフレイヤさんに聞いてみた。最近は呼び捨てにしろと言われてるが、何かさん付けが定着してしまって上手く言えない。
「ああ、私とメイドさんなら無傷で抜けられるからね。問題は勇人が何処までやれるかだ」
「勇者が足手まとい、とゆうのも面白いですけど」
「俺は面白くないよ…」
確かに。この２人が危険だって感じる場所、有るのか？
「今、乙女としては見過ごせない事考えてなかったかい？」

「まさか」
っと、表情に出ない内に考えるの止めとこう。
「あ、そうだ。グレゴリウスって誰だ？」
「勇人様は知りませんでしたね。グレゴリウス様はギグの森に住む赤ドワーフです。世界最高峰の武器職人であり、また歴戦の戦士でもあります。ギルドに登録はしていませんが、有事の際には彼に救援を求める事も有り、我が国にとっては大切な方です。と言っても本人は中立で有りたいが為にギグの森に住んでいるのですが」
「…武器職人なのに、戦士？」
「『武器を作る者が武器の知識を持たずに何とする』ってのが赤ドワーフ族の誇りらしくてね。赤ドワーフは皆武に精通しているんだ」
「はぁ～、カッコイイな…赤ドワーフって事は青とかもいるのか？」
「白と青のドワーフがいます。白ドワーフはルーンを刻んだり調金、彫刻が得意ですね。青ドワーフは防具を作るのが得意です」
「ドワーフにも色々いるんだな」
「まぁね。だけど最近グレゴリウス殿には息子以外に弟子が出来たって話だ。この前、色彩国家カラーズで緑のエルフ、シルフだったかい？が出てきた時に、偶々ウチの騎士が使者として向こうに居たんだが…その護衛はグレゴリウス殿の推薦を受けた2人の子供だった。それも1人でも充分に山賊１０人を撃退出来るような子供だったらしい」
…1人で山賊１０人撃退出来る子供？…ギグの森住まいの子供2人…まさかな。
「どうやら今回私達と合流するのは同じ方々のようです。これは勇人様よりよっぽど頼り甲斐が有りそうですね」
「そうだね。いっそ勇人は置いて私達だけで行ってこようか？」
「待て待て待て！俺も行く、俺も行くからっ！」
勇者置いてきぼりのパーティーとか聞いた事無いよ…
「冗談だよ。この調査は勇人の仕上がり具合を見る為でも有るんだ。しっかりやりな！」

「ああっ！」
試されてる…
上等だ！皆を守れるくらいの力があるって事、見せてやるっ！
「でも勇人様は…魔法が…」
「そうなんだよねぇ、勇者なのに…魔法が…」
「止めてっ！折角気合い入れたのに水差さないでっ！」
「では水を差されなくて済むように魔法の特訓をしましょうか。勇者より子供達の方がよほど魔法が上手い等とゆう事になれば、我が国の沽券に関わります」
「流石メイドさん、良い事を言う。勇人、今日の私との稽古では魔法も取り入れるんだよ」
なっ！魔法を発動させられない俺への当てつけか！？
「そうですね。勇人様にはそろそろ魔法を使った戦い方を覚えて頂かないと」
「いつまでもジュワユーズの性能に頼ってもいられないだろう。特に今回の調査は屋内だ。剣が抜けない状況も無いとは言えない。そんな時にはやっぱり魔法が有効なんだよ」
はい、魔法の修行頑張ります…
「では、始めましょう」
…せめて基本魔法くらいは発動させないとな…

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
王決めの儀と言う名のお祭りがあってから暫く。北大陸では新種族が見つかったとかで大騒ぎになってるって話だけど南大陸の魔族にはあまり関係ない。リリーに勝負を挑んだ大臣組も普通に仕事に復帰している。歴代の魔王も皆同じような対応だったらしい…魔王ってこれで良いの？
「痛っ！」
「我慢してね、イトハちゃん…はい、出来たよ♪」
そう言って保険室長、ヘレシアは私の手を自分の胸で嬉しそうに抱

きしめた…離して…
「ヘレシア、バンソーコ張ってくれるのはありがたいんだけど…そろそろ離してくれない？」
アンタの胸デカいから完全に埋もれちゃうのよ…
「え～、イトハちゃんの綺麗な手に傷が付かないようにしなくちゃダメなのに～。傷が塞がるまではこうしていようよ～」
「ワザとらしい泣き真似しないの。それに傷塞がるまでって、数日かかるわよ？」
「その間ずっとイトハちゃんと一緒♪」
「トイレとかお風呂は？」
「一緒♪」
「却下。そろそろ行くわ。リリーに呼ばれてるのよ」
「え～、リリーちゃんならしょうがないかぁ～。怪我したらまた来てね～♪してなくても私の助手としてずっといてくれてもいいんだよ？」
「嫌よ」
さっさとリリーのトコ行きましょう。これ以上あの子の側にいるのは危険だわ。
ヘレシアはリリーと同類、それもかなりアグレッシブな。隙あらば私の貞操を奪おうとする。この前も寝起きに…止めときましょう…
「お、イトハか。丁度良い所に来たのじゃ」
リリーの仕事部屋、執務室とか言った部屋にノックして入ったらリリーがお茶を飲んでるトコだった。隣にはお付きのシフルネがお盆を持っている。湯気が多いからホントに休憩始めたトコだったみたいね。
「イトハ、わらわと数日、城を空けて第2大陸に赴くぞ」
…第2大陸？
「なに心配するな。ロザリーとジルも一緒じゃ。同じ目的の同行者もいるようじゃが」
「いや、別にそれはいいんだけど…何しに行くの？」

「うむ。第2大陸、氷の館に死神が出たやもしれん。本物ならば＜契約の死印＞を持っておる筈じゃ。それを確認しに行く」
「＜契約の死印＞？」
リリーの＜契約の魔印＞に似てるスキル名ね…
「詳しい内容はロザリー達を交えて話すのが良かろう。2日後に城を発つ。準備しておけ」
「わかったわ」
あの2人に会うのも久しぶりね……

男Aはダブルブッキングに嘆く

Ｓｉｄｅ：男Ａ

色彩国家から帰ってきて暫く。赤ヒゲに『お前素手で戦う事に拘りが無いなら何か武器持て』といわれて、大型のダガーを2本作ってもらった。

ナックルガードみたいなのを付けてもらい殴る事も出来るし、手を開いても落ちる事はない。握り直しに便利だ。両手持ちは出来ないけど。

それに伴い浴衣を改造。ベルトを付けられるようにして、背中側の腰にダガーの鞘をクロスさせている。家ではベルト外して帯だ。

おかげで俺の職業スキルにはＡランク＜グラップラー＞の他にＢランクのナイフ使い＜スライサー＞とＢランクの魔法使い＜魔導師＞が付いた。あとダガー投げる練習してたら＜投擲＞って強化スキルも付いた。

ロザリー曰く『ジルはオリジナルの魔法が多いから＜魔導師＞のなったんだよ～♪』との事。理由はよく分からんが使えるモノは遠慮無く使おう。＜ナイフ使い＞が短期間でＢランクに成ったのはこの森で獣とのエンカウントが異常に多いから。俺まだ獣達に匂い覚えられてないのか？そろそろ3ヶ月経つぞ？

俺の日課は朝にギグの森の大多数が住んでいる通称『お屋敷』に寄り手紙の確認、その後訓練兼ねた狩、となっている。普段は手紙なんて無いが、今日はリリーから手紙が来てた。中身は家でロザリーと一緒に見よう。

さて、今日は鶏肉…バジルソースでも試してみるか…お、家に着いた。

「ただいま～」

「ジル～、ユビキタスからお手紙来たよ～」

入ってすぐにロザリーの報告。

は？ギルドじゃなく？
ロザリーは職業スキルが製作者のAランク＜アルケミスト＞なだけあってその辺の言葉を分ける。意識的にではなく無意識的に。
つまり手紙の差出人は本当にユビキタスの国自体からだと言う事だ…嫌な予感しかしない。
「俺もお屋敷に行ったらリリー達からの手紙が来てたよ。そっちはグレゴリウスさんの所？」
「うん。まだ中見てないけどグレゴリウスさんは『オメエ等には丁度良い』って言ってた」
赤ヒゲの真似して眉間に皺寄せたしかめっ面をしようといている…出来てなくて笑える…
「そっか。え～っとこっちは…氷の館の調査を手伝ってくれ？」
「あ、南第2大陸だね～。コッチは…氷の館の調査…」
…手紙を見比べると日付も一緒…
「…両方に『同じ目的の同行者います』って返しとこうか？」
「…うん」
え～って顔で提案したら同じ表情でOKされた。そりゃこんな表情にもなる。

依頼当日の…今は4時くらいか？正直朝から冷や汗が止まらない。人と魔族のダブルブッキング…最悪この家で戦闘始めかねない…力ずくで止めようにもリリーは魔王、イトハは俺と同レベル…無理だ。
今日ほど自分の運の無さを呪うのも珍しい。
普段は『仕方ない』と諦めるが、この家はロザリーの居場所だ。流石に俺の運の無さに巻き込むのは嫌だ…俺ここ好きだし…
「ジル、大丈夫？」
「あ～、うん。ちょっと不安で」
「大丈夫だよ～。ユビキタスは魔族に対しても話し合いを申し込む国だからいきなりケンカなんてしないって～♪」
そうなのか？まぁ魔族に対しても友好的な人が来てくれると良いな…

「っ、ヒヒーンッ！！」
おぉ？リリー達が来たか？
「うわっ！何だ何だ？」
「勇人、落ち着きなよ。馬の鳴き声だろ」
…勇人？てかドアの前に誰かいる？
コンコン…
「ユビキタスより参りました。グレゴリウス様の紹介で、氷の館の調査依頼をした者です」
来たか…何か相手の想像つくけど…
「は～い♪グレゴリウスさんの代わりにお手伝い頑張ります！」
「あ、俺はジルです。こっちはロザリー。よろしくお願いします」
ドアを空けて自己紹介…やっぱ見た事有る長い金髪のお姉さん…
「よろしく…おや君達は…」
「貿易都市コールスのパレードを見ていた御2方ですね」
濃い紫髪のメイドさん…じゃあもう1人は…
「お久しぶりです。勇人さん」
「お、おう…」
戸惑ってるな。無理も無い。前回苛め過ぎた。
まさか再開するとは…神様の話でもするか？出番欲しいって言ってたし…あれ以来女神様の様子が可笑しいらしく夢に呼ばれてない。
出番大丈夫か？
「あ、リリ～♪」
「ロザリー、久しぶりじゃの♪」
「あはは♪リリー日焼けした？」
「うむ。外で稽古しとるとどうもな」
馬車から飛び降りたリリーと走り寄ったロザリーが手を取り合って喜んでいる…微笑ましい。イトハも一緒みたいだ。さて、
「じゃ皆中にどうぞ。調査に向かうのは明日からだし、今日はくつろいでください」
客をイツまでも立たせっぱなしってわけにもいかない。さて、問題

はこっからだな。イトハは勇人が自分を巻き込んだヤツだって知ったらどうするかな…

今は皆をリビングに通す。机に俺達ギグの森組とイトハ達魔族組、ソファに勇人達人間組。

「へぇ、良いコーディネイトじゃないか。おっと、自己紹介が遅れたね。私はユビキタス公国公女、フレイヤ・ユビキタスだ」

「御付のメイドで御座います。どうぞ、メイドさんと御呼び下さい」

「俺は正名勇人、フレイヤさんに異世界から召喚されたユビキタスの勇者だ。ジルくんは知ってるけど、ロザリーちゃんは知らなかったし、そっちの2人は初対面だね。よろしくな」

相変わらずのイケメンスマイルで。イトハもリリーもあんま反応ないな。モリッシュは微妙に頬が赤い。あの人は普通っぽいな。

「ふむ、では次はわらわ達じゃな。わらわはリリー・クロンキストじゃ」

「私はイトハ・ユリ。今回一緒に氷の館を調査するんだし仲良くしましょう」

「一角ケンタウロスのモリッシュです」

「…イトハ、奴は…」

「…良いの」

流石にリリーの身分は明かせないよな…それにイトハも話す気は無いみたいだ…

「リリー・クロンキスト様…現魔王自ら氷の館の調査とは、何か特殊な事情が御有りで？」

なっ！メイドさんは知ってんのかよ！

あ、イトハも勇人も同じような顔で驚いてる。そりゃそうか。

「まさか名前でバレるとはの…そうじゃ、わらわは魔王。じゃが調査の間は協力したいと考えている。事情は…人間に離す訳にはいかんのじゃ。すまぬ」

「無理に事情を聞こうとは思わないよ。それに我が国は魔族との戦いは望んでいない。蟠りはここでは無しにしよう」

「うむ」
何かあっさり和平交渉終わっちゃったよ…まぁいいか。勇人とイトハとは別で話の折り合い付けるだろうし。
「お茶淹れてきます。ちょっと待ってて下さい」
「手伝います」
「あ、私も行くわ。リリー、大人しくしてなさいよ」
メイドさんとイトハがついてきた。それにしても今日のリリーは大人しい。前回はイトハから片時も離れよとしなかったのに…心境の変化か？
とりあえず作業。茶葉を選んでもらい、その間に『発火』で火を付けお湯を、
「何ですか今のは？」
「あぁ、ジルの呪文は異常に短いのよ」
あ、メイドさんに見せるのは初めてだった。
「あれで呪文として成立するのですか？」
「さぁ？事実発動してるしね。アイツと戦う時はホント厄介だったわ」
「ほほぅ、是非詳しく聞かせて頂きませんか？」
あ、何かスイッチ入った…まぁ別に隠す事じゃないし良いか……

男Aはダブルブッキングに嘆く（後書き）

メイドさんは意外と未知のモノが好きみたいです

男勇者は困る

Ｓｉｄｅ：男勇者

ジルくんとロザリーちゃん…何で浴衣なんだ？ジルくんがワザワザ作ったのか？

てか魔王と友達って２人はいったい何者なんだ？普通知り合うか？

ロザリーちゃんがギグの森の錬金術師って呼ばれてるのにも驚いたけど…

「しかしグレゴリウス殿の弟子があんなに小さい子供だとは思わなかったよ」

『貴方に巻き込まれた』

前にジルくんに言われたこの言葉は今でも気に成っている。だがそれでウジウジ悩むのは俺らしくない。

「ジルはグレゴリウスさんの弟子になんてなってないよ？」

だからジルくんが困っている時、俺の自己満足でも良いから助けようと考えた。

「じゃが奴はジルに無償で武器を作っておるぞ？」

多分、俺にはそれが精一杯。だからそうする事にした。

「ん～、でも前にグレゴリウスさんに弟子入りしようとした人は『俺は鍛冶屋だ。剣の稽古がしたいなら騎士にでも成れ』って断ってたよ？」

それにしてもグレゴリウスってどんな人なんだ？

「いやちょっと待て、グレゴリウス殿の武器が、無償？」

「どうしたんだ、フレイヤさん？」

何かワナワナ震えてる…

「あの人の作った武器は、ただの剣１本で１００万もするんだよっ！それが無償！？」

この世界の金銭的数値は向こうと殆ど同じ…え？はっ？剣１本１００万！？騎士に支給されてる剣は１本２万だぞっ？

「奴は偏屈じゃし、ジルも変わった武器を使う。趣味で作っとる可能性もあるの」
「それもオーダーメイド！？家が建つよっ！！」
「だいたい４０００万くらいだね～♪」
呑気な子供２人に興奮する大人１人…シュールだ…
「でも何でその人の武器はそんなに高いんだ？」
素朴な疑問…ちょっと普通じゃない値段だ。何か理由があるのか？
「まぁ異世界の勇者なら知らんのも無理無いかの」
「グレゴリウスさんの武器はね、スッゴク強いの♪」
「まず刃毀れが殆ど無く切れ味が落ちないし、材料の純銀を更に高レベルで精製するから魔法の媒体としても優秀だ。
普通の剣で打ち合おうものなら真っ二つにされるし、そこいらの杖なんかよりよっぽど魔力を通せる。
その上観賞用には絶対に作らない。武器が武器である為に外観を徹底的にシンプルに、そして頑丈に作っている。オーダーメイドにいたっては使用者以外には使えない程に持ち主に合わせて作る。
故に高い。本人は元取れる値段で良いと言ってるけどね…」
「材料の元取って生活するだけなら１本１０万でも平気じゃ。
じゃがその範疇に収まる性能ではないのじゃよ。じゃからそんな馬鹿げた値段が付いておる。そしてその値段以上の性能を持っておる」
どんなだよ…でもそこまで言われるほどの武器が１０万で買えたら…そこら中で武器使った喧嘩が起きるな…
「お茶はいったよ」
「ジル様、運ぶのなら私が全て…」
「結局私は話してるだけだった…」
ジルくんとメイドさんがお盆にお茶を乗せて戻ってきた。メイドさんの申し出はジルくんに完全却下されている。
イトハちゃんは本当に何も出来なかったみたいだ。
「まぁ、客なんだし良いんじゃない？メイドさんが話してくれって言ったんだし」

「メイドさんから話してくれ？」
「フレイヤ様、御気になさらず」
「そう言われると余計気になるね」
「ジル、何の話しだったんじゃ？」
「ああ、この前の」
「ジル様」
「ジル、苛めちゃ可哀相だよ～」
ジルくん、性格悪いな…メイドさんの困った顔なんて初めて見たぞ？
そうして一服した頃、
「ジル、先にお風呂済ませちゃおう」
「あ、そうだね。男女どっち先にする？」
「ここのお風呂大きいのよね～。５人でも全然入れちゃうし」
は？５人でも入れる？
「個人宅の風呂にしてはでかいな」
「先に入ってきていいですよ。ちょうど晩飯出来るくらいになりそうですし」
さっきからジルくんが家の事やってるけど…彼、居候なんじゃ…
「では私も手伝います」
「え？助かりますけど、良いんですか？」
「この人数分を御１人で作るのは大変でしょう？」
「勇人さんは頭数に入らないんですね」
「ちょっ、俺だって料理くらい出来るぞ？」
城で小腹が減った時なんかはテキトーに厨房借りてる。
「でもジルの料理は手伝えないかも…」
「ジルの料理は特殊じゃからの。料理が本職の者でないと…」
「てか逆にロザリーちゃんの料理食べてみたいんだけど？」
「ジルと比べられるからイヤ…」
ちょっと気になる…
「じゃあ逆に男が先に入ったら？それなら人数的に料理はかどるでしょ？」

「女子で料理出来る人挙手〜」
ジルくんの呼びかけに手を上げたのは、
メイドさん…
おい！
「仕方ないじゃろう！わらわは皆に止められて厨房に入る事も出来んのじゃ！」
「姫の前も貴族で包丁すら持たせて貰えなかったんだよ！」
「私も似たようなもんね」
…メイドさんとジルくんだけかよ…
「仕方ない、メイドさん以外の女性陣で先に入ろう。飯の後に3人は適当な順番で入ってくれ」
「しかなさそうですね…」
「畏まりました」
「勇人、覗くんじゃないよ。私は良いけど此処には他の子も居るんだ」
「元から覗かねえよっ！」
どんな風に思われてんだよ！それに自分なら覗かれてもいいのかよっ！…って、2人が料理してる間かなり暇…
「勇人さんとモリッシュさん、暇ならカードくらいなら有りますよ」
そう言ってケースを放ってきた…モリッシュさんって、このケンタウロスさん？自己紹介から一言も話さなかったから忘れてた…
「何をしましょうか？ババ抜き？ジジ抜き？スピード？大富豪？でも2人だとスピードが妥当ですかね？」
「あ、じゃあコッチのが良いですね」
そう言ってジルくんはチェス盤を出してきた…色々有るなこの家。
「ジル様、何を作るつもりなのですか？」
「全開リリー達に好評だったからデミグラスソースのハンバーグをメインにしようかなと。あとはサラダとパスタとピザにでもしようかなって」
「この人数ならそれくらいが良さそうですね。それにしてもデミグ

ラスソースの作り方、よく知っていましたね」
「メイドさんだって知ってるでしょう？」
「メイドの務めですから」
「そうゆうもんですか？とりあえずソースとピザ生地からですかね？」
「そうですね」
これは…料理足手まといだったろうな…
「先攻はどちらにしましょうか？」
「ジャンケンで決めましょう。２戦目からは負けた方が決められるって事で」
さぁ、ゲームを始めよう！

男勇者は困る（後書き）

チェスの腕前はどっちもどっちです

女Bと神祖は姫巫女と魔王に困る

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「相変わらず風情有るわね～」

日焼けでピリピリするわね。でも久しぶりのロザリーちゃん家のお風呂はやっぱり良いわ～♪

「うむ。城の大浴場もこうしようかの…」

「良いわね～…くっ付くのやめなさい！」

勇人に異世界のコト話さなかったのは気分だ。アイツ気にしそうで知られるの面倒臭い。事情を全部話したら召喚した姫様も気にしそうだし…

「本当に凄いね。まさか空の見える風呂に入る日が来るとは思ってもみなかったよ」

体を洗って皆で露天風呂。折角星空が見えるんだから中にいるのは勿体ないでしょ。

てか家臣の人達的には『姫様の軟肌人目に曝す訳には～』とか思うでしょう…

「えへへ～♪でも1人で入るにはちょっと大き過ぎるんだよね～」

確かに。でもジルなら気にしないで1人で満喫しそうね。

「ボウヤと一緒に入ったりしないのかい？」

「無理だよ～／／／」

まぁ普通無理よね。

何か姫様は堅苦しいの嫌いだから普通に話してくれって言われた。だからタメ語ＯＫらしい。随分フランクな姫様だ。

「わらわは愛する者となら喜んで入るぞ！」

「リリーもイトハも女の子でしょっ！」

「何、2人はそう言う関係だったのか。これはお邪魔だったかな」

「ぜんっぜん邪魔じゃないわ！むしろこの危険なガキと2人きりになったら何されるか、」

「少女よ、今すぐこの2人だけ中の浴槽にっ！」
「おお、話が分かるではないか、ユビキタスの姫よ！」
「当然だろう。ささ、魔王よ、早く中に、」
「やめて――――――っ！！」
本気で何されるか分かったもんじゃないわよっ！
「ふむ、じゃあ私は少女と女同士で楽しむとしようかね。近くで同じ様な事してれば気に成らないだろう？」
「えっ？」
「ロザリーちゃん、今すぐその危険人物から離れて！」
まさか姫様がそっちの人だったなんて…
「え？ええっ？」
「ふっふっふ、逃げ場は無いぞ、イトハ！」
混乱して動けない間にロザリーちゃんもわたしも捕まった！
「少女は綺麗な肌してるね」
そう言ってロザリーちゃんの首筋を姫様の舌が這う。
「は、あぁ…」
ロザリーちゃんの甘い声が小さな口から洩れる。ってロザリーちゃんM！？
「ふふふ、少女にはこっちの才能が有りそうだね。遊びのつもりだったけど本気に成ってしまいそうだよ」
「ふ、ぁ…」
「いやいやいや！それ1国の姫の台詞！？ちょっ、リリー！アンタの親友が危ないわよ！」
「イトハと結ばれる為ならその他は粗末な問題じゃ」
親友を粗末な問題扱い！？ダメだコイツっ！完全に周りが見えてないっ！！
「ふふふ、イトハ～」
くっ！子泣きジジイみたいに絡みついて取れないし手がかなり際どい位置に来てる！
ってバカァッ！そこはダメよっ！

「は、ぁ～…」
ロザリーちゃんはどんだけMなのよ!?まだ首少し舐められてる程度でしょっ!…違うっ!あの姫様、結構ヤバいトコに手伸ばしてるっ!?
「あ、はぁぁ…じるぅ～…」
「む?」
あ、ジルの名前呼んでる……は?もしかして、そうゆうコト?
「ふむ、流石に別の男の名前を呼ばれると冷めるモノだね」
「じゃあまだ暴走してるコイツを止めなさいよ!」
リリーはかなりしつこく引っ付いてる。いい加減胸揉むの止めなさい!
「…いや、私は少女を看病するのに忙しい」
「ニヤニヤ顔で言ってんじゃないわよっ!」
「イトハ～、わらわは、」
「いい加減にしなさいっ!」
ゴンッ!
「ぐ、おぉぉ…」
「酷い事するねえ」
「アンタだっていたいけな少女に手出そうとしたでしょうがっ!!」
「ボウヤとの関係を進展させるためのちょっとしたスパイスさ」
そう言ってさっきまでロザリーちゃんを撫でまわしてた指先をチロッと舐めた。まるで誘うような仕草で背筋がちょっと寒くなった…
「アンタの楽しみも大分混じってたでしょうがっ!」
「当然だ。勇人が来てからは御無沙汰だったんだ。趣味と実益を兼ねた楽しみなら誰も傷つかなくていいだろう?」
「じゃあ勇人相手にしてなさいよ…」
…流石にレズに男とってのは酷、
「ふむ、考えておこう」
「…は?いや、アンタ、女が好きなんじゃないの?」
「そうだが?」

「いやいやいや！何『言いたい事が分からない』みたいな顔してんのよ！女好きなのに男ＯＫなわけ！？」
「経験は無いが興味は有るな。…どうした？」
「もういいわ…」
まさかの両方いける人だったとは…
「う、んん…」
「お、起きたか、少女よ」
「うんぁ…」
「リリーも起きたわね」
お風呂で寝るのは危ないからどうしようかと思ってたのよね。
「おはよう少女」
「おはよう…キャ――――っ！」
顔真っ赤にして叫んでる。そりゃそうよね、さっきあんなコトされたんだし。
ドタドタドタッ
『ロザリー、どうかしたの？』
浴室の向こうからジルの声。心配で様子を見に来たみたいね…
「ジッ、ジル！？何でもないよっ！だっ、大丈夫っ！」
『そう？ならいいけど。晩飯もう少し掛かりそうだから、のぼせない程度ゆっくりしてて』
「う、うん！……姫様～…」
恨みがましい目で姫様を見てる。涙目で上目使い…いや、これは…
「…可愛、いや！済まなかったな。流石にふざけ過ぎた。……じるぅ～…」
「ぷっ！」
「なっ、なななななっ／／／」
まさかここでそれを持ち出すとは…しかもロザリーちゃん覚えてるんだ。
「何の話じゃ？」
「何でもないの！何でも！」

「ふふっ、何でもなくは無いだろう。思ったんだろう?ボウヤの指や、口や、体が、」
姫様がロザリーちゃんを後ろから囁きながら抱きしめていく…うっ、鼻血出そう…
「自分の体を少しずつ少しずつ、」
ロザリーちゃんを抱きしめている左手が腰から少しずつ上に這っていく。お腹、胸、首、顎を優しく撫でるように、
「自分の中に入っていくのを」
「は、あぁ…」
姫様の指がロザリーちゃんの口の中をかき回す。ロザリーちゃんもううっとりしちゃってる…
「ふあぁ〜あぁ〜…」
あんなに顔真っ赤にして…ん?
「おや?」
姫様も気付いた?
「…のうイトハ。ロザリーのヤツ、もしかして…」
「ふにゃぁ〜…」
「もしかしなくても、のぼせてるわっ!早く出て休ませないとっ!」
「少々遊び過ぎたか…」
自覚してんならやめなさいよっ!

女Bと神祖は姫巫女と魔王に困る（後書き）

これ書く前にレズアニメ見たのがいけませんでした…
そしたら思いつきもしなかったのに…

男勇者の気遣いと男Ａの溜息

Ｓｉｄｅ：男勇者

皆が慌てて風呂から出てきて、
「…で、何でこうなった？」
「多分姫様辺りがロザリーを弄り過ぎたんじゃないですか？」
「うっ…」
図星なのかよっ！
「全く。ほらロザリー、落とさないでね」
「うぅ～、ありがと」
オデコに濡れたタオルを当てている。
「…ボウヤ、何か慣れているね。少女がのぼせたって聞いた時も私達にベットに運ばせて自分はタオル濡らしてたし」
「ロザリーはよく実験中に失敗して爆発起こすから、緊急事態には慣れてるんです」
「そうかい…あと私にはタメ語で良いよ」
「あ、俺も」
「私もその方が良いです」
「分かった。とりあえず晩飯だな。ロザリー用に軽いの作ってるから皆は食べててよ。あとの仕上げはメイドさん１人でも大丈夫だしロザリーの調子が戻ったらソッチ戻るから」
ジルくんって…普通に話すとなんか無感情に感じるな。
「え、でもジル、」
「いいから病人は大人しくしてて。さぁさぁ、皆」
仕草で出ようと示したが皆責任感じて中々出ていかない。
確かにこれ以上いてもロザリーちゃんに気を使わせちゃうだけか…
「明日から長旅になるし、ちゃんと休めよ。じゃジルくん、あと頼んだ。ほらフレイヤさん、行こうぜ」
渋々と言った感じで俺に手を引かれて寝室を出た。いつもなら『セ

クハラ～♪』とか言ってくるのだが今回は騒がずに引かれたままに成っている。
リビングに戻って食器運びをしながらフレイヤさんに声をかける。
「ほら、ロザリーちゃんだってのぼせただけだ。そんなに深刻にならないで、戻って来たら謝れば良いだけだぜ？」
何でこんなに気にしてんだ？
「そうだね。初めての事で少々取り乱しちゃったよ。済まないね」
「姫だからあんまり遊べなかった？」
「正解。その前は巫女だったしね。加減が分からなかった…でも、楽しいモノだな。皆で風呂に入るとゆうのは。勇人が覗きに来なかったのはつまらなかったが」
「元から覗く気なんてねえ！」
やっと調子戻ったか？調子狂うからあんな殊勝な態度しないで欲しいな。
「全く、リリーもよ。ロザリーちゃんと私が逆だったかもしれないし、アンタ達2人の方がのぼせるかもしれなかったんだから」
「済まぬのじゃ。次からは気を付ける」
「なら良し」
「気を付けてくださいね？」
アッチも調子戻ったみたいだな。
「これで最後ですね。モリッシュ様用にも作る辺り、ジル様は執事の才能が御有りですね」
「そうかな？」
「「「「うわぁっ！」」」」
い、いつから…
「はい、中々筋が良いですよ。これがロザリー様用です」
「ありがと。大分良くなったしもう少しで戻れそう」
「それは良かったです」
メイドさん、貴女以外全員驚いてるのに何で貴女は無反応なんですか？

「あと…流石にそんなに驚かれると、傷つく」
リビングの扉が静かに閉まる…
「「「「「「ゴメン――――っ！」」」」」」

Ｓｉｄｅ：男Ａ
あんなに効果有るとは思わなかった。
「ロザリー、食べ物持ってきたよ」
「ありがと～♪何か皆が『ゴメン――っ』って謝ってたみたいだけど？」
「ちょっとからかってきただけ。思った以上に効果があって俺が驚いてるよ」
「そうなの？あんまり脅かしちゃダメだよ？」
「そうする。食べれる？」
「うん…ぁうぅ…」
まだフラついてるな。
「ほれ、枕重ねて半起きの姿勢に成って…ん、あ～ん」
「え？えぇぇ？」
「いいから食べる。熱くも固くもないから食べ易いよ」
「うぅ～…」
別に恥ずかしがる事じゃないだろうに。まぁ、こうゆうのは異常に恥ずかしい時期なのかな？
あ、ぱくっといった。
「美味し～♪」
「まぁロザリーの趣味も分かってきたからね。味付け合わせてみたんだ」
「あ、ありがと／／／」
顔が赤い…もしかしてかなり大胆な事言っちゃったか？いやアレで赤くなるか普通？
「どう？少しは楽に成った？」
「…うん…」

ん？気を使わせたとか思ってんのかな？
「そんなに気にしなくていいんだけど。俺が好きでやってる事なんだから」
「…えへへ♪もう大丈夫！」
「そう？じゃあ行こうか」
右手のお盆に食器を、左手にロザリーの手を乗せる。
「えへへ♪ありが、あっ」
「げっ」
ドサッ…
……安いラブコメじゃないんだからこの状況はないわ～。
ロザリーが俺に覆いかぶさってて、顔はくっ付きそうなほど近い。
ロザリーの胸からはかなり速い鼓動が伝わってくる。
ロザリーが食べ切ってて良かった。食べ物の掃除は面倒過ぎる。
「はわっ！ゴッ、ゴメンね！」
「ロザリー軽いし平気だよ…何をそんなに焦ってるの？」
寝る時はもっとくっ付いて…あぁ、乙女心とゆうやつか。そりゃ俺には分からんな。
「えっ？そのっ、あのっ」
「あんまり急に動くとまた倒れちゃうよ。ゆっくりゆっくり」
「う、うん…」
ちょっとずつ体を起こしていく。
確かのぼせの防止ってゆっくり立ち上がるとかして急に血を動かさない事だったな～、なんてトリビアを思い出していたら何か視線を感じた。あ～、倒れた音で気になって来ちゃったか。
「ふぅ、ゴメンね…」
別にそんな気にしなくてもいいんだけど。まぁ気になっちゃうんだろうな。
「大丈夫だよ。立てる？」
「うん、その…」
食器集めて机に置いてからロザリーに手を伸ばす。もうちょっとゆ

っくり行こう。向こうでは皆がニヤニヤしてる気がしてならないけど…

「ゴメンは無しで」

「あう……じゃあ、ありがと／／／」

…もしかして風呂で弄られたのって俺絡みか？俺に対して緊張してるように見える…姫様やり過ぎじゃね？ふぅ、それなりのお返しをさせてもらうよ？

「じゃあ行こうか？なるべくゆっくり、ね」

「うん♪」

「と、見せかけて！」

ロザリーの手を取るフリして御姫様抱っこ。ちゃんと閉まってないドアを足で開ける。俺はちゃんと閉めたぞ。

ガンッ×４

勇人とメイドさんには不発だったか…どうせなら全員に当てたかったな。下からリリー、イトハ、姫様、モリッシュ。背の順だな。てか女性陣分かり易いな。皆してこうゆうの好きなんだから。

「なっななっ！何で皆がっ！」

あ、また興奮してる。これじゃ離してあげてもまた倒れそう…

「先に行ってるよ～」

「ジルも降ろして～！」

「また倒れるからダメ」

「ジル様は女性の扱いが分かっていらっしゃいますね。益々執事に成って頂きたい」

「ロザリーの執事になら成っても良いかな」

「えっ？えっ！？」

「ジルくん、大胆だな」

正直恥ずかしい…ポーカーフェイスは得意だからバレないだろうけど。

この後、リビングでそれなりに皆にからかわれたけど、まぁ悪い気

分じゃないし何も言わない。イトハと勇人をからかえたしお互い様だ。

ちなみに、散々恥ずかしがってたくせにロザリーは迷わず俺を抱き枕にしようとした。姫様達に『やっぱりあの2人って…』とか言われたけど無理に変える気も、ロザリーを止める気も無くてそのまま寝た。

だって今更感有るし。お陰で勇人はリビングのソファでモリッシュと寝てる。女性陣を大きい部屋で纏めようかと思ったけどロザリーが放さないもんでこうなった。勇人はむしろ1人にしてくれと言ってたから丁度良かったのかもしれない。モリッシュいるけど気にするな。

明日から数日掛けての調査。魔族と人間の協力する数少ない事例の1つ…とりあえず、ナイフの出来栄え試そう……

「おやすみ、ロザリー」

「ふにゅ～」

もう寝てるんだけどさ……

男勇者の気遣いと男Ａの溜息（後書き）

今更ですが、氷の館編は長いです…
気長にお付き合いくださいませ

男勇者と女Bと男Aと氷の館（前書き）

ようやく氷の館到着

男勇者と女Bと男Aと氷の館

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

ロザリーちゃんの家から3日、昼過ぎくらいに南第2大陸、氷の館に着いた。ホントは1日半くらいで着く予定だったんだけど…

「ジル、アンタ次から遠出する時は留守番してなさい」

「気持ちは分かるんだけどさ…」

「ジル行かないならアタシも行かない～」

ロザリーちゃんが『い～や～』って感じでジルを抱きしめてる…確かにジルは前見た時より接近戦が異常に強くなってるし動きも速いから戦闘では役にたつんだけど…料理や洗濯も一通り出来るから旅にはもってこいな人材なんだけど…

てか浴衣にベルトって、改造し過ぎじゃない？ちなみに、私達も浴衣を作ってもらってる。1人じゃ辛いからってメイドさんが手伝ってる。

「幾ら何でもトラブルに巻き込まれ過ぎじゃな」

「勇人も大概トラブルに首突っ込むけど、ボウヤは引き寄せてるね」

「まさか予定の倍掛かるとは思いませんでした。食料はジル様とロザリー様が獲って来てくれますから問題無いですが…勇人様異常にトラブルに関わる方が居るとは予想外でした」

「ジル様、凄いですね♪」

「ジルくん、お祓いしてもらおう？このままじゃ本当に危ない」

「もう試した…」

あ、お祓いしてもらってアレなのね…酷いわね…

お屋敷に立ち寄れば住人同士で喧嘩してるし、狩に出れば人を拾う。1回肌の黒い魔族を拾って近くのお屋敷まで届けるなんてのもあったわね…こんだけ色々戦う回数あればそりゃ強くなるわね…解決する時はいつも極端な理屈で相手を混乱させるし…

「はぁ～、これが氷の館……何か見覚えが…」

話題変えたわね。何か最後に呟いてたけど何かしら？
レンガ造りのこの館は三日月状の2階建ての建物が、庭中央の門側に尖った3面の時計塔と凍った噴水を囲んでいる。しかも三日月とは言っても、大きな門を閉じれば完全に円になる。
元々監獄として使われたコトもあるらしくて門の外から見たら古さもあってホラーでしかない！何よあのツルの量、どんだけ長い間放置されてたの！？それに2階の端っこには両方とも槍みたいなのが突き出してあるし、その窓の下は剣山じゃないっ！
「何で氷の館って呼ばれてるんだっけ？」
「建物の中に誰かが入ると門が閉まる。入った者が数日後、門が開いた時に凍り付けで時計塔の前に立っているからじゃな。解凍したら首は切れていたそうじゃが…」
「俺、初耳なんだが…」
「私達だって知らなかったよ…」
ちょっと…それシャレになってないわよ…姫様達も知らないみたいだし…
「じる～…」
「もしかして、ロザリーとイトハは氷対策？」
「それも有るの。普通に戦力としても期待しているのじゃが」
「いやいやいや、確かに私の得意魔法は火だけど…」
こんなマジもんのホラー無理…
「…入る前に外周を調べてみようか。何か有るかもしれない」
「そうじゃな。迂闊に入るのは危険じゃ。どう見ても楽観できん」
流石姫様！皆が圧倒されて動けない時にちゃんと指示出してくれる！リリーも落ち着いた声で魔王の風格みたいなの出てる。でもどうせならこのまま帰るって言ってほしかったわ…
「…何か、この館、端以外に窓が無い？」
「あ、そうだねっ！」
ホントだ。端っこの槍が有るトコにしか窓が無い。
「ボウヤは最初から観察してたね。本当に肝が据わってるよ」

「ジル～、褒められたね♪」
「うん」
ジル、ホントにトラブルに慣れて動じないのね…
「とりえず、2組に分かれて半周ずつしよう。コッチは俺とフレイヤさんとメイドさん、反対を皆で頼む」
戦力的に均等になれないのが辛いけど、メイドさんがいるし妥当なトコかしら。
「脱出用に窓、あと壁にルーンが刻まれていないか等を調べて下さい。何も無ければ館に入る事に成ります」
メイドさんにチェックする内容を聞いてから解散。
結局分かったのはルーンも窓も無かったってコトだけ…それと壁を壊そうとしてみたら傷一つ付かなかった。内側にルーンがあるのかもしれないわね。
「全員で入るのか？」
「この状況でもし分断されたら連携が取れない。全員で動こう」
「それに外側からは何も出来んしな。なら大勢で居た方が心強いじゃろ」
確かに、魔法も打撃も効果無かったわね…
「では私は＜人化＞を」
「そうじゃな、そのままでは何かと不便じゃ」
「＜人化＞ってなんだい？」
姫様の質問。私も聞いた事無いわ。
「モリッシュは特殊スキルで人の形をとれるのじゃ。あまり知られたくないのじゃが、致し方あるまい」
「スキルか。人間の国には見れる者が少ないから軽視されがちだな」
「あ、だからスキルの説明はされても見せてもらえなかったのか」
「ロザリー様は見れるのですよ」
「う～ん、城に務めないかい？」
「むう、ロザリーにはわらわの城に来てほしいのじゃ」
「ロザリーの取り合いしてないで速く入ろう？」

ジル、アンタは運無いんだから1番気を付けなきゃいけないと思うわ…

「では私は＜人化＞を」

そう言って目を閉じて何かに集中するとモリッシュの体を魔法陣が上から通り、地面に着いて消滅する時にはオデコに1本角の生えた女性が、全裸で立ってた…は？

「はい、服」

ジルが荷物の中から着れそうな服を持ってきた。対応速くない？洗濯とかして荷物の中身把握してるんでしょうけど…

「ありがとうございます♪でも、もう少し慌てて欲しかったです」

「ジル…」

「勇人…」

「勇人様…」

「いや、モリッシュさん美人だけど種族違うし…」

「魔法陣が肩まで降りてきた辺りで後ろ向いたからノーカンだろ！？」

「＜人化＞したケンタウロスは人間とも…」

「モリッシュストーップ！」

何つうコト言おうとしてんのよっ！！

「む～…」

「…どうしろと…」

「速く入ろうぜ？」

「話逸らしたね」

「逸らしましたね」

「逸らしたの」

「逸らしたわね」

「勇人様もジル様もエッチ～♪」

「見てねえって！！」

モリッシュ狙ってたわね。予め教えておいてほしかったわ…

「馬車はどうする？中には持っていけないよ？」

ジルがもっともな事聞いてきた…確かに。
「門の外に置いておこう。最悪帰りは徒歩かもね」
「仕方ないのう。調査の邪魔になるよりはマシじゃ」
「じゃ、入るか」
もう、腹括るしかないわね…
いざ、氷の館へっ！

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ2

Ｓｉｄｅ：男勇者

ぎぃぃぃ…

鈍い音を立てて館の扉が開く…入口からは時計塔が邪魔して噴水も門も見えねえ…変な配置だな。普通開放感のある造りにするから時計だけ門の上とかに付けて、塔を作らなければ良かったはずだ。

設計者は何考えて作ったんだ？

入ったばかりの館の中は光がなくて何も見えない。太陽の光も丁度、塔に遮られて入って来ない。

「闇を照らせ　ライト」

フレイヤさんが光球を出して館の中を照らす。

「２日分くらいの魔力を込めた。この屋敷の中は全部照らされてるはずだよ」

光球は見た目だけなのか、部屋の隅までくっきり照らされている。

普通はこんな光球１つじゃ部屋の隅まで照らせないはずだ。

ジルくんは門をくぐる前から手袋と脚甲を装備してロザリーちゃんを守れる位置にいる。ジルくんがロザリーちゃんを守るなら、俺はリリーちゃんとジルくんを守ろう。子供達に怪我させたくない…ジルくんなら自己満足と言いそうだ…

「内装は…普通だね。ふふっ、左の通路はシャレが効いてる」

扉から先はそのまま広いエントランスになっていた。え～っと…

１０人くらいが座れる向かい合わせのソファにテーブル。

暖炉とその上にこの不気味な館全体を斜め上から描いた絵画と壁かけの時計。

２階への折り返している階段。

一杯に詰まった本棚とワイングラスの入ってる食器入れ。

小物用の腰くらいまでの棚。

左右の通路とＷＣ＆ａｍｐ；Ｂと書かれた扉。

がこのエントランスにある全て。左右に伸びているはずの通路は左だけ氷の壁で通行止め。
氷の館に氷の壁があるなんて出来過ぎだ。
「…これって…」
「ジル様もお気付きに成りましたか？」
「ああ、人の気配が無いのに埃や虫喰いの痕が無い」
本当だ。ジルくんは幼いのに周りをよく観察してる。俺もしっかりしなくちゃな…
「ジル、何か頼もしいね♪」
「私もジルに守ってもらおうかな～」
「イトハを守るのはわらわじゃっ！」
こんな時でも普通に話せるこの子達は強いな。イトハちゃんはワザとそうなるように話したみたいだけど。
「ロザリーだけで精一杯だよ…でも真剣な話、魔族組には格闘戦主体の人がいないね」
「それを言ったらボウヤ達は2人だろう？」
「あ、そうだった」
「あの～、私は接近戦主体なんです」
「しかし人数が半端ですね。あと1人いれば3人ずつで調査出来たのですが…」
「確かに。通路も上の階を考えると丁度3通りだね…じゃあメイドさんはボウヤ達と1階の調査を、私と勇人で2階の右、反対を魔王達で調査しようか」
メイドさんが2人と一緒なのは心強い。俺はフレイヤさんと2人か、足引っ張らないようにしないとな。
「宜しくお願いします」
「うん♪」
「よろしく」
「さて、では調査開始じゃ。皆用心して掛かれ。ここはただの噂では済まぬ実害が出とる」

「ああ、気を付けるよ」
「うん！」
「畏まりました。では御2人共、参りましょう」
「3人とも、気を付けてな」
「勇人さんもね」
1階組は特に問題なさそうだ。
「じゃ、私達も行こうか」
「ああ」
フレイヤさんに続いて階段を上る。
「腐った所等も有りませんね。外からだと大分古い建物に見えたのに…」
「そうよね…ジルとメイドさんも言ってたけど、中は随分綺麗だし…」
「逆に不気味じゃな…」
「確かに。どうなってんだ…」
「あれは…地図かな？」
階段は1回だけ折り返して2階に着いた。階段の正面の壁にはこの階の部屋を表示したプレートが埋め込まれてる。通路は2人で並んで歩けるくらい。剣を振りまわすのは難しい。戦闘になったらイトハちゃんと俺は厳しいな。
「左右に分かれておるの…間取りは両方とも同じじゃな」
この階には同じサイズの部屋が5部屋ずつ真横に並んでるみたいだ。
1階のソファを考えると10人が最大収容人数と想定してるのか？
ちなみに右の真ん中に男子トイレ、左の真ん中に女子トイレがある。
「じゃあ私達は左ね」
「気を付けてな。勇人、私達も行くよ」
「ああ」
そう言って前に出る。フレイヤさんは中距離が本業だ。俺が前で戦わないと…
「勇人、そんなに警戒しなくても…私を守るためかい？」

「うっ／／／そうだよ、悪いか！」
こういうのは相手に知られると恥ずかしいんだよ…
「いや、ちょっと嬉しかったよ♪…私は普段は守る側だからね。とりあえず1部屋ずつ見ていこう」
まぁ、フレイヤさんを守れる程強い人なんてメイドさんくらいだしな…他の人じゃ守られる側になっちゃうか。
「1部屋目だね。さて、何が出るか…」
前にいた俺がドアを開ける。
きぃぃぃぃ…
高い鈍い音だ。玄関扉とは違った嫌な音だな…中は…
「何だよ、これ…」
「勇人、どうした？…お札？」
部屋中の壁にお札が貼られている。それも全部赤黒い文字だ…不気味だし目が痛い…
「これは…血文字かね？」
「多分、そうだろう。微妙に擦れてるし、全部走り書きだな…」
お札の字は達筆過ぎて、かろうじて『姿を見えなくする結界を張る』みたいな事かもしれない、という程度にしか読めない。そもそも、そんな魔法知らない。
「魔力は流れてないね…危険だしお札はこのままだね」
部屋には服掛けと机と椅子とベットのみ。それ以外は何も無い。スペースもベットの下くらいだが、もちろん何もない。机に付いてる収納棚を漁ってみたが何もなかった。
お札は服掛けにも張られている。
「やっぱり、窓は無いね」
「ああ…それに埃もないな」
「……次に行こうか」
「ああ」
隣の部屋はお札がない事以外は全く同じだった。その後の部屋も全部同じ。拍子抜けしてしまったが、端の部屋の前でふと思い出した。

「この部屋には窓が付いてるはずだったな」
「そうだったね。うっかり忘れる所だったよ」
中に入ってみたが他の部屋との違いは窓だけだった。ベットの上に付いている。
「随分高い位置にあるな。丁度俺の頭の位置くらいか」
俺の身長は１７８センチくらいある。あの窓はリリーちゃんじゃベットの上に乗って目が下の冊子に届くくらいか。
「そうだね…それに、あの槍は何なんだろうね？」
そう言えばそうだ。窓から尖った先端が見える。錆びてるな。
それにこの窓の下は剣山になっていたはずだ。本当にどんな設計になってるんだ？
「時計塔、丁度正面に見えるね」
フレイヤさんが試しているがベットの上から外を見ると時計塔が真正面にくるみたいだ。
「…皆に合流しようか。今後の事も決めたいし」
そうしよう。他の皆の報告も聞いてみたい。

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ2（後書き）

結局1日1話投降し続けてしまいました。
流石に今のストックが切れたら間があくと思います。

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ3

Ｓｉｄｅ：男Ａ

メイドさんを先頭に、次にロザリー、最後に俺、とゆう順番で進む事になった。

確かにメイドさんが先頭なら安心だ。これなら前も後ろも対処出来る。

「何か、怖い…」

通路に入ってすぐ、ロザリーが呟いた。ロザリーの気持ちはよく分かる。

廊下はカーブしていて明りがあってもそんなに先が見えない。壁の蝋燭立は蝋燭を固定するための針が剥き出し。足元は不自然に綺麗な赤い絨毯。そして無機質で窓の無い閉鎖的な廊下の壁。

…俺、お化け屋敷苦手だったな～…現実逃避お終い。

「行きましょう」

メイドさんについていくと、ステンドグラス風の両扉。奥には長い机に椅子が並んでいるように見える。

「開けます」

後ろを警戒しつつメイドさんがドアを開けるのを見る。ドアの先にはやはり机と１０個の椅子。そして更に奥にキッチンが見える。

「ここも、何の気配も有りませんね」

「…」

ロザリーがキョロキョロしてる。

「ロザリー、どうかしたの？」

「うん…この館、魔力が薄いの…」

「…魔力を測れるのですか？」

「うん。魔力の流れを見れないと、良い魔具作れないし…」

「でも魔力が薄いって事はどっかで使ってるって事？」

「わかんない。本当に、ただ薄いの」

空気中の魔力が薄いと魔獣はあまり強くない。それと無意識に空気中の魔力も使う人は魔法の威力が普段より落ちる。ギグの森は魔力が濃いから強い魔獣が多く、それに対抗するために獣も強くなったと考えられてる。

「…分かんない事は保留にしておこう。まずはこの部屋を調べてみよう？」

「…うん」

何か気になる事でもあるのかな？俺もエントランスで何か引っ掛かっているのだが、今はどうしようもないから放置。調査に集中。

調べてみるとキッチンには

氷を入れて使う冷蔵庫、オーブン、コンロ、ちゃんと使える洗い場、鍋とかフライパン、綺麗な用途別包丁セット、様々な食器、地下への入り口、が有った。

……地下への入り口？

「…これは…皆様と合流してから調査しましょうか？」

ロザリーがガクガク震えて俺の腕に掴まりながら何回も頷いている。もう軽く涙目だ。

姫様の魔法は地下には効果がなかったみたいで明らかに真っ暗だ。例え明りがあってもロザリーがこの状態ではどうしようもない。エントランスで皆を待とう。

「あ、持ってきた食材はここに置いておかない？」

「そうですね。それに、そろそろ夕食の準備を始めないといけませんし」

食材は帰りも考えると４日分しかない。そしてリリーの話だと門はおそらく閉まっていて狩に出るのは無理そう。あとで確認しなくちゃな。門が閉まってるのは数日って話だから食糧切れる前に終わると思うけど…

ん？そう言えばこの館、風呂有るのか？あぁ、ＷＣ＆ａｍｐ；Ｂはトイレと風呂か。って俺呑気過ぎる…

一旦エントランスに戻って食材を冷蔵庫に入れ氷をアイスボックス

みたいな所に入れる。そうしてエントランスに戻ってみると2階組が戻ってきた。メイドさんがキッチンが有ったと報告してる。
「集まったね。じゃ報告会でも開こうか」
「その前に、その扉確認していい？気になっちゃって」
「そうだね。もし風呂で使えたらラッキーだし」
…使えない方が精神的にはラッキーかも…こんな館で風呂使えるとか怖すぎる…
しかし期待は裏切られる。
扉の奥には更衣室とトイレ。更衣室の奥には曇りガラスで遮られたシャワールームが5つ並び、正常に作動。トイレも同様に流れる。タオルは流石にないが有っても使いたくはない。俺なら持参してるの使うよ。
もしかしてこの館の魔力が薄いのってこれに魔力使ってるからなんじゃ…
エントランスに戻りソファに座る。とゆうか埋もれる。柔らか過ぎ。
「じゃあ、改めて報告会を始めようかと思うんだけど…っと、そろそろ5時に」
ボーン、ボーン、ボーン、ボーン、ボーン
この音、時計塔か？今まで鳴らなかったけど1時間おきじゃないのか？
「じる～…」
隣に、とゆうか殆ど同じソファに座っていたロザリーが涙目で寄ってくる。腕を掴んだりしないのは俺が動けなくならないようにとの配慮。地下への入り口を見つけた時はそんな事言ってられないくらい怖かったんだろう。俺だって怖かったさ…
「報告会の前に門とかも確認しない？リリーの話では閉まるんでしょ？」
「そうだね…さっき1階を捜索したメンバーはキッチンで料理を初めてくれないかい。確認したら私達もキッチンに行くよ」
「了解」

「うん」
「では、御気を付けて」
食材は調整して5日は持つようにしないかメイドさんに聞いてみよう……

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
あ、ちょっと言っておかなくっちゃね。
「ジル、ロザリーちゃんを泣かせちゃダメよ」
「…わかった」
「ジル～♪」
「イトハ様、恋のキューピットですね」
「モリッシュ、それ古いと思うわ…」
さ、門確認しに行かなきゃね。
ぎぃぃぃぃ…
嫌な音。どうにかならないかしら…
「相変わらず、塔に邪魔されて向こうが見えない。本当にどういう作りしてんだ…」
愚痴ってもなんにもならないわよ。…門は…閉まってる。リリーの言ってたとうりね。
「門以外に変化はないかい？無いならメイドさん達の居るキッチンに向かうけど」
「…そうじゃな。それにしても、もう太陽は沈んだみたいじゃな。早いの」
「あ～、1回空から出れないか試していい？魔法を打ち上げれば試せるでしょ？」
「そうじゃな。わらわがやろう。ほれ」
無詠唱でファイヤーボールを空に、
ボンッ！
撃ったら館と同じくらいの高さで弾けた…え？
「空から出るのも無理そうだね。収穫も有ったし館に戻ろうか」

姫様は予想してたみたいね。
あ、風魔法でジャンプ力上げて脱出できたら調査なんて必要だと思われないわね。
姫様に続いて館の左通路を通ってキッチンに着いた。ジルとメイドさんが料理を作っている。ロザリーちゃんはナイフやフォークを並べてる。
「じゃあ、報告会をしようか。メイドさん達の分の報告は少女にお願いしよう」
こうしてお互いの報告を聞くと、
2階の右は相当不気味だったみたいだけど、私達が調べた左側には何も無かった。
キッチンにも異常はないけど、地下への階段は気になる。調べるのは怖いけど…それにしても魔力が薄いって、ロザリーちゃんそんなコトわかるんだ。
「ますます少女が城に欲しくなったよ」
「だからロザリーはやらんのじゃ」
「えっと、えっと、」
「ロザリーちゃん、無理に止めなくて良いよ」
勇人、よく分かってるわ。
さて、これからどうしようかしらね～……

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ4

Ｓｉｄｅ：男Ａ

夕食がてら報告を聞き、ちょっと雑談をした。北第2大陸の北の国でカメラが開発されたとか、緑のエルフ、通称シルフがユビキタスに来る予定とか色々。そんな会話も一段落した時、

「皆に話しておきたい事が有るのじゃ」

リリーがそう切り出した。

「人間にはあまり知られとう無い話じゃが…他言無用と約束してくれるか？」

「…いいだろう。ユビキタスの公女として約束するよ」

「有り難い。話はわらわがこの館に出向いた理由じゃ。ロザリーの家では話せなかったのじゃが、お主らは信頼出来そうじゃし話しておく」

俺とロザリーには元々話すつもりだったな…

「実はこの館には死神が居るかもしれん」

…死神？

「物語に出てくるモノではなく、＜契約の死印＞とゆう特殊スキルを持った者の事なんじゃがな。おそらくとてつもない戦闘力を誇る筈じゃ」

死因？…いや、死印か？意味あり気なスキル名だな。

「このスキルを持つ者の素性を調べ、この者の人となりによって相応の対処をするのが魔王の役目の1つでの。わらわはそのために来た。

そして本題なんじゃが、恐らくこの者は殺さねばならん」

イトハと勇人が息を飲む。この2人は向こうの世界の人間なんだから当たり前だ。俺も正直、無反応でいれたか自信が無い。ロザリーとモリッシュは暗い顔をして顔を伏せている。ロザリーは追加で俺の服の袖を掴んでる。

「じゃが、先にも言った通りこの者は相当な使い手。よって、皆には1人になるのは避けて貰いたい。極力、固まって行動し、最低でも2人で行動して欲しい。
なに、ここに集まった者の実力ならば1対1でも負ける事はない。集団行動は怪我をしない為の安全策じゃ」
なるべくロザリーの側にいよう。どうせ俺達を守ろうと勇人とかメイドさん辺りが一緒に来るだろ。
「とまぁ、わらわから話す事は以上じゃ。空気を悪くしてスマンかった」
「…仕方ないさ。私たちなんて軽くピクニック気分だったんだ。これくらいの緊張感はむしろ大歓迎さ」
「フレイヤ様の言う通りです。それに勇人様の仕上がり具合を見るには丁度良い機会です」
「ああ。人が死んでんだ、元から放っておく訳にはいかない！」
「熱血ね」
「熱血ですね」
皆は調子戻ったみたいだ。さてロザリーは…まだ暗い顔。袖を掴んでた手を握ってあげると表情が明るくなった。これで全員。さて、
「晩飯食ったし、シャワー浴びない？ちょっと汗が気になるし、皆の浴衣も出来たんだ」
モリッシュさんのも急遽作る事になって遅れたが、全員分が完成したのだ。お披露目は早い方が良い。
「ロザリー達、先に行ってきてよ。皿とかは交代で洗えば良いしさ」
「1度に入れるの5人までだしアタシ後で。先にジルとお皿洗いしてる♪」
ロザリーありがとう。後で隠しておいたシャーベットをあげよう。
「シャワーの後にはデザートを用意しておりますので、皆様のシャワーが終わりましたらエントランスで頂きましょう」
こうして、女性陣の交代のシャワーと浴衣の初体験となった。

男2人のシャワールームにて。
「勇人さん、リリーは魔王なのに何もしないね」
「…俺はユビキタス公に『魔王に魔獣の手綱をしっかり握る様に説得してくれ』としか言われてない。それに、リリーちゃんは良い子だ」
相変わらず甘い人だと思った。
「君こそ、ロザリーちゃんとはこのままで良いのか？」
「あ～、どうなんだろ。好きだけど、もう家族だし、どうしていいか分からないんだ」
「近づき過ぎて距離が分からない？」
「そんな感じ。でもちゃんと好きだって言った方がいいんだろうな～」
まぁ、ロザリーの事は好きだ。どうすればいいか分からないのも本当だけど。
「そう言ってあげればいいんだよ。それだけさ」
「…わかった」
…いつ言おう？

「フレイヤ様、よく御似合いです」
「そうかい？意外と着やすいんだね」
「リリーも結構似合ってるわよ」
「そ、そうか／／／」
「いや、その初な反応は似合ってないわ…」
作ってくれと言っただけあって女性陣には好評。花柄の赤とか白とピンクのグラデーションのとか色々なデザインで好きなの選んでもらった。勇人も、
「城でパジャマ代わりに使えるな」
なんて言って紺のを着てる。これだけ褒められると製作者冥利に尽きる。数多くてメイドさんにヘルプ頼んだけど。
メイドさんは無表情だが、自分の作った浴衣が姫様に褒めて貰えた

時、微妙に頬が緩んだように見えた。知り合って数日だからそれが笑ったのかは見分けつかん。
「しかし、ジルの浴衣はこう見るとかなり改造してるんじゃな」
「まぁ、こうしないとダガー刺しておけないしね」
流石に帯にダガー2本支えるのは無理だった。背中側から帯が落ちてしまう。
「では、こちらが本日のデザート、各果物のジェラートになります」
葡萄の皮とか林檎の皮は意外とジェラートに混ぜると美味しかったので、メイドさんに味見をしてもらいOKされたので皆に出した。
ロザリーには1番味の良いのをあげた。俺は身内贔屓するタイプなのさ。
そうやって皆でくつろいでいると時計が10時半を示した。ロザリーとリリーはもう寝むそう。今夜はもう寝よう。
だが2階は1人部屋しかない。リリーには2人でいろと言われた…俺とロザリーは2人で1部屋、リリーとイトハも同じだが他の人はそうもいかずに1人1部屋ずつになった。まぁ皆大人だし2人じゃ1つのベットだと落ちるし仕方ない。用心してもらおう。
俺達は2階の階段から右4番目の部屋。歯は磨いたしあとは寝るだけ。姿勢は恒例の抱き枕スタイル。
「ジル…大丈夫だよね？」
…不安なんだろうな。そりゃそうだ。ロザリーは13歳だ。と言っても俺も目茶苦茶不安だ。
「大丈夫。ちゃんと、ここに居る」
そう言って俺を抱きしめてる手に自分のを重ねる。かなりクサい事言ってるがロザリーしかいないので気にしない。
少し離れた距離から扉の閉まる音がして、同時に時計塔が11時の鐘を鳴らした。
時計塔の鐘が鳴るのは5時と11時か。そんな事を思いながらロザリーの頭を撫でてあげるとゆっくりと眠りにおちていった。せめて夢の中では不安なんて感じないで欲しい…

だけど、そうも言ってられなさそうだ。
鐘の音が止んだ静寂の中で、微かに足音がする。
この館は全部絨毯が引かれてるから、普通なら足音はしない。だけど、この足音は金属音も混じってる。引っ掻くような金属音…そして音源は下。つまり、1階の氷の壁の先。
…氷の館の調査は、夜がメインになるかもしれない…

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ４（後書き）

たまにチョロッと描写がありますが、
男Aは地味に耳がいいです。

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ5

Ｓｉｄｅ：男勇者

皆でいた反動か部屋に入ると耳が痛いくらいの静けさに逆に落ち着かない。旅の最中は馬車の中だから皆が近くに居た。でも今は1人。壁の向こうにはフレイヤさんが居るとは分かってるけど、それでも遠く感じる。

扉の閉まる音と11時の鐘の音。扉はメイドさんだろうな。デザートの皿の片づけとか、ロザリーちゃんの事考えてジルくんに手伝ってもらってなかったし。俺も手伝おうとしたらやんわり断られた。無理に手伝おうとしても余計に時間を取らせてしまいそうで止めた。

コンコンッ

ん？何だ？

「勇人様、起きておられますか？」

「メイドさん？どうしたの？」

言いながらドアを開ける。メイドさんは浴衣を着ている。最初は渋ったけどジルくんとロザリーちゃんの『着ないの？』とゆう無言の涙目で着た。ジルくんのは演技だと分かってもあの少女のような見た目でやられたら断れないだろうな…

「ボウヤが館の異変に気付いた。氷の壁の向こうに何か居る」

フレイヤさんの声が硬い。

「リリーちゃんは？」

「魔王とはいえまだ子供だ。夜は無理だね」

逆に安心した自分がいた。どんな立場でも、子供に血生臭い世界は見せたくない…やっぱりジルくんには自己満足って言われるな。

「調査はこの3人で良いのか？」

「ああ、本当はボウヤも連れて行きたかったんだけどね。起きた時少女が不安がるから行けないと言われた。モリッシュは帰りを考えると無理はさせられない」

ジルくんはちゃんとロザリーちゃんの事考えてるな。ん？
「避けろっ！」
ヒュンッ、ザシュッ！
「…誰だ！」
「フレイヤ様、誰も投げていません。あの鎌自身が、こちらに飛んで来たのです」
メイドさんの言う通り、誰も投げなかった。ただ浮いていた鎌がひとりでに俺たち目がけて飛んできた。
刺さった床から鎌が抜ける。デカい、黒い、死神が持つような大鎌。
何であんなのが浮いてるんだよ！？
「ソードダンサーの亜種、と認識しますか？」
「そうだね。勇人、対処法は分かってるね」
「もちろん！」
剣を構える。
ソードダンサー。グールなんかのアンデット系で、浮いてひとりでに動く魔獣と言われてる。ただ何処に魔力を溜めてるのか解明されてない。剣に刻まれたルーンが変質して魔獣のようになってるんじゃないかって説が有力らしいが詳しくは知らない。
「メイドさんと勇人で前衛、私は後衛で行くよ！」
「ああ！」
「畏まりました」
ソードダンサーはその性質上、普通の打撃に耐性が有る。浮いてるからダメージを逃がせるんだ。だから剣で戦う時は地面や壁に叩き付けるのが1番良い。
だけど今回は動きを止めつつ、フレイヤさんの魔法でダメージを与える。それがソードダンサーとの一般的な戦い方。
「来た！」
俺のジュワユーズと大鎌が打ち合う。ゴーレムの1件以来、俺はジュワユーズを大剣にして使っている。しかしこの館の通路は振りまわせるほどの広さが無いから、大きさはこのまま。通路の幅を考え

ると、やっぱりジルくんが1番戦えるな。
「勇人、そのまま抑え込んで！光成す矛よ　邪を滅せ　ホーリーランス！」
「逃がしませんっ！」
大鎌が光の槍を避けようと俺から離れたが、メイドさんにホーリーランスの射程に押し込まれ、串刺しにされる。あとに残ったのは大鎌だった黒い塊とちょっと焦げた絨毯。一部は消滅しているので原型は留めていない。
「…1階に行こう。此れだけじゃ無い筈だよ」
「畏まりました」
「ジルくんの言ってた氷の壁だけでも確認しないとな」
それにまたソードダンサーが出たら、寝てる皆が危険だ。
1階は何も変わった様子は無かった。しかし…
「氷の壁、確かに変化が有るね」
フレイヤさんが皮肉気に笑う。氷の壁は有る。問題はその向こうに居る、何か。死神のような黒くてボロいマントを着た、人型の何か。死神としか言えない。これでさっきの大鎌を持ってたら完璧だ。顔は見えないが、目の辺りが青白く十字に輝いている。氷の壁を挟んでも目の輝きと黒マントが恐怖を煽る。ロザリーちゃんとイトハちゃんは苦手だろうな…
少しの睨み合い、死神が背を向けた。助かったと思った。だけど、その手にさっきまで無かった大鎌を握っているのを見て、背筋が凍った。
死神は1度も振り返らず、氷の闇に消えた。
金属を引っ掻くような、不快な音を鳴らしながら。

「アイツ、最初鎌なんて持ってなかったよな？」
「ああ、その筈だよ。得物は最初に確認した」
「振り返ると同時に出現しました。まるで契約武器の様に」
今夜はこれ以上動かない。それが俺達の決定。

あまりに情報が無さ過ぎる。迂闊に動くのはかえって危険だと思った。
明日キッチンの地下への階段を調べると決め、各々の部屋に戻ろうとして気が付いた。
大鎌の残骸が消えてる。
つまり、死神の手に現れた鎌は、あの大鎌の可能性が高い…
「…妙です。フレイヤ様の魔法の痕も有りません」
「…あの鎌が刺さった痕もだ」
「私達が1階で睨み合ってる内に直った？」
「そうなります。奇妙な現象ですが、詳しくは明日調査しましょう」
「そうだんね。お休み、勇人」
「ああ…」
不気味に思いながらも、疲れもあってすぐに眠りに落ちた。

「勇人様、間もなく朝食が出来ます。キッチンにお越し下さい」
メイドさんのモーンニグコールで目が覚めた。今何時だ？とりあえず下に降りよう。
「「勇人さん、おはよう」」
ギグの森の2人のあいさつ。可愛いな～♪
「勇者が1番寝ぼ助じゃな」
「全く、だらしない」
リリーちゃんとフレイヤさんのダブルパンチ。重いな～…
全員浴衣のままで朝食。朝食は卵焼きとベーコンとパン。朝はこれくらいが丁度良い。
「さて、昨日の夜の事で皆に話が有る」
皆が食べ終わったのを見計らってフレイヤさんが夜の事を話し始める。
「目は、十字に輝いておったんじゃな」
リリーちゃんの確認に頷く。
「…＜契約の死印＞の証は、右目に輝く十字模様じゃ」

…当たった。これで、この館に死神がいるのは確定した。
「あの時は氷を挟んでいましたから確定は出来ませんが、居ると思って対処すべきでしょうね」
「目が青白いって…もしかして俺と同じかな？」
ジルくんの目は空色だ。氷越しに青白く見えたなら有りえる。
「死神も氷の属性を使うかもしれない、か。ますます少女とイトハの需要が増えるね」
「ジルも火使えるよね？」
「一応はね。元々の魔力が小さいから期待できないけど」
確かにジルくんは魔力が低い。だけど格闘戦では魔法を使う暇なんて無い時の方が多い。あんまり気にしなくていいんじゃないか？
「じゃあ、今日は班を2つに分けよう。地下探索にボウヤと少女と私、勇人もだね。氷を融かす方にメイドさんと魔王にイトハにモリッシュだ」
「妥当じゃろうな。ソードダンサー相手に遠距離を2人置く必要はない。それにどちらが死神に遭遇しても氷対策は必要じゃし、わらわと公女は分かれるべきじゃ」
探索チームは決まった。壁が溶けたらそのまま死神捜索。無理だったら地下組に合流。ロザリーちゃんとリリーちゃんが懐中時計を持ってるのは大きい。
「では、準備が出来たら氷を融かせるか試すよ。直ぐに融けて死神が出て来たら全員で応戦。何もないようなら2班に分かれての調査。これでいいね？」
フレイヤさんの案に反対は出ない。多分これがベストの配置だからだ。
氷の館の調査、2日目が始まった。

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ５（後書き）

またしてもチーム分け
大勢の会話が難しいからじゃありません

…スイマセン嘘です難しいです
大勢の会話を違和感なく書いてる他の作家さんってスゴイ

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ６（前書き）

作者はウィザードリィとかのゲームでは各キャラは極振りで全体のバランスを取るタイプです

だからこの小説にはキャラは極端なスキルが多めになりがちです…

４万ＰＶ突破、ありがとうございました～

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ6

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

慣れない浴衣から動きやすいブレザーに着替えて準備完了。
このブレザーは耐物耐魔のルーンを込めて作られてて並みの鎧よりも硬いらしい。リリーがくれた。
「浴衣も良かったが、ブレザーも良いの～」
オヤジだわ…可愛らしいワンピース着たオヤジがいるわ…
「良く御似合いです」
「あれって高いんですよね～」
アンタの着てるドレスだって同じ作りでしょうが…
皆準備はバッチリ。あとは始めるだけね。
「打ち合わせ通りにわらわとイトハとロザリーで氷を融かす。準備は良いな？」
「ＯＫ！」
「大丈夫！」
「では、攻撃開始じゃ！」
リリーの号令で一斉に炎魔法を放つ。
リリーの魔法が1番かと思ったらロザリーちゃんの魔法も同レベル。
見た目はリリーの方がスゴイけどロザリーちゃんのは1つの場所に対してスゴイ強い魔法を出している。ロザリーちゃんが攻撃してるトコは少しずつ融けて来てる。
これは…負けてられないわね…
ガ・ジャルグの能力でタイムラグ無しに炎を生み出してるから2人に見劣りしないけど、武器が無かったら確実にお荷物だったわ。
…それだけは、イヤ！それに氷は確実に融けてきてるんだからとにかく撃ち続ける！
そうして私の魔力が大分辛くなってきた頃、
「融けきった、のかな？」

「みたいじゃの。2人とも、ご苦労じゃ」
「これくらい、全然、平気よ…」
「そんなに無理しなくても…」
ジル、ウッサイわよ！
「…死神が出てくる様子は無いね」
「そうですね。では、予定通りに動きますか？」
「そうしよう。魔王の方はイトハの息が整うまで待機してな。いざって時に息切れしてるのは危険だ」
…しょうがないわね、ココは意地張らないで休ませてもらいましょう。
「私達は行くけど、そっちも気を付けてな」
「リリーちゃんもイトハちゃんも、無理はしちゃダメだぞ」
勇人ってロリコン？
「リリー、頑張ってね」
「ロザリー、涙目で言っても説得力無いよ…」
ロザリーちゃん怖いの苦手みたいね…
「いいから早う行くのじゃ」
皆行ったわね…私達も休んだら調査始めなきゃね…

「もう大丈夫。始めましょう」
「宜しいのですね？」
「無理はしとらんな？」
「怪我には気を付けて下さいね？」
私ってそんなに意地っ張りに見えるのかしら？
とりあえず通路を進む。
このメンバーで昨日死神を見たのはメイドさんだけ。でも死神の情報を1番持ってるのはリリー。この2人がコッチにいるのは当たり前かしらね。
向こうの戦力と比較しちゃうと申し訳なくなるけど…
「…扉ですね」

キッチンに行く時と同じくらいの距離歩いたら、ステンドグラスじゃない普通の両扉が有った。
「開きます。ご用心を」
ぎぃぃぃぃ…
ココも嫌な音がするわね…中は…
「…実験室？」
扉の先には薬品棚や実験器具の散乱した机。小動物の標本なんかもある…ホルマリン漬けみたいで気持ち悪い…うえぇ…
「しかし、此処も埃等は有りませんね」
「そうじゃな…まるで実験に失敗した直後のようじゃ。薬液は散乱しとらんがの」
そう。実験器具には明らかに液体が入ってたような物も散乱してるのに机も床も濡れてない。
全部乾いたってコト？それでも机に粉とか残らない？
「他の部屋に通ずる扉などは無いか？」
「無い様ですね。ただ、研究日誌なら見つけました」
「あ、コッチには床に収納スペース用のドアは有りましたよ？」
「…日誌はメイドさんに任せて、モリッシュの見つけたの開けてみましょうか？」
「いや、先に日誌を読むのじゃ。周囲の警戒は怠るでないぞ」
さて、どんな内容かしら？
「…此処は戦争の後から魔獣の実験をしていたようですね。この館に何匹かの魔獣が連れ込まれた所から始まっています」
「この館は前の戦争より前から有るが、持ち主によって用途が全く異なるからの」
「一番多いのが実験目的でしたけどね～」
「前の戦争って、１００年前だったかしら？古いわね」
「はい、歴史だけならば相当なものです。この日誌も９５年前の日付から始まっています」
「古いですね～。あ、続きをお願いします」

「はい。実験の目的は…魔獣に魔族のような理性を持たせられないか、とゆうものだったようです」
「魔獣に理性？」
「はい。そうすれば魔獣による人への被害を抑えられると考えたようですが…」
「どうしたんじゃ？」
「実験を指揮していた博士の息子が他界してから、研究手段が変わったようです」
「…具体的にどうなったの？」
「囚人を使った人体実験。各国から死刑ではない囚人を買ったようです。国としても牢に入れておくだけの囚人の為に食事を用意するよりは買い取ってくれる方が良かったのでしょう。どうせ奴隷のような扱いを受けるならと、被害者遺族も納得しますし」
「もしかして…」
「はい。魔獣に人の脳を移植したり、人の血を打ち続けたり…とにかく、あらゆる手段で人と魔獣を同化させようとしたみたいです」
「そんなもの…成功するはずがないのじゃ」
「確かに。違う生物同士を同化させようとも普通は出来ません…ですが…」
「…成功したのね…」
自分の声が震えているのが分かる。
「はい。数多くの実験中、偶発的に、また確率的に成功を引き当てたようです…それでも、人としての理性は持たない、全く別の生き物が生まれたようですが…」
「…成功と言うより、発見と言うべきなんでしょうね」
「それも魔獣も人も巻き込んだ悪魔の実験で、の」
「耐えられなくなった研究員も多かったようですが…その研究員も実験に使ったようですね」
「…気分悪いわね」
「全くじゃ…その成功例はどうなったんじゃ？」

「人としての理性が無いだけで、一貫した思考は持ち合わせてたようですから、そのまま観察対象として精神的な実験に移行された様ですが…駄目ですね。内容は書いてませんし、続きが書いて有りません」
「そうか…博士の名前は分かるかの？」
「はい。ギャレット・フェルマー。戦争で数多くの神祖を毒の霧等で殺した、稀代の生物学者です」
神祖って、ロザリーちゃんは、
「…無関係の者も数多く殺した、稀代の殺戮者でも在ったな」
何よそれ…関係無い人も殺したって…
『ママのコトを悪く言うな――っ！！』
なっ、何の声！？
獣の呻き声にも、子供の喚き声にも聞こえる叫び。
「なっ！しまっ、」
リリーの足が凍り付けに…氷が少しずつ上に…
「リリー様！」
「触るなっ！速くエントランスにっ、」
「リリーっ！」
「イトハ様、今はリリー様の言う通りに！」
メイドさんが私を抱えてドアに走る。モリッシュも唇を噛み切りそうな表情で走ってる。
メイドさんに抱き上げられて部屋から出る時、扉の合間から見えたのは、完全に凍り付けになって固まってる、
リリーの安心した目だった……

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ7

Ｓｉｄｅ：男Ａ

キッチンに有った地下への階段の前で準備に抜かりが無いか確認。
忘れ物無し。
「行けるね？」
「ああ。光、頼んでいい？」
「ああ、そうだったね。闇を照らせ　ライト」
「…結構深いな」
「うぅ～…」
ロザリーはホラーがダメらしい。しかし今回の班分けではどうしようもない。ロザリーも微妙に運悪いな～。
「少女、怖かったらボウヤの側を離れなければいいのさ。そうだろう？」
そう言って俺にニヤ～って感じの笑みを向けてきた…はいはい…
「大丈夫、怖くないよ」
ロザリーに手を伸ばす。手を繋げば多少は安心出来るだろう。姫様はガッカリしてる…これ以上を俺に期待するな。
「…うん♪」
これでロザリーが安心するなら安いモノか。
「じゃ、おふざけも此処までにして、行こうか」
ふざけてたのはアンタだけだ…
1人しか通れない幅の階段を1歩1歩降りる。もしかしたら腐った段が有るかもしれないから慎重に。
先頭から光を持った姫様、俺、ロザリー、勇人。
これなら前後のどちらから攻撃されても対処出来る。キッチンに行った時と配置の意味は変わらない。
途中折り返しがあって、大体2階分ぐらい降りたら金属製の扉の前に出た。

姫様が振り返って全員に合図してから静かに開けた。
不快な音がしないのは助かる。
中は真っ暗だが姫様のライトを館の地上部と同じように全体に設定したようで、すぐに光に満たされた。
「…ワインの貯蔵庫？」
目の前には沢山の菱形の棚。
地下はワインを保管しておく施設だった。瓶で保存するように作ったみたいだ。
「みたいだね。それも、かなり広い」
棚の向こうには同じような棚がいくつか見える。
「こんなに大きいと逆に大変だろうに」
「でも1本もないね？」
そう、見える限りワインが1本も置いてない。
「とりあえず…ここの調査か？」
「そうだね」
そう言って棚の横を目指して歩き出すと、
「全員、武器構えっ！」
言われる前ロザリーの手を離しダガーを抜き始め、言い終わる頃には構え終わり姫様の前に出る。
棚の横影から勇人達が遭遇したとゆう大鎌、ソードダンサーが出てくるのは同時。
目があるかは知らないが、一瞬の睨み合い…来るっ！
シャオォンッ！
上から振るわれる鎌の外側にダガーを当て、軌道を変えて棚の方に振り抜かせる。棚の足が切れてコッチに倒れそうになるが、勇人が大きくした剣の腹で叩き向こう側に倒す。
「雷甲！」
蹴って壁に叩き付ける。
「フレア！」
分かってたかのようにロザリーの魔法がピンポイントで灰も残さず

焼き払う。
完全に振り抜いた反動で動きが鈍かった。その辺は浮いてるのに変わらないのかと感心してたら、
「私達の出番は無さそうだね…」
「俺は一応棚を押し戻したぞ…」
確かに、この2人戦う前に倒したからなぁ。
「勇人さんがいたから俺はソードダンサーに集中出来たよ」
「姫様が周り警戒しててくれたからジルに合わせられたんだよ？」
子供2人の白々しいフォロー。ロザリーは必死にフォローしようとしてるけど。
「いや、突発的な戦闘ではやっぱり2人の方が私達より上手いね。これはウカウカしてられない」
「ジルくん、後で今の魔法教えてくれ。爆進は無理だったけど今度こそは！」
実は、旅の途中にイトハと勇人に聞かれて爆進を教えたらイトハは『気持ち悪い…』と言って断念した。勇人はそもそも魔法が発動しないので光魔法にアレンジして教えてみよう。
しかしイトハのおかげで爆進はかなり上体が揺れるので慣れないとダメだと分かった。俺は小柄だから揺れが少ないのかもしれない。
「まさか此処にアレが居るなんてね…気を引き締めないとね」
「…もしかしてあの部屋の札って本当に姿を消す魔法を使おうとしたのか？」
あぁ、何かそんな事報告会で話してたな。
「恐らく、そうなんだろうね。でも効かなかったんだろうね。餓死した残骸が無かった」
エグイ話だな～。
ん？アレは…
「ねえ、アレって扉じゃない？」
棚を倒した方には同じ棚が並んでて、ドミノ倒しみたいになったのだが…

「…勇人、棚戻せ」
棚に扉が埋もれてる…しかも棚は結構な数が重なってる。
「無理だろ！一体何個重なってると思ってるんだよっ！」
「切っちゃえばいいんじゃないかな？」
「「「…それだ！」」」
ロザリーの提案に乗って勇人が長くした剣で棚を斬り、扉までの道を作った。
「初めて役に立ったのが棚切る事な俺って…」
ショックな気持ちは分かるがウザいから凹むな。
「扉の先にもソードダンサーが居るかもしれない。勇人が先頭、私、少女、ボウヤの順に中に入るよ。ボウヤは状況見て前に出る事」
「分かった」
姫様が扉を手前に開き、勇人が中に入る。
またしても音が無かった。
『ママのコトを悪く言うな――――っ！！』
何だ？今の子供のような獣のような声。
「死神っ！」
なっ！
勇人の声に反応して、２人を抜き先頭の勇人に並ぶ。部屋は意外と大きく、１０人くらいで暴れまわっても平気そうだ。奥と左に扉が有る。
「あれが死神で合ってる？」
目の前には俺達に右半身を向けた、さっきの大鎌を持った黒いボロコートの人型が天井を睨んでいる所だった。
「ああ、昨日見たのは確かに奴だね。目に十字の模様も有る」
確かに、右目に輝く十字模様が有る…確定だな…
「魔法が暴発してる？」
ロザリーの言葉で周りを観察してみると、天井や部屋の壁に置いてある本棚、薬品棚が少しずつ凍っていっていく。
暴発と言ったのは正解のようだ。単発の魔法が何回も発動している

のだろう。だから数ヶ所が凍る。
「止めるぞっ！」
勇人が剣を振り被って切り込む。死神は俺達に気付いて、鎌で剣を受け止めた。
「何だ、あの体…」
「ボウヤ、勇人と一緒にアイツの動きを！」
「分かった」
気になる事はあるけど、今はコイツを止める。その後の判断はリリーに任せよう。
死神に爆進で距離を詰める。武器が1つなら避けるか？
『何なんだよっ！お前らは――――っ！』
避けずに大鎌を力任せに振り回し勇人を押しのけた。その隙に懐に入りダガーで横腹を斬ろうとしたら鎌の柄の部分で弾かれた。
『僕を苛めに来たのか！？ママを苛めに来たのか！？だったら、殺してやるっ！！』
闇雲に振り回してるだけだが、思った以上に全体をカバーする振り回し方のようだ。
まぁ、1ヶ所に止まっててくれるなら丁度良い。
「光成す矛よ　邪を滅せ　ホーリーランス」
無数の光の槍が死神の周辺に降り注ぐ。
『やめろよっ！ママが、ママが死んじゃうだろーっ！！』
さっきより強い魔法の暴発。部屋全体にいくつもデカい氷が生み出される。
「危ないっ！」
「なっ、少女！！」
え？
2人の方を見たら、姫様を突き飛ばしたロザリーが凍り付けになっていく所だった。
少しずつ、でも確かな速さで、足からロザリーが氷に呑まれていく
「フレアで融かせっ！」

今ならまだ、
「えへへ、失敗しちゃった…」
「ロザリー！」
何笑ってんだよ！速く魔法を、
「ボウヤ、これ以上はお前もマズい！」
「ジルくん、今部屋を出なきゃロザリーちゃんを助ける事も出来ないんだぞっ！」
分かってる、分かってるけど…
勇人が俺を抱きかかえ、左の扉を蹴破り階段を上る。
「…ゴメンね♪」
ロザリーは、笑ってた……

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ7（後書き）

作者はコメディもシリアスも両方好きです

まぁ、節操の無い雑食屋なんです

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ8

Ｓｉｄｅ：男勇者

ジルくんを抱えて階段を2段飛ばしで上る。途中折り返してようやく終わりが見えたけど、それは壁だった。

当り前だ。キッチンの地下への階段だって閉まってたら同じような状態の筈だ。

だから躊躇いなくジュワユーズで突き壊して外に出る。

「…此処は、時計塔に繋がってたんだね」

『逃がさないっ、絶対に逃がさないっ！！』

まだ追ってくる！とにかくリリーちゃん達と合流しよう。

「勇人さん、降ろして。館の中で迎え撃つんでしょ？」

「ああ。アイツを倒して、ロザリーちゃんは絶対助けるぞ」

「分かってる……ロザリーは笑ってた…」

俺だって聞いたさ。『ゴメンね♪』って…

「だから、これからも笑えるようにする」

ジルくんから感じたプレッシャーは、気のせいじゃない。

屋敷の扉を潜りながら、そう思った。

俺達が屋敷に入り鍵を閉めるとエントランスには、泣き崩れてるイトハと、戸惑ってるモリッシュ、周りを警戒してるメイドさんの3人がいた。

「姫様…リリーが、リリーが凍り付けになっちゃったよぉ…」

フレイヤさんに気付いて、イトハが泣き付いてきた。

…リリーちゃんも、だって…

「…最初の暴発に巻き込まれたんだろうね…勇人、死神は？」

「俺達を追ってたから、多分もう扉の前だ」

「なら魔王を救うなら今だね。メイドさん、魔王が居る場所にイトハを連れて行ってくれ。氷を融かす」

「え？」
扉を開けようとする音がした。
イトハちゃんが希望を見つけた様に顔を上げる。
「その間は俺達が死神を抑える、か？」
開かなくてタックルを始めた。
ジルくんがフレイヤさんに聞いてる。ロザリーちゃんを先に、と言いたいのか？
「ああ、そうすれば勝率が一気に上がるからね。勇人、モリッシュ、いいね！」
扉が軋み、もう保たない事を示す。
戸惑ってたモリッシュさんの目に力が宿り俺と一緒に頷く。
「なら、そのまま地下への入り口を探してロザリーを探して。ロザリーも地下で…凍った」
…そうか、あの奥の扉は…位置的にはキッチンの反対側に通じてた。
「…畏まりました。必ず御2人を連れて戻ります」
「…ジル、必ず待ってなさい…絶対、2人とも助けるから…だから、」
扉の隙間から死神が見える。向こうもコッチが見えたみたいだ。
「速く行って。そんで、速く帰ってきて」
「分かってるわっ！ちゃんと生きてなさいよっ！」
「御武運を」
そう言ってイトハちゃんとメイドさんが走りだすのと、死神が扉を突き破って館に入って来たのは同時だった。
『お前達もママを苛めに来たのかっ！』
死神がメイドさん達を追おうとしたが、
「行かせねえ！」
正面に割り込み、ジュワユーズを振り降ろす。後ろに飛んでかわされたが、2人は向こうに行けたんだから良しとする。
『何で、何で皆、僕とママを苛めるんだっ！』
「知るか」

ジルくんが死神に言い放った。
「俺はお前にも、お前の母親にも興味が無い」
ダガーを持ち、左半身を前にするだけの、我流の構えを取っている。
「だけどお前はロザリーに手を出したんだ」
少し腰を落とし、前だけに集中したような姿勢になる。
「だから、」
無詠唱で爆進を使い、
「お前は俺の、敵だっ！！」
死神に突っ込んで行った。

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
後ろで勇人が剣を振り降ろしたんだろう轟音と、ジルの爆進だろう爆発音が聞こえた。
死神が憎い。でも今は、リリーの方が先だ。
アイツは、後でどうとでもなる。
ヒュンッ！
「邪魔ですっ！」
実験室の扉から出てきたソードダンサーをメイドさんが手の一振りで壁に叩き付け、衝撃で砕いた。
私の魔力はリリーとロザリーちゃんに取っておくよう言われた。
「リリーッ！」
実験室に入るとリリーがいた。氷の中で、安心した様な顔した、馬鹿な子が、いた…
「…始めるわ。ソードダンサーが来たら、お願い」
「畏まりました」
ガ・ジャルグを使い、リリーを閉じ込めてる氷を融かす為の炎を集める。
部分的に長い時間をかけて溶かすと、酸欠で死んでしまう。だから全体を一気に融かす。そうすれば、あとはロザリーちゃんを同じように助けて、皆に合流して、あの死神を…

「メイドさん、あとどれくらい？」
「もう少し…その量です。その炎を上から素早く振り降ろして下さい」
自分でも熱くて倒れそうなほどの熱量…だけど、倒れる訳にはいかない。
「リリー、起きなさいっ！」
ガ・ジャルグの先端に炎を固定して、振り抜く。
氷がゆっくり融けるような生易しい温度じゃない。ガ・ジャルクで熱量も操作しなくちゃ、私もメイドさんも融けてるような温度で、リリーは傷つけず、氷だけを溶かすイメージを込めての炎。魔力が一気に空になるような感覚に、気が遠くなって倒れそうになる。
「御見事です」
氷が融けて倒れたリリーを受け止めながらメイドさんが褒めてくれた。
「…リリーは？」
「ご無事です。心臓もしっかりと動いております」
「そう…良かった…良かっ、た…」
…泣いてんか、ないわ…まだ、ロザリーちゃんが残ってるんだから！
「リリー、起きなさい。リリー」
「凍り付けに成った際に気を失われたのです。本当ならば、安静にして自然に目が覚めるのを待つ所ですが…」
今はそんなコト、言ってられない…
「…リリー、起きて…アンタの親友が、アンタと同じように凍ってんのよ…だから、今から助けに行かなくちゃいけないの！ジルは、自分が何も出来ないって分かってて、何かしたいのに、何も出来ない現実と戦ってる！今も、私がロザリーちゃんを助ける時間を稼ぐために、ロザリーちゃんの側にいたい気持ちを殺してるの！」
聞こえるはずない。こんなんで起きるはずない…
「ねぇ、起きて…酷いコト言ってるのは分かってる…でも、必要なコトなの…今、アンタが起きなきゃ、ロザリーちゃんが危ないの…

今起きたら、アンタの言うコト何でも聞いてあげても良い！キスでも、結婚でも、何でも良い！だから…だから、私に、アンタを好きなままで、いさせてよぉ……」

最後は自分でも分かるくらい、声が震えてた…

「…とぅ、ぁな…」

「イトハ様、お静かに！」

リリー…

「本、当…じゃな…」

起きるの、遅いわよぉ…

思わず、抱きしめてしまった……

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ9

Ｓｉｄｅ：姫巫女

連携が取れない。

今、私の目の前で大剣とダガーを振る2人を見たらそれしか思い付かない。

片や力で、片や速さで、死神の雑な攻撃を弾き、かわし、氷を砕く。

その度に、机や椅子が吹き飛ぶが、不思議と壊れない。

ただ、2人とも完全に怒りに任せて動いているのが分かる。この状況は長くは続かない。

死神が勇人と打ち合う合間にボウヤは肉薄し、硬い皮膚にダガーを突きたてる。

そうしてコートが切れていくと、死神の体が見えてくる。

人ではない、奇妙な体が。

前身は黒い毛に覆われ、指は3本で鋭い爪が付いている。足も鳥のような指と爪で、しかも膝が逆関節だ。魔族としても、どこかおかしい。

昨夜ボウヤが聞いた引っ掻くような音は爪が絨毯下の床まで届いたからなんだろうね。

「大丈夫でしょうか…」

「今は待つんだ。ボウヤが速過ぎて、私やお前じゃサポート出来ないだろう」

「はい…ロザリー様が来てくれれば…」

確かに、ボウヤに合わせられるのは少女だけだ。だけど、

「無い物ねだりはしないよ。それに、直ぐに来るさ」

「モリッシュさん、交代！」

「え？あ、はいっ！」

どうゆう事だい？私の居る所までボウヤが下がって来る。

「姫様、もう少ししたら、勇人さんと交代して。今のペースじゃ長

くは戦えない」
「…意外と冷静じゃの」
「怒りに任せて、冷静さを欠いて、それでロザリーが助かるなら幾らでもそうしてやる」
吐き捨てる様に言った。
むしろ怒った結果、冷静に成ったのかね。
「それに俺と勇人さんの動きに慣れてる時に違う動きが混ざれば、多少動きも鈍くなるでしょ」
…本当に強かだね。これは怖い。
「分かった…勇人、交代だよ！」
「ＯＫ！」
勇人が力任せに死神を暖炉の前に弾き飛ばして下がる。すかさず素手のモリッシュが肉薄し、至近距離で三段蹴りを放つ。
２発は鎌で止められたけど最後は腹に決まった。
技の直後で硬直している所に鎌が振り降ろされるが、
「させないさ。下がれ」
鎌を棒で弾き、距離を取る。
「有難うございます」
「なに、これは集団戦。チームプレイでいこうじゃないか」
頷き合う。さて、始めようか。
『何なんだよ、お前らは！何で、何でまだ生きてるんだよっ！』
またしても魔法の暴発。
だけど、もう２度と当たらない。さっき少女が凍ったのは私のミスだ。もう繰り返さない。
「そう何度、同じ手が通じると思うな！」
棒術で正面から打ち合う。
雑に振り回すだけの死神の鎌をすり抜け、確実に捉え、ダメージを蓄積させる。
『くそっ、くそっ！痛いじゃないかーっ！』
無理矢理横薙ぎに振って来る。ボウヤの技、使わせてもらおうか。

シャオォンッ！
鎌の外側に棒の先端を当て、上に軌道修正してやる。胴体がガラ空きだっ！
「そこだっ！」
モリッシュの強烈な三段蹴りが全て入る。これなら…
『痛い、痛い痛い痛い痛い痛い！』
「当然だ。貴様にはこれでもまだ温い」
…モリッシュの口調が変わってる？
「貴様は有ろう事かリリー様に牙を剥いた」
死神が激昂し魔法を暴発させるが、モリッシュは生み出された氷を砕き、死神に投げつける。
「そんな貴様がこの程度で許されると思うな」
その影からもう一度、私が正面から打ち合う。
「貴様はこの場で処刑するっ！」
ほんの少しの隙を作った瞬間、モリッシュによる連続蹴りが死神を襲う。
足を踏み付け、膝関節の逆向きに蹴りを入れ、鳩尾と思われる位置を蹴り抜き、鎌を持つ手を蹴り上げ、顔を刈る。
まるで踊る様に、死神の周りを回りながら蹴り続ける。
それでも、死神は異常な頑丈さで無理矢理モリッシュの蹴りを弾いた。
「まだ終わってないっ！」
モリッシュがもう一度、死神に挑む。
「そう、まだだ…」
「いっけ――――――――――っ！！」
後ろを見ると勇人の大剣の腹にボウヤが乗り、勇人に打ち出される所だった。
爆進も使ったのだろう凄まじい速さで、モリッシュに気を取られた死神に打ち出されたボウヤは、２本のダガーを死神の胸に深く突き刺し、その勢いで死神を宙に浮かせた。

『これくらいで僕を止められると思うなーっ！』
「自惚れるな」
ボウヤの狙いが分かり、足に私の棒を付けてやる。
「お前如きが狙いじゃない」
私の棒を足場にした爆進で死神を暖炉の上の絵画に押し付ける。
思った以上に反動が強くて棒を持ってられなくなってしまった。
ボウヤが何時の間にか右手をダガーから離し、掌底を深く構える。
「館ごと消え去れ。雷槍、六華！」
『やめろ――――っ！』
ボウヤの右手を六つの魔法陣が囲み、上の魔法陣が雷槍を打ち出すと回転して入れ替わり、高速で同一の魔法を叩き込む。
計６発の雷槍が、死神の背後の絵画ごと、全てを貫いた。

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
リリーが目を覚まして、直ぐにあの収納スペースだと思ってた床扉を開けたら予想通り階段だった。
駆け足で降りるとドアがあったから、体当たりのような勢いで開けた。
「…地下研究室じゃな」
「ロザリーちゃんはっ？」
「此処には居ない様です。あちらに扉が有ります」
メイドさんに言われた方にドアを押し開けると氷まみれの大部屋に出た。右と正面にドア。
そして、正面のドアの前には、
「…ロザリー」
笑ってるロザリーちゃんがいた…
何、笑ってんのよ…
「イトハ様、お急ぎ下さい」
言われなくても。
さっきと同じ要領でガ・ジャルグの先端に炎を集める。

正直、魔力が足りるか分からない…
「イトハ様、まだ足りません」
って言われても、もう熱量操作するのも…
「熱量はわらわが操作する。イトハは炎を集める事だけに専念するのじゃ」
「お急ぎ下さい。ソードダンサーが来ました」
嘘、
「直ぐに殲滅してまいります。リリー様、必要な炎の量は分かりますね？」
「任せるのじゃ。仮にも魔王、それくらいは分かる」
「では、お任せ致します」
そう言ってメイドさんは今来た道を戻って行った。
1度も振り返らないその背中は、ちょっとカッコ良かった。
「イトハ、もう少しじゃ。熱量は気にするな」
分かってる…もう少し、もう少し…イメージは、氷だけを融かす…
ロザリーちゃんは、傷つけない…
「それで充分じゃ。やれい！」
たっぷり5分もかけて、ようやく必要な炎が集まった。
「――――っ！」
声にならない叫び声を上げながら振るった炎は、確かにロザリーちゃんの氷を消し飛ばした。
長い黒髪をなびかせて、氷から解放される姿は、ちょっと幻想的だった。
「心臓は…動いとるの。息もしておる…成功じゃ」
良かった…でも、私もう動けないわ～…

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ１０（前書き）

エクシリアが楽しくてストックが書けない！
…がんばって書こう…

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ１０

Ｓｉｄｅ：男勇者

「…倒したのか？」

流石に子供とは言え人１人を乗せた大剣を振るのは辛かった…腕がまだ痺れてる…

ジルくんは魔法を打った後、気絶してしまった。多分、魔力を一気に消費したショックだろう。

魔力が低いのに、無理をさせてしまった…

死神は、ダガーで絵画に張り付けられている。今の所、動かない。

『…が…』

「っ！フレイヤさん、ジルくん持って下がれ！」

まだ生きてる！

『…絵が…』

あの絵画がどうしたってんだ？

「あの絵が、この館を守るルーンだったのさ」

「絵が？」

「ルーンはイメージ出来るなら何でもいい。人が使う時は言葉や文字が多いから忘れがちだけど、絵でもルーンは刻めるんだよ。そして気付くのが遅れたけど、絵画は普通、新築の状態を描く」

そうだっ！入った時に確認したじゃないか！

あの絵は『不気味な館』を描いてた。不気味な今の館を。

だからジルくんは死神に『眼中に無い』なんて言ったのか…

「多分、この館はもう保たないね」

『う、ああぁぁぁぁっ！』

死神が急に顔を抑えて叫び始めた。泣いてるのかと思ったが、そうじゃない…右目を抑えてる。

「＜契約の死印＞が原因か？」

「…恐らく、＜契約の死印＞が移るのです」

モリッシュさん？
「スキルが移るなんて事有るのかい？」
「はい。以前、先代魔王様がスキルが移る時に、あのように激痛に襲われているのを見た事があります…」
「一体誰に…ボウヤ！？」
まだ気絶してるジルくんの右目が開き、少しずつ、模様が浮かび上がる。輝く、十字模様が…
「嘘だろ…ジルくんが…死神に…」
「ボウヤ！ボウヤ、起きるんだよ！」
「う、ぁ…」
起きた。
「…気持ち悪」
…起きて第一声がそれかよ…
しかもまた意識失った…いや、寝てる！寝息立ててる！
『マ、マ…何処にいるの…ママ、ァ…』
振り返ると、死神の体が少しずつ、無くなっていく…
肉が腐敗臭もしないで消えていき、骨だけが残り、その骨も、消えていく…
最後には来ていたコートも消え、何も残らなかった…
「この館も、時期こうなるのかもね…」
「…絵は…やっぱり砕けてるか」
暖炉の上には、中央に大きな穴が空き、全体にヒビが広がっている、氷の館が写っていた。
もうルーンとして機能しないだろう…
「ふぅ…メイドさん達が来るのを待つかね…」
「くぅ～、くぅ～…」
静かになったエントランスにジルくんの寝息が響いてた…
緊迫感仕事してくれ……

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「お待たせしました。ロザリー様は…御無事の様ですね」
隣の部屋で何体かのソードダンサーを1人で倒してきたメイドさん。
やっぱ強いわ…
「うむ。あとは安静にして居れば自然と目を覚ますじゃろう」
今ロザリーちゃんはリリーが支えてる。私もリリーもロザリーちゃんを運べるほど力がないからメイドさん頼りだ…
『貴女達、速くここを出た方が良いわよ』
「誰じゃっ！」
メイドさんが構える。遅れて私も構える。
この部屋に隠れる場所なんて…
『ここよ、ここ。貴女達が入ってきた扉の横』
言われて見たらそこには開かれた本が乗せられた祭壇みたいなのがあった…
「…本が喋ってるの？」
『うふふ、死神がいるのよ？本が喋るくらい普通よ』
絶対違うと思うわ。
『それより速くこの館を出ないと生き埋めになっちゃうわよ』
「…エントランスの絵画ですか？」
『正解。あれはこの館を維持するルーンだったんだけどね、さっき壊れちゃった。貴女達の言う死神も死んだわ』
絵がルーン？確かにイメージはしやすいでしょうけど…出来るの？
「…御忠告有難う御座います。ギャレット・フェルマー」
『うふふ、私はただの喋る本よ。早く行きなさい横の扉が出口への近道よ』
本に促されて横のドアから部屋を出る。
『これで、あの子も…』
最後に部屋を出る時聞こえたのは、
『ちゃんと眠れる…』
まるで子供を心配する母親のような呟きだった…

階段を登りきるとそのまま館の前に出た。破壊されたドアからは倒れてるジルを介抱してる3人の姿が見えた。
「フレイヤ様、只今戻りました」
「お帰り、メイドさん。魔王も、よく生きててくれた」
「心配掛けた。ロザリーも時期目を覚ますじゃろうが…ジルめ、だらしが無いのう」
「そう言ってやるな。死神が憎くて仕方ない筈なのに、冷静に最善の手を考えて行動してたんだ」
「そうだぞ。本当ならロザリーちゃんの側に居たかったのに、イトハちゃんが助けるのを信じてここに残ったんだ。最後にブチ壊しにしてくれたけど…」
「ふっ、わかっておるのじゃ。死神は…死んだんじゃな？」
「ああ、ボウヤが止めを刺した」
「…＜契約の死印＞が移ったな？」
「知ってたのかい？」
「…うむ」
「皆様、館から離れましょう。時期に崩れる可能性が有ります」
そうだった！絵は…中央からぶち抜かれてる！？
って、館の端が崩れ始めた！？
「食料はエントランスに運んである！手の空いてる者は持てるだけもって門に走れ！」
メイドさんが2人を抱え、他の皆で持てる食料を全て持って門に走る。
「って閉まってるわよ！！」
門はまだ閉まってる。これじゃ出れない…
「勇人、壊せっ！」
「おう！行っくぜーっ！」
勇人が荷物を投げ捨て、剣を抜き構える。
剣がどんどん大きくなり、４メートルくらいの大きさになると、魔力を体中に流して体を強化し始めた。

何で魔法使えないのに身体強化は出来るのよ!?
魔力は魔法以外にも体の強化にも使える。ただし、これは相当な魔力量と精密な魔力操作の両方が揃って初めて出来るコトだってリリーに聞いたのに…魔法も発動出来ない勇人にこんなコト出来るはずない…
「切り裂けっ!」
気合いの入った声で4メートルもの剣を振り、鋼鉄の門を切り裂いた。
…非常識だわ…
「速く出るのじゃっ!」
館どころか時計塔まで崩れてきた。そりゃそうよね、絵には時計塔も入ってるんだもん…
って考えてる場合じゃな~いっ!
皆で館の崩壊に巻き込まれない位置までダッシュ!
途中、モリッシュがケンタウロスの姿に戻って馬車を運び、全員に乗るように言ったので、飛び乗って、馬車に当たりそうな破片は魔法で撃ち落とした。
そうして、館の見える丘まで避難した。ちょっと逃げ過ぎた気はした…
丘からは、崩壊した館の残骸が見えた。
「ルーンが壊れてて良かったよ。でなけりゃ流石に壊せなかったろうしね」
「あ、最初に外からじゃ傷も付けられなかったのって、あのルーンが有ったから?」
「たぶんね。エントランスで死神と戦ってる時、椅子や机が傷つかなかったんだ。
地下の物は壊せるのに、あの部屋の物は壊せない。
そして、初日の夜は壊れてた筈の物が直ってた。
だからエントランスが1番ルーンの影響を受けてると思ったんだ。」
「どう言うコト?」

「絵は館の外観を描いているから外の壁が1番硬い筈だけど、中は描かれてない。なら後は距離の問題だと思ったんだよ」
「つまり、ルーンに近い物は壊れない、遠い物は壊れるけど直るって考えたんでしょ？」
「おはよう、ボウヤ。目覚めの気分は？」
「最悪で最高」
そう言って上半身を起こして、隣で寝ているロザリーちゃんの頭を撫でた……

男勇者と女Bと男Aと氷の館Ｐａｒｔ１０（後書き）

ようやく館脱出しました
エピローグ的な話をして氷の館編は終わります

男勇者と女Bと男Aと壊れた館

Ｓｉｄｅ：男Ａ

「ん、ふにゅ～…」

ロザリーの頭を撫でてあげたら気持ち良さそうな声を出して抱き付いてきた。猫みたいだ。

「お～お～、見せ付けてくれるね♪」

姫様、嬉しそうだな…

「ロザリーちゃんもこの分だと直ぐに起きるな」

「ジル、前にも言ったがロザリーを泣かせた時は分かっておるな」

勇人の年長者っぽい台詞はリリーの付け加えで台無しになった。哀れ勇人。そしてリリー、疑問文なのに疑問系になってないぞ。

ちなみに馬車はモリッシュが引いて、今はギグの森に向かっている。

１度俺達の家に帰って、事件のあらましを整理して、各自帰るらしい。

「ふみゅ～…」

冷やかされながらも撫でるのを止めないのは、ご褒美をあげたかったのと、俺が安心したのが理由だと思う。

だから今は、恥ずかしくてもロザリーの好きにさせて、俺も好きにしようと思った。

しかし猫や犬がするように顔を擦り付けられるのは、ちょっと恥ずかし過ぎる。てか膝枕になっちゃった…

「ふあぁ～…にゅ？」

奇妙な呻き声が疑問系に成ってる。ロザリーの言語は相変わらず不思議に満ちてるな～

「おはよう、ロザリー」

なるべくいつも通りに話しかける。

「あ、ジル～♪おは、よ…う…／／／」

ロザリーは最初に覗きこんでる俺を見て、次に隣のリリーを見て、

周りの皆を見て、最後には顔を真っ赤にして俺の膝枕の上でうつ伏せになって顔を隠してしまった。
プイッて感じだった。
「おはよう、少女。中々良い夢が見れた様じゃないか♪」
「大変幸せそうな寝顔でしたね。私もあの様な寝顔が出来る夢が見たいものです」
貴女が表情作ってる所が想像出来ません。むしろ創造出来ません。
ロザリーはとうとう耳も塞ごうとしている。
「メイドさんの幸せそうな寝顔？」
あっ、バカ、勇人！
「勇人様、どうゆう意味でしょうか？」
「ひっ！い、いや、他意は無いんだ！ただどんな表情か気に成っただけで！」
墓穴掘ってる…
「でも、ロザリーちゃん起きて良かったわ～」
イトハは純粋に心配して…ないな。ありゃ顔上げさせるための方便だ。
ちなみに頭を撫でるのは止めてない。何か癖になるな…
「……ふみゅ～…」
「…ロザリー？」
…寝てる…またしても気持ち良さそうに…
「…丁度良いかの。ジル、話が有るのじゃ」
…他の皆は知ってるっぽいな。
「何？」
「まずはこれを見るのじゃ」
鏡？…ん？俺の右目に…十字模様…
「マジ？」
「マジじゃ」
「移っちゃったの？」
「移っちゃったんじゃ」

「…理由は？」
「お主が死神に止めを刺して、死神の素質有りと認められたからじゃ」
「…誰に？」
「知らん」
「…取れない？」
「お主が死なん限り、無理じゃな」
うわぁお。思った以上に超展開。珍展開の間違いか？
いかん、現実逃避ここまで。これ以上は無意味だ。
「狙われたりは？」
「しないじゃろうな。そもそも倒した者に移るとは限らんスキルじゃし、スキルの存在も知られとらん」
「良かった～…」
これ以上不幸はいらん。
＜悪運＞でどうにか出来る範疇超えたらたまったもんじゃない。ここいらで手打ちにしてくれ…
「で、どうするんだ？このスキル」
「お主が死神なら問題は無い。そもそも持ち主に問題が無ければ、あ奴も捨て置くつもりじゃった…」
が、そうはならず、死神は死に俺が受け継いだ…運ねえ～…
「そのスキルにはどんな能力が有るんだい？」
姫様の言う通り、大事な事だ。
「うむ。わらわの知っている限り、魔力消費が抑えられるのと、イメージした契約魔具が１つ作れる」
「…それのドコが死神なんだ？」
メイドさんから逃げてきた勇人が皆の心を代弁した。
「知らん。スキルの名前から死神と言われておるだけじゃろう。もしかしたら他の能力も付くのやもしれんが…わらわは知らん」
……かつて、コレ程脱力する話が有っただろうか？
生死を賭けて、仲間の命を賭けて、大切な家族の身柄を賭けて戦い、

辛くも勝利したのも束の間、新たな火種を抱えたと思ったら、『わらわは知らん』って…
まぁ、良いか。このスキルの存在すら知られてないなら狙われる事もなさそうだ。
「ロザリーには話しても平気？」
「うむ。とゆうかロザリーに隠し事しようものなら、わらわがお主を、」
「あ～、うん。了解」
最後まで言われたら流石に背筋が寒い。
「それより、家に着くまで暇だし氷の館の種明かししようよ」
「そうね、メイドさんは何か知ってるみたいだし」
イトハ、ナイス援護射撃。
「えっと、メイドさんは地下の本の正体、知ってるのよね？」
「本の正体って何の話だ？」
「ロザリーちゃんが凍ってた部屋に喋る本がいたのよ」
…そんなのいたか？
「では順を追って説明いたします。
氷の壁の向こうには実験室が有り、我々は研究日誌を見つけました。
その日誌によると、あの館では最初は人のための研究が行われていたのですが、博士の息子が死んでからは、魔獣と人を使った人体実験に成りました。それにより、人でも魔獣でもないモノが出来ましたようです。
博士の名前はギャレット・フェルマー。そして、恐らく死神が母だと認識していた方です」
…実験で生まれた動物に息子を失った博士が母親代わり…無い話じゃない。
「ここからは憶測ですが、地下に有った本には博士の記憶と意識の一部が写されていたのだと思います」
「そんなコト、出来るの？」
もっともだ。それが出来るなら人間をコピー出来る可能性も有る。

「いいえ。簡単に言えば人形なのです。その人の情報を本に書けるだけ書いて、その人の真似をしているだけの人形。それが、あの本の正体だと思われます」
「…あの部屋で、姫様がホーリーランスを使った時に母親が死んじゃうって言ってたのは、本の事だったのかな」
「そうなんだろうね…でも、これで死神の言ってた事の意味は、大体分かったね」
そうなの？
「博士は、先の戦争で虐殺者として有名に成り過ぎた。その事で大勢から非難され、この館に逃げてきた」
「そして人の為に研究を始めますが、我が子が他界。研究は狂気を帯びたものに変わったのでしょう」
「そして、あの魔獣でも魔族でもない者が出来た。博士は息子として育てようとしたが、何らかの事情で無理に成って…」
「自分の意思を写した本に、死神の親代わりをさせたのでしょう…憶測にすぎませんが」
その事情が、死神の言う苛めるだったのか、別の何かが起こったのかは分からない。知る必要も無い。俺達には振れる事の出来ない過去だ。
館の残骸をひっくり返しても死神の死体は消滅してる。件の本も同じだろう…なら、静かにさせておけば良い。誰にも注目されないのは、ある意味では救いだ。
俺が新しく得たスキルと同じだ。

男勇者と女Bと男Aと壊れた館（後書き）

謎解きは曖昧です
主に作者の能力不足が原因です

男勇者と女Bと男Aの宴会

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「ようやく着いのじゃ～…」

「「ただいま～」」

長かった…ホント、長かった…

氷の館が崩れて、さぁ家に帰ろうってトコまでは良かった。

色々あったけど皆無事だったし食料なくて飢えるとかもなかったし…でも、でもね…

「ジルの運の無さ忘れてたわ～…」

「まさか行きよりも長くなるなんて思わなかったな…」

「もう、１つの才能だね…」

「ジル様が居る時は旅程を倍にして考えた方が良さそうです…」

「足が棒になりそうです…」

皆ダウン…２人を除いて…

「とりかく上がってよ。直ぐ風呂入れるようにしとくし」

「…私＜人化＞してお風呂入っても良いですか？」

「いいよ～♪」

「さて、その間にツマミでも…」

メイドさんですらお疲れ気分なのに何であの２人元気なのよ…

「ふぃ～、サッパリしたね～♪」

「スゴイお風呂でしたね♪」

「あ、上がってきた。はいコレ」

「…何じゃ？」

「イチゴ牛乳だ～♪」

…温泉から出たらイチゴ・オレ、いやいや、イチゴ牛乳って、ホントにここは銭湯みたいね…

「グレゴリウスさんの所に報告しに行ったら牛乳くれたんだけどね

…」
「農家用の1トン缶でくれたんだ…重かった…」
「あ～、そりゃ男とはいえ2人じゃ重いわね」
とくにこの家、玄関までに階段あるし…ジル子供だし…。
「姫様はロザリーの事からかい過ぎなかった？」
「ボ、ボウヤ、私はそんなに信用ないかい？」
「無い」
「無いね～♪」
「無いわね」
「無いのじゃ」
「申し訳ありませんフレイヤ様。フォロー出来ません」
「皆が苛めるー！！」
珍しい、姫様が弄られてるわ…遠慮無く弄る側に参加したけど。
「イチゴ牛乳に合うお菓子も作っておいたから、ゆっくりくつろいでてよ」
「飯の用意も仕上げだけだからな。牛乳悪くなる前に使いきらないとって事で、晩飯はシチューだ」
長い旅のせいで勇人もジルの料理の手伝いは出来るようになったみたい。
でもシチューなんて久しぶりだな～。魔王城じゃ見た事もないのよね…
「シチュー？」
「そ、シチュー。魔界には無いの？」
「う～む、見た事無いのじゃ」
「じゃあレシピ書くからシェフに見せてみなよ。デミグラスソースも出来たんでしょ？」
「うむ、感動しておったな。シェフではなく皆が」
そうよね。始めて出た時なんて…涙流してるのもいたわね…
「ジル～、お皿これでイイの？」
「ああ。じゃ、盛り付けていこうか」

机の上にはパンとシチューとサラダ。飲み物も色々。
温泉も付いてて…ここは旅館か！皆浴衣だしよけいそう見えるわ…
「全く、下手に他国で観光するよりも良いサービスが受けれるなんて…いっそここに休息取りに来ようかね」
「いや、ギグの森に休息取りに行くなんて危険だって反対されるんじゃない？」
「私が居る限り、フレイヤ様には怪我一つ負わせません」
メイドさんが言うと誇張でもなんでもないのよね…
「モリッシュさんもせっかく＜人化＞してるんだからコッチで食べよ～♪」
「え、あっ、はい♪」
「さて、冷めぬ内に頂くのじゃ」
「俺の台詞…」
「いっただっきま～す♪」
ジルの料理はやっぱり美味しかった…太らないわよね？

Ｓｉｄｅ：男Ａ
飯を食い終わって、俺と勇人で風呂。前回は勇人が珍しがって特に核心に触れるような話はしなかったけど…
「…ジルくんは、神様に会ったんだよね？」
「ん」
「どうだった？」
おいおい、ちょっと抽象的過ぎる質問だな。
「どうもしないよ。勇者召喚に巻き込まれて、誰の記憶にも残らずにこの世界に来る事になった。それだけしか聞いてない。自分の名前も友達の顔も思い出せないし」
「っ！…ごめ、」
「謝らる必要は無いよ。俺は何でも良かったんだ…それにこの世界は分かり易いくて好きだし」
「分かり易い？」

「向こうと違って生きるだけで良いからね。俺シンプルなのが好きだから」
「はぁ～…俺の気にし過ぎだったかな」
「まぁ、前に言った事は厄介事に関わらない為の自己防衛だったしね。あ」
「何？」
「神様が出番増やせるよう何かアイディア出せって言ってたの忘れてた」
「は？」
女神様に会ってて、出番増やすために飛ばされた人の夢にお邪魔するかもと教えておいた。
「…神様って…暇なのか？」
「多分ね」
「はぁ～……ロザリーちゃんの事、これからも守れるね？」
脈絡無いな～。
「守るよ。だって、ロザリーは…大切な人だから」
「…良く言った！いや～、氷の館でロザリーちゃんを助けに行くのイトハちゃん達に決まった時相当怖い目してたからさ…ちゃんと守ってあげなよ？」
当然だ。もう決めた事だ。
あ～、出よう。のぼせたら心配される。主にロザリーに。

夜、皆騒ぎ疲れて寝ようってなってベットに入った時…
「ジル、お休み♪」
「お休み、ロザリー……大好きだよ」
「…うん／／／」
いつもより優しく抱きしめられた…

Ｓｉｄｅ：男勇者
翌日の朝、

「じゃ、皆またね♪」
「うむ、また会おう」
「魔王とは和平会談で会いたいね」
それぞれの挨拶。
「ジルくん、その目はどうするんだ？」
「あ～、うん。修行兼ねて眼帯でも付けようかと思ってる」
あの十字模様、普通に顔合わせてるだけでも気に成るほどハッキリしてるからそれくらいしないと隠せないか…
「ロザリーちゃん、ジルが変な事したらすぐに言ってね。ちゃんとお仕置きしてあげるから」
「大丈夫だよ～、ジル優しいもん♪」
「最後まで惚気でしたね…」
「ロザリーならあんなもんじゃ」
皆、別れの挨拶は済んだ。こっからは、それぞれの道が続く…
「じゃ、また会おうな！」

帰りの馬車の中、メイドさんは御者台で馬の相手。俺とフレイヤさんは向かい合わせ。
「勇人、手応えは有ったかい？」
今回は俺の出来栄えを見るのが目的だった。公から頼まれた魔王との話し合いは、あの場でするべき話じゃないから言わなかった。
「ああ…でも、まだ足りないな」
「へぇ。じゃあ帰ったらもっと頑張らないとね」
「そうだな……いつか、」
自然と握り拳を作った。
「うん？」
「いつか、何もかも守れるほどに強くなってみせる。
リリーちゃんも、ジルくんも、ロザリーちゃんも、イトハちゃんも、メイドさんも……フレイヤも、守れるくらい、強くなってみせる！」
今まで呼び捨てで良いって言われてたけど言えなかった。だから、

フレイヤを守るために小さな一歩…意外と気恥ずかしいな…でも目は逸らさない。
「ん～、んふふ～♪」
「…何だよ？」
「ん～、何でもないよ？」
何で疑問系なんだよ…
「強くなんなきゃね。勇人も、私も」
「…ああ、強くなるさ」
強くなる。
何も傷つけない、何も傷つけさせない。
それくらい、強くなる！

間幕・それぞれの暇つぶし（前書き）

全員の視点です
時系列的には氷の館の翌日です

間幕・それぞれの暇つぶし

Ｓｉｄｅ：女勇者

団長の大剣と私の刀が打ち合い、離れる。

「…勇者様、今日はここまでにしましょうや」

「わかった。団長は仕事か？」

「勇那様、タオルをどうぞ」

「巫女さん俺には？最近副団長が五月蝿くて…俺にしか処理出来ないのがかなり溜まってるんでさぁ」

団長は本当に山賊みたいだ。喋り方も他の騎士と比べると粗暴だ。

「有難う、エル。しかし、副団長は小姑の才能が有るかもしれないな」

「そいつぁ良い！でも俺が言ったら殺されますぜ」

そう言って笑いながら去って行った。

ドラゴンを倒した後、王に私が危険である事、カリバーンが変化した事を報告したが、

『構わん。魔族との決戦には、寧ろ好都合』

と言われた。

団長は『王の決定だ。異議はねえ』と言っていたが心中穏やかではないだろう。それでも表面的には変わらぬ態度を崩さないのだから大人だ。

報告を聞いた大臣や騎士は皆私を怖がって近づかない。

しかしどんな社会にも例外は居るもので…

「御機嫌よう、勇那様！やはり貴女は何時見てもお美しい！」

…馬鹿が来た。

こいつはドラゴン退治の後、急に話しかけて来る様に成った貴族。

名前は忘れた。

いつも大袈裟で芝居の様な喋り方と仕草をする、一言で言うとナルシストだ。

「是非、今度私の屋敷で開かれるお茶会に参加して頂けませんか？」
「断る」
「勇那様を招待など…私が認めません！」
お前は黙っていろ変態巫女。
「これは失礼。噂の勇者様と御話しできるかもしれないと民も期待していたのですが、仕方有りません」
「相変わらずですね、貴方は…」
変態巫女が呆れた表情を作るが、目は尊敬する者へ向けるそれだった。
この男、この国の貴族のくせに領民からは慕われている。こいつの治める領地に住みたいと言う民も多いらしい。
また今の話でも分かる様に民との交流出来る場を開いている。こいつの下で働きたいと言う者が後を絶たない上、こいつの屋敷で働いている者の満足度も高い。
城務めより倍率の高い職場としてメイド達の間では有名だ。顔が良いとの話も聞く。興味無いな。
ただの貴族達からは目の敵にされているが、見た目が良い為女からは恨まれず、話術で男の貴族も懐柔してしまうらしい。
「では本日の昼食を共に、とゆうのはどうでしょう？」
「クロの分が用意されるならば考えよう」
「勇那様っ！？」
「最高級の御持て成しをさせて頂きます」
「にゃんっ♪」
そう言ってクロがちょうど入るくらいのバスケットを2つ従者から受け取った。
香ばしい匂いと、自分の分が有るとゆう話にクロも嬉しそうだ。
「よく分かっているな。では頂こうか」
「どうぞ此方へ。ピクニックと洒落込みましょう」
「ま、待って下さい～、私も行きます～…」
泣いて追いかけて来る変態巫女を見て2人と1匹で笑う。

変態巫女をからかうのはやはり癖に成る。

Ｓｉｄｅ：男勇者

「勇…、起…な」

何だ…まだ…もう少し…

「勇…様、起…て下…ぃ」

う～、揺らすな～

「勇人、起きな！」

ゴンッ！

「痛ってー！」

何だ！？頭に鈍い痛みが！

「おはよう、勇人」

イライラした様子で赤い浴衣を着たフレイヤがベットの横に立っている…

「そろそろ朝食の御時間です」

その後ろにはいつものように無表情なメイドさん。

見慣れた立ち位置だ。

「…おはよう」

もう少し優しい起こし方にしてほしい…

「おや、不満な様だね…よし、なら優しく起こしてやろう」

ん？明日も寝坊するつもりなんて、って！

「何でベットに入って来るんだっ！？」

フレイヤがいきなり俺のベットに入ってきた！

大きめのダブルベットの上で後ずさる。

「では私も優しく起こして差し上げます」

メイドさんが反対から来ただと！？

前門の姫、後門のメイド。

どんな選択肢だよっ！

「さて勇人。起こされるならどっちが良い？選んだ方が優しく起こ

してくれるよ？」
「勇人様が望むのでしたら、どのような起こし方でもして差し上げますよ？御要望とあらば朝には相応しく無いものでも宜しいですし」
そう言ってフレイヤは前から腰に抱き付き、メイドさんは後ろから俺を抱きしめる。
前後から柔らかい何かが！腰の低い位置と後頭部に丸くて２つ有る何かがっ！！
「さぁ、どっちが良いんだい？」
「勇人様、御顔が真っ赤ですよ」
挑発するような上目遣いに、耳を舐めるような囁き。
フレイヤ！浴衣からこぼれそうっ！！
何がって？
言えるかっ！！
止めてくれっ！朝から理性がっ、理性が飛んじまうっ！！
「と、ふざける時間はもう無いんだよっ！」
「生憎と朝食の時間が迫っております。お急ぎを」
前方からサバ折り。後方から裸締め。
…ぁ…いしきがぁ…
「全く、いい加減１人で起きられないものかね？」
「きっと起こされたいのですよ」
「ガキだね」
意識が飛ぶ直前に聞こえた声がコレだった……

Ｓｉｄｅ：女Ａ
ジルくん達と別れて暫く。私達は色彩国家カラーズの街の１つ、服飾都市クロスに来てる。
「わぁ～、何アレ何アレ♪」
「変な形してんな～。ん？おい、アレってジル坊の着てた浴衣じゃね？」

「あ、ホントだね！」
「ジル様が作り方を公表した翌々日から販売が始まりました。見慣れない不思議な形状と軽さで人気と成っています」
なぜかクロス領主の娘さんも一緒。
領主代理として首都に来るくらいだから領主としての勉強もちゃんとしてるんだろうな～
「ジル坊…本当に謎な奴だな」
「また一緒に遊びたいね♪」
「…御2人は、ジル様と仲がよろしいのですね」
おや？おやおや～？
「気に成るか？」
「気になるの？」
「えっ？いえ特にそういう訳では…」
最後に黙りこくっちゃったら正解って言ってるようなモノなんじゃ…
「でもスゴイね！私より年下なのに領主の代理出来ちゃうなんて」
今、私達は北第2大陸のユビキタスって国に向かってる。でも重要な話し合いとかはやっぱり村長さん任せ。村長候補の2人は1度村に帰るコトになっちゃった。
シオン君ももう少し勉強しよう？
「いえ、私なんてまだまだです。私よりも年下な筈のジル様に統治者の有り方を説かれ、反論も肯定も出来なかったのですから」
「そうなのか？」
「はい。『理想を実現しようとしない統治者は邪魔なだけだろ？』と」
「ジルくん極端～♪それで、気になっちゃったんだ？」
「えっ？いえそんな事は…」
「ジル坊、罪な女だ」
男の子だよ…
「え？え？ジル様は御自分を男だと…」
「しょうがないな～、秘密だよ？

あのね、ホントはジルくんは……」
「えええぇーっ！」
どうしよう、この子弄り甲斐あり過ぎる♪

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
チュン、チュン…
ん～、朝～？
「ん～、リリー、朝よ。起きなさ～ぃ…」
ふとんあったか～♪
リリーに起きるよう言いながら手近な暖かいモノを思わずギュッと抱きしめた。
「…ぅぬ～……っ！イトハ、ついにイトハがわらわを求めて…」
何か五月蝿い抱き枕ね…
でも温かい～
「あぁ、イトハ！わらわは、この様に情熱的に抱擁されると、もう！」
ん～？何か寒い～
浴衣の前が開いちゃったのかしら？
あ、このまま抱き枕で暖めればイイんだ～
「ふぎゅっ！ま、まさか自ら胸を押し付けてくるとは…これは本格的に何をしても良いとゆう事じゃな！」
あ～、何か背中にも温かい細いのが…それになんだか…
「…安心する匂いがするわ…」
「っ！…イトハ～／／／」
ん～？サラサラの長い何か…触り心地イイわね～
ナデナデ
「はうぅぅ…イトハが、わらわに此処まで…イトハ…」
…寒い？
抱き枕が体から離れちゃった？ちゃんと抱き直さないと～

「ひゃっ！そ、そんなに、接吻したかったのかっ？イ、イトハがしたいと申すなら、わらわは何時でも…／／／」
ん～？ん？
息がちょっと苦しい…
「ん～、うん～、あふぅ」
あ、口の中に熱い何かが…意外と気持ちイイ…
「ふあぁ、あむ」
顔とほとんど同じ高さの何かを抱き寄せて、口に入って来る何かをもっと感じたい…
「ふあ！ん、ん～～、ぷはっ！」
あ、離れちゃった…もう1度～
「ま、待つのじゃイト、んんっ！」
あぁ、この感触、気持ちイイィ♪
抱きしめてるコレ、何だろう？
「んんっ、ふあっ、あふぅ」
あ、息辛くなってきちゃった…夢中になり過ぎちゃった…
「はぁはぁはぁはぁ…」
「ふはぁ～…おはよう、リリー…どうしたの？」
帯は緩んでるし、肩も思いっきり出てる。可愛らしいおへそは丸出しで、下着穿いてないのも丸分かり。
こんなになるほど寝相悪かったかしら？
「おは、よう、なのじゃ、イトハ…」
「ちょっと、大丈夫？風邪でも引いたんじゃない？」
顔は真っ赤だし息も荒い。おでことおでこ付けてみたらやっぱり熱い。保健室行かなきゃ！
そう言えば、どうして医務室じゃなく保健室なんだろう？
「いや、風邪ではないのじゃ。此れは直ぐに引く、」
「イイから、浴衣直したらスグに保健室行くわよ！」
全く、魔王の仕事が辛いなら少しくらい休みなさい！
「…此れは此れで、役得じゃな」

Ｓｉｄｅ：男Ａ
氷の館調査が終わった次の日の朝、ベットにて、
「…ロザリー？」
「何～♪」
「そろそろ起きない？」
「やだ～、ジルとこのままがイイ～」
…何故か両方とも起きてるのにベットから出れません…昨日『大好きだよ』とか言ったのが原因か？
「…ジルのにおい～♪」
真横から幸せそうな声。息が耳に掛かる。ムズムズするよ～！理性が飛びそうだよ～！
マズい、これは非常にマズい！
って！足擦り付けないで！浴衣はだけて生足だし！二の腕に柔らかくて気持ち良い感触有るし！
子供の体だけど最近成長してるから反応はするんだよっ！！
「…ジルは、イヤ？」
そう言って顔がくっ付きそうな距離から不安そうな目で見つめてくる。
グハッ！
…これは…向こうの友達に見られたら『リア充爆発しろっ！』と言われて死刑にされる！まぁ知られるはずないけど…
「い、嫌じゃないよ……今日はずっとこうしてよっか？」
「うん♪こうしてよっ♪」
もう、諦めました。
良いね、諦めって実に良い。人類が産み出した最高の言葉だ。
…やばい、頭が湧いてる…
「ずっと、ずっとずーっと！一緒にいよっ♪」
「…うん♪」

言ってる事はヤンデレっぽいけど…可愛いから何でも良いや。

神様は笑えない

Ｓｉｄｅ：主神

「久しぶりだな、勇人！」

「…え？」

さて、小僧が説明しといてくれたお陰で勇人を呼べた。

アイツが本当に話すとは思ってなかったぜ。意外に良いトコ有ったんだな。

「…神様？」

「おう。正確には主神様だ」

「…ああ、ジルくんが言ってた夢にお邪魔するかもって、」

「これの事だな」

「うわー、うわー！久しぶりです！今日はどうしたんです？」

「いや、実はちょっと、な…」

「ん？（歯切れ悪いけど何か有ったのかな？…もしかして、何か重大な事態が！？）」

「いや待て違う！あの世界では何も起きてねえし、起きるとしても教えられねえ！」

「あ、そうなんですか…あれ？じゃあ何で呼ばれたんですか？」

「…その～言い辛いんだが…」

「（神界で問題が起きた？）」

「問題が起きたと言うか…問題が起こってると言うか…」

「（訳が分からない…てか心読まれてる？）」

「人間の心は読めるんだよ…でだ、ちょっと話と言うか頼みと言うか…」

『ジ、ジジジジジジルさん！？な、なななななんで此処に！？』

『え？女神様が呼んだんじゃないんですか？』

隣の空間からフリッグと小僧の声が聞こえる。

神界では人間みたいに部屋や壁じゃなく、神力で作った空間で自他

のプライベートを区切る。まぁ、今のフリッグみたいに慌ててると区切りが甘く成ったりする。
「あれ？ジルくんの声？」
「おう。今俺の娘ん所にいんだよ。事情は聞いてんだろ？いい加減フリッグには元に戻って貰わねえとな」
「…あの慌てぶりようじゃ逆効果に成りかねないんじゃないんですか？（詳しくは聞いてないんだけどな）」
「時には荒療治も必要だろ？」
「…じゃあ俺はジルくんのフォローとかで呼ばれたんですか？」
「そんな所だ。どうなるか分かんねえが、その場の判断でフォローしてくれ」
「分かりました！（ジルくん、頑張れよ！）」

Ｓｉｄｅ：女神

どうしましょうどうしましょうどうしましょうどうしましょうどうしましょうどうしましょうどうしましょうどうしましょうどうしましょうどうしましょうどうしましょうどうしましょうどうしましょうっ！！！
まだ全然心の整理がついてませんっ！
前回ジルさんに心を掻き乱されてから全く整理がついてませんっ！
私の管理する世界の生態調整は忘れますし、ここ最近の落ちた人達の動向もちゃんと見てませんでした！
お陰で管理してる世界では竜が人間の様な社会を築き上げてましたし、最近のジルさんと神祖の関係も分からない！
…別にジルさんと神祖がどの様な関係でも私には関係の無い事ですっ！何を気にしているのですか私はっ！
「女神様、１人百面相されると反応に困るんですが（表情豊かだな～）」
「はっ！済みません！御見苦しい物を御見せしてしまいました！」
思わずしゃがみ込んで顔を隠す。
「いや、別に見苦しくはなかったですよ（寧ろ…）」

いや～～～～～っ！！
絶対変な神だと思われました！
思わず読心切ってしまいましたから続きが分かりません！気に成ります！でも読めませんっ！
うぅ～…私は一体如何したら…
「大丈夫ですか？混乱させてる俺が言うのも変ですが」
「…大丈夫です…お気遣い無く…」
うずくまっている今の姿は到底大丈夫とは思えないでしょうね…
指の隙間からジルさんを覗き見ると手持無沙汰に周りを観察してる。
……私を見て欲しい。
っ！何を考えてるんですか私はっ！
「…無理に俺に会っても辛いだけなんじゃ…」
ボソッとした呟きは核心を突いています…
「…でも…楽しいんです…」
思わず言ってしまった！
聞こえてる筈なのにジルさんは無反応。困った表情は少女にしか見えない…が、ジルさんは男。私はノーマルです！
「…一緒にゲームをするのが、楽しいんです…心を読んでも気にしないのが、嬉しかったんです…」
私の独白。ジルさんには意味不明だろう。
「私は今までも神以外と話をした事が有ります。何度、ではなく何千、です。
幾つもの世界が有るのだから、その世界間を渡る者は相当数います。今も異世界に召喚を妨害出来ない事態が発生し、召喚される生き物と話す事が有りますが…皆心を隠そうとします。
しかし稀に召喚されようとしている生き物がいるが止めました。
それと比べると、ジルさんの無関心は新鮮でした…だから、私は貴方に興味を持ったのだと思います…」
「…俺そんなに無関心でした？」
「はい、かなり。普通の生き物は、心を読まれるのを酷く嫌いまし

た。貴方はまるで気にしていませんでしたが」
「いやだって、気にしても何も変わらないじゃないですか」
「そうと分かっていても気にしてしまうのが生き物の本能ですよ」
「自殺なんて本能に反する事が出来る生き物には意味の無い主張ですよ？」
「…確かにそうですね」
自殺出来る生き物は非常に限られます。そして自殺が出来る生き物は必ず衰退します。
急激に衰退する訳ではありませんが、本来の種族絶滅までの期間が異常に短くなります。
「…そう言えば、女神様普通に話せてますね」
あ、本当です。勢いで心中を語ったら大分楽に成りました。
「そうですね。で、御返事は？」
「は？」
「先程の告白とも取れる私の独白への御返事は？」
え～とゆう顔で此方を見てくる。
失礼ですね。神とはいえ私だって女です。なので先程の自分が恥ずかしいのは当たり前の事なのです。
「俺にはロザリーがいるので、お断りします」
「ふっふっふ、その程度の御返事は想定済みです」
「いや、諦めてくださいよ」
「私は、貴方と遊べれば其れで良いのです！」
「スルー？人の話スルーなの？」
「ですので、貴方の御返事は気にせずに、此れからも呼び出し続けます！」
「あ～、もうそれで良いです」
「ゲームって、楽しいですね？」
「そうですね。楽しいですね」
「同じ想いを共有するのって、嬉しいですね？」
「そうですね。嬉しいですね」

「両想いって、素敵ですね？」
「そうですね。素敵ですね…両想い？」
「同じ想いを持つ者同士は、両想いと変わらないですね？」
「変わるわっ！」
「どうしたんですかジルさん。いきなり大きな声を出したりして」
「てか女神様」
「フリッグと御呼び下さい」
「フリッグさ」
「フリッグと御呼び下さい」
「フリッグはもしかして読心してないんですか？」
「よくお気付きに成りましたね。ジルさんの言う通り、今は心を読んでおりません」
「何でです？」
「それはですね…あ、御時間の様ですね。続きはまた明日御話ししましょう。では、また」
「えっ、ちょっ、気に成…」
さて、今日も神の仕事とゲームに精を出しましょう。

Ｓｉｄｅ：主神
「…どうにか成ったみたいですけど？」
「チッ」
「ちょっと！自分の子供の調子戻ったんだから良いじゃないですかっ！」
「何で俺の娘があんな小僧に拘ってのか分かんねーっ！しかも呼び捨てを許すだと！お父さんそんなただれた関係認めないよっ！」
「理由なら本人が言ってたじゃないですか（しかも呼び捨ては強要だったし）」
「ウルセエ！お前もう帰れっ！」
「えっ、ちょっ、酷…」
くっそー……あいつ等の世界のキャバクラでも行こう…グズ…

神様は笑えない（後書き）

ダルは影で笑ってました
傍から見てたらただの喜劇ですから～

女Aのユビキタス訪問

Ｓｉｄｅ：女Ａ

……

「クリス、どうした？」

「え？あ、ちょっとボーっとしちゃっただけ」

「そうか。まぁ無理もねえか。俺もどうしていいか分からねえし」

私達シルフは今、人間の国ユビキタス公国に来てる。歓迎して大々的に立食パーティーにしてくれたのは嬉しい。

ただちょっと問題だったのは……

「人が多過ぎるな」

「そうなんだよね～」

人間の他の国からも人が来ていてとてもじゃないけど覚えられる数じゃない。カラーズでも覚えられたのは数人だったから最初から覚えられるとは思ってなかったんだけどさ。

声掛けられる回数が多くて多くて、もう疲れちゃった……

「慣れない場でお疲れのようだね」

腰まで届く長い金髪を無造作に垂らしてる野性的だけど物腰は高貴な矛盾した雰囲気の綺麗な女の人が話しかけてきた。後ろには私達に話しかけようとしてた人達が諦めて去っていくのが見えた。

「姫様でしたか？」

「ああ、覚えてくれたんだね。ま、改めて自己紹介だ。私はユビキタス公国公女フレイヤ・ユビキタスだよ。今後ともよろしく。それと態々敬語で話さなくても良いよ」

姫様とはユビキタス公に会った時に顔合わせだけした。なんだか意味深な表情で私達を見てたから覚えてた。それにしてもフランクな人だな～

「シルフ村長の孫、シオン・ビルラーだ」

「居候のクリス・シュタインです」

「ふふ、ボウヤと少女の言う通り中が良さそうだね」
ボウヤと少女？
「フレイヤ、それじゃ分からないと思うよ。こんにちは。俺はユビキタス公国の勇者、正名勇人、１７歳だ。２人の事はジルくんとロザリーちゃんから聞いて知ってたんだ」
ジル君とロザリーちゃんの知り合い！？
話しかけてきたのはちょっと逆立ってる短めの金髪に綺麗な金目でやたら甘い顔したシオン君と同い年くらいの男の子。
この人が勇者。私を巻き込んだ人……でも私この世界気に入っちゃったから特に言うコト無いんだよね……シオン君と同い年か～
「あの２人どんな人脈持ってんだよ」
流石にシオン君が呆れてるよ。そりゃそうだよね。普通１国の姫と勇者と知り合う事なんてないもん。
「偶々南大陸に用が有ってね。その時に護衛を頼んだのさ」
「……むしろ時間掛からなかった？」
ジル君トラブルメーカーだから沢山トラブルが起きたと思うんだけど。
「本当にな。メイドさんの話じゃ予定の倍掛かったって話だったし」
ジル君、トラブル引き付け過ぎだよ。
「相変わらずみたいだな。安心したぜ」
「そこ安心する所なのか？」
「逆にジル坊が平和に暮らしてる所が想像出来ねえ」
「言われてみればそうだな」
男の子２人でジル君に言いたい放題だな～
「少年は好き勝手言われてるね」
「そうだね。でも、ジル君なら気にしなさそう」
「あ～、確かに。何かボウヤは色んな事に無関心みたいだったしね」
まだ知り合ったばかりだから私達は共通の話題で話してる。ちょっと話題が思い付かないんだよね～
「ロザリーちゃんのコトだけは無関心じゃないけどね？」

「そうだったね。意外と独占欲とか強そうだ」
「あるある♪」
あの2人の話は初対面の人とはちょうどイイみたい。自然に話せる。
あれ？入口の辺りが騒がしい。
「ん？ああ、今日注目の客がもう1人来たね」
そう言ってフレイヤが皮肉気に笑った。
何だろう？あ、誰か近づいてくる。

私と色違いの長い黒髪を高い位置で1つに結ったポニーテールに、細身だけど儚さとか弱さを感じさせない、引き締まったちょっと胸が大きめなスタイル。それに背も女の人にしてはちょっと大きめ。男の人の平均程じゃないけど、背が低くて悩んでる男の人よりは大きいかもしれない。
フレイヤ姫の野性味と高貴さの混じった雰囲気とはまた違った強さを感じさせるのは、多分あの鋭さを感じさせる目。切れ長ってわけじゃないけど、なんだか鋭くて睨まれてるように感じる。
「はじめまして、フレイヤ様。私はアダトリノ王国の勇者、結城勇那と申します。この世界に召喚されて半年、その間御挨拶に伺えなかった事を御詫びします」
騎士みたいな服だけど動きやすさ優先で飾り気が無いな～。でもスカートだ。違和感あるな～。似合ってるけど。
「丁寧な挨拶、有難う御座います。挨拶に伺えなかったのは此方も同じ事。御気になさらないで下さい」
「寛大な御心と御気遣い、感謝します。そちらの金髪の方が勇者、緑髪の御2人がシルフでしょうか？」
「そうです。我が国の勇者、正名勇人と北第2大陸よりの来訪者、シルフの御2人です」
この2人……言葉遣いとか硬過ぎて一緒に話せない……勇那さん女の人のハズなのに男の人みたいだし……女子高にいたら大人気か近寄りがたくて友達0かのどっちかになりそうだな～

「そうですか。私以外の勇者が居ると聞いて、ずっと会ってみたかったのです」
「え、どうして？」
勇人君戸惑ってて言葉遣いがタメ語。勇那さんの方が年上っぽいしょうがないのかな？
「歳は同じだと聞いていましたし、同じ世界から来たのなら同郷として話もし易いかと思ったのです」
同い年！？どう見ても勇那さんの方が年上に見える……あれ？勇人君１７歳だから勇那さん私より年下？
「２人とも俺と同い年で勇者かよ。俺なんて１つの村の村長になれるかも怪しいのに……」
「私なんて２人の１つ上なのにこの差だよ？」
「とても俺と同い年とは思えないシッカリした話し方……地味にダメージ有るな」
「勇人にもこれくらい出来るように成って貰いたいですね」
さっきからフレイヤ姫の言葉遣いが硬いまま……相手を選んでるのかな？
「私は外交用の話し方やマナーを教え込まれましたから話し方は仕方ないと思います」
「それじゃ普通の喋り方は？」
「それ程差は無いが、しいて言えばこの様な硬い喋り方になる」
「……侍みたいだ」
「よく言われた。あまり気にはしなかったがな」
「良いね。そうゆう話し方の方が私も話し易い」
話し方戻った！
「外交的に先程の様な話し方を求められたが、此方の方が良いならそうするが？」
「そうだな。普段の喋り方の方が俺達も気にしなくて済むからそっちが良いな」
「勇人は元から話し方変わってないだろうに……」

「完全に勇那さんの方が年上に見えたよね♪」
「仕方ないだろ、俺はそっちの練習はしてないんだよ」
「今後の課題にしようかね……」
「え！？」
「頑張ると良い。同じ勇者として推奨する」
「いやだーっ！」
勇那さん、意外と話し易いな～

女勇者ＶＳ男勇者

Ｓｉｄｅ：女勇者

自己紹介は終わった。軽く打ち解けたような空気に成っているが私はこいつらと仲良く成る為にこの国に来たのではない。

「和やかな空気を壊すようで気が引けるのだが、勇人、私と手合わせしてくれないか？」

本来の目的はユビキタスの勇者の力量を測る事。変態巫女と団長は国に残る様に言われていたからユビキタスに来たのは私とクロと第２騎士団と貴族数名。そしてその後にギグの森で一仕事。まずは目の前の勇者だ。

アダトリノ王の命だがユビキタス公に確認を取ったら寧ろ頼まれた。何とも豪胆な性格だ。

「ええっと……良いのか？」

「ユビキタス公に聞いた所『寧ろ此方からお願いしたい。勇者・勇人も良い刺激になるだろう』と言われた」

「父様らしい……」

娘から見ても変な父親らしい。

「なら舞台が必要だね。ちょっと待ってな」

そう言って公女は城の者に何やら指示を出した。恐らく舞台とやらを用意させているのだろう。

父親に呆れていた割には自分も嬉々として指示を出している。似た者親子だな。

「どうなる事やら」

「勇人、溜息してっと幸せ逃げるぞ」

「げ、そうだった！」

まだ会ったばかりの筈なのに中が良いな。

「準備が出来たよ。中庭に来てくれ」

出来たか。準備が速いな。兵士が優秀なのか公女の指示が上手いの

か。
元から用意されてた、何て事も有り得るか。
とにかく、今はもう1人の勇者の力量を測らせてもらおう。

「じゃ、両者準備良いね？」
術者6人で球状の結界が張られている。
結界とは魔力障壁で作ったドームの事だ。ドームの大きさによって人数が決まるが、6人ならバスケットコートくらいの面積になる。
魔力障壁は無属性に属しているのでどの属性の魔法にも耐性が有り、数人掛かりで作る為、普通は中からは壊されない。勇者同士の戦いに耐えられるかは保証出来ないが。
「ああ！」
「問題無い」
結界の中には私と公女とユビキタスの勇者。
受付に預けた刀を受け取り構える。向こうも鞘から剣を抜いた。
……大きく成った？
「変わった武器だな」
「勇那こそ、刀なんて初めて見たぜ？それも真黒だ」
刀は魔族領ではそこそこ普及してると聞いたがな。態々教える必要もないだろう。
「愛刀、無白だ」
安直だが分かり易さ優先で命名した。鴉も考えたがクロに首を振られた。そんなに駄目だったか？
「そのままだな。俺の剣はジュワユーズだ」
闇は鞘の中に詰め込んで見えないようにしている。無白の闇は私の意思で自由に出来たので普段はこの状態。刀身の色は隠しようがないので放置する。髪も目も黒なのだから武器の色が黒でも文句は言わせん。
「では、始め！」
開始の合図と共に勇者が突撃してきた。女に手を出すのに躊躇って

睨み合いに成るかと思っていたのだが、意外だったな。
「先手貰った！」
「甘い」
肩上から大振りで振り降ろされた大剣を半歩横にずれて避ける。
横薙ぎに振るわれた2撃目が直ぐに来る。
このサイズの大剣をここまで速く振るえるとはな。団長程の大きさではないが、その分速い。
バックステップで間合いを取り、魔法で体勢を崩す。
「影よ　形無き矛成し　敵を穿て　シャドウ・ツェペシュ」
勇者の左後方に伸びていた影が形を変え、勇者を刺す槍を形作る。
「魔法、っ！」
ギリギリで気付いて右後方に飛んだ。隙だらけだ。
距離を詰め右肩に無白を突き出す。
「うおっ！」
剣自体を盾にされ無白がジュワユーズの刀身を撫でた。そのまま上に流されたが、剣を足場にしてバク宙で距離を取る。
団長との稽古で分かったがパワーファイター相手に打ち合うのは限界が有る。向こうの道場でも私は手数の少ない戦い方をしていた。
その動きは打ち合いには向いていない。
召喚されて筋力が上がり打ち合いもある程度出来るように成ったが、筋力が上がったのは向こうも同じ事。そう考えればやはり打ち合いは不利。
「……パンツ見えるぞ」
「スパッツだ」
衣装がスカートなのは変態巫女のコーディネートだからだ。
「どっちみち気にしろよ！」
「私の感覚ではどうでも良い事だ。戦闘中にそんな事を気にする方が問題だ」
見せろと言われても見せる気は無いが不可抗力で見えただけならば、スパッツなら5発で許そう。

「ところで、仮にも乙女のスカートを覗いたのだ。相応の覚悟は有るな？」
「どうでも良い事とか言ってただろ！」
「それとこれとは別問題だ。男なら女のスカートを除いてしまった時点で覚悟を決めろ」
「理不尽だーっ！」
言い合いをしながらも立ち位置を変え、影が四角にならない様に移動している。無能ではないようだな。
「これが終わったら顔を貸せ！」
右から切り込む。
「断る！」
ジュワユーズで受け止めそのまま押してくる。押されるままに後ろに下がる。
「影よ　我が身を包みし盾とならん　シャドウガード」
追撃を自分の影で防ぎ、ガラ空きの左脇に無白を振るう。
「今度は自分の影かよ！」
そう言った瞬間ジュワユーズの柄が伸び、無白の刃を受け止めた。
「刀身だけではないのか！」
間合いを取る。無理な体勢で受け止めていたせいで簡単に離れられた。
まさか柄まで長くなるとは思わなかった。
「こんなのもあるぜっ！」
5メートル程の距離が有るにも関わらず剣を元のサイズに戻し、片手で下から振るう。
すると刀身が細く長くなり下段からの斬撃として私の左腕を狙う。
「面倒なっ！」
無白で受け止め、刃を這わせながら距離を詰める。
まさかあんな変化までするとはな。今も形を元に戻しながら大剣を形作り上段の構えを取ろうとしている。私も自然と上段の構えに成る。

刃と刃が離れ、互いの距離が詰る。
「はっ！」
「せいっ！」
刀身は打ち合わず、互いに当たりもせず止まった。
「そこまで！この試合、引き分けとする！」
公女の声が響き、結界が解かれる。
私の刃は勇者の首を捉え、勇者の刃は私の頭上で止まっている。
確かにこれでは引き分けだろう。
「ぶはーっ！死ぬかと思った！」
勇者が地面に座り込んだ。
「だらしない。これは日々の訓練に追加メニューが必要だね」
「ええっ！？」
「お疲れさま～」
「お疲れ。スゲー試合だったな」
先程のメンバーが集まってきたな。
「手合わせ、有難う。私も城に戻ったら精進しないとな」
魔法をもう少し多用出来れば違った結果に成った筈だ。やはり呪文が長過ぎるな。
今後の課題にしよう。

男勇者の友達（前書き）

ちょっと短めです

男勇者の友達

Ｓｉｄｅ：男勇者

「勇那はこの後帰るのか？」

庭から城内に戻ってきた。

「いや、ギグの森に用が有る。貴族達は騎士団の護衛付きで国に帰り、私は残りの騎士と共にその用を済ます」

何の用だろうな。あんま詮索するのも悪し聞かないでおこう。

「ギグの森か。俺の知り合いがいるから会えたらヨロシクって言っといてもらえない？」

「ん？分かった、会えたら伝えよう」

「ジル坊達の事か？」

「ロザリーちゃんにも会いたいね♪」

お、シオン達も来たか。

「その２人が知合いなのか？」

「ああ、俺達の知り合いなんだ。ジルくんって男の子とロザリーちゃんって女の子だよ。ギグの森で２人で暮してるんだ」

仲良くしてるかな？あの２人なら平気か。

「新婚さんみたいだったよね♪」

「ジル坊の方が年下なのにシッカリしてたよな？」

「だが考え方は子供だったね」

お、フレイヤも来たか。

「子供と言うが、幾つなんだ？」

「ロザリーちゃんは１３歳でジル君は１０歳だったよ。ジル君は料理上手だったな～」

「でもジル坊の考え方はかなり極端だったよな。『自分の大切なモノ以外はどうでも良い』って感じだったし」

「お前達から見てもそうだったか」

確かにそんな印象受けたな。ロザリーちゃん以外は割とどうでもよ

さそうだったし。
「随分な言われようだな。そんなに酷いのか？」
「ああ。だからって冷たいとかじゃなくてな……諦めが良いとか冷めてるって感じだ」
「成熟している訳ではないのか？」
「違ったね。本当に興味が無いって感じだった。1週間くらい一緒に居たけどとても子供らしくないと思ったよ。あ、料理や服は独創的な物を作ってたね。今日出てたピザの味付けなんかはレシピを貰ってきたやつだしね」
そういやメイドさんがいくつかレシピもらってホクホクしてたな。無表情だったけど。
「あのピザの味付けか。確かに独創的で面白い味付けだった。味も悪くなかった」
「ジル坊の着てた浴衣も面白かったよな。服飾都市クロスで買っちまった」
「俺達は作ってもらったな」
「ええっ！ズルイよ！」
「……浴衣だと？」
「ああ。ジルくんが着やすい服を作ろうとしてできた物なんだけどな、俺達も世界の浴衣とほとんど同じだったんだ」
流石にジルくんの事は話せないな。
「この後クロスの者が新しい服として発表するから黙っておくれ。とは言っても城の者でも何名かは私らが持ってるのを知ってるんだがね」
「了解した。しかし私も1着くらい欲しいな。向こうでは稽古の時に袴だった事もあったしな」
剣道でもやってたのか？
「袴って何だ？」
「ああ、私が向こうの世界で修練していた武道の稽古着みたいな物だ。浴衣に多少似ている所が有る」

シオンの疑問も当然か。俺以外は袴なんて言葉聞いた事もないだろうしな。
「どうせクロスで出来た服って流通するんだろ？ならその内手に入るだろ」
「そうか。ではアダトリノに流通するのを楽しみにしていよう」
どんだけ欲しいんだ？
「でも森での狩には向かねえよな」
「そうだよね～。あちこち引っかかっちゃうよね」
「ボウヤは普通に狩の時も浴衣だったよ？」
「「……え？」」
「そう言えばそうだったな。袖が引っ掛かるんじゃないかと思ったけどそんな事無かったし」
「……どう考えても引っ掛かるだろ」
「……相変わらず謎だね」
てかさっきからジルくんの話しかしてないな。
「それにしても、勇那って剣道か何か習ってたのか？修練してたって言ってたし」
「ああ、近所の道場で習ってた。木刀を使った実戦風の稽古もしていたな」
「その口ぶりだと元々は実戦風じゃないのかい？」
「そうだ。私達の居た世界では実戦風の剣術は少なく、剣道と言う試合の為の武道が一般的だった」
「そうなんだ。スッゴイ戦い慣れてるみたいだったよ」
「こちらに呼ばれてからは城の者と実戦の稽古をしていたし、魔獣や獣の討伐なんかもやっていたからな。実戦には事欠かなかったんだ」
「あ～、俺も何回か討伐するために城から離れたな」
「そうなのか。勇人は武道は此方に来てからなのか？」
「ああ。向こうじゃ殴り合いのケンカもほとんどした事無いよ」
「その割に良い動きをしていた。才能が有るのかもしれないな」

「そうかな？」
「あんまり煽てないでおくれ。直ぐ調子に乗るんだ」
「ヒデエ！」
そんな調子に乗らねえよ！
「勇人、止めとけ。女に口喧嘩は分が悪い」
「シオン……そうだな、勝ち目薄いよな……」
俺の見方はシオンだけだ……
「そこっ！男の子同士で怪しい雰囲気作らない！」
「な？」
「おう」
ただ友情を深めてただけでこの扱い。やっぱり口じゃ女性には敵わないな。
「ちょっ、シオン君！？ダメだよ！男の子同士なんてオカシイよ！恋愛は普通に男の子と女の子でするべきだよっ！」
へ？
「待て！俺達はそんなんじゃねえ！勇人は友達として慰めてただけで俺はノーマルだっ！」
「勇人、城の女を落とすだけじゃ足りないのかい？それでも招待客の男とそうなるのは人としてどうかと思うんだ」
「男女見境無く誑し込もうとするとは、私も気を付けなくてはな」
「「誤解だーっ！」」
もうやだ。早く終わってくれ……

女勇者ＶＳ男Ａ

Ｓｉｄｅ：男Ａ

氷の館から少し経った。この世界に来てからはもう半年以上経ったと思うと不思議な気分だ。

向こうの世界の名前も自分の名前も友達の顔も思い出せないんじゃ本当に自分が異世界の住人なのか分からなくなる。

元からこの世界の住人だったんだけど記憶障害でロザリーに呼び出されたって思った方がまだ現実味がある。

まぁ女神様（フリッグです！）……フリッグに呼び出しくらってる時点で異世界の住人なのは分かってるんだけどさ。

さ～て、狩も終わったしそろそろ家に着く。今日の晩飯何にしよ？

その前にお昼だな～。眼帯付けてるから料理も一苦労なんだよな～

……家の前に……デカい馬車３台？

軽く２０人は移動できるな。

「離してよ！」

「ロザリーッ！？」

ロザリーが鎧を着た騎士達に連れて行かれそうになってる！？

「何奴！？」

走りよるが騎士達に阻まれる。数が多いんだよ！

「テメエ等！ロザリーに手え出すとは何事だっ！！！」

なっ、赤ヒゲ！？

すでにハルバート構えて臨戦態勢。

いや、当然だ。ロザリーの家と赤ヒゲの家はかなり近い。あの悲鳴なら聞こえる距離だ。

「……この少女がロザリー……するとあの子供はジルとか言う少年か」

誘拐犯の中にいるキツそうな女が俺とロザリーを知ってる風な事を言う。

「ロザリーを離せ」
「断る。私は仕事は最後まで詰めるタイプだ。馬車に乗せろ」
「待て！この、邪魔すんな！！」
「何処に連れてく気だ！！」
この騎士達、最初から攻撃する気が無い？防御に専念してひたすら俺と赤ヒゲの体力を削ってくる。
馬車の中に檻が有る？
「やだっ！離してよ！出して！行きたくないっ！うぅ……炎よ　全てを焼き尽くせ　フレア！」
魔法で馬車を破壊する気か。それなら連中もロザリーを上手く運べない。
……ん？
「なんで、なんで魔法が出ないの？フレア！フレアフレアフレア！」
「はっ！無駄だよ。この檻の中じゃ魔法は使えないんだよ」
どんな仕組みだよ！？
それより、この騎士達しつこい！
常に5人で俺と馬車の間に割り込んでくるし、1人吹き飛ばしても後ろから違う騎士がそこに入って休憩するから全然数が減らない。
赤ヒゲも同じ状況みたいだ。これじゃロザリーに近づけない！
「鍛冶屋の方はあのまま体力を削れ。少年の方は……騎士の体力が持たないな。私が変わろう」
「え！？ゆ、勇者の手を煩わせる程の事も無いです！」
「よく見ろ。交代しているから目に見えた疲れは無いだろうが、確実に此方に近づいて来ている。そろそろ押し切られるぞ」
「なっ！8人をたった1人で……」
「此処はギグの森だ。それくらいの猛者が居ても不思議は無いのだろう？鍛冶屋の方はもう限界だな。立てなく成る程度に体力を削ったら騎士達は馬車で帰れ……クロ、あの少女の側に居ろ。不埒な事をする輩は首ごと跳ねていい」
「にゃっ！」

「よし、鍛冶屋はもう動けないな。少年に着いてる方、私と変われ」
何だよ、高みの見物じゃ物足りなく成ったか？猫をロザリーの側にやってたけど何考えてんだ？
「少年、悪いが此処は通さない」
「喋るな。耳が腐る」
コイツの言葉なんか聞くだけで不快だ！

Ｓｉｄｅ：：女勇者
ふっ、耳が腐る、か。何時も私が王や大臣、貴族に思ってる事を言われるとはな。
「邪魔を、するなっ！」
「無理な相談だ！」
ダガーを弾く。
速いな。あと少し遅れていたら左手首を斬り落とされる所だった。
王の下らない命令で神祖の少女を捕えに来たらとんでもないのに会ったな。
「くそっ！馬車が」
ようやく出発か。思った以上に体力を削られたな。
……なっ！
「ちっ！反応良過ぎる！」
油断も隙もないな。足に付けたベルトに投擲用の杭を仕込んでた。
その杭を躊躇無く馬車の御者目掛けて投擲するのだから質が悪い。
眼帯付きの片目の割に良い狙いだ。
「ジルッ！」
「神祖を速く連れて行け。殿は私が務める」
「……神祖？」
「ジルッ！聞いちゃダメ！」
ふむ、もしや？
「知らないのか？その少女は神祖と呼ばれる、忌み嫌われた種族の者だ」

「やめてっ！言わないでっ！」
「その中でも希少な貴族級の生き残り。つまり、１００年前の戦争の大量虐殺犯の孫だよ」
「ジル、聞かないで…お願いだから……」
静かに成ったか。それに馬車はもう杭が届かない程度には離れた。
「……いいからそこを退け」
「ほう。ここまで聞いてまだあの少女に拘るのか？」
「俺、歴史は苦手なんだ。アンタが何言ってるのかさっぱりだよ」
その割に凄い殺気を放つ。薄々は気付いていたか？
「それに、ロザリーが隠してた事を了解も無しに暴露するなんて、俺は好きじゃない」
「ならどうする？私にも退けない理由が有る」
「アンタはロザリーを傷つけたんだ」
「貴様は私の仕事の邪魔だ」
「だから！」
「故に！」
「アンタは俺の敵だ！」
「貴様が私の敵だ！」
地面を爆発させながら凄い速さで距離を詰めてくる。そしてその速さに振り回されずコントロールしている。
これは厄介だな。速さに振り回されてくれれば簡単に倒せるのだが……
私も前に出て振るわれるダガーを弾き、間合いを取る。
「間合いは取らせない！風牙！」
ダガーを振った軌道に沿って風の刃が振るわれた。
あんなに短い呪文で魔法が発動したのか？
「初めて見る魔法だ。是非教えてもらいたいな！」
「ロザリーを返してくれたら教えてやる！雷甲！」
懐に入られ回し蹴りを喰らいそうに成る。
寸での所で無白で防ぐ。刃の部分で受けたので切れると思ったが逆

に弾かれ、電撃を浴びてしまった。
「まさか刃に触れても切れないとは。可笑しな体だ！」
鞘に納めてる闇を無白に纏わせ、切り掛かる
「影じゃなくて闇か？アンタこそ可笑しな能力だろ！」
片手のダガーで無白を防ぎ、逆のダガーと足で闇を防ぎカウンターを放ってきた。
「まさか闇が切りに来るなんてな！」
「貴様の雷も似たような物だ！」
腹立たしい事に雷に阻まれて闇の斬撃が霧散してしまう。此れでは闇の制御に使う神経は無駄だ。
「闇じゃ俺に届かないって諦めたか？」
「そうだな。ならば闇の使い方など一つしかあるまい？」
「俺は知らん」
「そうだったな。では、アダトリノ王国勇者、結城勇那、参る！」
「古臭い名乗りだ！」
まだ距離が有るが無白に闇を纏わせ振るう。闇の斬撃が飛ばし距離を詰めるが、斬撃は弾かれ打ち込みはステップでかわされカウンター気味にダガーを振るわれる。
雷甲とか言う魔法、ダガーにも纏わせられるのか。
それにしても私の殺意を受けても平然としているな。
「器用な能力だ！」
「貴様の魔法は異常に速い！」
蹴りを腹に喰らったが頭を無白の柄で殴っておいた。
「痛いだろうが！」
「貴様だって蹴っただろうが！」
ダガーに付いているナックルガード越しに殴られたので無白で右肩を斬り付けた。
切れはしないがダメージは入るだろう。
「このロリコン誘拐犯が！」
「私にそっちの趣味は無い！」

飛び蹴りを喰らい押し倒されるが勢いをつけて巴投げしてやった。
「その上子供に剣振るうのかよ！」
「刃物振り回す子供には教育が必要だろ！」
生意気な子供だ。そろそろ終わらせてやろう。
「さっさと退け！」
「貴様は寝てろ！」
無白を頭に打ち付けたが、顎にアッパーを喰らう。
ようやく右手のダガーを落としたか。
腹に爪先を叩き込んだら、腹を雷槍とか言う掌底で撃ち抜かれた。
無白を持つ力が入らず落としてしまう。
髪を掴んで振り回そうとしたが、振りきられ咬み付かれた。
もうお互い武器は持っていない。
膝蹴りを顔に放ったら、咬むのを止めて頭突きで膝を打ちにきた。
右膝が動かないが相手もフラフラしている。
お返しに顔を殴ってやるが、また顎を打ち上げられた。
頭一つ分小さい相手を殴るのは難しいな。
「……アンタ、しつこい」
「……貴様も、同じだ」
いい加減頭が朦朧として上手く働かない。私は何でこの少年と殴り合ってるんだ？
理由はどうでも良いな。どうせ殴り倒す事に変わりは無い。
「いい加減、墜ちろ！」
「子供は、寝てろ！」
私の拳が少年の頭を捉え上から地面に叩き付け、少年の拳が私の顎を捉え地面に仰け反らせる。
……困った。立てん。
「くっそ…立てない」
「私もだ。女の様な顔をして随分凶悪な事だ」
「誘拐犯に凶悪だなんて言われて堪るか」
立てないながらも何処かに向かおうとしている。

「何処に行く気だ？」
「家で怪我の治療。その後ロザリー追う」
「……そうか」
特に言う事は無いな……
「……ジル、この状況、今すぐ説明せい」
ん？子供の声？

女勇者ＶＳ男Ａ（後書き）

男Ａと言うよりも眼帯少年に成ったジルくんでした

魔王の怒りと義務

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

アダトリノ王国がユビキタスのシルフ歓迎会の翌日とんでもない発表をした。

『ギグの森で神祖の存在を確認。人間の世の為に此れを捕え、処刑する』

これって完全にロザリーちゃんのコトじゃない！

その知らせを受けて直ぐに私とリリー、モリッシュに切り込み隊長のテッタ、保健室長のヘレシアの５人でロザリーちゃんの家に来た。

でも遅かったみたいで、ジルと黒髪の女の人とグレゴリウスが倒れてた。

グレゴリウスは意識ないけどジルはまだ気を失ってないみたい。だけど速く手当てしないと！

「……ジル、この状況、今すぐ説明せい」

「リリー！まずは手当てしなきゃダメよ！ヘレシア！」

「大丈夫！直ぐに始めるから家に運んで。テッタちゃんは皆をベットに運んで。モリッシュちゃんは清潔なタオル。イトハちゃんとリリーちゃんはお湯の準備」

テキパキと指示を出して行動開始。

「行くわよリリー」

「……」

「ジルが早く喋れるようにならなきゃロザリーちゃんのコトも聞けなくなるのよ？」

「……分かっておる」

渋々動き出した。手がかかるんだから！

……ジルと一緒に倒れてた人って、勇那じゃない！？

じゃあ勇那がロザリーちゃんを捕えに来たってコトよね？

勇那のせいでこの世界に来たのはイイ。でも、ロザリーちゃんを傷つけるのまで許した覚えはないわ。
「ジル、平気？」
「ああ……動けるように成ったら勇者に色々聞く。その後アダトリノに行く」
「……1人で行く気？」
「魔族が行ってみなよ。人間と魔族の戦争が起きるよ」
思ったよりシッカリ考えてるわね。
「その通りじゃ」
「リリー？」
「ジル。わらわが前に言った事、覚えておるな」
「ああ……でも俺に地獄を見せるのはロザリーを連れ戻してからにしてくれない？」
「……其れまで待てと？」
「そうだ」
「……わらわは、お主を許す気は無い」
「覚えておくよ」
「リリー！？」
「イトハ、リリーの怒りは正当なものだよ。ロザリーが連れてかれたのは俺の落ち度だ」
「でも！」
「イトハちゃん退いて。ジルくんだっけ？病人が長話で無理しないの。リリーちゃんも、話は後にしてあげて」
「……分かっておる」
「ヘレシア、ジルのコトお願いね？」
「大丈夫よ。動くだけなら明日からでも平気」
「そう」
……ジルは平気そう。問題は、勇那の方ね。
勇那の側にはテッタについてもらってた。怪我してる勇者くらいな

らどうにでも出来るからってテッタになった。
そりゃ、魔王の側に勇者は置いておけないわよね。
「君が魔王だったんだな。前に会った時から気に成ってたんだが、結局先送りにしてしまった」
「此の様な事が無ければ永遠に明かす気は無かったがの」
「それは無理だろう。私がこの世界に呼ばれたのは君を殺す為だ」
「「なっ！？」」
「2人共止めい。勇者とは本来、魔王を討つ為に呼ばれるのじゃ。呼ばれる者の意思に関係無くな」
そうよね。
危うくガ・ジャルグ出すトコだったわ。テッタも刀抜きそうに成ってるし。
「君は慕われているんだな」
「……わらわは貴様を許さん」
「少年を傷つけた事は素直に謝罪しよう」
「ジルの事はどうでも良い。だが、お主はロザリーの正体をジルに教えたと聞いた。それも、ロザリーの前で」
「ああ。教えたな」
「何故じゃ！？」
急にリリーが勇那に掴みかかった。
「リリー！相手は怪我人よ！」
「こ奴はっ！……ロザリーの最も恐れてた事をしたのじゃ。友として、それはとても許せる事では無い！」
「何言ってるか分かんないわよ！分かるように話して！」
「魔王様、落ち着いて下さい！」
体小さいくせに2人がかりでも止めるのに苦労するなんてどんな力してんのよ？
「……もう暴れん。離せ」
ようやく落ち着いたわね……
「彼女にとって自分の種族はそんなに重要な話だったのだな」

「当然じゃ。ロザリーは……神祖とゆうだけで……」
スゴイ目で勇那を睨んでる。そんなに酷かったの？
「神祖でさえなければ、人の国か魔界で暮せたものを……人間が迫害さえしなければ、危険因子だと決め付けさえしなければ、ロザリーはこの様な危険な森で1人で生きなくても良かったのじゃ！」
「……魔界にも住めないの？」
「……神祖は皆、産まれ付き膨大な魔力を持っていますから、魔族と敵対している人間からすれば、敵の戦力を増やさない為にも神祖を魔界に行かせるわけにはいかないのです」
テッタが私の疑問に答えてくれた……だからロザリーちゃんはいつもリリーの誘いを断ってたんだ……
「じゃから、ロザリーはジルに神祖だと知られるのを恐れた。ようやく1人でなくなったのじゃ、共に居れる者を見つけたのじゃ。知られなければ、恐らく共に居れただろう……じゃが、貴様が教えた！」
「……危険人物と共に居よう等と思う物好きは少ない、か」
「そうじゃ！ロザリーは今頃、ジルに嫌われたと、恐れられたと思っておる！」
孤独から解放されたと思ったら、隠してた大事な秘密が知られる……確かに嫌な話ね。
「……魔王様、今後如何されますか？」
「～っ！ジルの治療が済み次第、わらわは城に戻る！ロザリーを処刑させはせん！お主はジルと勇者を見張れ」
「見張れば宜しいのですね？」
「そうじゃ。見張れ」
「必ずやご期待に沿ってみせます」
「うむ、任せた」
ん？わざわざ聞き直す必要あったのかしら？
「ではわらわは城に戻る。数日でモリッシュを迎えに寄こす。その折には手紙を出す。グレゴリウスの元に届く筈じゃ」

「待て」
勇那?
「何じゃ」
「あの少女は恐らく2週間は無事だ」
「勇者の言う事を魔王に信じろと?」
「信じられないのならそれでも良い。だが話だけでも聞いて損は無い筈だ。
アダトリノの処刑は必ず首都の大広場で月始めに行われる。その日までは死刑囚には何が有っても手を出してはならないとゆう法が有る」
「じゃあそれまでにロザリーちゃんの死刑を止められればイイのね!?」
「……話はそう簡単ではないと思います」
「わらわも同意見じゃ」
「何でよ?」
「まず死刑が早まる可能性が有る。死刑囚の死刑執行は月始めかもしれんがロザリーは死刑囚とゆう扱いになるとは限らん。
そして、もし死刑を免れてもアダトリノに拘束される可能性も有る。神祖の魔力は人間には魅力的な筈じゃ。特に、戦争を考えてる人間にはな」
……ロザリーちゃんは兵器じゃないわ。
「従わなければジル殿を殺すと脅される事も有るかもしれませんね」
「そうじゃ。じゃから、死刑を止めるだけでは足りん。
ロザリーに2度と関わらない。そう約束させる必要が有る」
……思った以上に厳しい状況みたいね……

Ｓｉｄｅ：男Ａ

ロザリーが連れて行かれた。

でもまだ死んでない。連れて行かれただけでまだ生きてる。

ならやり様は幾らでも有る。

「勇者、今平気？」

「ジル！起きててイイの？」

イトハ達まだいたんだ。まぁ子供が大怪我してたら普通心配するか。

リリーは帰るってモリッシュが教えてくれたから皆帰ったと思った。

「俺は刃に触れても切れないほどに頑丈なんだよ？これくらい平気だよ。それより、勇者に聞きたい事が有るんだけど」

「何だ？」

「アダトリノ城の間取り」

「……乗り込む気か？」

「当然」

何を聞いてるんだ？

「１人でか？」

「数の問題じゃないよ」

問題は俺が行きたいか行きたくないかだ。

「……そんなにあの少女が大事か？彼女と居ても良い事等１つも無い様だぞ？」

「勇那！」

イトハが声を上げて勇者を睨みつけてる。

「イトハ、良いよ。

良いか悪いかは俺の主観でしょ？他の人の意見なんてちょっとした参考にしかならないよ。俺の行動を決定するには弱い」

「それをあの少女は望むのか？助けなど求めてないかもしれないぞ？」

「だから？」
別にロザリーの意思なんて知らない。ただ俺がそうしたいだけだ。
「……彼女に拒絶されたらどうする？君の行動が全て無意味に成るかもしれないんだぞ」
「それならそれで良いんだよ。俺にとって大事なのはそこじゃない」
拒絶されたらそん時考えればいい。聞かない事には拒絶されるかも分からない。大事なのは俺がロザリーに会いたいって事だ。
「……そんなに彼女が大事か？」
「大事だよ。だから会いに行く為の方法を考えてる」
アンタは大事じゃない人の為に動くのか？それはまた損な人生だね御愁傷さま。
「……敢えて茨の道を行くのか？」
「意地が有るんだよ。男の子には、ね」
「……恥ずかしい台詞だ」
「本心だからね」
「誰にも祝福されないだろうに」
「愛とは見返りを求めない物らしいよ？」
「その歳で愛を語るか」
「俺の言葉じゃないけどね」
「なら君にとってあの少女はなんだ？」
「大事な人。これさっきも言わなかったっけ？」
「確認しただけだ……良いだろう。協力しよう」
「裏切り者だ～」
「茶化す様なら教えん」
「ごめんごめん。紙とペン持ってくるから待ってて」
これで城への侵入経路とか見つかると良いんだけど……難しいだろうな～……はぁ……

Ｓｉｄｅ：女勇者
行ったか。今の内に間取りを思い出そう。半年も住んでいたから流

石に覚えた。
……大事な人の為に動く、か。
私の大事な人とは誰なのだろうな……特に思い付かないな。
ただまぁ、変態巫女と団長に愛着は有るのだろう。
今回の仕事、気乗りしなかったが王は暗に変態巫女と団長を人質にすると言っていた。
『巫女が国を長期離れるな。自覚が足りん。
最近、第1騎士団の仕事が滞っておると聞く。少しは進めておけ。
勇者、今1度私にお前の力を示せ。無力な勇者に用は無い。それだけは覚えておけ』
最後の部分で変態巫女と団長に視線をやった所を見るとあの2人は私の教育係。私が使い物にならなければ用済みとされる、と言った所だったな。
……私にとってあの2人は大事だったのだろうか？良く分からんな。
「何で教える気になったの？」
イトハ？
「ロザリーちゃんを攫ったのはアンタじゃない。今更償いのつもり？」
怒っているのだな。
神祖と呼ばれ忌み嫌われている割にあの少女は多くの者から好かれている。やはり種族など個人を測る材料にはならないのだな。
「私も私の大事な事の為に動こうかと思った。その為には少年に動いて貰うのが最良だと思っただけだ」
「利用する気？ジルは子供よ」
「だが私や君よりは良い覚悟を持っている。他者に与えられた『神祖は悪』とゆう考え方はただの情報でしかないと分かっている。
あの少年は本物と偽物の差をよく知っているよ。私達より年下に見えるが、まるで年下だと思えなかった」
もしかしたら呪いに掛かって幼児退行した冒険者、なんて可能性も有るな。

「持ってきたよ。覚えてるだけ書いてね」
「ああ……あの少女は、幸せだな」
書きながら思わず呟いた。
「どうかな」
「違うのか？これだけ多くの人に心配して貰えるのは、怒って貰えるのは、幸せだと思うが？」
私には分からない感覚だ。だがこの少年なら答えを言ってくれる気がした。
「ロザリーがそれを望んでるかは分からない。さっきアンタが言った事だよ？覚えてないの？」
「……そうだったな」
答えては貰えなかったか。
「自分の幸せなんて自分で決めればいいよ。どうせ正解なんて誰にも決められないでしょ？」
「……そうだな。幸せの定義は、人それぞれだ」
向こうで見た幼児虐待の新聞記事を思い出した。
ある児童が遠足のお弁当の時間に担任と話していた時、母親の話に成った。
その時児童が凄く嬉しそうにお弁当が嬉しいと言っていた。
久しぶりの母親の料理なのだと。学校が休みの日にだけ料理を作ってくれるのだと。
聞いてみると、その児童の平日の食事は学校の給食だけだった。それでも児童は休みの日にしか食事をくれない母親を優しいと嬉しそうに担任に語ったそうだ。
この記事を読んだ時、私はあまりに価値観が違い過ぎて少し気持ち悪くなった。
自分と違い過ぎる価値観。
幾つか書き終わった間取りの絵を見てブツブツと何かを思案しているこの少年の価値観は、きっと私には気持ちの悪いモノなのだろうなと思った。

「……ロザリーは地下牢に閉じ込められてると思う？」
「ああ。それ以外は拘束するには向かない部屋ばかりだ」
「城の人間に何かされる可能性は？」
「私の使い魔を側に付けている。不埒な輩は殺していいと言っておいたから心配は無い」
「じゃ、明日でも大丈夫そうだね。う～ん……ねえ、一緒に城に行ってくれる？」
「ジル！？」
それまで黙っていたイトハが流石に声を上げたが少年は無視している。
「寧ろ私も城でやりたい事が出来たから一緒に来て欲しいくらいだ」
「利害の一致ってヤツだね」
「ああ、同士と言うヤツだ」
「明日、アダトリノに行って」
「それぞれの目的を果たす」
「お互いの計画には」
「干渉しない」
「そうと決まれば怪我速く治さなきゃね」
「どうせ打撲と掠り傷だ。直ぐに動ける」
少年は少女を奪還する為。私は私の目的の為。互いを利用し、目的を果たす。
「私も行くわよ」
「某は魔王様から2人の監視を命じられています」
「そう。なら、ちょっとは計画練らなきゃね」
勝負は明日。直ぐに始めるか、下準備をするか、そんなものはその場で決めれば良い。
自分の目的を果たしたければ、動けばいい。その為に、私と少年はお互いを利用するだけだ。

男勇者の怒りと変態巫女の想い

Ｓｉｄｅ：男勇者

アダトリノの使者がシオン達の歓迎会で発表した神祖の話は俺には良く分からなかったが、勇那はパーティーの翌日、神祖を捕える為にギグの森に出発した。

そして勇那がギグの森に入った日の夜。アダトリノから全ての国に手紙と写真が届いた。

『人に仇名した神祖の末裔を捕えた。アダトリノの習慣に従い、月始めに公開処刑に処する』

そんな手紙と同封された白黒写真にはロザリーちゃんが写ってた。

「……フレイヤ、俺アダトリノに行くよ」

自室の前の廊下でフレイヤに告げた。

「駄目だ。お前はこの国の勇者なんだぞ？」

落ち着いた声だ。公女として自分の成すべき事を考えているんだろうな。でもな！

「知るか！あの子は今も暗い牢屋に閉じ込められてるかもしれないんだぞ！？ジルくんがロザリーちゃんが連れてかれるのを黙って見てるはず無い！って事はジルくんもやられたって事だろ！？俺は、友達傷つけられて黙ってられるほど人間出来てないんだよっ！！」

「……どうしても行くなら、動けなくなるまで痛めつける事に成る」

「上等だ！俺を止めるって言うなら、この城破壊してでも通してもらう！」

本気だ。いくらフレイヤでもこれだけは譲れない。

「……ロザリーちゃん、捕まったってホントなの？」

なっ、シオンにクリス！？

「……お前達も少女とは面識が有ったんだっけね」

「うん。アダトリノに連れて行かれたんだよね？」

「そうだ」

「私も助けに行く！」
「……ロザリー、神祖だったんだな」
シオンが何か暗い？
「シオン君？」
「クリス、前に話したろ？俺達が隠れて暮す様に成った理由」
「うん、神祖がシルフに変身して人間を襲ったからって……まさかシオン君…」
「ロザリーもジル坊もダチだ。でも、神祖が憎いのは、嫌いなのは……くそっ！」
後ろ向いて歩きだした。
「シオン君！？」
「やめなクリス。事情はそれぞれだ。アンタにシオンを動かすだけの理由が有るのかい？」
「……ないよ。でも、私1人でもアダトリノには行くよ！」
「フレイヤ、俺も行くぜ。止めるなら、戦ってでも行く」
「それで多くの民が死んでもかい？」
っ！
「何の話だよ？」
「お前は勇者だ。お前が思っている以上にお前はこの国の顔なんだ。それが無理矢理他国に押し入って世界中からうとまれている神祖を連れ出してみろ。人間の国全てがユビキタスを敵だと認識するぞ。今のアダトリノは非常に不安定だ。ちょっとした切っ掛けで良くも悪くも変わる」
「……だから、友達見捨てろってか？」
「……必要なら、そうする」
「フレイヤ姫！？」
「……まだ、子供なんだぞ？ただの小さな女の子なんだぞ！？それを寄ってたかって苛めて、そんな風にしか変われない国なら、さっさと潰れろ！！」
黙って俺の言葉を聞いてる。『私を納得させてみろ』ってか？

「子供を犠牲にしてしか変われない国に！小さな女の子を使わなきゃ何も出来ねえ国に怯えてんのかよっ！！それでも1国の公女かよっ？そんな様で今まで俺にしたり顔でアダトリノの事話してたのかよっ？アンタはその程度のヤツだったのかよ！？」

「フレイヤ様への暴言は許しません」

……いつの間にか、俺の首筋にデカい中華包丁みたいなのを付き付けてるメイドさんがいた。

「え？だっ、誰！？」

クリスの気持ちは凄い良く分かるけど、今はそれどころじゃない。

「知るか。公女ならそんな隙作るな！」

「……はっ、何も見て来なかった餓鬼が言いたい放題言ってくれる」

ようやく話したか。

「たかがどの国にも入っていない小娘1人の為に大見え切ってくれるじゃないか」

「……小娘だと」

「いや、勇人よりは大人だったね。少なくとも少女は自立して自分の力で生きてた。ボウヤが来る前はずっと1人で生きてたんだって言ってたしね」

「何が言いたい」

メイドさんの包丁が冷たいけど、どうだっていい。今大事なのはフレイヤの言葉だ。

「勇者だ何だと煽てられて、自分じゃ何にも出来ない餓鬼が随分騒ぎ立てるって言ってるのさ。

お前が動かなくても少女に生きる意志があれば自力で脱出する。ボウヤは生きてればお前よりも確実な方法を模索して動くさ。お前如き外野が、考え無しに動いた所で何も出来はしない」

「……なら考える…考えて動く」

「どうやって？お前に出来る事が有るのか？お前が動く余地が有るのか？

無いな。もしボウヤが動いてたらお前は邪魔なだけだ。ボウヤの言

葉で言うなら、お前は敵だ」
「……敵でもいい。あの2人を助ける為なら、俺は悪でいい」
「……世界中から蔑まれるよ？歴史上最悪の勇者としてその名を残す」
「それでも、見捨てるなんて出来ない」
「……メイドさん。アダトリノに手紙だ」
「公がもう出しております」
「……は？」
「ロザリー様の作る魔具はどれも一級品です。その技術を無くしてしまわれるのは惜しいとの事で、アダトリノに手紙を出しております」
「……少女の魔具？」
「城が懇意にしている貿易都市コールスの雑貨屋です。店主が色香の有る美人です」
何か最後どうでもいい情報入った！
「……私達の言い争いって」
「……完全に無意味だったな」
「明日、アダトリノに訪問しますので御準備を」
「私も行くよっ！ロザリーちゃんは絶対助けるんだから！」
とりあえず、何か考えなきゃな。

Ｓｉｄｅ：変態巫女
勇那様がいない。入れ替わりで神祖の少女が牢屋に入った。騎士達の話だと殿を務めたと言う。
……勇那様、どうか御無事で。
とにかく、少女に会いに行く。何を話そうか、決めてはいないけど何か話は出来る筈です！
そうしてジメジメした地下階段を降りて奥の牢屋に行くと、勇那様と同じ黒い長い髪の、表情の無いお人形の様な少女がいました。クロちゃんも一緒です。

「……こんにちは」
「……」
「私はエルーダ・サモン・ラーク。貴女の御名前は？」
「……ロザリー」
ボソッと答えてくれました。
「そう……」
会話が続きません！これは気まずいです！
「にゃ～」
「……クロちゃんの事、触ってみませんか？」
何言ってるんでしょうね私は。
「……柔らかい」
やってくれました！素直な良い子っぽいです……王はこの子を処刑しようとしている……
「貴女が、本当に、神祖なのですか？」
「っ！……お母さんには、そう聞いた」
泣きそうな顔をさせてしまいました……私は昔からこうです…無神経です……
「ジルにも、知られちゃった……きっと、嫌われちゃった…」
勇那様が戦っている少年の事でしょうか？
「ずっと、言おうと思ってたのに……言えなかった……言えないまま、知られちゃった」
……嫌われるなら、自分から嫌われたかったのでしょうか……嫌われたくなかったから、自分で言いたかったのでしょうか……
私には分かりません。
「きっと、嫌われちゃった……ずっと、隠してたから……嫌われちゃった」
「……嫌われても、好きでいればいいんです」
私は何を言ってるのでしょうね……
「私にも好きな人がいます。でも、勇那様は私の事を好きには成ってくれないと思います」

きっと、自分より不幸な人がいるんだから大丈夫だよ、とでも言いたいのかもしれません。
「でも、私は勇那様を愛しています」
そんな対比には何の意味も無いのに、そう言っています。
「勇那様が好きに成ってくれなくても、私の想いは変わりません」
でも、それでこの少女が楽に成れるなら、私の自己満足も少しは役に立ちます。
「だから、貴女もその人の事を好きでいて下さい」
自己満足で誰かの心を楽にしてあげられるなら、それは無神経でも良い事です。
「もしその人が貴女を助けに来たら、素直にそう言ってあげて下さい」
その為らな、私の自己嫌悪なんて有ろうが無かろうが変わりません。
「きっと、その人も喜んでくれます」
「……分かんないよ……でも、どうしよう」
大丈夫。そこまでしてくれる人が貴女を嫌いな筈有りませんよ。
……勇那様。願わくは、その人をロザリーさんの隣にいさせてあげて下さい……

男勇者の怒りと変態巫女の想い（後書き）

ようやくの全員集合

そして
ストックが切れそう
書く時間が無さそう
……泣き言ばかりでスイマセン
書きます！
ちゃんと1日1話投降してみせます！

注）酒で頭がおかしくなってます
　生温かい目でスルーしてくださると助かります

男Ａの神祖救出

Ｓｉｄｅ：男Ａ

「……本当に１人で行くの？」

アダトリノ王国首都の城壁が見える丘で作戦会議をしてたらイトハが心配そうに話しかけてきた。

「侵入経路が無いんだからしょうがいないよ。勇者に連れて行ってもらえるならそれが１番でしょ？」

ちなみに女神様から夢に呼び出されなかった。流石に空気読んでくれたみたいだ。申し訳ない。

「……脱出の算段も無いのにどうするのです？貴方はロザリー殿を連れ出す事が出来るのですか？」

テッタだっけか？痛い所突いてくるな。

「でも勇者が騒ぎ起こすだろうからね。どうせ神祖１人にそこまで戦力充てられないよ」

「ほう、バレてたか」

「どうせ王様狙いなんでしょ？ならパーっとやっちゃってよ」

「そうだな。最後にデカい花火を上げよう。少年の魔法を見て思い付いた事も有る」

「じゃ、行こうか？上手くロザリーの所まで連れてってね」

「任せろ」

さて、犯罪者として牢屋にぶち込まれよう。

「……ちゃんと戻って来なさい。ロザリーちゃんを助けたいのはアンタだけじゃないのよ」

昨日の夜にアダトリノが北の国で作られたカメラで撮ったロザリーの写真を全国にばら撒いた。赤ヒゲは人間の国には武器を作らないと手紙を飛ばした。

多分ユビキタスの人達も動くだろうな。ロザリー人気者だ♪

そんな事考えながら勇者に縄を引かれて歩く。

捕虜に見えるように俺は手縛られてるんだよね。歩き辛いな。あ、門番見つけた。

「神祖の仲間の相手をしていたら遅れた。コイツも神祖と同じ牢に入れるが、構わないな？」

「勇者様！？御無事でしたか。捕虜なら我らが」

「いや、この者は魔力は低いが危険だ。私が牢に入れる」

「……分かりました。どうぞお入り下さい」

あっさり入れたな。勇者サマサマだ。

くたびれた人ばかりの城下町を抜けて城に入ると街と城の差に目眩がする。無意味に豪華過ぎる。

俺達の姿を見て遠巻きに偉そうなオッサン達が「良くぞ御無事で」「神祖の仲間を捕えるとは流石です」「王に御顔を」とか言ってる。

あとすれ違った貴族達がユビキタスの使者が神祖の開放を直談判しに来るとも聞いた。

私情入ってるのか？それなら統治者失格だと思うぞ姫様。

「ふっ、ユビキタスの勇者なら乗り込んで来るだろうな。脱出が容易に成るかもしれないぞ」

勇人と知り合いだったのには……同じ勇者同士だし面識有っても可笑しくないのか？

看守にロザリーの居場所を聞いた後、地下への階段を降りながら声をかけてきた。

誰かいるって言ってたな。

「どうかな」

実際、ユビキタスの使者を門前払いにすれば済む話だ。

「近くに居るなら私が問題を起こして入る為の大義名分を作ってやれば良いだけだ」

手を縛ってた縄を切ってもらう。もう誰もいないって事か？誰かいるみたいな事言ってたぞ？

「わ～、悪だね。さっすが闇の勇者」

「……その呼び方は止めろ」

「そうする」
本気で嫌そうだ。一応女子だし気にしてるのかな？あっ！
「ロザリー！」
突き当りの牢屋にロザリーがいた！
思わず走り寄るが牢屋の鍵は閉まってる。
「……ジル？」
乱暴された様子は無い。暗い顔で、牢屋の中のベットに腰掛けてる。
「勇那様っ！？」
「にゃっ♪」
「クロ、エル、ご苦労だった。此処からはこの少年が少女を守る。私と来い」
そう言って牢屋の鍵を開けた。閉める時鍵要らないみたいだ。
「にゃっ！」
「えっ？……でも…」
「無粋だな。これからの事を決めるのは当人達だ。私達が干渉する事じゃない。行くぞ」
「……はい！お供します！」
……行ったかな。
じゃ、感動の御対面だね。
「ロザリー、元気だった？」
まずはジャブ。さて、どうくるかな？
「……ジルも、捕まっちゃったの？」
牢屋に入ってロザリーの隣に座る。
「ダガーも取られてないのにそれはないよ」
牢屋は開けっぱなしだしここの警備はザルだな。勇者が信頼され過ぎなのか？
「……じゃあ、どうしたの？」
「ロザリーに会いに来た」
「……そう、なんだ」
声震えてるぞ？

「……アタシね、ジルに、隠してたコト、あるんだ」
「うん」
「アタシね、ホントはね……」
「うん」
「神祖なんだ……皆から、嫌われてる」
「うん」
「アタシといるとね、ジルも、嫌われちゃうよ…」
「うん」
「だからね、ジル、もう、アタシと、いちゃ、ダメ、だよ」
涙溜めて無理矢理の無表情で言われてもな。
「……ヤダ」
「え？」
「ヤダ。俺はロザリーと一緒にいたい」
「嫌われ、ちゃうよ？」
「俺が嫌いな人にまで好かれなくてもいいよ」
「ドコにも、いられないよ？」
「ならいられる場所作るよ」
「アタシは、世界中に顔知られちゃったんだよ？」
とうとう泣き出してしまった。
「髪型でも変える？」
「変装、なんて、意味、無いよ」
「なら世界を変えるよ」
「どう、やって？」
「これから考える」
「……やっぱり、無理だよ…ジルが、嫌われちゃうよ」
「俺が嫌いな世界に価値なんて無い。無くなっちゃっても何も思わないよ」
「ダメ、だよ…ジルが、生きて、いく世界だよ？」
「……はぁ……ロザリー、1つ聞きたいんだ」
面倒に成ってきた。

「何？」
「ロザリーは、どこに居たいの？」
ロザリーが自分の事話さないから話が進まないよ。
「……分かんない」
「俺はロザリーの隣に居たい」
とりあえず、涙流しっぱなしだと痕ついちゃうから拭く。
「……知ってるよ」
「じゃ、選んで」
「何を？」
「ロザリーの居たい場所。選んでくれたら俺がいさせてあげる。選ぶまではずっとロザリーの隣に居るよ」
クサい台詞で顔が真っ赤に成りそうだけど頑張って素面保つ！
「……ズルイ」
ふっふっふ、これぞ大人の知恵だ！
どこに居ようが俺はロザリーの隣に居られる！……我ながらセコイな。
「……ハンバーグ」
「うん？」
「今日の晩ご飯、ハンバーグ、食べたい」
「うん。じゃあ、今日は帰ったらハンバーグだね♪」
「……うん♪」
やっと帰る気に成ってくれたか。意地っ張りだったな。
「じゃ、もうちょっと待ってようか。勇者が騒ぎを起こすだろうからね」
「勇者さんって、勇人さん？」
「さっきの黒髪の女の人の事。アダトリノの勇者なんだって」
「そうなんだ……でも、騒ぎ起こすの？」
「王様狙ってるんだってさ。アグレッシブだよね」
「……止めなかったの？」
「ロザリーに会う為に協力してただけだからね。この後は関わらな

いって約束なんだ」
「……女の人だよ？」
目が細くなった？はっ、しまった！
「男１０人くらいなら素手で倒せるなら気にする必要無いと思いました！」
このままでは！
「ジル、久しぶりにオハナシがあるの。ちゃんと聞いてね？」
「い、いやほら！ここで大きな声出したらマズいって！」
「大丈夫、ジルは声を出さなくても大丈夫」
それは声も出せないとゆう事でしょうか？
マズい！どうにかして逃げ切らなければ！幸い牢屋の鍵は開いてるしここの地下牢は若干入り組んでるし行き止まりも少ないっぽかった！これならイケるか！？
「……ジル、やっぱりアタシの側にいたくないんだ…」
くっ、分かってる！あれは嘘泣きだ！嘘泣きなんだ！
逃げなきゃ駄目だ逃げなきゃ駄目だ逃げなきゃ駄目だ逃げなきゃ駄目だ逃げなきゃ駄目だ……
「……オハナシ、聞きます」
あんな泣き顔で放置なんて無理。泣きて～……

女勇者の目的

Ｓｉｄｅ：女勇者

「……あの少年は、どうなるのです？」

牢屋を出て鍵を返したら変態巫女が聞いてきた。

「少女を連れて逃げるんだろう。大穴で反撃してくる、なんて可能性も有る」

「反撃、ですか？」

「ああ。このまま逃げてもまた兵を派遣されたら同じ事だ。だったら２度と少女を狙わない様に国の中枢にダメージを与えておくのは間違いじゃない」

あの少年ならやりかねない。騎士の１人や２人ならその場で瞬殺出来るだけの戦闘能力を持っているから城内で不意打ちをしていればそれなりに城の戦力を削げる。

そうして隠密行動に徹して上層部の何人か、或いは王を殺せば少年の反撃は成功だ。

今回は、私の目的の為にそうしてもらいたい所だ。

「そうかもしれませんが……ロザリーちゃんがそれを許すのでしょうか？」

「さぁな。私は少女と話した事も無いから分からないが……案外懐柔済みかもしれないぞ」

「……何故王は、ロザリーちゃんを……」

「分からん。そして分かる必要も無い」

「え？」

「私はこれから国を崩す」

「勇那様？」

「王と腐った大臣を討つ。国の重役は一掃されるだろうな。国を保てない程に」

「……何を考えているのです」

恐ろしいモノを見る様な目で聞いてきた。
それはそうだ。信頼してた者が反逆者に成ると言い出したら誰だって戸惑う。
「つまり、こういう事だ」
変態巫女の鳩尾を殴り気絶させる。
最後に私の名前を呼んでいたが、これ以上変態巫女を私の側に置いておく訳にはいかない。
「クロ、大臣連中は会議場か？」
「にゃっ」
「そうか。では、始めようか」
「にゃっ！」
これで私も犯罪者。少年と少女は騒ぎに乗じて逃げるだろうな。
私の邪魔だけはしてくれるなよ。

「失礼する」
無駄に大きな扉を開け放つ。扉の前に居た騎士達に止められたが五月蝿かったので寝てもらった。此処に来るまでも何人かの騎士に寝てもらい、腐った貴族共は消えてもらった。
「なっ！勇者様！？」
私の乱入に椅子に深く腰掛け紫煙を垂れ流していたデブ共が浮足立つ。机の上には国の予算計画表。
近づいて資料を取り見る。不正や汚職のオンパレードだった。いっそ清々しい程に自分達の懐に入れている。
「これがこの国の実態とは、嘆かわしいな」
「お、お待ち下さい！これは」
「これは？」
「しょ、書類上の不備を治そうと皆で検討して……」
「普通の予算案を強引に変更しようと書いて有る。もう駄目だな、貴様達は」
元から生かしておく気など無い。力の無い騎士は適当に気絶させれ

ば良いが、こいつ等は生きていた所で何の意味も無い。私にとっては害悪だ。

「消えろ」

腰の無白を抜き一閃、闇が大臣達の首を一斉に刎ねる。首無し大臣達が血を噴き出しバタバタと倒れていく。

返り血を浴びない程度に離れていたので不快な思いをしなくて済んだ。

血臭のする部屋の扉を閉めて王の間に向かう。

途中、会議室や通路の死体を見つけたのか兵が集まり過ぎて囲まれたが全員殺しておいた。おそらく少年も脱出しただろう。それにしても速く見つかった。些か騒ぎが大き過ぎだが……私には関係ないな。

帰って来たら真っ先に王に顔を見せるのが普通なのだろうが、出来るだけあの顔を見る回数は減らしたい。反吐が出そうに成る。

「勇那、帰って来ていたのですね！お父様にはもうお会いになって？」

姫か。この人は生きていても良いだろう。民を守る為に自分すら犠牲にする覚悟が有る。

「捕虜を牢に連れて行っていましたから。これから王の間に向かいます」

「ご一緒しても？」

探る様に、断られるのを恐れる様に聞いてくる。何か有ったな。

「喜んで」

そのまま誰にもすれ違わずに王の間に着く。

中に居たのは王と数名の家臣、王の近衛兵１０人だった。全員私の殺害対象だ。

「勇者か。神祖捕獲の件、大義であった」

捕獲。あの少女は動物か魔獣か。

「だが、たかが子供１人に手間取るとは、それでもアダトリノの勇者か！」

「お父様！勇那は務めを果たしたではありませんかっ！」
「黙れ！我が娘とて口応えは許さん！」
「っ！」
潮時だな。
「アダトリノ王」
「何だ」
「第1騎士団団長は如何されました？」
「ふん、貴様を想定以下にしか育てられぬ者等、不要！」
左遷か死刑か。牢屋には誰も居なかった。恐らく左遷か。
「丁度良い。ここに団長が居るか居ないかだけが不確定要素だった」
団長が相手だと骨が折れる。
床に付けていた膝を離し、立ち上がる。
「何を言っている」
「これで心置きなく目的を果たせる」
「貴様、王の質問に答えろ！」
近衛兵が騒いでいる。五月蝿いな。
無白を抜く。
「勇那！？」
「なっ！王の御前で抜剣！？貴様、何を考えている！！」
無能だな。王の間で刀を抜いたら、やる事は1つだろう。
「王よ。貴様にその椅子は相応しくない」
「貴様！不敬だぞ！」
近衛兵達が槍を構える。
「よい、止めよ。理由を聞こう。話せ」
ほう、肝が座っている。器はそれなりらしい。
「貴様は民を顧み無さ過ぎた」
「ほう」
「貴族達が民を苦しめているのを知っていながら何もしなかった」
私の言葉をただ聞いている。
「戦争がしたいなら民の士気を上げるのも王の役割の1つだ。民の

為に身を斬れとは言わん。だが、民を苦しめ戦争を起こした所でこの国は滅ぶぞ」
「くっくっく、王の役割だと？笑わせる。貴様が語る王等、所詮は紛い物！」
そうだろう。私は王の何たるかを知らない。
「王については知らないが、統治者の有り方なら多少の覚えが有る。貴様はそれにも当て嵌まらん、紛い物だ」
「貴様とて勇者としては紛い物よ」
「結構。私を無理矢理召喚したのは貴様らだ。元から勇者に成る気も無い」
「何？」
ここで怒るのか。ポイントが分からんな。
「アダトリノ王！緊急事態です！」
玉座の横から近衛兵が１人出てきた。
「何だ」
「はっ！予算案を練っていた大臣達が首を刎ねられ死亡しています！他にも通路に貴族達の死体が有りました。また、その騒ぎに乗じてユビキタスの者が数名城内に侵入しました！」
「大臣と貴族を殺したのは私だ」
全員の視線が私に集まる。
姫は困惑、家臣は戦慄、近衛兵は驚愕、王は怒り。
それぞれ妥当な反応と言える。
「貴様、狂ったか」
「元からだ。元々私はこの国が気にくわなかった。エルと姫と団長の立場を考えて何もしないでいたが、もう限界だ。これ以上は自分を偽れん」
「……勇那」
姫には悪いが王は殺す。
「小娘が！近衛兵、逆族を捕えよ！」
玉座の裏からも兵が出てきて私を包囲する。私の横にいた姫も必然

的に包囲された。
「お父様っ！」
「黙れっ！こ奴は討たねばならん！今、此処で！！」
む？廊下が騒がしいな。
『これか？』『そのようだね』『突入します。気を抜かないで下さい』『うん！』
この声だと４人か？少年と少女ではなさそうだ。
予想通り、扉を開けたのはあの少年達ではなかったが、知らない顔でもなかった。
「ユビキタス公国公女、フレイヤ・ユビキタスだ！アダトリノ王に話が有る！」
それは、つい最近知り合った連中だった。

女Aは頑張る

Ｓｉｄｅ：女Ａ

ようやくアダトリノ見えた！

速くロザリーちゃん助けてあげなきゃ。でないとホントに殺されちゃう……

アダトリノ首都の門の前に着いたら見張りの人がいるはずの所に誰もいなかった……何で？

「……見張りも付けずに門が開きっぱなし？」

「何か有った様です。お気を付けて」

「ああ。ロザリーちゃん助けに来てるんだ。気を引き締めていこう」

「うん！絶対助けるんだから！」

万全の準備して私とフレイヤ姫とメイドさんと勇人君の４人で先にアダトリノに来た。他にも数十人の兵隊さんが来るけど、それはもう少し先。

結局シオン君は来なかった。

きっとどうしていいか分からないんだと思う。

ロザリーちゃんとジル君のコト、妹と弟みたいに思ってたのにロザリーちゃんは神祖で、神祖はシルフが迫害された原因で、でもロザリーちゃんが殺されるのは嫌で……

頭の中グチャグチャに成ってるんだと思う。今はそっとしておこう。

だから、せっかくシオン君がオリハルコンから作ってくれた弓は置いてきた。

あれはシオン君とか村長さんとかお母さんを守る為にしか使わないって決めたから。

最近あの弓しか使ってなかったから普通の弓はちょっと不安。でもそんなコト言ってられないから、今は進むだけ。

「……おかしい」

「城門の前に兵が居ない……如何なっているのでしょう？」

「……今は好都合だ。速く王様の所に行こう」
「そうだよね……何だろう？」
門くぐる時に何か水っぽいモノ踏んだ……血？
「なっ、なっ、なにこれ！？」
「血痕……それも真新しいですね」
「点々と続いてるぞ……城に向かってる？」
どうなってるんだろう？
「……もしかして、ジル君？」
「可能性は有りますね。彼なら不意打ちで４人くらいなら１度に倒せます。ですが……」
「相手が動ける余裕は与えない筈、だね？」
「そうです。彼なら相手が動けないよう電撃を使うと思います。ですが現実には血痕が残っている」
「……ジルくん以外の誰かがやった？」
「はい。可能性としてはそちらの方が高いかと思われます」
「……急がないとマズいんじゃ…」
「そうだね。王の部屋は多分上の階だ。急ぐよ！」
フレイヤ姫を先頭に王様のいる場所を急いで探してたらあちこちで死体と倒れた兵士を見つけた。
……気持ち悪い……
でもこれでジル君じゃないって分かった。あの子はわざわざ人を殺さない。その前に倒せるから殺す必要がない……と思う。
ロザリーちゃんが何かされてたら多分容赦無く殺しているかもしれない……
「やっぱりボウヤじゃないね」
「……どうしてわかるの？」
フレイヤ姫は確信したように言ったけど、何で？
「ボウヤなら殺す相手を区別しない。少女が何かされたら城の人間は１人残らず殺す筈だ。だが実際殺されてるのは貴族ばかり。その貴族の中にも殺されてない者が居た。犯人は殺す相手を選んでるよ」

「ジル様は差別しません。ロザリー様以外の他者に対して平等です。殺す殺さないを分ける事は無いと思われます」
「……スゲー評価だな」
「言いたい放題だね…あ」
ひときわ大きい扉だ。王様あそこかな？
「お、クリスは目が良いね。流石森の民だ」
「そうかな？それより速く行こっ！」
王様にロザリーちゃんの死刑止めさせなきゃ！
「これか？」
「そのようだね」
「突入します。気を抜かないで下さい」
「うん！」
待っててよ王様！

扉が開いていく。少しずつ見えてきた扉の中は結構人がいるように見えた。
「ユビキタス公国公女、フレイヤ・ユビキタスだ！アダトリノ王に話が有る！」
「……お前、勇那か？」
３０人くらいの騎士に勇那と誰か知らない人が囲まれてた。雰囲気的には一触即発……どうしよう？
「ふぅ、見知った顔ばかりだな。４人中３人は知り合いか」
「……勇那、彼らは？」
「今名乗っただろう。ユビキタスの者達だ。大方神祖の少女を助けに来たのだろう？」
勇那が綺麗なお姫様っぽい人に私達を紹介してる。でも随分テキトーな紹介だった。
「そうだ。あんたがアダトリノ王か？」
「いかにも。貴様がユビキタスの勇者か？」
「そうだ。ロザリーちゃんの死刑を取り下げろ！そしてあの子を解

放しろ！」
「ふん。何を言うかと思えば、その様な事。そもそもロザリーとは誰の事だ？」
「あなた達がギグの森で誘拐した女の子のコトよ！知らないなんて言わせないわ！」
ここまで来て知らないふりする気！？
「ああ、あの神祖の化物の事か。まさか化物を助ける為に一国の姫が動くとはな」
「誰が化物だ！」
「ロザリーちゃんはただの女の子よ！」
化物呼ばわりされるような子じゃないよ！！
「小娘１人に熱く成るな。処刑は止めん。あれは人の世に害成した者の末裔、殺すしかあるまい」
「あの子は何もしてないだろ！あんたが神祖って種族を嫌いだから殺したいだけだっ！」
「お互いにそろそろ平行線だと気付いたらどうだ？お前達の話し合いは永遠に終わらないぞ」
勇那がいきなり話を切った。
確かにこの人と話してもロザリーちゃんの死刑は変わらないと思った。この人は誰の声も聞こうとしない。
話し合いもただのポーズだと思う。
「ふん。無能な勇者が知った様な口を。剣を持て」
王様がそう言ったら近くの兵士が鞘に収まった丸みのある剣を渡した。
鞘は豪華だけど、そこから引き抜かれた剣は実用性のみを追求したような、飾り気の無い突く用のランスみたいな剣だった。
太いレイピアみたいだった。王様の燃えるような赤髪が揺れる。
「グレゴリウスに昔作らせたのが役に立つ。ここ７年ほどは暗殺者すら物足りなかったくらいだ」
「グレゴリウスのオーダーメイドか！」

「フレイヤ姫、何の話？」
「ギグの森に住む、世界最高の武器職人の作った武器だって話さ。気を引き締めるんだよ。多分、勇人やボウヤと同じくらい強い」
……今、勇人は剣技だけならフレイヤさんよりちょっと上だって聞いた。ジル君も接近戦なら相当強いってメイドさんが言ってた……王様なのにそのくらい強いって……しかも暗殺者じゃ物足りないって……
「ふん。小僧と小娘が束に成った所で何が出来る？近衛兵、攻撃用意！」
勇那とお姫様を囲んでた兵士たちが槍を突き出すように構えた。
「お父、様…」
「自分の娘すら排除する気か」
なっ！自分の子供まで殺すってどういうコト！？
「行かしておく必要が有るか？否、断じて否！我が娘とてここまできては逆族の一味と変わらん」
「ふぅ、だから貴様に玉座は相応しくないのだ。終わらせよう。私と貴様の、半年に渡る無意味な睨み合いを」
勇那の言葉で私達も武器を構える。
この人は、ここで止める！！

それぞれのアダトリノ王国

Ｓｉｄｅ：男勇者

ようやくここまで来た。あとはアダトリノ王を倒して、ロザリーちゃんを助けるだけだ！

「勇那、包囲を破れ！」

「それしかないだろうな。クロは姫を守れ」

「にゃっ！」

「クリスは扉付近から弓で援護！メイドさんと勇人は前衛、私が中衛だ！」

「わかった！」

「畏まりました」

作戦はフレイヤに任せる。俺はただ、倒すだけだ！

勇那を包囲してる近衛兵に突っ込む。ジュワユーズを大剣にして薙ぎ払う。刃引きはしてあるから腰から上下に真っ二つにする事はないけど、一振りでまとめて３人を壁まで吹き飛ばす。

その間にメイドさんが何人かを地面に叩き付けて動けなくしてる。

どうやったのかは知らないけど相変わらず頼りに成る。

クリスの弓とフレイヤの魔法が勇那を刺そうとしてる近衛兵の腕や足に当たって包囲を崩す。

勇那は足を切りつけて蹲る兵を足元に転がしておく事で近衛兵が近づくのを防いでいる。あえて殺してないって感じだ。

もう一度盾を構えてる兵達を盾ごとまとめて壁まで薙ぎ払う。

これで勇那の包囲が崩れた。

「勇那、こっちだ！」

「それでは王から遠ざかる。このままだ。クロは姫を頼む」

「にゃっ！」

「勇那！？」

いきなりトラくらいの大きさに成った猫に姫様？が乗せられフレイ

ヤの所まで下げられる。
「ユビキタスの公女から離れるな。そこが一番安全だ！」
「にゃ」
「メイドさん、勇那と突っ込む。フレイヤ達頼んだ！」
「畏まりました。御武運を」
近衛兵とフレイヤ達をメイドさんに任せて勇那と並ぶ。
「俺も行くからな」
「物好きだな」
「ウッセエ。全部終わったら、話せよ」
この城で何が起きてるのかまだ何にも分かってない。
「全てが終わったら、な。行くぞ！」
「おう！」
王までの近衛兵はあと４人。
勇那が右の並んでる２人の間をいつの間にか通り抜けてて、近衛兵は腕と足を１回ずつ切られて倒れた。
俺も縦に並んでる２人の近衛兵を野球のスイングで吹っ飛ばす。
これで王までの近衛兵は０！
「ふん、多少の歯応えは有りそうだ」
「舐めんな！」
「貴様は口を開くな！」
２人でアダトリノ王と向き合う。勇那とは１度戦っただけだから上手く合わせるなんて出来ない。
なら好きにやるだけだ！
勇那の方が俺より速いからどうしても最初は勇那がアダトリノ王にぶつかる。
無白と太いレイピアがお互いを削り、弾く。
アダトリノ王の方が弾かれてからの行動が速い！
あのままじゃアダトリノ王の剣先が勇那に突き刺さる。
そう思った時、俺は勇那とアダトリノ王の間に強引にジュワユーズを割り込ませ、勇那を刺突から守った。

「……礼は言っておく」
「別に当然だろ？あんまり1人で突っ込むな」
「ふん、やはり無能だ。ならばせめて、国の長として引導を渡してやろう」
「死ぬのは、貴様だ！！」
「あんたは俺が倒す！今日、ここで！！」
もう1度、アダトリノ王と対峙する。
この人は倒さなきゃならない。今倒さないと、またロザリーちゃんを狙う。
……あの2人を傷つけさせはしない！

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
「……遅い！」
「イトハ殿、ジル殿も1日では済まないかもしれないと言っていたじゃありませんか」
「それでも速く何とかするのがアイツの義務よ！」
ロザリーちゃんを助け出すって言ったのはアイツ。言ったからにはやってもらうわ。
「……そうですね。ロザリー殿は魔王様の数少ない友人。絶対に助かって頂かなくては……何奴っ！」
「うわっ！」
テッタが刀を抜いて構えた方から人の声が聞こえた。
あっ！私達魔王がどうとか話してた！
「誰だか知らないが、見られたからには…」
いたのは緑がかった白い弓を背負った緑髪の男子。耳が尖ってる？
「待ってくれ！お前等ロザリーの知り合いなのか？ジル坊の事も知ってるのか？」
は？
「……」

「テッタ、刀しまってあげて。話くらい聞きましょ」
「……御意」
ふぅ。危なかったわ。
「驚かせて悪かった。俺はシオン。ジル坊とロザリーとは色彩国家カラーズに居る時に知り合ったんだ」
いきなり身の上話って……あ、コイツがロザリーちゃんの言ってたシルフの知り合いね。
「私はイトハ。ロザリーちゃんとジルの友達よ」
「テッタと申します」
「ああ……2人は、ロザリーを助けに来たのか？」
「そ。ただジル待ちよ。あんまり大勢で動けないでしょ？アンタもロザリーちゃん助けに来たの？」
「……俺は…」
何か悩んでる？じゃ何しに来たのよ…
「違うなら帰った方が良いわよ。この国の勇者、下手したらアダトリノ滅ぼすつもりよ」
「なっ！？」
「ジルは捕まったふりして城に入れてもらっただけだもの。中に入ってからは別行動するって言ってたし」
「じゃあ、中に居る奴等はどうなるっ！？」
国民の事かしら？
「知らないわよ。どうせこの国は貴族達が好き放題やってるんだからいっそ滅びた方がいいんじゃない？」
「そうじゃねえ！城にはユビキタスの勇者と姫様が居るんだよ！」
……は？
「もしかして勇人とフレイヤの事？」
流石に姫様じゃ通じないものね…
「知ってんのか？」
「ロザリーちゃん達と一緒に南第2大陸に行ったわ。1週間くらい一緒だったんじゃないかしら」

「そうか、知り合いだったのか」
「でもマズいわね」
「はい。ユビキタスの姫がアダトリノに来たとなると国家間の問題に発展しかねません」
「あ、それは平気だ。ロザリーはユビキタスに魔具を提供してる協力者だ。先に手を出したのはアダトリノだし問題が有るとしたらアダトリノに成るってよ」
「ふ～ん。で、アンタこれからどうすんの？ロザリーちゃん助けに来たわけじゃないんでしょ？」
「……俺は…」
「ま、何でもいいけどロザリーちゃん助けるのを邪魔するなら倒すわ」
「……」
訳有りって、面倒臭いわ～…

Ｓｉｄｅ：男Ａ
頭がクラクラする。
体に上手く力が入らない。
口の中に甘ったるい感触が残ってる。
まぁ、そんな感じでロザリーのオハナシは本当に一言も発さないまま終わった。
てかロザリー自分からキスしといて動けなくなるのやめてくれ。まさかのディープキスだったのにはもはや笑った。
なんでも貿易都市コールスの図書館に有る『大事な人と一緒に居る為の方法・実用偏』とか言う本の影響らしい。
コーナーと対象年齢間違ってるな。
他にも裸で一緒に寝るとかあったらしいけどそっちは１５歳超えてからが望ましいって書いてあったらしい。
そんな状態から回復して地下室から出てみたら勇者はかなり静かに

城を制圧してるのか誰にも会わずに城門に着いた。
訂正。死人と気絶した人には会った。
これならもう帰るだけかな?なんて思ってた時期が僕にも有りました。
「貴様等、脱獄したのか!?まさか、兵が何人も倒れているのは…」
ワナワナと震えてるロザリー誘拐犯の3人。1人はかなり豪華な鎧なのでアレが本来の部隊長だったのだろう。勇者がリーダーだと思ってた。
「捕えろっ!いや、この場で処刑しろ!!」
はぁ…
微妙にタイミングをズラして近づいてくる2人の腹を雷槍で討ちぬき気絶させる。
本当は殺したいんだけどロザリーの前だから自重。
何か喚いてる部隊長も気絶させて門を出る。
あとはイトハ達に合流して帰るだけだ。やっと帰れる…

それぞれのアダトリノ王国（後書き）

男Aと神祖の出戻り

Ｓｉｄｅ：純情少年

……分かんねえ…どうすればいいか分かんねえ……

ロザリーは妹分みたいなもんだ。

一緒に居たのは精々１日だってのに、ジル坊もロザリーも俺の中で大き過ぎる。

子供なのに自分よりも危険な場所で自力で生きてるから？

誰にも頼らず自分達なりの生活をしているからから？

確かにあいつ等はスゲエ。だけど、ロザリーは…

「イトハ殿、ジル殿です」

「来たわねっ！」

イトハとテッタの言葉で門を見るとジル坊がロザリーの手を引いてこっちに向かっていた。

……どうすりゃいいんだよ…俺は、まだ、何にも決められねえ……

「ロザリーちゃん！」

「イトハ！？」

「あ、話すの忘れてた」

「アンタはイツもっ！！」

「イトハ殿、ドウドウ」

「私馬じゃないわよっ！」

「じゃじゃ馬？」

「殺すわっ！」

「それよりも、シオ兄久しぶり」

「久しぶり～♪」

「お、おう」

どうすりゃいい？何すりゃいい？俺はどうしたい？

「クリ姉は一緒じゃないの？」

「あ、ホントだ。別行動してるの？」

「あ、ああ…」
「ハッキリしないわね。あ、姫様達が城に入って行ったらしいんだけど見なかった？」
「見てない」
「姫様達来てたの！？」
「……クリスも、多分そこに居る」
「クリ姉も！？」
「ロザリー、どうする？」
「う～ん……どうしよう？」
「ロザリーがやりたい事を言ってよ。俺はそれを叶えてあげる」
「……一緒に、行ってくれる？」
「もちろん。じゃ、イトハ、テッタ。悪いけど俺達城に戻るよ」
「なっ！？折角助かったんだぞ？あとは逃げれば良いだけなんだぞ？それなのに何で態々戻るんだよ！？」
「え……だって、クリ姉は、大事なお姉ちゃんだもん♪」
……は？
「ロザリーの望みなら俺はそれを叶えるよ。まぁ、俺なりの方法でだけどね」
ジル坊はいつでもロザリー優先だな…俺は…俺が優先するものは……
「俺も行くぞ」
「うん。了解」
見透かされてたな……

Ｓｉｄｅ：男Ａ
行くならさっさと行こう。そんでロザリー誘拐しようとした奴を殺そう。ロザリーにばれない様にだけど。
「……私も行くわ」
「イトハ殿…」
「却下」
イトハが来たらリリーの我慢が無駄に成る。てか帰りの足が無くな

るかもしれないから無理。
「……私にこのまま何もするなっての？」
「リリーはそうしたよ？その頑張りを無駄にしたいなら止めないけど」
「……分かったわよ」
ふて腐れちゃった。まぁしょうがない。立場ってのは大概は枷だ。
「じゃ、行ってきます」
「行ってきま～す♪」
「行こうぜ」
パーティーは3人。とりあえず王の間とか考えると上の階かな？
「ジル坊」
「何？」
ロザリーに聞こえない様に話すなんて感じ悪いな…
「実は俺は……神祖が憎い」
ほう、俺に殺されたいのか？
「だが…ロザリーは、大事な妹分だ。だから…お前は何が有ってもロザリーだけを守れ。他には目もくれるな」
何か話の繋がりグチャグチャだけど言いたい事は分かった。シオンはロザリーを守らないかもしれない。だから俺がやれと。
てか最初からロザリー以外を見を呈してまで守る気は無い。
城に戻ると城門付近にさっき倒した騎士達が寝てた。起きるの遅いな…
「…俺は東側から回るからお前等は西側から上を目指してみてくれ」
シオンの提案に素直に従っておく。
城内の兵は殆ど勇者が倒してるだろうから戦力的には問題無い。この城は下手に高い塔が乱立してるわけじゃないから手分けした方が確実に見つけられる。
「じゃ、上で」
「シオ兄またね♪」
「おう。また上で」

ふむ、ロザリーと2人っきり。さっきのディープキスを思い出してしまう。
まぁ、それについては帰ってからゆっくり考えよう。今はロザリーの願いを叶える方が先。
「クリ姉、無理してないかな？」
お？何かさっき勇者と牢屋出ていった人も気絶してる。
「……してるだろうな～」
あの人は見るからにお人好しだった。ロザリーが悩んでるのをどうにかしようと自分なりに動こうとしてた。俺が無理にロザリーの秘密を聞こうとは思ってなかったから空回りしてた感は有ったけど。
「……ロザリー。帰ったら俺も秘密にしてた事、話すよ」
イトハはリリーに話してたみたいだったしロザリーになら知られても良い。知ってて欲しい。
「……うん♪ちゃんと教えて」
これで心配事は無くなった。あとはアダトリノを勇者に滅ぼさせて終わりだ。
とりあえず上へ上へと進む……何か激しい金属音と呻き声がしてきた。当たりだったか？
おお、何か一際豪華な扉が……扉から騎士が投げ捨てられた？
まるで騎士を吐きだす口みたいだったぞ？しかも反対側の階段からシオンらしき人が登ってきた。結局同じかよ！
お互いの姿を確認して扉まで走り寄る。
「これで貴様を守る兵は居なくなった。数では圧倒的に不利だぞ」
「抜かせ。この程度の事で我が歩みを止められると思うな！」
勇者と野太いオッサンの声。誰だこれ？あ、王か。
「クリス！」
「シオン君！？ロザリーちゃんも！？」
「クリ姉久しぶり～♪」
「その黒髪赤目、まさか神祖が脱獄したとはな」
部屋の中にはユビキタスの3人と勇者とクリス、見た事無い目が死

んでるお姫様と赤いライオンみたいなオッサン。
不愉快なオッサンが不躾な視線をロザリーに向けてる。視線を阻むようにロザリーの前に出る。
「小僧、貴様が神祖を連れ出したか。神祖は人間の敵だぞ！」
「俺の敵はアンタだ」
間髪入れずに返したら全員が黙ってしまった。何でだ？
「久しぶりだねボウヤ。相変わらずで安心したよ」
「ジル君、ロザリーちゃん助け出せたんだね♪シオン君も、来てくれたんだ♪」
「あ、ああ。クリス、これ使えよ」
そう言って緑がかった白い弓をクリスに渡した。
「え？だってこの弓は、家族の為に…」
「ロザリーは、お前の妹みたいなもんだろ？なら、気にするな。そっちの弓借りるぞ」
クリスと自分の弓無理矢理交換した。何か訳有りの弓なのか？
「……うんっ！」
「たかが3人増えた所で、餓鬼に何が出来る！」
「そうでもないのさ」
「何？」
フレイヤの言葉にオッサンが警戒を強める。
「紫髪のボウヤが持ってる武器はグレゴリウスのオーダーメイドなのさ。アダトリノ王、アンタと同じさ」
「なっ！？」
へぇ～。興味無いな。
「あ、あんまり戦う気無いからそこんとこよろしく」
「「「「「……は？」」」」」
クリス、シオン、勇人、フレイヤ、王が訳が分からないといった目で俺を見る。メイドさんもおいおいって感じだ。
「そうだ少年。これは私の目的だ。手を出すなよ？」
「分かってるよ。骨くらいは拾ってあげる」

元から王だけは勇者が倒すだろうと思っていた。俺は勇者が負けた時だけ王と戦えばいい。

「頼もう。では、改めてアダトリノ王。貴様を殺す！」

「何が何だか分からんが、神祖も貴様等も今此処で死ねい！！」

はぁ、やだやだ。皆熱血だ～…

女勇者ＶＳアダトリノ王

Ｓｉｄｅ：女勇者

約束通り少年は私の目的に手出ししない気だ。妙な所で律義な奴だ。
やはり年下に見えん。
だが、今は有り難い。王を殺すのは、私だ！
無白を構え、王との距離を詰める。
「舐めるな！」
「あなたこそ！」
「お前さえ居なければ！」
シルフの２人が弓で王を攻撃している。あの２人とは何の約束もしていない。ならばやらせておけばいい。
男の方の弓矢は普通だが女の方の弓矢は魔力の塊か？異常に鋭い矢が王に迫る。
「シオン君の作った弓、普通だと思わないでね！」
まさか魔力の矢とは、シルフも面白い物を作るな。
「紅蓮よ　その威を示し　灰塵を成せ　イレプション！」
王が唱えた魔法によって床から炎が噴き出し、迫る矢を飲み込んだ。
イレプション、魔法名そのままに噴火だな。だがあれでは城も燃えてしまうぞ？私の気にする事ではないな。
「その程度の炎で私を阻めはしません！」
メイドさんが腕を振るうと強風に吹き消されるように炎が無くなった。何者なんだ？勇者である私と勇人でもあんな事は出来ないぞ？
「ちぃ！何故分からん？神祖は人間を滅亡寸前まで追い込んだ事が有るのだぞ！何故守ろうとする！？」
「人間が何もしなければ神祖は静かに暮せました。神祖が危険とゆうのは人間が原因なのですよ」
「小娘が、知った風な口を！」
「たかが１００年も生きていない小僧に小娘呼ばわりされるのは新

鮮ですね」
メイドさんの声は小さ過ぎて聞き取れない。話しながら切り合いしているから金属音で声が聞こえない。
しかし、断片的に聞こえた１００年とは……戦争の話か？
「挟撃する。合わせろ」
「うらあああぁぁぁぁーーーっ！」
並んで立っていた勇人に指示を出しアダトリノ王に迫る。無白に闇を纏わせ威力を上げる。
「ぬうぅ、ふんっ！」
鍔迫り合いに成っていたメイドさんを押し退け、右から迫る私の剣を己の剣で、左から迫る勇人の剣を鞘で受け止めた。
伊達に世界最高の武器職人に剣を打たせていないな。
「そのまま張り付いてな！光成す矛よ　邪を滅せ　ホーリーランス！」
フレイヤの頭上に大量の光の槍が産み出された。
「「風纏いて　全てを貫く槍と成らん　ゲイル・ボウ！」」
シルフの２人も弓に多量の魔力を集中させた魔法を展開。
３人がタイミングを合わせてそれぞれの魔法を放った。光と風の槍が王に迫る。
「この程度で、止められると思うなっ！」
片手で私も勇人も弾き飛ばされ、アダトリノ王は有ろう事か大量の魔法の槍を全て剣で弾いて見せた。
壁に、床に、天井に槍が刺さり光の槍が刺さった場所からは火の手が上がり始めた。
「まさか６対１でここまで戦えるなんてな」
「ふん。王たる者がこの程度も出来んで何とする。必要なのだ、絶対的な力が！持たねばならんのだ、折れぬ意思が！」
「言ってる事は立派だけどやってる事は間違ってる！貴方は、それだけの力を持ちながら人々を苦しめてる！王なら、誰もが幸せに成れる国を作るべきだったんだ！なのに貴方は神祖だからって理由で

ロザリーちゃんを狙って、国の人々の暮らしが危ういのに城はこんなに豪華で…もっと他にやれる事が有るだろっ！」

勇人が何の策も無く切り掛かる。

「黙れ小僧！貴様如きが吠えるな！この国はギグの森に隣接しているのだぞ！常日頃から魔獣、魔族の脅威に備えねばならん！その上第４大陸側に有る我が国には海も空も脅威でしかない！その為の力、その為の兵、その為の危険種族の排除！全て必要な事だっ！」

弾かれ、間合いが開くも直ぐに距離を詰める。フレイヤとシルフの２人は魔法の詠唱を始め、メイドさんは私に挟撃の合図を送ってきた。

第４大陸はギグの森程ではないが危険地帯。巨大な獣や魔獣が多く、それは海洋生物も同じ事。故に第３大陸の西にあるアダトリノに海の貿易は出来ない。船で出ようものなら転覆させられる。

「なら他の国と話し合って協力すれば良かっただろっ！ユビキタスだってギグの森に面してる！同じ悩みを持つ国として協力出来た筈だ！」

「信用出来るものか！ユビキタスの現公ならば、成る程信用の置ける人物だ！だが周りは？次の公は？それらがアダトリノの脅威に成らんと誰が断言できる！？」

フレイヤの魔法を受け流し、私とメイドさんの挟撃を回転切りで弾き、２本の矢を左手で掴み勇人に投げつける。

「誰にも出来ん！誰にもだ！！

ならば己の力で守るしかあるまい！全ての不確定要素を排除し、この国に安寧をもたらすには、最早他にないっ！」

強い。これは１人では１０分も立っていられなかったな。しかもあの剣、世界最高の名は伊達では無い。全く打ち勝てる気がしない。あまりにも硬く、鋭すぎる。

「この程度に王に挑むか！愚か者共がっ！バーニング・プレッシャー！」

詠唱が無く、剣に赤い魔力が集中した？ルーンか！？

頭上に炎の塊が現れ私に向かって落ちてくる。他の者も同様に狙われている。少年と少女にもかっ！

「風牙」

少年の魔法が炎を自分達に当たらない様に切り裂いた。

そうだ、私の課題。魔法詠唱が長い事は、少年の魔法を使えれば解決する。結局考えてただけでブッツケ本番に成ってしまったが、問題無い。まずは少年の真似だ。

「影牙」

私の影が伸びて炎を切り裂く。成功した。やはりこの魔法は速くて便利だ。

本当は無白の闇でも良かったのだが操るのにそれなりに神経を使うのであまりとっさの時に使えないのが現状だった。だがこの呪文ならば普通に魔法を使う感覚でとっさでもイメージを保てる。

両方を組み合わせた戦い方が出来れば、王と戦えるかもしれない。

「ほう、随分と短い呪文だ」

他の者もどうにか炎を避けきったようだ。水使いが居ないのが難点だが、居ないものは仕方がない。有るもので工夫するだけだ。

「はぁ！」

闇を四方から飛ばし王に襲いかかる。王は避け、弾き、受け止める等して対処している。

「影よ　形無き矛成し　敵を穿て　シャドウ・ツェペシュ」

王の影に命じて王を下から狙う。

「温いわっ！」

僅かに出来た隙を逃さず切り掛かる。受け止められたが、それくらいは想定している。

「影牙」

私の影が王に切り掛かる。

「ぬうっ！」

影の斬撃が王の脇腹を切りつける。

始めて王にダメージらしいダメージを与えたが、まだ致命傷では無

い。
「この程度で、調子に乗るな！」
強引に弾かれ間合いを取る。
不意打ちとはいえようやく光明が見えてきた。６人で足りないのならば、私の影を入れて７人分に手数を増やせばよかったのだ。
「言いながらもフラフラだよ？いい加減限界なんじゃないかい、ご老体」
「抜かせ。王はどのような事が有っても戦場で膝を折ってはならん。まだまだ、これからよっ！！」
この部屋はもう火に呑まれる。その前に決着を付けなくてはな……

女勇者の決意？

Ｓｉｄｅ：男勇者

「次期この部屋も炎に呑まれる。その前に貴様等を屠ろう」

この王様は考え方自体は立派だ。自国の力で自国全てを守りたい。

その想いは素晴らしいし、尊敬してもいい。でも、その為に国民を犠牲にするやり方は認める訳にはいかない。

「何で、何でそんな考え方しか出来なかったんだよ！？貴方程の意思と力が有れば、もっと、誰もが幸せに成れる方法だって選べたかもしれないだろっ！！」

愚直に切り掛かる。魔法の使えない俺にはこれしかない。俺は他の仲間が王を倒す為の隙を作れればいい。

「全て手遅れ！貴様の理想論は所詮、机上の空論！王はその様な曖昧な物で民を率いてはならんのだ！その為に全てを犠牲にしてでも！！」

その為に民を犠牲にするのか！？

「それを犠牲にしたら、何も救えないだろうが！！」

「ならば、証明してみせろ！どちらが正しいか！どちらが全てを救うか！」

「言われなくてもやってやる！！」

ひたすらに張り付き、切り続ける。息が保つ限りジュワユーズを振り続ける。

「見てられないね」

「勇人様、無茶が過ぎます」

フレイヤとメイドさんが王を左右から挟んだ。

「貴様等か！何度同じ手を使われようと！」

「同じかどうか、良く見ていろ。影よ　形無き矛成し　敵を穿てシャドウ・ツェペシュ」

「私達だっているんだから！」

「当たるまで何度でも打ってやるよ！」
3方向からの攻撃で完全に身動きが取れない所に勇那とシオン達の魔法。矢は弾いたが左肩に影が突き刺さる。
さっきから勇那から感じるプレッシャーがどんどん大きくなっている。どうなってるんだ？
「ぐう、この程度で！」
「まだ終わっていないぞ」
たたらを踏んで後退した王の左胸に勇那の無白が深々と刺しこまれた。
「……お父様っ！！」
しまった！あのお姫様王の娘だった！
「ぐう……バーニング・プレッシャー！」
なっ！心臓刺されたんだぞ！？
「ふっ、私は道連れか？」
「よく分かっておる」
言われてから気付いた。勇那と扉の間にはもうメイドさんでも消せない程の炎が有る。
「お父様！勇那！お願いです、戻って下さい！」
「姫、見たら分かるでしょう。もう通れません」
天井が崩れ始めた。
くそっ、魔法で壁や天井を壊し過ぎた！
「……ジル」
「何も出来ないし、何もしない。これが、俺と勇者との約束だよ」
「……うん」
勇那とジルくんの約束…シオン達はジルくん達の所まで下がった。
「……アダトリノ王、遺言が有れば私が聞こう」
「貴様に話す事等、無い」
本当に、最後まで何も信用しないのか…
「お父様っ！お願いです！生きて下さい！」
「王とはいえ、もう年だ。これ以上、長生きはせん。我が娘よ、覚

えておけ…これが、全ての王が、内包する、末路だ……」
「……終わったか。さらばだ、アダトリノ王」
「勇那！貴女は、貴女が！」
「……速く城から出ろ。次期に崩れる」
「っ！勇人、そこのお姫様担いで出るよ！この部屋所か隣の部屋まで穴が開いてる！」
城全体が崩れかかってるって事かよ！やり過ぎだろ！！
「勇那様っ！！」
誰だよこんな時に！？
「あ、ロザリー見ててくれた人」
「エルーダさん！？」
「エルか。私はもう此処から出られん。さっさと城を出ろ」
「……御供します」
「……物好きめ。クロ！」
「にゃっ！」
お姫様の近くに居た黒猫が大きくなってエルーダさん？を炎の向こうに運んだ。
「クロちゃん、大丈夫？」
「にゃ～…」
「往復は元々無理だった。済まない」
「にゃ～♪」
「気丈な奴だ。ふぅ、流石に熱いな。何をしてる、お前達は速く此の城を出ろ。王の御供は私達だけでいい」
……くそっ！
「行くよ！全員遅れるんじゃないよ！」
「さよなら」
「ああ、ありがとう」
最後に聞こえたのは、ジルくんと勇那の別れの言葉だった。

Ｓｉｄｅ：女勇者

行ったか。そうだ、変態巫女に聞く事が有ったな。
「まさか起きて直ぐに王の間に向かって来たのか？」
「はい。勇那様なら、きっと王を討とうとするでしょうから」
「バレバレか」
「バレバレです♪」
「団長は左遷されたと聞いたが、お前は平気だったんだな」
「団長ならネイキッド様の領地に派遣されました」
「……誰だ？」
「民とお茶会を開く方です」
「ああ。前に私にも声をかけてきた奴か」
「はい。恐らく、首都崩壊後はあの方の領地に民が集まると思います」
「そうか……巻き込んでしまって済まなかったな」
「え？」
ポカーンとされてしまった。私が謝るのはそんなに不思議か？
「私は、勇那様の御側に居られるのなら何でも良いのです」
「私に同性愛の趣味は無いがな」
「それでも、私は勇那様にこの愛を捧げます。例えそれで死刑に成ろうとも、私は私の愛を貫きます」
「全く、少年といいユビキタスの者達といい。私の周りは頑固者が多過ぎるな」
「勇那様が頑固だからです。いつまで経っても添い寝すらさせてくれないではないですか」
「お前と添い寝するのは男との添い寝より危険だからな」
「ふふふっ、そうかも、しれません、ね」
声が震えてる。明るくおどけてみせても、やはり死ぬのは怖いのだろうな…
仕方ない、冥土の土産だ。
「ゆ、勇那様！？」
何をすれば良いのか分からなかったからとりあえず抱きしめてみた。

「来てくれて有難う。1人では寂しさで泣いていたかもしれない」
「にゃっ？」
「あ、クロも居たな」
「にゃー！？」
「ふふふっ、クロちゃんもいらっしゃい？」
「にゃん♪」
……結局、私は変態巫女に救われてるのだろうな…こいつは何時も、私を肯定してくれる…私を信頼してくれる。
何も返せない自分がもどかしい…これは、感謝の気持ちなのだろうか？
「勇・那・様～♪」
……訂正しよう、こいつはやはりただの変態だ。この状況で私の尻を撫で回そうとしてきた。感謝する気が一気に失せた。
ゴンッ！
「～～～っ！痛いですよ勇那様～…」
「当然だ。待ったく、この状況で欲情出来るお前の精神はある意味強靭だな」
「そ、そんなにストレートに褒められると照れます／／／」
「いや、私は貶した筈なんだが」
「そんな事言って、抱きしめたままでいてくれるじゃないですか♪」
相変わらず…肩とかが震えてるからだろうが。
……決めた。生きよう。私がこいつに感謝しているのは事実だ。いつかちゃんと返せるように今は生き延びよう。
「ふぅ……エル、此の部屋に隠し扉や通路は有るか？」
「……恐らく有ります。先代アダトリノ王はこの部屋の玉座で現王に殺さた筈ですが、死体が出てきませんでした。隠し通路に逃げ込み、そこで息絶えたか生きながらえたかしたのだと思われます」
「なら怪しいのは玉座か。炎も回って無いようだ。調べるぞ、手伝え」
「は、はい！どこまでも御供します！」

……変態巫女の愛が重い……

神祖は平穏を夢見る

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

「ロザリー奪還を祝して、乾杯なのじゃ！」

ロザリーちゃんを救いだしたその日の夜、ロザリーちゃんの家でパーティーを開いた。

「「「「「かんぱ～い！」」」」」

「えへへ♪」

それにしてもアダトリノ城がどんどん崩れていったのを見た時はゾッとしたわ～

流石に全員死んだかと思ったもの。ジル達が門から出てきた時はちょっと泣きそうだったわ…

「ジル、キリキリ働くのじゃっ！お前の罪はこの程度では償いきれんぞ！」

「１０人分の料理は無茶だよっ！」

そう。今、宴会状態のロザリーちゃんの家にいるのは

ユビキタスの姫様と勇人とメイドさん、

魔界のリリーと私とモリッシュ、

シルフのシオンとクリス、

とロザリーちゃんにジルの１０人。テッタはあまり長居出来ないからって帰ったわ。

今回はロザリーちゃんを守れなかった罰としてジルがほぼ１人で料理を作っている。

これくらいで済んでるんだから感謝しなさい！……でも小さな女の子１人に全部やらせてる感じに成っちゃったのよね……ジルの見た目どうにかなんないかしら……

「久々にジル君の料理食べるけどやっぱり美味しいね♪」

「そうだな。ジル坊のよく分かんねえ特技の１つだよな」

「あれ、シオン達もジルくんの料理食べた事有ったのか？」

「カラーズの歓迎会の時にな。今思い出しても衝撃的だったぜ？まるで見た事もねえもんが出てきたんだからな」
「確かにジルの料理は初めて見る物が多いの。あ奴の頭の中は如何なっとるんじゃ？」
「美味しそうな組み合わせ試してるんだって～♪」
それで日本食が出てきた時は驚いたわよ。マジで向こうの世界の人じゃないでしょうね？
あ、シオン達とはもう自己紹介済ませたわ。『あの2人の交友関係はどうなってんだ』って呆れてたけどね。
アダトリノの首都が崩壊したのもロザリーちゃんが救出されたのも大陸中に手紙で知らされた。各国がこの知らせにどう動くかはまだ分からない。
「む？これは……茄子と肉の揚げ物か？」
「ふむ、スライスした茄子で肉を挟み衣で揚げる……今度試してみましょう」
「はふぅ～、ジル様本当に城に来て頂けませんかね～」
「ホントよね。ロザリーちゃんも来てくれたら完璧だわ」
「待て。少女もボウヤもユビキタスだって欲しいぞ」
「欲張りね～。どっちかにしなさいよ」
「あの2人が離れる事はまず無いと思われます」
「そうですよね～。でなきゃ態々アダトリノに潜入しませんもんね～」
「もしまた同じようなコトが有ったらジル生かしておかないわよ」
仏の顔は3度かもしれないけど私とリリーはそんなに慈悲深くないわ。
「……何かあっち物騒だな」
「ロザリーちゃんは人気だからな。ジルくんも気を付けないとな」
「仲間に気を付けなきゃなんねえってどんなだよ…」
「それが魔王勢クオリティー」
「……俺、北大陸在住で良かった」

「同感」
何か男2人から納得できない空気を感じたわ。
「こんなにチッチャイのに魔王なんだ。リリーちゃんスゴイね～♪」
「えぇ～い、撫でるな！態々しゃがんで目線を合わせ様とするな～！」
「リリー、照れてる～♪」
……リリーとクリスって、相性悪いのかしら…てかロザリーちゃん、あれは本気で照れてないわ……
しっかし、これだけ人数いて男女比3：7って……まぁ原因はウチの百合ガキよね……
はぁ～、どっかに良い出会い……あるわけ無いか……

Ｓｉｄｅ：男Ａ
いくらなんでも1人で10人分（……俺食えてないから9人分だ）は辛い。せめてメイドさん手伝って欲しい……駄目だ。あの人自分の知らない料理だと聞きまくってくるから作業進まん……俺友人運無いな……あ、そもそも運が無いんだった。
「ジル、大丈夫？」
ん？
「あ、ロザリー。今日の主役がこっち来てて良いの？」
本当は来てくれて目茶苦茶嬉しいです！……まぁ、照れ隠しだよ……
「えへへ、ジル1人だから気に成っちゃって」
「……ありがと」
アダトリノ城が崩壊した後、向こうの国のお姫様は何人かの兵士とどっかの領地に向かった。何でも主要な大臣や貴族は勇者が皆殺しにしたらしい。
本当にやっちゃったな～、流石だ。俺の手間が省けた。
「何か手伝おっか？」
「じゃあサラダの盛り付けお願いしていい？」

「うん♪」
……それより、凄く新婚っぽいこの状況どうにかなんないかな…リリーとかイトハに見られたら何されるか分かったもんじゃない。ちなみにハンバーグは最初に出して無くなる度に補充してます。
だってロザリーとの約束だったんだもん！むしろリリーとクリスがガッついて食べてるけど……
あの2人には遠慮とか無いのか？……期待した俺が馬鹿ですね……
「ねぇ、ジル」
「うん？」
そろそろ〆のデザートにアイス……流石に固まってきてるよな？
「お城で言ってた秘密って……今聞いても、イイ？」
……勢いで教えるって言っちゃったんだよな～…忘れてた……まぁ良いか。
「う～んとね、俺がロザリーに会う前の記憶、実は有るんだ」
かなり曖昧だけどな。
「……そうなんだ」
元気無いな。
「……元いた場所、戻りたい？」
あ、そゆ事？俺の故郷の事とか気にしてる？
「まさか」
「へ？」
「多分俺とイトハは同じ世界から来たんだよ。ほら、魔法の無い世界」
「……イトハと一緒？」
「俺、本当はこの世界の人間じゃないんだよ。だからこっち来て魔法初めて見た時はビックリしたよ。使ってみたいとも思った」
「……じゃあ、願い叶ったね」
「まぁね」
「……なら、これからどうするの？」
ん？何かさっきから反応がおかしい……

「どうしたの？何か不安な事でも有るの？」
「……ジル、私のせいで、無理矢理この世界に来ちゃったんでしょ？」
あ～、自分のせいで俺が無理矢理元の生活捨てるはめに成ったと思ってんのかな。
「違うよ。俺、元の世界で死んだんだ」
「……へ？」
そりゃ驚くか。目の前に居る人が実は死人だなんてそうそう信じられる話じゃない。てか普通なら精神科に連れて行かれる。この世界に有るか知らないけど。
「そしたら勇人さんとアダトリノの勇者の召喚に巻き込まれたの。多分イトハも同じだと思うよ」
神様達の事は……話せないよな～
……てか俺異世界の人全員知ってる……うわ～、知りたくなかった……
「じゃあ、アタシのせいで、無理矢理、この世界に来たんじゃないの？」
「うん」
断言しとかないとまた鬱モード入りそうで怖い……あれ？この家って今異世界人４人も居る？てか全員来た事有る？
まぁ、大陸のちょうど中央に在るから集まり易いんだろうな。
……何かリビングが静かだ……絶対聞き耳立ててるな……よーし、盗み聞きした連中には罰をっ！
「じゃあ、これからも、ここにいてくれるの？」
「……追い出されたら流石に泣くよ？」
「追い出さないよ！」
「ならこれまでと一緒だね。相変わらず俺はここで、ロザリーと一緒に居る」
「……うん♪」
……恥ずかしかった。そして今の聞いてた全員、しっかり罰を受け

てもらうぞ。
この世界で見つけたハバネロより全然辛い無味無臭の林檎色のソースを8人分のデザートにかける。これならメイドさんにも気付かれない筈だ！
「あれ、この2つだけ違うの？」
「うん。俺とロザリー用」
「そうなんだ。じゃ皆のトコ行こう♪」
「うん♪」
さぁ、皆悶え苦しんでもらおうか！
デザートを運んでる時、自分でも分かるくらい、不自然に綺麗な笑顔を浮かべてた。

姫巫女の罪悪感と償い

Ｓｉｄｅ：姫巫女

「ロザリーちゃん、やっぱりジルのトコ行っちゃったわね」

「あれでもロザリーにとっては大事な家族じゃからな。仕方あるまい……ケッ！」

ボウヤ、酷い言われようだね。少し同情するよ。

「ね、シオン君。見に行かない？」

「クリス、お前こういうの好きだな…」

「うん♪」

シオンの嫌味も乙女モード入ったクリスには効かないみたいだね。

「イイんじゃない？もしかしたらジルの意外な顔が見れるかもしれないわよ？」

「……興味深いですね」

「ロザリーちゃんは……多分そのまんまだろうな」

「いや、意外とロザリーの意外な一面が見れるかもしれねえぞ？」

「あの２人、話題が尽きませんね♪」

「まぁ、スキャンダラスなコンビだからね」

さて、皆でキッチン覗いてみようかね。

……８人でキッチン覗くのは流石に無理が有ったね。まともに覗けやしない。

これは交代で覗くしかなさそうだね。

「よし、ここはジャンケンで決めよう！」

「う～、見たい見たい！」

「ジルめ、ロザリーに傷一つでも付けてみろ…ふっふっふ……」

「入って行ったばかりだから大した話はしてないわよね？……いやでもあの２人なら……」

「もしかして誰も見てないからと御２人で愛を確かめあってたり？でもでも、まだ２人とも子供ですし……あぁぁ、気に成ります！」

……この面子思った以上に纏まりが無い。と言うか団体行動に向かない。皆して好き勝手言いまくっている……よく氷の館無事に脱出出来たね……

「フレイヤ様、これはもう気付かれるのを覚悟で全員で覗いた方が無難かと」

「その様だね……はぁ～」

「俺は戻って飯だな」

シオンは食事に戻って、無い！？

1度戻って皿に料理乗せて来ただけだ。話声だけでも楽しむ気満々だった！！

あ、ボウヤがサラダの盛り付け頼んだね……何か新婚夫婦の空気が漂ってる……う、羨ましくなんかないよ！？

「チッ！ジルめ、ロザリーと一緒に暮しておるからと調子に乗りおって」

「アンタ、ホントに女の子好きよね…」

「違っ、わらわはイトハ一筋じゃ！」

「……それはそれで怖いのよね…」

阿呆なコントのおかげで多少は空気が緩和されたね。このまま見てたら虚しさで心折れそうだったから丁度良いね…

『お城で言ってた秘密って……今聞いても、イイ？』

お、秘密？ボウヤの秘密？少女と会う前の記憶は無いって聞いてるけど…

全員私と同じ様に興味津々だね。メイドさんですら聞きたくて耳がピクピクしてる。

内容は……は？異世界人？実は1度死んでる？勇人やイトハと同じ世界の住人？勇人の召喚に巻き込まれた？

……思った以上に衝撃的な話だったね……つまり、私が勇者召喚をしなければボウヤとイトハはこの世界に来なかった？

2人がこの世界に来てしまったのは私が原因？

ははっ…何だそれは……そんな相手に、私は氷の館なんて危険な所

まで案内させて、あまつさえ危険に曝したって事かい？
……最低じゃないか、私は……
「……フレイヤ様…」
唯一の救いはボウヤもイトハもこの世界を嫌ってはいないって事くらいだね。これでこの世界が嫌いだったら、私はただの誘拐犯、場合によってはそれ以下だ……
「……ジルくん、話す事にしたんだな」
「勇人は、知ってたのかい？」
「ああ。あの2人に初めて会った時に、俺の価値観を押し付けて、拒絶されて、ジルくんが俺のせいでこの世界に飛ばされたって知った」
「……ジルが浴衣とか天ぷらとか知ってたのは、私と同じ境遇だったからなのね」
「……思った以上にデカい話だったな。何て言っていいか分かんねえ」
「……誰も、何も言う事は出来ないと思います。その権利は、我々には無い」
メイドさんの言う通りこの世界の住人には、何も言う権利は無いだろうね。私に至ってはどれほど罵声を浴びても足りない。
「……勇人、イトハ。今の内に言っておくよ」
「何よ？」
勇人は何も言わずに先を促した。有り難いね。
「この先、お前達が困った時は私が必ず助ける。どんな手段を使おうとも、周りからどう思われようとも、必ず」
「……別にそんなコトしなくていいわよ」
「……済まない。これは、私の我儘だ。私が償いたいから償う。それだけなんだ」
「はぁ……分かったわ。何か困った事があったら、その時は頼むわ」
「ふん。イトハの危機はわらわが全てどうにかしてみせる。人間の姫の手を煩わせる事など有りはしないのじゃ」

「それが1番良いんだけどね」
「……済まない」
勇人は、先程から無言でボウヤ達を見ている。
2人は既に深刻な話からデザートの話で盛り上がっている……少し、羨ましいとも思う。私にあんな経験は無い。
ただ友と楽しく遊ぶ。それすら私は殆どした事が無い。
「……フレイヤ、俺の事は守らなくていい。ただ、あの2人が静かに、幸せに暮せるようにしてあげてくれ。あの2人には、障害が多過ぎる」
……勇人らしい。自分の事は二の次か。
「どちらも守ってみせるよ。ボウヤも、私の犠牲者だ」
私の犠牲者は誰であろうと守ると決めた。その為ならどんな無茶もしてみせるさ。
「……ジル君、ロザリーちゃんと秘密、共有したんだね…私は……」
おや？クリスも何か思う所が有るようだね……当然か。自分よりも幼い子供が、自分よりも辛い状況に居たら誰だって何かしら思う。
「皆様、そろそろ戻りませんとロザリー様とジル様に見つかります」
もしかしたらもう見つかってるかもしれないね…
「……ジルめ、ロザリーにあの様な事を隠して……」
少女の友としては、ボウヤが秘密にしてたのは許せないのかね……
私にフォローする資格は無いね。
全員でリビングに戻り、思い思いに過ごす。ほどなくしてボウヤと少女が綺麗に盛り付けられたアイスの様な物を持って来た。
あんな風に覗いていた手前2人の顔を直視出来ない。情けないね……
「デザートだよ～♪新作だって～♪」
「ああ、有り難う……じゃ、改めて」
「「「「頂きまーす」」」」
一口。口の中にひんやりとした気持ち良い感触と適度な甘さが広がり痛みが……
「「ぶはあぁっ！！！」」

「「ぎゃーーー

姫巫女の罪悪感と償い（後書き）

男Aのお仕置きでした
どんな味かは……次話でお話しします

ちなみに作者の友達が昔作った物をベースにしてます
よかったら闇鍋などでお試しあれ！

作者は絶対に断りますが……

それぞれの今後

Ｓｉｄｅ：女勇者

「うぅ…勇那様ぁ～…」

変態巫女の、いやアダトリノが潰れたからただの変態だったな。

変態が疲れたらしく情けない声で縋りついてくる。

城が崩れ、生き埋めに成る前に玉座の裏に外への抜け道を見つけ脱出しようやく外に出れたのだが、

「ここは……ギグの森か？」

太陽の位置から見るに来たと南に黒い煙の壁が有る。確かにかなり歩いたがまさかギグの森に繋がっているとは思わなかった。

いや、ギグの森には地位を追われた権力者が逃げ込むと聞くし有り得る話か。住んでる種族も人間、獣人、魔族にドワーフとバラバラらしいしな。

「……さて、どうしたものか」

「順当に行くならばネイキッド様の領に行くのが無難だと思います。あの街は治安も良く、ギルドも有りますから勇那様なら御金の心配も無いと思います」

「……いや、恐らく姫もそこに行ってるだろう。アダトリノには、あまり居たくないな」

向こうは死んだと思ってるだろうから見つかると面倒だ。

「あ、そうでしたね……どうしましょう？」

「仕方ない。ユビキタスの街か、第２大陸にでも行けば良いだろう。それまではギルドや狩で食い繋げばいい」

「……あの、ロザリーちゃんに会いに行くのは、どうでしょうか？」

……凄い事を言う。私は考えもしなかった事だぞ？

「そうだな……もし近くに見えたら、謝罪しに行ってくる」

「……はい」

まぁ、私に償える事等、有りはしないのだがな……

Ｓｉｄｅ：男勇者

ぐぅぅ……口の中がカオスだ……

フレイヤ気にし過ぎとかイトハも向こうの世界の人だったの？とか色々考えてたのにそんな余裕は無くなった！！

あの激辛デザートをどう攻略するか皆で悩んでいたらジルくんが甘くて美味しいエキスを持って来た。

ロザリーちゃんがちょっと舐めたら凄く甘くて美味しいと言ったので皆でそのエキスを使って攻略しようと言ったのが間違いだった。

そもそもあのジルくんがそう簡単に許すはずがなかった。

甘いエキスと激辛ソースは化学反応を起こしたかのように俺達の口の中で混ざり、融けあい、異様な味に変化した。

……ナスの出し汁に砂糖を大量に入れ牛乳を追加、さらに炭酸にして辛くしたようなそんな訳の分からない味に成って俺達の口の中を蹂躙していった。

……これならまだ辛いだけの方がマシだった……

「これに懲りたらもう盗み聞きなんてしないでよ？」

そう言って床やソファ、机に突っ伏している俺達のデザートを片づけていく……許されたのか？

「ジル～、これじゃ皆お風呂入れないよ？」

「あ～、口直しにちゃんとした物作ってあげなきゃだね」

「そうだね～。でもやり過ぎだよ？」

「うん。ちょっと反省してる」

あんなバイオテロと変わらないレベルで『ちょっと』！？

てかロザリーちゃんも気にするのは風呂で良いのか！？

「さ～て、何作ろう？アイスは不安がって食べないだろうし……普通に果物で良いかな」

それで頼む。下手に手を加えてると怖くて手が伸ばせない……

今後は絶対に盗み聞きなんてしないと心に誓った。

Ｓｉｄｅ：女Ａ

う～、ヒドイ目に遭ったよ～

まさかジル君があんなに怒るなんて思わなかった……あまりの不思議感触に一瞬気絶しちゃった…下手な魔法よりよっぽど攻撃力あった……

「口直しに果物切ってきたよ……今回は何もしてないって。ほら」

私達の疑いの視線を受けて無造作に果物を一切れ食べた。これなら安心だね。

「ジル信用な～い♪」

ロザリーちゃん、ホントにジル君の事好き？嬉しそうに言う事じゃなかったよ？

「でもリリーとモリッシュさん気絶してるよ？どうするの？」

……あ、ホントだ。リリーちゃん意識無い。モリッシュさんも白目剥いてる……えっ！？

「あちゃ～、リリーはいいけどモリッシュさんは白日剥いてる……仕方ない。毛布くらいかけてあげよう」

そうゆう問題じゃないと思うんだ！

「うぅ……届かない…」

「あ、姫様。はい♪」

「ああ、有難う……2度と盗み聞きなんてしないと誓うよ」

「ジル、怒るとスゴイもんね～♪」

「そうだね……うぅ、これはどこの最高級品だい？」

「普通に気に成ってる物だよ？」

ヤバいよっ！フレイヤ姫、味覚オカシク成ってる！もしかして私も？……恐る恐る一口…

あぁ～、このブドウはドコで作られたんだろう？こんなに瑞々しいブドウ始めて食べた！……ダメだ、私も味覚壊れちゃってるよ～……

でも何とか動けるくらいに回復した……動ける人だけでお風呂～…
さっき見せてもらったらスッゴク広かった♪外と中両方合わせたら
８人でもゆったり入れそうだったし女の子全員で行っても平気だよ
ね？
……この家、イイな～……

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
う、油断するとクルわね…流石にお風呂にブチ撒けるわけにはいか
ないわ。
「皆大丈夫？メイドさんスゴイ顔色悪いよ？」
そう、実は１番ヤバそうなのがメイドさんなのよね。意外とゲテモ
ノに耐性ないみたい。
「御心配には及びません。この程度私に掛かれば御茶の子さいさい
の瞬殺です」
……ダメだ、何言ってるか全然分からない。あの無表情なメイドさ
んがおかしくなるって……ジル恐るべし。
「モリッシュと魔王は後かい？」
「流石に動かせないわ。どっちも死んでるしね」
意識不明と白目剥いて気絶。どっちもアウトね。回復待つしかない
わ。
「でもホントにお風呂おっきいね♪こんなに広々したお風呂はじめ
て♪」
「でも１人で入るのには大きすぎるのよね？」
「うん、ちょっと…」
「じゃあジル君と一緒に入りなよ♪」
クリス、ノリが軽いわ…年上に見えない。
「……」ボンッ！！
「……どうすんのよ？気絶しちゃったわよ？」
「思った以上に初心だったね～」

「私より酷くないかい？」
そうね。姫様の方がまだ反省してた分マシだったわ。
「……私達がいなければジルと入ったのかしらね？」
「ボウヤはその辺嫌がりそうだけどね。最終的には押し切られるんだろけど」
「そうね」
ロザリーちゃんが涙目に成ってジルが諦めるのが簡単に想像できるわ。
「あ、言い忘れてた。イトハ、近い内にユビキタスから魔王に平和会談の申し込みが行く筈だ。そん時はよろしく頼むよ」
「……何だか分からないけどリリーには言っておくわ」
「ああ、頼むよ。明日の朝までに魔王が回復してれば改めて言うよ」
「そうしてちょうだい。私には何の話か分かんないし」
平和会談……人間と魔族が、手を取り合える状況になるのかしら？

Ｓｉｄｅ：男Ａ
「ジル坊、テメさっきはよくも」
「盗み聞きしたシオ兄が悪いんだよ」
「シオン、今回は言い返せないぞ」
「くっそ～」
これで言い返されたらただの言いがかりだよ。
「しっかし……今風呂はパラダイスか」
……おい！
「シオ兄、まさか…」
「何だかんだで全員美人だ。特に姫さんとメイドさんは胸結構有るよな？」
「何で俺に聞くんだっ！？知らないぞ？見た事無いぞ！？」
「ロザリーだってスタイル悪くないよな？」
「クリ姉はいいの？」

「……／／／／／」
あ、クリスの裸は想像するだけでアウトなんだ。
「そんなんじゃ見えた瞬間茹で上がっちゃいそうだね？」
「ウルセエ…」
「全く、覗きなんて最低だぞ？」
「勇人さん、トイレはそっちじゃないよ」
シオンを注意しながら立ちあがって風呂の方に行こうとしてるのを止めた。
2人ともエロガキだな。まぁ俺も見たいけど。
「……どうする？俺はクリスさえ見れれば良い」
「ロザリーの見たい」
「普段から見る機会あっただろ？……どっちも捨てがたい」
「言われるまで気付かなかった……」
そうだよっ！普段から覗き放題だったじゃん！！
「てか2又か？」
「えっ……くっ！」
おいおい、確かにどっちも綺麗だけど……
「マジかよ、勇人、お前…」
「いや、待て！俺は、俺はっ！」
「落ち付け」
落ち着いた声でシオンは勇人の肩を押さえた。どうするんだ？
「お前なら2人とも落とせる！！」
良い台詞言った風に親指立てて良い笑顔……アホだ、アホが居る。
まぁ、馬鹿な話してる間に出て来ちゃったんだけどさ。
……いつか、皆で覗こうっ！と3人で誓い合った。
覗かなくても堂々と見れる関係に成った方が速くないか？と気付いたのはその日の夜、ロザリーに抱き枕にされた時だった。

それぞれの今後（後書き）

女勇者が勇者じゃなくなった！？
変態巫女はとうとうただの変態になった！？
そして男Ａの料理の全貌が明らかに！？

……あれ食べたときは時が見えました。比喩ではなく
皆さん、胃は御大事に
食べた後、作者は病院に行くはめになりました

今となっては良い思い出です

……嘘だけど
思い出すだけで冷や汗ものの悪夢でした

登場キャラにそんな思いをさせるいじめっ子な作者でした

神様は笑う

Ｓｉｄｅ：主神

お～、国王が１人死んだか。本当に俺の暇を潰してくれるとは……

俺の人選は間違ってなかった！

「何ガッツポーズしているのですかキチガイお父様。『俺の人選間違ってなかった』とか考えているのですか？度し難い阿呆ですね自惚れお父様。貴方のした事と言えば偶々巻き込まれなかったジルさんを巻き込んだり、止めるべき異世界移動を止めなかったりと完全な職務放棄だけでしょう？わかったらその気持ち悪い顔を削ぎ落としてくださいゲテモノ」

最後『お父様』すらつかなかった！？

てかフリッグの罵倒が久々過ぎてちょっとこたえるぜ……

「う～ん、でも本当に久しぶりに面白かったお。まさか国崩しなんてしてくれるなんて」

「最近は膠着状態だったからな～。ま、楽しい事してくれりゃ戦争だろうがラブコメだろうが何でもいいんだけどな」

「あ、そろそろジルさんを呼べますね」

「今日は勇人以外も呼ぶか」

「あ、女Ｂとかもわかったんだもんね。丁度良いから呼んじゃえばオケ」

「だな。さてそうと決まれば…」

「私は向こうでゲームをしてきます。お父様達は御自由に」

「……フリッグたん、ホントに男の娘以外見えてないね」

「小僧……」

「……さっさと呼びましょう。ではダルさん、お父様が暴走した場合の対処、お願いします」

「えっ、ちょっ、おまっ！て、巫山戯てる間にもう行っちゃった！？はぁ～…呼ぼう」

「ちっ！まぁいい。勇人とガキには小僧の女誑し度をしっかり見ていってもらおう」
「女誑し度って……じゃ、呼ぶよ？」
「おう」
ダルが神力で魔法陣もどきの光の塊を出し、勇人とガキを呼び出した。
「あ、主審様。お久しぶりです」
うむ、勇人は礼儀がなってるな。
「……は？何でアンタが……てかここってまさか…」
「おう、クソガキ。小僧がテメーと同じ世界の住人だって分かったんだろ？だから呼び付けてやったぜ」
「は？頭湧いてんじゃないの？それに小僧って誰よ？もしかしてジルのコト？どっち道呼ばれる理由もわかんないし来たくも呼ばれたくもないんだけど？てか呼ぶな。帰せ」
相変わらず口の減らねえガキだ。ま、今はどうでもいい。心の広い俺様はそんな事で一々腹を立てねえ。
精々起きたとき魔王にヤバイところまで犯されかかるくらいにしといてやる。
「あれ？ジルくんは居ないんですか？」
「あ、男の娘は向こうで…」
『昨日は呼ばないでくれてありがとうございました』
『いえいえ、それくらいの空気は読めますから』
『全く気にせず呼び出されるかと思ってましたよ』
『そんな事はしません。ですが、１日空いた分ジルさんにはとことん相手をして頂きます』
『あ～、わかりました。それで、今日のゲームは？』
『いえ、今日はゲームではなく、これです』
『……嫌です』
『却下します』
『こういうのって両者の同意の下で行われるべきじゃないですか？』

『あれだけ私を焦らしておいて、まだ私の心を掻き乱すのですか？』
『いや焦らすって人聞きの悪い』
『1日会えなかっただけで私は体の火照りを抑えられません。もう我慢の限界です』
『知らないですよっ！』
『私も貴方の思いなど知ったことではありません。さぁ、ＨａｒｒｙＵｐ』
隣の空間から妙な会話が聞こえてきた。フリッグのヤツ、また制御が甘くなってやがるな。
「……体が火照る？」
「……両者の同意？」
「焦らしたとか言ってたわよね？」
「心を掻き乱したとも言ってた」
「……きっとマッサージとかそんなオチよねっ！」
「そ、そうだよな！なんせジルくんにはロザリーちゃんがいるんだし！」
……小僧、フリッグに指一本でも触れてみろっ！テメーの人生滅茶苦茶にしてやるっ！！
「はぁ～、とりあえずフリッグたんの所見てみようか」
お、ダルのヤツ気が利くな。神力のモニターで2人の様子が…
「うっわ、あの女の神様大胆」
「うっ、殆ど見えてるじゃないか……鼻血出そう…」
モニターには、スケスケのネグリジェで小僧を追い回すフリッグが映っていた……は？
「くっそ！男共は見るな！今直ぐ忘れろ！いや、忘れさせてやるからそこに並んで待ってろ！」
とにかくフリッグを止めんぞ！あのままじゃ俺のフリッグに傷がっ、一生物の汚点がっ！
「なっ！硬え！？空間の強度が異常に硬え！！」
制御が甘いだけで強度はとんでもねえ！これじゃ壊すのに時間が…

ええい！時間掛かっても壊す！それまで逃げ続けてろよ小僧っ！！
捕まってたら、殺す！！！

Ｓｉｄｅ：女神
ブルッ！
（何だっ？今異常な寒気が…いかん、ゲームに集中せねば）
どうしたのでしょう？ジルさんが震えています。風邪でしょうか。
なら肌で直接温めて差し上げましょう。
「ジルさん、寒いのなら温めて差し上げましょうか？」
「いえ、悪寒ですから多分ただの悪口とかだと思うんですけど（嫌な予感が止まらない）」
「そうですか」
先程の冗談（ベットを用意し、横にティッシュを置く）はさっさと切り替え今は普通にゲーム中。
ＳＯ●Ｙの最新機器でパーツを自由に組み合わせる４ＡＮＳＷＥＲとか副題のついたロボットゲームで協力プレイをしています。
やはり対戦よりも協力プレイですね。無条件でジルさんが仲間に成ってくれますから。
それにしてもジルさんの悪寒の原因はなんでしょう？もしや、お父様がまた何か……いけません！ジルさんはお父様に正式に挨拶出来る状況に成って頂かないと！
「フリッグ、その先何か有りそうだから気を付けて」
っ！危なかったです。ジルさんの忠告が無かったら急に出てきた敵ロボットに直撃を受ける所でした。
『うおオォォーーーーっ！！フリッグゥゥゥーーー！そんな男にそんな格好見せるんじゃないーーーーっ！！』
「……呼んでますよ？（何か勘違いしてそうだけど）」
「そうですね。何か勘違いしてますけど」
そんな格好と言われても、何時も通りお父様達と大差無い白のロー

ブです。特に目くじら立てる事は無い筈です……五月蝿いですね。
「五月蝿いですよ騒音お父様。私は今ジルさんと楽しく遊んでいるのですから邪魔しないでください」
『遊ぶってなんだっ!?ベットの上でか?小僧の上でか?あんなスケスケの』
「五月蝿いです」
邪魔だったので神力で作ったハンマーを頭上から落として静かにさせました。え?1つで大人しくなるのかって?ざっと10tの重さのハンマー10個も有れば気絶くらいはしますよ。死にはしませんし少し休めば回復します。
「あ、静かになりましたね(何だったんだろう?)」
「そうですね。少々静かにして頂きました」
全く、後半何か言ってましたが何だったのでしょう?
「あ、ステージボスですね」
「そのようですね」
倒したら次のステージに行きましょう。

Side:ダル
おお、主審様がハンマーに埋もれてる。フリッグたん流石!
「……どうなってんのよ、急にアイツの上にあんなにハンマーが…」
「多分女神様がやったんだろうけど……ジルくんどうなったかな?」
「……今度聞いたときにもし変な反応したらロザリーちゃんに報告するわ。ジルが浮気したって」
「ああ、そうしよう……ジルくん、逃げ切れよ」
「計画通り(キリッ)」
「「……」」
皆良い感じで勘違いしてくれたお。本当はただの合成映像だったのに誰も気付かないなんて……ちょっと楽しすぎだったお♪

神様は笑う（後書き）

あとがき
女Ｂ「……あのデブも神様？」
男勇者「……うん。残念ながら」
女Ｂ「ホントに残念ね」

何でダルだけＳｉｄｅがそのままなんだろう？
ああ、思いつかなかったからだ

女勇者の生活

Ｓｉｄｅ：女勇者

……私はもう勇者じゃないだろう？

「勇那様、どうかなさいましたか？」

「ああ、何でもない」

何やら妙な電波で勇者扱いされた気がするんだが……どうでも良い事だったな。

「今日はどうなさいますか？ギルドに行かれますか？」

「そうしようか。暇を持て余すよりは働こう」

「お暇でしたら私と１日ベットで」

「却下だ。さっさと行くぞ」

アダトリノ城から脱出し、ギグの森をへて、ユビキタスの貿易都市コールズに来てから１週間。

真っ先に街に在るギルドに入り、その日の宿代をかせいだ。ただ私とエルとクロの戦闘能力が有れば少々羽振りの良い依頼も簡単にこなせてしまうので金には困らなかった。

寧ろ問題は…

「う～……でも私達が依頼を解決し過ぎたら他のギルドの人達も困ると思うんです。だから今日は１日私と」

この変態だ。

「却下だ。なら港で第２大陸の情報でも仕入れるぞ。もしくはリシルの所で魔具を見る」

大通りに面した雑貨屋『ピンク』。やたら露出の高い服を着る店主、リシルが開いているその店には高性能な上に面白い能力の魔具が多い。

貴族やユビキタス公が買い物に来るというのだから驚きだ。

ギルドの受付に紹介されて行ってみたが中々面白かった。自作の物も在るが知り合いに作って貰っている物がメインだそうだ。

クロに付けた首輪はリシルの知り合いが作った物で、セットの指輪に魔力を込めると直ぐ近くに召喚出来る。正直どんな場面で使うか地味に悩む物だ。

「……ギルドに行きましょう」

どうもこいつはリシルの事が苦手らしい。何か有ったらリシルの名前を出すようにしている。

さ、今日の予定も決まった事だし活動開始だ。

西部劇に出てくるバーの様な両扉を潜り中に入る。

大剣を担いだ屈強な大男、顔を隠し切るほど深く帽子を被った魔法使い、タロットを広げ占いの様な事をしている怪しい女。

見た目は癖の有る連中だが中身はそれ程変わらない。金の為に危険な事をするのは全員同じだ。

「あ、ユウナさんにエルーダさん！丁度良い所に！」

む？受付嬢が慌てながら安堵とゆう器用な事をしながら私達に声を掛けてきた。何だ？

「２人に至急受けていただきたい仕事があるんです！受けてもらえませんか？」

「内容は？」

「ギグの森から魔獣の群がコールズに向かってきています。それを迎撃してください。報酬は１人４０万です」

城勤めの騎士の１ヶ月分の給料だな。ふむ、まぁ、構わないだろう。

騎士達では怪我人も出そうだ。

「その依頼受けよう。直ぐに出る」

「ありがとうございます！」

さて、行くか。

……む？何人か此方に来るな。

「よう、その依頼俺たちが受けるぜ。新参者の姉ちゃんたちにはキツイだろ？」

「そうだぜ。その報酬俺たちが貰う。だからお前らはここで可愛く

震えてな」
「なっ！貴方達のでは無理ですっ！だからユウナさん達に頼むんですよ！？」
「ウッセエ！俺たちがこんな嬢ちゃんたちより弱ってのか？んなわきゃねえだろっ！」
五月蝿いな。とりあえず問の方に行ってみよう。多少街から離れないと距離が近過ぎて変態に援護を任せられない。
「エル、行くぞ。ある程度街の手前で迎え撃つ」
「はい！」
「待てよっ！俺たちが受けるって言ってんだろうが！」
「ならお前達はお前達で動けばいい。私は私の仕事をするだけだ」
此れ以上は本当に時間の無駄だ。さっさと魔獣をどうにかしよう。

結論。
５０匹程の魔獣は私達が瞬殺した。
少年と戦った辺りから殺意をコントロール出来る様に成ったので魔獣達にぶつけてみた所面白い様に混乱し、怯み、動きが鈍くなったので広範囲魔法で殲滅した。
下手に森でブラックドック（黒い狼みたいな獣）を狩るよりも探す手間が掛からなくて助かる。
報酬を貰いにギルドに行くと受付嬢とギルドマスターに出迎えられた。
私達に絡んできた奴等は魔獣の数を見て逃げ出した様で行方不明だ。
変態が『勇那様に近づく害虫には罰を』とか言っていたが死んでても生きてても私にはどうでも良い事だ。
「御２人共、有難うございました。まさかたった２人であれだけの魔獣を瞬殺出来るなんて」
仮りにもギグの森を徒歩で抜けたり、ドラゴンを倒したりしているからな。あれくらいならどうとでも成る。
「報酬をお受取りください」

腰に付けている短剣の鞘の様なサイフに金をいれてもう。変態も同様に自分の財布で報酬を受け取った。硬貨を一々大量に持たなくていいのでこの世界の財布はカードに近いと思う。便利だ。

……暫く働かなくて良い程稼いでしまった。さて、どうするか……

「ちょっと宜しいか？」

ギルドマスターが声を掛けてきた。そもそも執務室で書類と睨み合いが仕事の彼が表に出てきている事が珍しい。

「何か？」

「貴女方はそれ程の力が有るのに騎士に成ろうとは思わないのか？その方がよっぽど安定した生活をおくれる」

「騎士、か。お断りだな。好きな時に好きな事が出来ん」

「そうです！それに勇那様と離れるならば安定も安全も要りません！」

変態は黙ってろ。

「そうですか。先程騎士団が貴女方をスカウトしようといていたのですが、今後は断っておきましょう」

「頼む。煩わしいのは御免だ」

さて、１度リシルの雑貨屋を覗いてみるか。

「あらぁ～、いらっしゃい～」

何時来ても嫌味でない程度の香水の様な匂いのする店内は店の名前に似合わずピンクは殆ど無い。

「ああ。今日は何か面白い物は有るか？」

「そうねぇ～、昨日と品揃えは変わらないわ～。明日の午前に入荷するから～、その時が狙い目よぉ～」

「そうか。友達が持ってくるんだったか？」

「そうよぉ～。可愛い娘たちなのぉ～。あ、エルちゃ～ん、そんなに遠くにいないでお話しましょうよぉ～」

「私にはお構いなく！」

「うふふ、可愛いわ～。ユウナちゃん、エルちゃん１日貸してくれ

なぁい？」
「欲しいなら永遠に貸しても良いぞ」
「私は勇那様以外の人のそばにはいたくありません！！」
「あらぁ～、振られちゃったわぁ～。ユウナちゃん慰めてぇ～」
「ダメです！！」
「そこらで男でも引っ掛けてこい。お前なら簡単だろう？」
「簡単になびくような男、気晴らしにも使えないわぁ～」
多少不毛な雑談だったが暇は潰せた。
さて、明日の入荷を楽しみにしよう。

女勇者と男Ａの再開

Ｓｉｄｅ：女勇者

……朝か。リシルの話では１０時位に入荷する筈だったな。
友達とやらの事はお楽しみだと言われ何も分からなかった。別に知る必要も無いが興味は有った。
アダトリノではあれ程優れた魔具は見た事が無かった。効力も、必要とする魔力量も、一級品を揃えてる筈の城には無かった。
製作者の技量が違い過ぎるのだろうな。
考察は此の辺にして起きるか……右腕が上がらん。左腕が重い。
左を見てみる。クロが私の腕を枕の様にして寝ている。可愛い。
右を見てみる。殆ど何も着ていない変態が私の腕に絡まっている。
邪魔だ。
そもそも変態の奴、私の手でスッキリしようとしていたな。ショーツが……いや、止めておこう。私の精神衛生上考えない方が良い。
……しかしこいつ、意外と大きいな。私よりは確実に大きい。
何がって？胸だ。確実にＥは有る。普段は胸が小さく見える服ばかり着ているから最初は残念な胸だと思っていた。
「ふぅ。クロ、朝だぞ」
左腕を軽く揺らしクロを起こす。
「フカァ～」
可愛らしく欠伸と伸びをした……癒やしだ。
「エル、起きろ」
右腕を振って変態をベットから落とす。ドスンと良い音がした。
「痛たた……勇那様～、ここはおはようの代わりにキスで起こしてくださいよ～」
痛みで目に涙を溜めながら抗議してくる……ウザイな。
それ以前にお前のベットはちゃんと隣に有るだろうが。
「いいから起きろ。今日はお前の防具を探す」

「キス、朝から濃厚で溶けるような絡め合うキス……キャアァー♪」
聞いてないな。まぁいい。さっさと支度してリシルの店の開店時間まで時間を潰そう。

さて、そろそろ10時になる。リシルの店に行こう。
一応他の防具店や魔具を置いてる店も覗いてみたが変態に合う物は無かった。こいつ胸がデカイから普通の防具はまず無理だし、リシルの店以上の魔具が置いてある店も無い。
やはり変態の防具に関しては今日の入荷か魔具職人に直接頼むしかなさそうだ。
「うぅ……申し訳ありません。私の為に時間を」
「別に構わん。無いなら無いで結界を防御に使えるよう訓練すれば良い」
「え？あれは数人で展開して初めて意味を持つ術ですよ？」
「1人でも発動は出来るだろう？それを自分の盾として展開すればいい」
「あ…」
逆に何故この発送が無かったのか不思議なくらいなんだが。まぁ、伝統とは得てしてそうゆうものだな。
お、着いたな。中に誰か居るな。あれが魔具職人か？
「あらぁ～、本当に来たのねぇ～」
「ああ。その子達が……」
「……やっぱり生きてた」
声が出せない。まさかこんなに速く再開するとは思ってなかった。
いや、会わなくて済むようにしていた。第2大陸に行こうとしたのも半分はこの子達に会わないようにする為だった。
「えっ？ロザリーちゃん！？」
「ジルには」
「ロザリー、大丈夫。何もしてこないよ。でしょ？」
「ああ」

たった1週間前に、私と戦った浴衣姿の少年と私が誘拐した神祖の少女が居た。
少女は少年を庇う様に此方に半身を向けて少年を抱き締めているが当の少年は涼しい顔で私と少女に笑顔を向けている。
お見通し、と解釈していいものなのか？
「知り合いだったのねぇ～。どう見ても仲は良く無さそうだけどぉ～」
「色々有ったんですよ。今は敵対してませんけど、溝は有ります」
「うふふ、本当に子供っぽくないわねぇ～」
「これでも人生経験豊富なんです」
「そういう事にしといてあげるわぁ。あまり詮索するとロザリーちゃんに嫌われちゃうしぃ」
確かに、少女がリシルを泣きそうな目で見ている。少年を取られるとでも思ったのだろうか？
「え～と、もしかしてリシルさんの友達の魔具職人って…」
「そうよぉ。ロザリーちゃんの事」
まさか世界がこんなにも狭いとは思わなかった。もう少し大きく出来ていれば合わなかったかもしれないと言うのに。
「空気が重いわねぇ。ちょっと違う話題にしましょうかぁ」
「そうですね……ロザリー、とりあえず魔具渡しちゃおう？」
「……うん」
「うふふ、ありがとう♪ロザリーちゃん、ジル君の事大好きねぇ」
確かに、魔具を渡しながらも少年を離さないな。
「ふえ!?」
「おっと」
「／／／／／／」
慌てて離れようとしたが此処は雑貨屋。所狭しと様々な物が置いてあり周りを見ないで動くのは少々危険だ。
案の定、後ろに在った壺にぶつかりそうに成ったが少年が少女を抱き寄せる事でそれを回避した。必然的に今度は少年が少女を抱き締

める形に成った。やるな少年。
「……ゆ、勇那様、私もこの店内はちょっと危ないと思うのです。ですので」
「自分でどうにかしろ」
「うぅ、厳しい御言葉が胸に響きます。そのように厳しくされると私は／／／」
言いながら顔を赤らめたか。本気でドM変態女だな。
「……苦労してるね」
「君はまるで新婚の様だな」
「自覚は有るよ。それにしても、何しに来たの？まるでロザリーに合ってみたかって感じだったけど」
「ジル君、私のお客様よぉ？『何しに来たの？』は酷いわぁ。お姉さん悲しくて泣いちゃいそうよぉ～」
「エルに合う防御用の魔具を探しに来たんだ。今日は入荷の日だと聞いてからな。どうせなら魔具職人に直接頼もうかと思ったんだ」
リシルの抗議は2人で黙殺した。そもそもあまり気にしてなさそうだ。私達と少年達をニヤニヤしながら眺めている。
そして少年はまだ少女を離さないのか？少女はもう此れ以上無いくらい真っ赤だぞ？
「だってよロザリー。どうする？」
「……作ってもいいよ／／／」
そろそろ離してやったらどうだ？まともに考えれてるか怪しいぞ。
そして変態もトリップしてないで戻って来い。何時までM思考に浸っているつもりだ…
「ただ……もうジルに酷いコトしないって約束して」
此の2人、お互いの事を優先し過ぎだな。少年は少女の事しか考えてないし少女は少年の事しか考えてない。大丈夫か？
「ああ、約束しよう。どんな依頼でも少年と敵対する内容なら破棄する」
「なら……作る」

「でもぉ、どうして魔具なのぉ？普通の鎧とまでいかなくてもぉ、防具だってあるわよぉ？」
「エルの胸がデカくてオーダーメイドに成ってしまう」
「あらぁ、着痩せするタイプだったのねぇ……うふふ♪」
「ひっ！」
お、リシルの視線でトリップしてた変態が戻ってきたか。
「ますます私好みだわぁ。背はそんなに大きくないのに胸は鎧がキツイほど大きい。その上可愛い顔……うふふ♪楽しめそうだわぁ」
「ヒィィィ！」
私を盾にするな。しかしリシルはレズビアンだったのか。どうも私の周りにはそんなのばかりだな。
「そんなに嫌がらなくても大丈夫よぉ。最小は怖いかもしれないけどぉ、直ぐに良くなるわぁ」
「わ、私の体は勇那様だけのものです！他の方に見せる事はありません！」
「大胆だな～」
「そうだね～」
「残念だわぁ。じゃあジル君、お姉さんと一緒に寝ましょう？」
「ダメッ！」
「だってさ」
「ロザリーちゃんが許してくれないんじゃしょうがないわねぇ」
レズビアンではなかった。レズビアンでもある、だったようだ。両方イケるとは恐ろしいな。
取り敢えず魔具は作ってもらえそうだな。

女勇者と男Ａの再開（後書き）

魔王「……ちっ」
女Ｂ「いや、勇那が生きてたのが嫌なのは分かったけど舌打ちまで」
魔王「皆の話から完璧に死んだヒャッホーイ！とぬか喜びしてたのじゃ」
女Ｂ「アンタ変なトコで陰険ね」
魔王「……そんな事無いのじゃ。勇那生きてて嬉しいなー」
女Ｂ「カタコトな上に棒読みじゃない」
魔王「……だって嫌いなんじゃもん」
女Ｂ「だもんって……」

男Aの報告（前書き）

魔王「とくと見よ！これがグダグダ駄文の最高峰じゃ！」

女B「スゴイ事言うわね」

作者「自覚はあります」

男Ａの報告

Ｓｉｄｅ：男Ａ

リシルさんの店で巫山戯ているとお昼に差し掛かっていた。ギルドの方に顔を出すよう赤ヒゲに言われているのでそろそろどっかで飯にしよう。

ロザリーを助け出した後行ってみたら戦ってる時にギックリ腰に成ったと聞かされた。頑張りすぎだ。年を考えろ。

まぁ、ロザリーの事がそれ程大事だったのだろう。殆ど娘と変わらない扱いしてるからな。

「ロザリー、そろそろお昼にしよう」

抱き締めてたのを少し緩めて声を掛ける。

う～ん、ロザリーが俺を抱き枕にするの少し分かるな。何か温かくて気持ち良い。

「あらぁ～、もうそんな時間なのねぇ。私もお昼にしようかしら？」

「ジル～、お弁当お弁当♪」

「うん。どこで食べようか？」

「少年は料理が出来るのか？」

「うん」

「美味しそうねぇ。ちょっと食べてみたいわぁ」

「食べる場所提供してくれたら少しあげますよ」

「うふふ、交渉成立ねぇ。奥にいらっしゃい。ユウナちゃん達もどう？少しくらいなら作ってあげるわよぉ」

「ふむ。有難く頂こう」

「勇那様！？……うぅ…」

エルーダだっけか？本気でリシルさん苦手なんだな。

「料理手伝います」

「あらぁ、ありがとう。そう言えば料理は殆どジル君がしてるんだったわねぇ」

「ジル、料理上手過ぎるんだもん……」
拗ねちゃった?頭撫でながら店の奥に入る。最近は俺の方が身長伸びてロザリーよりちょっと大きくなっている。
ロザリーはちっちゃくて俺は大きいのかもしれない。
「仲良いですね」
「そうだな」
「私達も」
「撫でないぞ」
「まだ何も言ってませんよ～……」
「お前は分かり易いからな」
充分仲良いだろ?てかこれから勇者の事なんて呼ぼう?何でもいいか。
店の奥の居住スペースには4人用のテーブルと椅子が有った。
リシルさんは奥から椅子を持ってきた。
「じゃあ、3人分だけテキトーに作りましょうかぁ」
「はい」
30分程で完成。スープと軽い炒め物にしておいた。調味料で簡単なソースを作って炒め物にかけたから物足りなさは無いと思う。
ロザリーは気まずいのかずっとキッチンに居た。そりゃ自分を誘拐した人と一緒に居るのはキツイよな。
俺の料理は相変わらずこの世界の人に好評なようでリシルとエルーダは食べ終わった時もう少し食べたいと言い出した。今後アンタ等に作る予定無いぞ?
「……君達は此の後どうするんだ?」
何か勇者が暗い、とゆうか悩んでる?
「ギルドに顔出してから帰る」
ちょっと素っ気無い感じで返事しておく。一緒に行っていいかとか言われたら堪ったもんじゃ無い。
「そうか……少し時間を貰えないか?話が有る」
断りて～。別に興味無いし。

「……いいよ」
はぁ～、ロザリーがそう言うならしょうがない。
「良いよ」
「そうか。有難う」
エルーダが暗い顔してるのが印象的だった。

ギルドに顔を出してユビキタスからの依頼を聞いた……少し前に一緒に仕事した隊長、シスター、狩人の推薦で面倒な話が来ていた。
……面倒臭い……でも報酬高い……ロザリーが乗り気だし受けるか……
勇者達はギルドに登録してるらしく受付の人に頼んで奥の個室を貸してもらった。
ちなみに男達から値踏みするような、舐め回すような視線を受けた。
気持ち悪っ！
気を取り直して対面式のソファにロザリーと並んで座る。俺の正面には勇者が座った。
どうでも良いが、その猫触らせて。めっちゃ可愛い。
「ふぅ……最初に言っておきたかったんだ。済まなかった」
は？何の話だ？
「私がアダトリノ王の命令を拒否していればこうは成らなかった。君達を巻き込んでしまって済まないと思っている」
あ、その為に呼ばれたのか。正直どうでも良かった。
「アタシは……ジルに隠しゴトしなくてよくなったから、気にしてないよ？」
「……有難う」
う～ん、俺の事話しておくべきかな？別にどっちでも良いんだろうな。
「ロザリーちゃん……」
エルーダが何か感動してる。
「さて、話も纏まった所で、アダトリノのその後を話しておくよ。

知らない事も結構有るでしょ？」
「ああ、頼む」
「主要な貴族の大半が死んだアダトリノは国としては機能出来なくなった。今は城に居たお姫様がどっかの貴族が治めてた領地で民の為に民主的な制度を考えてるみたいだよ。
ただ他の領地は他の国の管理下に置かれてるし、その領地も暫定的にユビキタス領に成ったよ」
「……そうか」
「あと、アダトリノ王が死んだ事で魔族を根絶やしにしようって強硬派は大分大人しくなったみたい。あの王様が実質的な強硬派のリーダーだったらしいよ。
ユビキタスの勇者を担ぎあげようって話も有ったみたいだけど勇人さんは穏健派な上強すぎる姫様とメイドさんが脇を固めてるから強硬派は手が出せないみたい。
それにユビキタスは近い内に勇人さんと姫様を魔界への和平歓談の使者として送るって正式に発表したよ。
で、問題はアンタだ」
実はその間に神祖に関しても保護法案が出たりしたんだけど話す必要は無い。敵なら戦うだけなんだから教える意味を感じない。
「……私が生きていると知られれば強硬派は動く、だな？」
「まぁ、当然と言えば当然だよね。勇者程分かり易い魔王を倒す存在は他に無いし」
「私がアダトリノ王を殺した事は一般にはあまり知られてないのだろうな」
「いいや、皆知ってる。でも、そんなのは『アダトリノ王は実は魔族と繋がっていた』とでも言えば良いだけだ。民衆に真相が話される事は無いだろうし、証拠も無い。デッチ上げる事だって簡単だ」
「……そうなると私は第3大陸から離れた方が良いな」
「うん。第2大陸のカラーズって国ならそれなりに人間の国とも交流あるから住みやすいと思う」

「そうか……それで、ここまで私に話した理由は何だ？君には何の利益も無い話だったと思うが」
「酷っ！そんなに利益優先に見える？」
「ジルだもんね～」
偶にロザリーって本気で俺の事嫌いじゃねって思う。サラっと俺の心抉ってくる。
「まぁ、聞いた所で何の意味も無い話だったな。私も貴族共に周りをうろつかれるのは鬱陶しい。素直に第３大陸を出よう」
「そうしてくれ」
これで戦争勃発の可能性が大分減ったな～。間違い無くギグの森が戦場に成るから人魔間での戦争は起こって欲しくなかったんだよね。ロザリー的にはどっちも友達が居るからどうしていいか分かんなくて悩みそうだし。
あ、勇者の言う通り俺って利益優先だな～。利益の基準は普通と大分違いそうだけど。
さて、話も用事も全部終わったし帰ろう。

男勇者の騎士学校見学（前書き）

今回からあとがきでちょっと遊びます

気が向いたときだけですが

Ｓｉｄｅ：姫御子

「何度も申し上げているではないですかっ！神祖もシルフも人間に牙を向けた種族ですぞっ！」

暇だね。

「それを保護するような事をしてあまつさえ魔族に和平会談などと！」

先日のアダトリノの事件は凄かった。

「公は他の国々との対立をお望みかっ！？」

あの規模でなくていいから何か起きないかね。

「我が国は他国と戦うほどの力は無いのですぞっ！」

「ほう、貴殿は戦争を前提に法を作るか」

「……っ！」

最近勇人弄りもマンネリ気味だ。

「そもそもこの保護法は第２大陸の国々と足並みを揃えやすくする為の物だ」

ここらでテコ入れが必要かね。

「貴殿はそえを否定するか」

しかしどうしたものか。

「全大陸の安寧の礎を崩すのが、ユビキタスの役割か」

ふむ、先日カラーズに行った使者の推薦状。何々…

「我が国の掲げる平和の理念を否定する気か」

ほう、これはこれは。早速コールズのギルドに連絡だね。

「それが貴殿の、ユビキタスの貴族の為す事かっ！」

さて、勇人とメイドさんの予定を調整しようかね。

「この法案は通す」

これが上手くいけばこの世界は少しだけ綺麗に成る。

「何度でも宣言しよう」

多少強引でも、小さな一歩でも。
「ユビキタスは、全ての種族の平等を目指すっ！」
種族を理由に虐げられる者が居ない世界を。
「その為の法、全種族平等法を制定する！」
誰もが平和な世界を目指そうかね。

「……これで、ロザリーちゃんは守られるんだよな？」
アダトリノの事件から2週間が経った。
「どうだろうね。この法案が適用されるのはユビキタス領だけだ」
アダトリノの事件から3日後に出された全種族平等法案がついさっき法律として制定された。この法律は理想的ではあるが問題も多い。
種族によって価値観や食生活は大分違う。魔族の中には他の生物の血を飲まないと生きられない者達もいるし、生気を吸うことで生きる者達だっている。
これを人間が認められるかと言えば恐らくＮＯだろう。
過去に確執の有る種族に恨みの有る者だっている。
そういった者達からしたらこの法を出した父様は悪魔だろう。だが世界の平和を目標とするユビキタスでは遅かれ早かれ制定されるべき法だった。
「それでも、この国の中ならロザリーちゃんは守られる。これから、もっと広げていけば良い」
「……そうだね」
言う様に成った。前は漠然と全てを守ろうとしていたけど最近の勇人は強い意思でそれを言う。まぁ、心構えの仕方が分かってきたんだろうね。
さて、本題だ。
「じゃ、その為に勇人にも動いてもらおうか」
「あ、だからわざわざ会議に呼んだのか？」
今日は初めて勇人を会議に出した。絶対に何も意見を言わないで、見学させた。権力欲に取り付かれた馬鹿共には予め勇人に意見を求

める事を禁じた。
絡め手で何言ってくるか分かったもんじゃないからね。メイドさんを勇人の横に待機させたらすんなり従った。そりゃ誰だって藪をつついてドラゴンに登場されるのはお断りだろう。
「ああ。騎士養成施設に行くよ。面白いものが見れる」
依頼は受理された。片方が面倒臭がるかとも思ったけど、割とあっさり依頼を受けてくれた様だ。ふふっ♪
「で、いつだ？」
「今から」
「……急過ぎる！！」
「此の後は何の予定も無いだろう？分かったらさっさと行くよ」
「横暴だーっ！」
実は勇人の予定は私が空く様に仕組んだんだけどね。
さて、本当に小さな一歩を踏み出そうか。

Ｓｉｄｅ：男勇者
いきなり騎士養成施設だなんて何考えてるんだ？
メイドさんも微妙に嬉しそうな顔で見送ってたし。
最近ようやくメイドさんの喜怒哀楽が分かるように成ってきた。とゆうかメイドさんが喜怒哀楽を出すように成ったらしい。
アダトリノ王との戦いで思う所が有ったらしい。
フレイヤに連れられて来た騎士養成施設は普通に騎士学校と言うらしい。てか城から結構馬車に揺られたな。
校門を抜けると授業中らしく子供達が剣の稽古や魔法の練習をしているのが見えた。レンガ造りの立派な２階建ての校舎の中に入れば教室で講義を受けていた。
「こっちだ。教師役の騎士に出張任務が下ってしまってね。その為に２日間の臨時教師をギルド経由で頼んだんだ」
……ここ校長室じゃんっ！？

「いいのか？てか俺は何で呼ばれたんだ？」
「直ぐに分かるさ。失礼するよ」
『どうぞ』
フレイヤのノックに合わせて中から老人の声が聞こえた。
「お久しぶりです、フレイヤ様。こちらに出向かれると聞いたときは笑ってしまいましたぞ？」
「えっ、姫様に勇人さん！？」
「お久しぶり」
……は？
「ロザリーちゃんにジルくん！？」
俺と同じ様に驚いてソファから立ち上がりかけているロザリーちゃんとやっぱりかと呆れた表情のジルくん。何で君は驚かないんだ？
「勇人、今回の臨時副教師役のボウヤと少女だ」
「いやいやいや！子供じゃんっ！ここで勉強してる子達と同い年くらいじゃんっ！」
「だが少女に関しては城の魔法使い以上に魔法に精通している上に最高の魔具職人だ。ボウヤも並みの騎士では動く事さえ出来なほどの技量を持っている。
安心しろ。彼等に任せるのは最年少クラスだ」
そうゆう問題か？
「それに担当は午後の2限のみだ。少女が魔法学を教え、ボウヤが剣の稽古をつける」
……不安だ…
「いいのかジルくん。相手は子供だぞ？」
「多分、いや確実に騒ぎに成ると思う……」
「ならっ」
「ロザリーの為に姫様が用意した依頼なんだよ」
俺にしか聞こえない様に声を調整してきた。しかしどうゆう事だ？
「子供の内に神祖や他種族に慣れさせようって魂胆だと思う。確かに上手い手だと思うよ。ちょっと性急だとは思うけど」

「あ、言い忘れてたけど勇人。ボウヤはあくまでサブで、メインの教師役はあんただよ」
……は？
「ちょっと待て！聞いてないぞっ！」
「ああ。今初めて言ったからね」
「少しは悪びれろ！」
「ま、そんな訳で午後は私と少女、勇人とボウヤでそれぞれ授業に当たるよ」
……俺の意思は？
「勇人さん、諦めよう。今の姫様は誰にも止められないよ」
ジルくんの意見は最もだと思った……

午後１の授業、俺とジルくんは担当クラスの担任（女性）と演習場で１０人程の生徒達に注目されてた。
「皆、今日は臨時で我が国の勇者様とギグの森で生活している少年が皆の相手をしてくれる事に成ったわ。しっかり教わってね」
「「「「はーい」」」」
うわ～、緊張す……何故ジルくんは平然としているのかな？
こうして俺は始めて教師に成った。

男勇者の騎士学校見学（後書き）

女Ａ「……え？ここどこ？」
女神「ここは『あとがき』。キャラの墓ｂ……いえ、影薄いキャラにスポットを当てる救済所」
女Ａ「酷っ！言い直しても酷っ！……それ以前に、誰？」
女神「申し遅れました。私はフリッグ。特に覚える必要は有りません」
女Ａ「無いの！？」
女神「所詮３番と４番はガン●ムＷでも大して機体が進化しない不遇キャラだ、との事ですので、扱いはこんな物です。ちなみに作者は『もうちょい何かしても良かったんじゃ』と思っていたそうです」
女Ａ「じゃあ何で私呼ばれたの！？こんな扱いなら呼ばれないでシオン君と遊んでたほうがよかったよ～」
女神「最近新しい弓を手に入れられたのに殆ど紹介されない貴女へのせめてもの情けだそうです。次の話まで出番有りませんし」
女Ａ「作者酷っ！そんな事するくらいなら私とシオン君のイチャイチャ話とか書いてよ！」
女神「あ、カンペですね。何々、『自信ないから暫く待って』……書こうとはするんですね」
女Ａ「やった♪これで勝つる！」
女神「……では今後の女Ａの活躍？が有りましたら『作者、やっちまったな』と御思いください」
女Ａ「やっちまってないよっ！」

作者「……思いつかね～」

男勇者奮闘記

Ｓｉｄｅ：男勇者

「じゃ、自己紹介だ。俺はジル。見ての通り魔力は低いし眼帯のせいで片目見えないから手加減してくれな」

「しつもーん！」

「はいそこの元気な女の子」

「何で女の子なのに自分のコト俺って言うんですか？」

「……男だから」

「「「「……ウッソだ～…」」」」

「ほほう。よろしい、男子諸君ついてきたまえ。トイレでお話しようか」

おいおい…

「ジルくん、落ち着け。ショックなのは分かるけど今は抑えろ」

「俺男だもん……グズッ」

げっ！そんなに気にしてた！？

「と、コントも終わった所で、勇人さんの番だよ」

「あ、ああ」

……もしかして、俺の為に巫山戯たのか？

さて、俺も自己紹介……注目しすぎだろ！てか先生まで期待した目でこっち見ないでくれ！

「あ～、俺は正名勇人。勇人が名前だ。一応、この国の勇者、やってる……これで終わり！何か質問有る人！」

「「「「はいはいはーい！」」」」

「勇人さん、自分が注目の的だって自覚してくれ」

「本物の勇者様と話せる機会があったらこの子達はずっと質問しちゃいますよ」

……スイマセン…

「あ～、じゃ短い質問だけね。はい君」

指したのは可愛らしい女の子。てか男女比３：７って前に見た気が…しかもつい最近…

「恋人はいますか！」

「いません。はい次君」

「好きな人いますか！」

「あんま変わんねえ！？いません。はい君」

「好きなタイプはどんな人ですか！」

「ずっとこの調子なの！？優しくて笑顔が可愛い人が良い。はい次」

まぁ、このペースで１０人なら１０分で終わるだろう。速く素振りに入ろう。

そう思って９人の質問に答え、最後の１人。勝気で挑戦的な目をした女の子の質問は、

「ジルさんって私たちと大して変わらない年のようですが、私たちに教えられるほど強いんですか？」

おいおい、まさかジルくんに喧嘩売ってるのか？

「まぁ、城の騎士くらいなら１秒掛からずに戦闘不能に出来るよ」

あっさり何言ってんだよ！？

「なっ！……随分と自信があるんですね？」

「うん。この仕事の前に模擬戦させられたからね。姫様とかを基準にして攻撃しちゃったから大騒ぎだったよ…」

フレイヤ基準にしたら兵士が可哀想だろっ！！

「へ、へぇ…まるでフレイヤ様を知っているかのような口振りですね」

「てか、勇人さんも姫様も家に来た事有るから。仕事で来た日とかは泊まっていくし」

「なっ、なら、その力証明してください！今、ここで！」

「う～ん、模擬戦でもすればいいのかな？」

「えっ、う、うぅ……」

「勇人さん、先に授業始めてて。俺は少し後で合流する」

はぁ…

「程々にな？」
「模擬戦で基準は分かったから平気。授業が疎かになる方が問題だよ」
「そうだな。じゃ皆、素振り始めるぞ」
「「「「…はい」」」」
まぁ、クラスメートがあれじゃ気に成るよな。どうなることやら。

Ｓｉｄｅ：男Ａ
予想通り喧嘩売られたな。しかし……模擬戦出来る相手なんて担任くらいだぞ？この人相手じゃ弱い者苛めに成っちゃうし……どうしたものか…
「……私と、模擬戦してください！」
「……はぁ…分かった」
寸止めすれば良いよな？
「審判お願いします」
「……大丈夫よね？」
「怪我はさせません」
心がどうかは知らん。喧嘩売って負けて潰れるならそれはそれで勉強に成ったと思え。
「武器、抜かないんですか？」
お、もう構えたか。じゃ、俺もそれっぽい構えを取る。
あのダランとした構え、初見の人には必ず怒られるんだよね……
「このダガーと打ち合ったら模造刀真二つに成っちゃうよ。それに、俺は本来無手だ」
職業スキルは今だに＜グラップラー＞がトップ。ＢランクとＡランクの間には相当な差が有るらしい。
「……怪我しても知りませんからね！」
担任の合図も待たずに切り掛ってきた。普通に避ける。
「くっ！」

まだ体が出来てないからだろうけど、剣に振り回されてる様に見える。俺は剣に詳しくないから何とも言えないけど。

「このおっ！」

相当息を切らしながら剣を振り回してくる。だけどやっぱり俺には遅く見えて……正直準備運動にも成らない。

当たり前だ。基準が違い過ぎる。これ以上は本当にただの弱い者苛めに成るからさっさと終わらせる。

「やぁっ！」

力任せに上から降りおろされた剣を右手で掴む。

……2人して化物見る目は止めて。地味に傷つく。

そのまますっぽ抜いて剣を奪った。これで俺の勝ち。

「はい。これで満足した？」

柄を向けて剣を返してやる。

「……はい」

凄い悔しそうに受け取って鞘に収めた。素手で刀身に触ってしまったから手入れしとくように言わなきゃな。

「じゃ、勇人さん所に行こうか」

まぁ、俺は素振り見ても何言えば良いのか分からないんだけど。

「……どうやったら、そんなに強くなれるんですか」

動かない。いや動けよ。答えてくれるまで動かないってか？

「好きな人守る為に鍛えた」

いや、酷いねこの嘘。実際は女神ｓ（フリッグです！）フリッグに無理矢理持たされた能力なわけだし。

ダガーと投擲は自分で覚えたけど。理由も嘘じゃないけど。

「……分かりました」

あ、走って行っちゃった。まぁ、勇人の授業受けてくれるんなら何でも良いか。

Ｓｉｄｅ：男勇者

お、戻ってきたか。
……何か、凄い真剣に素振り始めた……ジルくん、何した？
「お待たせ」
「いや、良いけど……どうしたんだ？」
「何でそんなに強いのかって聞かれたから好きな人の為って答えたらああなった」
「……君の事だから完全に素面でそう言ったんだろ？」
「ポーカーフェイスは得意なんだ」
「知ってるよ」
はぁ……あの子はどうゆう気持ちでジルくんの言葉を受け止めたんだろうな。
「見た感じ変な振りの子は居ないね」
「ああ。流石に皆真面目だよ。荒削りだけど綺麗な素振りだ」
「俺にはよく分からないけどね」
「君が教えるのは実践訓練だろ？俺なんかよりよっぽど戦闘経験積んでるんだ」
「ギグの森に居れば嫌でも、ね」
「そうだったな。よし！皆そこまで。今から実践訓練に入ろう」
「「「はーい」」」
さっきの少女がジルくんを見つめているのが気に成った。

男勇者奮闘記（後書き）

神祖「あ、エルーダさん達生きてるって言い忘れたよ？」
男Ａ「別にいいんじゃない？むしろ黙ってた方が面白そうだよ？」
神祖「も～、ジルはいつもそうなんだから～」
男Ａ「だっていきなり再開した方が皆ビックリしそうじゃない？」
神祖「だってじゃないよ！で、本音は？」
男Ａ「そんな事したら１話あたりの文字数増えすぎる」
神祖「作者さん、気にしすぎだよ！読者さんきっと気にしてないよっ！」
男Ａ「作者はチキンだからな～。昔不良に絡まれそうに成ったときは絡まれる前に全力で逃げてたし」
神祖「弱っ！作者さん弱っ！」
男Ａ「その危機察知能力だけは評価……できないよな～」

作者「ほっといてくれ！……グズッ」

男勇者の実践授業

Ｓｉｄｅ：男勇者

準備運動と素振りが終わったら担任は職員室に戻っていった。
彼女にも仕事があるんだから当たり前。ここからは本当に俺とジルくんだけだ。
「２人１組での打ち合いだ。相手に怪我させないように剣を振るうのも練習に成る。じゃ、始めて」
俺が１０人中６人の３組、ジルくんが残りの４人２組を見る。やり過ぎたりしないように監督する為だ。
しっかし皆綺麗な打ち込みだな。
「あ！」
「ほい」
お、危うく頭に直撃しそうだったのをジルくんが防いだか……でもグローブの水晶で受け止めるのは危ないと思うんだ。
「あ、ありがとうございます」
「どういたしまして。あんまり力むな。お互い怪我するぞ」
「「はい！」」
１番怪我しそうな事したの君だからな！？水晶は弾くのには良いけど受け止めるのは難しいんだぞ！
……さっきの子がまたジルくんの方見てる……何かあるのか？
周りに注意しつつその子の視線を気にしてたらそこそこ時間が経っていた。子供達も大分疲れたようだ。
「じゃ、ここらで休憩入れよう。１０分程で再開するぞ」
「「「「は～い…」」」」
あれ？ジルくんの方の子達、俺の見てた子達より疲れてる？
「何か、君の方の子達の疲れ酷くないか？」
「長く動ける様に打ち合いさせてるから」
「……どゆこと？」

「ミスしても直ぐに次の動作に移れるように補助したの。その方が密度の濃い練習に成るでしょ？」
「どうやって？」
「倒れそうに成ったら軽く受け止めて打ち合い続行。剣が弾かれたら遠くに行かない内にキャッチして直ぐ再開させる。そんな事してたらこうなった」
……確かに打ち合いの時間が増えたら疲れるのは当然か。休憩後は俺の方もそうしてみよう。
「あの、ジル先生」
おや、あの子がジルくんに話しかけた？さっきは俺の見る方にいたから話しかけ辛かったのか？
「どしたの？」
「後で、ジル先生の剣を教えてください！」
「は？何で？」
「普通の剣を女の私が振るうには限界があります。でもジル先生のダガーなら自由に扱える」
確かに女の子が普通の剣を持つのはちょっと辛い。事実女性騎士の大半が普通の剣より少し小さい物を使っている。
「却下。それはこれからの授業で習う事だよ？今から我流の型を覚えちゃったら騎士としては遠回りに成る。騎士に成ってからなら教えてあげるよ」
「……それは、何年後の話ですか？」
「さぁ？１０年とかは経ってるんじゃない？」
「待てません」
「知りません。ほら休憩時間終わったよ。稽古再開」
……はぁ…ジルくんの言う通りだな。
「皆、相手を変えて練習再開だ。じゃ、始め！」
これは色々問題が有りそうだな……

キーン、コーン、カーン、コーン……

お、授業終了の鐘だ。
「授業はここまで。ホームルームちゃんと受けるんだよ」
「「「「はーい。ありがとうございましたー！」」」」
ふぅ、ようやく終わった。
「俺達も戻ろうよ。ロザリーと姫様とも合流しないとこの後の予定が分からない」
「そうだな。全く、フレイヤは何考えてるんだか……」
「案外、何も考えてなかったりして……」
「やめろよっ！本気で有り得るから怖いんだよ！」
ジルくんと巫山戯ながら校長室に向かう。途中でフレイヤ達を見つけた。
「あ、ジル～♪」
「おふっ」
廊下でろざりーちゃんがジルくんに抱きついた……って、ここ学校だよ！？教室の窓から丸見えだよっ！？てか横の教室ってさっきまで見てたクラスだし！！
「ロザリー、人目を気にしよう。皆凄い見てる」
「うん／／／」
うわぁ、明日の授業で何言われるか分かったもんじゃないな。頑張れ２人共！大分自業自得だけど！
「フレイヤ達は魔法を教えてたんだよな？どうだった？」
「ああ、皆ロザリーに興味津々だったよ。ルーンの刻み方や魔具の作り方何かは私より詳しいし、男子はあの容姿でノックアウトだ。授業終了間際に神祖だって教えてもあっさりと受け入れてたよ。神祖とゆう単語自体知らない子もいたね」
ロザリーちゃん可愛いし戦争は１００年も前だもんな。おかげでジルくんが凄い睨まれてる。
俺達の担当したクラスは剣の稽古１０人と魔法を習う１０人の２０人。クラスを２つに分けて授業の密度を上げるようにしているらしい。その分教師を確保するのが大変だと校長先生がボヤいてた。

「じゃ、宿舎の方に行こうか。今日はそこに泊まるよ」
「「は～い」」
「……泊まりだって初めて聞いた」
「勇人さん、ドンマイ」
ジルくんが棒読みで慰めてくれた。せめてもう少し感情込めてくれ……
「部屋割りは私と勇人、少女とボウヤだ」
「ちょっと待てーーーっ！！」

翌日
フレイヤと同じ部屋は疲れた……
今日は午前中に昨日のクラスのもう１０人を見る事になってるのだが……
「ジル先生はロザリー先生の恋人なんですかっ！？」
「もう一緒に住んでて毎日同じベットで寝てるって……」
「僕たちとそんなに変わらないのに進んでるんですか？」
「……俺だってロザリー先生の事……」
ジルくんが男の子達に詰め寄られてる。最後の子カミングアウトしなくてもいいだろ。
……ちょっと早めに演習場に来たのが間違いだったなぁ。
「ユウト先生はフレイヤ様の恋人って本当ですか！？」
「メイドさんと付き合ってるって話、本当はどうなんです？」
「城で働いてるお母さんに聞いたんですけど２人とも部屋に連れ込んだって……」
「「キャーッ♪」」
俺は女の子達に絡まれてる……誰か止めてくれ……
「ユウト先生！」
「ジル先生！」
「「？」」
「フレイヤ様をかけて決闘を申込みますっ！」

「ロザリー先生をかけて俺と勝負してください！」
「「……マジ？」」
しまった！この子達の何人かはその為に早く来たのか！
着替えや準備を考えてこの授業の前と後ろには２０分休憩が入っている。授業まであと１５分……とてもじゃないけど抑え切れる時間じゃない…
「う～ん、ロザリーって直ぐに戦いたがる人は嫌いなんだよなぁ」
「っ！！？」
ジルくん……君は本当に容赦が無いね……ロザリーちゃん狙いの子達が軒並みｏｒｚに成ったぞ。
「フレイヤもあんまりそうゆうのは好きじゃないって言ってたな。好きなら自分の所に直接来いって言ってたし」
「……（泣）」
嘘だろ泣いちゃった。でもパーティーとかでも遠巻きに見てる人には興味無いって言ってたのは本当なんだよな。
「ほら、フレイヤにしろロザリーちゃんにしろ良い所見せる為には強く成らなきゃな！ちょっと早いけど準備体操から始めよう！」
皆しっかり体操始めたな。
……何か思ったより男の子達の目が真剣だし、ジルくんに恨みの視線発してる！？……もしかして、やり過ぎた？

男勇者の実践授業（後書き）

姫巫女「ふぅーっ、良い湯だった」
男勇者「へぇー、部屋に備え付けにし、て……服を着ろーーーっ！」
姫巫女「勇人、五月蝿いよ。この程度で狼狽えるなんて情けない。ほら、タオルは巻いてるだろう」
男勇者「そういう問題じゃねーっ！てかフレイヤ胸結構有るんだから危ないだろうがっ！」
姫巫女「ほほう、普段私にそんな劣情を抱いていたのかい。今後は気を付けなくちゃね」
男勇者「まさに今気を付けろよっ！」
姫巫女「面倒だ。良かったら一緒に寝るかい？私は勇人なら構わないよ？」
男勇者「……マジ？」
姫巫女「胸ガン見だね。どうせなら最後までするかい？」
男勇者「最後……ブシャーーーーッ！！」
姫巫女「鼻血って……もしかして、童貞？」

神祖「ふあっ…あっ…んっ…んふ♪……ぷはぁっ」
男Ａ「ぷはぁ……まさかいきなりキスとは」
神祖「毎日すれば絶対一緒にいられるって本に書いてあったの♪」
男Ａ「その本没収ね」
神祖「何で？」
男Ａ「ロザリーにはまだ速そう」
神祖「ジルの方が年下だよ～」
男Ａ「そうだった（本当は年上だけど）」
神祖「ねぇジル、一緒に……お風呂入ろ！」
男Ａ「凄い事言うね（それも本かな？）」

神祖「……ダメ？」
男Ａ「……恥ずかしいけど……分かった（勇人、シオンごめん！覗くまでもなく見れる事になりました！ヒャッホーイ！）」
神祖「えへへ～♪（ジルとお風呂～♪……最後まで、行けるかな？）」

作者「……子供の方が進んでるって、どうなんだ？流石に行かせない……よな？」

男勇者の教師生活、最終日（前書き）

何でしょう
あとがきでアホな事書いてるのが1番楽しいって
てかあとがき書きすぎですねスイマセン
謝っておいてまた書いてますが

男勇者の教師生活、最終日

Ｓｉｄｅ：男勇者

準備体操終わり。

さて、最終日だからって張り切りすぎない様にしなくちゃな。適度に休憩入れていかなきゃ。ジルくんは相変わらず男の子達からの恨みの視線受けてるのに平然としてる。

……もしかして興味ないから平気とか言うんじゃないよな？有り得そうで怖い。

キーン、コーン、カーン、コーン……

何も無く最終日の授業終了の鐘が鳴った。

良かった。流石に昨日の子みたいにジルくんに正面切って挑む子は居なかった。ってそれが普通だよっ！

ギグの森の危険さを教わってないのか？

「じゃ、授業終わり。明日からは元の先生に戻るから今日でお別れだね」

「「「え～」」」

いやいや、たった1回しか見てないからね？それでそこまで残念がられるとちょっと嬉しいけどさ。

「さて、戻ろう」

ジルくんは淡白過ぎだよっ！

「あ、ジル先生……嫌われちゃってるのかな？」

あ、子供達が不安そうにしてる……はぁ…

「いや、多分ロザリーちゃんに合いに行ったんじゃないかな？ジルくんはロザリーちゃん至上主義だから……」

言ってて疲れた。てか慰めようにもフォローしようにもジルくんが気にしなさ過ぎだから何の意味も持たない……もう少し周り気にしよう？

「やっぱり、ジル先生とロザリー先生って愛し合ってるんですか？」
愛と来たか。てか女の子達食いつきよ過ぎ！５人がかりで詰め寄って来ないでくれ！
「……勇人さんが子供に手出してる～」
「ジルくん！？」
戻ったんじゃなかったの！？それと何もしてないよ！この状況は君のせいだし！！
「いや～、まさかこんな面白い場面に出くわせるなんて。感激です！」
「「「「キャーッ！ユウト先生に食べられちゃったー！」」」」
「何もしてないよっ！！」
てか皆声が嬉しそうだよ！？
「全く、等々幼女に手を出すとは……それでも勇者かい、勇人？」
フレイヤッ！？どうしてこの状況でそう解釈するんだよっ！？
「ジル～♪」
「おふっ。ロザリー、人前で抱きつくのは」
「ヤダ～、ジルの感触の方が大事～」
「あ、もう何でも良いや」
諦めるなよ気にしろよ止めろよ男の子達の視線が凄いよ！？
もうどこから止めたら良いのか分からないよっ！
「さて、授業も終わったことだし私達は校長室に行くよ。２日間の報告を済ませなくちゃいけないんだ」
「了解～。行こう、ロザリー」
「うん♪」
ロザリーちゃんの嬉しそうな顔に男の子達ダウン（見とれる悔しがる両方）、女の子達羨ましそう。
何だこの状況。
「勇人、行くよ」
「はいはい。じゃ、皆頑張れよ」
「「「「はーい！」」」」

お、男の子達は何とか持ち直したか。

「校長、今回は無理に頼んで悪かったな」
「いえいえ、児童たちにも良い刺激だったと思いますよ」
「だと良いんだけどね」
「……やはり、神祖ですか？」
「ああ。子供は良くも悪くも純粋だ。そこに少女を入れたらどうなるか、一種の賭けだったが、結果は上々と言って良いだろう」
校長室でフレイヤと校長が話してる。
ジルくんはいつも通り余裕の表情で聞いている。ロザリーちゃんは不安そうにしてジルくんに寄り添ってたけどジルくんが手を握ってからは落ち着いている。
……あれ、もしかして惚気けられてる？
「教師の騎士の急な出張。そんなものを指示できる者は自ずと限られます」
「今度はもう少し分かり辛くやるよ」
「それが宜しいかと」
孫の悪戯を笑って許すお爺ちゃんのような笑だった。フレイヤは少し膨れっ面だ。
フレイヤにとっても気の置ける人みたいだな。
「ですが、」
あれ、急に声のトーンが低く成った。何かヤバイのか？
「どうもジル先生とロザリー先生は人気に成りすぎたようです。担任の先生が次は何時来るのかと質問攻めにされたそうです」
おいおい、どっちも好かれ過ぎだろ……分からなくはないけども。
「ですから、また我が校にお越しください。一同で心待ちにしておりますよ」
校長先生良い人！年齢で言えばまだまだ神祖に嫌悪感を持ってる世代の筈なのに！
いや～、良い人に会えたな～。

「じゃ、今日はもう遅いし泊まりだね。ちなみに昨日とは別の４人部屋だ」
なら平気だな。
昨日の夜は酷かった。部屋がまるで殺人現場みたいに成っちゃって焦った。
「少女、風呂は一緒に入らないかい？」
「ジルと一緒ならいいよ～♪」
「「……は？」」
「えへへ～♪昨日初めてジルと一緒にお風呂入ったんだ～♪」
……何故だろう。ロザリーちゃんの周りに花が浮いてる。それも赤い薔薇みたいなのだ。
これが乙女の固有結界とゆうやつなんだな……って！
「ジルくん！？」
「いや、昨日、ね？押し切られた……」
何故君はそこで顔赤くしないで諦めたような表情なのかな？てか俺とシオンとの誓はどうしたっ！男同士の美しい友情に輝いてたあの時はどこに行った！！
「え～と、その、うん。ごめん」
「この裏切り者おおおおおぉぉぉーーーーーーーっ！！！」
「勇人、五月蝿いよ。全く、ボウヤと一緒に入るなら仕方がないね……よし！勇人、私達も一緒に入ろう」
「無理だっ！！」
「勇人さん、男なら立ち止まっちゃいけない時が有るんだ！」
「ここは立ち止まる所だろっ！？」
まさかの推奨だと！？フレイヤの暴走に拍車をかける気か！？
力強く名言っぽく言ってるけど完璧に迷言だったからな！
「ほ、ほらっ、こんな子供でさえ一緒に風呂を楽しもうって言うんだから勇人さんも！」
違う！この子自分と同じ被害者、道連れが欲しいだけだ！目が全然笑ってない！

「ふっ、ボウヤの方がよっぽど大人だね。それに比べて家の勇者様ときたら。もういっそ勇者（笑）と呼ぼうかね」
「誰が勇者（笑）だっ！」
てか何でフレイヤがそんな表現知ってるんだよっ！？
「ジル～、速く入ろ～」
「あ～、うん」
「……勇人さん、覗かないでね」
「覗かないよっ！！」
まさかロザリーちゃんにそんな事言われるなんて……本気で泣いて良いかな？
「あ～、その、何だ……」
フレイヤが俺を励まそうと色々考えてくれてるようだが今の俺にはそれを気にする余裕は無い。
ロザリーちゃんにそんな目で見られてただなんて……
「あ～、ほら、その～……私のなら見ても良いぞ？」
ガクッ……
「えっ、ちょっ、勇人！？大丈夫かい！？」
まさか追い打ちをかけられるとは思ってなかったぜ……orz
……

男勇者の教師生活、最終日（後書き）

魔王「ジル殺すジル殺すジル殺すジル殺すジル殺すジル殺すジル殺すジル殺す」

女B「いや、気持ちは分かるけど止めなさい。ロザリーちゃん泣いちゃうわよ」

魔王「ちっ！各成る上は拷問によりロザリーの傍から離れるように」

女B「変わってないわよ？」

魔王「ではどうしろと言うのじゃ～、このままではジルとロザリーは順調に大人の階段登ってしまうのじゃ～」

女B「しょうがないじゃない。てかアンタはロザリーちゃんにどうなって欲しいのよ？」

魔王「幸せに成って欲しいのじゃ！」

女B「ジルが幸せにするんじゃダメなの？」

魔王「あんな何処の虫螻の骨とも分からん、女か男かも分かり辛い男にわらわの親友はやらんのじゃ！！」

女B「いつ時代の頑固オヤジよ……まぁ男か女か分かり辛いのは確かだけど」

魔王「あのまま一緒に居てはロザリーに百合疑惑がかけられてしまうのじゃ！」

女B「百合はダメなの？」

魔王「魔族ではないからの」

女B「私も人間なんだけど？」

魔王「イトハは普通に魔族じゃぞ？」

女B「え？」

魔王「え？」

作者「女Bって種族が変わってるの今だに気付いてなかったな～」

女勇者の第2大陸冒険記？――メイドさんの謎

Ｓｉｄｅ：女勇者

「うぅ……気持ち悪いですぅ……」

私たちは少年少女から変態用の防具に成る魔具を貰って直ぐに第２大陸行きの船に乗った。始めての船旅は新鮮でそれ程苦ではなかったが問題が１つ。

「おえぇ……うぅ……水ぅ……」

変態が船酔いしてダウンした。クロは平気だと言うのに、軟弱な。

「おう、嬢ちゃん達。もうそろそろ港に着くぞ」

親切にも教えてくれた船員に礼を言い、船の進路に視線を飛ばす。確かに、陸地が近いな。流石に変態の嘔吐姿など見たくない。速く着いてくれ。

『それマジかよっ！』

『ああ、生き延びた騎士の話だ。信頼出来るぜっ！』

む、興奮した様子で話し込んでる獣人達が居るな。何か遭ったか？

『アダトリノ崩壊にあの紫髪のメイドさんが関わってるって？』

『何でも神祖を救けるために動いたそうだぜ』

『伝説通り助けるのは弱い方なんだな』

『一応基準はあるらしいけどな。きっと子孫か親戚だぜ』

『だよな。流石に３００年以上生きてるわけないよなっ』

『だよなー。そんなに生きてられるのは精々竜種くらいのもんだ』

……紫髪で、神祖の少女を助ける為にアダトリノ城に行ったメイドさん……あの人の事か？３００年って何の話だ？

『さっすが俺達獣人の英雄！同じ人じゃなくてもやる事が違うぜ！』

『そういや俺が調べた話だと紫髪のガキも神祖を助ける為に城に侵入したらしいぜ』

『マジかよ！もしかしてカラーズの近衛兵長を拳で切り刻んだって話のガキか？』

『多分そうだろ。神祖がカラーズに来てたときに一緒に居たガキで間違いねえよ。神祖の写真まで使って調べたんだぜ？』
『くあ～！貴族をガン無視して色彩国家最強の一角を倒したガキだよな？スゲー見たかった！』
『全くだ。こんな事なら城の採用試験受けとくんだったぜ』
『いや、お前はぜってぇ受からねえよ』
ギャアギャアと五月蝿いが意外と有益な話だったな。少女の顔写真が各国に出回ってるのは知っていたが少年もそれなりに有名なんだな。
これは早々に第3大陸を出て正解だった。あのままでは少年少女目当ての連中にリシルの店で合ってしまいかねなかった。
しかし……メイドさんについて興味が湧いた。少し調べてみよう。

第2大陸の港街に到着。変態はギリギリ持ち堪えた。
色々と頑張ったな。褒める気は全く無いが。
さて、まずはこの街のギルドでも見に行こう。一応在るとは聞いてるしコールズのギルド長が紹介文を書いてくれた。ここまでされたら行くしかない。
しかし……この港街、あちこちにメイドさんの像が在る……何だこれは？
「変た……エル、この像は一体何だ？」
「最初何て言おうとしたんですか？この像は１００年前にこの第２大陸を平和に導いたとされる英雄の像です。図書館に行けば詳しい事が分かりますし、この人を題材にした本なんかも有った筈です」
「そうか」
英雄……しかし似過ぎだろう。完璧に同一人物にしか見えないぞ？
血が継っていてもこんなに似る筈はない。
止めておこう。今はギルドに行って、後で図書館で調べれば良い。
気持ちを切り替えて街を歩いているとギルドを見つけた。
ギルドは大陸毎に組織体型が違うらしいがやる事は変わらないので

詳しく聞いた事は無い。これからも聞いても覚えないだろう。
受付嬢に推薦状を渡しギルドに登録してから図書館に向かった。
推薦状を読んだギルドマスターが青い顔をしていたが気にしない。
恐らく1人で魔獣の群を倒したとか書いてあったのだろう。
さて、宿も取った事だし図書館に行くとしよう。
ギルドの近くに在るのは良いな。宿もこの近くだから帰り易い。
木造とレンガ造りの2つの棟が有るようだ。メイドさんの本はレンガの方だと言われた。
取り敢えず読む。読む。読む。読む……多いな。棚1つだと思ったら3つの棚に両面ビッシリと入っている。どれだけ好きなのだ?
色々な本を飛ばし読みして分かったのは最初の登場が初代勇者と同時期だと言う事だった。
何でも城務めの普通のメイドだったらしいが当時の風習で勇者の身の回りの世話係として同行、旅を続ける内に強く成り最終的には戦闘員としても重宝されたらしい。元々戦士としての才能が有ったのだろう。
ただメイドに成るまでの過程は不明。辛うじて孤児だったのではないかとの記録が有った。
その後、獣人と人間との戦では双方を単騎で制圧し両陣の城を落とし戦争を終わらせた。
……この時点で30年は経っている筈なんだが容姿は統一されている。何故だ?
細かい記述(魔族のイザコザを止めたとか第4大陸の龍の巣に5ヶ月篭ってたとか)を除くと、100年後にも2代目の勇者の傍にメイドさんと思しき紫髪のメイドが居たようだ。
この時には既に圧倒的な戦闘能力を持っており勇者の剣の師匠として活躍している。当時の魔王と勇者が相討ちに成るその時まで同行したと書いてある……おかしい。子孫を残したと言う記述が全く無い。既に140年近く経っている。エルフでも容姿が変わる筈だ。
そして散発的に各地で目撃されている紫髪のメイドさん……何だこ

れは？
最近では１００年前の戦争時に勇者の傍らで獣人と人間の争いを未然に防ぎ、魔族と人間の戦も双方の被害が最小限に成るように裏で暗躍したと書いてある。
……おいおい、軽く６００年、常に動乱を抑え続けてるぞ？その上圧政を強いる国を矯正したり救いようの無い外道を抹殺したり、並みの勇者が霞む活躍だな。
……私と勇人を呼ばなくてもメイドさんに全て任せれば良かったのではないか？
いや、本人だと決まった訳ではないが、しかし全員同じ容姿だ。肩に当たらないくらいの紫髪にメイド服、手を振る事で生み出す不可視の斬撃に解体用の大きい包丁。
……普通ここまで一致するものなのか？親子ならば髪の色が一致するか怪しいし背丈や話し方にも多少の変化が有る筈だ。しかしそれは無い様で……
「エル、そっちは何か……」
何だ、寝てしまったのか。
「むにゃ、勇那様ぁ～……もう、ダメですっ、そんなっ弱い所ばっかりっ」
……随分とハッキリとした寝言だな。そして随分と楽しい夢を見ている様だな。
このまま置いて宿に戻ろうそうしよう。さらば変態、明日に成ったら凍死体として再開しよう。凍死する程冷えるか知らんが。
「クロ、帰るぞ」
「ニャ」
結局調べるだけ謎が増えただけだったな。この謎は……機会が有れば本人に聞こう。会いたくはないが。

Ｓｉｄｅ：女勇者

第2大陸に来てから1月経った。情報の集まる港街では安心出来なかったので服飾都市クロスを拠点にする事にした。したんだが……

「シオン君照れ屋さんだね～」

「ウッセエ、そんなんじゃねえよ！」

「顔真っ赤だよ？」

「近い近い近い！」

私の宿では何故かアダトリノで見た弓使いのシルフ達が騒いでいる。五月蝿い。そしてお前達もう付き合ってしまえ。殆どキスしてる様な近さだぞ。

「ゆ、勇那様！私も顔赤くないですか？」

「知らん」

変態が感化されて五月蝿くなるから止めて欲しい。言ってもクリスの方は天然入ってるから無意味だがな。

「それよりも、何故お前達がクロスに居るんだ？ユビキタスと魔界に行かなかったのか？」

「そうですっ！私と勇那様の愛の巣に土足で入り込むなんてっ！」

ゴンッ！

変態をベットに沈め向き直る。２人の顔が引き吊っているが今はどうでも良い。

「え～とな、俺達はあくまでもユビキタスの客人扱いだから直接関係の無い会合には出れないんだよ。

今回の全種族平等法は本当に全種族だからな、俺達が出るなら他の種族も全員呼ばなきゃならねえ。そんなの待ってたらいつまでも会議出来ねえから俺達は出なかった。

てかそろそろ里に戻りてえんだよ」

「お母さんにも会いたいしね♪」

成程、この2人はユビキタスに居ただけでユビキタスの住人ではなかったのか。
「それは分かった。で、何故私の所に来たんだ」
街で私達を見つけて声を掛けて来て態々宿にまで押し掛けるか普通！
「だって絶対死んだと思ってたのに生きてたんだよ？これはもう根ほり葉ほり全部聞き出すしかないでしょ？」
「実際、今後ジル坊達に何か有った時にお前の居場所が分かってると安心出来るからな」
まぁ前科の有る私を監視しておきたいんだろう。私が同じ立場ならそうする。
「そんなコト言って、ジル君に1人でロザリーちゃん守ってみせろとか言ってたくせに～」
「なっ、聞いてたのか！？」
「本当に言ってたんだ」
「嵌められたっ！」
「だってシオン君分かりやすいんだも～ん♪」
だから人の宿でイチャつくなと、言った所で聞かなさそうだが。
「どちらにせよ、2人部屋に4人は多い。話が有るなら場所を移そう」
「そうだね♪」
「……これ以上何か話す事有ったか？」
無いなら帰れ。

変態を宿に放置して近くの喫茶店に入った。この時間は客が少ないから多少騒いでも平気だ。騒ぐのは目の前のバカップルだが……
「そういやお前が生きてるって皆に言わねえとな」
「少年には誰にも悟られない様に隠居しているように言われたがな」
「……もしかして、ジル君に合ったの？」
「ああ。コールズで少女が魔具を納品している雑貨屋でな。ピンクと言う店だ」

リシルは変態が居なくなると聞いて随分悲しそうにしていたな。変態同士惹かれるものが有ったのだろう。
「何でジル坊がそんな事言うんだよ？」
「私が強硬派に担ぎ上げられるのを避ける為だ。正確には、人魔戦争で少女の生活を壊されたくないからだ」
「……ジル君らしいね」
「……おう。ギグの森はまっ先に戦場に成るだろうからな」
御陰で面倒に巻き込まれなくて助かっている。それに今の生活は悪くない。ただ生きる為に敵を倒し、糧を手に入れ、自分の事だけ考えて生きる。
戦闘による適度な刺激と、街中での適度な休息。恐らく私の人生で最も安定した平和な時間だ。
「俺もジル坊くらいハッキリとした考え持たなきゃな」
「なになに？私の事守ってくれるの？」
「……ああ／／／」
だから、何度、イチャつくなと、言えばっ！
「お前達は、もう少し周りを気にしろ。どう見てもバカップルだぞ」
「えっ？そんなにお似合い？」
「待てクリス！勇那の言葉曲解し過ぎだ！」
クリスの方は割と積極的なんだな。だが、
「シオン、女があそこまで表立って好意を示しているのだ。お前も相応しい態度があるだろう」
取り敢えず好きか嫌いかハッキリ言え。
「ぐっ！」
「シオン君、私のコト、好き？」
お、周りの客達も聞き耳を立てているな。当然か。直ぐ近くでこんな話されれば誰でも気になる……このコーヒー美味いな。明日もここに来るとしよう。
「えと、俺は、クリスは……／／／」
男のツンデレはいらん。さっさと自分の気持ちに正直に成ってしま

え。
「私は？」
クリスが期待した目で距離を詰めている。壁際のソファでしかもシオンの背後には壁。速く言わないと押し倒される様な情けない姿を曝す事に成るぞ。
「ああ～、もう！好きだよっ！クリスの事大好きだよっ！これで良いかコンチクショー！」
「まぁ及第点だろうな」
「シオン君っ！」
おぉ、大胆にも抱き着いたな。元々お互いの胸を擦り付ける程に接近していたからあまり変化は無いが。
しかし男性客の嫉妬と女性客の野次馬。どちらも長時間曝されたい視線ではないな。早々に退散しよう。
「用件が済んだのなら私は帰るぞ」
変態が気が付いて暴走してたら不味い。
「あっ、勇那、ありがとっ♪また会おうね♪」
イチャついてなければな。
「もしかしたらジル坊達も魔界に行くかもしれねえからな。そんときゃギルドに依頼出すかもしんねえ」
断る。私はこの街で静かに暮らしたい。
2人を残して店を出る。こうゆう時、小銭の要らない魔力通貨と財布は便利だ。

Ｓｉｄｅ：女Ａ
「行っちゃったね。また会えるかな？」
「会えるだろ。ここに居るって分かってんだ」
「そうだね♪」
村を出てから賑やかだったな～。村が静かなんじゃなくて村の外が賑やか過ぎるんだよね。特に勇那とかジル君の周りとか。
「あ、お母さんに報告しなきゃ」

「あん？何か有ったのか？」
「シオン君の告白」
「なっ！お前っ！」
「私あんなに情熱的な告白されたの初めてなの。優しくしてね？」
「あ、あれ、あれは……うあ／／／」
シオン君、動揺し過ぎだよ。ここまで来てまだこんなに初心な反応されると私が困るよ。
楽しいから全然良いけど♪

女勇者の第2大陸冒険記？――シルフのバカップル（後書き）

男勇者「……作者、やっちまったな」
姫巫女「勇人、責めてやるな。きっと疲れておるのじゃ」
男勇者「そうだよな。魔が差しただけだよな」

作者「疲れてないし魔が差したんでもないんだけど……」

男勇者と女Bの和平会談

Ｓｉｄｅ：男勇者

「……で、何で姫様達とリリー達がここに来るの？」

「此処が1番の中立地帯じゃからな」

「この家なら魔界だろうと人間界だろうと関係無いだろう？」

ユビキタスと魔界との和平歓談。その代表者達は何故かギグの森の真ん中くらいにあるジルくんとロザリーちゃんの家で顔合わせをしていた。

本当にどうしてこうなった？

「何、ジルは何か文句あるわけ？」

「うん、かなり」

「男のくせに細かいわね」

「ジル手先器用だもんね♪」

「……ロザリーちゃんの天然具合も健在ね」

「気にしないで。ロザリー、あっち行ってよう」

「うん♪ベット？お風呂？」

「……ベットで」

……あの2人、大丈夫だよな？子供らしい健全な関係だよな？

「……え～と、和平会談の打ち合わせをしようか？」

「……そうじゃな、気にしたら負けじゃ」

その前にあらゆる面で完全敗北してる気がする……俺って、子供だよなぁ……

「しかしどうするのじゃ？わらわの国にも人間の国と和平を結ぶ事に反対する者は居るぞ」

「だろうね。人間と魔族との確執がそう簡単に埋まるとは父様も思ってないよ」

だよな。数人の大臣はまだ公に直談判してるし。

「じゃが、強硬にでも歩み寄った」

「最近はアダトリノ王が率先して各国の兵の練度を高めてたからね。何処の騎士団もギグの森を抜けるだけの能力を持っているんだよ」
アダトリノ王、死んでも俺達の前に立ち塞がるな。
「戦争を仕掛ける手筈は順調に整っているのじゃな？」
「そう思ってくれて構わない。だが戦争は不味い」
そうだ。もし戦争が起こったら、俺には想像も出来ない被害が出る。
「人魔戦争が勃発すればどうなるか……あまり想像したくないのじゃ」
貧困、孤児、資源の枯渇、民間人への被害。考えてみれば幾らでも出てきてしまう。
「それはユビキタスも一緒さ。ギグの森に面してる我が国は1番割に合わない被害を受けるだろうね」
「じゃからその前に有効協定くらい結んでしまえば良い、と？」
「その通りだよ。利用してるのは百も承知さ。だが、そこまでして協定を結ぶ必要が有る」
「そうじゃな。それに現ユビキタス公ならば無茶な協定条件を出す事は無いじゃろう。どうせ親書はメイドさんが管理するのじゃろう？」
「当然だ。メイドさんの管理ならば誰でも関わろうとしない。もし来ても地獄を見るだけだ」
そう言えば、俺が行った土地の悪徳貴族って大体行方不明になってるんだよな……考えなかった事にしよう！
「でも日取りとかどうするわけ？この家で協定結んだって誰も聞きゃしないでしょ？」
イトハの言う通り、この家は中立地帯に有るからこそ安全だが、この家でどんな話し合いが行われてもその結果を認める人はいない。精々裏で密約を交わしてたと言われるくらいだろう。認められないんだから密約にすら成ってないけどな。
「そもそも魔族は力で物事を解決するのじゃ。魔王の選定基準も力に関係有るしの」

「そうなのかい？魔王の選定基準、そう言えば誰も知らないね」
「あ、私も知らないわね」
「教えてはならんからの。魔王の義務の１つじゃ」
「変な義務だな」
隠さなきゃなんないものなのか？
「わらわも変じゃと思っとるよ。兎に角、魔族の基準は強さじゃ。戦略を練ろうが体を鍛えようが魔法で全てを消し飛ばそうが力は力じゃ。
恐らく勇人、お前との決闘は避けられん」
「……分かった」
人と魔族の争いを止められるなら俺のプライド何て無視する。それで多くの人を救えるならそっちの方が良い。
「じゃ、軽く魔王と勇人の実力差を見てみようか」
え？
「そうじゃな。あまりにも差が有る様ならばメイドさんをユビキタスの代表にしてもらいたいの」
「しかしどうやって見ようかね？ここで直接戦うってのも面白みが無い」
「ふむ、一理あるのう……よし、ジルを使うのはどうじゃ？」
いやいやいやいや！アポ無しで押しかけておいて次は何する気だよっ！？
「何？ジルに模擬戦でもやらせるの？」
「うむ。あ奴と戦闘すれば勇人の能力は分かるじゃろうからな。お互い近距離戦主体じゃしジルは中距離から魔法も使えるしの。決してロザリーとイチャついてるのを邪魔してやろう等とは思っておらんのじゃ」
「思ってるのね」
「思ってるんだな」
リリーちゃん、分かりやす過ぎるよ。
「ええーい！良いからジルを呼ぶのじゃ！モリッシュ！」

……あれ？
「いないわよ？」
「モリッシュ様ならば先程ロザリー様達の後を付けて行きました」
メイドさん、気付いてたなら言ってくれよ。言われても困るけど……
「じゃ、私達も見に行こうか。もしかしたら面白いモノが見れる…
…としても罰ゲームかもしれないね……」
「……普通に呼ぼうかの？」
「そうしましょう。アレは……もう食べたくないわ」
ジルくんお手製の激辛ソースと激甘ソースのコンボは……並みの攻撃よりもよっぽどキツイ……思い出すだけで口の中がカオスに成る……
「……取り敢えず、行くよ」
「……おう」
皆で連だってジルくん達の寝室へ行ってみる。
「……モリッシュ、いないわよ」
「……恐らく、ジルの餌食に成ったんじゃろう」
「ジル様は気配に敏感ですからね」
「皆、普通にノックして、普通に呼ぶよ」
フレイヤが先頭に立ってドアをノックする……ん？
「反応が無いね」
「どうなってんのかしら？」
「中に居ないのではないでしょうか？」
「もしくは寝ておるのかもしれんぞ？」
「……開けるか？」
「「「！！？？」」」
皆して驚愕に目見開かないでくれ、俺だってマズイって事は分かってるんだぜ？
「ゆ、勇人、墓石には、何て刻めば良い？」
「死なねえよっ！いくらジルくんでもそこまでヤバイ事はっ……しない！……筈」

「最後ぼそっと何か付け加えたわよねぇ!?最後の最後で自信無くしたわよね!?」
「だってモリッシュさん居ないじゃんかっ!もしかしたらもしかするだろっ!ジルくんだぞ?ロザリーちゃん以外がどうなろうと全く無関心なジルくんだぞっ?その2人だけの時間を邪魔したら、よく考えたら凄いヤバイんだぞっ!」
普段は珍しくも食べやすく、味だって悪くない料理を作るジルくんだけど本気を出したら料理で人を殺せるほどの劇薬を作り出すんだぞ?自信無くして当然だろっ!
ギィィィ……え?ドア開いた?
「皆五月蝿い」
「うにゅ〜、何かあったの〜?」
不機嫌そうなジルくんと寝起きだろう着崩れた浴衣のロザリーちゃんが出てきた。

男勇者ＶＳ男Ａ（前書き）

またしてもやっちまった回です

生温かい目で読んでくれると幸いです

男勇者ＶＳ男Ａ

Ｓｉｄｅ：男勇者

大剣にしたジュワユーズを構え、ジルくんと向き合う。

眼帯をとったせいで右目の輝く十字架が見えている。青白い氷属性のその目からは、薄ら寒い物を感じる。

「じゃ、準備良いね？」

「いつでも！」

「ああ」

寝室から出てきた２人に事情を話したら思いの外あっさりと模擬戦を受けてくれた。リリーちゃんならイトハちゃんが戦うのは嫌がると思ったらしい。

モリッシュさんは覗いてたからジルくんが仕掛けた罠に嵌って隣の部屋で亀甲縛りにされて宙に浮いていた……正直エロかった……

「ジル～頑張って～♪」

「うん」

「勝ったらお風呂で背中流してあげるね♪」

「……うん」

いやちょっと待て！背中流す？ああ、ロザリーちゃんは服着てるんだよな？そうだよな？

「……え～と、じゃあ、始め」

フレイヤ投げやり！？気持ちは分かるけど！

「よそ見？」

「っ！」

無詠唱の爆進で突っ込んできたかっ！先手を取るには最適だな。

逆手に持った２本のダガーを振ってくる。ただナックルガードの部分を使って殴るように振ってもくるから斬撃だけを防御しようとすると崩される。

多少強引にでも振り払って間合いを開ける！

「っと。相変わらずのパワーファイターだね」
「ジルくんも、相変わらずのスピード重視だ」
「ありがと。雷甲」
ダガーに気を取られてたらミドルキックしてきた。
ギリギリで避けたけど、本当に相変わらずの戦い方。まるで全身凶器みたいな子だ。
「あ、距離開いたわね」
「最近の勇人は中距離くらいなら攻撃出来る様に成ってるよ」
「ほう。氷の館の時は近距離のみだったかの？」
「其の通りでございます」
言いたい放題言ってくれるぜ！
「風牙」
「くっそ！俺だってこの距離ならっ！」
ジュワユーズを細く、長く伸ばしジルくんに振るう。
ジュワユーズは形状が自由だから離れた相手にも伸ばしたりして攻撃できる。
ジルくんの魔法を切り裂き、刃がジルくんの脇腹に向かう。これならっ！
シャオンッ！
俺の刃をダガーの柄に合わせて上に軌道をずらした。何回か見たことの有る技だ。
「その技、やられるとこんなに厄介だとは思わなかったよ」
「お互い様だよ。勇人さんの弱点だと思ってた中、遠距離が使えない」
「君も遠距離は苦手だからなっ！」
ジュワユーズを大剣に戻して切り掛る。
俺が1回攻撃すると4回攻撃される。これ理不尽だろっ！幾らなんでも速さが違い過ぎるっ！
「遅いよ。雷槍」
盾にした体験の腹を思いっきり蹴り抜かれて後ろに滑る。

「何よあれ、蹴りでも出せるようになったの？」
「うん♪元々出来たんだけど使いドコが無かったんだって」
「ジルの言いそうな事じゃな」
これ以上打ち込まれたらジュワユーズが持ってられなくなる……どうする……
「悩んでる暇なんて与えない」
また距離を詰めてきた。ジュワユーズを普通のロングソードにして迎撃する。さっきよりは早く振るえるけど打ち返せない。弾く力が弱いせいでジルくんが直ぐに次の攻撃に移ってしまう。
それでも大剣によりは長く保つ。これでチャンスを待つしかない！
「長期戦に持ち込むつもり？もう少し分かり辛くしないと駄目だと思うよ。氷」
ダガーに気を取られていたら左足を氷で固められた。ジルくんの魔力は低いしダガーを振るいながら使った魔法だからそこまで固くはない。力を入れて足を動かせば壊せる程度の強度だ。
でも、その時に生まれる隙をジルくんが見逃すとは思えない。そもそもこうして悩んでる事が既にジルくんの作戦な気がする。
「壊さないの？そのままじゃ押し切れるよ」
ダガーが速くなる。
氷を砕こうにもそんな事してたら確実にやられる。このまま片足が動かなければその内やられる。
八方塞がりじゃないかっ！
「足りない。まだ、全然足りない！勇人さんに足りないもの、それは！」
鳩尾に迫るダガーのナックルを防いだら下からジュワユーズを蹴り上げられ、正面ががら空きに成ってしまった。
「情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！そして何よりもっ！――――速さが足りないっ！！」
どこぞのニャンチュウの最速名言と共にラッシュをくらった……速過ぎて何言ってるかいまいち分かんねえよ……

「……やり過ぎた……」
「勝者、ボウヤ！」
「……相性悪過ぎたの」
「ジルが速過ぎんのよ。アイツ遠距離だったら魔法撃たれる前に近づけば良いとか思ってるわよ」
「ジル～お疲れ様～♪」
「うん」
「お風呂行こ～」
「……うん」
「あら～、ロザリーちゃんに連れていかれちゃったわよ？」
「もう放置じゃ。アレ等に一々突っ込んでいては身が持たん」
「同感でございます。では魔王様、勇人様の評価を」
「うむ……結局、わらわと戦えるかちゃんと見れんかったの」
「ボウヤが参考に成る様な戦い方するとは思ってなかったけど、まさかここまで酷いとは」
「まぁ、あの防御力だけは評価出来るのじゃ。それにわらわも勇人の本気の攻撃を受けたらかなり追い込まれそうじゃの」
「では？」
「うむ、取り敢えず合格じゃ」
「決まったなら中に入らない？こんな所で突っ立ったままって、何か間抜けじゃない？」
……誰も俺を助けてはくれないのかよっ！てかジルくんとロザリーちゃんはマジで一緒に風呂入ったのか！？誰か止めろよっ！！
……立てるくらいに回復するの、待とう……

男勇者ＶＳ男Ａ（後書き）

姫巫女「……ボウヤ、何もしてないと思うかい？」
女Ｂ「わっかんないわね。てかロザリーちゃんの方が積極的で危ないと思うわ」
姫巫女「そうだった……覗いてみるかい？」
女Ｂ「ダメよっ！そんなに死に急ぐなんて、それが１国の公女のするコト！？」
姫巫女「いや、何か気になるんだよ。てか見たいんだよ」
女Ｂ「個人的な欲望じゃない！絶対ダメよっ！」
姫巫女「……ケチ」

作者「子供同士だからセーフ！子供同士だからセーフ！……姫御子は野次馬？」

女勇者への依頼

Ｓｉｄｅ：女勇者

だから私はもう勇者ではないと何度……また妙な電波を受信してしまったな。

クロスのギルドでそれなりに依頼をこなしていると受付嬢から呼び止められた。

「ユウナさん。ご指名の依頼が来ていますよ」

「私に指名？」

「はい。内容はギグの森までの護衛ですね。ギグの森に着いたら、追加されるかもしれないとの事です」

「依頼人は？」

「カラーズの自警団です。ギグの森に入るまでの護衛が欲しいようですね。森に入ってからの護衛は一応他にも居るようです」

「……何日くらいだと思う？」

「ギグの森に行くだけでしたら１週間程だと思います。その後の依頼はどれ程掛かるか読めませんね」

さて、倍で済むのかどうか……

「報酬はこちらに成っております」

……凄いな。私にもエルにも同じだけの金額が出される。それに１週間毎日依頼をこなしてもこれだけの金額には１歩及ばない。

つまりそれだけ怪しい依頼だとも考えられる。受けるべきか、受けないべきか……

「自警団からの依頼ですからそれ程危険ではないと思います。彼等は死者を出さないために安全マージンを高く取りますから」

……ギルドとしてもご指名の依頼は無下にして欲しくない、か。

「良いだろう。ただし、道中の食料などは向こうに負担させてくれ」

これを飲むなら相当だ。

「元々そのつもりの様です。用意する物に食料が書いてありません

ね」
……一気にきな臭さが増したが、仕方が無い。腹を括ろう。
「おかしな依頼ですね、勇那様」
「ああ、だが受けてしまった以上達成するしかないだろう。準備はしておけ」
「はいっ♪」

依頼当日、早朝、
「勇那、ひっさしぶり～♪」
「……」
私はこの依頼を受けた事を後悔した。
何故シルフのバカップルが居るんだ？
「私達ユビキタスと魔界の和平交渉を見届ける役に成ったんだ♪私達って言うかカラーズの王様がなんだけどね」
聞いてもいないのに良くもまぁペラペラと喋る奴だ。御蔭で何も聞かなくて済んだが。
「今回は護衛を引き受けてくれて感謝する。俺が色彩国家カラーズの王、色彩王だ」
金髪黒目で犬耳……男の犬耳とはまた面妖な。
しかしこの世界の王や長は皆名前が無いな。この世界の習慣だろうか？
「色彩王、参りましょう」
青龍刀を腰に差した体中に傷の有る男が色彩王に出発を促している。
確かにここでグダグダ話しても何にも成らないな。
「ギルドの御２人は馬車の右側をお願いします」
「了解した」
「分かりました」
「では、ギグの森へ向け出発！」
兵士に担当の指示を貰い仕事を始める。旅の供は全部で１０人か…
…多いな。

と言っても索敵はクロが出来るのであまり気にする必要は無い。思ったよりも楽な仕事に成ると良いのだがな……

クロスを出て3日、ここまでは特にトラブルも無く進んでいる。が、その晩にクリスに呼び出された。

「何だ。明日の事も考えると速く休むべきだぞ」

「そうなんだけどね、皆に聞いてもらいたい事があったんだよ」

シオンは知らない様だ。戸惑っている。私は興味が無い。変態も同様だ。

「帰ったらお母さんと村長さんにも言うつもりなんだけどね……私は多分勇那と同じ世界から来んだ」

「……ジル坊と同じって事か？」

「ちょっと待ってくれ。何の話だ？」

私と同じ世界と言う事はあの不愉快な金髪を知っていると言う事か？

「勇那とエルーダは知らないだろうけど、私とジル君とイトハちゃんは勇者召喚の儀式に巻き込まれてこの世界に来んだ」

「勇那様に、巻き込まれて……」

変態は何か思う所が有るらしいな。無ければ可笑しい。間接的か直接的かは分からないがクリス達を巻き込んだのは変態も同罪なのだからな。根本的な原因はあの不愉快金髪だが。

「つまり私と勇人が召喚されなければクリス達はこの世界に居なかったんだな？」

「うん。でも恨んでるわけじゃないよ？向こうでは事故で死んで成仏みたいな事をするだけのはずだったしね」

そこを巻き込まれたと言う訳か。難儀だな。

「ただ知っておいて欲しかったんだ。私達巻き込まれた組は向こうの世界の事、殆ど覚えてないんだ。覚えてても再現してるのはジル君だけだしね」

「ああ、あの浴衣か」

「あの特殊な服の事ですか？」

「うん。きっと昔の勇者も再現できたのはハンバーグとかアイスくらいだったんだと思う。あと持ち込んだスーツとかね」
この世界の正装で偶にスーツの様な物が有ったが、あれは2代目勇者が持っていたとメイドさんの過去を調べた時に知った。
「だから、もし覚えてる技術とか文化があるなら出来る限り再現してみて欲しいの。私達が、この世界に居た証になるから」
……自分が居た証、か。
私の証はアダトリノを崩壊させた裏切りの勇者だろうな。
「私は、勇那様の育った世界の文化に興味が有ります！教えて、頂けませんか？」
変態が懇願する様に尋ねてくる。
そう言われても精々剣術くらいしか人に示せる物が無いんだが……
「直ぐに考えてくれなくても大丈夫だよ。私の体は、本当にシルフの体だから人間よりはちょっと長生きだしね」
そうだったな……シオンが考え込む様な表情だな。
「シオン、どうした？」
「……クリスは、俺達が信用出来なかったのか？」
「ううん、怖かったの。自分が、シオン君達と違うかもしれないって事が。だけどロザリーちゃんの種族を気にしないで、お互いに秘密を抱えてても一緒にいる事を選んだジル君達を見てたら、ね？分かってたけど、私の悩みってバカバカしいなぁ～って思っちゃったの」
大概の悩みとはそう言う物だ。悩みの価値は本人にしか判断出来ない。他者の悩みは大抵は自分には関係無い物ばかりだ。
クリスの悩みは、本人の言う通り周りから見たら馬鹿馬鹿しく写るだろう。恐らく少年と少女の悩みも馬鹿馬鹿しいと言う輩は居る。
だから悩みとは内に抱える物なのかもしれないな。私の抱えている物は悩みではなく柵（しがらみ）だが。
「……悩みとは、結局の所主観でしかないだろう。ならば、他者の目など気にするな。悩みが有るならば悩み、無いならば悩む者に手

を差し伸べればいい。私の主観では、クリスはそう見える」
「……そうだな。そんな秘密抱えられてたのはショックだけどよ、話してくれたならそれで良いぜ。ジル坊達にも教えてやんねえとな」
「良かったですね♪」
「……少年達に会うのか？」
「おう。ギグの森を目指すって言ってるけど、正確にはギグの森のジル坊達の家目指してんだ」
……私は聞いてないぞ？
「依頼書には何も書かれていなかったんだが？」
「書かなかったな。その方が面白そうだって話だったしな」
「……もしかしなくても、ユビキタスの者達も？」
「今回の和平歓談はユビキタスと魔界の間で開かれるんだぜ？勇人達が居なくてどうすんだよ？」
「……和平階段の場所は？」
「魔王城だな。ジル坊達の家で1拍する予定だ」
「勇那様とお泊り勇那様とお泊り勇那様とお泊りっ！！！」
……変態が超変態にランクアップしたか？と言うか鼻血を拭け。服に付くぞ。
仕方が無い。諦めて護衛の仕事を果たそう。

男Aはまた押し掛けられる

Ｓｉｄｅ：男Ａ

「……またか」

「まただね～♪」

色彩国家カラーズとユビキタス公国から手紙が来ていた。

内容はまぁ、『魔界に行くから護衛宜しく。ついでに会談にも参加してね？』程度のものだった。

しかもカラーズの使者にはシオンとクリスも居るらしい。ついでに俺が傷だらけにした近衛兵長も。

さて、もしまた戦い申し込まれたら＜契約の死印＞の能力を確認しなくちゃな。この前の勇人との模擬戦で多少は予想ついたし。リリーの言ってた魔具を生み出せるってのも試したいし。

「姫様達の方が1日速いみたいだね～」

「しかもこっちの都合お構い無しに来るみたいだね」

「姫様らしいね～♪」

そこ嬉しそうに言う所じゃない……まぁ、金入るし何でも良いや。

ユビキタス組が到着した翌日。

昨日の内にカラーズ組にはシオン達が居ると話したら勇人が嬉しそうだ。姫様もそこそこ嬉しそうだ。

「今日は泊まりだっけ？」

勇人が確認するように聞いてきた。

「そうみたい。魔界に入ってからの事考えると妥当だと思う」

魔界に入った事の有る人が少な過ぎる。安全考えると朝一で出発するのが良い。

リリー達は気軽に来てるからそんなに気にしなくても大丈夫なんだろうけど。

「今回は色彩王直々に和平階段の見届け人に成ってくれるって言う

んだから驚きだね。てか国は良いのかね？」
「色彩王の妹さんが優秀みたいだよ。カリスマは無いみたいだったけど秘書とか代理とかの仕事なら凄い優秀なんだと思う」
決闘の準備とかダンスを急遽外でやったりとかの指示をかなり的確に出してた。あれでカリスマが有ったら兄を抜いて王に成ってそうだったな。
「ほう、優秀な代理が居るとは、第２大陸最大の国は伊達じゃないね」
「皆様、カラーズの方々が御見えに成りました」
さ～て、予定では全部で１３人もこの家に泊まるからかなり掃除して間取りも少し変えた。今、この家はちょっとした民宿状態だ。
ベットと布団用意するの面倒だったな～。
玄関に向かうと確かに離れた所に馬車が見えた。
馬車の右を黒いポニーテールと長い赤髪の人が、左を緑のポニーテールと緑の短髪バンダナの人が守ってる。
前には鎧の兵士、後方も兵士が守ってるんだろう。
多分左の緑２人がシオンとクリスだと思う。右はギルドの人だろうな。
段々近づいてくるにつれて、＜グラップラー＞で強化されてる目が黒髪の人相を捉え始めた。
「……メイドさん、右側の黒髪の人、誰だか分かりますか？」
俺達は生きてるの知ってたから良いけどユビキタス組は知らなかったはずだ。
「……何の事でしょうか？」
「あ、見えたんですね」
「……」
あ、そっぽ向きやがった。まぁ死んだと思ってた他国の勇者が生きてれば目を背けたくも成るか。
あ、クリスが手を振ってる。流石弓使い、目良いな～。
そうしてカラーズ御一行が家の前に到着。

「生きてたのかよっ！！」
「死んだと言った覚えは無い」
「ロザリーちゃん久しぶり～♪」
「クリ姉久しぶり～♪」
「貴様っ、以前は遅れをとったが今度は負けん！いざ尋常に、勝負っ！！」
「ジル坊、元気にしてたか？」
「そこそこ」
「無視するな！む、その眼帯は何だ？」
「久しぶりだな、ユビキタス公女フレイヤ・ユビキタス」
「此方こそ久しぶりだな、色彩王」
「わぁ～、改めて伝説通りのメイドさんです」
「……」
勇人は勇那が生きてる事に驚愕。
ロザリーとクリスは『キャーッ♪』って感じで抱き合った。
再開早々に決闘挑んできた近衛兵長は無視してシオンと話す。
姫様と色彩王は国のお偉いさんって事もあって元から知り合いみたいだ。
エルーダだったかな？はメイドさんに伝説がどうとか言ってる。何故メイドさんは無表情でそっぽを向く？
「まぁ、立ち話もなんだし中に入ってよ。一応準備はしておいたからこの人数でも平気なはず」
そろそろお湯が沸くからお茶を淹れよう。リシルが北国の茶っぱをくれたのでそれにしよう。
「ただの民家にしては大きな家だ。此処に2人で暮らしているんだったな」
「使うのは一部の部屋だけだけどね。元はお屋敷だったんだけどもっと良いお屋敷が建ったから皆そっちに移ったんだって。ロザリーが生まれる前の話だけど」
色彩王の質問に答える。ちなみに口調は普通にしろと言われた。こ

の世界の権力者は硬いのは嫌いなのか？それとも俺の周りがおかしいのか？
リビングに通してから茶を出す。意外と好評だった。兵士達には恐縮された。近衛兵長をボコッたのが効いてるらしい。
「ふむ……やはり俺の城に勤めないか？」
「嫌だ」
「ジルはここにいるんだもん！」
ロザリー、抱きしめながら庇わなくても俺ここに居るよ？
「残念だ。まぁ、何か有れば依頼を出そう」
その程度なら良いか。カラーズなら観光に事欠かないし、ロザリーとの旅行だ。
「だから何で生きてるのに言わなかったんだよっ！」
「態々ユビキタス城まで会いに行くなど面倒だ」
「じゃ手紙とか有ったろっ！」
「五月蠅い。何故貴様にそんな事一々言わなければならないんだ」
うおっ、勇那からとんでもない殺気が。背中寒いし皆顔が青い。そしてロザリー温かい……抱き締められっぱなしなんだよな。
「勇那様ぁ、殺気は抑えてくださいぃ…」
エルーダの必死の懇願。
勇那は舌打ちをして殺気を抑えた。
皆ホッとした（俺とメイドさん抜く）。
「じゃあそろそろ晩飯作り始める。風呂行きたい人はどうぞ」
「ふむ、では女同士裸の付き合いと行こうか」
「私は料理を手伝いますので、後に」
「勇那様の裸勇那様の裸勇那様の裸勇那様の裸っ！」
「シオン君、覗かないでね？」
「ジル～、覗いても良いよ？」
「覗かねえよっ！」
「時間が有ったらね」
「む、その年でふしだらだぞ」

クリスとロザリーの冗談にマジ反応なシオンと色彩王。2人共落ち着け。
「あ、晩ご飯の後アダトリノ王と戦った人に話があるから後で聞いてね？」
クリスの話？ああ、自分が異世界人だって話す気に成ったのか？
女性人は風呂に行ったか。
「……覗くのか？」
「色彩王、メイドさんはこっちに残ってるんだけど？」
「と言うかジルくん、君この前ロザリーちゃんと一緒に風呂入ってたよな？」
ここで復活するなよ勇人！
「……ジル坊、詳しく話せ」
肩に指が食い込んで痛いです（泣）。
こうして晩飯作りながら馬鹿話は続いた。
ちなみにクリスの話は予想通り自分が異世界人だと言うものだった。
姫様がまた思いつめたので励ますために激辛ソースを出したら逃げられた……ちっ…

男Aはまた押し掛けられる（後書き）

完結が近づいて参りました！
どんな結末に成るかは、まぁ分かり易い展開に成る予定です

女Bは魔界流和平階段を垣間見る

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

今日、ユビキタスの姫様達と見届け人の色彩国家カラーズの王様が連だって魔王城に来る。

護衛兼会談参加者としてロザリーちゃんとジルも来るみたい。と言うかロザリーちゃん奪還に参加したメンバーは殆どいるみたいね。唯一、生死不明のアダトリノの勇者、勇那がいないくらいなんでしょうね。

「魔王様、ユビキタスの使者とカラーズの王が御見えに成りました」

テッタが報告してくれた。

「来たか。会談は明日じゃ、今日は明日の為に英気を養って貰おうかの」

「……和平、結べると良いわね」

「誰が何と言おうと結ぶつもりじゃ。文句が有るならばわらわを倒せ。この前皆にそう言ってやったのじゃ」

スゴイコト言ったわね。

「どうなったのよ？」

「『ヨッシャー！リリー様と戦える機会が出来たぞっ！』と言われたのじゃ……」

「魔族って、結構バトルマニアよね」

「言うな」

リリーも苦労してるわね。

「では、顔見せといこうかの」

皆に会うのも久しぶりね♪

「何で勇那がここにいるのよっ！てか何で生きてるのよっ！ずっと死んだと思ってたのに、生きてるなら生きてるって言いなさいよっ！！」

まさかのカラーズ護衛についてきてた勇那に文句を言いながら応接室に入る。
「イトハ、勇人さんと台詞被ってる」
「リリー♪」
「ロザリー♪ジルに何もされんかったか？」
「ううん、されてないよ。でもこの前から一緒にお風呂入るようになったんだ～♪」
「……何、じゃとっ…」
今、勇那が生きてるコトよりも問いただすべき話が聞こえたわ…
「勇那、アンタが生きてるコトはこの際どうでも良いわ……でも、でもね…」
「ああ、手伝おう。少年は男としてやってはならない事をした」
「ジル坊逃げろっ！あっちからとんでもねえ殺気がお前にっ……」
「ダメだよシオン君、これからジル君には男の子としての常識を教えてあげなくちゃいけないんだから」
「ジルくん、いくら幼くても男の子が女の子と一緒にお風呂だなんて、私も普段から勇那様と一緒に入りたいのに羨ま……許せませんっ！」
シオンはジルを逃がそうとしたけどクリスに物理的に止められた。
エルーダとか言う勇那を召喚した巫女は……まぁ、相変わらずの変態具合ね。
「勇人さん助けてっ！」
「無理だっ！あのメンツだぞっ！？どう考えても逃げ切れないだろっ！それ以前に君がロザリーちゃんと一緒に風呂に入らなければ良いだけだろうっ！？」
「好きな女の子が一緒に入ろうって言ってきた上に断ろうとすると涙目に成るんだよっ！？断れる訳ないっ！てかロザリーに俺と風呂入ればとか吹き込んだのは姫様だっ！」
「フ～レ～イ～ヤ～ッ！！」
「いや、まさか実行するとは思ってなかったんだよ！想像するだけ

で顔真っ赤にしてるもんだからきっと子供らしいお付き合いをするんだろうって思ってたんだよ？」
そう言えばロザリーちゃんに広いお風呂なら一緒に入ればとか言ったコトあったわね～
「フレイヤ、お主にはロザリーを風呂でのぼせさせた罪も有ったのう？」
「うっ！」
「フレイヤ様、大人しく罪を償いましょう。専属メイドとして見届けさせて頂きます」
「主人の間違いを正す為には心を鬼にする。良いメイドだな」
「わ、私だって勇那様の為ならば心を鬼にしますよっ？」
「……何この状況？」
「原因はジル君だよ？自覚しなきゃ」
「ジルは悪くないもんっ！」
「ありがと、ロザリー♪」
「えへへ～♪」
あっ！またロザリーちゃん、ジルに抱きついてるっ！あの2人目を離すとすぐイチャイチャするわね……
「何だろうな……何て言うか、子供に思いっきり負けてる気がする……」
勇人、それを認めたらアウトよ。
「む～……兎に角、明日の会談の打ち合わせをする。フレイヤ、色彩王はわらわと会議室に行くのじゃ。付いてまいれ」
「魔界とユビキタスの和平だ。楽しみにしている」
「こっちはそんな余裕無いよ。出来る限りの事をやるだけさ」
……行ったわね……
「イトハちゃん、どうしたの？」
「あ、クリス……リリー、どうするのか気になっちゃって……」
「心配なんだ？」
「当たり前よ。私がこの世界に来てから、ずっと助けてくれたんだ

から」
「でも、イトハちゃんだってリリーちゃんを助けてきたんでしょ？」
「え？」
私がリリーを助けた？そんなコト、あったかしら？
「私もね、誰かの助けになってるか不安だったんだ。流れ者の私は、シオン君達の負担にしかなってないんじゃないかって……本当はこの世界の人じゃないのにって」
は？クリスがこの世界の人じゃない？
「でもね、素性のハッキリしない人と一緒にいるって事は、それだけの意味があるんだよ？」
私と一緒にいる意味？
「私は2人の出会いを知らないから分からないけど、きっとリリーちゃんなりにイトハちゃんと一緒にいるって決めたキッカケがあったんだよ。じゃなきゃ魔王様なのに余所者を側には置いておけないよ？」
私と、リリーが一緒にいるコトになったキッカケ……
「とか言いながら私もジル君がロザリーちゃんに話すまで言えなかったんだけどね？聞いてからも悩んじゃったし」
それが普通よ。
「アイツはきっとどうでもいいから話さなかったんだわ。ロザリーちゃんの心配を和らげるために話しただけで、何も無かったらきっと自分が異世界人だってコトすら気にしなかったと思うわ」
「そうだね、ジル君はそういう子だと思う。でも、だからロザリーちゃんは救われたんだと思うよ？ジル君がロザリーちゃんの種族を気にしなかったから一緒にいられるんだよ」
そう、ね。神祖だからって、世界中から嫌われてる種族だからって気にするヤツには、ロザリーちゃんは救えなかったと思うわ。
はぁ～あ、結局ロザリーちゃんとジルはお似合いなのね……
「あ、リリーちゃん。明日の会談はどうするの？」
あ、終わったのね。意外と短かったわね。

「うむ。大方の予想通り、決闘でわらわと対等な力を示す事が最重要課題と成った」
「……それって、もしかして……」
「うむ。選抜者でのサバイバルチーム戦となったのじゃ！」
……チーム戦って、魔族はどんだけ戦うの好きなのよっ！
「人数は私達に合わせる事に成ったよ。と言う訳で、ボウヤと少女、クリスにシオン、勇那とエルーダも手伝っておくれ」
「断る」
勇那？
「私は魔王側に付こう」
「私は勇那様の御側を離れる気は有りません！」
「ふむ、わらわは構わんぞ」
ええっ！良いの！？
「……とすると私達ユビキタスは7人だね」
「あれ、俺とロザリーは固定なの？」
「姫様だもんね～。リリーとケンカするのも久しぶりだな～♪あれ試してもいいかな？」
「良いんじゃない。俺も色々試したいし」
「シオン君、頑張ろうねっ♪」
「まさか魔王と戦う事に成るなんてな」
「チームは決まったようじゃな。では、明日の為に今日は休むのじゃぞ」
……マジ？

女Bは魔界流和平階段を垣間見る（後書き）

主神「等々大詰めか」
女神「何をメランコリックに成って居るのですか？」
主神「いやな、そこそこ暇つぶしに成ったなぁ～って思ったんだがな」
ダル「出番が無いって思ったんだお？」
主神「そうなんだよっ！この小説のタイトル覚えてるかっ？神様の暇つぶしだぞ？なのに神たる俺達が一番出番無いってどう言う事だよっ！」
女神「五月蝿いですよ騒音お父様。御自分の趣味で彼等の運命を捻じ曲げたのですからそれくらい我慢してください駄々っ子」
ダル「まぁ、最後に無理矢理入り込めば良いんじゃね？」
主神「……身も蓋もねえな」
女神「そうですね」

作者「無理矢理は勘弁してください」

それぞれの決戦前夜

Ｓｉｄｅ：女勇者

魔王と元勇者が勇者達と戦う、か。最高の喜劇に成るかもしれんな。

「勇那様、よろしかったのですか？」

「少年の事か？」

「はい」

「確かに以前私は少年に今後手出ししないと約束した。だから私は少年とは戦わない」

「では、どうするのです？」

「私の狙いは勇人だ。彼との決着を着ける」

ユビキタスでは引き分けに成ってしまった。だが今なら違った結果に成る筈だ。

「……この会談が終わったら、どうするのです？」

「まだ考えていないな。だが、魔界には刀が思いの外普及している。明日の様子次第では、魔王に交渉して魔界に居着くかもしれないな」

クリスに頼まれた、私達の存在した証……少年は浴衣を残した。クロスではよく見たものだ。

「……お供します。どこまでも、どこまでも」

物好きな奴だな。でなければこんな所に居ないで姫と共に民を守ったのだろう。

「好きにしろ」

「はいっ！」

嬉しそうにして、現金な奴だな……

「今日は疲れた。風呂にしよう」

「そうですねっ！では早速…」

「一緒に来るか？」

「え？……はい、はいっ！行きます行きます逝きますっ！お供させて頂きますっ！！」

……早まったかもしれん。

Ｓｉｄｅ：男勇者

「明日、今までやってきた事の結果が出るんだな」

「そうだね。でも、まだ通過点さ」

そうだ。まだ、ユビキタスと魔界だけだ。それでも、明日が大事なのは変わらない！

「魔王は、リリーは恐らくボウヤと少女、メイドさんの３人掛かりでやっとまともに戦えるかもしれないレベルだ」

「ああ。ジルくんに負けちまった俺じゃ、逆立ちしたって勝てない……」

「だが、最後まで残っているとは思えない」

きっとリリーちゃんには皆が最初から全力でぶつかる事に成る。そうなったら……

「最後は、心の勝負だ。あの時の決着は、ここで付けるんだよ」

「ああ」

俺は、まだ全てを守れる程強く成ってない。それでも、俺は……

「御２人共、明日は決戦なのですからそろそろお休みに成られた方が宜しいかと」

「そうだね。今日はもう休もう」

「そうだな。疲れが取れてなくて負けましたじゃ笑えない」

「と言う訳で、メイドさん、勇人を抑えるんだっ！」

「心得ております」

「へ？」

メイドさんに羽交い締めにされた。体の使い方が上手いみたいで抵抗出来ないっ!?

「さて、勇人。一緒に、休もうか」

「ちょっ、待て！落ち着けっ！明日は決戦だぞっ！さっきまでの微シリアスな空気はどこ行ったーーーっ！」

決戦前夜、俺は違う決戦を強いられた……うっ！

Ｓｉｄｅ：女Ａ

「何か凄い事に成っちまったな」

「そうかな？」

皆、不安だけじゃなさそうだったけど？

「おいおい、相手は魔王だぜ？」

「それでも、明日は皆笑っていられると思うんだ」

「……分かった、明日全員が笑っていられる様に全力でやってやるよ」

「さっすがシオン君♪」

明日、私達が勝ったら世界は１歩だけ優しい方向に進む。大きい１歩になるか小さい１歩になるかは、まだ分からない。

「進む事に意義が有る。進まなければ、俺達が欲しいものは手に入らない。分かっちゃいるけど、やっぱ緊張するぜ？」

「大丈夫♪私達なら、全部上手くいくよっ♪」

ロザリーちゃんもジル君も隠し球があるみたいだったし、フレイヤ姫達は本気だもん。これで叶えられない願いなんて本当に無理な事だけだよ。

「私達の願いは、無茶な事なんかじゃないよ？」

「……そうだな。俺達は、ただ当たり前の事を望んでるだけだ」

ただ皆で楽しく暮らせる世界が欲しい。ロザリーちゃんは差別されない、魔族と人間がケンカしない、誰もが好きな人に好きだって言える世界が欲しい。

「そうだよっ♪」

だからきっと、私達はこれからも笑える。

「じゃ、明日皆で笑うために今日はは私達が笑お～♪」

シオン君に抱きついてベットに押し倒しちゃった♪

「なっ！クリス！？」

あ～、ロザリーちゃんがジル君を抱き枕にして寝るの分かるなぁ～。
これ温かくて気持ち良い～
「いや、クリス、あのなっ？」
シオン君、もう少し静かにして？今、スッゴク気持ち良く眠れそう
……zzz……

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
はぁ～、結局戦うコトになっちゃったわね……
「明日、どうするのよ？」
ベットに並んで座っているリリーに聞いてみた。
「明日のわらわはただのオマケじゃよ。問題は人間達が人間達同士で片付けるじゃろ」
「どうゆう事？」
「わらわには恐らく相打ち覚悟で何人かが特攻してくる筈じゃ。そう成ったら流石に防ぎきれんかもしれん」
確かに、ジルなら最適でしょうね。明日のサバイバルはステージから出たら負けになるって聞いたし。
「わらわとしてはユビキタス公の提案を飲んでも良かったのじゃが、他の者がせめてわらわと同等の力を示して欲しいと言っておってな。本音はそれで明日露天で稼ぐ気の様じゃ」
「……商売根性？」
「お祭り根性も有るのじゃ」
何て厄介な……でも意外と人間を嫌ってないのね。
「ユビキタスはロザリーを助けたからの。ロザリーの魔具は魔界でもそれなりに普及しておって、進学祝いにロザリー手製のブレスレットを買う家も多いのじゃ」
そんな所でも活躍してるの！？
「それを守る為に戦ったユビキタスの評判は割と良いぞ？」
「そう言えばシフルネがそんなコト言ってたわ」

久々に話題になったわね、リリーの御付き兼秘書。親子仲はどうなったのかしら？王決めの義の後母親と一緒に父親を精神的にボコボコにしてたけど……

「何にしても、明日のわらわはただの部外者じゃろうな」

ここにいるのに、遠くを見ている……

「……良いじゃない、私はアンタの頑張りを知ってるわ」

頭を抱き寄せて撫でてあげた。

「……そうじゃの／／／」

全く、何照れてんのよ。

「明日は皆に魔王の威厳を見せつけてやんなさい。特攻してきたヤツは叩きのめしちゃえばいいのよ」

「うむ」

「勝とうが負けようがアンタが王よ。アンタが望むコトをしなさい」

「うむ」

「じゃ、今日はもう寝ましょう」

「うむ！」

今日だけは、私が抱き締めてあげた。

Ｓｉｄｅ：男Ａ

「明日、上手くいくといいね」

「そうだね」

「上手くいったら、リリーもコールズに来れるようになるよね？」

「うん」

多分コールズ所かユビキタス首都に行く事にも成るだろうけど。

「明日はジルの魔法使うよ♪」

「うん」

何か俺の魔法が使いたいって言うからロザリー用に考えてみた。実践で使うのは初めてだな。

「俺もこの目と魔具を試してみるよ」

「アタシが作った魔具の方がいいって言わせてあげるね♪」
「うん」
あの魔具はロザリーの物よりも高性能だった。御蔭でロザリーが悔しがってもっと良い魔具を作るために鋭意努力中。う～ん、嫉妬でいいのか？これは。
「明日はどうやったら勝てるかな～」
「問題はリリーだね。その次に勇那かな」
「むぅ～、どうしよう？」
「場外で失格なら、無理矢理追い出すしかないよ。普通に倒すのは無理だと思う」
「リリーの魔法はホントに反則だからね～」
前にイトハと戦った時に分かってたけど、リリーの魔力はおかしい。普通数人がかりで展開する結界魔法を1人で無詠唱で展開、維持出来るなんて勇人や勇那の数倍の魔力だと思う。
「ま、手は有るんだから試すだけだよ。リリーを倒したら、後は勇人さん達に任せるし」
「そうだね～。じゃあ、明日のためにもう寝よっか♪」
「うん」
相変わらず、2つベットが有っても片方は使われないなぁ……
…寝る前にディープキスなんてされたら寝れないんだけど……

それぞれの決戦前夜（後書き）

主神「お、久々に俺様が本編に、」
女神「出ませんよ」
主神「……マジ？」
ダル「神様のモブ具合乙！」
主神「五月蝿ぇぇぇぇーーーっ！」

作者「神様達って、オチ担当にしたかったんだよな～」

勇者ＶＳ魔王――決闘は乱戦（前書き）

久々に魔王城の女Ｂハーレムが登場します
そして一気に４話程出しています
……勢いで書きすぎました

勇者ＶＳ魔王――決闘は乱戦

Ｓｉｄｅ：姫巫女

等々、この日がやって来た。私が勇人を召喚してから１年、勇人は強く成った。ボウヤに負けてからは魔法の授業も無しでひたすらに剣を鍛えた。魔力による肉体強化も使えば私ではもうどうしようも無いだろうね。

「そちらフレイヤ、勇人、メイドさん、ロザリー、ジル、クリス、シオンの７名じゃな」

「ああ」

「此方はわらわ、イトハ、テッタ、シフルネ、ヘレシア、勇那、エルーダじゃ」

テッタは勇那と同じ刀使いだね。シフルネはレイピア。ヘレシアは無手……凄い胸だね……

『選手の確認も終わった所で今回のルール説明だーっ！今回はこの７人同士のチームでサバイバル戦をやってもらう！ルールは簡単っ、相手を行動不能にするか場外させればそいつは戦線に復帰出来なくなるっ！そうして最後にフィールドに残ってたチームが勝ちだーーっ！

魔王様に挑む大バカ野郎共はユビキタスの勇者と姫とそのメイド！』

『『『『ブウウゥゥゥゥーーーーッ！』』』』

『そしてギグの森の黒き妖精、我らが魔王様の親友にして最高の魔具職人っ、ロザリーちゃんとそのオマケッ！ロザリーちゃんと一緒に暮らしてるなんて羨まし過ぎるぞこの糞ガキーーーーッ！！』

「魔界では黒き妖精って呼ばれてるんだ？」

「ジルはオマケじゃないもんっ！」

微笑ましいね。

『後方支援にシルフの碧き狩人、クリス嬢と時期村長候補のシオン！挑戦者チームはリア充ばっかりだな爆発しちまえっ！！』

『『『『リア充爆発しろーーっ！』』』』

凄い言われ様だね……

『迎え撃つは我らが魔王様率いる百合百合戦隊マカインジャー！』

センス無いねっ！？

『完全無欠の魔王リリー様を筆頭にっ、リリー様の嫁の地位を不動の物にしつつあるイトハ様！最近自慢の口撃を調整できるように成った分一撃の重みが増したと巷で噂に成ってるぞっ？』

「余計なお世話よっ！」

イトハ、苦労してるね。

『魔界の切り込み隊長こと、テッタ・エイザンッ！その青髪が煌めけば全てを切り裂く勇者の末裔だ！

そして前回の王決めの義にて父親を容赦無くボコボコにしたリリー様の御付きシフルネ嬢！今日も不思議な縦ロールのその髪には一体どんな思惑が？

マカインジャー最後の1人は魔王城の保険室室長ヘレシア様！そのけしからんスタイルに負けた野郎は数知れず！しかしイトハ様以外に興味の無い無敵の不沈艦！』

メンツ濃っ！

『未知のスケット、カラーズの護衛にして全身真っ黒のドS系嬢王

様にとの呼び声高いアダトリノを滅ぼした暗黒勇者勇那！……ちょっとこのボンテージ物着てピンヒールで踏んでくれませんか？』

「失せろ変態」

『おうっ！……スゲー快感を覚えてしまった……観客の目が痛い所で最後の1人！『勇那様は私だけの勇者様』！？とんでもねえカミングアウトの紹介文を提出した変態路線まっしぐらの元アダトリノ巫女！エルーダ・サモン・クラーク！

さぁ、この7人で、魔界と人間界の未来を担い熱き血潮を飛び散らせっ！

7対7のサバイバル戦、始めえぇぇっ！！』

始まったか……実況のせいで戦意が大分削がれた……だが、

「クリスとシオンは後方からマカインジャーを狙え！メイドさんとボウヤ、少女は魔王だっ！

勇人は私と遊撃！」

私の支持で全員が動き出した。ボウヤと少女は最初から魔王狙いみたいだね。

「最初っから全力で行くよっ！シオン君！」

「おう！」

クリスが上空に放った先端がやたらと膨らんだ魔力矢をシオンが撃ち抜いた……は？

「矢の雨に飲まれちゃえっ！」

クリスの矢から大量の小型の矢がマカインジャーに降り注ぐ……どう見ても対集団用の戦法だね。

「その程度の数じゃ私達に当てることなんて出来ないよっ！」

保険室室長が前に立つと矢が撃ち落とされていく。何だ？

「医療機器を投擲しているのですね」

「もう分かっちゃったの？」

「私も似たような事が出来ますから」

『何だ何だ何だーーっ!?クリス嬢とシオンの矢を保険室室長がお得意の投擲で抑えたと思ったら今度はメイドさんとヘレシア様の間で食器と医療機器が舞っている!?この2人戦い方が被ってるぞっ!』

「ジル様、ロザリー様!私がこの者を抑えます!」
「分かった」
「頑張ってね!」
2人が魔王に向かったね。なら、
「私達の相手をしてもらおうか」
「勇那様の邪魔はさせませんっ!」
「勇那っ!」
「来たようだね、暗黒勇者に変態」
「変態じゃありません!変態と言う名の淑女ですっ!」
「「「……」」」
まさかそう返してくるとは思ってなかったよ……

『おおぉーっと!シルフの2人に切り込み隊長と縦ロールが迫る!弓兵に接近戦は辛、いぃっ!?何だこの2人!?弓の反りで刀を受け流し、矢でレイピアを迎撃しているっ!』

「面白いっ!」
「弓使いでも接近戦は出来るんだよっ!」
「このっ!弓兵なのに接近戦も出来るなんて聞いてませんっ!」
「普通言わねえからなっ!」
向こうは平気そうだね。なら、私達も始めようか。
「はぁ!」
棍棒で変態の腹を狙う。

「させん」
勇那刀に阻まれたか。
「お前の相手は俺だっ！」
「勇人か、決着を着けてやろう！」
「勇那様には手出しさせませんっ！」
変態、邪魔だっ！

『リリー様とイトハ様にロザリーちゃんと糞ガキが迫る！って糞ガキ速過ぎだろっ！殆ど一瞬でイトハ様との距離を0に縮めやがった！前でイトハ様と糞ガキが戦い、リリー様とロザリーちゃんが援護しつつ魔法戦を展開！
こいつぁ滅茶苦茶だっ！2対2が3つに1対1が1つ、こいつら7対7を無視してやがるっ！』

セオリー等知った事じゃないね！それにまともに7対7をやろうとしたら魔王に全部潰されて終わりだ。それなら各個撃破に近い形で戦った方がまだ勝機が有る。
さぁ、勝負は此処からだよっ！

勇者ＶＳ魔王――女Ａの戦い

Ｓｉｄｅ：女Ａ

テッタさんって言ったっけ？勇者の血を引いてる人が魔族にいたなんて驚きだよっ！でも、負ける気は無いよっ！

刀を反りで流して魔力矢を放つ。

「この距離で！？」

ビックリしながらも刀で軌道を逸らされた。こっちがビックリだよっ！

「隙ありっ、そこですっ！」

「どこ見てんだっ！」

シフルネちゃんが私に攻撃しようとしたけどシオン君の矢の斬撃に止められた。

さっすがシオン君、私の背中をしっかり守ってくれるね♪

「弓兵なら遠距離で戦っていて欲しいですっ！」

「そうも言ってられねえんだよっ！」

シオン君の弓、と言うかシルフの弓は基本的に接近戦も出来る様に作られてる。

そして私の弓は本当に接近戦用に出来てる。シオン君がお祖母さんのオリハルコンから作ったこの弓は魔力で弦を張って、魔力の弓を放つ。だけど本当の使い方は弓全体に魔力を通して剣の様に扱う事だったりする。

森の中ではいつでも遠くから獲物を狙える訳じゃない。時には間近に凶暴な魔獣がいる時だってある。だから本当に死なないための武器は、接近戦でも使える武器じゃなきゃいけなかった。

と言ってもこの弓、オリハルコンで出来てるから普通の剣より硬いし反りで攻撃するとかなり綺麗に何でも切れるおかしな武器に成っちゃってる。

シオン君曰く『やり過ぎた』らしい。

「まさか接近戦を熟す弓術が有るとは」
「感心してる場合じゃないですっ！リリー様の方にロザリー様がっ！」
本当だっ！ってロザリーちゃんリリーちゃんと正面から魔法撃ち合ってるっ！？
「速くリリー様の所へ行きませんとっ！」
「その為に、今は目の前の2人だっ！」
シフルネちゃんに放った矢はテッタさんに弾かれちゃった。反応良すぎるよ～
「距離が開いたなっ！」
シオン君がこれでもかって言うくらいに大量の矢をまとめて放った。
シオン君の弓は持ち手と反りの先端にオリハルコンを使って私の弓と同じ様に魔力矢を撃てるようにしてあるから矢が切れる事は殆んどない。
「くっ！弓で面の攻撃をするとは！」
テッタさんがシフルネちゃんを庇って刀をクルクル回転させながら矢を弾いた。
「大地の流れを組む者よ　その力　我が使わん」
後ろでシフルネちゃんが呪文を唱えてる。私だって！
「風纏いて　全てを貫く槍と成らん　ゲイル・ボウ！」
「アースショット！」
シオン君の矢を弾ききった瞬間、私の矢とシフルネちゃんのレイピアが正面からぶつかる。
「こんな所で負けていられないんですっ！」
強引に私の矢の軌道を逸らしたね。でもっ！
「隙だらけだよっ！」
3本まとめて矢を放つ。
「この程度でっ！」
体を捻って避けようとしたけど1本が左腕を削った。
「そこだっ！」

「クリスッ！」
いつの間にか私の後ろに回り込んでたテッタさんの斬撃をシオン君が弓の反りで受け止めててくれた。でも、
「シオン君、肩がっ！」
「気にすんな、丁度アイコって所だろ？」
「ああ、此方も連れの左腕がやられている」
「まだ、戦えますっ！」
そう、まだ、負けたわけじゃないっ！
「なら、戦えなくなってもらうよっ！」
「こちらの台詞ですっ！」
「もはや語る事はあるまい！」
「ああ！ただ、勝つだけだっ！」
シオン君の言葉を皮切りに矢を3本、横に広がるように放つ。
矢と矢の間に2人が逃げ込む。
「そこだっ！」
間を置かずにシオン君が2人に向けて2本の矢を放った。テッタさんは前に進みながら矢を弾いた。シフルネちゃんはその場で弾いてさっきの魔法を詠唱してる。
「シオン君はシフルネちゃんをっ！」
怪我してる人にテッタさんの相手は無理！私が抑える！
「不足無しっ！付き合ってもらうぞ！」
テッタさんの後ろでシオン君のゲイル・ボウとシフルネちゃんのアースショットがぶつかり合ってる。チャンス！
「そう簡単に、やられないよっ！」
テッタさんの刀を反りで弾いて後ろに下がり、テッタさんの右肩狙いで矢を放つ。
「見切った！」
体を左に捻って避けられた。けど、
「きゃっ！」
「シフルネ殿！」

「場外してもらうぜっ！」
テッタさんの避けた矢がシフルネちゃんの右肩を掠めた隙にシオン君がタックルで場外に追い出した。

『シフルネ嬢が場外っ！シルフの華麗なコンビプレイに隙を突かれ、リリー様の援護に向かう事も出来ずに戦線から外されてしまったーっ！
それにしてもシオン！女の子に容赦無くタックルをかますたぁ、男の風上にもおけねぇ奴だっ！』

「やられよ。あの矢は私に向けた物ではなかったんだな」
「えへへ、これが私とシオン君の愛の連係プレイっ！」
「「……」」
……あれ？
「クリス、言葉は状況選んで言おうな？流石に空気凍ったぞ」
「まさか戦いの最中に惚気られるとは思ってなかった。私もまだまだ修行不足だな」
「いや、反省しなくて良いと思うぞ」

「テッタ様、敵と和やかに話している場合ではありませんっ！」

場外からシフルネちゃんが叫んでる。そうだった！今は試合中なんだ！
「シオン君集中してっ！テッタさんさえ倒せれば皆の援護に回れるんだよっ！」
……何だか『お前が言うな』的な視線を感じたけど気のせいだよね？

『おおぉぉーーっと！変た、いやいや！エルーダがユビキタスの姫にやられたと思われた瞬間、姫を道連れに場外したーーっ！これで勇者ＶＳ元勇者の戦いを阻む者は誰もいないっ！』

「フレイヤ姫っ！」
「隙だらけだっ！」
「クリスッ！グアッ！」
「キャーーッ！」
「はぁ、はぁ、はぁ……リリー様っ！」

『ここで試合が一気に動いたっ！フレイヤ姫敗北に同様したシルフの2人を切り込み隊長が撃破っ！これで百合百合戦隊マカインジャーが1歩リー』

「甘いです」
「がはっ！」

『ドォォォッ！？いつの間にかヘレシア様を撃破したメイドさんが切り込み隊長を後ろから攻撃！場外に追い出したーーっ！
ヘレシア様は……仕込んでたメスや注射器が尽きた所をメイドさんに縛り上げられて行動不能だーーっ！王決めの義の時はローションプレイみたいだったが、今回はロープで縛られ何とも背徳的な姿に成っている！誰かカメラ持ってねえのか！？何ぃ、リリー様撮るのに夢中でフィルム切れだとっ！？このド阿呆っ！！今直ぐ買ってこい！！』

「仕方ないですね」
あ、場外に出してからロープ切ってあげてる。フォーク投げてだからかなり怖いけど……

『あぁぁぁぁぁーーーーーっ！折角のズ○ネタがーーーーーーっ！』

「シフルネちゃ～ん、私汚されちゃったよ～」
「大丈夫ですよ！え～と、後でイトハ様の所に一緒に行きましょう？」
「……うん、行く」
……もしかして、そういう事？……イトハちゃん逃げてーーっ！！

『さぁ、残ってるのは勇者2人にメイドさん、リリー様とイトハ様、ロザリーちゃんと糞ガキのみっ！
人数的にはユビキタスが有利だがっ、リリー様はまだまだこんなもんじゃねえっ！この勝負、こっからが本番だーーーーっ！』

勇者ＶＳ魔王――親友として

Ｓｉｄｅ：魔王

テッタ達はやられてしまったか。流石じゃな。人間の意地とは、やはり侮れん。じゃが！

「ジル、覚悟するのじゃ！」

イトハを巻き込まないギリギリのサイズの炎を展開しジルにぶつける。

「遅い」

なっ！イトハの真横に張り付いて離れん！？

「リリー、隙だらけだよっ！」

くっ！ロザリーのフレアかっ！

「炎で私と張り合おうなんて思わないコトね！」

ガ・ジャルグの炎操作でロザリーの炎を奪ったか。

「流石イトハ！わそれでこそらわの嫁じゃっ！」

「そんなコト言ってる場合じゃないでしょうがっ！」

照れずともよかろうに。昨日は自らわらわを抱いたくせに。

「くっ！この、当たらないっ！」

それにしても、さっきから異常にジルに攻撃が当たらない。どうなっとるんじゃ？

「今日は眼帯無しだから、相当頑張んないと当てられないよ」

「このっ！毎度毎度鬱陶しいっ！」

いかん、イトハがそろそろ挑発され過ぎで我慢の限界じゃ。

「ほらほら、俺は今日はリリーの言ってた＜契約の死印＞の魔具を試そうと思ってたんだけど、必要なさそうだね」

「舐めてんじゃないわよっ！」

いかんっ！そんなに大振りではっ！

「雷槍っ！」

「フレアッ！」

「キャーーッ！」

『これは酷いっ！糞ガキのヤツ、可愛らしい少女の様な顔してえげつねぇ戦い方しやがるっ！挑発して大振りを誘い、スピードで潜り込んで攻撃叩きこんだらロザリーちゃんの支援攻撃狙い！まるで狙ってたかのようなコンビネーションに我らがリリー様も反応出来ねえぇっ！』

「イトハッ！」

「まだ行けるわっ！」

ジルの魔力が低くてギリギリ耐え切れたようじゃな。しかし、

「まさか此処までの連携が出来るとは思わなかったのじゃ……」

「厄介なのはロザリーちゃんがジルに完璧に合わせてくるトコね。ロザリーちゃんの援護が無ければもう少し戦えるのに」

ジルの速さも厄介じゃが、問題はロザリーの正確過ぎるフレアじゃ。何故ジルはあそこまでロザリーのフレアに当たらぬ位置が分かるんじゃ？

「……イトハ、暫くジルと、正真正銘の1対1をしててくれぬか？」

「……分かったわ。でも、」

「わらわは魔王じゃ。其の様な心配は無用じゃ」

ロザリーに怪我をさせる事も、わらわが怪我をする事も無く勝ってみせるのじゃ。

「作戦会議は終わった？」

「……ジル、アタシ」

「うん、俺の相手はイトハだけみたいだね」

通じたようじゃな。流石わらわの親友じゃ。

「ジル、前の決着よ」

「ああ。これなら、死神の魔具を試せそうだね」

等々、死神の魔具を作ったか。じゃが、そんなものは些事じゃ。

「リリーとケンカするのも、久しぶりだね？」
「そうじゃな。あの時の喧嘩の理由はなんじゃったかの？」
「わらわのイトハの方がジルよりも強くて優しいのにロザリーが違うと言ったのじゃ」
「そうだったね。でも、やっぱりジルの方が強くて優しいよ」
「互いに平行線じゃ。わらわにとって、イトハは最高の嫁じゃ」
「そうだね。ジルはアタシにとって、大切な家族」
「今は」
「それだけでいいよねっ！」
無詠唱で放った風の刃はロザリーの無詠唱の闇魔法らしきものでかき消された。
ロザリーは1番得意な筈の闇魔法を普段使わない。杖に刻まれているルーンもフレアのみ。闇魔法を使えないのではなく、ルーンを刻む必要が無いだけじゃ。
「相変わらず、巫山戯た闇じゃっ！」
「リリーだって、全属性自由に使うなんて巫山戯てるよっ！」
そう、＜契約の魔印＞を受け継ぐ魔王は、全ての属性を全力で使用出来る。そして、魔力が上限値で固定される。
どれだけ魔法を使おうとも、永遠に魔力が枯渇する事が無い。魔法戦では反則な能力を持つ。
これが、歴代の魔王達が秘密にしてきた魔王の強さの真実。どれだけ強大な魔法を使おうとも、我ら魔王の魔力は全く消費されない。
これぱかりは嫁にも親友にも教えられない事じゃな。
「リリー相手に魔力切れは期待しないよっ！それでもっ！」
なっ！上空に巨大な重力球!？小癪なっ！
「こんな物で、わらわをどうにか出来ると思うでないっ！」
同程度の重力球をぶつける事で相殺した。
「イッケーッ！」
正面から闇の飛礫の雨かっ！
「受けて立つのじゃっ！」

全属性の飛礫を放ち、迎撃する。わらわの周りに闇の塊が転がる。
ロザリーの周りには炎や水、石ころが散らばって居る。
「囲んだよっ！」
わらわの周りに転がって居った闇の塊がわらわ目掛けて針に成り襲い掛かって来たっ！何て面倒な魔法を使うんじゃっ！
「結界！」
無詠唱では展開が間に合わなかったであろう結界を詠唱付きで展開。
ジルの詠唱真似して練習しておいて良かったのじゃ。
「それっ、ジルの魔法だよっ！」
先程の巨大重力球かっ！この結界なら耐えられるっ！
「ジルッ、使うよっ！」
ロザリーもジルの魔法が使えるのかっ！？
「焼き尽くすはその骸　砕きしはその魂」
普通の詠唱じゃと？しかし重力球への対処が先じゃっ！
「闇を屠りし力示せ」
重い、が耐えきったのじゃ！結界は丁度砕け散ったがの……
「破邪業炎！！」
「ジルの魔法は魔法名だけじゃの」
「どうかな？」
何を……詠唱に比べて魔法の規模がおかしい！？
地面から出た大量のスケルトン（骸骨の魔獣）の手がわらわに迫り逃げ道が無くなった所で囲んでいるスケルトンが包囲の外側から高密度の黒い炎に焼かれて中央、つまりわらわに迫ってくる！？
くっ！逃げようにもスケルトンの手が服や足を掴んで離さんじゃとっ！魔法を使おうにもこうも妨害されては無詠唱も詠唱有りでも発動出来ん！
『何だ何だこれはあぁぁぁぁーーーっ！ロザリーちゃんの魔法で大量のスケルトンハンドが出てきてリリー様を包囲っ！しかも包囲の外からリリー様に迫る黒い炎はどう見てもヤバ過ぎるぅぅー

ーーっ！』

「リリーッ！」
「取った！雷槍」
「あっ！」
「轟雷双烈波！」
「キャーーッ！」

『イトハ様場外ーーっ！いつの間にか黒いジャケットを着た糞ガキがダガーを捨てて両手で雷槍を放った後に左右の腕を上下に広げたら巨大な雷球が出現っ！イトハ様を場外まで吹き飛ばしたーーっ！』

「ジィルーッ！」
よくもイトハをっ！
「ジルはやらせないよっ！」
「退くのじゃロザリー！！」
「ロザリー、退いてっ！」
っ！自らわらわに飛び込んできたっ！？
「くっ！場外線まで押し込む気じゃったな？」
じゃが、身体強化で耐えきったのじゃ！
「安心するのはまだ速いっ！」
「何を、っ！」
「リリー！今度こそっ、アタシ達の勝ちだよっ！」
「これが、私の本来の役目ですっ！」
ロザリーとメイドさんまで加わってのタックルッ！？
もう、耐え切れんっ！

『魔王様、場外ーーーっ！！！一緒に糞ガキ、ロザリーちゃん、メイドさんまで場外したが今はそんな事気にしてられねえ！！魔族としてこれは見逃せねえ！！魔王様がっ、我らがリリー様が場外っ

！！

ユビキタス組は最初かっらリリー様を場外にするつもりで戦ってやがったーーっ！！親友ロザリーちゃんとの激烈な魔法戦はリリー様を場外させる為の布石でしかなかったってのかーーーっ！』

わらわが……負けた？３人掛かりとは言え、わらわが、わらわが……

「うぅ、ぐずっ、うわあぁぁぁん！」

「リリーッ！？ジル！アンタ何リリー泣かせてんのよっ！！てかそのジャケット何なのよっ！！」

「勝負なんだから仕方ないだろっ！」

「男が女泣かすなんて情けないと思わないのっ！？」

「男女平等っ！」

「言い訳すんなーーっ！」

わらわは、魔王だから、負けちゃ、いけなかったのに……わらわは、

「リリー、まだ負けてないよ」

「えぐっ、ひっく、じゃが、わらわは」

「まだ勇那さんと勇人さんが戦ってるよ？魔王なら、自分の戦いは最後まで見よう？」

自分の戦い……わらわの戦いは、

「勇那さんはリリーのチームだよ？勇那さんが戦ってるに、リリーが泣くなんてダメだよ」

まだ、戦ってる……元は敵対するしかなかった筈の勇者が、わらわの仲間として……

「だから、泣くのは勇那さんが負けてから。そしたら、泣いてもいいから」

「……うむ…」

まだ、わらわは負けておらん……

勇者ＶＳ魔王――勇者ＶＳ勇者（前書き）

今回で決着です

勇者ＶＳ魔王――勇者ＶＳ勇者

Ｓｉｄｅ：男勇者

「残っているのは私達だけの様だな」

「ああ」

鎧はボロボロ、ジュワユーズを収めてた鞘も勇那の斬撃を食らったりしてかなりヒビが入ってる。

まぁ、それは向こうも同じようなもんだ。

『ここに来て両チーム残すは1人のみ！そして残っているのは奇しくも勇者の名を冠する2人っ！以前にも戦いっ、その時は決着と成らなかったって話の2人！ここに邪魔する者は居ない！その剣で、刀で、力で、魔法でっ！自分の持ちえる全てで勝敗を決する為に！眼の前の敵を倒せーーっ！』

「言われなくてもっ！」

「ここで雌雄を決する！」

無白による斬撃を受け止め、大剣の質量で押し退ける。

「この馬鹿力がっ！」

「勇那こそっ、速いんだよっ！」

殆ど会話に成らない感情のぶつけ合いだ。

「貴様と戦ってから私の人生は激変したっ！」

「俺のせいだってのかっ！」

勇那の攻撃を弾き、横に薙いだ。

「ふんっ！面白かったさ、特にアダトリノ王に刃を突き付けた時は最高だった！」

「なら良かったじゃねえかっ！」

後ろに飛んで避けられたが直ぐに距離を詰める。

「だが、貴様との決着が着いていない！」

「俺だって、君との決着を着けたい！」
上から振り下ろしたジュワユーズは横に避けられ、無白の先端が俺の首に迫る。
「少年との決着も良いがっ、今は貴様だっ！」
「目移りなんてさせねえよっ！！」
迫る突きを首を振って避け、ジュワユーズを跳ね上げ勇那の胴体を下から袈裟斬りにする。
「その程度の相手だったなら興醒めだっ！」
「勇那こそっ！俺を飽きさせるなよっ！」
無白の刃をジュワユーズに這わせて自分の体ごと俺に吹き飛ばされた。いや、俺の力を使って飛んだ。
「影刃！」
「弱いっ！」
牽制程度の影の斬撃なんて何の意味も無いっ！
「この程度で調子に乗られては困るっ！」
「そんな程度の攻撃なら、するなっ！」
再び距離を詰めて切り結ぶ。
「よく耐える！これだけの殺気では何の意味も無い様だなっ！」
「殺気程度で俺が怯むと思うなっ！」
前にも感じた異常な殺気が勇那から溢れている。
「仮りにもアダトリノ王を怯ませた殺気なんだがなっ！」
「その倍は持って来い！」
魔法もスキルも関係無い。ただの純粋な斬り合い。
「埒が開か無いな！」
「同感だっ！」
勇那が後ろに下がった。
「さっさと決めてしまおうっ！」
「勝つのは俺だっ！」
無白に鞘に収められていた大量の闇が勇那の周りを漂う。ジュワユーズを４メートルくらいにする。

「無白っ！」
「ジュワユーズッ！」
高密度の闇の突き、大質量の鉄の塊の振り下ろし。
「勇人ぉぉぉーーーーっ！」
「勇那ぁぁぁーーーーっ！」
衝突して、拮抗した。
「貫けえぇぇぇーーーっ！」
「潰せえぇぇぇーーーっ！」
ガンッ！
「ちぃっ！」
「くそっ！」
お互いの剣が場外まで弾け飛んでしまった。
「まだだっ！」
「ああ、まだだっ！」
まだ、剣は無くたって拳が残ってる。
「どうした、フラついているぞ」
「冗談、フラついてるのはお前だろ」
顔面を殴ったら腹に膝蹴りを食らった。
「倒れてる暇があるかっ！」
「倒れてやったんだよっ！」
倒れてる所にマウントポジションを取られたから下から強引に殴ってやった。
「女の顔にやってくれるっ！」
「嫌ならシッカリガードしてろっ！」
一方的に殴られたが、止んだ瞬間を狙って巴投げの要領で後ろに投げる。
「くっ！」
「今度は俺の番だっ！」
ノロノロと立ち上がった勇那の腹にタックル。
「調子に乗るなっ！」

「ガハッ！」
背中に肘を落とされた。クソッタレが！腰から持ち上げて頭から後ろに落とす。
「グウッ！」
「へへっ！なっ！」
倒れてるくせに俺の足を絡めて転ばせてきた。
「油断大敵だ」
「お前がだっ！」
またマウントポジションを取られる前に離れて立ち上がる。
「逃げるのだけは得意な様だ」
「逃げたんじゃねえよ」
拳が重い。鎧の破片が邪魔だ。呼吸が安定しない。それでも、
「しつこい男だ」
「お前だってしつこいだろうが」
いい加減倒れろ。
「そんなだから童貞なんだ」
「関係無いだろうがっ！ゴホッゴホッ！」
「この戦いの決着がからかわれて咳き込んだでは情けないな」
「そんなショウもねえ終わりにはしねえよっ！」
「来いっ！」
拳を振るう。避けられて腹に食らった。お返しに膝蹴りを入れた。
頭突きで脳が揺れた。お返しに頭突きしてやった。俺も脳が揺れた。
遠い。おい、離れてんじゃねえよ。まだ終わってねえだろ。もっと近くに来い。
やっと拳が届く距離だ。殴る……あぁ？手が上がらねえ？ならまた頭突きだ。
「この、乱暴者がっ！」
頭突きされた……まだ、俺だって……あ、目が見えない…暗い……
……

Ｓｉｄｅ：女勇者

体が重い……腕が上がらない……視界がボヤケル……勇人が遠い……兎に角、攻撃する……腕は、上がらないなら他だ……他……頭を使え……腕も足も動かない……ならどう攻撃すれば良い……考えろ、頭を……頭……頭突きだな！

遠いっ！勇人め、逃げるなっ！私達の戦いは、ここで決着を着けねばならないんだっ！

届く、今なら、

「ガッ！」

先手必勝と言う訳か。先に攻撃するとは、ならばお返しだっ！

ゴンッ！

どうだ、やってやったぞ、そのまま後ろ向きに倒れてしまえ、倒れろ倒れろ倒れろ倒れろ倒れろっ！

倒れないなら、倒すまでだっ！

ふっ、ようやく……倒れた、な……これで……私の……

Ｓｉｄｅ：女Ｂ

『両者ダウンッ！最後の最後で勇人の頭突きのお返しとばかりに勇那が放った頭突きで倒れるかと思われた勇人の根性溢れる我慢を勇那が押し倒す事でダウンに持っていったが、自身もダウンしてしまっているっ！このまま両者立ち上がらなければ引き分けと成ってしまうぞっ！』

もう、それで良いわよ。それなら、誰も悲しまない……

「……勇人さん、立って」

「……勇那立つのじゃ」

リリーにロザリーちゃん？

「引き分けなんて論外だ。どちらかが勝たなくちゃ、ここまで戦っ

た意味が無い」
ジルまで……
「勇那様は、負けません！」
「勝つのは、勇人だ」
「魔王様に、勝利を！」
テッタまで、切り込み隊長にとって勇那は敵でしょうに……
「そろそろ、起きるみたいだよ」
どっち？起きるのは、どっちなの？
あ、勇人が……
「勇那様ーーっ！」
ドカッ！
……え？
「私は、負けない！」
勇那っ！

『おおぉぉぉぉーーーーーーーーっとおぉぉぉぉぉぉーーーーーー！！！誰もが勇人が勇那を押し退け立ち上がり勝利するだろうと確信した所で勇那が覚醒っ！
勇人が起き上がれないように止めを刺して勝利の栄光をもぎ取ったーーーーーーーーーーっ！
魔界とユビキタスのサバイバルゲーム！今ここに！魔界の勝利で幕を閉じたあぁぁぁぁーーーーーーーーっ！！！』

……勝った、の？
「……イトハ、わらわは……勝ったのか？」
「……負けた、ね」
「勇那様に勝てる者など居ませんっ！」
ははは、エルーダ、スゴイわ～
「負けちゃったね」
「仕方ねえさ。俺達は部外者だ。最初から、出来る事は精々誰もが

納得する結果を出せるように手伝う事だったんだ」
「……そうだね」
クリス達……確かに、ユビキタスの人間でも、魔界の魔族でもないけど……
「もう、しんみりしないのっ！ユビキタスは負けたかもしれないけど、ここまで戦えるって証明したんだから和平は結べるわよっ！でしょ？リリー」
「うむ。そもそもわらわが場外に成った時点で、和平を結に足る力は示されたのじゃ。じゃから、今は、２人の治療が最優先じゃっ！」
……そうだったーっ！！
「ヘレシア！」
「う～、私だって疲れてるのに～」

『これで本日のメインイベント、魔界対ユビキタスのサバイバルゲームは終了だっ！観戦に来てた観客共、今日は無礼講だっ！飲んで、食って、自由に騒ぎまくれっ！！！』

やっと、終わったわね……

それぞれの戦後（前書き）

またしても2話同時投稿
もう最後までの流れが出来てるから書けちゃうんですよね……

それぞれの戦後

Ｓｉｄｅ：女Ａ

「はぁ～、昨日の戦いが嘘みたいだね～」

「そうだな。しかし……本当に１晩中騒ぎ明かしたんだな」

比較的ケガの少ない私達は魔王城周辺を探索してた。

で、どうなっているかって言うと、

「死屍累々？」

「飲んだくれと喧嘩でのダウン、騒ぎ疲れて寝た奴、色々だな」

もうスッゴイ事に成ってる。女の人ばっかりの所はそんなに酷くないけど、比較の問題で酷く見えないだけで普通に見たら充分酷い。

お酒の入れ物や屋台で売ってた食べ物の入れ物がそこら中に落ちてる。場所によっては足の踏み場も無いよ……

「あ、フレイヤ姫かな？」

「お、本当だな。何やってんだ？」

「行ってみよう？」

「そうだな。他にやる事もねえし」

「うん。おぉ～い、フレイヤ姫～」

あ、こっち気づいた。

「どうしたんだい、こんな所で」

確かにこんな所だよね……

「俺達は散歩。姫さんは？」

「ああ、勇人の側に居ようかとも思ったんだけどね……」

「負けたって、言うのが辛いの？」

「……ああ」

勇人君、勇那に勝つんだって言ってたもんね……

「言ってやれよ」

シオン君？

「勇人に負けたんだって言ってやれ」

「……分かってる、言わなきゃならないのは、言わなくても直ぐに分かる事だって…」
「違えよ。勇人はそんくらいで駄目に成る様な雑魚じゃねえ。1度負けたんなら、力を付けて、再戦してやるってくらいの気概を持ってる」
おおっ！男の子同士の友情だねっ♪
「だから、勇人が起きたら最初に教えてやれ。負けたって」
「……ふっ、そうするよ。全く、私も大概勇人に甘いな」
「そうだねっ♪」
「これからはもう少し厳しくしようかね」
……勇人君、ごめん。
「じゃ、勇人の所に戻るよ」
「おう。ちゃんと言う事言ってやれよ？」
「……分かっているさ／／／」
へ？
「何々？どうゆう事？シオン君何か知ってるの？」
フレイヤ姫があんなに顔赤くしてるの初めて見たよっ？
「クリス、ちょっと落ち着け！引っ付くな！」
「何があったのか教えてよ～」

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
「さて、じゃあキリキリ答えてもらおうかしら？」
「あの～、質問に答えるのは良いんだけどさ」
「何よ」
「何で俺は縛られてるんでしょうか？」
そんな些細なコトで貴重な質問時間を削らないで欲しいわね。
「気分よ」
「縛られてるジル……ちょっといいかも／／／」
「こんな事してるからロザリーが何かに目覚めちゃってるじゃん！」

「五月蝿いわね～。被告人は大人しく質問にだけ答えてればイイのよ。
はいじゃあ最初の罪状、ロザリーちゃんと一緒にお風呂って何？」
「……黙秘しま」
「どうじてもジルと一緒にお風呂入ってみたかったの」
「ロザリー！？」
まさかここまでとはね。
「裁判官。被告人に死刑を」
「うむ。被告人ジル、お主はうらわうら若き乙女の柔肌を共に風呂に入る事でネットリジックリ視姦した。その罪、充分死に値する。よって死刑を言い渡すのじゃっ！」
「弁解も何もさせない辺りこれ裁判に成ってないよ！！」
「ジルを死刑になんてさせないよっ！！」
止めはロザリーちゃんが刺したんだけどね？
「ちっ！被害者の温情に免じて今回は無罪にしておいてやるのじゃ」
「命拾いしたわね。じゃ、次の罪状よ」
「もはや質問ですらないのか」
「結局＜契約の死印＞の能力ってなんだったの？」
「ああ、それか。俺が発見したのはこの目を開いて戦うと周りの１手先が見えるって事くらいだよ。魔具の方はリリーに教えてもらってから試したら普通に出来たし」
「……もしかして異常に攻撃が当たらなかったのって」
「イトハとリリーの１手先の行動が見えたから」
「ズルいっ！」
「仕方ないだろ！」
「裁判長！」
「うむ、被告人は罪状チートで死刑！」
「またかよっ！」
「絶対ダメッ！」
「ちっ！何と言う悪運の持ち主じゃ」

「本当に＜悪運＞だけは強いな……」
「ロザリーちゃんに免じて今日はこれくらいにしておいてあげるわ。リリー、行きましょう」
「うむ」
「……で、この縄は？」
「……縛られて動けないジル……キャーッ♪」
「待って！誰かこの縄解いてっ！今のロザリーはかなり危険だと思うんだっ！」
「ジル、大丈夫、動けなくてもアタシがちゃんとお世話してあげるから！食事も、お風呂も、トイレも♪」
「自分で出来るって！」
ちっ！イチャついてくれちゃって！

Ｓｉｄｅ：女勇者

……知らない天井だな。
「あ、勇那様。気が付かれたんですね」
「ああ、エルか」
「にゃっ」
「ははは、クロも、心配掛けたな」
ん？
「勇那様からそのような労いの言葉を頂けるなんて」
私は普段そんなに酷い人間だろうか？
「全く……魔王に会えるかい？」
「わらわに何の用じゃ？」
ほう。
「既に居たのか」
「決闘の立役者に礼くらい言っても罰は当たらんじゃろう？」
「礼は要らない。代わりに私を魔王城で雇ってくれ」
「……どうするつもりじゃ？」
「刀の師範に成ろうかと思ってな。人間界に刀は普及していないだ

ろう？」
クリスに頼まれた証。私に残せるのはやはり刀だけだ。
「……良いじゃろう。じゃが、まずはテッタに認められてからじゃ」
「お安いご用だ」
「……私は勇那様についていきます」
「ふむ……では書類仕事等を頼もうかの」
「勇那様と一緒に居られるのならば、どのような事でも構いません」
「……重い愛じゃの？」
「慣れれば平気なものだ」
「わらわは慣れたくないのじゃ……」
さて、今後の身の振り方も決まった事だ。休もう。
「お休み」
「お休みなさいませ♪」
「にゃ～♪」
「全く、ジルみたいな奴じゃの」

Ｓｉｄｅ：男勇者
うっ、眩しい……
「おはよう、勇人」
……フレイヤ？っ！
「勝負はどう成っ、つぅ！？」
何だ？体中が痛い……そうか、俺、勇那と戦って……
「負けたよ。最後の最後で、勇人が起き上がろうとした所を勇那が妨害して勇那がそのまま勝った」
「……和平会談は？」
「通ったよ。これでユビキタスと魔界は同盟関係に成ったのさ」
「……勇那に、負けたんだな……」
「ああ」

……悔しいな……
「俺の怪我、どれくらい掛かる？」
「骨が結構逝ってるんだ。ユビキタスに戻る事は出来ても1月は何もさせないよ」
「……なら、1月待てば良いんだな？」
「……はぁ～、シオンの言う通りだね」
「は？」
「勇人なら負けたって話したら再選する為に頑張るだろうって言われたんだよ」
「……何か癪だな」
「そうでも無いだろう。勇人を本当に理解してるから出てきた台詞だ」
「確かに。よっぽど付き合いの長い男友達のジルくんだったらどうでも良いって言いそうだしな？」
「確かにそうだけど……それは友達と言っても良いのかね？」
「……自信無くなってきた」
「ははははっ！……勇人、私はね、最初、隠そうと思ってしまったんだよ」
……勇那との決着の事か？
「だから、私には、勇人に何かを言う権利は無いんだ」
「……これからも俺の側に居てくれ」
「は？」
……恥ずかしいからもう言いたくないんだよっ！
「……俺はまだこの世界に来て1年しか経ってないんだ。だから、これからも、一緒に居てくれ」
正直に言おう。もう顔から火が出そうだ！
「え～と、どう言う意味だい？」
「……もう言わない」
「良いじゃないか、もう1度言ってくれたって。ほら、勇人」
ベットに潜り直してフレイヤの追求が止むのを待つ……お、静

かに成ったな。これで顔出せる……
「そうだよね、勇人の事見くびって一瞬でも勝敗を隠そうとした私何て…」
ぐうっ！……
「あ～、もう！もう1度しか言わねえぞ！俺の側に居てくれ！」
「本当にそう思ってるかい？」
「ああ」
「証明出来るかい？」
「ああ」
「なら、キスして」
「ああ……は？」
「キスして」
……しなかったらまた泣くと顔に書いてある……マジ？
「もう、知らねえぞ？」
「私の台詞……んっ！」
はぁ～……やってしまった……
パアァン！
「「うわぁっ！」」
何だ！？クラッカーなんてどこからっ！
「おめでとうございます」
「……メイドさん？」
相変わらずの無表情でメイドさんが祝福の言葉を投げ掛けてきた。
「これは本国に帰りましたらユビキタス公に報告しませんと。夫人も大層お喜びに成られるでしょう」
「待ってくれ！あの公の事だからそんな事言ったら、」
「はい。直ぐにでも婚礼と成るでしょうね。私としましても幼少から仕えているフレイヤ様が身を御堅めに成られるのは大変嬉しいです」
「ふむ、これは帰ったら大変な事に成りそうだね」
「フレイヤのせいだろうがーーっ！」

……どうしよう！？

それぞれの明日

Ｓｉｄｅ：女勇者

魔界での決戦から１週間、ようやく私と勇人が動ける様に成った。
その間ずっと変態に付きっきりで看病されていた。何度貞操の危機を覚えた事か。満足に抵抗出来ない身としては不安でしょうがなかった。

「では勇那、待っておるぞ」

「ああ。ギルドに報告したら、戻ってくる」

「その時は言ってね♪案内するよっ♪」

少女にそう言われたら断れないな。全く、妙な知り合いが出来てしまったものだ。

「勇那……一応、言っておくわ。ありがと」

イトハ……ふっ。

「何よっ！何か可笑しかった？」

「いや、君も素直に成れよ」

「私は常に自分に正直に生きてるわ」

「そうだったな」

「私は常に勇那様一筋ですっ！」

唐突に出てくるな。まぁ、こいつはこいつでハッキリとした生き方をしている。

さて、私の本当の気持ちはまだ分からないが、まだ焦る必要も無いだろう。私の人生はまだ暫く続くのだからな。

ああ、いつかメイドさんに聞いてみないとな。『貴女は、一体何年生きてるんだ？』、と。

Ｓｉｄｅ：男勇者

まだ怪我は完治してないけど今は一刻も速くユビキタスに戻らなき

ゃな……戻ったら、フレイヤと結婚しなきゃなんないのか？……どうしよう……

「何じゃ何じゃ、辛気臭い顔しおって。わらわ達魔族を後１歩と言う所まで追い詰めた勇者が其の様な不景気な顔をするでない。胸を張って国に帰り、和平の報を知らせよ」

「……ああ！」

そうだ。今回の旅は和平の為だったんだから喜ばなきゃな。

「魔王様、後日フレイヤ様と勇人様のご結婚の報が届くと思われますので、その折には是非ご参加下さい」

「ほう、やるのう。楽しみにしておこう」

「メイドさんっ！？」

「勇人に汚されたこの体、責任取って貰わないとねえ」

「フレイヤ様、お労しや」

「棒読み過ぎだろっ！！」

「勇人、姫様泣かせたら、ガ・ジャルグで灰も残さず焼き尽くしてあげるわ」

……目が、マジだよ……

「あ～、うん。頑張れよ、勇人！」

「見捨てる気満々じゃないか、シオンの裏切り者ーっ！」

「勇人さん五月蝿い」

ジルくんは最後まで容赦無いな……

Ｓｉｄｅ：女Ａ

これで、皆とはお別れなんだな～……また会おうと思えば会えるって分かってるけど、ちょっと寂しいかな……

「ジル坊、俺達またユビキタスとか魔界とかに行く事に成るだろうからそんときゃよろしくな」

……へ？

「報酬弾んでくれたら新しい料理考えておくよ」

「言ったな。楽しみにしてんぞ。てことでリリー、その内手紙出すぜ」
「うむ」
「ちょっと待ってよ！どう言う事？」
「俺達はこの世界じゃまだまだ新参者だからな。営業だよ、村長候補としての」
「……そうなの？」
「おう。確かに1回村に戻る事に成るが、多分直ぐに他の国に出向いたりするぜ」
「……じゃあ、」
「おう。また何人かとは一緒だろうな」
「うぅ～……先に言ってよ～っ！私暫く皆と合う事ないんだな～とか思ってブルーに成っちゃったよ～」
「悪い悪い、でもほら、これからも変わんねえだろ？」
「……帰ったら絶対シオン君の恥ずかしい所お母さんに言っちゃうんだから」
「悪かったって。じゃまたな、リリー、イトハ」
「末永く御幸せに」
「喧嘩しても仲直りするんじゃぞ」
「……うん／／／」
「そこだけ素に戻るのかよっ！」
……えへへ、また、皆に会えるんだ♪

Ｓｉｄｅ：女Ｂ
あ、ロザリーちゃんにどうしても言っておかなくちゃいけなかったのよね。
「ロザリーちゃん、ジルと一緒にお風呂に入るのは止めなさい」
「え～」
「ロザリー、ジルとて女子の様な顔じゃが歴とした男じゃ。何時狼

の本性を剥き出しにしてロザリーにその牙を向けるか分からんのじゃ。用心に越した事は無いのじゃぞ」
「う～」
……どうしよう、涙目に成っちゃったわ……
「ジル～、ジルは狼さんになんてならないよねっ？」
「うっ！」
うわぁ、浴衣ですがり付くからナチュラルに肌すり合わせてる感じになっちゃってるわ……
……ジルから『どうにかして』ってアイコンタクト来てるけど……
リリーと揃ってスルー。今回の原因は私達にもあるから何とも言えないわ。
「あ～、うん。大丈夫、絶対ロザリー泣かせたりしないから！」
妙に力入れて宣言したわね。この根性が他の男達にも欲しいわ。
「勇人にもこれくらいの事言って欲しいもんだね」
「シオン君、ジル君の方がよっぽど大人だよ？」
「「……スイマセン」」
情けないわね。
「じゃ、もう行こうか」
「うむ。祝言の際には必ず知らせるのじゃぞ。和平を結んでおるのじゃ、それくらいの気は利かせよう」
「ああ。必ず」
「またねっ♪リリー、イトハ♪」
「またねっ！」

「……行っちゃったわね」
「これで良いのじゃ。今生の別れでは無い、新たな始まりなのじゃから」
「ふふっ、そうね♪姫様と勇人の結婚式、何持って行く？」
「何でも良いじゃろ。どうせなら人間界では手に入らない物にすれば良いのじゃ」

「そうね」
「そうじゃ」
次に全員が揃うのは、結婚式の時かしらね～

Ｓｉｄｅ：男Ａ
相変わらず色々トラブルに巻き込まれながら家に到着、カラーズの人達は俺のトラブル吸引率にノックアウトされた。
「……クリス達に聞いたトラブルの話、舐めていたな」
「もう、懲り懲りです」
「カラーズまで送ろうか？」
「「「「結構！」」」」
色彩王含めた全員に言われてしまった。これはショックだ。
その夜の風呂は女性陣のみで入り、中々に騒ぎ通した。流石に皆が居るのに２人で風呂は避けたかった。
そうして皆、翌日に帰っていった。
クリスとロザリーは最後まで別れを惜しんでたし、勇人は俺と勇那に再選を誓ったし、勇那まで俺との決着を着けるって言い出した。
近衛兵長は無理だと判断したらしい。
こうして、異世界の人間全員を巻き込んだ人間と魔族の和平への第１歩は踏み出された。これからどうなるかは勇人やリリーの頑張りと運次第なんだろうな。
「……皆、行っちゃったね」
「うん」
「また、会えるんだよね？」
「うん」
「アタシは、これからもジルと一緒にいられるよね？」
「うん。俺とロザリーを引き裂こうとする人が居たら、俺が倒す。俺とロザリーの居場所を壊そうとする人が居たら、俺が止める。だから、何が有っても、俺とロザリーは一緒に居られるよ」

「うん♪」
本当に邪魔する人が居たら、本当に頑張らなきゃな。
「……ねぇ、ジル」
「うん？」
「大好きだよっ♪」
「……俺も、ロザリーの事、大好きだよ♪」
「えへへ～♪……んっ」
「んっ……これからも、よろしくね」
「うん♪」
ここに来て1年、色々有り過ぎたけど、今は、嬉しい、かな。

それぞれの明日（後書き）

何か完結してるっぽいですがあと2話程続きます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0440u/

神様の暇つぶし

2011年10月21日03時05分発行